

栃木県埋蔵文化財調査報告第396集

# あがた駅南遺跡

—足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第2分冊)

2020.3

栃木県教育委員会  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

# あがた駅南遺跡

—足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第2分冊)

2020.3

栃木県教育委員会  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



## 第2分冊 目次

### 第4章 東地区の遺構と遺物

第1節 東地区の概要	1
1. 調査の方法	1
2. 基本土層	1
3. 確認された遺構と遺物の概要	4
第2節 I区の調査	5
第3節 II区の調査	5
1. 竪穴住居跡	5
2. 土坑	18
3. 性格不明遺構	21
4. その他の遺物	39
第4節 III・IV区の調査	40
1. 竪穴住居跡	40
2. 井戸	51
3. 溝	53
4. 土坑	58
5. 性格不明遺構	59
6. その他の遺物	60
第5節 V区の調査	60
1. 竪穴住居跡	60
2. 井戸	78
3. 溝	78
4. 土坑	80
5. 性格不明遺構	87
第6節 VI区の調査	92
1. 溝	92
2. 性格不明遺構	93
第7節 VII区の調査	93
1. 竪穴住居跡	93
2. 掘立柱建物跡	108
3. 溝	109
4. 土坑	114
5. 性格不明遺構	118
6. ビット	134
7. その他の遺物	135

### 第5章 自然科学分析

第1節 東VII区及び西C地区自然科学分析	287
第2節 岩石肉眼鑑定	308
第3節 住居跡の白色物質の分析	314
第4節 出土遺物に付着する赤色顔料の蛍光X線分析	320
第5節 出土木材の樹種同定	327
第6節 種実遺体	331
第7節 あがた駅南遺跡で出土した動物遺体	332
第8節 東II区自然科学分析	CD所収
第9節 西B・H地区自然科学分析	CD所収

### 第6章 総括

第1節 西地区の遺構と遺物	337
第2節 東地区の遺構と遺物	349

## 挿 図 目 次

第1図 東地区基本土層	1	第38図 東V区 遺構実測図14	175
第2図 東地区グリッド配置図(1/1,200)	2	第39図 東V区 遺構実測図15	176
第3図 東地区遺構配置図(1/1,200)	3	第40図 東V区 遺構実測図16	177
第4図 東II区 全体図	136・137	第41図 東V区 遺構実測図17	178
第5図 東II区 遺構実測図1	138	第42図 東V区 遺構実測図18	179
第6図 東II区 遺構実測図2	139	第43図 東V区 遺構実測図19	180
第7図 東II区 遺構実測図3	140	第44図 東VII区 遺構実測図1	181
第8図 東II区 遺構実測図4	141	第45図 東VI・VII区 全体図	182・183
第9図 東II区 遺構実測図5	142	第46図 東VII区 遺構実測図2	184
第10図 東II区 遺構実測図6	143	第47図 東VII区 遺構実測図3	185
第11図 東II区 遺構実測図7	144	第48図 東VII区 遺構実測図4	186
第12図 東III区 遺構実測図1	145	第49図 東VII区 遺構実測図5	187
第13図 東II区 遺構実測図8	146・147	第50図 東VII区 遺構実測図6	188
第14図 東III・IV区 全体図	148・149	第51図 東VII区 遺構実測図7	189
第15図 東III区 遺構実測図2	150	第52図 東VII区 遺構実測図8	190
第16図 東地III 遺構実測図3	151	第53図 東VII区 遺構実測図9	191
第17図 東III区 遺構実測図4	152	第54図 東VII区 遺構実測図10	192
第18図 東III区 遺構実測図5	153	第55図 東VII区 遺構実測図11	193
第19図 東III区 遺構実測図6	154	第56図 東VII区 遺構実測図12	194
第20図 東III区 遺構実測図7	155	第57図 東VII区 遺構実測図13	195
第21図 東III区 遺構実測図8	156	第58図 東VII区 遺構実測図14	196
第22図 東III区 遺構実測図9	157	第59図 東VII区 遺構実測図15	197
第23図 東III区 遺構実測図10	158・159	第60図 東VII区 遺構実測図16	198・199
第24図 東V区 全体図	160・161	第61図 東VII区 遺構実測図17	200・202
第25図 東V区 遺構実測図1	162	第62図 東VII区 遺構実測図18	203
第26図 東V区 遺構実測図2	163	第63図 東VII区 遺構実測図19	204
第27図 東V区 遺構実測図3	164	第64図 東VII区 遺構実測図20	205
第28図 東V区 遺構実測図4	165	第65図 東VII区 遺構実測図21	206
第29図 東V区 遺構実測図5	166	第66図 東地区 出土遺物実測図1	207
第30図 東V区 遺構実測図6	167	第67図 東地区 出土遺物実測図2	208
第31図 東V区 遺構実測図7	168	第68図 東地区 出土遺物実測図3	209
第32図 東V区 遺構実測図8	169	第69図 東地区 出土遺物実測図4	210
第33図 東V区 遺構実測図9	170	第70図 東地区 出土遺物実測図5	211
第34図 東V区 遺構実測図10	171	第71図 東地区 出土遺物実測図6	212
第35図 東V区 遺構実測図11	172	第72図 東地区 出土遺物実測図7	213
第36図 東V区 遺構実測図12	173	第73図 東地区 出土遺物実測図8	214
第37図 東V区 遺構実測図13	174	第74図 東地区 出土遺物実測図9	215

第 75 图 東地区 出土遺物実測図 10	216	第 86 图 東地区 出土遺物実測図 21	227
第 76 图 東地区 出土遺物実測図 11	217	第 87 图 東地区 出土遺物実測図 22	228
第 77 图 東地区 出土遺物実測図 12	218	第 88 图 東地区 出土遺物実測図 23	229
第 78 图 東地区 出土遺物実測図 13	219	第 89 图 東地区 出土遺物実測図 24	230
第 79 图 東地区 出土遺物実測図 14	220	第 90 图 東地区 出土遺物実測図 25	231
第 80 图 東地区 出土遺物実測図 15	221	第 91 图 東地区 出土遺物実測図 26	232
第 81 图 東地区 出土遺物実測図 16	222	第 92 图 包含層出土土器分布図 (1)	342
第 82 图 東地区 出土遺物実測図 17	223	第 93 图 包含層出土土器分布図 (2)	343
第 83 图 東地区 出土遺物実測図 18	224	第 94 图 包含層出土土器分布図 (3)	344
第 84 图 東地区 出土遺物実測図 19	225	第 95 图 西地区縄紋時代全体図	345
第 85 图 東地区 出土遺物実測図 20	226		

## 表 目 次

第 1 表 東地区遺構一覧表	3	第 26 表 II 区 SX022 出土遺物観察表	246
第 2 表 I 区遺構外出土遺物観察表	233	第 27 表 II 区 SX023 出土遺物観察表	247
第 3 表 II 区 SI036 出土遺物観察表	233	第 28 表 II 区 SX024 出土遺物観察表	247
第 4 表 II 区 SI039 出土遺物観察表	234	第 29 表 II 区 SX026 出土遺物観察表	247
第 5 表 II 区 SI045 出土遺物観察表	235	第 30 表 II 区 SX027 出土遺物観察表	248
第 6 表 II 区 SI046 出土遺物観察表	235	第 31 表 II 区 SX028 出土遺物観察表	248
第 7 表 II 区 SI050 出土遺物観察表	238	第 32 表 II 区 SX030 出土遺物観察表	248
第 8 表 II 区 SI053 出土遺物観察表	239	第 33 表 II 区 SX031 出土遺物観察表	249
第 9 表 II 区 SI054 出土遺物観察表	239	第 34 表 II 区 SX032 出土遺物観察表	250
第 10 表 II 区 SI068 出土遺物観察表	239	第 35 表 II 区 SX033 出土遺物観察表	250
第 11 表 II 区 SI069 出土遺物観察表	239	第 36 表 II 区 SX034 出土遺物観察表	250
第 12 表 II 区 SI070 出土遺物観察表	240	第 37 表 II 区 SX035 出土遺物観察表	251
第 13 表 II 区 SI071A 出土遺物観察表	240	第 38 表 II 区 SX037 出土遺物観察表	251
第 14 表 II 区 SI073 出土遺物観察表	241	第 39 表 II 区 SX040 出土遺物観察表	251
第 15 表 II 区 SI074 出土遺物観察表	241	第 40 表 II 区 SX041 出土遺物観察表	253
第 16 表 II 区 SI078 出土遺物観察表	241	第 41 表 II 区 SX042 出土遺物観察表	253
第 17 表 II 区 SI080 出土遺物観察表	242	第 42 表 II 区 SX043 出土遺物観察表	253
第 18 表 II 区 SI081 出土遺物観察表	243	第 43 表 II 区 SX044 出土遺物観察表	254
第 19 表 II 区 SI083 出土遺物観察表	244	第 44 表 II 区 SX047 出土遺物観察表	254
第 20 表 II 区 SI085 出土遺物観察表	244	第 45 表 II 区 SX048 出土遺物観察表	254
第 21 表 II 区 SI090 出土遺物観察表	245	第 46 表 II 区 SX057 出土遺物観察表	254
第 22 表 II 区 SI095 出土遺物観察表	245	第 47 表 II 区 SX059 出土遺物観察表	255
第 23 表 II 区 SK007 出土遺物観察表	246	第 48 表 II 区 SX060 出土遺物観察表	255
第 24 表 II 区 SK012 出土遺物観察表	246	第 49 表 II 区 SX061 出土遺物観察表	255
第 25 表 II 区 SX021 出土遺物観察表	246	第 50 表 II 区 SX062 出土遺物観察表	256

第51表	Ⅱ区 SX063 出土遺物観察表	256	第81表	V区 SI162 出土遺物観察表	270
第52表	Ⅱ区 SX064 出土遺物観察表	256	第82表	V区 SI166 出土遺物観察表	270
第53表	Ⅱ区 SX065 出土遺物観察表	256	第83表	V区 SI167 出土遺物観察表	271
第54表	Ⅱ区 SX066 出土遺物観察表	257	第84表	V区 SI171 出土遺物観察表	272
第55表	Ⅱ区 SX067 出土遺物観察表	258	第85表	V区 SI175A 出土遺物観察表	272
第56表	Ⅱ区 SX072 出土遺物観察表	258	第86表	V区 SI175B 出土遺物観察表	273
第57表	Ⅱ区 SX075 出土遺物観察表	258	第87表	V区 SI176 出土遺物観察表	274
第58表	Ⅱ区 SX076 出土遺物観察表	258	第88表	V区 SI177A 出土遺物観察表	274
第59表	Ⅱ区 SX082 出土遺物観察表	259	第89表	V区 SI178 出土遺物観察表	274
第60表	Ⅱ区 SX091 出土遺物観察表	259	第90表	V区 SI181 出土遺物観察表	275
第61表	Ⅱ区 SX092 出土遺物観察表	260	第91表	V区 SI182 出土遺物観察表	275
第62表	Ⅱ区 SX094 出土遺物観察表	260	第92表	V区 SI183 出土遺物観察表	275
第63表	Ⅱ区道橋外出土遺物観察表	261	第93表	V区 SI188 出土遺物観察表	275
第64表	Ⅲ区 SI104 出土遺物観察表	262	第94表	V区 SK149B 出土遺物観察表	276
第65表	Ⅲ区道橋外出土遺物観察表	263	第95表	V区 SK175C 出土遺物観察表	276
第66表	V区 SI139 出土遺物観察表	263	第96表	V区 SK201 出土遺物観察表	276
第67表	V区 SI141 出土遺物観察表	264	第97表	V区 SX172 出土遺物観察表	277
第68表	V区 SI144B 出土遺物観察表	265	第98表	V区 SX177B 出土遺物観察表	277
第69表	V区 SI146A 出土遺物観察表	265	第99表	V区 SX186A 出土遺物観察表	277
第70表	V区 SI146B 出土遺物観察表	265	第100表	Ⅵ区 SI334 出土遺物観察表	278
第71表	V区 SI146C 出土遺物観察表	266	第101表	Ⅵ区 SI354A 出土遺物観察表	278
第72表	V区 SI146D 出土遺物観察表	266	第102表	Ⅵ区 SI366 出土遺物観察表	280
第73表	V区 SI147 出土遺物観察表	267	第103表	Ⅵ区 SD255 出土遺物観察表	280
第74表	V区 SI148 出土遺物観察表	267	第104表	Ⅵ区 SD362 出土遺物観察表	281
第75表	V区 SI149A 出土遺物観察表	267	第105表	Ⅵ区 SX266 出土遺物観察表	281
第76表	V区 SI150 出土遺物観察表	268	第106表	Ⅵ区 SX385 出土遺物観察表	285
第77表	V区 SI154 出土遺物観察表	268	第107表	Ⅵ区道橋外出土遺物観察表	285
第78表	V区 SI156 出土遺物観察表	268	第108表	出土土器地区毎集計表	338
第79表	V区 SI157 出土遺物観察表	269	第109表	主要遺構出土土器分類比率	340
第80表	V区 SI158 出土遺物観察表	269	第110表	土製品・石製品種別数量比較	347

## 写真図版目次

### 写真図版一 調査区全景

- あがた駅南道跡全景（南から）
- あがた駅南道跡垂直直マゼイク写真

### 写真図版二 調査区

- 西地区全景（南から）

### D・E・K・L区全景（南から）

### C・D・I・J区全景（南から）

### A区全景（北西から）

### B区全景（北から）

### C区全景（北西から）

写真図版三 西A区(一)	ウ0S5(南東から)
A区全景(北西から)	ウ3S1(北東から)
A区全景(北から)	イ4S1
ウ2土層断面(北西から)	イ1遺物出土状況(北西から)
ア1確認面(南西から)	ウ1遺物出土状況(南から)
A区調査状況(北から)	イ2土版出土状況
写真図版四 西A区(二)	ウ2S1土器出土状況
ワ0SD1・2(南から)	写真図版九 西A区(七)
ウ0SD3(西から)	ウ3耳飾り出土状況
ウ5SD(西から)	ワ0土器出土状況
ア0遺構確認状況(南から)	ワ1遺物出土状況(南東から)
ア0P13土層断面(東から)	ワ1遺物出土状況(南から)
ア0P14(東から)	ワ1土偶出土状況
ア0P12(南から)	ワ1骨角器出土状況
イ0P1土層断面(南から)	A区調査状況(北東から)
写真図版五 西A区(三)	A区調査状況(北から)
ワ0ビット群(南西から)	写真図版一〇 西B区(一)
ワ0ビット群(西から)	B区全景(西から)
ア1P4～P6(南から)	SD6～8(南から)
ワ0P12土層断面(北から)	SD6～8 Eウ12・4(南から)
ワ0P13・14土層断面(東から)	X層調査状況(南から)
写真図版六 西A区(四)	B区調査状況(北西から)
ワ0P17～19土層断面(南から)	写真図版一一 西B区(二)
ワ1P12土層断面(南西から)	S11土層断面(東から)
イ0SX1	S11(南から)
イ0SX1	Eウ11-15Ⅴ層(南西から)
イ0SX1(南から)	S14遺物出土状況(北東から)
ウ2SX1(北東から)	S14礎礎熱状況(南から)
ワ0S4C土層断面(北から)	S10土層断面(南から)
ウ2SK2(北西から)	Eウ7-12・17-22土層断面(東から)
写真図版七 西A区(五)	調査状況(北西から)
ウ2SX1(北から)	写真図版一二 西B区(三)
ウ2SX1土層(北西から)	S12(西から)
ウ2SX1(北西から)	S12土層断面(東から)
ウ2SX1(北から)	S12調査状況(西から)
ウ2SX1掘方(南から)	S12遺物出土状況(北から)
写真図版八 西A区(六)	S12炉(南から)
ウ0S5(南から)	

写真図版一三 西B区(四)	S106 遺物出土状況(南東から)
S15・16(南から)	S106 土層断面(南から)
S15(南から)	S106(南東から)
S116(南から)	S106 断削り土層断面(南から)
S15 鈿(東から)	写真図版一九 西C区(三)
B区中央調査状況(北西から)	S106 周辺遺物出土状況(南東から)
写真図版一四 西B区(五)	S106P4・5 土層断面(北東から)
Eウ7-13 遺物出土状況(東から)	S143b 完掘(南から)
Eウ7-17・18・22・23 遺物出土状況(南東から)	S143b 南北土層断面(北西から)
Eウ7-17 遺物出土状況(南から)	S143b 焼土・炭化材検出状況(西から)
Eウ7-17 遺物出土状況(南から)	S143b 遺物出土状況(北西から)
Eウ6-25 土器出土状況(南西から)	S143b 土層遺物出土状況
Eウ7-10 異形台付土器出土状況(北から)	Eイ24-22(S143b 土層) 耳飾り出土状況
Eウ7-13 土器出土状況(北から)	写真図版二〇 西C区(四)
Eウ7-17 岩版出土状況(北から)	S143b 完掘(東から)
写真図版一五 西B区(六)	S143b 南平部(東から)
Eウ7-23 耳飾り出土状況(西から)	S143b 焼土・炭化材検出状況(西から)
Eウ7-22 遺物出土状況(南東から)	S143b 炭化材(東から)
Eウ7-23 M層遺物出土状況	S143b 焼土・炭化材(西から)
Eウ7-23 骨片出土状況(北から)	写真図版二一 西C区(五)
Eウ7-23 遺物出土状況(東から)	S143b 焼土・炭化材(東から)
写真図版一六 西B区(七)	S143b 増溝・炭化材(東から)
Eウ12-11 遺物出土状況(北から)	S143b 遺物出土状況(南から)
Eウ11-14 炭化材出土状況(北東から)	S143b・147(東から)
Eウ11-5 土製品出土状況(東から)	S147 遺物出土状況(南西から)
Eウ11-15 耳飾り出土状況(北東から)	S147 遺物出土状況(北西から)
Eウ11-24 玉出土状況(南から)	S147 遺物出土状況(北から)
Eウ11-25 環解耳飾り出土状況(南東から)	S147 遺物出土状況(北東から)
Eウ11-19 注口土器出土状況(東から)	写真図版二二 西C区(六)
Eウ12-1 土偶出土状況(南から)	S147(北東から)
写真図版一七 西C区(一)	S147(東から)
C区全景(西から)	S147P1・2・10(北東から)
SD101(西から)	S147 骨片・遺物出土状況(東から)
SD102(西から)	S147 土版出土状況(東から)
SD102 土層断面(東から)	写真図版二三 西C区(七)
SD103(南から)	S105・107 土層断面(東から)
写真図版一八 西C区(二)	SK108・113(西から)
S106(南から)	SK108(南東から)



- SK113 (東から)
- S135 (南から)
- S136 (南から)
- SK117 上層断面 (南から)
- S132 上層断面 (東から)
- 写真図版二四 西C区 (八)
- Eイ19-25 遺物出土状況 (西から)
- S129 上層断面 (東から)
- S120 (東から)
- S120 上層断面 (東から)
- S121 確認状況 (北から)
- S121 (東から)
- SK118 東西上層断面 (南から)
- S121 (南東から)
- 写真図版二五 西C区 (九)
- S126 上層断面 (北西から)
- S128 上層断面 (東から)
- S142 上層断面 (東から)
- S151b 上層断面 (南から)
- S159 上層断面 (東から)
- C区トレンチ1 (南東から)
- C区トレンチ2 (南西から)
- C区トレンチ3 (西から)
- 写真図版二六 西C区 (一〇)
- Eイ25-11 遺物出土状況 (南東から)
- Eイ24-5 遺物出土状況 (北から)
- Eイ24-7 土器出土状況
- Eイ24-7 垂飾玉類出土状況
- Eイ24-8 土器出土状況 (東から)
- C区遺物出土状況 (南西から)
- Eイ24-9 遺物出土状況 (北から)
- Eイ24-11 遺物出土状況 (東から)
- 写真図版二七 西C区 (一一)
- Eイ24-12 遺物出土状況
- Eイ24-12 遺物出土状況
- Eイ24-13 土器出土状況 (北西から)
- Eイ24-14・15 土器出土状況
- Eイ24-14 岩版出土状況 (北から)
- Eイ24-15 黒曜石出土状況
- Eイ24-14・15 垂飾玉類出土状況
- Eイ24-15 骨片出土状況
- 写真図版二八 西C区 (一二)
- C区調査状況 (北西から)
- Eイ24-17 石剣類出土状況 (北西から)
- Eイ24-17 土器出土状況 (北西から)
- Eイ25-6 遺物出土状況 (北東から)
- Eイ20-21 土器出土状況 (西から)
- 写真図版二九 西D区
- A・D・E区航空写真 (南から)
- D区SK2 上層断面 (南から)
- D区SD2～4 (東から)
- D区S7 上層断面 (東から)
- D区S3 上層断面 (南から)
- D区遺物出土状況
- D区Fイ3-7 遺物出土状況
- 写真図版三〇 西G・H区
- H区全景 (南東から)
- H区Eウ6.3・4・8、1-24 (西から)
- H区Eウ2-11Ⅰ区層遺物出土状況 (東から)
- H区Eウ2-7Ⅱ区層土器出土状況 (北東から)
- H区Eウ1-23 土器出土状況 (北から)
- H区Eウ1-23 遺物出土状況 (東から)
- H区Eウ2-11Ⅲ区層垂飾玉類出土状況 (東から)
- G区重機掘削状況 (南から)
- 写真図版三一 西I区 (一)
- Eイ18-13・18 遺物出土状況 (北西から)
- I区調査状況 (西から)
- S202 上層断面 (東から)
- S207 上層断面 (東から)
- S215 上層断面 (南から)
- S215 (南から)
- Eイ18-22 遺物出土状況 (北西から)
- Eイ18-22 遺物出土状況 (西から)
- 写真図版三二 西I区 (二)
- S210 (北から)
- S210 上層断面 (北から)

S210 東（北から）	M区水道管理設部立会い（北西から）
S210 南西（北から）	M区道横確認状況（東から）
Eイ18-17 遺物出土状況（北から）	A4区立会い状況（南から）
写真図版三三 西K・L区（一）	A4区上層断面（北東から）
S1 完掘（北から）	写真図版三八 縄紋土器集合
S1 上層断面（北東から）	写真図版三九 遺物（縄紋土器）
S1 調査状況（北西から）	写真図版四〇 遺物（縄紋土器）
S1 砂礫（南から）	写真図版四一 遺物（縄紋土器）
S1 土砂礫（南東から）	写真図版四二 遺物（縄紋土器）
写真図版三四 西K・L区（二）	写真図版四三 遺物（縄紋土器）
S70 ビット群（南西から）	写真図版四四 遺物（縄紋土器）
S70 ビット群（北東から）	写真図版四五 遺物（縄紋土器）
S70 ビット群 S58 上層断面（西から）	写真図版四六 遺物（縄紋土器）
S3・S5・S26（南西から）	写真図版四七 遺物（縄紋土器）
S12 遺物出土状況（南東から）	写真図版四八 遺物（縄紋土器）
写真図版三五 西K・L区（三）	写真図版四九 遺物（土偶）
K・L区遺物出土状況	写真図版五〇 遺物（土偶）
K・L区遺物出土状況	写真図版五一 遺物（土版・岩版）
Fイ1-17 岩版出土状況	写真図版五二 遺物（土版・岩版・石剣）
石剣・耳飾出土状況	写真図版五三 遺物（耳飾り）
S1 地形土製品出土状況（東から）	写真図版五四 遺物（耳飾り）
石皿出土状況	写真図版五五 遺物（耳飾り・土製垂飾・粘土規）
Fア5-24 土偶出土状況	写真図版五六 遺物（ミニチュア・彫形土製品・有孔土製円盤）
岩版出土状況（南から）	写真図版五七 遺物（石鏃）
写真図版三六 西地区（一）	写真図版五八 遺物（石鏃・打製石斧・石錘・磨製石斧）
T1 北拡張区（北から）	写真図版五九 遺物（磨石・磨石・砥石・撚切具・石皿）
T1 北拡張区（南東から）	写真図版六〇 遺物（石製玉類・石剣類・埴輪石）
T1 北拡張区 SX1（南から）	写真図版六一 遺物（顔面付土製品・動物形土製品・顔料付石器・骨角器）
T1 拡張区 SX2（南から）	
T1 北拡張区 SX3（南から）	
T1 北拡張区調査状況（東から）	写真図版六二 東地区 航空写真・東Ⅱ区の道横
T3 拡張区調査状況（東から）	V区全景（北東から）
T6 東拡張区遺物出土状況（北から）	Ⅷ区全景（北西から）
写真図版三七 西地区（二）	Ⅱ区上層断面
T4 北拡張区遺物出土状況（北から）	Ⅱ区上層断面
T4 北拡張区 SK1（北から）	Ⅱ区 SI036 上層断面及び遺物出土状況（北東から）
T4 北拡張区 P7 上層断面（南から）	Ⅱ区 SI036 南東隅遺物出土状況（西から）
旧M区トレンチ（西から）	Ⅱ区 SI036 遺物及び炭化材出土状況（北東から）

Ⅱ区 SI039 完掘（北東から）	写真図版六七 東Ⅱ区の遺構
写真図版六三 東Ⅱ区の遺構	Ⅲ区調査状況（東から）
Ⅱ区 SI039 貯蔵穴白色粘土出土状況（北東から）	Ⅲ区完掘（南東から）
Ⅱ区 SI045 完掘（南から）	Ⅲ区 SI079 土層断面（東から）
Ⅱ区 SI045 遺物出土状況（南から）	Ⅲ区 SI079 紡錘車出土状況（西から）
Ⅱ区 SI045 土層断面中央付近炭化材確認状況（東から）	Ⅲ区 SI079 土錘出土状況（東から）
Ⅱ区 SI045 土層断面北端炭化材確認状況（南東から）	Ⅲ区 SI079 土錘出土状況（南西から）
Ⅱ区 SI045 壺出土状況（南から）	Ⅲ区 SI102B 土層断面（南西から）
Ⅱ区 SI045 南壁障炭化材出土状況（南西から）	Ⅲ区 SI102B 土層断面（南東から）
Ⅱ区 SI045 炭化材出土状況	写真図版六八 東Ⅱ区の遺構
写真図版六四 東Ⅱ区の遺構	Ⅲ区 SI102B 土層断面西端（南西から）
Ⅱ区 SI050 完掘（南から）	Ⅲ区 SI107・108、SE129 完掘（南東から）
Ⅱ区 SI050 土層断面及び遺物出土状況（北東から）	Ⅲ区 SI108 覆上下半及び掘方土層断面（南から）
Ⅱ区 SI050 台付費出土状況（南から）	Ⅲ区 SI108 中央覆上下半及び掘方土層断面（南から）
Ⅱ区 SI053・SX057 遺物出土状況（南東から）	Ⅲ区 SI110 土層断面（南から）
Ⅱ区 SI053・SX057 土層断面及び遺物出土状況（南東から）	Ⅲ区 SI113A・113B 土層断面（南西から）
Ⅱ区 SX057 遺物出土状況（南東から）	Ⅲ区 SI113A・113B 土層断面（南東から）
Ⅱ区 SI054 完掘（南から）	Ⅲ区 SI113A カマド完掘（西から）
Ⅱ区 SI054 土層断面及び遺物出土状況（東から）	写真図版六九 東Ⅱ区の遺構
写真図版六五 東Ⅱ区の遺構	Ⅲ区 SI116 土層断面及び遺物出土状況（南西から）
Ⅱ区 SI054 北西隅炭化材及び遺物出土状況（東から）	Ⅲ区 SI116 カマド周辺遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SI054 壺出土状況（南西から）	Ⅲ区 SI116 カマド前面土師器環出土状況（東から）
Ⅱ区 SI074 カマド煙道確認状況（南から）	Ⅲ区 SI116 カマド遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SI080 完掘（南から）	Ⅲ区 SI116 南部遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SI080 土層断面及び遺物出土状況（南東から）	Ⅲ区 SI116 南部土師器環出土状況（南東から）
Ⅱ区 SI080 調査状況（西から）	Ⅲ区 SI117 土層断面（南西から）
Ⅱ区 SI080 南部遺物出土状況（南東から）	Ⅲ区 SI117 カマド遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SI080 北東部遺物出土状況（南から）	写真図版七〇 東Ⅱ区の遺構
写真図版六六 東Ⅱ区の遺構	Ⅲ区 SI117 カマド右側遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SI083 遺物出土状況（東から）	Ⅲ区 SE100 土層断面（南西から）
Ⅱ区 SI090 完掘（南東から）	Ⅲ区 SE101 土層断面（南から）
Ⅱ区 SK007 土層断面（南から）	Ⅲ区 SE101 男衛出土状況（南西から）
Ⅱ区 SK007 完掘（西から）	Ⅲ区 SE129 完掘（北東から）
Ⅱ区 SK010 完掘（南東から）	Ⅲ区 SE131 完掘（南東から）
Ⅱ区 SK012 完掘（南から）	Ⅲ区 SE131 土層断面（南から）
Ⅱ区 SK013 完掘（東から）	Ⅲ区 SD128・130B 北端土層断面（南から）
Ⅱ区 SK018 完掘（南西から）	写真図版七一 東Ⅱ区の遺構
	Ⅲ区 SD128・130B 北端土層断面（南西から）

Ⅲ区 SD128 上層断面 SI116 部分 (南から)	V区 SI139 完掘 (北から)
Ⅲ区 SD128 上層断面 (南から)	V区 SI139 遺物出土状況 (北から)
Ⅲ区 SD130B 上層断面 (南から)	V区 SI139 カマド遺物出土状況 (西から)
Ⅲ区 SD130B 北端上層断面 (南西から)	V区 SI141 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SD130B 土層断面 (南から)	V区 SI141 南東部遺物出土状況 (南東から)
Ⅲ区 SD130B・132 調査状況 (南から)	写真図版七六 東V区の遺構
Ⅲ・V区 SD130B 確認状況 (南から)	V区 SI141 中央部遺物出土状況 (東から)
写真図版七二 東Ⅲ区の遺構	V区 SI144A 遺物出土状況 (南西から)
Ⅲ区 SD130 C 確認状況 (南西から)	V区 SI144A 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SD130 C 東端上層断面 (南から)	V区 SI144B 完掘 (南から)
Ⅲ区 SD130 C 中央部上層断面 (西から)	V区 SI146A・146B・146C・146D・150 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SD130 C 西部上層断面 (西から)	V区 SI146A 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SD132 確認状況 (南から)	V区 SI146A 北西部遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SD132 上層断面 (南から)	V区 SI146B 遺物出土状況 (西から)
Ⅲ区 SE114 上層断面 (南西から)	写真図版七七 東V区の遺構
Ⅲ区 SK115 上層断面 (南西から)	V区 SI146B 北西部遺物出土状況 (南から)
写真図版七三 東Ⅲ区・東Ⅳ区の遺構	V区 SI146C 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SK118 上層断面 (南東から)	V区 SI146C カマド調査状況 (北から)
Ⅲ区 SK121 上層断面 (南東から)	V区 SI146C 貯蔵穴土層断面 (西から)
Ⅲ区 SK124 確認状況 (西から)	V区 SI146D 遺物出土状況 (西から)
Ⅲ区 SK124 上層断面 (西から)	V区 SI146D 南壁際遺物出土状況 (南西から)
Ⅲ区 SK134 上層断面 (南から)	V区 SI147 遺物出土状況 (南から)
Ⅲ区 SX133 遺物出土状況及び SK134・135 確認状況 (南から)	V区 SI147 中央部遺物出土状況 (西から)
Ⅲ区 SK135 上層断面 (南から)	写真図版七八 東V区の遺構
V区西半東壁 上層断面 (北西から)	V区 SI148 遺物出土状況 (北東から)
写真図版七四 東Ⅳ区の遺構	V区 SI149A 上層断面 (南西から)
V区西半 SD130 C 確認状況 (西から)	V区 SI150 遺物出土状況 (南から)
V区西半 SD130 C 西壁土層断面 (北東から)	V区 SI150 炉土層断面 (南東から)
V区西半 SD130 C 西壁南部上層断面 (南東から)	V区 SI154 カマド土層断面 (北西から)
V区西半 SD130 C 西壁中央部上層断面 (南東から)	V区 SI155・156 遺物出土状況 (東から)
V区西半 SD130 C 西壁北部上層断面 (南東から)	V区 SI155 遺物出土状況 (東から)
V区西半 SD130 C 東壁土層断面 (北から)	V区 SI155 遺物出土状況 (南西から)
V区西半 SD130 C 東壁南部上層断面 (北西から)	写真図版七九 東V区の遺構
V区西半 SD130 C 東壁北部上層断面 (北西から)	V区 SI156 遺物出土状況 (東から)
写真図版七五 東V区の遺構	V区 SI156 南西部遺物出土状況 (西から)
V区調査状況 (東から)	V区 SI156 貯蔵穴周辺白色粘土確認状況 (南から)
V区完掘 (西から)	V区 SI157 土層断面及び遺物出土状況 (南から)
V区完掘 (南から)	V区 SI157 北西部遺物出土状況 (南西から)

V区 SI158 遺物出土状況（北西から）	V区 SD190A 完掘（南西から）
V区 SI158 東隅遺物出土状況（北西から）	写真図版八四 東V区の遺構
V区 SI161 遺物出土状況（北西から）	V区 SK149B 遺物出土状況（東から）
写真図版八〇 東V区の遺構	V区 SK175C 遺物及び炭化物出土状況（南から）
V区 SI161 北東部遺物出土状況（西から）	V区 SK175C 土層断面（南から）
V区 SI162 遺物出土状況（南西から）	V区 SK185B 遺物出土状況（北西から）
V区 SI166 完掘（南から）	V区 SK191 完掘（南東から）
V区 SI167 土層断面（南から）	V区 SK191 土層断面（南東から）
V区 SI170 土層断面（南から）	V区 SK192 完掘（北から）
V区 SI171 土層断面（南から）	V区 SK195 完掘（北東から）
V区 SI171 南西部遺物出土状況（南から）	写真図版八五 東V区の遺構
V区 SI175A・175B 土層断面（南から）	V区 SK196 遺物出土状況（西から）
写真図版八一 東V区の遺構	V区 SK196 北部土層断面（西から）
V区 SI175A 遺物出土状況（西から）	V区 SK196 遺物出土状況（西から）
V区 SI175B 遺物出土状況（北東から）	V区 SK196 骨片確認状況（北西から）
V区 SI176 完掘（南から）	V区 SK197 完掘（南から）
V区 SI176 南西部遺物出土状況（東から）	V区 SK197 土層断面（南東から）
V区 SI176 東部遺物出土状況（東から）	V区 SK198 遺物出土状況（西から）
V区 SI176 南東部遺物・炭化物・焼土確認状況（東から）	V区 SK199 完掘（南東から）
V区 SI177A 完掘（南から）	写真図版八六 東V区の遺構
V区 SI177A 遺物出土状況（南東から）	V区 SK200 遺物出土状況（南東から）
写真図版八二 東V区の遺構	V区 SK200 土層断面遺物出土状況（南から）
V区 SI178 遺物出土状況（西から）	V区 SK201 遺物出土状況（南東から）
V区 SI179 遺物出土状況（南西から）	V区 SK201 遺物出土状況（南西から）
V区 SI179 西隅遺物出土状況（北西から）	V区 SK202 土層断面（南西から）
V区 SI180 完掘（西から）	V区 SK203 土層断面及び遺物出土状況（南から）
V区 SI181 土層断面（南から）	V区 SK204 土層断面（南から）
V区 SI182 土層断面（北から）	V区 SK217 土層断面（西から）
V区 SI182 貯蔵穴遺物出土状況（西から）	写真図版八七 東V区の遺構
V区 SI182 貯蔵穴完掘（東から）	V区 SK218 土層断面（西から）
写真図版八三 東V区の遺構	V区 SK206 土層断面（南から）
V区 SI182 北隅北東壁際遺物出土状況（南から）	V区 SK207・208 土層断面（南から）
V区 SI182 貯蔵穴南側赤色顔料出土状況（西から）	V区 SK209 土層断面（南から）
V区 SI183 遺物出土状況（西から）	V区 SK210 土層断面（南から）
V区 SI188 完掘（南から）	V区 SK211 土層断面（南から）
V区 SI188P5 完掘（西から）	V区 SK212 土層断面（南から）
V区 SI188P9・10 完掘（西から）	V区 SK213・214 土層断面（西から）
V区 SD187 土層断面（西から）	

写真図版八八 東V区の遺構

- V区 SK215 上層断面 (南から)
- V区 SK216 上層断面 (南から)
- V区 SX136 遺物出土状況 (南から)
- V区 SX136 中央部遺物出土状況 (西から)
- V区 SX136 中央部遺物出土状況 (南から)
- V区 SX136 中央部遺物出土状況 (北から)
- V区 SX142 遺物出土状況 (南から)
- V区 SX143 遺物出土状況 (南から)

写真図版八九 東V区の遺構

- V区 SX152 遺物出土状況 (南東から)
- V区 SX164 遺物出土状況 (南から)
- V区 SX164 南東部遺物出土状況 (北東から)
- V区 SX164 北西部遺物出土状況 (南から)
- V区 SX172 遺物出土状況 (東から)
- V区 SX172 中央部遺物出土状況 (北東から)
- V区 SX172 東部遺物出土状況 (東から)
- V区 SX174 遺物出土状況 (北東から)

写真図版九〇 東V区の遺構

- V区 SX174 東部遺物出土状況 (北西から)
- V区 SX174 中央部遺物出土状況 (東から)
- V区 SX185A 遺物出土状況 (南から)
- V区 SX186A 遺物出土状況 (南西から)
- V区 SX186A 西部遺物出土状況 (西から)
- V区 SX186B 遺物出土状況 (西から)
- V区 SX186B 南部遺物出土状況 (北西から)
- V区 SX228 遺物出土状況 (南東から)

写真図版九一 東V区・東VII区の遺構

- V区 SX228 溝上層断面 (南西から)
- V区調査状況 (南西から)
- V区 SD255 完掘 (西から)
- V区 SD255 上層断面 (北西から)
- V区 SD255 上層断面 (南西から)
- V区 SD340 上層断面 (西から)
- V区 SX219 遺物出土状況 (西から)
- V区 SX219 遺物出土状況 (西から)

写真図版九二 東VII区の遺構

- V区 SI256 完掘 (北西から)

- V区 SI256 上層断面 (北西から)
- V区 SI263 完掘 (北から)
- V区 SI263 遺物出土状況 (北西から)
- V区 SI263 遺物出土状況 (南東から)
- V区 SI264 完掘 (北から)
- V区 SI264 北西部晩上確認状況 (西から)
- V区 SI265 完掘 (北から)

写真図版九三 東VII区の遺構

- V区 SI265 遺物出土状況 (西から)
- V区 SI265 南西部遺物出土状況 (東から)
- V区 SI265 南西部炭化物・焼土確認状況 (南から)
- V区 SI265 東部炭化材出土状況 (北から)
- V区 SI295 完掘 (西から)
- V区 SI295 貯蔵穴遺物出土状況 (西から)
- V区 SI295 遺物出土状況 (北から)
- V区 SI295 遺物出土状況 (北から)

写真図版九四 東VII区の遺構

- V区 SI295 遺物出土状況 (南東から)
- V区 SI315 完掘 (北西から)
- V区 SI315 遺物出土状況 (北東から)
- V区 SI315 西部遺物出土状況 (西から)
- V区 SI315 北東部遺物出土状況 (東から)
- V区 SI321 完掘 (北東から)
- V区 SI321 遺物出土状況 (北西から)
- V区 SI321 遺物出土状況 (西から)

写真図版九五 東VII区の遺構

- V区 SI321 南西部遺物出土状況 (北西から)
- V区 SI326 土層断面 (南から)
- V区 SI326 北東部遺物出土状況 (南西から)
- V区 SI330 遺物出土状況 (西から)
- V区 SI334・387 完掘 (東から)
- V区 SI334P2 上層断面 (西から)
- V区 SI334・387 遺物出土状況 (西から)
- V区 SI334 東壁際遺物出土状況 (北西から)

写真図版九六 東VII区の遺構

- V区 SI352 完掘 (南東から)
- V区 SI352 か確認状況 (南東から)
- V区 SI353 完掘 (北西から)



- VII区 SI353P1 土層断面 (南西から)  
 VII区 SI354A・354B 完掘 (北から)  
 VII区 SI354A・354B 遺物出土状況 (北から)  
 VII区 SI354A カマド土層断面 (北西から)  
 VII区 SI354A カマド完掘 (北から)  
 写真図版九七 東VII区の遺構  
 VII区 SI354A 貯蔵穴遺物出土状況 (北西から)  
 VII区 SI354A 東半遺物出土状況 (北から)  
 VII区 SI354B 遺物出土状況 (南東から)  
 VII区 SI355 完掘 (南西から)  
 VII区 SI355 遺物出土状況 (南西から)  
 VII区 SI355 東部遺物出土状況 (北東から)  
 VII区 SI355 西隅遺物出土状況 (北東から)  
 VII区 SI358 完掘 (北東から)  
 写真図版九八 東VII区の遺構  
 VII区 SI358 遺物出土状況 (南西から)  
 VII区 SI358 西部遺物出土状況 (南西から)  
 VII区 SI359 完掘 (南西から)  
 VII区 SI359 遺物出土状況 (北西から)  
 VII区 SI360 完掘 (東から)  
 VII区 SI360 土層断面及び遺物出土状況 (南東から)  
 VII区 SI361 遺物出土状況 (南東から)  
 VII区 SI361 南西部遺物出土状況 (南から)  
 写真図版九九 東VII区の遺構  
 VII区 SI364 完掘 (北東から)  
 VII区 SI366・SD372 遺物出土状況 (北西から)  
 VII区 SI369 完掘 (南東から)  
 VII区 SI369 遺物出土状況 (南東から)  
 VII区 SI369 中央部遺物出土状況 (東から)  
 VII区 SK367 完掘 (南から)  
 VII区 SK367 土層断面 (南東から)  
 VII区 SK368 完掘 (南から)  
 写真図版一〇〇 東VII区の遺構  
 VII区 SK368 土層断面 (南東から)  
 VII区 SK373 完掘 (北東から)  
 VII区 SK374 完掘 (南から)  
 VII区 SK374 土層断面 (南から)  
 VII区 SK375 土層断面 (南東から)  
 VII区 SK380 完掘 (南から)  
 VII区 SK380 土層断面 (南から)  
 VII区 SD255A・A' 土層断面 (西から)  
 写真図版一〇一 東VII区の遺構  
 VII区 SD255A・A' 中央部土層断面 (西から)  
 VII区 SD255B・B' 土層断面 (西から)  
 VII区 SD255B・B' 中央部土層断面 (西から)  
 VII区 SD255・SI295 土層断面 (西から)  
 VII区 SD255C・C' 土層断面 (西から)  
 VII区 SD255C・C' 中央部土層断面 (西から)  
 VII区 SD255C・C' 南部土層断面 (西から)  
 VII区 SD255 遺物出土状況 (西から)  
 写真図版一〇二 東VII区の遺構  
 VII区 SD255D・D' 土層断面 (西から)  
 VII区 SD255 西壁土層断面 (南から)  
 VII区 SD255 西壁土層断面 (東から)  
 VII区 SD255 西壁土層断面 (南東から)  
 VII区 SD340A・A' 土層断面 (北東から)  
 VII区 SD340B・B' 土層断面 (西から)  
 VII区 SD340D・D' 土層断面 (西から)  
 VII区 SD341A・A' 土層断面 (南西から)  
 写真図版一〇三 東VII区の遺構  
 VII区 SD341B・B' 土層断面 (南西から)  
 VII区 SD350 完掘 (北西から)  
 VII区 SD350A・A' 土層断面 (南東から)  
 VII区 SD350B・B' 土層断面 (南東から)  
 VII区 SD350D・D' 土層断面 (南東から)  
 VII区 SD351 完掘 (北西から)  
 VII区 SD351A・A' 土層断面 (南東から)  
 VII区 SD351B・B' 土層断面 (南東から)  
 写真図版一〇四 東VII区の遺構  
 VII区 SD362 完掘 (南から)  
 VII区 SD362 完掘 (東から)  
 VII区 SD362 土層断面 (南から)  
 VII区 SD372・SI366 遺物出土状況 (北西から)  
 VII区 SD378 完掘 (北から)  
 VII区 SD378 土層断面 (南から)  
 VII区 SD379 完掘 (南から)

VII区 SD379 土層断面 (西から)

写真図版一〇五 東VII区の遺構

VII区 SD386 完掘 (東から)

VII区 SD386 土層断面 (西から)

VII区 SK253 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SK259 完掘 (南から)

VII区 SK267 完掘 (南東から)

VII区 SK268 完掘 (北東から)

VII区 SK273 完掘 (南西から)

VII区 SK273 土層断面 (南西から)

写真図版一〇六 東VII区の遺構

VII区 SK274 完掘 (西から)

VII区 SK274 土層断面 (南から)

VII区 SK278 完掘 (西から)

VII区 SK278 土層断面 (南から)

VII区 SK328・329 完掘 (南西から)

VII区 SK328 土層断面 (南東から)

VII区 SK329 土層断面 (南東から)

VII区 SK356 遺物出土状況 (北西から)

写真図版一〇七 東VII区の遺構

VII区 SK357 遺物出土状況 (西から)

VII区 SK363 完掘 (南西から)

VII区 SK363 土層断面 (南西から)

VII区 SK365 完掘 (西から)

VII区 SK370 完掘 (南東から)

VII区 SK370 土層断面 (南東から)

VII区 SK376 完掘 (南西から)

VII区 SK376 土層断面 (南西から)

写真図版一〇八 東VII区の遺構

VII区 SK377 完掘 (北東から)

VII区 SK377 土層断面 (南東から)

VII区 SK394 完掘 (北から)

VII区 SX251 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX251 西部遺物出土状況 (南東から)

VII区 SX254 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX261 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX266 遺物出土状況 (南東から)

写真図版一〇九 東VII区の遺構

VII区 SX266 遺物出土状況 (北東から)

VII区 SX266 中央部遺物出土状況 (北西から)

VII区 SX266 中央部遺物出土状況 (南東から)

VII区 SX266 中央部遺物出土状況 (南東から)

VII区 SX266 中央部遺物出土状況 (北から)

VII区 SX271 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX272 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX279 遺物出土状況 (南から)

写真図版一一〇 東VII区の遺構

VII区 SX280 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX281 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX282 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX283 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX284 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX285 遺物出土状況 (東から)

VII区 SX286 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX287 遺物出土状況 (南西から)

写真図版一一一 東VII区の遺構

VII区 SX287 西部遺物出土状況 (西から)

VII区 SX288 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX289 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX290 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX291 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX292 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX293 遺物出土状況 (南から)

VII区 SX294 遺物出土状況 (南から)

写真図版一一二 東VII区の遺構

VII区 SX296 遺物出土状況 (西西から)

VII区 SX297 遺物出土状況 (西から)

VII区 SX298 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX299 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX300 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX301 遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX301 南東部遺物出土状況 (南西から)

VII区 SX301 南西部遺物出土状況 (西から)

写真図版一一三 東VII区の遺構

VII区 SX302 遺物出土状況 (南西から)

Ⅷ区 SX303 遺物出土状況 (南から)	Ⅷ区 SX335 遺物出土状況 (南西から)
Ⅷ区 SX304 遺物出土状況 (南西から)	Ⅷ区 SX336 遺物出土状況 (北西から)
Ⅷ区 SX305 遺物出土状況 (南西から)	Ⅷ区 SX337 遺物出土状況 (南西から)
Ⅷ区 SX306 遺物出土状況 (南西から)	Ⅷ区 SX337 北部遺物出土状況 (南東から)
Ⅷ区 SX307 遺物出土状況 (南から)	Ⅷ区 SX339 遺物出土状況 (北西から)
Ⅷ区 SX308 遺物出土状況 (西から)	Ⅷ区 SX385 遺物出土状況 (北西から)
Ⅷ区 SX308 遺物出土状況 (東から)	写真図版一一七 東Ⅷ区の遺構
写真図版一一四 東Ⅷ区の遺構	Ⅷ区 SP388-SP391 完掘 (南東から)
Ⅷ区 SX309 遺物出土状況 (南西から)	Ⅷ区 SP388 上層断面 (南東から)
Ⅷ区 SX310 遺物出土状況 (南から)	Ⅷ区 SP389 上層断面 (南東から)
Ⅷ区 SX311 遺物出土状況 (南東から)	Ⅷ区 SP390 上層断面 (南東から)
Ⅷ区 SX312 遺物出土状況 (東から)	Ⅷ区 SP391 上層断面 (南東から)
Ⅷ区 SX313 遺物出土状況 (南東から)	Ⅷ区 SP392・393 完掘 (北西から)
Ⅷ区 SX314 遺物出土状況 (南東から)	Ⅷ区 SP392 上層断面 (南西から)
Ⅷ区 SX316 遺物出土状況 (北から)	Ⅷ区 SP393 上層断面 (南西から)
Ⅷ区 SX316 西部遺物出土状況 (南西から)	写真図版一一八 東地区出土遺物
写真図版一一五 東Ⅷ区の遺構	SI036・045・046
Ⅷ区 SX317 遺物出土状況 (西から)	写真図版一一九 東地区出土遺物
Ⅷ区 SX318 遺物出土状況 (南西から)	SI046・054・074・080・081・085、SX022・030
Ⅷ区 SX319 遺物出土状況 (南から)	写真図版一二〇 東地区出土遺物
Ⅷ区 SX320 遺物出土状況 (西から)	SX040・042・059・064・067・091・092
Ⅷ区 SX322 遺物出土状況 (北東から)	写真図版一二一 東地区出土遺物
Ⅷ区 SX323 遺物出土状況 (東から)	SX094、Ⅱ区遺構外、SI141・146C・146D・158・175A
Ⅷ区 SX324 遺物出土状況 (南西から)	写真図版一二二 東地区出土遺物
Ⅷ区 SX327 遺物出土状況 (西から)	SI036・039・046・081・139・157・162・176・354A、SX
写真図版一一六 東Ⅷ区の遺構	022・030・041・092・177B・266、Ⅱ区遺構外、Ⅲ区遺構外
Ⅷ区 SX332 遺物出土状況 (南西から)	1分冊 16 図-1
Ⅷ区 SX333 遺物出土状況 (南西から)	

## 第4章 東地区の遺構と遺物

### 第1節 東地区の概要

#### 1. 調査の方法

東地区の発掘調査は、確認調査によって本調査の範囲を決定してから実施しており、工事範囲や引渡し時期等から便宜上Ⅰ～Ⅷ区の調査区を設定して調査を進めた(第2図)。

調査で使用するグリッドは4×4mを最小単位とし、調査区の南西に相当する日本測地Ⅸ系方眼のX=31700、Y=32700の交点を起点として対象範囲全体に方眼を設定した。各グリッドの数値は南北方向のX軸をアルファベットで表記し南から北へ100mごとにA・B・Cの順、東西方向のY軸はカタカナで表記し西から東へ100mごとにア・イ・ウの順に附して100×100mのグリッドを設定した。その中を南西隅から20×20mごとに1-25に区分し、更にそれぞれの中を南西隅から1-25に区切ることで4×4mグリッドを表すこととした。

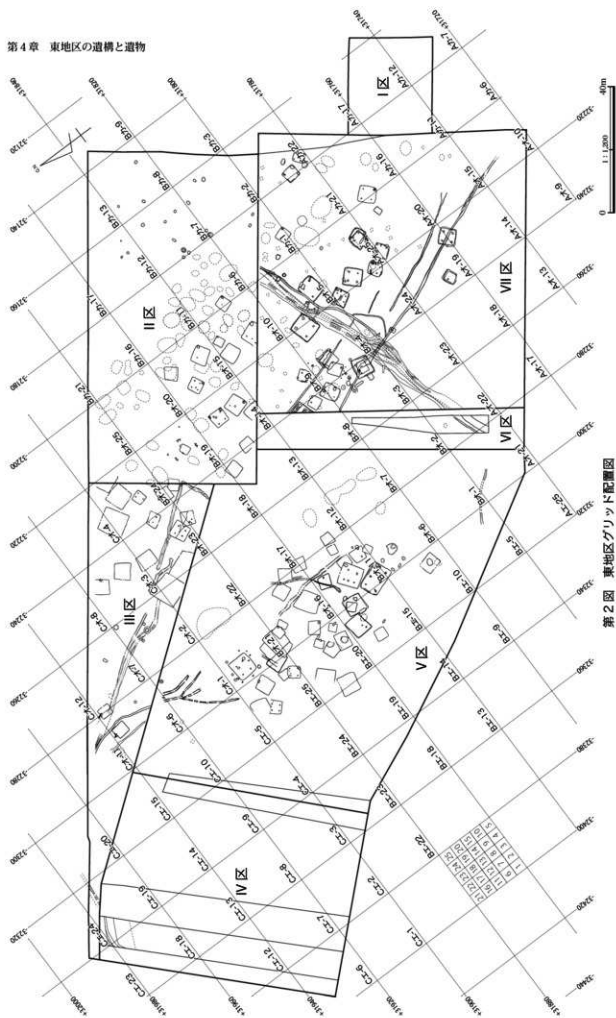
Ⅰ～Ⅲ区では、平面的に遺構を確認することが困難であると考え、4×4mグリッドに沿って縦横に幅50cmのトレンチを設定して掘り下げることで遺構を確認した。Ⅳ区・Ⅵ区は遺構確認面付近まで平面的に掘り下げている。Ⅴ区・Ⅷ区は調査区の形状に沿った幅2mのトレンチを掘り下げて遺構集中部を確認してから本調査を行っており、トレンチはⅤ区で5m間隔、Ⅷ区で8m間隔で設定している。調査面積はⅠ区:400㎡、Ⅱ区:5,000㎡、Ⅲ区:3,000㎡、Ⅳ区:5,000㎡、Ⅴ区:9,500㎡、Ⅵ区:1,000㎡、Ⅷ区:7,300㎡、合計31,200㎡である。

#### 2. 基本土層

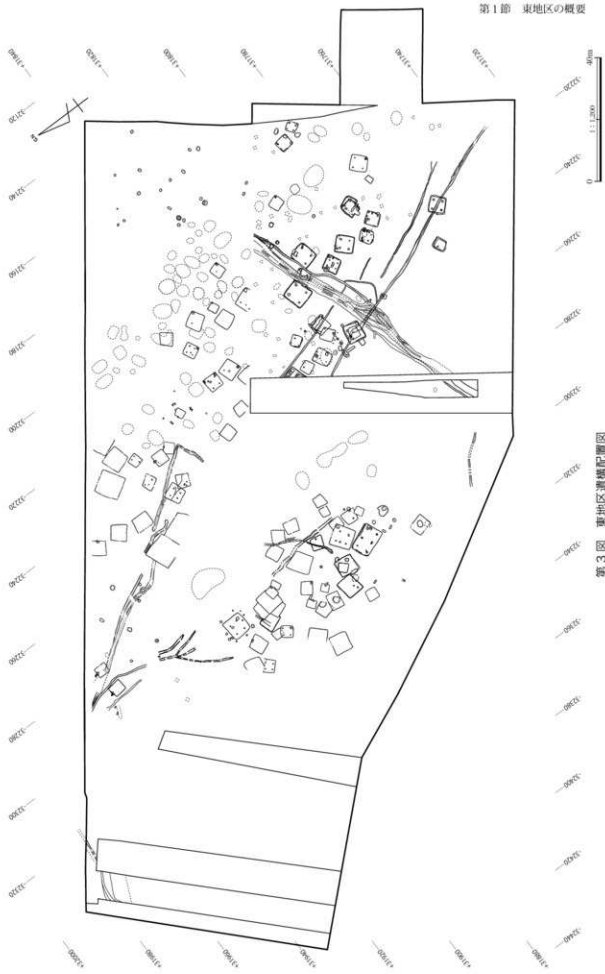
堆積土は灰色ないし黒褐色を呈する沖積土であり、砂を含む層や粘質土も多く、下層はグライ化した青灰色土となる。調査した部分ではロームは確認できなかった。表土層は30cmあり、その下に中世以降の堆積



第1図 東地区基本土層



第2図 東地区グリッド配置図



第3図 東地区遺構配置図



土とみられるI層がある。層厚は約30cmで、色調などからI a・I b・I cの各層に分層でき、最下層のI c層（灰色粘質土）にAs-Bを含む。II層（黒褐色土）は層厚約10～30cmあり、古代の遺物を多量に含む古代遺物包含層である。III層は層厚5～10cmほどの砂質の明褐色土で、Hr-FAを含む。古代の遺構はII層下面ないしIII層前後で確認できるが、覆土とII層、III層との違いは僅かであり、遺構の確認は容易ではない。

IV層は古墳時代の遺物包含層で層厚は30～50cmあり、色調と含有物からIV a層、IV b層、IV c層の3層に分層できる。IV a層、IV b層はともに黒褐色土で、IV a層にはHr-FAが含まれる。As-CはIV a層～IV b層前後に含まれるとみられ、IV b層の可能性が高い。IV c層は灰褐色土である。V層は層厚30cmほどの遺物を含まない黄色粘質土で、このV層上面からIV b層前後で古墳時代の遺構が確認できる。なお、現地表からV層上面までの深さは約1.3mである。V層下位には砂質の青灰色土であるVI層があるが、この層にも古墳時代以降の遺物は含まれない。

II区での観察結果などから確認した各層と遺構との関連は以下のとおりである。

奈良・平安時代遺構の確認面はIII層下面（IV a層上面）であり、標高は24.5-24.6mである。土層堆積はほぼ平坦だが、IV a層やIV b層の高さを比較すると、奈良・平安時代遺構が集中するBオ-14北半からBオ-19グリッド付近はそれ以外の地点より10-15cm程度高くなっている。奈良・平安時代遺構がここに集中するのは、僅かでも高くなった地形であったためと考えられる。古墳前期遺構の確認面であるV層及びIV c層上面（IV b層下面）での高さの差は小さい。なお、火山灰考古学研究所の分析結果等から、III層は洪水堆積物の可能性も考えられる。古墳時代中期遺構の確認面は、SX057の土層断面等からIV a層下面と考えられる。標高は24.3-24.4mである。古墳時代前期遺構の確認面は、V層及びIV c層の上面（IV b層下面）であり、遺構はIV a層やIV b層を掘り下げていった後に確認できる。標高は24.2-24.3mである。住居跡内にIV a層やIV b層が入り込むように堆積し、この中に古墳時代中期の遺物集中などが形成されるものもある。この場合、確認面に到達しなくとも前期遺構の存在がある程度推測することが可能となる。

### 3. 確認された遺構と遺物の概要

今回の調査により確認された遺構は第1表に示すとおりであり、東地区では古墳・古代・中世・近世の遺構が確認できた。

第1表 東地区遺構一覧表

	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	井戸	溝	土抗	性格不明 遺構	ピット	総数
I区	0	0	0	0	0	0	0	0
II区	21	0	0	0	20	51	0	92
III区	18	0	5	8	6	2	0	39
IV区	0	0	0	0	0	0	0	0
V区	34	0	2	6	28	12	0	82
VI区	0	0	0	0	0	1	0	1
VII区	23	1	0	15	19	65	6	129
総数	96	1	7	29	73	131	6	343

基本的には出土遺物から所属時期を推定しているが、その遺物が必ずしも遺構の時期を示さない場合もある。各時期の遺物が混在する遺構の場合、主体となる遺物をもとに所属時期を推定している。

## 第2節 Ⅰ区の調査 (第66図・第2表)

Ⅰ区では遺物が少量出土しているのみで、遺構は確認されていない。出土遺物は一定量あり、古墳前期9-10期くらいが主体で、9世紀代の遺物が少量混じる。

古墳前期の遺物は高環が最も多く、甕、大形壺もある。鉢、中形壺は僅かである。鉢は小形丸底形(2)、中形壺は埴形で口縁部片と胴部片である。高環は脚部棒状(中実、上半中実)で下半は1段か2段に開き環部小さく有稜(3・4)であり、脚部10個体、環部3個体がある。大形壺は胴部片、甕はハケ甕主体で一部ケズリやナデが入る。台部1個体がある。9世紀代では非クロコ土師器環や須恵器環1個体(1)などである。

出土する遺物の時期等は他の地区とほぼ変わらない。

## 第3節 Ⅱ区の調査

### 1. 竪穴建物跡

S1036 (第5・66・67図、第3表、図版六二・一一八・一二二)

位置 Ⅱ区調査区、Bオ-10-10・15、Bカ-6-6・11グリッドに位置する。南東にSX028・029が近接してあるほか、北西1mにSX093、北1.5mにSX035、北東2mにSX027がそれぞれある。重複なし。

平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-17°-Wである。規模 東西方向が4.16m、南北方向が3.87mである。覆土の状態 第2・第3層で、上面は基本土層IV層(IVb層)に相当するとみられる灰褐色土(第1層)で覆われる。木材の炭化材は中央南寄りなどに僅かに見られる。焼土は南～南東側の壁際に多く、第3層上に乗っており、床面から5～10cm浮いている。第3層の堆積が薄い住居跡中央部では床面直上で確認できる部分もある。住居跡廃棄から一定時間経過後に上層が消失したものととも推測される。壁 平面的に掘り下げた部分では10cm程度が残るのみだが、土層が確認できるグリッドベルト部分での残存壁高は25～27cmある。壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。床面 枦がある住居跡中央から南東隅、南壁際中央付近がやや高くなっているが、おおむね平坦である。北東隅及び中央西寄り、南壁際中央などでは、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認できる。床面に敷いた筵状の敷物の可能性があらう。掘方・貼床 なし。柱穴 なし。壁溝 なし。火処 住居跡中央北寄りの床面が赤変しており、ここが枦と考えられる。径35cmのほぼ円形に赤変範囲が確認できる地床枦で、掘り込みの有無は確認できていない。上面から甕主体の土師器が多数出土する。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は隅丸長方形で、規模は82×70cm、深さは床面から15cmである。貯蔵穴内南東部はビット状にさらに一段低くなっており、掘り込みの規模は43×36cm、深さは床面下24cmである。覆土は粘性の強い黒褐色土で、上面には周囲の壁際にあるものと同様の焼土が堆積するほか、壁際を中心に多数の土器が出土する。土器の多くはほぼ床面直上の高さから出土しており、住居跡廃棄時にすでにここに置かれていたか、棚状の施設にあったものが廃棄後間もなく落下したものと推測される。遺物 住居跡中央北寄りの枦付近、枦東側の藁状の炭化材上面、南東隅の床面付近からそれぞれ集中して出土するほか、住居跡北半で床面から浮いた状態で土師器片が多数出土する。遺物は一定量あり、甕、中形壺が多く、高環や鉢が混じる。砥石、土器片砥石もある。鉢は小形丸底形でハの字に開く大形1個体(1)、小さな小形丸底形でやや内湾する口縁部1個体、二重口縁状の口縁部1個体、赤彩の小形丸底形片1点、少し大形の小形丸底形の破片1点である。高環は元屋敷敷で環部は

有稜、脚部ハの字で3孔のほぼ完形が1個体(5)あるほかは破片僅かである。中形壺はほぼ完形の長い口縁部を持つ埴形1個体(2)、埴形でやや内湾する口縁部1個体(3)、ハの字に長く開く口縁部2個体、ほぼ完形で口縁部短くハの字に開く1個体(4)である。甕は鉢形でほぼ完形1個体(6)である。甕はほぼ完形のS字台付甕1個体(7)、ほぼ完形の単口縁台付甕1個体(8)のほか、S字口縁部1個体、台部2個体+α、平底2個体がある。外面調整はハケ主体で一部にナデ、ケズリ入る。

砥石は大形の河原石に研磨痕と敲打痕が認められる砂岩系ホルンフェルス製の大型の置き砥石1個体(12)、礫岩の河原石に研磨痕を持つ小形四角柱状の完形の砥石1個体(11)がある。磨石は安山岩製の完形1個体(13)、土器片砥石は同一個体の壺片を使用したもの2点(9・10)があり、刻線状の研磨痕がある。高環に古い様相が残るが、本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S I O 3 9 (第5・67図、第4表、図版六二・六三・一二二)

位置 II区調査区、Bオ-10・7・8・12・13グリッドに位置する。東にSX037が近接してあるほか、北3.5mにS1046がある。重複 SX038の遺物出土範囲と重複するとみられる。SX038の遺物が出土する高さは本住居跡の遺構確認面より高いため、本住居跡はSX038より古いと考えられる。遺構南西部は確認できていない。平面形 2本確認された主柱穴が各壁から等距離に配置されたとすれば、方形に復元できる。南北方向の中軸線はN $20^{\circ}$ -Wである。規模 南北方向が6.48mである。東西方向は不明だが、主柱穴が各壁から等距離に配置されたとすれば6.30mに復元できる。覆土の状態 第5・第6層で、炭化物と焼土を少量ずつ含む。東壁際中央付近には炭化材がまとまっていることなどから、上層は焼失したものと思われる。壁 残存壁高は20～28cmで、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。掘方・貼床 なし。柱穴 主柱穴とみられるものが2本(P1・P2)ある。P1は径31×28cm、深さ21cm、P2は径31×30cm、深さ28cm、P1・P2間の柱間寸法は3.50mである。P2は黒褐色土を覆土としており、柱痕は確認できない。壁溝 なし。火処 P1・P2間の中央やや南、北壁から1.5mほどの位置に床面が赤変する部分があり、処と考えられる。径30cmほどのほぼ円形に赤変範囲が確認できる地床が、掘り込みの有無は確認できていない。貯蔵穴 南東隅にある。平面形はやや不整な隅丸方形で、規模は112×110cm、深さは床面から17cmである。覆土は炭化物を多く含む黒褐色土で、中位に厚さ数cmの白色粘土層がある。範囲は90×50cmほどで東壁際から貯蔵穴内に落ち込むように堆積しており、東端は床面付近の高さだが、貯蔵穴中央付近では底面直上に達する。遺物 床面付近ないし床面からやや浮いた位置で住居跡内各所から出土するが、貯蔵穴西側付近にややまとまる。遺物量は少なく、器種としては大形壺主体が高環が多い。甕、器台、鉢は僅かである。前期系統の甕はなく、小形丸底鉢もない。鉢は完形、平底で口縁-体部がハの字に開く1個体(1)のほか瓶のような厚手の口縁-体部片1個体がある。器台は3孔を有する脚部上半片1個体、中形壺は口縁部短く丸く外反するもの1個体、内外面赤彩の破片1点、凹み底1点、頸部片1点である。高環は坏部小さく有稜で、脚は棒状ないし柱状であり、坏部のみ2個体(3)、坏部小さく有稜で脚短く中実棒状で下半丸く外反するもの1個体(2)とこれとよく似た脚部片1個体、脚部上半のみ中実棒状で下半屈曲し大きく開くもの1個体、脚部棒状で上半中実、下に向けやや太くなり下半屈曲しハの字に開くもの1個体(4)がある。大形壺は口縁部大きくハの字に開き上端つまみ上げて外面が面となるもの1個体(5)、二重口縁1個体、厚手で大形の折返し口縁1個体がある。甕は厚手な甕片で突出する平底のものが1個体あるほか、ハケ甕片が僅かにある。単口縁破片は1点である。完形土製紡錘車は1個体(6)ある。本遺構の年代は10期と考えられる。

## S1045 (第5・67図、第5表、図版六三・一一八)

位置 II区調査区、Bオ-10-18・23・24グリッドに位置する。西にS1046、東にSX043が近接してあるほか、南東2mにSX044、北2mにS1050がそれぞれある。重複なし。平面形 東西方向が長い長方形で、南北方向の中軸線はN-23°-Wである。S1046とは南辺がほぼ同一線上に揃っており、それぞれを意識して構築している可能性がある。規模 東西方向が3.11m、南北方向が2.82mである。覆土の状態 第1・第2層で、第2層は焼土と炭化物を含む。炭化材の出土量は多く、上層が焼失した結果と思われる。木材の炭化材は、床面直上ないし床面からやや浮いた状態で住居跡全体から多数出土する。上層に使用された木材が炭化したものとみられるが、方向は様々であり、使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は8-25cmで、平面的に掘り下げた部分では10cm程度、土層が確認できるグリッドベルト部分で21～25cmの高さを確認できる。床面から壁面へは丸みを持ち、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 住居跡中央付近がやや高く壁際が低い傾向があるが、おおむね平坦である。床面直上では、住居跡内各所で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた窠状の敷物の可能性があろう。中央から北壁、北東隅付近が最も顕著で、床面から壁へと続いている様子が認められる。壁から床面へと切れ目なく敷物を敷いていた痕跡であろうか。掘方・貼床 なし。柱穴 なし。壁溝 なし。火処 なし。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は円形で、規模は50×44cm、深さは床面から18cmである。覆土は黒褐色土で、炭化物を含む。遺物 住居跡内各所から出土し、南東隅、北西隅では少ない。床面から浮くものが目立つが、北壁際の遺物は床面や壁面に接して出土する傾向がある。遺物は少なく、器種は中形壺、高環、大形壺、甕のみである。高環は脚下半片1点で、屈曲して開くタイプである。中形壺は小形で薄手な下ぶくれの胴部を持つ単口縁のもの1個体(1)、ほぼ完形の埴形で凹み底(2)のほか、口縁部1個体、平底1個体である。大形壺は伊勢型の様相を持つ破片1個体(3)のほか、胴部片が僅かに出土する。甕はやや小形で前期系統の平底、単口縁のハケ甕1個体(4)、のほか、S字口縁部片1点、台部片1点である。ミニチュアはほぼ完形の鉢形、平底のもの1個体(5)である。本遺構の年代は10期と考えられる。

## S1046 (第6・67～69図、第6表、図版一一八・一一九・一二二)

位置 II区調査区、Bオ-10-17・18・21・22・23グリッドに位置する。東にS1045が近接してあるほか、南3.5mにS1039、北東4mにS1050、北3mにSX051がそれぞれある。重複なし。平面形 南辺が狭い方形で、南北方向の中軸線はN-20°-Wである。S1045とは南辺がほぼ同一線上に揃っており、それぞれを意識して構築している可能性がある。規模 東西方向が5.37m、南北方向が5.42mである。南辺の長さは4.60mほどであり、北辺より南辺が狭くなっている。覆土の状態 第2～第4層で、第2層は焼土と炭化物を、第3層は白色粘土を多く含む。炭化材は北半中央及び西隅付近に多い。上層に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 平面的に掘り下げた部分の残存壁高は10cm程度で、土層が確認できるグリッドベルト部分では42～46cmある。第1層が基本土層Ⅳb層だとすると、残存壁高は22-28cmとなる。床面から壁面へは急に立ち上がっており、壁はやや外傾して直線的である。床面 湧水のため確認できない部分が多いが、おおむね平坦とみられる。住居跡内中央北寄り及び西寄りでは、床面直上ないしやや浮いた状態で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた窠状の敷物の可能性があろう。掘方・貼床 湧水により確認できなかったため不明である。柱穴 湧水により確認できなかったため不明である。壁溝 湧水により確認できなかったため不明である。火処 湧水により確認できなかったため不明である。貯蔵穴 湧水により確認できなかったため不明である。

め不明である。遺物 遺物は第1・第2層中から多く出土し、床面付近に少ない。平面的には南東隅、北西隅を除く住居跡全体から出土しており、中央南東寄りに集中する。遺物は多く、鉢、小形壺、中形壺、高坏、甕、大形壺、甕、ミニチュア、砥石、浮子からなり、内斜口縁地状の鉢がある。鉢は小形丸底形2個体(1・2)、精製かつ大形で凹み底の小形丸底形1個体(6)、半球状で底部小さく凹む1個体(3)、半球状で突出する丸底1個体(4)、平底で須恵器器攪攪環状に口縁部直立するもの1個体(5)、内斜口縁状2個体(7)である。小形壺1個体(8)、中形壺は短い口縁部のもの1個体(9)、高坏は小さく有稜の坏部が2個体あり、うち1個体は精製(10)である。半球状の坏部は2個体(11)あり、中空柱状の脚部1個体(12)がある。甕は底部1孔で折返し口縁のもの1個体(13)があるほか、破片も僅かに出土する。大形壺では、超大形で単口縁が1個体、大形は6個体(14・15・16・17)あり、このうち赤彩で二重口縁が1個体ある。甕はS字甕が2個体(18)、前期系統の薄手でハケのちケズリの平底甕は2個体(21)、前期系統の小形甕は2個体(20)、台部は3個体出土する。中期の甕に多い厚手の甕は4個体(22)、中期系の厚手の小形甕は1個体(19)ある。ミニチュアは鉢形2個体(23・24)、壺形1個体(25)である。砥石1点(26)、浮子1点(27)も出土する。本遺構の年代は10期末とするが、中期初頭(TK73段階)への中間的な様相とも考えられる。

#### S1050 (第6・69図、第7表、図版六四)

位置 II区調査区、Bオ-15-3・4・8・9・13・14グリッドに位置する。南2mにS1045、西2mにSX051、南西4mにS1046、北西5mにS1054、北5mにS1053がそれぞれある。重複 SX052と遺物出土範囲の一部が重複する。SX052の遺物が出土する高さが本住居跡の遺構確認面付近であることから、SX052より古い可能性が高い。平面形 南辺が狭い方形で、南北方向の中軸線はN-20°-Wである。S1045とは南辺がほぼ同一線上に揃っており、それぞれを意識して構築している可能性がある。規模 東西方向が5.22m、南北方向が5.58mである。南辺の長さ4.50mほどであり、北辺より南辺が狭い。覆土の状態 第2・第3層とともに焼土と炭化物を含み、第2層では焼土と炭化物の一部が薄い層状を呈する。壁際では床面から5cm程度浮いた状態で焼土が確認できており、上屋は焼失したものとみられる。覆土上層にはIVb層に相当する第1層が堆積する。壁 残存壁高は18～22cmであり、壁はやや傾斜して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。住居跡内中央付近から北壁では、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた筵状の敷物の可能性がであろう。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 住居跡中央北寄りて25×20cmの楕円形に床面が赤変する部分があり、ここが火と考えられる。地床とみられ、掘り込みの有無は確認できない。貯蔵穴 南東隅にある。遺物 遺物は住居跡全体にあり、壁際の遺物は高く、中央付近は床面付近から出土する傾向がある。完形に近い台付甕は北西部の床面直上から、器台は南寄りの床面よりやや浮いた位置からそれぞれ出土する。遺物は多めで、甕主体に器台、鉢、中形壺、高坏、大形壺がある。器台はX字状で脚部3孔のもの1個体(2)、受部二重口縁状で脚部3孔のもの1個体(1)である。鉢は小形丸底形1個体(3)、広口で二重口縁状のもの2個体(5)、ほか広口で小形丸底形1個体、広口で内斜口縁状1個体(4)、凹み底で下ぶくれの平たい鉢1個体(6)、小形丸底で長い口縁部のもの1個体である。中形壺は大きな平底底部片1点のほか、直立する口縁部片、球胴部片などである。高坏は小さい有稜の坏部1個体、脚部中空柱状でエンタシス状に中央膨らみ下半屈曲して開く、内面粗積み痕あるもの1個体のほかは小破片である。大形壺は平底底部片の他胴部片が僅かに出土する。甕は極めて粗いハケで調整される単口縁台付甕1個体(7)、S字甕1個体(8)、口縁部S字状で上半直立する北陸系ともみられる甕1個体、

突出する平底1個体、平底1個体、台部は底部内面下端粘土折返しあり、底部内外面砂貼付のもの5個体がある。なお、住居跡南東部の高い位置から中期の半球状の埴が出土する。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S1053 (第7・69図、第8表、図版六四)

位置 II区調査区、Bオ-15-18・19・23・24グリッドに位置する。東1.5mにSX049、南西4mにS1054、南5mにS1050・SX052がそれぞれある。重複 SX057と遺物出土範囲が重複する。IVb層を挟んでSX057の下層に位置しており、SX057より古い。遺構内の附属施設はほとんどなく、遺物も少ない。竪穴住居跡ではない可能性もあろうか。平面形 北西辺と北東辺が狭い不整形で、南北方向の中軸線はN-54°-Wである。規模 南西-北東方向が4.46m、北西-南東方向が4.45mである。北西辺は4.00m、北東辺は3.80mほど短い。覆土の状態 第4層で、炭化物と焼土を含む。IVb層に相当する第3層は本住居跡内に入り込むように湾曲しており、覆土の一部と捉えることもできる。壁 残存壁高は10～18cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 平坦である。掘方・貼床 なし。柱穴 なし。壁溝 なし。

火処 なし。貯蔵穴 なし。遺物 個別に取り上げた遺物はない。写真では覆土上層で多数の遺物が出土しているように見えるが、これらはSX057の遺物である。遺物は少なく、裏主体に高坏が少し混じる。小形壺、中形壺、大形壺は僅かである。鉢は内斜口縁状の口縁-体部片1点のみ、高坏は中空柱状脚部片2点、中実棒状脚部片1点のほか僅かな破片のみである。小形壺は球胴の胴部1個体、凹み底1個体、中形壺は凹み底1個体、底部外面まで赤彩の壺底部1個体のほか胴部片僅か、大形壺は伊勢型の様相を持つ口縁部片1点、突出する平底2個体、凹み底1個体である。裏はS字裏はなく薄手の単口縁ばかり6個体+α(1)あり、台部は3個体、平底は3個体で中期系の厚手な裏は見当たらない。須恵器裏片が1点混入する。本遺構の年代は10期くらいと考えられる。

#### S1054 (第7・69図、第9表、図版六四・六五・一一九)

位置 II区調査区、Bオ-15-11・12・16・17グリッドに位置する。南東2.5mにSX052、南西2.5mにSX055、北東4mにS1053、南東5mにS1050、西7mにS1090がそれぞれある。重複 なし。平面形 方形で、北辺の隅は丸みを持つ。南北方向の中軸線はN-26°-Wである。規模 東西方向が4.38m、南北方向が4.24mである。覆土の状態 第5層で、炭化物と焼土を含むほか、地山の一部である黄白色砂質粘土ブロックが部分的に認められる。焼土は壁際の床面付近から多く出土する。炭化材は、主に住居跡北半の壁際において多数出土している。材は径10cm以下と細く、向きは壁と直行する。床面からはやや浮いていて、壁際が高く、住居跡の中央に向かうほど低くなっている。住居跡廃棄後一定期間経過後に上層が消失したものと考えられ、炭化材の多くはそのあり方から垂木の可能性が高い。壁 残存壁高は16～25cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。壁際を中心に、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が広く面的に確認されている。床面に敷いた籐状の敷物の可能性があろう。掘方・貼床 不明である。壁際が溝状に深く掘られて貼床されている可能性がある。

柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1～P4)ある。P1は径27×25cm、深さ20cm、P2は径32×30cm、深さ44cm、P3は径27×26cm、深さ13cm、P4は径44×38cm、深さ30cmで深さは一定せず、P3は最も浅い。柱間寸法は、P1・P2間が2.08m、P3・P4間が1.84m、P3・P1間が2.17m、P4・P2間が2.26mで、P3がやや東にずれた配置となっている。4本とも覆土は黒褐色土で類似しており、柱痕は確認できない。壁溝 なし。火処 住居跡中央北西寄りに床面が赤変する部分があり、ここが炉と考えられる。平面楕円形の地床とみられ、掘り込みは確認できない。規模は37×27cmである。貯蔵



穴 南西隅にある。平面形は不整な隅丸方形で、規模は93×86cm、深さは床面から16cmである。貯蔵穴内はビット状にさらに一段低くなっており、掘り込みの規模は50×42cm、深さは床面下41cmである。覆土は炭化物を含む黒褐色土である。遺物 遺物は壁際に多く、床面直上ないし床面からやや浮いた状態で出土する。北西隅からは完形の壺1点が床面直上から横位の状態で出土する。遺物は僅かで、甕主体に中形壺、高環、大形壺、鉢がある。鉢は精製の小形丸底で薄手だがミガキを施さないもの1個体(1)が出土する。中形壺は完形のもの1個体(2)のほか、直立気味の口縁部片1点がある。高環は中空柱状脚部片1点、環部片2点のみ、大形壺は口径大きく外面ケズリ、内面赤彩の口縁部片がある。大形鉢の可能性もあろうか。甕はハケ甕主体であり、形状の前れたS字甕2個体、台部1個体がある。本遺構の年代は10期と考えるが、鉢などからやや古相を示すものとみたい。

## S I 0 6 8 (第9・69図、第10表)

位置 II区調査区、Bオ-19-14・19グリッドに位置する。西にSI069、南にSI070・071A・071Bが近接してであるとみられるほか、北東2mにSX091がある。重複 カマド煙道部分のみを確認しており、住居跡の規模・形状は把握できなかった。SI069・070・071A・071Bそれぞれと重複する可能性があるが、前述の理由により重複の有無及び新旧関係等は不明である。基本土層IV a層を掘り込んで構築される。平面形 不明である。中軸線は、カマド煙道の方向を参考にすると真北からやや西に傾くものとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。残存状態は良くない。煙道部は地山を溝状に掘り込んで作られており、現存長は53cm、現存幅は47cm、深さは14cmである。底面は平坦で、先端に向かって緩やかに段差なく高くなり確認面に至る。左右の壁面は外傾しており、残存する煙道中央から左側の壁面にかけては被熱による硬化変色が著しい。覆土は第1～第3層で、焼土を主体とする第2層は天井内面の崩落、第3層は崩落前の流入土であろう。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡の規模が不明なため確実ではないが、Bオ-19-14グリッドから出土する遺物は本住居跡に伴う可能性が高いと言えよう。遺物はごく僅かで、須恵器環、須恵器高台付環、須恵器甕、武蔵型甕からなる。須恵器環1個体(2)、須恵器高台付環1個体(3)、土師器ロクロ成形環1個体(1)、須恵器甕片は内面ナデ、外面無文道具痕のもの1点(4)、武蔵型甕は口縁部コの字状のもの1個体、小さい平底の底部片2個体がある。本遺構の年代は9世紀前半と考えられる。

## S I 0 6 9 (第9・69図、第11表)

位置 II区調査区、Bオ-19-13グリッドに位置する。東にSI068、南にSI070・071A・071B、南西にSX072が近接してであるとみられるほか、北西4mにSI079がある。重複 カマドと北壁の一部のみを確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかった。SI069・070・071A・071B、SX072それぞれと重複する可能性があるが、前述の理由により重複の有無及び新旧関係等は不明である。平面形 不明である。中軸線は、カマドの方向を参考にするとSI068同様真北からやや西に傾くものとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。天井部は失われているが、袖部は残存している。煙道部は壁を18cm「U」字状に掘り込んで作られており、カマドの規模は108×64cmである。袖部は北壁から35-45cmの長さを確認できる。火床面は床面から僅かに低くなっていて、火床面から煙道へはなだらかに高くなったのち角度をやや急にして確認面に至る。焚口に相当するカマド前

面では、径25cmほどの範囲が変色している。覆土は第1～第4層で、焼土を含む第1層は天井部内面の崩落によるものだろう。第2～第4層はそれぞれ灰や焼土、炭化材を僅かに含むもので、天井崩落前の流入土とみられる。貯蔵穴 不明である。遺物 カマド内及び周辺で土器片が出土しており、これらが本住居跡に伴うと考えられる。床面直上のもはなく、すべて床面から浮いた状態である。遺物は僅かで、須恵器環、土師器高台付環、須恵器甕、武蔵型甕などである。須恵器環1個体(1)、土師器ロクロ成形高台付環1個体(2)、須恵器甕は内面深い当て具痕のもの2点(3・4)、武蔵型甕は破片ばかり、管状土錘1個体(5)がある。須恵器甕は住居跡より古いものの混入か。本遺構の年代は9世紀前半と考えられる。

## S1070 (第9・70図、第12表)

位置 II区調査区、Bオ-19-9グリッドに位置する。南東にS1073、北西にS1069、北にS1068がそれぞれ近接してであるとみられるほか、南東3mにS1095がある。重複 カマドと東壁の一部を確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかった。S1071Bと重複するとみられ、調査時の状況からS1071Bを切ると考えられる。S1068・069・071Aとも重複する可能性があるが、本住居跡も含め各住居跡の規模・形状が不明なため重複の有無及び新旧関係等は不明である。平面形 不明である。中軸線は、カマドの方向を参考にすると真北からやや東に傾くものとみられる。規模 不明である。S1071Bの東壁際にあるカマド周辺では、本住居跡のもののみみられる焼土が広く堆積しているのが確認できているため、一辺3m以上の規模はあったと考えられる。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが東壁際に位置するとみられる。天井部は失われているが、袖部は残存している。煙道部は壁を25cm「U」字状に掘り込んで作られており、カマドの規模は108×78cmである。袖部は灰色粘土と黒色土の混土層(第4層)で作られており、東壁から50cm程度の長さを確認できる。火床面は床面から僅かに高くなっていて、火床面から煙道へは平坦に続いたのち緩やかに立ち上がって確認面に至る。覆土は第1～第3層で、焼土を含む第1・第2層は天井部内面の崩落によるものだろう。第3層は炭化材を僅かに含むもので、天井崩落前の流入土とみられる。貯蔵穴 不明である。遺物 カマド周辺で土器片が出土しており、これらが本住居跡に伴うと考えられる。遺物はごく僅かであり、内面黒色処理の土師器環口縁部片1個体、須恵器環は底部糸切り離し後無調整の底部片1点、傾きの強い口縁部片1点、猿投か尾張東部周辺産とみられる緑釉陶器口縁部片1点(1)、須恵器甕類底部片1個体(2)、武蔵型甕口縁部片2個体(3・4)、須恵器甕胴部片1点(5)などである。須恵器甕・甕は住居跡より古いものの混入か。本遺構の年代は9世紀代後半と考えられる。

## S1071A (第8・70図、第13表)

位置 II区調査区、Bオ-19-8・13グリッドに位置する。南にS1073、西にSX072、北にS1069、北東にS1068がそれぞれ近接してであるとみられる。重複 カマド煙道と袖部の一部を確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかった。S1071Bと重複し、S1071Bを切る。本住居跡の範囲はS1068・069・070とも重複する可能性があるが、住居跡の規模・形状を把握できていないため重複の有無及び新旧関係等は不明である。平面形 不明である。床面の高さはS1071Bとほぼ同一とみられ、かつS1071Bの壁に失われた部分が見当たらないことからすると、その規模は一辺3m以下の小規模なものだったと推測できる。中軸線は、カマド煙道の方向を参考にすると真北からやや西に傾くとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。カマド付近とS1071B南半の床面付近には焼土が広く堆積しているが、これらのうち少なくともカマド周辺のものについては本住居跡に伴う可能性が高い。壁 不明である。床面 不明である。カマ

下火床面の状況から、高さはSIO71Bの床面とほぼ同じ高さであった可能性がある。掘方・貼床 不明である。

柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。天井部が失われており、袖部は残存しているが大半は調査時に削りついでしまっている。煙道部は壁を43cm「U」字状に掘り込んで作られており、残存するカマドの規模は74×48cmである。袖部は灰色粘土と黒色土の混土層(第4層)で作られている。火床面は床面とほぼ同じ高さで推定され、火床面から煙道へは平坦に続いたの丸みを持って立ち上がり、途中で角度を緩やかに変えて確認面に至る。覆土は第1～第3層で第1・第2層は焼土を含み、第3層は黒色土で炭化材を僅かに含む。焼土を含む第1・第2層は天井部の崩落によるもの、第3層は天井崩落前の堆積土であろう。貯蔵穴 不明である。遺物 SIO71Bで出土する遺物のうち、カマドを含むSIO71B東辺付近以外出土のものは本住居跡に伴う可能性が高い。遺物はごく僅かで、須恵器環、須恵器裏、武蔵型裏、土師器ロクロ環、土鍾などのみである。須恵器環は4個体+αがあり、底部糸切り離し後無調整2個体、糸切り後ヘラズリが2個体(3)あり、須恵器裏片は3点(1・2)、武蔵型裏胴部片は10点ほど、土師器ロクロ成形環は内面黒色処理4点のうち1点は底部片を円盤状に加工(4)、黒色処理されないもの1点、完形の土鍾2個体(5・6)がある。本遺構の年代は10世紀前半と考えられる。

#### SIO71B (第8図)

位置 II区調査区、Bオ-19・8・9・13・14グリッドに位置する。南にSIO73、西にSX072、北にSIO69、北東にSIO68がそれぞれ近接してるとみられる。重複 SIO71Aに切られ、北辺の一部が失われている。SIO71Aの規模・形状が不明なためそれ以外の切られる範囲は不明だが、東辺付近を除く大部分が床面付近まで切られている可能性がある。住居跡の規模・形状が不明なSIO70とも重複するとみられ、調査時の状況からSIO70に切られると考えられる。SIO68・069とも重複する可能性があるが、住居跡の規模・形状を把握できていないため重複の有無及び新旧関係等は不明である。平面形 北側の両側部が丸みを持つ長方形で、南辺より北辺が短い。南北方向の中軸線はN-24°-Wである。規模 東西方向が3.22m、南北方向が2.68mである。覆土の状態 不明である。北壁際と住居跡南壁際の床面付近には焼土が広く堆積するが、これらのうち少なくとも北壁際のものについてはSIO71Aに伴う可能性が高い。なお、東壁際のカマド上面にはSIO70のものともみられる焼土が広く堆積していた。壁 残存壁高は、グリッドのベルトがかかる北壁の一部では16cmほどあるが、それ以外は5cm程度である。壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。

火処 東壁際南寄りにカマドがある。天井部が失われており、袖部がころうじて残存している。煙道部は壁を46cm隅丸形状に掘り込んで作られており、カマドの規模は78×58cmである。袖部は黄灰色粘土と灰色粘土、径5mm程度の焼土の混土層(第5層)で作られており、東壁から10cm程度の長さを確認できる。火床面は床面から僅かに低くなっていて、火床面から煙道へはさらに低くなったの先端で外傾して立ち上がり確認面に至る。覆土は第1～第4層で、第1層は流入土、粘土と焼土を含む第2層は天井部の崩落によるものだろう。第3層は灰を含む天井崩落前の堆積土とみられる。第4層は径10cmほどの黄灰色粘土塊で崩落した天井の一部ともみられるが、支脚を支えた粘土の可能性もあろう。カマド前面では、120×55cmほどの広い範囲に炭化材の堆積が確認できるほか、焚口に相当するとみられる部分の床面が径12cmほどの範囲で赤変している。貯蔵穴 不明である。遺物 主に住居跡南半から出土しているが、これらはSIO71Aに伴う遺物の可能性が高い。少なくともカマド周辺のものについては本住居跡に伴うと考えられる。遺物は須恵器環片、武蔵型裏片などごく僅かである。本遺構の年代は9世紀代と考えられる。

## S1073 (第9・70図、第14表)

位置 II区調査区、Bオ-19-3グリッドに位置する。南東にSX075、南西にS1074、北にS1070-071A-071Bがそれぞれ近接してあるとみられるほか、北西3mにSX072がある。重複 カマド部分のみを確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかつた。他遺構との重複はないとみられる。平面形 不明である。中軸線は、カマドの方向を参考にするると真北からやや東に傾くものとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。天井部は失われているが、袖部は残存している。煙道部は壁を29cm「U」字状に掘り込んで作られており、カマドの規模は120×78cmである。袖部は青灰色砂質粘土と黒色土の混土層(第5層)で作られており、東壁から42-50cm程度の長さを確認できる。火床面は床面と同じ高さであり、火床面から煙道へと平坦に続く。住居跡東壁に相当する付近で一旦短く立ち上がったあとは緩やかな傾斜となり、確認面に至る。覆土は第1-第4層で、焼土化した粘土を含む第1層は天井部内面の崩落だろう。第2層は天井粘土の崩落及び流入土、第3・第4層は天井崩落前の流入土で、灰を含む。焚口付近の床面は径25cmほどの円形に変異していて、このうち南端の一部が硬化している。貯蔵穴 不明である。遺物 カマド周辺で遺物が出土しており、これらが本住居跡に伴うものと考えられる。遺物はごく僅かで、須恵器環、須恵器甕、武蔵型甕片、内面黒色処理の土師器環などである。須恵器環は底部糸切り離し後無調整のもの1個体(2)、口縁部片1個体(1)のほか破片僅かがある。須恵器甕は1個体(3)、内面黒色処理の土師器環片1点、土鍾1点(4)である。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

## S1074 (第9・70図、第15表、図版六五・一一九)

位置 II区調査区、Bオ-14-22、Bオ-19-2グリッドに位置する。西にSX077、北東にS1073がそれぞれ近接してあるとみられる。重複 カマド部分のみを確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかつた。SX077の遺物出土範囲と重複する可能性があるが、前述の理由により重複の有無及び新旧関係等は遺構からは確認できない。平面形 不明である。中軸線は、カマド煙道の方向のみを参考にするると真北からやや東に傾くものとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。確認できたのはカマドの煙道部分のみであるため、通常住居内にある粘土構築部分や火床面などは不明である。煙道部は長さ37cm、幅52cmあり、「U」字状を呈する。煙道底面は平坦で、先端で緩やかに立ち上がり確認面に至る。火床面や床面は、煙道底面とほぼ同じ高さであった可能性がある。覆土は第1・第2層で、焼土のほか粘土や灰を含む。第3層は粘土主体であり、煙道壁面に貼られた粘土の可能性もある。貯蔵穴 不明である。遺物 カマド前面で土師器片が多数出土しており、これらが本住居跡に伴うものと考えられる。遺物は少ない。非ロクロ成形の土師器環が多く、非ロクロ高台付土師器環、武蔵型甕も出土する。球胴甕や須恵器甕も僅かに認められる。非ロクロ成形の土師器環は5個体あり、灯明転用で完形のもの1個体(1)あり、これと同形同大のものが他に1個体ある。底部やや上げ底状のもの1個体(2)、丁寧な作りで口縁部上端や外に開き外面ケズリのもの1個体もある。非ロクロ高台付土師器環はほぼ同形同大の2個体(3)である。須恵器甕胴部片は2個体がある。武蔵型甕は口縁部口の字状で破片は多い。球胴甕は1個体(4)である。本遺構の年代は10世紀代と考えられる。

## S1078 (第8・70図、第16表)

位置 II区調査区、Bオ-14-19グリッドに位置する。北にSX075が近接してあるほか、北東3mにSX076、北西7mにS1074がそれぞれある。重複 カマド部分のみを確認しており、住居跡の規模・形状は把握できなかった。S1090内北東部に位置しており、S1090を切る。平面形 不明である。中軸線は、カマドの方向を参考にすると真北からやや東に傾くものとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。天井部は失われているが、袖部は残存している。上面には厚さ1～5cmの焼土と粘土を多量に含む層があって当初は本遺構の堆積物と考えていたが、遺構外にも続いていることなどから、堅穴住居跡など本住居跡よりも新しい遺構の堆積物と判断した。SX075に関連する堆積物の可能性もあろう。煙道部は壁を僅かに「U」字状に掘り込んで作られているとみられ、カマドの規模は98×62cmである。袖部は灰黒褐色粘土と黒色土の混土層(第2層)で作られており、北壁からの長さは55cm程度とみられる。火床面から煙道へは平坦に続いており、先端で外傾して立ち上がり確認に至る。覆土は焼土や炭化物を僅かに含む第1層であり、流入土と考えられる。貯蔵穴 不明である。遺物 S1090北東部の遺物のうち、カマドの火床面よりも高い位置から出土するものは本住居跡に伴う可能性がある。遺物は僅かで、武蔵型甕主体に須恵器坏、須恵器高台付坏、須恵器裏片、内面黒色処理の土師器坏であり、古墳前期の遺物が混入する。須恵器坏は2個体あり、口径14cm前後で焼成良好なもの1個体、焼成不良1個体がある。須恵器高台付坏は高台部径9cmのもの1個体、内面黒色処理の土師器坏は3個体で、うち底部2/3の個体(1)、武蔵型甕はコの字状の口縁部1個体、台部1個体、平底1個体、須恵器裏は内面ナデの破片、管状土鍾は1個体(2)である。混入する前期遺物は鉢、大形壺、甕など僅かで、荒い作りで甕のような胎土の小形丸底鉢1個体、赤彩鉢口縁部片1個体、大形壺胴部片僅か、単口縁ハケ甕1個体である。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

## S1080 (第10・70・71図、第17表、図版六五・一一九)

位置 II区調査区、Bオ-14-3・4・5・8・9・10グリッドに位置する。南西にS1081、北にS1090が近接してあるほか、南東1.5mにSX056がある。重複 なし。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-20°-Wである。規模 東西方向が5.45m、南北方向が5.57mである。覆土の状態 第5～第7層である。第4層は遺物を多量に含むが、土層の堆積は遺構外へと続くため覆土ではなく遺跡全体に堆積するIVb層と考えた。よって第4層の遺物は、基本的には混入扱いとなる。IVb層堆積時に住居跡があった場所がくぼんでいるなど、遺物が大量に混入、流入しやす状況があったのだろうか。とはいえ、その中に本住居跡の遺物が含まれる可能性は否定できない。焼土と炭化物は壁際に堆積する第6層に多く、第5層にも部分的に含まれる。炭化材は住居跡中央及び南西隅に多く、床面直上ないし床面からやや浮いた状態で出土する。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は10-12cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。北西部及び東部の一部で、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた筵状の敷物の可能性があろう。掘方・貼床 不明である。柱穴 北東部に柱穴が1本(P1)ある。P1は径28×20cm、深さ43cmである。黒色土を覆土としており、柱痕は確認できない。壁溝 不明である。火処 中央北寄りに床面が赤変する部分があり、ここが炉と考えられる。平面楕円形の地床炉とみられ、掘り込みは確認できない。規模は58×46cmである。貯蔵穴 南西隅にある。平面形はやや不整な円形で、規模は86×82cm、深さは床面から27cmである。貯蔵穴内はビット状にさらに一段低く

なっており、掘り込みの規模は54×50cm、深さは床面下50cmである。覆土は粘土と炭化物を含む黒褐色土である。遺物 住居跡内各所から出土するが、壁際にはやや少ない傾向がある。第4層の遺物は南西隅に集中する。前期遺物が主体で、中期の遺物が多数混入する。前期の遺物は多めで、甕、大形壺、高環が多く、鉢も一定量ある。甕、ミニチュアは少ない。鉢は体部が扁平な小形丸底形1個体(2)があるほか、破片で同様なものが1個体ある。二重口縁で口径広いものは2個体(4)、半球状で深身の凹み底を持つもの1個体(1)、浅い半球状のもの1個体、口径大きく古代の内湾環のような形状で凹み底、内外面赤彩のもの1個体(3)、このほか平底2個体分、凹み底2個体うち赤彩1個体(中形壺の可能性もあり)がある。高環は脚部ハの字で3孔のもの1個体(5)、脚部ハの字で部上端開くものは3個体(6・7)、中実柱状の脚部は2個体(8)、脚部中実柱状で内面きれいにナデ、下半で2段に開くもの1個体、脚部中実柱状で下半で大きく開くもの1個体、脚部棒状で部小さく有稜、脚部下2段に開くもの2個体(9・10)がある。甕は鉢形で底部1孔のもの1個体(13)、丸みを持つ底部で1孔、底部突出するもの1個体(12)である。大形壺は頸部細くラッパ状に開口縁部が3個体あり、うち赤彩1個体(14)、ハの字に長い口縁部2個体、ハの字に長く開口縁部で上半段あり1個体、二重口縁1個体(15)、突出する平底3個体がある。甕はS字甕が3個体(16)、形状の崩れたS字で口縁下半厚く上半薄く内面受口状に段あり1個体(17)、外面ハケのちナデ・ケズリが多く入る単口縁5個体(18)、台部13個体、平底4個体である。ミニチュアは裏形2点、完形の鉢形1個体(19)である。中期遺物は甕主体に高環、内斜口縁境などがあり、個体数は多い。甕底部は10個体分くらいある。このうち高環1個体(11)を図示した。本遺構の年代は9期と考えられ、混入する中期土器は中期前葉～中葉(TK73-216段階)である。

#### S1081 (第7・71図、第18表、図版一一九・一二二)

位置 II区調査区、Bオ-9-23、Bオ-14-2・3・7・8グリッドに位置する。北東にS1080が近接してあるほか、北西6mにS1083がある。重複なし。遺構南西部は確認できていない。平面形 残存部分から方形と推定される。南北方向の中軸線はN-8°-Wである。規模 南北方向が5.44mである。東西方向は不明で、北辺は3.90m残存している。覆土の状態 第4層で、炭化物と粘土を含む。粘土は北東隅の壁際に顕著で、10cmほどの厚みを持って堆積する。炭化材は住居跡北東部に多い。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は23cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。

柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は少なく、中央付近にまとまる。北寄りの遺物の出土位置は床面に近く、南のものほど高い位置から出土する傾向がある。器種は甕主体に大形壺、鉢、ミニチュア、高環が混じるもので、器台は1点のみである。鉢は精製、内斜口縁境状で底部凹み底の完形の1個体(1)のほか赤彩小形丸底ともみられるもの1点、器台は脚部片1個体、高環は脚部中実柱状で下に向かって少し太くなり、部は大きく鋭い有稜のもの1個体(2)がある。高環は稀な形状であり系譜に関心が持たれる。このほか脚部中実柱状で下に向かって少しずつ開く、脚内面きれいにケズリのもの1個体がある。大形壺は口縁部やや長くハの字に開き、上端外面沈線状に凹みもの1個体(3)がある。甕は台付甕1個体(5)、単口縁で外面ハケ後ケズリのは1個体(4)がある。後者の土器は底部を乱雑に削り、台付甕を急速平底にしたようにも見える。前期から中期への過渡的な状況を示すものであろうか。このほか台部2個体がある。ミニチュアは鉢形で完形のもの1個体(6)である。管玉の未製品かともみられる円柱状の小形礫は1点(7)ある。本遺構の年代は10期末頃と考えられる。

## S1083 (第6・71図、第19表、図版六六)

位置 II区調査区、Bオ-13-15・20、Bオ-14-11・16グリッドに位置する。北西3mにS1085があるほか、東～南東6mにS1090-080-081がある。重複なし。南西隅は確認できていない。平面形 西辺が長く東辺が短いややびつな長方形で、南北方向の中軸線はN-5°-Wである。規模 東西方向が3.76m、南北方向が4.40mで、東辺は3.80mである。覆土の状態 第2～第3層で、第2は炭化物を、第3層は炭化物と焼土を含む。炭化材は住居跡全体から多く出土しており、中央では床面付近から、壁際では床面から浮いて出土する傾向がある。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は10-25cmであり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。南西部、南東隅、北東部の各所で、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた筵状の敷物の可能性があろう。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。

遺物 床面付近から出土する遺物は少ない。標高24.2-24.3mの高さから出土する古墳時代中期の遺物が住居跡中央付近及び東の住居跡外などにまとまっているが、これらは覆土外となる第1層(IVb層)に相当するとみられ、本住居跡とは直接関係しないと考える。本遺構に伴う遺物は僅かで、甕、大形壺、鉢、器台、中形壺などのみである。鉢は小形丸底のもの1個体(1)でほかに口縁破片が僅かにあるがすべて丁寧な作りである。器台は破片1点、中形壺は球胴のもの1個体(2)で凹み底1個体ほか胴破片僅か、大形壺は突出する平底2個体のほか胴破片僅か、甕は単口縁のハケ甕1個体(3)で平底1個体のほか胴破片僅かにある。本遺構の年代は10期と考えられる。

## S1085 (第6・71図、第20表、図版一一九)

位置 II区調査区、Bオ-13-19・20・24・25、Bオ-18-4・5グリッドに位置する。北にSX086が近接してあるほか、東2mにSX077、南東3mにS1083がそれぞれある。重複なし。平面形 方形で、西辺が東辺より短い。南北方向の中軸線はN-16°-Wである。規模 東西方向が4.32m、南北方向が4.45mで、西辺は4.00mほどである。覆土の状態 不明である。壁 残存壁高は8-16cmである。壁は短く外傾して立ち上がる。床面 地震による噴砂の痕跡が住居跡中央を細い溝状に南北に縦断する。これを境に東西で床面の様相が異なり、東半はほぼ平坦であるのに対し、西半は東へと傾く斜面となっている。本住居跡付近は特に地盤が軟弱であるため、地震の影響で住居跡西半が傾いてしまったものとみられる。住居跡中央から北西部を中心に、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた筵状の敷物の可能性があろう。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。

火処 住居跡中央北寄りに床面が赤変する部分があり、ここが炉と考えられる。平面不整形円形の地床炉とみられ、掘り込みは確認できない。規模は38×22cmである。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡中央および北壁際中央付近から出土しており、9世紀代の須恵器甕、内面黒色処理の土師器杯、武蔵型甕などが僅かに混入する。本遺構に伴う遺物は少なく、甕主体に鉢、脚付鉢、高杯、大形壺などのみである。鉢は小形丸底形数点、脚付鉢は薄手、精製で内斜口縁深身碗状の口縁-体部が脚部の上に乗るもの1個体(1)、高杯はハの字に開く脚部で下半大きく開き、内面きれいにケズリのもの1個体(2)のほか破片僅か、甕は外面ハケ主体の台付甕2個体(3・4)でS字はなく、単口縁の破片数点、台部2個体がある。本遺構の年代は9期と考えられる。

## S1090 (第8・71・72図、第21表、図版六六)

位置 II区調査区、Bオ-14-13・14・18・19グリッドに位置する。南にS1080、北にSX075が近接してあるほか、西6mにS1083がある。重複 住居跡北東部を中心にS1078と重複し、S1078に切られる。ただ、S1078はカマド部分のみを確認したもので住居跡の規模・形状を把握できていないため、重複状況の詳細は遺構からは確認できない。平面形 方形で、西辺が東辺より短い。南北方向の中軸線はN-0°である。規模 東西方向が4.92m、南北方向が5.10mで、西辺は4.15mほどである。覆土の状態 不明である。北壁際では焼土が多く堆積する。壁 残存壁高は14-20cmである。壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。住居跡北東部では、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた筵状の敷物の可能性がある。掘方・貼床 中央北東寄りに不整楕円形の土坑状の掘り込みがある。貼床されていたとみられることから床下土坑としたもので、土坑内からは土師器片が多数出土する。位置からするとがの可能性もあるか。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1-P4)ある。P1は径38cm、深さ34cm、P2は径47×40cm、深さ45cm、P3は径31×29cm、深さ15cm、P4は径37×34cm、深さ16cmで、北側は深く、南側は浅い。北東にあるP2が最も深くなるのは同じ4本主柱穴を持つS1054と同じ傾向である。柱間寸法は、P1・P2間が2.86m、P3・P4間が2.72m、P3・P1間が2.55m、P4・P2間が2.66mで、東西の間隔は広く、対して南北はやや狭い配置となっている。4本とも覆土や柱痕は不明である。P2内では、底面上18cmから土師器が出土する。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は楕円形で、周囲に浅く大きな掘り込みを持つ。全体の規模は108×89cmで、深い部分の規模は80×60cm、周囲の掘り込みの深さは床面から14cm、底面は床面から40cmである。覆土上面付近では土師器片が多数出土する。遺物 南東部の貯蔵穴内、北東部の床下土坑やP2内及びその周辺などから多く出土する。南西隅から北東隅で多く出土する遺物は標高24.3m以上と覆土より上層であり、本住居跡とは直接関係しない遺物と考える。さらに、それらのうち北東部から出土する遺物については重複するS1078に伴うと思われる。遺物は一定量あり、甕主体で大形甕、器台、鉢が混じる。中期にみられる厚手な甕が僅かに認められる。鉢は完形の小形丸底形1個体(1)、小形丸底でミガキ調整の精製の破片1個体、半球状の口縁部1個体、器台は脚部ハの字で有孔のもの1個体(2)、ハの字に開く脚部1個体であり棒状、柱状の脚部はない。大形甕は折返し口縁1個体(3)、ラッパ状に開く口縁部で二重口縁のように内面下半僅かに凹むもの1個体、口縁部ハの字に開き、上端で受口状に屈曲するもの1個体である。甕はS字2個体(4)、単口縁4個体(6)、口縁部丸く外反するもの1個体、口縁部外面丸く外反、内面くの字で上端内湾するもの1個体(5)であり、外面調整はハケのみのものとハケのチナデ、ケズリが多く入るものがある。台部は7個体のうち砂貼付2個体、底部内面下端折返し3個体である。本遺構の年代は9期と考えられる。

## S1095 (第9・72図、第22表)

位置 II区調査区、Bオ-19-5・10グリッドに位置する。北西3mにS1070があるほか、南にSX075・076がある。重複 調査時にはS1075とされていた遺構でカマド部分のみを確認しており、住居跡の規模・形状は把握できなかった。他遺構との重複はないとみられる。平面形 不明である。中軸線は、カマド煙道の方向のみを参考にするとほぼ真北を向くとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。確認できたのはカマドの煙道部分のみ



であるため、通常住居跡内にある粘土構築部分や火床面などは不明である。住居跡部分を掘り下げた際に粘土等は確認できなかったことから、廃棄時に粘土が除去されたか、あるいは粘土を使用せず構築された可能性がある。煙道部は長さ35cm、幅41cmあり、「U」字状を呈する。煙道底面は平坦で、丸みを持って掘り込まれたのち灰黒土色の第4層で埋め戻されて作られる。煙道先端は直線的に緩やかな傾斜で立ち上がり確認面に至る。覆土は第1～第3層で、焼土ブロックを含む第3層は煙道天井部の崩落とみられる。第2層に多く含まれる褐色の砂質土は天井構築土の可能性がある。貯蔵穴 不明である。遺物 カマド南側で土器片がまとまって出土するが、これらは遺構確認面と同じかやや上位からの出土であり、本住居跡に伴うとは考えにくい。遺物は僅かで、土師器ロクロ成形環、須恵器環、武蔵型甕であり、古墳前期の遺物が僅かに混入する。土師器ロクロ成形環は内面黒色処理のもの1個体(1)、須恵器環は6個体うち2個体は底部糸切り離し後無調整(2)で、糸切り離し後ナデかとみられるものは1個体ある。3個体は焼成不良で底部糸切り離し後無調整(3)、武蔵型甕は2個体くらい(4)である。本遺構の年代は9世紀前半と考えられる。

## 2. 土坑

Ⅱ区においては、ほぼⅣA層を確認面として遺構を確認している。確認面の標高は24.4m前後である。土層との関連からすると、これらの土坑は古墳時代後期以降の所産と考えられる。

### SK001 (第10図)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-12-8・9グリッドに位置する。南1.5mにSK002がある。重複なし。形状・規模 平面形は楕円形で、北西側が幅広く、南東側は狭い形となっている。中軸線はN-25°-Wである。規模は長径0.82m、短径0.58m、深さ0.28mで底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 覆土は緻密な灰褐色土(第1層)であり、自然堆積とみられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

### SK002 (第10図)

位置 Bカ-12-3・4・8・9グリッドに位置する。東4mにSK003が、北1.5mにSK001がある。重複なし。形状・規模 平面形は不整形円で、規模は長径0.84m、短径0.68m、深さ0.31mである。底面は丸く、なだらかに壁の立ち上がりへと続き外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

### SK003 (第10図)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-12-5グリッドに位置する。西4mにSK002がある。重複なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径0.40m、短径0.38m、深さ0.31mである。底面は平坦で東に傾斜しており、壁は直線的に急に立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

### SK004 (第10図)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-7-19・20グリッドに位置する。北8mにSK003が、南東6mにSK010がある。重複なし。形状・規模 平面形は不整形楕円形で、東辺は直線的になる。中軸線はN-9°-Wで、規模は長径1.18m、短径1.04m、深さ0.54mである。底面は平坦で東に傾斜しており、壁は下半では外傾するが、

上半では角度を急にして立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK005 (第10図)

位置 II区調査区、Bカ-6-15、Bカ-7-11グリッドに位置する。南にSK006が、南東にSK007がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径1.04m、短径1.00m、深さ0.42mである。底面は平坦でやや丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK006 (第10図)

位置 II区調査区、Bカ-6-15、Bカ-7-6・11グリッドに位置する。北にSK005が、北東にSK007がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、南東側が幅広く、北西側は狭い。中軸線はN-66°-Wで、規模は長径1.18m、短径0.98m、深さ0.54mである。底面は平坦でやや丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK007 (第10・72図、第23表、図版六六)

位置 II区調査区、Bカ-7-11グリッドに位置する。北にSK005が、北東にSK007がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、東西方向がやや長い。規模は長径1.74m、短径1.45m、深さ0.80mである。底面はほぼ平坦で、底面から壁へは丸みを持って繋がる。壁は確認面下30-50cmで角度が変化しており、下半はやや急、上半は緩やかな角度となっている。覆土の状態 第1-第4層で、第2・第4層は砂質粘土主体、第1・第3層は砂質粘土に明黒褐色土ブロックが多く混じる。白色土粒など含有物の観察からすると、明黒褐色土はIV層、砂質粘土はその前後の土層由来とみられる。各層はレンズ状に堆積しているが、ブロック状の粘土や土壌がみられることなどから人為堆積と考える。遺物 遺物はごく僅かで、第1層中から古墳時代前期9-10期の中形壺口縁-胸部上半片1個体(1)が出土するほか、外面平行タタキ、内面ナデの須恵器残片1点出土する。ともに混入とみられる。本遺構の年代は不明である。中世土抗や擾乱の可能性があろう。

## SK008 (第10図)

位置 II区調査区、Bカ-7-12グリッドに位置する。西3mにSK007が、東5mにSK009がある。重複 なし。形状・規模 平面形は隅丸長方形で、中軸線はN-68°-Eである。規模は長径1.36m、短径0.65m、深さ0.65mである。底面は緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は直線的にやや急に立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK009 (第10図)

位置 II区調査区、Bカ-7-14グリッドに位置する。南3.5mにSK011が、西5mにSK008がある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-27°-Wである。規模は長径0.91m、短径0.78m、深さ0.34mである。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは直線的であり、東側は垂直気味に、西側はそれよりやや緩やかに立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

SK010 (第11図、図版六六)

位置 II区調査区、Bカ-8-11グリッドに位置する。北西6mにSK004が、北東7mにSK019がそれぞれある。重複なし。形状・規模 平面形は方形に近い隅丸長方形で、中軸線はN-60°-Eである。規模は長径1.12m、短径0.88m、深さ0.56mである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的にやや急に立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

SK011 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-7-4・9グリッドに位置する。北3.5mにSK009が、南4mにSK015がある。重複なし。形状・規模 平面形は隅丸方形で、中軸線はN-21°-Wである。規模は長径0.83m、短径0.78m、深さ0.56mである。底面は緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 2層に分層できるが、詳細は不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

SK012 (第11・72図、第24表、図版六六)

位置 II区調査区、Bカ-8-9グリッドに位置する。周辺に遺構はなく、北西に12m離れてSK010がある。重複なし。形状・規模 平面形は楕円形で、南北両端がやや直線的になる。中軸線はN-21°-Wである。規模は長径1.10m、短径0.92m、深さ0.80mである。底面は北側が低く、南側は8cm程度高い面となっており、壁は直線的に外傾して立ち上がる。北端では壁の途中に段を持つ。覆土の状態 不明である。遺物 内瓦の内耳土器口縁-体部片1点(1)が出土する。本遺構の年代は中世と考えられる。

SK013 (第11図、図版六六)

位置 II区調査区、Bカ-2-21、Bカ-7-1グリッドに位置する。東にSK014が近接してある。重複なし。形状・規模 平面形は丸みの強い隅丸方形で、底面東側はさらに楕円形に一段低く掘り込まれる。南北方向の中軸線はN-32°-Wで、規模は長径1.65m、短径1.52m、最も低い部分の深さ0.86m、土坑西側及び南側の底面は丸みを持ち、壁は直線的に外傾して立ち上がる。楕円形の掘り込みは土坑底面を数cm掘り込んでおり、規模は長径0.94m、短径0.63mで底面は丸みを持ち、壁はなだらかに立ち上がる。覆土の状態 2層に分層できるが、詳細は不明である。遺物 楕円形の掘り込み内底面直上から礫1点が出土する。本遺構の年代は不明である。

SK014 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-2-21、Bカ-7-1グリッドに位置する。西にSK013が近接してある。重複なし。形状・規模 平面形は隅丸方形で、北西辺は丸みを持つ。中軸線はN-23°-Wである。規模は長径0.96m、短径0.89m、深さ0.45mで底面は平坦で、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 2層に分層できる。詳細は不明である。遺物 西寄り礫2点が出土する。本遺構の年代は不明である。

SK015 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-2-24グリッドに位置する。北4mにSK011がある。重複なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-83°-Eである。規模は長径1.38m、短径0.93m、深さ0.50mである。底面は平坦で、壁は中位になだらかな段を持つように外傾して立ち上がる。覆土の状態 2層に分

層できるが、詳細は不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

#### SK016 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-1-9・14グリッドに位置する。南東2.5mにSK020がある。重複 なし。形状・規模 平面形は隅丸長方形で、北端と南端は丸みが強い。中軸線はN-26°-Wで、規模は長径1.14m、短径0.73m、深さ0.60mである。底面は平坦だが南に向かって傾いており、壁は中位で角度を変えて外傾して立ち上がる。覆土の状態 3層に分層できるが、詳細は不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

#### SK017 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-2-20グリッドに位置する。南西3mにSK018がある。重複 なし。形状・規模 平面形は隅丸長方形で、西端は丸みが強い。中軸線はN-79°-Eで、規模は長径1.07m、短径0.68m、深さ0.24mである。底面は緩やかな凹凸を持ち、丸みを持って壁に繋がったの外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

#### SK018 (第11図、図版六六)

位置 II区調査区、Bカ-2-14・15・19・20グリッドに位置する。北東3mにSK017がある。重複 なし。形状・規模 平面形は不整な隅丸方形で、南隅部の丸みが強い。中軸線はN-32°-Wで、規模は長径1.33m、短径1.18m、深さ0.43mである。底面は緩やかな凹凸を持ち、壁は中位になだらかな段を持つように外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

#### SK019 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-8-22グリッドに位置する。南西7mにSK010がある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、南西部や北東部はやや直線的となる。中軸線はN-52°-Wで、規模は長径0.70m、短径0.66m、深さ0.28mである。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

#### SK020 (第11図)

位置 II区調査区、Bカ-1-10グリッドに位置する。北西2.5mにSK016がある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線に沿った北東及び南西側は直線的である。中軸線はN-20°-Wで、規模は長径1.17m、短径0.68m、深さ0.52mである。底面は丸く、壁へは角度の変化なく繋がる。壁は大きく外傾して立ち上がる。覆土の状態 2層に分層できるが、詳細は不明である。遺物 遺物はごく僅かで古墳時代前期9-10期の高坏坏部片と脚部片のみであり、坏部は小さく有稜、脚部は下半で開く形状である。本遺構の年代は不明である。

### 3. 性格不明遺構

II区には遺構としての掘り込みを確認できない遺物集中が多く、これらを性格不明遺構とした。このうち遺構覆土を確認しているのはSX057のみである。遺構の形状・規模については現地での観察結果を重視しつつ、

遺物分布状況などを考慮して部分的に修正した上で決定した。出土遺物のうち個別に取り上げたものについては出土位置が判明しているが、SX057以外の遺構では出土層位を明確にできない。よって、これらの遺構の出土遺物については各遺構周辺で確認した土層を参考におおよその層位を推定して記述している。

SX021 (第13・72図、第25表)

位置 II区調査区、Bカ-6-10・15グリッドに位置する。西1.5mにSX023がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-35°-Eである。規模は長径2.50m、短径1.55mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-10 Na 3.4.9.10.11.12.13で遺物は少ない。標高は24.074-24.174m、層位的にはIVc層上面からIVb層下面付近に相当する。器種としては甕、中形壺、高環、大形壺などである。中形壺は球胴の胴部片1個体、赤彩の口縁部1個体、高環は脚部中実柱状で柱状部下端に細い穴線があり、下半ハの字に丸く開くもの1個体(1)、大形壺は口縁部大きくハの字に開き、上端折返し状で端面取りのもの1個体(2)、球胴の胴部-底部完存1個体、甕は形状の崩れたS字のハケ整形甕1個体(3)である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX022 (第13・72図、第26表、図版一一九・一二二)

位置 II区調査区、Bカ-6-4・9グリッドに位置する。北1.5mにSX023が、西2mにSX024がそれぞれある。重複なし。形状・規模 不整形円形で、規模は長径7.95m、短径7.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-4 Na 1-18で遺物は少ない。標高は24.105-24.213m、層位的にはIVc層上面からIVb層下面付近に相当する。甕、高環主体で中形壺、小形壺、器台、砥石が混じる。器台は脚部上半片1点、小形壺は凹み底1個体、中形壺は突出する平底1個体、赤彩で口縁部長く細いもの1個体(1)、高環は脚部棒状で上半中実、下半丸く外反するもの1個体、中空柱状脚部1個体のほか坏部片がある。甕は鉢形で底部1孔、口縁部折返し状のもの1個体(2)でSX022とSX023の遺物が接合している。甕は台付甕台部2個体、ミニチュアは甕形1個体、砥石は小形棒状のもの1個体(3)、大形砥石は同一個体の破片3点(4)がある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX023 (第13・72図、第27表)

位置 II区調査区、Bカ-6-9グリッドに位置する。東、南、北にそれぞれ1.5mずつ離れてSX021、SX022、SX025がある。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径2.20m、短径2.15mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-9 Na 1-7で遺物は僅かである。標高は24.086-24.169m、層位的にはIVc層上面からIVb層下面付近に相当する。高環は脚部棒状で上半中実、下半丸く外反する脚部のもの1個体(1)、甕は台付甕台部1個体あるほか、外面ハケのちケズリの甕片数点がある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX024 (第13・72・73図、第28表)

位置 II区調査区、Bカ-1-22・23、Bカ-6-2・3・7・8グリッドに位置する。東2mにSX022が、北西2mにSX028・029がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-0°である。規模は長径6.55m、短径4.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-1-22 Na 2-8・10-13・15-27、Bカ-1-23 Na 1・2 (Na 1・2は各2点あり)、Bカ-6-2 Na 1-56・60-65、

Bカ-6-3 №30・31・42-76、Bカ-6-8 №1で遺物は多い。標高は24.080-24.260 m、層的にはIV c層上面からIV b層に相当する。器種は甕や大形甕主体に高坏多い。甕、中形甕、鉢は少ない。鉢は小形丸底形が5個体くらいある。調整はナデ主体にミガキも一部入るが精製というほどではない。中形甕はヒサゴ壺状の口縁部内湾気味の長い口縁部のもの2個体のうち精製赤彩1個体、赤彩精製でおそらく意図的に欠損させ口縁部だけとしたもの1個体(2)、高坏は脚部棒状で上半のみ中実で下半丸く外反するもの3個体、中実柱状脚で下半大きく屈曲し大きく開くもの1個体(1)、坏部小さく有稜2個体、坏部大きく有稜1個体、甕は鉢形で底部1孔を持ち口縁部折返し状のもの1個体(3)、大形甕は明確な二重口縁1個体(6)、中期に多くみられる退化した二重口縁1個体(5)、折返し口縁1個体(4)、甕はS字はほとんどなく、薄手単口縁1個体(7)、厚手単口縁4個体+α(8)、ほか口縁部くの字で上半外面を垂直に面取りする北陸系とみられる精製のもの1個体、台部5個体+α、平底1個体がある。本遺構の年代は10期と考えられる。

## SX025 (第13図)

位置 II区調査区、Bカ-6-14グリッドに位置する。南1.5 mにSX023が、西2 mにSX026がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-42°-Eである。規模は長径2.40 m、短径1.85 mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-14 №2-11で遺物は少ない。標高は24.127-24.276 m、層的にはIV c層上面からIV b層に相当する。前期土器を中心に中期土器も含まれる。前期は鉢、高坏、甕、中期は甕である。鉢は小形丸底形の口縁部片で口縁部大きく開き、甕のような砂っぽい胎土で小形のもの1個体、中形甕は球胴で直立する単口縁の口縁部片、胴部片、凹み底底部片など1個体、高坏は小さく有稜の坏部片1個体、甕は台付甕台部片1点である。中期は中期前半頃の甕で、厚手な口縁部片や胴部片数点が認められる。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX026 (第13・73図、第29表)

位置 II区調査区、Bカ-6-13グリッドに位置する。西にSX027が近接してあるほか、北西1.5 mにSX034が、東2 mにSX025がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-6°-Wである。規模は長径2.40 m、短径2.10 mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-13 №1-15で遺物は少ない。標高は24.180-24.288 m、層的にはIV b層に相当する。器種は甕のみで、形状の崩れたS字甕1個体(1)、S字とみられる胴部1個体(2)、台部2個体、単口縁でハケ整形1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。10期寄りであろうか。

## SX027 (第13・73図、第30表)

位置 II区調査区、Bカ-6-12・17グリッドに位置する。東にSX026、南西にSX028、北にSX034がそれぞれ近接してある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-15°-Eである。規模は長径3.50 m、短径2.70 mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-12 №2-16・18-27で標高は24.188-24.402 m、層的にはIV b層からIV a層に相当する。遺物のうち北寄りでは低い位置から、南寄りでは高い位置から出土する傾向がある。おおよそ北寄りはIV b層、南寄りはIV a層となろうか。遺物はごく僅かで、甕主体に高坏混じる。高坏脚端部片1点、甕は形状の崩れたS字口縁部2個体(1)、単口縁1個体、おそらくS字甕の底部とみられる平底1個体、外面ハケのちケズリの胴部片7点のみである。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## SX028 (第13・73図、第31表)

位置 II区調査区、Bカ-6-7・12グリッドに位置する。西にSI036、南西にSX029、北東にSX027がそれぞれ近接してあるほか、南東2mにSX024がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-62°-Eである。規模は長径2.00m、短径1.55mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-7№1-5で遺物は少ない。標高は24.237-24.310m、層的にはIVb層に相当する。器種は大形壺と甕のみで、大形壺は内外面赤彩壺片1点、甕はS字甕1個体(1)、口縁部上半薄く下半厚く受け口状の壺口縁部1個体(2)、外面ハケ調整の台部3個体である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## SX029 (第13図)

位置 II区調査区、Bカ-6-6・7グリッドに位置する。北にSI036、北東にSX028がそれぞれ近接してあるほか、南東2mにSX024がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-88°-Eである。規模は長径3.45m、短径1.85mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-6№1・2・1・2・3(№重複あり)で遺物は僅かである。標高は24.017-24.342m、層的にはIVc層、IVb層及びIVa層に相当する。器種は甕と高坏のみで、高坏は中実柱状の脚部片、甕はハケのちケズリの甕片数点である。なお、Bカ-6-6グリッド出土遺物も僅かにあり、これらは10期とみられ、甕主体に大形壺、中形壺、鉢、高坏が少し混じる。鉢は内外面赤彩の破片1個体、口縁部短く薄手の小形丸底形と思われるもの1個体、中形壺は口縁部5cmくらいで直線的にやや開く用形のもの1個体があり、口縁-胴部上端のみ被熱赤変する。が器台転用か。高坏は坏部片と中空柱状とみられる脚部片5点のみ、大形壺は胴部片10点くらい、甕は前期系統の甕主体で、ハケ主体にケズリも多用される。平底2個体、台部片1点である。本遺構の年代は9-10期と推定される。

## SX030 (第13・73・74図、第32表、図版一一九・一二二)

位置 II区調査区、Bオ-5-25、Bオ-10-5、Bカ-1-21、Bカ-6-1グリッドに位置する。北5mにSX029がある。重複なし。南半の範囲は不明である。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-45°-Wである。規模は長径4.10m、短径2.84mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-5-25・Bカ-1-21・Bカ-6-1№1-93・97・98、Bオ-10-5№1-31で遺物は多く、同一個体の破片が集中して出土する部分がある。標高は24.166-24.292m、層的にはIVc層上面からIVb層に相当する。古墳前期遺物を中心に古墳中期前半、9世紀代の遺物が混入する。器種は甕主体に大形壺が少量あり、中形壺、高坏、器台、甕、鉢、土玉が僅かにある。鉢は小形丸底形2個体、口縁-体部やや開いて直線的に立ち上がるが内面のみ僅かに段があるもの1個体、体-底部ナデ1個体、器台は脚部3孔で脚下半内湾するもの1個体(1)、中形壺はハの字に少し長く開く口縁部で頸部で折り返し状となるもの1個体、球胴で口縁部欠損、底部焼成後1孔穿孔のもの1個体(3)、凹み底2個体、高坏は脚部中央が太くなるエンタシス状の中空脚部1個体、荒い作りでやや小形の有段状に開く脚部1個体(2)、ほか坏部片、脚部片など僅かにある。甕はほぼ完形の小さい鉢形で底部1孔のもの1個体(4)、大形壺は口縁部直立気味1個体(5)、二重口縁1個体(7)、ほぼ完形で口縁部ハの字のもの2個体(6)、直立気味のやや長い口縁部で球胴1個体、折返し口縁1個体、突出する平底3個体である。甕は厚手で単口縁のものが主体で、薄手の甕は少ない。S字2個体(8)、薄手単口縁2個体、厚手単口縁は5個体+αで丸く外反するもの2個体(11)、厚くくの字のもの1個体(9)、くの字のもの2個体(10)、台部は内外面砂貼付けで内面折返し2個体、平底3個体、丸玉は完形、球状のもの

1点(12)である。このほか混入遺物として外面平行タタキ、内面ナデの須恵器甕片1点、深身の内斜口縁状の破片がある。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### SX031 (第13・74図、第33表)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-6-24グリッドに位置する。北西1.5mにSX032、西2mにSX033、南西3mにSX034がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-21°-Wである。規模は長径3.20m、短径2.65mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-24№1-30で遺物は少ない。標高は24.138-24.599mだが、このうち極端に高い位置から出土する№18・21・22・29はⅡ-Ⅲ層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除くと標高は高いもので24.335mであり、層位的にはⅣc層からⅣb層に相当する。器種は高坏主体に甕、須恵器甕が少しあり、ミニチュア、中形甕も僅かに含まれる。中形甕は須恵器蓋模倣環状に口縁部短く直立するもの1個体、高坏は脚部中央で短く棒状1個体、中空柱状で太く寸胴なもの1個体(1)、中空柱状で下に向かって僅かに開くもの2個体、ほかやや大形の環部片がある。甕は厚手の甕片、須恵器甕は破片8点で2個体あり、1個体は外面平行タタキ、内面木目当て具痕の薄手なもの(3)、もう1個体は厚手で外面平行タタキのもの(2)である。ミニチュアは甕かとみられるもの1個体がある。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73-216段階)と考えられる。TK73寄りであろうか。

#### SX032 (第13・74図、第34表)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-11-3・4グリッドに位置する。南西にSX033、西2mにSX092が近接してあるほか、南東1.5mにSX031、北西2mにSX040がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-50°-Eである。規模は長径4.60m、短径2.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-11-3№1-9・1-22・24・25で遺物は僅かである。標高は24.104-24.370m、層位的にはⅣc層からⅣb層に相当する。古墳前期土器主体に中期の甕片も混在する。古墳前期は甕片主体に大形甕や高坏が混じる。高坏は柱状脚で下半ではつきり屈曲して開くもの1個体、柱状脚で下半丸く外反するもの1個体、大形甕は突出する平底1個体のほか胴部片僅か、甕は外面ハケ整形のものが多く、ケズリを施すものもある。中期の遺物は大形の甕か甕の胴部片1点である。このほか、グリッド出土遺物が少量ある。前期では半球状の高坏環部1個体、中期では碗は須恵器蓋模倣環状に口縁部やや内湾気味に直立し深身のもの1個体、中形甕は球胴の胴部片、甕は厚手の平底甕2個体、やや長胴で中形の外面ケズリの甕1個体(1)のほか胴部片多数ある。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX033 (第13・74図、第35表)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-6-22・23、Bカ-11-2・3グリッドに位置する。南にSX034、北にSX032・092が近接してあるほか、東、南西、北西にそれぞれ2mずつ離れてSX031、SX035、SX041がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-70°-Eである。規模は長径5.25m、短径4.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-22・23№1-42・1-59(同一グリッド内に2つの遺物群が混在)で、遺物は少ない。標高は24.029-24.410m、層位的にはⅣc層、Ⅳb層及びⅣa層に相当するが、主体はⅣc層上半からⅣb層である。器種は甕主体で大形甕や高坏もあり、鉢や器台が僅かに含まれる。鉢は小形丸底形で長くハの字に口縁部が開くとみられるもの2個体あり、1つは内外面ハケ、



1つは内外面ナデだろう。器台は受部深身で稜を持ち、脚孔あり1個体(1)、高環は脚部中空柱状で下半に向けてやや開き下半で屈曲して開くもの1個体、中実棒状脚1個体ほか環部片や脚部片僅か、大形壺は二重口縁1個体(3)、厚手なくの字口縁部で上端つまみ上げて外面は面となるもの1個体、突出する平底で底部外面まで外面全部ハケ整形1個体、小さい折返し口縁1個体、甕はS字1個体、単口縁1個体、台部2個体で胴部片は外面ハケ、ケズリの前期系統の破片ばかりで厚手の甕はない。このほか外面平行タタキ、内面ナデの須恵器甕片8点が混入している。グリッド出土遺物として口縁部がハの字に開く大形壺1個体(4)と脚部中空柱状で下半へはなだらかに外反して開く高環1個体(2)がある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX034 (第13・74・75図、第36表)

位置 II区調査区、Bカ-6-17・18・22・23グリッドに位置する。南にSX027、北にSX033が近接してあるほか、南東1.5mにSX026、西1.5mにSX035がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-65°-Eである。規模は長径5.60m、短径3.35mである。覆土の状態 不明である。

遺物 Bカ-6-17・18 №4-35、Bカ-6-18 №1-29(Bカ-6-18グリッド内にそれぞれが混在)、Bカ-6-22・23 №5-9で遺物が多い。標高は24.035-24.389m、層位的にはIVc層、IVb層及びIVa層に相当するが、主体はIVb層である。器種は大形壺、甕主体に器台、中形壺、高環、ミニチュアが混じる。器台は有孔の脚部片1個体、中形壺は壘形でややハの字に開く口縁部2個体のほか球胴の胴部片もある。高環は小さく有種の環部1個体(1)、稜のない半球状の環部1個体、ハの字に開き有孔の脚部1個体、大形壺は口縁部くの字で上半外面くぼんだ後大きく外反するもの1個体(3)、口縁部ハの字に開いて丸く外反するもの2個体、口縁部内外面赤彩され端部斜めの面となる精製の壺片でおそらく二重口縁のもの1個体、突出する平底3個体、甕は形状の崩れたS字1個体、単口縁1個体、台部2個体、平底2個体で、胴部片は前期系統の甕が主体であり外面調整はハケのケズリが多い。中期にみられるような厚手で頸部丸いハケ甕は1個体ある。ミニチュアは甕形か壺形かと思われるもの1個体である。このほかグリッド出土遺物として鉢は小形丸底形で扁平な形の体部1個体、器台は赤彩の脚部片、中形壺は球胴の胴部片、大形壺はハの字に開く単口縁1個体(2)がある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX035 (第13・74図、第37表)

位置 II区調査区、Bカ-6-16グリッドに位置する。南1.5mにSI036、東1.5mにSX034、北東2mにSX033、北西2mにSX042、南西3.5mにSX093がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-73°-Eである。規模は長径3.75m、短径2.80mである。覆土の状態 不明である。

遺物 Bカ-6-16 №1-20・23-61(№1は重複)で遺物は少ない。標高は24.075-24.449m、層位的にはIVc層、IVb層及びIVa層に相当するが、主体はIVb層からIVa層である。高い位置から出土するものの中には、III層出土遺物も含まれる可能性がある。遺物は甕のみで、台付甕胴部下半-底部片で底部内外面砂貼付けのもの1個体がある。なお、グリッド出土遺物が僅かにあり、器種は甕主体に大形壺片、中形壺片があり、高環も僅かに含まれる。高環は中空柱状の脚部片1点、中形壺は壘形で口縁部長いもの1個体、くの字口縁のもの1個体、大形壺は胴部片など、甕はS字2個体(1)、単口縁1個体、小型単口縁1個体で胴部片はハケ主体でケズリも多く施される。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX037 (第13・75図、第38表)

位置 II区調査区、Bオ-10-9グリッドに位置する。西にSI039が近接してあるほか、北東1.5mにSX093が、北西1.5mにSX038がそれぞれある。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径3.55m、短径3.45mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-9 №1-23・25-34で標高は24.163-24.511m、層位的にはIVc層上面からIVb層及びIVa層に相当するが、主体はIVb層からIVa層である。高い位置から出土するものの中には、III層やII層出土遺物も含まれる可能性がある。遺物は僅かで、甕、大形壺、高環があり、ミニチュアが僅かに含まれる。高環は僅かに稜を持つ半球状の坏部のもの1個体(1)、脚部中実棒状で赤彩され下半2段に開くもの1個体(2)、大形壺は二重口縁1個体、単口縁で口径大きいもの1個体、類いくの字口縁部1個体で胴部片多い。甕はS字甕はなく、単口縁2個体のうち1つは厚手で中期の甕に類似する。口縁部下半厚く受口状に内面に段があるもの1個体、胴部片は外面ハケのちケズリ調整が多い。ミニチュアは鉢形かとみられるもの1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX038 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-10-13グリッドに位置する。西にSI039が近接してあるほか、南東1.5mにSX037が、東2mにSX093がそれぞれある。重複 SI039と接しており、遺物出土範囲は重複する可能性がある。遺物が出土する高さはSI039の遺構確認面よりも高いため、SI039より新しいと考えられる。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-70°-Wである。規模は長径3.15m、短径2.10mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-13 №1-12で標高は24.297-24.466m、層位的にはIVb層からIVa層に相当する。高い位置から出土するものの中にはIII層出土遺物が含まれる可能性もある。遺物は僅かで甕主体に大形壺、高環が僅かに混じる。高環は脚部上半中実、坏部小さく有稜のもの1個体、ほか坏部片や脚部片が僅かにある。大形壺は二重口縁破片1個体、甕は基本薄手の甕ばかりで外面調整はハケ後ケズリであり、単口縁2個体、台部1個体、平底1個体である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## SX040 (第13・75図、第39表、図版一二〇)

位置 II区調査区、Bカ-11-2・7・8グリッドに位置する。南にSX092、南西にSX041が近接してあるほか、南東2mにSX032、西2mにSX048がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-9°-Eである。規模は長径5.20m、短径4.65mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-11-2・7 №1-96、Bカ-11-7 №1-28(一部の遺物が重複しグリッド内に混在)、Bカ-11-8 №1-6・9-14・31・32で遺物は多く、範囲内西側に特に集中する。標高は24.217-24.588mだが、このうち極端に高い位置から出土する№17(Bカ-11-7内北西部)などはII-III層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除くと標高は高いものでも24.446mであり、層位的にはIVb層からIVa層に相当する。器種はS字口縁台甕主体で、鉢、器台、中形壺、高環、大形壺が僅かに混じる。鉢は小形丸底形で完形1個体(2)、口径大きく二重口縁1個体、口径大きくハの字の異形の平底で内面体部に段あり1個体(3)、器台は脚部3孔のもの1個体(1)、中形壺はハの字に開く埴形の口縁部1個体、球胴の胴部2個体、口縁部長くハの字で埴形1個体(4)である。高環は脚部ハの字に開き無孔で下半屈曲して開くもの1個体(6)、下半で丸く開く脚部片1点、中実で細く短い棒状脚1個体、大きく有稜坏部は2個体あり(5)、甕は小形甕の底部に焼成後の穿孔を施したものの1個体(7)、大形壺はハの字に開く口縁部3個体(8・9)である。甕はS字甕主体だが、単口縁で短く直立気味の口縁部のものや少し厚手の甕が入る。頸部丸くやや

厚手で中期の甕のようなが球胴で内外面ハケの甕1個体(13)があり、中期の厚手の甕と関連する可能性も想定できよう。S字甕は5個体+ $\alpha$ あり、外面調整はハケを多用する。上半極端に長いS字口縁1個体(11)、外面ケズリ主体のS字口縁1個体(10)、S字口縁台付甕2個体(14・15)、単口縁は6個体あり、うち外面ハケ調整1個体(12)、台部5個体+ $\alpha$ 、平底1個体、小形、単口縁で精良な作り2個体がある。小さい丸底で底部厚く体部薄い器種不明のもの1点あり、ミニチュアかとも推定される。片岩の破片1点は混入する石製模造品関連遺物であろうか。グリッド出土遺物は大形甕、甕で、大形甕はハの字に開く口縁部1個体、長くハの字に開く罫形のもの1個体、甕はS字甕9個体+ $\alpha$  台部1個体+ $\alpha$ 、平底4個体である。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### SX041 (第13・76図、第40表、図版一二二)

位置 II区調査区、Bカ-11-1・2・6グリッドに位置する。東にSX092、北東にSX040が近接してあるほか、南西1.5mにSX042、北西1.5mにSX048がそれぞれある。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径4.10m、短径3.90mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-11-1 Na 1-53、Bカ-11-1・6 Na 1-22(一部重複し混在)で遺物は少ない。標高は24.243-24.523mだが、このうち極端に高い位置から出土するNa 41などはII-III層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除くと標高は高いものでも24.464mであり、層位的にはIV b層からIV a層に相当する。器種は甕主体に大形甕、中形甕があり、高坏が僅かに含まれる。高坏は脚部中実棒状1個体、中形甕は罫形で長い口縁部のもの1個体、短くくの字の口縁部1個体、内外面赤彩で内面のみ段を持つ口縁部1個体、大形甕は突出する平底1個体ほか胴部片、頸部片が僅かにある。甕は前期系統の甕主体でS字甕はなく単口縁のみで、薄手の単口縁で外面ハケのちケズリやナデのもの2個体(2)、台部2個体のうち1つは特に低い台部(4)である。グリッド出土遺物としては、前期のほか中期前半の遺物も混じる。前期は鉢が小形丸底形1個体、器台は脚部片1個体、中形甕は球胴で小さくくの字に外反する口縁部のもの1個体(1)、高坏は中実柱状の脚部1個体、坏部小さく有稜1個体、坏部稜なくハの字に開くもの1個体、大形甕は段の小さい二重口縁で上端丸く外反するもの1個体、甕は薄手の単口縁で外面ハケのちケズリやナデのもの3個体(3)、台部4個体、ミニチュア台付甕の台部とみられるもの1個体である。中期前半の遺物は境が内斜口縁で深身のもの1個体、須恵器蓋攪攪坏状に口縁部直立気味となるもの1個体、甕は厚手の甕片が多く、平底1個体、突出する平底1個体、剣形の石製模造品1点(5)である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### SX042 (第13・76図、第41表)

位置 II区調査区、Bオ-10-25、Bオ-15-5、Bカ-6-21グリッドに位置する。西にSX043が近接してあるほか、北東1.5mにSX041、南東2mにSX035がそれぞれある。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径3.85m、短径3.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-25 Na 1-29、Bオ-10-25・Bオ-15-5 Na 1-8(Bオ-10-25内北部にNa 1-8の一部があり、Na 1-29の一群と同じ番号が混在)で遺物はやや多い。標高は24.173-24.496mであり、層位的にはほぼIV b層からIV a層に相当する。器種は甕と鉢主体に、中形甕、大形甕、小形甕、ミニチュア土器、甕が僅かに含まれる。鉢はほぼ完形の小形丸底形1個体(1)、それと似た形状の小形丸底形でやや歪んだ体部のもの2個体、厚手で大形小形丸底形1個体、口径大きく二重口縁の破片1点、小形甕は球胴の破片など、中形甕は球胴ほぼ完形1個体(2)、ハの字にやや長く直線的に開く口縁部のもの1個体、高坏は中空柱状の脚部1個体、小さく有稜の坏部1個体、甕は口

縁～体部ハの字で口縁部までヨコナデなく内外面ハケ整形1個体、大形甕は折返し口縁1個体、突出する平底2個体、甕は外面ハケ整形が多く胴部全体ハケ整形のもの1個体、平底3個体、台部2個体は外面ケズリを多用しており、うち内外面砂貼付は1個体ある。ミニチュア土器はS字甕形のもの1個体、甕か甕形1個体である。本遺構の年代は9-10期で10期寄りと考えられるが、甕などに少し古い要素がある。

#### SX043 (第13・76図、第42表)

位置 II区調査区、Bオ-10-24グリッドに位置する。西にSI045が、東にSX042が近接してあるほか、南2mにSX044、北3mにSI050がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-30°-Wである。規模は長径2.75m、短径2.00mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-24 №3-20・30で遺物は一定量ある。標高は24.242-24.380mであり、層的にはIVb層からIVa層に相当する。中期前葉を主体とし、前期10期前後の土器が混入する。中期前葉は埴、小形甕、中形甕、高坏、甕であり、埴は内斜口縁で深身のもの2個体(1)あり、半球状で深身のもの2個体のうち1個体平底、小形甕は4個体+αでうち薄手精製2個体、中形甕は埴形の胴部片が少量ある。高坏は中空のハの字に開く脚部で下半で屈曲して開くもの4個体(2)、大きく有稜の坏部片、甕は厚手で単口縁のもの2個体+α(3)、突出する平底3個体、ミニチュア土器は鉢形のほぼ完形のもの1個体である。混入する前期土器はS字甕、単口縁甕、小形丸底鉢などで、鉢は小形丸底形2個体くらいでこのうち赤彩1個体、大形甕は大廓系かとみられる白く軽い胎土の突出する平底1個体、甕はS字甕6点くらい、単口縁5点くらいでこのほか胴部片僅か、台部2個体である。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

#### SX044 (第13・76図、第43表)

位置 II区調査区、Bオ-10-19グリッドに位置する。南にSX093が近接してあるほか、北西1.5mにSI045、北2mにSX043がそれぞれある。重複 SX093と遺物出土範囲が接する。新旧関係は、遺物のあり方からは判別できない。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-42°-Wである。規模は長径2.65m、短径2.20mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-19 №1-6で遺物は少ない。標高は24.069-24.368mである。高低差は大きいものの主体は標高24.2-24.3m前後であり、層的にはほぼIVb層に相当すると考えられる。中期前葉を主体とし、前期9-10期くらいの甕、鉢、高坏などが混入する。器種は甕、高坏、甕のみで、高坏は中空柱状の脚部2個体で内面は1つは絞目状の痕跡があり、1つはナデ、甕は底部1孔で底部は外面へ孔部分が突出するもの1個体、甕は厚手な突出する平底1個体、単口縁3個体、台付甕台部は外面ハケのちナデ、ケズリのもの2点がある。グリッド出土遺物としては、埴、小形甕、中形甕、高坏、甕があり、埴は内斜口縁で深身で口縁部外反するもの2個体(1)、小形甕は凹み底1個体ほか胴部片僅か、中形甕は直立する短い口縁部1個体、高坏は中空柱状の脚部2個体(2)、甕は厚手な突出する平底2個体である。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)前後と考えられる。

#### SX047 (第13・76図、第44表)

位置 II区調査区、Bオ-15-15・20、Bカ-11-11・16グリッドに位置する。南にSX048が近接してあるほか、北西1.5mにSX049、南東3mにSX040がそれぞれある。重複 SX048と遺物出土範囲が接する。新旧関係は、遺物のあり方からは判別できない。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-35°-Eである。規模は長径5.80m、短径4.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-15 №1-7、B

オ-15-20 №1-4、Bカ-11-11 №1-14・101、Bカ-11-16 №6-100（Bオ-15-20 №1-4、Bカ-11-16 №6-100、Bカ-11-11 №101は一連のものとして取り上げたとみられる遺物）で遺物は多く、北東部に集中する。標高は24.236-24.468 mだが24.3-24.4 m前後のものが多数を占めており、層位的にはIV b層からIV a層に相当すると考えられる。器種は甕と大形壺主体で器台、高環、鉢が僅かに含まれる。鉢は小形丸底形かと思われるもの1個体、口径大きく二重口縁1個体（1）、口径大きく形状の崩れた二重口縁1個体、小形丸底形1個体、器台は受部二重口縁状1個体、受部半球状1個体、高環は中空柱状の脚部2点のみで上半のみ中実棒状1個体、坏部小さく有稜1個体、大形壺は伊勢型系の口縁部1点、折返し口縁2個体（2）、形状の崩れた二重口縁2個体くらい、胴部上位に縄文施文の破片1点、突出する平底1個体、平底1個体、甕はS字甕4個体+a（3）、台部2個体+a、平底2個体、小形S字甕1個体、単口縁3個体で外面調整はハケ主体でケズリ、ナデも入る。中期に多い厚手な甕はほとんど入らない。グリッド出土遺物としては、鉢が小形丸底形1個体、高環は中空柱状の脚部1点、甕かと思われる内面に折返し口縁のように粘土を貼付けのもの1個体、大形壺は受口状で口縁部は直立気味、内面のみ段を持ち外面僅かにS字状のもの1個体（4）、甕はS字甕5個体、中形で口縁部短くくの字のもの1個体である。本遺構の年代は10期と考えられる。

## SX048（第13・76図、第45表）

位置 II区調査区、Bオ-15-10・15、Bカ-11-6・11グリッドに位置する。北にSX047が近接してあるほか、南東1.5 mにSX041、東2 mにSX040、西5 mにS1050がそれぞれある。重複なし。形状・規模 不整形円形で、南北方向の中軸線はN-54°-Wである。規模は長径4.55 m、短径3.00 mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-10 №3-17・19（主にBオ-15-10にあり、№19のみBカ-11-6にある）、Bカ-11-6 №1-8（主にBカ-11-6にあり、№3のみBオ-15-10にある）、Bカ-11-6 №1-3（Bカ-11-6北部にある）で遺物は僅かであり、南部に集中する部分がある。標高は24.298-24.451 mであり、層位的にはIV b層からIV a層に相当すると考えられる。器種は鉢、中形壺、高環、大形壺、甕であり、各器種が少しずつ出土する。鉢は小形丸底形で赤彩のもの1個体（1）、小形丸底形の口縁部1個体、中形壺は凹み底1個体のほか、口縁部片、胴部片僅か、高環は中空柱状の脚部でやや下に向かって開き内面しぼり目となるもの1個体、小さく有稜の坏部、ほか破片僅か、大形壺は二重口縁の頸部片で頸部直立丸く段を作るもの1個体、甕は外面ハケ整形主体で中期の厚手な甕はなく、S字2個体、単口縁で平底のハケ甕1個体、単口縁2個体、台部1個体、小形ハケ甕片である。本遺構の年代は9期と考えられる。

## SX049（第13図）

位置 II区調査区、Bオ-15-20グリッドに位置する。南東1.5 mにSX047、西1.5 mにS1053、北西1.5 mにSX057がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-18°-Eである。規模は長径2.80 m、短径2.10 mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-20 №1-5（グリッド東半にこれとは別の№1-5あり）で遺物はごく僅かである。標高は24.395-24.430 mであり、層位的にはIV b層上半からIV a層に相当すると考えられる。器種は甕のみで、小形ハケ整形のS字甕1個体、単口縁のハケ甕1個体、少し厚手の単口縁甕1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

## SX051（第13図）

位置 II区調査区、Bオ-15-2・7グリッドに位置する。北東にSX052が近接してあるほか、北西1.5 m

にSX055、東2mにSIO50がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-79°-Eである。規模は長径3.60m、短径2.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-2№1-27で遺物は少ない。標高は24.244-24.414mであり、層位的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。古墳時代前期～中期の遺構であろう。

#### SX052 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-15-2・3・7・8・12・13グリッドに位置する。南西にSX051が近接してあるほか、北西2.5mにSIO54、西3mにSX055がそれぞれある。重複 SIO50と遺物出土範囲の一部が重複する。遺物が出土する高さはSIO50の遺構確認面付近であるため、SIO39より新しい可能性が高い。形状・規模 方形に近い楕円形で、南北方向の中軸線はN-64°-Eである。規模は長径4.20m、短径3.55mである。

覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-7№1で出土位置が判明しているのは1点のみであり、標高は24.196mである。層位的にはIVb層に相当すると考えられる。器種は甕で外面ハケ整形の単口縁甕片1点である。グリッド出土遺物としては9期前後の遺物があり、甕主体に大形壺少量、高環、器台、鉢が僅かに含まれる。鉢は小形の小形丸底形4個体、大形の小形丸底形1個体、器台は受部片1個体、高環は脚部ハの字に開き4孔を持つもの1個体、大形壺は胴部片など、甕は外面ハケ整形主体でケズリ少し入り、S字1個体、単口縁1個体、台部4個体+aである。本遺構の年代は10期前後だろう。

#### SX055 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-15-6グリッドに位置する。南東1.5mにSX051、北東2.5mにSIO54、南西3mにSX056がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-48°-Eである。規模は長径3.75m、短径3.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-15-6№1-13・1(北西隅と南西部に№1があり重複)で遺物はごく僅かである。標高は24.139-24.456mまでみられるが、極端に低いものを除けば標高24.2-24.4m前後のものがほとんどであり、層位的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。器種は中形壺、高環、大形壺、甕であり、中形壺は胴部片、高環は環部片2点のみ、大形壺は頸部片、胴部片、平底底部片などのみ、甕は外面ハケのちケズリで薄手のものばかりで厚手な甕はなく、丸く外反する単口縁1個体、崩れた形状のS字1個体、台部1個体、平底1個体である。グリッド出土遺物としては鉢が小形丸底形の体部片1点、甕は台部1個体、平底1個体、ほか胴部片である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX056 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-14-5グリッドに位置する。北西にSIO80が近接してあるほか、北東3mにSX055がそれぞれある。重複なし。南半の範囲は不明である。形状・規模 楕円形と考えられる。南北方向の中軸線はN-28°-E、規模は短径2.30m、長径は確認できる部分で2.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-14-5№1-18で遺物は僅かである。標高は24.155-24.418mまでみられるが、極端に低いものを除けば標高24.3-24.4m前後のものがほとんどであり、層位的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。遺物は中期前葉主体で、前期9-10期の土器が高低差なく混在している。中期前葉の器種は小形壺、高環、甕のみで、小形壺は2個体、ほか胴部片や口縁部片僅か、高環は太く上半のみ中央の脚部1個体、下半屈曲して開く脚部1個体、甕は単口縁1個体でほかに厚手な甕片多い。混入する前期土器

は器台1個体、S字甕1個体、単口縁甕1個体、台部2個体ほか胴部片などである。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)前後と考えられる。

SX057 (第13・76図、第46表、図版六四)

位置 II区調査区、Bオ-15-18・19・23・24・25グリッドに位置する。南東1.5mにSX049、北東3.5mにSX058がそれぞれある。重複 SI053と遺物出土範囲が重複する。IVb層を挟んでSI053の上層に位置しており、SI053より新しい。形状・規模 不整形で、東に開くC字状を呈する。断面に示されるように底面には凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。断面では中央で一旦立ち上がっているようにも見えるため、2基の遺構と捉えることもできる。曲線となる平面形状とあわせて考えると、新旧2時期の溝状遺構となる可能性があろう。全体の規模は長径6.70m、短径5.20m、溝状の遺構とみた際の幅は北東部で3.00m、南東部で1.40mである。覆土の状態 第1層で砂を多量に含んでおり、砂と土壌が薄く互層をなして堆積する。流水があった可能性がある。遺物 Bオ-15-19 Na 4-21 (SI053内)、Bオ-15-19 Na 6-11 (SI053南東部付近)、Bオ-15-24 Na 22-48 (SI053内)、Bオ-15-24・25 Na 1-12 (SI053外)で遺物は多く、集中する部分があくつかあり、南部では列状に並んで出土する。標高は24.237-24.467mであるが、24.3-24.4m前後のものがほとんどであり、他の遺物集中遺構と似た傾向を示す。中期前葉のほか前期10期の遺物が多いが、これはSI053などからの混入だろう。中期前葉の遺物は少なく、小形甕、中形甕、高環、甕、石製模造品である。甕は内斜口縁で平底のもの1個体(1)、小形甕は胴部下平-平底のもの1個体、中形甕は突出する平底1個体、口縁部1個体、高環は中空柱状で中央が太くなるエンタシス状の脚部で内面きれいにナデ、環部ソケット状に接合するもの1個体ほか破片僅か、甕は厚手な単口縁1個体、小形甕で平底1個体、剣形の石製模造品1点(3)である。混入とみられる前期遺物は甕主体に大形甕、甕かとみられるものなど僅かで、甕かとみられるものは口縁部片1点、大形甕は突出する平底2個体、甕は外面ハケ後ケズリの甕で、単口縁で口縁部S字っぽくまっすぐ立ち上がり端部外反するもの1個体(2)、形状の崩れたS字4個体+α、単口縁で僅かにS字に曲がる口縁部片のもの2個体、台部1個体、平底1個体である。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)前後と考えられる。

SX058 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-20-5グリッドに位置する。北東2.5mにSX059、南西3.5mにSX057、北西5mにSX063がそれぞれある。重複 なし。形状・規模 円形で、規模は長径1.35m、短径1.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-5 Na 1-3で遺物はごく僅かである。標高は24.325-24.361mで、層位的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。器種は甕のみで形状の崩れたS字で厚手のもの1点、台付甕とみられる外面ハケのちケズリの胴部下平片2点、胴部片1点である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX059 (第13・76図、第47表、図版一〇〇)

位置 II区調査区、Bカ-16-1・2・6・7グリッドに位置する。北東にSX094が近接してあるほか、北西2mにSX060、南西2.5mにSX058がそれぞれある。重複 なし。形状・規模 楕円形をした不整形楕円形で、南北方向の中軸線はN-49°-Wである。規模は長径4.90m、短径2.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-16-1・2・6・7 Na 1-118で遺物は多く、南東部に集中する。標高は

24.191~24.441 mだが24.3~24.4 m前後のものが多数を占めており、層的にはIV b層からIV a層に相当すると思われる。器種は甕主体に大形壺、高坏、器台、中形壺がある。器台は全部で3個体あり、受部二重口縁状1個体(1)、丸い受部で上半水平に開くもの1個体(2)、脚部片1個体、中形壺は球胴の胴部片や増形の口縁部片など数点、凹み底1個体、高坏は半球状の坏部や下半で開く脚部片など数点、大形壺は折返し口縁で胴部上半穿孔があるもの1個体(4)、直立する頸部から2度屈曲して平らに開く口縁部でもろい胎土のもの1個体(3)、甕は中期の甕のようなやや厚手のものが3個体+αあり、前期のS字や薄手のものより破片数が多い。外面ハケ後ケズリ調整のS字3個体、薄手な単口縁で外面ケズリで平底1個体、台部4個体、平底1個体、北陸系ともみられる直立気味の口縁部1個体(5)、口縁部丸く外反するもの1個体(6)、S字状に屈曲する口縁部1個体、平底2個体、突出する平底1個体、前期の甕に良くみられる胎土を持つ小形のく字甕2個体である。本遺構の年代は10期と考えられ、その中でもやや新しい段階とみられる。

#### SX060 (第13・76図、第48表)

位置 II区調査区、Bオ-20-15・20、Bカ-16-11グリッドに位置する。南東2mにSX059、南西2mにSX063、北西3mにSX061、東3mにSX094、北3.5mにSX064がそれぞれある。重複なし。形状・規模 各辺が丸みを持つ隅丸形で、南北方向の中軸線はN-0°、規模は東西4.10m、南北3.80mである。

覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-15・20、Bカ-16-11 Na 1-13で遺物は少なく、まばらに存在する。標高は24.297~24.421 mであり、層的にはIV b層からIV a層に相当すると思われる。遺物は中形壺のみであり、平底1個体がある。グリッド出土遺物は少量あり、甕、大形壺、中形壺のほか高坏も僅かに含まれる。中形壺は増形、球胴の破片僅か、高坏はハの字に開き3孔の脚部片で器台の可能性ある。大形壺は二重口縁で内面に段を持たないもの1個体(1)、甕はS字はなく、外面ハケのちなデ、ケズリの単口縁1点、台部3個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX061 (第13・76図、第49表)

位置 II区調査区、Bオ-20-19グリッドに位置する。北1.5mにSX065、北東2mにSX064、南東3mにSX060、南西3mにSX062がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-63°-Eである。規模は長径2.40m、短径1.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-19 Na 1-7で遺物は少なく、列状に存在する。標高は24.296~24.383 mであり、層的にはIV b層からIV a層に相当すると思われる。器種は甕、中形壺、大形壺、高坏のみで、中形壺は球胴で長い口縁部を持つ赤彩のもの1個体(1)、高坏は上半のみ中央の柱状脚部片1個体、大形壺はハの字にやや丸く外反気味に開く口縁部1個体、大形系とみられる二重口縁の厚手の口縁部上半片で直線的に口縁部上端開き、外面棒状浮文貼付1個体、赤彩で突出する平底片1点、甕はS字の胴部上半片1個体、長い単口縁でやや厚手のもの1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX062 (第13・77図、第50表)

位置 II区調査区、Bオ-20-13グリッドに位置する。南東1.5mにSX063、北東3mにSX061がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-7°-Wである。規模は長径1.75m、短径1.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-13 Na 1・2 (同グリッド南西部にもNa 1・2あり)で遺物はごく僅かである。標高は24.320~24.379 mであり、層的にはIV b層からIV a層に



相当すると考えられる。器種は赤彩鉢、大形壺、甕のみで、鉢は赤彩で小形丸底形の口縁部1個体、赤彩の折返し口縁でくの字襷のように口縁部短く立ち上がるもの1個体、大形壺は柔らかい胎土の伊勢型口縁部片1個体(1)、甕はハケ甕片である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

## SX063 (第13・77図、第51表)

位置 II区調査区、Bオ-20-8・9・13・14グリッドに位置する。北西1.5mにSX062、北東2mにSX060がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-58°-Eである。規模は長径4.70m、短径3.20mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-8・9№3-8(遺構内南西部)、Bオ-20-9№1・2・6(遺構内北東部)で遺物は少なく、まばらに存在する。標高は24.255-24.406mであり、層位的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。遺物は中期前葉の厚手の二重口縁状の大形壺1個体(1)で、前期9-10期の遺物が混入する。前期遺物は器台、高環、甕で、器台は受部口縁部くの字に折れて外反するもの1個体、高環は小さく有稜の環部1個体、甕は台付甕台部1個体、形状の崩れたS字1個体、単口縁2個体、小形甕1個体である。周辺グリッド出土遺物としては小形壺の胴部1個体がある。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)であり、TK73段階に近いと考えられる。

## SX064 (第13・77図、第52表、図版一二〇)

位置 II区調査区、Bオ-20-25、Bオ-25-5、Bカ-16-21、Bカ-21-1グリッドに位置する。西1.5mにSX065、南西2mにSX061、南3.5mにSX060がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-5°-Wである。規模は長径5.30m、短径3.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-25、Bカ-16-21№1-61、Bオ-25-5№1-4で遺物は一定量あり、南部に集中する。標高は23.888-24.369mと幅広いが、特に南部で24.2m以下の低い位置から出土するものが目立っており、本遺構がV層を掘り込む深い遺構である可能性が示される。層位に当てはめるとV層からIVc層、IVb層、IVa層に相当する。竪穴住居跡の可能性が示される。器種は小形壺、中形壺、高環、大形壺、甕などで、小形壺は胴部片、中形壺は形状の崩れた二重口縁状の口縁部片、冪形の長い口縁部2個体、球胴の胴部片、高環は中空柱状で下半で開き、下端丸く開く脚部2点、坏底部1点、大形壺は頸部片や胴部片など、甕は厚手なくくの字口縁の甕で、突出する平底1個体、平底1個体、ほか胴部片や口縁部片である。グリッド出土遺物としては中形壺、高環、大形壺、甕などあり、中形壺はほぼ完形で下ふくれの胴部に小さい平底、口縁部短くくの字に内湾するもの1個体(1)、高環は中空柱状で下半で開き、下端丸く開く脚部6点、柱状で下半屈曲して大きく開く脚2個体(2)、大形壺は長くくの字に外反する口縁部1個体(4)、細長い胴部で甕のような形状のもの1個体(3)、平底1個体、甕は厚手の襷ばかりで突出する平底3個体、平底2個体、口縁部二重口縁状で口縁部上平直立気味、口縁部くの字で突出する平底の厚手なもの1個体(5)である。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)であり、TK73段階に近い方と考えられる。

## SX065 (第13・77図、第53表)

位置 II区調査区、Bオ-20-24、Bオ-25-4グリッドに位置する。東1.5mにSX064、南1.5mにSX061がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-2°-Wである。規模は長径6.00m、短径3.65mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-20-24、Bオ-25-4№1-182・189-212で遺物は多く、南寄りに集中する。標高は23.943-24.263mで、23.9-24.1m前後の低い

位置から出土するものが目立っており、隣接するSX064と同様に本遺構がV層を掘り込む深い遺構である可能性が示される。層位に当てはめるとV層からIVc層、IVb層に相当する。竈穴住居跡の可能性もある。器種は甕、高環が多く、埴、中形甕、大形甕が混じる。前期土器は僅かに小形丸底形の鉢1個体が混入する。埴は深身な内斜口縁3個体(1)、半球状2個体、須恵器蓋模倣環状に口縁部直立するもの1個体(2)、内面赤彩される丸底の埴片1個体、須恵器蓋模倣環状で口縁部が斜めに立ち上がるもの1個体、中形甕は埴形の口縁部片2個体+a、底部凹み底5個体+a、高環は大形で有稜の坏部8個体+a(3)、中空柱状でやや開き気味の脚部で下半屈曲して開くもの7個体(4・5)あり、うち内面しぼり目6個体(6)、坏部底面ソケット状に接合2個体(7)、中実柱状の脚部4個体のうち中央が太くなるエンタシス状1個体、大形甕はハの字に開く口縁部4個体(8)、突出する平底3個体+a、甕は厚手な単口縁14個体+a(9)、底部平底4個体+a、突出する平底7個体+a、が器台はほぼ完形1個体(10)である。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)であり、TK73段階に近いと考えられる。

## SX066 (第13・77図、第54表)

位置 II区調査区、Bオ-24・4・5・9・10グリッドに位置する。南西5mにSX067・087、南6mにSX091がそれぞれある。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径3.75m、短径3.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-24・4 №3-8、Bオ-24・9 №4-6、Bオ-24・5 №1-24・28-30・1-2(№1-30の一群の中に№1-2が重複する形で混在)で遺物は遺構外縁に多い。平面的な分布は方形状を呈しており、これが遺構形状を示す可能性もある。標高は24.162-24.510mだが、このうち極端に高い位置から出土する北西部出土の№4・5・6などはII-III層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除けば標高24.2-24.3m前後のものがほとんどであり、層的にはIVb層に相当すると考えられる。遺物は甕のみであり、厚手で精良な胎土で荒いハケを使用し、口縁部下半厚く上半薄く内面段あり1個体(2)、前記個体とおそらく同一個体の胴～平底の底部片1個体である。グリッド出土遺物としては、高環、大形甕、甕があり、高環は中空柱状の脚部片1個体、中空棒状の脚部で下半丸く開き3孔1個体(1)、大形甕は単口縁でハの字に開くもの1個体、二重口縁で伊勢型1個体、折返し口縁1個体、甕は厚手、精良な胎土で形状の崩れたS字1個体、やや厚手で外面のみ僅かにS字状の中期にみられるような甕1個体(混入か)、形状の崩れたS字1個体、台付甕台部2個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX067 (第13・78図、第55表、図版一〇〇)

位置 II区調査区、Bオ-19-22・23・24グリッドに位置する。北にSX087、南西にSI079が近接してあるほか、南東5mにSX091、北東6mにSX066がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-85°-Eである。規模は長径5.80m、短径4.20mである。覆土の状態 不明である。

遺物 Bオ-19-22・23 №1-19・21-24で遺物は少なく、まばらに存在する。標高は24.068-24.700mだが、このうち極端に高い位置から出土する№15・17などはII-III層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除けば標高24.1-24.3m前後のものがほとんどであり、層的にはほぼIVb層に相当すると考えられる。遺物は古墳前期主体で、中期の甕や9世紀代の武蔵型甕が混じる。器種は大形甕が多く、甕、鉢が混じる。高環と甕かとみられるものは僅かである。鉢は平底で口径大きく口縁部やや内湾するもの1個体(1)、小形丸底形で表面ミガキ、薄手で精製のもの1個体(2)、小形丸底破片数点、甕

かとみられるものは折返し口縁の体部-口縁部2個体、大形甕は突出する平底3個体、甕はS字襷1個体(3)である。本遺構の年代は8期と考えられる。

SX072 (第13・78図、第56表)

位置 II区調査区、Bオ-19-7・8・12・13グリッドに位置する。東にSI069・071A・071Bが近接してあるほか、南東2.5mにSI073がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-54°-Eである。規模は長径3.70m、短径2.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-19-7 №1-46・1・2 (№1-46の一群の中に№1・2が混在)、Bオ-19-8 №13で遺物は少ない。標高は24.300-24.761mだが、このうち遺構内北寄りにありII-III層に相当する極端に高い位置から出土する№11・38・43-46など、IVc・IVb層とみられる低い位置から出土する数点の遺物を除くと標高24.4-24.6m前後のものがほとんどであり、層的にはほぼIVa層(一部III層にかかる可能性あり)に相当すると考えられる。遺物は高坏と甕のみで、高坏は小さな坏部片、甕は薄手で外面ケズリのものである。グリッド出土遺物としては、前期末-中期初頭と9世紀代の遺物があり、前期では甕主体に甕、高坏、器台などが僅かに含まれ、器台は脚部片1個体、高坏は脚部片僅か、甕はS字2個体、単口縁2個体、台付甕台部2個体、甕は厚手かつ大形で突出する平底で底部内面砂貼付1個体(1)である。9世紀代は内面黒色処理の土師器环、須恵器环、武蔵型甕、須恵器甕などである。本遺構の年代は前期末-中期初頭と考えられる。

SX075 (第13・78図、第57表)

位置 II区調査区、Bオ-14-24・25、Bオ-19-4グリッドに位置する。東にSX076、南にSI078・090が近接してあるほか、北西にSI073、北東にSI095がそれぞれ近接してあるものとみられる。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径4.40m、短径4.35mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-14-24 №1-53・1-19 (№1-53の一群の他に、西部中心に№1-19が混在)で遺物は中央東寄りにやや集中する。標高は24.247-24.711mだが、このうちII-III層に相当する極端に高い位置やV・IVc・IVb層とみられる低い位置から出土する数点の遺物を除けば標高24.4-24.6m前後のものがほとんどであり、層的にはほぼIVa層(一部III層にかかる可能性あり)に相当すると考えられる。遺物は少なく、古墳前期が主体で9世紀中葉頃の遺物が混入する。前期は甕、大形甕主体で鉢もあり、鉢は小形丸底形1個体、口縁部1個体、大形甕は突出する平底3個体、平底1個体ほか胴部片あり、甕は外面ハケ後ケズリのもので多く、形状の崩れたS字1個体(2)、単口縁1個体、台部1個体である。9世紀の遺物は土師器非口縁部1個体(1)、須恵器甕胴部片1点、コノ字状口縁部の武蔵型甕1個体である。SX075があるグリッド(Bオ-14-24グリッド)の遺物を見ると前期土器は僅かで9世紀代の遺物が多く、土師器环片、須恵器环片、須恵器甕片2点、武蔵型甕片などがある。本遺構の年代は10期と考えられる。

SX076 (第13・78図、第58表)

位置 II区調査区、Bオ-14-25、Bオ-15-21、Bオ-19-5、Bオ-20-1グリッドに位置する。西にSX075が近接してあるほか、北にSI095が近接してあるものとみられる。重複なし。形状・規模 円形で、規模は長径3.85m、短径3.60mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-14-25 №1-24・1-4 (№1-24の一群の他に、西部中心に№1-4が混在)、Bオ-15-21 №1-22・23で遺物はまばらに存在する。標高は24.247-24.711mだが、このうちII-III層に相当する極端に高い位置やV・IVc・IVb層とみられる低

い位置から出土する数点の遺物を除けば標高24.4-24.6m前後のものがほとんどであり、層位的にはほぼIV a層（一部III層にかかる可能性あり）に相当すると考えられる。遺物は少なく9世紀代のものが主体で前期、中期の遺物が混じる。内面黒色処理の土器器環1個体（1）、須恵器環3個体（2）、武蔵型台付甕1個体（3）、須恵器甕は3個体のうち1個体はSX072と接合（6）、1個体はSX072出土破片と同一個体とみられる（7）。混入する遺物は前期で小形丸底鉢1個体、小形壺片、ハケ甕片、中期で甕口縁部片などである。4、5は8世紀代の混入か。本遺構の年代は9世紀代と考えられる。

#### SX077（第13図）

位置 II区調査区、Bオ-14-21・22グリッドに位置する。東にSI074が近接してあるとみられるほか、西2mにSI085、北西2mにSX086がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-21°-Wである。規模は長径3.45m、短径3.00mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-14-21 №1-8で遺物はまばらに存在する。標高は24.179-24.474mであり、層位的にはほぼIV b層に相当すると考えられる。器種は甕、高環、大形壺のみで、高環は中空柱状の脚部でやや中央が影らむエンタシス状で内面荒いしぼり目1個体（中期遺物の混入か）、脚部下半で直線的に開く破片1点、大形壺かとみられるものは突出する平底1個体、甕は単口縁で薄手のハケ甕1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX082（第13・78図、第59表）

位置 II区調査区、Bオ-14-3グリッドに位置する。北にSI080が近接してある。重複 西側がSI081と重複する。遺物が出土する高さはSI081の遺構確認面より高いため、SI039より新しいと考えられる。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-63°-Eである。規模は長径1.70m、短径1.60mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-14-3 №1-41で遺物は遺構内全体から出土する。標高は24.268-24.533mだが、極端に低い№9を除けば標高24.4-24.5m前後でまとまっている。層位的にはほぼIV b層（一部III層にかかる可能性あり）に相当すると考えられる。遺物は多めで甕主体に小形壺、中形壺、高環、甕かとみられるもの、大形壺がある。甕は内斜口縁で被熱する深身のもの1個体、小形壺は凹み底1個体、中形壺は凹み底1個体ほか胴部片僅か、高環は上半のみ中実の棒状の脚部で下半は折れて大きく開く3個体（1）、脚部細くて下に向かって僅かに太くなり内面きれいにケズリで上端三角に尖るもの1個体、甕は折返し状に口縁部が厚くなるもの1個体、大形壺は頸部片、胴部片など僅か、甕は厚手な単口縁6個体+α（2）、平底2個体である。本遺構の年代は中期前葉（TK73段階）と考えられる。

#### SX086（第13図）

位置 II区調査区、Bオ-18-5、Bオ-19-1グリッドに位置する。南にSI085が近接してあるほか、南東2mにSX077がある。重複なし。形状・規模 不整楕円形で、南北方向の中軸線はN-78°-Wである。規模は長径3.40m、短径2.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-18-5 №1-7で遺物はまばらに存在する。標高は24.378-24.674mで、このうち№1・2・4は24.6m以上と高い位置にあり、II-III層出土遺物とみられる。これ以外は標高24.4-24.5m前後でまとまっており、層位的にはほぼIV b層（一部III層にかかる可能性あり）に相当すると考えられる。遺物は古墳前期9-10期、中期前葉～中葉、古代（9世紀代か）が混在する。前期は口縁短く外反する中形壺1点、大形壺片1点、台付甕1点、甕片1点、中

期前葉～中葉では高環坏部片で大形で内面にジグザグ状のミガキ入るもの1点、古代では喪口縁部片1点である。本遺構の年代は比較的遺物が多いことから古墳前期9-10期としておく。

## SX087 (第13図)

位置 Ⅱ区調査区、Bオ-24-3グリッドに位置する。南にSX067が近接してあるほか、東5mにSX066がある。重複なし。西半の範囲は不明である。形状・規模 円形と推測される。残存部分でみると、規模は長径2.60m、短径は確認できる部分で1.10mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-24-3№1で個別に取り上げた遺物は1点のみであり、標高は24.366mである。層的にはほぼIVb層に相当すると考えられる。遺物は古墳時代中期と9世紀代の土器であり、中期は高環坏部片2点、大形壺片3点、9世紀代は武蔵型喪胴部片2点、平底片1点である。本遺構の年代は中期としておきたい。

## SX091 (第13・78・79図、第60表、図版一〇〇)

位置 Ⅱ区調査区、Bオ-19-20、Bオ-20-16グリッドに位置する。南西にSI068が近接してあるとみられるほか、北西5mにSX067、北6mにSX066がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-59°-Eである。規模は長径3.90m、短径2.85mである。覆土の状態 不明である。

遺物 Bオ-19-20№2-32で遺物は少ないが、南西部に集中する。標高は24.259-24.688mだが、このうち標高24.6m以上と極端に高い位置から出土する№25・26などはⅡ～Ⅲ層の遺物と考えられ、本遺構とは関連しないものと考えられる。これらを除けば標高は24.3-24.5m前後であり、層的にはIVb層上面からIVa層に相当すると考えられる。遺物は中期前葉～中葉主体に前期9-10期、9世紀代がそれぞれ混入する。中期の遺物は一定量あり、喪主体に中形壺、高環、甕が混じる。中形壺は埴形で長くハの字の口縁部1個体(4)、高環は中空柱状の脚部で下に向かって僅かに開き、下半屈曲して開くもの1個体(2)、甕は大形で底部6孔のもの1個体(5)、喪は厚手な単口縁の喪でほぼ同形同大のもの4個体(6)である。前期遺物は小形丸底鉢、高環、台付喪などで、鉢は口径大きく小形丸底形で同形同大2個体(1)、中形壺は口縁部短く内湾するほぼ完形の1個体(3)である。9世紀代は須恵器高台付環、武蔵型喪などである。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。

## SX092 (第13・79図、第61表、図版一〇〇・一〇二)

位置 Ⅱ区調査区、Bカ-11-2グリッドに位置する。東にSX032、南にSX033、西にSX041、北にSX040がそれぞれ近接してある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-82°-Eである。規模は長径3.40m、短径2.20mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-11-2№1-32で遺物は少ないが、南側にやや集中する。標高は24.266-24.471mであり、層的にはIVb層からIVa層に相当すると考えられる。遺物は古墳前期主体に中期の遺物が混入する。前期では台付喪主体に台付鉢とミニチュア土器が混じる。台付鉢は1個体(1)、台付喪はS字、薄手で表面調整不詳だがしっかりした作りの1個体(2)、ミニチュア土器は甕形1個体(5)、鉢形1個体(4)である。混入する中期前半の遺物は内斜口縁埴や甕などのほか、剣形の石製模造品1個体(6)がある。グリッド出土遺物としては鉢、甕、ミニチュア土器があり、鉢は口径大きくくハの字口縁、薄手かつ丁寧な作りで有段口縁状の口径大きい鉢に類似するもの1個体、口縁部短い小形丸底形かとみられるもの2個体、甕はS字1個体、小形甕1個体、台部2個体、ミニチュア土器は鉢形1個体(3)である。本遺構の年代は9-10期と考えられるが、甕からすると

9期寄りとも思える。

#### SX093 (第13図)

位置 II区調査区、Bオ-10-14・15・19・20グリッドに位置する。北にSX044が近接してあるほか、南東1mにSI036、南2mにSX037、南西2mにSX038がそれぞれある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-76°-Wである。規模は長径4.20m、短径2.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bオ-10-14・15・19・20 №1-32、Bオ-10-15 №1-6 (№1-6が№1-32の一群と混在)で遺物は少なく、まばらに存在する。標高は24.146-24.412mであり、層的にはIVb層からIVa層に相当すると思われる。器種は鉢、中形壺、高環、大形壺、甕、碁器台などで、鉢は小形丸底形で外面平らで内面のみ段を持つ2個体、口径大きく二重口縁で内外面赤彩1個体、中形壺は球胴で口縁部ハの字1個体、高環は環部片と脚部片僅か、大形壺ははっきりした折返し口縁1個体、甕は外面ハケのちケズリが多く入るものが多く、口縁部下半やや厚く上半薄く内面段となる丸みを持つ受口状のもの1個体、外面ケズリ主体の台部1個体、碁器台はX字状で脚は少し内湾するもの1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられ、甕からすると10期寄りと思われる。

#### SX094 (第13・79図、第62表、図版一〇一)

位置 II区調査区、Bカ-16・7・11・12グリッドに位置する。南西にSX059が近接してあるほか、西3mにSX060がある。重複なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-28°-Wである。規模は長径4.30m、短径3.10mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-16・7・11・12 №1-112で遺物は多く、中央に集中する。標高は23.908-24.352mと幅広いが、このうち完形に近い遺物などは標高24.0m以下から出土しており、本遺構がV層を掘り込む深い遺構である可能性が示される。23.9m付近を床面とする竪穴住居跡であろうか。層的にはV層からIVc層、IVb層、IVa層に相当する。器種は大形壺主体で、壺、中形壺、高環、脚付鉢、大形壺、甕もありミニチュア土器は僅かである。壺は深身の内斜口縁2個体+α(1)ある。小形丸底形の鉢(2)は混入か。中形壺はほぼ完形1個体(4)、高環は環部大きく有稜1個体、中空柱状で下半屈曲し大きく開く脚部3個体、脚付鉢は異形で角張った形の鉢で、脚はラッパ状に開くもの2個体(3)、大形壺は口縁部二重口縁状で底部を除きほぼ完形1個体(5)、二重口縁状1個体、ハの字にやや長く開く口縁部1個体、甕は厚手な単口縁2個体、ミニチュア土器は鉢かとみられるもの1個体である。本遺構の年代は中期前葉~中葉(TK73~216段階)であり、TK73段階に近いと考えられる。

#### 4. その他の遺物 (第79・80図、第63表、図版一〇一・一〇二)

遺構とは関連せずに出土した遺物を図示する。石鏃(1)は弥生時代であろう。古墳時代では甕1個体(7)、小形壺1個体(4)、高環2個体(5・6)、壺1個体(8)、小形の甕1個体(9)、甕3個体(10・11・12)、剣形の石製模造品1点(16)、丸玉1点(14)、円筒埴輪片1点(13)である。古代では須恵器環1個体(2)、灰釉陶器皿1個体(3)である。このほか、砥石1点(15)、刀子1点(17)、棒状鉄製品(18)がある。

## 第4節 III・IV区の調査

## 1. 竪穴住居跡

Ⅱ区では奈良・平安時代の住居跡はやや高い場所を選地していることを指摘したが、Ⅲ区においてもSI116・117などはⅣA層上面と比較して周辺より30cm以上高い場所にあり、同様の特徴が指摘できる。

## SI079 (第12図、図版六七)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-19-16・17・21・22グリッドに位置する。北東にSX067、南西にⅢ区SD119が近接してあるほか、南東4mにSI069がある。重複 北西隅がⅢ区SI102Bと重複するが、新旧関係は確認できていない。平面形 方形で、北東辺より南西辺がやや短い。南北方向の中軸線はN-41°-Eである。

規模 北西-南東方向が3.83mで、南西辺付近は3.50mである。南西-北東方向は3.48mである。覆土の状態 第1-第4層で、第2層に焼土と炭化物を含み、第3層は焼土からなる。炭化物と焼土は床面からやや浮いており、住居跡中央で中軸線に沿うような形で確認された。炭化物は北東壁際にあるカマド周辺から縦長に存在し、範囲は200×85mである。炭化物範囲南側に第3層に相当する焼土があり、範囲は116×70mである。このほか北隅部付近にも焼土の集中が確認できる。これらは上層の焼失によって形成されたと推測されるが、カマドに由来するものも混在する可能性はある。壁 残存壁高は10-18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。

柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北東壁際南東寄りに位置する。重機によりカマド上面と右袖部を削平してしまっており、残存状態は良くない。煙道部は壁を8cm程度「U」字状に掘り込んで作られており、現存するカマドの規模は63×52cm、右袖部が左袖部と同様であったとすると93×52cmと推定される。袖部は黒色土に多量の焼土と粘土が混じる土(第2層)で作られており、北東壁から48cmの長さを確認できる。火床面は床面から平坦に続いており、火床面から煙道へはなだらかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第1層で、焼土や炭化物を僅かに含む。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡北西側に多い。遺物量は少なく器種は裏、坏などのみで、須恵器坏と壺が多い。須恵器底部片を転用した紡錘車や多量の管状土鍾も出土し、古墳前期土器が僅かに混入する。床面直上のものは僅かで、遺物の多くは床面から10-15cm程度浮いている。管状土鍾は住居跡中央からやや南西寄りの80×35cmの範囲に集中する。高さは床面上10cm前後であり、焼土層である第3層の上面に乗っている。上層に置かれていた網が上層消失とともに落下したものと推測できる。土師器ロクロ整形坏は内面黒色処理の底径6cm以下のもの1個体、土師器ロクロ整形高台付坏は1個体、須恵器坏は3個体で焼成良好で底部糸切り難し後無調整1個体、焼成不良で口縁部丸く外反する形の口縁-体部片1個体、口縁部丸く外反する形1個体、須恵器小形長頸壺1個体、須恵器壺1個体、武蔵型台付裏は2個体あるほか破片僅か、紡錘車は土師器坏底部転用のもの1個体である。土鍾は31点あり、長さや重量から大形、中形、小形に区別できる。大形は15点(№1.3.4.6.8.9.10.11.14.19.20.24.32.36.37)あり、長さは4-5cm、完形で見ると重量10.02-18.71g、平均では14.81gである。中形は7点(№2.7.12.13.16.17.34)あり、長さは3-4cm、すべて完形で重量は6.04-11.07g、平均では8.22gである。小形は9点(№5.15.18.21.22.23.25.35。Ⅱ区SI079 №9)あり、長さは2-3cm、すべて完形で重量は1.61-2.08g、平均では1.85gである。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

## S1102A (第15図)

位置 III区調査区、Bオ-24-1・2グリッドに位置する。南西にSD119が近接してあるほか、北東3mにS1103、北西4mにS1123がそれぞれある。重複 カマド煙道と火床面のみを確認したもので、住居跡の規模・形状は把握できなかった。S1102Bと重複し、S1102Bの北壁と覆土上半の一部を切る。平面形 不明である。中軸線は、カマド煙道の方向を参考にするると真北からやや西に傾き、N-20°-Wほどとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。カマドを確認した標高24.6m前後で見ると、本住居跡よりも新しい第Ⅲ層と考えられる明褐色土が周囲に確認できる。この層は床面とほぼ同じかやや低い位置まで達している部分が多いことから、本住居跡は調査以前にすでにほとんどが失われ、僅かしか残存していなかったと考えられる。壁 不明である。床面 不明である。標高は24.6mほどであったとみられる。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。煙道と火床面が確認できるのみで、残存状態は良くない。煙道部は地山を溝状に掘り込んで作られており、現存長は36cm、現存幅は26cm、深さは5cmである。火床面は床面から僅かに下がっていたと考えられ、ほぼ平坦に煙道底面へと続き、先端は緩やかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第1・第2層で、焼土を主体とする第1層は天井内面の崩落、第2層は崩落前の流入土であろう。貯蔵穴 不明である。遺物 前述のように住居跡の大部分が失われているとみられるため、伴う遺物はごく僅かである。遺構の状況などからS1102Bより新しい古代の所産とみられる。9世紀後半ないし10世紀頃と推定できよう。

## S1102B (第15図、図版六七・六八)

位置 III区調査区、Bオ-19-21・22、Bオ-24-1・2グリッドに位置する。南西にSD119が近接してあるほか、北東3mにS1103、北西4mにS1123がそれぞれある。重複 住居跡北壁と覆土上半の一部がS1102Aに切られる。南辺はS1079と重複するが、新旧関係は確認できていない。北東部と南西部に幅55cmのトレンチが設定されており、これにより壁と床面の一部が不明となっている。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-1°-Eである。規模 東西方向が4.38m、南北方向が4.34mである。覆土の状態 第2・第3層で、上面は第Ⅲ層とみられる明褐色土(第1層)で覆われる。炭化物や焼土は少なく、北壁際に焼土と炭化物それぞれの集中部分がある程度である。壁 残存壁高は6-18cmであり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。北壁際に焼土や炭化物の集中があり、これが火処の存在を示すかもしれない。カマドが存在した可能性があろう。貯蔵穴 不明である。遺物 焼土や炭化物がある北壁際中央付近で土器器裏などが僅かに出土する。床面からはやや浮いている。土器は少破片ばかりで古墳前期土器が多く混入する。須恵器はない。口縁部断面口の字の武蔵型甕1個体が認められる。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

## S1103 (第16図)

位置 III区調査区、Bオ-24-7・8・12・13グリッドに位置する。北東にS1105が近接してあるほか、南西3mにS1102、西3.5mにS1123、北5mにS1106がそれぞれある。このうちS1105・106・123とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複 なし。東辺の2ヶ所と中央から南西部周辺において幅50cmのトレンチが設定されており、これにより壁と床面の一部が不明となっている。平面形 北辺が狭い方形で、南北方向の中軸線はN-16°-Wである。規模 東西方向が3.63m、南北方向が3.60mであ



る。北辺の長さは3.40 mほどであり、南辺より北辺が狭くなっている。覆土の状態 第4・第5層であり、上面はⅢ層（第1層）、Ⅳa層（第2層）、Ⅳb層（第3層）に覆われている。壁際に堆積する第5層は地山である第Ⅴ層を多く含む。壁 残存壁高は7-13cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 南西隅がやや低いなど緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 ほぼ住居跡全体が浅く掘り込まれ、黒色土と灰色粘土ブロックからなる灰黒色土（第6層）で貼床される。床面からの深さは3-6 cmである。柱穴 西壁際に1本（P1）、東壁際に2本（P2・P3）ある。P1は径29×28cm、深さ28cm、P2は径29×27cm、深さ12cm、P3は径27×25cm、深さ16cmである。覆土は不明で、柱痕の有無も確認できていない。本住居跡に伴うかどうかとも定かではない。壁溝 不明である。火処 不明である。

貯蔵穴 不明である。遺物 北西部を除く住居跡全体から遺物が出土しており、南東隅付近に集中する。このうち多くが床面直上ないし床面からやや浮いた位置からの出土である。標高24.3 m付近までが本住居跡の覆土で、これより高い位置から出土する遺物はⅢ・Ⅳa・Ⅳb層に相当するため、本住居跡には伴わないものとなる。遺物は一定量あり、器種は甕主体で壺もある。高坏は少なく、鉢は僅かに認められ、精製、薄手の小形丸底鉢がある。鉢は薄手精製の小形丸底形1個体、高坏は脚部で4個体あり、ハの字に開く形状のものの中実柱状のものがある。脚部ハの字に開き大きな3孔のもの1個体は有窓器台の可能性もある。柱状に近いハの字の脚部で3孔を持つもの1個体、ハの字に開く脚部1個体、短い中実柱状で下半は2段に開くもの1個体、中形壺は球胴で頸部狭い胴部片1個体、大形壺は赤彩で甕のような形で頸部狭く口縁部短く外反するもの1個体、複合口縁で砂っぽい胎土1個体、大形で球胴1個体、平底2個体、甕は形状の崩れたS字1個体、単口縁で口縁部やや丸味を持ち外反するものが主体で4個体+aあり、やや内湾気味の口縁部2個体、台付甕の台-胴部中位1個体、小形台付甕の台部1個体がある。本遺構の年代は8期末-9期初頭と考えられる。

#### S1104（第15・80図、第64表）

位置 Ⅲ区調査区の東端、Bオ-24-15・19・20・25、Bオ-25-11・16・21グリッドに位置する。西にS1105が近接してある。S1105とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複 なし。北東-南西部は湧水対策の溝と堤防のため不明である。平面形 西辺と北辺が確認でき、調査範囲内では東辺はなかったことから、方形ないしは東西方向に長い長方形と推定できる。周辺の住居跡を参考にすれば、方形の可能性が高い。南北方向の中軸線はN-22°-Wである。規模 南北方向は計測可能な部分では6.34 mだが、本来はより長いとみられる。東西方向は不明で、確認できる部分はおよそ6.20 mである。覆土の状態 焼土のほか炭化物を多く含む第7層であり、中央西寄りでは炭化材が残存する。覆土上面はⅣa層（第1層）とⅣb層（第6層）に覆われている。なお、Ⅳa層・Ⅳb層間にある第2-第5層は古墳時代中期前後に形成された層とみられ、これに対応するように南西隅と住居跡北半では第7層より高い標高24.3-24.5 mからの遺物出土が確認できる。詳細は不明だが、これらは本住居跡とは直接関連しない遺物集中と捉えることができよう。壁 残存壁高は10-15cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。南西部周辺では床面付近において炭化材が面的に確認されている。炭化材の形状や状態は確認できていないが、床面に敷いた籠状の敷物が炭化したものの可能性があろう。掘方・貼床 ほぼ住居跡全体が浅く掘り込まれ、灰褐色粘土主体の灰褐色土（第8層）で貼床される。床面からの深さは3-8 cmである。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡中央から西寄りにかけての長さ2 mほどの帯状の部分、南西寄りの径70cmほどの範囲の2ヶ所

に遺物が集中する。このうち多くが床面直上ないし床面からやや浮いた位置からの出土である。標高 24.3 m 付近までが本住居跡の覆土であるため、これより高い位置から出土する遺物は本住居跡に伴わないものとなる (No.4.7-10.13-36.38-41.46)。遺物は多く、器種は甕主体に高環や鉢があり、甕は僅かに出土する。甕は中形のものがある。小形丸底鉢は鉢形のほか壺に近い形状のものがある。鉢は小形丸底鉢 3 個体、口縁部二重口縁状で口径大きいもの 1 個体、赤彩で口径大きく口縁部複合口縁状に粘土貼付けのもの 1 個体である。高環は柱状脚主体だがハの字に開く脚部片もある。坏部有稜で口縁部やや内湾 2 個体、坏部有稜 2 個体、脚部中空柱状 1 個体、太めの中空柱状の脚部 1 個体、薄手でハの字に開く脚部で孔あり 1 個体、中形壺は埴形の破片 1 個体、球胴で頸部広く口縁短く外反し薄手で砂っぽい胎土のもの 1 個体、甕形で被熱なく口縁部片口状 1 個体、甕は甕底部様の形状で単孔のもの 1 個体、鉢形で器高高いもの 1 個体、大形壺は甕に似た調整で頸部広く球胴 1 個体 (1) ほか胴部片僅か、甕は中形単口縁の台付甕 1 個体 (5)、S 字口縁台付甕 2 個体 (4)、単口縁台付甕 1 個体、口縁部受口状の平底甕 1 個体 (2)、単口縁で平底 1 個体 (3)、突出する平底 4 個体 +  $\alpha$ 、台部 4 個体 +  $\alpha$ 、S 字 2 個体、単口縁 1 個体、単口縁で丸く外反するもの 1 個体、被熱著しい小形球胴台付甕は 1 個体である。礫は 1 点あり、楕円形礫の両端が両面から剥離される長さ 15cm くらいのものである。礫器であろうか。本遺構の年代は 9 期でも古い方と考えられる。

#### S I 1 0 5 (第 17 図)

位置 III区調査区、Bオ-24-13-14-18-19-24 グリッドに位置する。東に SI104、北西に SI106、南西に SI103 がそれぞれ近接してある。3 軒とも本住居跡と中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。

重複 なし。住居跡内外にはグリッドに沿って幅 50cm のトレンチが設定されているため、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 南辺と西辺が狭い方で、南北方向の中軸線は N-20° -W である。規模 東西方向が 6.60 m、南北方向が 6.40 m である。西辺の長さは 6.00 m、南辺の長さは 5.70 m ほどである。

覆土の状態 第 3・4 層で、覆土上面は IV a 層 (第 1 層) と IV b 層 (第 2 層) に覆われている。なお、住居跡南西部を中心に遺物が出土するが、これらの標高はおおよそ 24.4-24.5 m であり、この高さは覆土ではなく IV a 層・IV b 層に相当する。よって、個別に取り上げた遺物のほとんどは本住居跡とは関連しないものと考えられる。壁 残存壁高は 8-14cm であり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 個別に取り上げた遺物のうち本住居跡に伴う可能性があるのは、No.3-39 などのみである。遺物は少なく、器種は甕主体で高環は少なく、赤彩のミニチュア土器や壺が僅かに出土する。高環は中央柱状の脚部で下半が丸く開く小形のもの 1 個体、坏部浅く有稜 1 個体、脚部中空柱状で下半屈曲して大きく開くもの 1 個体、ほか破片少量がある。大形壺は二重口縁の破片、甕は単口縁が 6 個体くらいで薄手多いか中期の甕のような厚手の個体もある。S 字は 3 個体うち 1 個体、口縁部受口状 1 個体、台部 2 個体、平底 4 個体である。台器台は 1 個体ある。本遺構の年代は 10 期と考えられる。

#### S I 1 0 6 (第 12 図)

位置 III区調査区、Bオ-24-16-17-18-21-22-23、Cオ-4-1-2-3 グリッドに位置する。南東に SI105 が近接してあるほか、南 5 m に SI103、南西 6 m に SI123、西 9 m に SI110-122 がそれぞれある。このうち SI103-105-123 とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複 なし。住居跡内外にはグリッドに沿って幅 50cm のトレンチが設定されているため、壁と床面の一部が不明となっている。

平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-32°-Wである。規模 東西方向が8.15m、南北方向が7.87mである。覆土の状態 第5・6層で、第6層は地山である第V層の粘質土ブロックを含む。北壁際中央には径50cmほどの範囲で炭化物の集中がある。覆土上面はⅢ層(第1層)、Ⅳa層(第2層)、Ⅳb層(第4層)に覆われている。なお、Ⅳa層・Ⅳb層間にある第3層は古墳時代中期前後に形成された層とみられ、南西部ではこの層に帰属すると考えられる標高24.3-24.5mからの出土遺物がある。詳細は確認できないが、少なくともこれらは本住居跡と直接関連しない遺物と捉えられる。壁 残存壁高は12-20cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 部分的に浅く掘り込まれたあと、貼床されているとみられる。床面からの深さは3-7cmである。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 南壁際中央及び北壁際中央にそれぞれ集中部分があり、床面直上ないし床面からやや浮いた状態で遺物が出土する。南西部では高い位置で遺物が多く出土するが、これらは本住居跡とは関連しない遺物である。個別取り上げ遺物は№1-50まであり、このうち関連しない遺物は№1.2.3.6.8.9.12.14.15.18.26.27.28.29である。遺物は多い。個体数では高坏が最も多く、破片数では甕が多い。小形壺、中形壺は僅か、塊はごく僅かである。塊は内斜口縁1個体ほか破片僅か、小形壺は破片少し、中形壺はやや潰れた球胴の体-底部1個体、高坏は全て似た形状と法量の有縁の坏部6個体あり、脚部はおおむね中空柱状で下半鋭く屈曲して開くタイプ5個体あり、中空柱状で下半屈曲して開くもの1個体、大形壺はなし、甕は長くハの字に開く口縁部のもの2個体、長胴の外周ケズリの甕1個体がある。僅かな破片のS字口縁台付甕、単口縁ハケ甕口縁部2個体は混入であろう。礫は5点あり、うち1点は不定形で部分的に研磨され、焼けハジケともみられる痕跡がある。鉄滓は1点出土する。本遺構の年代は中期中葉(TK216段階)と考えられる。

#### SI107 (第18図、図版六八)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-18-23・24、Bオ-23・3・4・5グリッドに位置する。北東1.5mにSD119があるほか、東6mにSI102・079、北東6mにSI123がそれぞれある。重複 北西隅がSI108と重複し、SI108南壁と覆土の一部を切る。中央西寄りがSE129に切られる。住居跡北東部は地震によって沈下しているとみられ、住居跡内に亀裂が生じている。亀裂による段差は5cm程度である。南辺付近にはグリッドに沿う幅70cmのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 方形である。北辺が長く北東隅が突出するようにも見えるが、これは北東部が沈下によって移動した結果とみられる。南北方向の中軸線はN-22°-Eである。規模 東西方向が4.67m、南北方向が4.25mである。北東部が変形しているとする、本来の東西方向の規模は4.35mほどと推定される。覆土の状態 不明である。壁 残存壁高は14-18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 ほぼ平坦だが、住居跡廃絶後の地震に伴って住居跡北東部が一段沈下しており、住居跡内に亀裂が生じている。段差は5cm程度で、亀裂は屈曲しながら住居跡を縦断している。掘方・貼床 不明である。柱穴 南西部に2本(P1・P2)ある。P1は径34×32cm、深さ24cm、P2は径32×29cm、深さ25cmで規模はよく似ている。覆土等詳細は不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 南西隅から北東隅にかけて幅の広い帯状に遺物が集中する。床面付近から出土するものは少なく、多くは標高24.3-24.5m程度と高く浮いている。南西隅が最も高く、北東隅に向かって低くなっているが、これは沈下によるものだろう。出土位置からすると、多くは本住居跡と直接関連しない古墳時代中期以降に属する堆積層中の遺物の可能性もある。遺物量は多い。器台や赤彩高坏、赤彩壺片がある点は古そうだが、高坏脚部は中実柱状と中実棒状ばかりで

ある。甕はS字口縁より単口縁が多く、頸部が丸い形状の個体もある。底部は台付が多い。鉢1個体は口径大きい小形丸底状の鉢であり、薄手で内外面はミガキ調整されるなど丁寧な作りである。器台は4点ありうち赤彩で受部皿状1個体、受部有椀で口縁部外反するもの1個体は棒状脚で、受部の孔は下が貫通していない。小形壺は凹み底1個体、中形壺は単口縁で球胴丸底1個体、口縁部長く伸びる埴形の口縁部片1個体、凹み底の底部1個体、丸底の底部1個体、埴形の胴部上半1個体、高坏は4個体+ $\alpha$ あるが破片ばかりで、脚部中空柱状で内面きれいにケズリ1個体、脚部中実棒状1個体、大形厚手で脚部中空柱状らしきもの1個体など、甕は鉢形単口で底部から開き気味の胴部片1個体である。大形壺は口縁部で8個体あり口縁部外面ハケ整形の口縁部のもの2個体、底部平たく大きい下膨れのもの2個体、平底2個体、赤彩で突出する平底1個体である。甕はS字2個体+ $\alpha$ 、単口縁6個体+ $\alpha$ うち小ぶりなハケ甕2個体あり、台部は多く8個体、平底2個体である。本遺構の年代は9期でも古い方と考えられる。

#### SI108 (第17図、図版六八)

位置 III区調査区、Bオ-23-3・4・8・9グリッドに位置する。北西3mにSI111、北東4mにSI123、東6mにSI102がそれぞれある。このうちSI123とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。

重複 南壁と覆土の一部がSI107に切られる。北東隅がSD119と重複しSD119に切られる可能性が高いが、調査時には確認できていない。住居跡東半は地震によって沈下しているとみられ、住居跡内に亀裂が生じている。亀裂による段差は5-10cmである。西壁付近にはグリッドに沿う幅70cmのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 東辺が長く西辺が短い、やや不整形な方形である。東辺が長いのは東半が沈下に伴って移動した結果で、西半が旧状をとどめていると考える。南北方向の中軸線はN $\cdot$ 20°-Wである。規模 東西方向が5.53m、南北方向が5.50mである。東半が変形しているとすれば、本来の規模はこれよりやや小さくなると推定される。地震の影響を受けていない西辺の規模は4.80mほどである。

覆土の状態 炭化物や白色粘土を含む暗灰褐色土(第1層)である。住居跡中央から南壁付近では炭化材が多数出土する。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は10-21cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 ほぼ平坦だが、住居跡廃絶後の地震に伴って住居跡東半が沈下しており、住居跡内を縦断するように樹枝状に亀裂が生じている。段差は5-10cmで、南側が小さく北側ほど大きくなっている。焼土は住居跡内各所でみられ、南壁際中央では径40cmほどの不整形の範囲に焼土が集中する。住居跡中央では、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている(第2層)。床面に敷いた筵状の敷物の可能性がある。掘方・貼床 壁際が溝状に深く掘り込まれ、暗灰褐色土(第3層)で貼床される。床面からの深さは15-22cmである。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1-P4)ある。P1は径42×40cm、深さ46cm、P2は径33×25cm、深さ34cm、P3は径42×31cm、深さ41cm、P4は径43×32cm、深さ43cmで4本とも一定の深さを持ち、径はP3がやや小さい。柱間寸法は、P1・P2間が2.43m、P3・P4間が2.66m、P3・P1間が2.03m、P4・P2間が2.52mで、P2、P4が住居跡の形状に合わせるようにP1やP3から距離を置くため配置は方形とはならない。配置は当初から不整形だったと思うが、地震によって位置は変化しているとみられる。覆土や柱痕の有無は不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡全体から出土し、中央部に多い。北西隅を中心に床面から20cm前後浮いて出土する遺物があるが、これらは覆土より上層のIV A層・IV B層などに帰属し、本住居跡と直接

関連しないものとする。伴わないとみられる遺物は№3.4.9.10.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29である。遺物は多く、鉢と高坏に古い様相が残る。受口状の甕はまだ形状が明確な受口にならない段階であろうか。器種は甕主体でほかはすべて少なく、甕や高坏は僅か、鉢、小形甕、中形甕はごく僅かである。鉢は小形丸底形より古いとみられ、口径大きく底径小さいもの1個体、薄手な小形丸底形の破片2点、小形甕は胴部片や口縁部片など4点、中形甕は口縁部片、胴部片、底部片など4点、高坏は破片20点くらいで脚部は上半中実の柱状、中実棒状などの破片があり、赤彩は2点、やや細くハの字に開く脚部で3孔のもの1個体、大形甕は20点くらいで二重口縁3個体、単口縁1個体+α、平底1個体、下膨れで平底2個体、甕は外面ハケ整形主体のS字が4個体くらいあるが破片ばかりで量は少ない。受口状の口縁2個体は明確な受口状になりきっていない。単口縁は2個体、単口縁で口縁端面取りのもの1個体、単口縁で口縁部丸く外反するもの1個体、灰色で精良な胎土の甕1個体、台部7個体、平底5個体である。が器台は1個体ある。本遺構の年代は8期末～9期と考えられる。

## S1110 (第16図、図版六八)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-23・18・19・23・24、Cオ-3・3・4グリッドに位置する。南西にSD119が近接してあるほか、北2mにS1122、西3mにSD125、西5mにS1112がそれぞれある。中軸線の方向が類似するS1102とは15m離れている。重複 土層断面観察から、覆土上位に古代と考えられる溝状の遺構が複数あることがわかっており、本住居跡の覆土はこれらの溝に切られている。遺構の詳細は不明だが、東端のものはほぼ南北方向に伸びていたとみられる。一部は西にあるSD125と類似した北西-南東方向に伸びていた可能性もあろう。付近にはグリッドに沿う幅60cmほどのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 不整な長方形で、西辺が東辺より長い台形状となる。南北方向の中軸線はN-1°-Eである。規模 東西方向が4.87m、南北方向が6.16mである。東辺は5.50mほどである。覆土の状態 第6・7層で、第7層は地山であるV層の砂質粘土を多く含む。覆土上面はⅢ層(第2層)、IVa層(第4層)、IVb層(第5層)に覆われていて、IVb層は住居跡内へと入り込むように湾曲する。第3層はIVa層を掘り込んで作られる溝の覆土で、砂と粘土が薄く互層をなして堆積しており、流水があったとみられる。第1層はⅢ層を掘り込む溝で、土層断面の形状から数条が位置を変えて存在したと考えられる。壁 残存壁高は15-23mであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 壁際が溝状に深く掘り込まれるところがあり、地山であるV層の砂質粘土を多く含む第8・9層で貼床される。床面からの深さは8-11cmである。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡内各所から出土しており、中央部に多い。床面から大きく浮いて出土するものは少ない。遺物量は少なく器種は甕主体で、ミニチュア土器、中形甕、高坏、甕が混じる。鉢は内斜口縁に近い口縁部片2点、中形甕は口縁-胴部片で口縁部短く内湾するもの1個体ほか破片僅かで赤彩の破片もある。高坏は大きく有稜の坏部片3個体、脚部は中空柱状で下半で開く形とみられる破片、甕は二重口縁1個体ほか破片6点、甕は外面ハケ整形のS字1個体、台部1個体、突出する平底1個体、単口縁1個体、小形甕片4点、小形台付甕台部1個体、甕形のミニチュア土器1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

## S1111 (第18図)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-22・10・14・15・20、Bオ-23・1・6・7・11・12・16グリッドに位置する。東に

SD125が近接してあるほか、北東4mにSD119、北東5mにSI110、南東3mにSI108、東11mにSI123がそれぞれある。このうちSI108・123とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複 南西部は湧水対策の溝のため不明である。北辺がSI112と重複し、現地での土層観察によりSI112に切られるとされている。土層堆積の状況から、東壁際の覆土上層にはSD128が、西寄りにはSD128に類似する別の溝状遺構が存在した可能性がある。周辺にはグリッドに沿う幅50-80cmのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 東部のみの調査のため不明だが、方形の可能性はある。東辺から見た南北方向の中軸線はN-22°-Wである。規模 不明である。調査した部分は南北方向で9.70m、東西方向は南辺で4.10m、北辺で6.40mほどであり、本来の規模はこれより大きいとみられる。覆土の状態 灰黄褐色粘質土を含む灰黒褐色土(第4層)である。覆土上面はIV a層(第1層)、SD128に類似する溝状遺構覆土の可能性のある黄褐色土(第2層)、IV b層(第3層)に覆われている。東壁際にあるIV b層は、SD128覆土の可能性も考えられる。住居跡中央北寄りでは炭化材が出土する。壁 残存壁高は24-38cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。

柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡全体から出土し、中央やや北寄りに多い。東壁際や南東部、南壁際からも出土するが、これらは床面から20cm以上浮いているため、第1-第3層に帰属し本住居跡とは関連しないと考える。伴わないとみられる遺物は№1-13.15-21.32-34.42.45-69.73.80-83.88-91.93である。遺物は多めで器種は壺主体で甕も多い。加飾壺もある。中形甕や高坏僅か、ミニチュア土器や器台はごく僅かである。甕はS字と単口縁で、受口状もある。器台は受部有稜で口縁部外反、高坏は中空柱状の脚部で内面は粘土のシワありときれいにナデのものがあり、下半は屈曲して開く形状である。坏部有稜で赤彩1点、中空柱状の脚部で内面粘土のシワあり1個体、中形甕は完形で埴形1個体、口縁部が長くハの字のもの2個体ほか破片少量、壺は超大形の二重口縁で端部キザミ1個体、大形で赤彩の二重口縁1個体でこのほか二重口縁3個体、折返し口縁2個体、単口縁で端部内外面に沈線あり1個体、長く単口縁か1個体、頸部に粘土紐貼付けキザミ施すもの1個体、突出する平底3個体、甕は小形台付甕3個体、S字5個体くらい、受口状1個体、単口縁4個体、甕形のミニチュア土器1個体である。本遺構の年代は9期でも古い方と考えられる。

#### S I I 1 2 (第20図)

位置 III区調査区、Bオ-22-19・20・24・25、Bオ-23-16・21、Cオ-2-4・5、Cオ-3-1グリッドに位置する。東にSD125が近接してあるほか、東2mにSD119、東5mにSI110、北東8mにSI122がそれぞれある。北西側には隣接する壁穴住居跡はない。重複 南東部は湧水対策の溝のため不明である。南辺がSI111と重複し、現地での土層観察からSI111を切るとされている。北西部はSD128と重複するが、床面には達せず覆土の一部が切られるのみである。平面形 平行四辺形気味となる、やや不整な方形である。南北方向の中軸線はN-21°-Wである。北東部が突出しているようにも見えるが、これはSI107・108などと同様に地震によって変形したものとも考えられよう。規模 東西方向が8.70m、南北方向が8.64mである。北東部が変形しているとすれば、東西方向の規模はこれよりやや小さくなると推定される。覆土の状態 第5-8層で、下層ほど地山となるV層ブロックを多く含む。覆土上面は第1-第4層に覆われている。第1層はIV a層、第4層はIV b層で、第2層はSD128覆土、第3層はSD128に類似する溝状遺構覆土の可能性はある。第5層は覆土最上層としたが、第4層と似た点も多く、本住居跡を覆う土層の一部かもしれない。壁 残存壁高は33-46cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむ

ね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡内各所から出土するが、ほとんどが床面から30cm以上浮いているため、本住居跡に伴う遺物はごく僅かと思われる。伴うとみられる遺物は№25.26.27.31のみだがそれでも床面付近からではなく20cm以上浮いている。遺物は少なく器種は甕主体で甕や高坏が多く、小形甕や中形甕は僅かである。高坏は中空柱状の脚部、S字甕は胴部上半にやや粗いハケのものが有り時期的にやや新しいとみられ、甕は明確な二重口縁である。小形甕は胴部潰れた球胴で凹み底を持つ中期の小形甕類似のもの1個体、中形甕は球胴の破片など1個体のほか小破片2点のうち1点赤彩、高坏は坏部に丸味を持ち底部小さく有稜2個体、脚部は中空柱状で上半内面に強い縦のナデを残すもの3個体、坏-脚部1個体、外面ハケ整形の坏部1個体、甕は小形1個体、S字で胴部上半粗いハケ4個体、単口縁2個体で少し厚手で中期の甕のような単口縁あり、台部2個体がある。石製模造品(円盤)1点は混入だろう。本遺構の年代は9期でも新しい方と考えられる。

## S1113A (第19図、図版六八)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-3-14・15・19・20グリッドに位置し、南にS1122が近接してあるものとみられる。北西部には隣接する竪穴住居跡はない。重複 カマド煙道と袖部の一部などを確認したのみで、住居跡の規模・形状は把握できなかった。S1113Bと重複し、S1113Bの南東壁と覆土上半の一部を切る。北東部は湧水対策の溝と堤防のため不明である。平面形 不明である。中軸線は、カマド煙道の方向を参考にするとN-25°-Wほどとみられる。規模 不明である。覆土の状態 不明である。壁 不明である。床面 不明である。床面の標高は24.6mほどであったとみられる。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 カマドが北壁際に位置するとみられる。煙道と火床面及び袖部の一部が確認できるのみで、残存状態は良くない。煙道部は壁を25cm程度「U」字状に掘り込んで作られているとみられ、現存するカマドの規模は88×82cmである。袖部は左右とも壁から55cm程度の長さが残存していたと推定する。火床面は床面との段差はなく、煙道へとほぼ平坦に続いたの先端でなだらかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第1・第2層で、焼土を多量に含む第2層は天井内面の崩落であろう。貯蔵穴 不明である。遺物 前述のように住居跡の大部分が失われているため、伴う遺物はごく僅かである。器種は土師器環、須恵器環、武蔵型甕のみである。土師器環はロクロ整形の内面黒色処理1個体、須恵器環の小破片1個体、武蔵型甕は口縁部片1個体である。本遺構の年代は9世紀後半前後と考えられる。

## S1113B (第19図、図版六八)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-3-13・14・18・19・23・24グリッドに位置する。南に2mにS1122がある。S1122とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。北西側には隣接する竪穴住居跡はない。重複 S1113Aに南東壁と覆土上半の一部が切られる。北東部は湧水対策の溝と堤防のため不明である。平面形 北東辺が不明だが、方形と推定される。南北方向の中軸線はN-53°-Wである。規模 北西-南東は4.86mである。南西-北東方向は不明だが、調査した部分は4.60mである。覆土の状態 第1-3層で、炭化物や焼土はほとんど見られない。壁 残存壁高は12-20cmであり、壁は垂直気味に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 南東壁際の床面付近に遺物がまわっており、これら以外に出土位置を把握した遺物はない。南東壁の外側から遺物が出土していることからすると、

本遺構は南東側により広がる形状だったのではないかと推測される。遺物はごく僅かで器種は甕主体に少量、高坏・中形甕・鉢はごく僅かである。鉢は小形丸底1個体、口縁部丸く外反するもの1個体、中形甕は底部片2個体、高坏は中空柱状の脚部とみられる小破片4点、甕は破片15点くらい、突出する平底1個体、甕は平底2個体で、外面ハケ整形主体でケズリはみられないため10期とはならないだろう。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### S1116 (第19図、図版六九)

**位置** Ⅲ区調査区、Cオ-6-20・25、Cオ-7-16・21グリッドに位置する。西4mに規模・形状及び中軸線が類似するS1117があるほかは、隣接する竪穴住居跡はない。西3mにSD130Bがある。S1117とは規模や形状、中軸線の方向などが類似しており、関連が想定される。**重複** 南西部でSD128を切り、カマド煙道がSK124に切られる。**平面形** 長方形で、南北方向の中軸線はN-1°-Wである。**規模** 東西方向が3.44m、南北方向が4.08mである。**覆土の状態** 第1~3層で、第2層に炭化物と焼土を含む。カマド内堆積土との関連は確認できていないが、各層の特徴などから第2層と第3層の間に相当すると思われる。

**壁** 残存壁高は10-27cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。**床面** 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。**掘方・貼床** 不明である。**柱穴** 不明である。**壁溝** 不明である。**火処** 北壁際中央にカマドがある。袖部は残存するが、天井部は失われている。煙道部は浅く、壁から北へ溝状に86cm掘り込んで作られており、カマドの規模は86×161cmである。袖部は青灰色粘質土とIVa層の混土層で、炭化物や焼土も含む青灰褐色土で作られており、北壁から60cm程度の長さを確認できる。左袖部先端には、カマド構築材とみられる扁平な礫が立ったまま出土する。礫は内側へと僅かに傾斜しており、幅は28cm、厚さは8cmで上面は確認面付近であり、下端は床面を数cm掘り込んでいるとみられるため長さは30cm以上と推定される。床面から火床面へはほぼ平坦に続き、住居跡北壁にあたる位置でやや急に直線的に立ち上がったのち煙道となる。煙道は確認面の幅が35cm前後あり、南から緩やかな段を経て北に向かい確認面に至る。覆土は第1-第5層で、第1層は袖部を構成する粘土とほぼ同じ青灰褐色粘土層であり、天井部に相当する。第2層は炭化材層、焼土を多く含む第3・第4層は天井内面の崩落、第5層は天井崩落前の堆積土とみられる。火床面中央には、支脚とみられる四角柱状の礫が直立して立っている。火床面の掘方に数cm埋め込んで据えてあり、法量は長さ19×幅10×高さ22cm、上端は火床面から18cm上となる。カマド周辺に遺物は多く、完形に近い環3点が出土する。No.7の須恵器環は第1層上面から逆位の状態で、No.2とNo.4はともにカマド前面の床面からやや浮いた位置から、No.2は正立、No.4は逆位の状態で出土する。祭祀行為であろうか。

**貯蔵穴** 不明である。**遺物** カマド周辺のほか、住居跡内各所から出土する。床面から10cm以上浮いているものもあるが、多くは床面付近からの出土である。遺物は僅かで、器種は武蔵型甕と須恵器環主体で土師器環と土師器鉢が僅かに含まれる。土師器環はほぼ完形の北武蔵型環1個体で8世紀後半の遺物の混入とみられる。須恵器環は4個体で焼成良好2個体、やや不良1個体、極めて不良1個体である。完形の須恵器環1個体と原始灰釉瓶類破片1個体とともに8世紀後半の遺物の混入とみられる。武蔵型甕はコの字形の口縁部1個体、底部1個体、鉢は口縁部直立し甕の可能性のあるもの1個体である。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

#### S1117 (第21図、図版六九・七〇)

**位置** Ⅲ区調査区、Cオ-6-18・19・23・24グリッドに位置する。東にSD130B、西にSD132がそれぞれ



近接してある。東4mに規模・形状及び中軸線が類似するSI116があるほかは、隣接する壁・柱・土居跡はない。SI116とは規模や形状、中軸線の方向などが類似しており、関連が想定される。西側は緩やかに低くなっているため、微高地の西縁に位置するといえる。重複なし。平面形 東辺に比べ西辺が短いやや不整な長方形で、南北方向の中軸線はN-7°-Wである。規模 東西方向が3.87m、南北方向が4.52mである。西辺は4.10mほどである。覆土の状態 炭化物を僅かに含む灰褐色土(第1層)である。壁 残存壁高は3-22cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 北壁際中央にカマダがある。袖部は残存するが、天井部は失われている。煙道部は北壁から浅い溝状に90cm掘り込んで作られており、カマダ下の規模は88×132cmである。袖部の長さは右袖部で42cm、左袖部で26cm程度である。床面から火床面へはほぼ平坦に続き、住居跡北壁よりやや北にあたる位置で外傾して直線的に立ち上がったのち煙道となる。煙道は確認面で54cm前後の幅があり、中央付近に段を持ち北に向かって緩やかに高くなり確認面に至る。煙道先端中央には幅13cm、長さ40ほどの溝状に深くなる部分を持つ。覆土は不明な部分が多いが、右袖部外側上層には粘土と焼土、炭化物を含む第1層、カマダ内上層には同じく粘土、焼土、炭化物を多く含む第2層、煙道先端の溝状部分には焼土主体の第3層がそれぞれ堆積する。これら第1-第3層は天井部ないし天井内面の崩落土であろう。カマダ右袖部外側には、北壁から長方形に北へ張り出す棚状の施設がある。幅54cm、奥行き20cmで、床面上約20cmの高さに平坦面がある。周辺では土師器片が多数出土する。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物はごく僅かで、器種は土師器杯、須恵器杯、武蔵型甕などのみである。土師器杯は内面黒色処理のもの2個体、黒色処理されないもの2個体、須恵器杯は口縁部片1個体、武蔵型甕は口縁部コノ字で2個体である。本遺構の年代は9世紀後半頃と考えられる。

#### SI122 (第21図)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-3-3・4・8・9・13・14グリッドに位置する。北2mにSI113、南2mにSI110、南東8mにSI106、南西8mにSD125、SI112がそれぞれある。このうちSI113とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複なし。北西部にはグリッドに沿う幅110cmのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。東隅部はグリッド単位の掘り下げにより一部が失われている。平面形 北東辺が短いやや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-52°-Wである。規模 南西-北東方向が5.32m、北西-南東方向が5.52mで、北東辺は5mほどである。覆土の状態 第7・8層で、下層ほど地山となるV層の黄褐色粘質土を多く含む。覆土上面は溝状の遺構覆土とみられる第1-第3層と基本土層Ⅲ層(第4層)、Ⅳa層(第5層)、Ⅳb層(第6層)に覆われている。壁 残存壁高は11-26cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 土層断面には示していないが、部分的に深く凹凸を残して掘り込まれ、粘性の強い暗灰褐色土で貼床されている。床面からの深さは7-15cmである。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 東隅に集中する。床面直上ないし床面からやや浮いて出土するものが多いが、床面より下位に位置するものもあり、貯蔵穴等の施設があった可能性もある。遺物は少なく、壺・甕・高坏がそれぞれ同量くらいずつある。鉢は1点のみである。高坏脚部は中空柱状ばかり、甕はハケ甕だが厚手・大形の甕がある。鉢は口縁部短く外反するもの1点、高坏は中空柱状で下半で屈曲して開く形状であり、内面積痕残すもの3個体、内面粘土のしぼり目残すもの1個体、中形壺は小破片数点、壺は平底の大型1個体、甕かともみられる口縁部複合口縁状に粘土紐貼付けでヨコナデなし1個体、甕は小形2個体、丸底1個体、黒く荒いハケ1個体、大形で底部砂貼付けの台付甕台部1個体、外面荒いハケの胴部1個体、8世紀後半代の須恵

器塚1個体は混入、礫は長さ15cmくらいの楕円形のもの1点があり、磨石かとも思われる。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### S I 1 2 3 (第20図)

位置 III区調査区、Bオ-23-10・15、Bオ-24-6・11グリッドに位置する。東3.5mにSI103、東8mにSI105、北東6mにSI106、南西3mにSD119、南西4mにSI108、南東4mにSI102がそれぞれある。このうちSI103・105・106・108とは中軸線の方向が類似しており、関連が想定される。重複 土層断面観察から、覆土上位に古代と考えられる溝状の遺構が2条あることがわかっており、本住居跡の覆土はこれらの溝に切られている。遺構の詳細は不明だが、2条とも平行に北西から南東方向へと湾曲しながら伸びていることが確認できている。付近にはグリッドに沿う幅70-80cmのトレンチがあり、壁と床面の一部が不明となっている。平面形 南東隅が突出するやや不整な長方形で、南北方向の中軸線はN-30°-Wである。規模 南西-北東方向が3.86m、北西-南東方向が4.62mで、北辺は3.5mほどである。覆土の状態 第8・9層で、下層ほど地山となるV層の黄褐色粘質土を多く含む。覆土上面は基本土層Ⅲ層(第1層)と溝状遺構の覆土とみられる第2-5層、IVa層(第6層)、IVb層(第7層)に覆われている。溝状遺構は北側の第2・3層と南側の第4・5層の2条に分けられ、IVa層(第6層)とIVb層(第7層)、本住居跡覆土を掘り込み、Ⅲ層(第1層)に覆われている。2条は平面的にはほぼ並行して本住居跡の北西から南東へと続いており、ともに北東を内側とするように湾曲している。北側の溝は幅2.60m、深さ0.33mで底面は丸く、壁は途中で段を持ちながらなだらかに立ち上がる。南側は幅1.60m、深さ0.22mで底面は北に向かって傾く平坦面となっており、壁は南側がなだらかに、北側はやや急に立ち上がる。覆土下層には2条とも土壌主体の層と砂主体の層が薄く互層をなして堆積することが観察されており、流水があったものと考えられる。覆土上層はⅢ層と類似する。Ⅲ層が洪水堆積層だとすれば、これらの溝状遺構は洪水により埋没した可能性もあろう。壁 残存壁高は20-24cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 部分的に深く掘り込まれ、黄褐色土を含む第10層で貼床されている。床面からの深さは14cmである。貼床の範囲は確認できていない。柱穴 柱穴が3本(P1-P3)ある。P1は径26×24cm、深さ28cm、P2は径24×17cm、深さ18cm、P3は径43×37cm、深さ15cmである。規模に統一性はなく、配置も規則的にはならない。覆土や柱痕の有無は不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 東壁に沿い、壁際から50-100cm離れた位置に遺物が集中する。遺物は僅かに壺と甕が主体であり、高環や中形壺が僅かに含まれる。鉢の可能性もある破片は1点のみである。中形壺は白っぽい胎土で赤彩のもの1個体、高環は中空柱状の脚部で下半丸く短く開き外面ハケのちミガキ、内面きれいに横ケズリ1個体、壺は突出する平底1個体、内外面ハケで口縁部ハの字に開くもの1個体ほか胴部片、甕は外面ハケのみの調整が多く、ハケ後ナデ・ケズリの個体も混じり、胴部上半に新しい要素とみられる粗いワケを施すS字甕もある。外面胴部上半粗いワケのS字1個体、単口縁1個体、台部1個体、平底1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## 2. 井戸

#### SE100 (第22図、図版七〇)

位置 III区調査区、Cオ-2-13・14グリッドに位置する。東にSE114が近接してあるほか、北西2mに

SK115がある。重複 SD128を切る。SD128はIV a・IV b層を切りⅢ層に覆われる遺構であり、それより新しいため古代以降の所産と推定される。ただし、Ⅱ層やⅢ層との関係は確認できていないため時期の下限は特定できない。形状・規模 平面形は円形で、規模は231×208cmである。湧水等のため確認面下130cmまでの調査に留めたため深さは不明である。断面形は筒状で壁は下半が垂直気味となっており、上半で外傾して立ち上がる。覆土の状態 覆土は第1～第6層で、各層に炭化物が含まれる。遺物 遺構内ほぼ中央から径15cmほどの流紋岩質凝灰岩の礫2点が出土する。本遺構の年代は不明である。古代以降と推定される。

SE101 (第22図、図版七〇)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-2-25、Cオ-3-21グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南西5-10mにSD128・130A、SE100・114、SK115などがある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は162×158cmである。湧水等のため確認面下120cmまでの調査に留めたため深さは不明である。断面形は筒状で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。覆土の状態 第1～第3層である。遺物 西寄りの確認面下15cmの位置から馬の歯が出土している。これ以外の遺物はごく僅かで、底径5cm、径11cmほどの土師質土器小皿1個体、厚さ1cmくらいの棒状ないし板状の砥石片1点のほか、中期前半の土器が混入する。器種は埴と甕で、埴は平底で口縁部須臾器蓋模倣坏状に直立するもの1個体、甕片3点である。土師質土器小皿から、本遺構の年代は11世紀前半～中葉と考えられる。

SE114 (第22図、図版七二)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-2-14グリッドに位置する。東にSD130A、西にSE100、SD128が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は94×86cmである。湧水等のため確認面下50cmまでの調査に留めたため深さは不明である。断面形は筒状で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。覆土の状態 緻密な灰褐色土(第1層)である。遺物 前期後半の甕片のみであり、これらが本遺構の時期を示すとは断定し難い。甕はS字2点、単口縁2点、ハケ主体の胴部片7点である。本遺構の年代は不明である。

SE129 (第18図、図版六八・七〇)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-18-23・24グリッドに位置する。北にSI108が近接してあるほか、東5mにSD130Bがある。重複 SI107内にあり、SI107を切る。形状・規模 平面形は南北方向に長い楕円形で、中軸線はN-20°-Wである。規模は56×46cmで断面は筒状だが、上半の壁は凹凸を持って急に立ち上がっており、一部はオーバーハングする。下半では壁が垂直で平滑になっており、平面形は径35cmの円形となる。この部分は壁面に木質が残存しており、曲物積みであったとみられる。調査は湧水等のため確認面であるSI107の床面下60cmまでに留めたため深さは不明で、曲物の段数や基礎構造は不明である。覆土の状態 不明である。遺物 覆土中から凹み底の中形甕底部片1点が出土するが、これは重複するSI107の遺物であろう。本遺構の年代は古墳時代前期以降で、中世の可能性が高いと考える。

SE131 (第22図、図版七〇)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-6-10グリッドに位置する。西2.5mにSD130Bがある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は82×77cmである。湧水等のため確認面下70cmまでの調査に留めたため深さは不明である。断面形は筒状で、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 第1～第3層で、

第1・第2層は砂を含む。第2層は土壌と砂の量で3層に細分される。遺物 井戸としては多く、器種は塊、小形壺、壺主体で高坏を僅かに含む。塊は内斜口縁で平底3個体、小形壺は8個体、高坏は破片2点のみ、壺は超大形1個体、単口縁1個体、粘土貼付による複合口縁1個体、二重口縁1個体である。石製模造品は円盤1点、剣形5点、剃片4点ありうち大形のもの1点である。本遺構の年代は古墳時代中期中葉（TK216段階）と考えられる。

### 3. 溝

Ⅲ区では、遺構として確認された溝以外に、土層観察などから溝と推定されるものが複数指摘できる。たとえば古墳時代住居跡であるSI110の土層断面観察では、覆土上位に古墳時代から古代と考えられる溝状の遺構が複数確認され、住居跡覆土はこれらの溝に切られている。詳細は不明だが、住居跡東端にあるものは屈曲しつつ南北方向に伸びていたとみられ、一部は西にあるSD125のように北西・南東方向に伸びていた可能性がある。また、SI123でも覆土上層に溝状の遺構が確認できる。遺構は北側の第2・3層と南側の第4・5層の2条に分けられ、IV a層（第6層）とIV b層（第7層）及び住居跡覆土を掘り込み、Ⅲ層（第1層）に覆われている。2条は平面的にはほぼ並行してSI123の北西から南東へと続いており、ともに北東を内側とするように湾曲している。北側の溝は幅2.60m、深さ0.33mで底面は丸く、壁は途中で段を持ちながらなだらかに立ち上がる。南側は幅1.60m、深さ0.22mで底面は北に向かって傾く平坦面となっており、壁は南側がなだらかに、北側はやや急に立ち上がる。覆土下層には2条とも土壌主体の層と砂主体の層が薄く互層をなして堆積することが観察されており、流水があったと考えられる。覆土上層はⅢ層と類似する。洪水などにより埋没した可能性もあろう。以上のようにⅢ区では全体像が把握できない溝状の掘り込みの存在が指摘でき、少なくともⅢ区中央付近には南北方向の溝が、SD119北側にはこれと並行する方向に伸びる溝2条が存在した可能性が高い。

#### SD119（第23図）

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-18-14・15・20・25、Bオ-19-11・16・21、Bオ-23-4・5・8・9・10・13・14・17・18・22グリッドに位置する。北西端にSD125が近接してあるほか、周囲にSI079・102・107・110・123などがある。重複 SI108と重複しSI108を切る可能性が高いが、調査時には確認できていない。南西端は湧水対策の溝のため不明である。形状・規模 僅かに屈曲しながら直線的に続くL字状の溝である。形状の特徴などからすると、直線的な溝2条の重複の可能性もあろう。北西・南東方向に伸びる部分の中軸線はN-37°-W、長さは29.40mでSD125の一部と方向が類似する。SD130Aとは距離は離れているものの方向等は類似しており、関連が想定される。断面形は逆台形状で底面は平坦であり、壁は直線的に立ち上がる。底面は部分的に深くなっており、特に深い部分では断面形がV字状に近くなる。幅は70-120cm、深さは48-62cmで南東から北西へと傾斜しており、両端部の高低差は14cmある。南西・北東方向に伸びる部分の中軸線はN-64°-E、長さは9.18mである。断面形は皿状で底面は平坦であり、壁は丸みを持って立ち上がる。幅は50-114cm、深さは31-63cmで中央付近が深くなっているが、両端部の高低差は15cmあり、全体として北東から南西へ傾斜しているとも言える。中央付近南辺の上端には段が認められることから、2時期に分けられる可能性がある。覆土の状態 不明である。Ⅲ層が覆土上位に堆積すると考えられるため、古代以前の遺構と言える。IV a層も覆土上位にある可能性があるが、これは確実

ではない。遺物 北西-南東方向に続く部分に遺物が多く、北西端と南東端付近に遺物が特に集中する。遺物量は多く、器種は壺・甕主体で鉢・高環・中形壺・甕が僅かに含まれ、器台はごく僅かである。赤彩遺物が多く、ハの字に開く脚部の高環・器台があり、甕はS字・単口縁のみで受口状がみられないといった古い要素がある一方、小形丸底鉢や柱状脚や棒状脚高環の存在といった新しい要素も認められる。鉢は小形丸底形4個体、口径大きく口縁部二重口縁状2個体のほか、底部平底と小さい凹み底、赤彩の個体、灰-黒褐色の精良胎土の個体などもある。器台は小破片1個体、中形壺は破片4点のみ、高環は脚部上半で4個体あり、ハの字に開く脚部1個体、中空柱状の脚部1個体、中実の細く棒状で下半内面は棒状工具を刺してケズリの脚部2個体、甕は破片ばかり4個体くらいで底部1孔1個体、折返し状の口縁部1個体、灰-黒褐色の精良胎土で外面ハケ1個体、壺は小ぶりの赤彩・球胴で口縁部短く開くもの1個体、口縁-胴部が長くハの字に開き端部ハケで刻み目1個体、大形の単口縁で頸部粘土貼付けの口縁-胴部上半1個体ほか小破片、甕はほぼ完形の小形台付甕2個体、ハケ整形でほぼ完形の小形平底甕1個体、一部欠のS字台付甕1個体、S字1個体、単口縁3個体、精良胎土で大きな鉢形1個体、台部4個体、平底3個体、灰-黒褐色の精良胎土の台付甕1個体である。本遺構の年代は9期と考えられる。

## SD125 (第23図)

位置 Ⅲ区調査区、Bオ-23-12・17・21・22、Cオ-3-1グリッドに位置する。西側にSD128、SH111・112、東側にSD119が近接してあるほか、東3mにSH110がある。重複なし。形状・規模 屈曲しながら北西-南東方向に伸びる溝で、中央部分はほぼ南北方向を向き、南端と北端が北西-南東方向となるZ字形となる。全体の中軸線はN-19°-W、長さは12.80m、北部の中軸線はN-26°-W、南部はN-39°-Wである。北部はSD119と方向が類似するほか、距離は離れているもののSD130Aとも方向等が類似しており、関連が想定される。断面形は丸みを持つ逆台形状で底面は平坦だが、北部や中央付近の一部には段が認められるため2時期に分けられる可能性がある。幅は70-115cm、深さは24-41cmで南東から北西へと傾斜しており、両端部の高低差は20cmある。覆土の状態 砂を多く含む第1層と灰褐色粘土主体の第2層であり、上面はⅢ層に覆われている。遺物 北部で遺物が多数出土する。南寄りの遺物は底面付近からの出土で、北寄りほど底面から浮くものが多い。遺物は一定量あり、器種は壺・甕主体で甕・高環・鉢が僅かに混じる。鉢は小形丸底形かとみられ、底部小さく凹み赤彩のもの1個体、中形壺は破片少量で内外面赤彩の口縁部あり、高環は中空柱状の脚部片1個体、脚下半1個体、甕は底部丸底で下彫れの単孔1個体、壺は口縁-胴部上半で頸部に粘土貼付後指頭圧痕のもの1個体、赤彩の複合口縁で口縁-胴部下半までありSH112の土器と接合するもの1個体、折返し口縁の大形壺でほぼ完形のもの1個体、複合口縁1個体、単口縁1個体、突出する平底1個体、甕は外面調整がハケのみでハケ後ナデやケズリはない。S字3個体、外面胴部にハケをくの字に施すもの1個体、外面胴部上半にハケを右下がり斜位に施すもの1個体、外面胴部上半にハケを右上がり斜位に施すもの1個体、台部2個体、平底1個体、SD119出土土器と似た灰-黒褐色の精良胎土の甕片も出土する。本遺構の年代は9期でもやや古い方と考えられる。

## SD128a (第23図、図版七〇・七一)

位置 Ⅲ区調査区、南東端はBオ-23-21・Cオ-3-1付近、北西端はCオ-11-4・5・9付近にあり、Cオ-2、Cオ-6、Cオ-7グリッドに渡って位置する。南東端にSD125が近接してある。重複 北部SH116付近と北西端における土層観察から本遺構は新旧2時期に分けられるため、新しい溝をSD128a、古い

溝をSD128bとする。北部や中央付近の平面図には底面付近に段を持つように描かれているが、この段より上位が本遺構に相当するとみられる。遺構全体でSD128bを、南東端でSI112の覆土上半をそれぞれ切り、中央付近がSE100に、北西端がSI116とSD130Bにそれぞれ切られる。部分的に並行してあるSD130Aとも重複するが、新旧関係は確認できていない。北西端における土層観察から本遺構内にはさらに時期を細分できる可能性があり、そのうちのいずれかがSD130Aに相当する可能性はある。土層堆積の状況から、南東端はSI111東壁際の覆土上層まで続いている可能性がある。北西部は湧水対策の溝と堤防及び調査区外のため不明である。形状・規模 調査時のSD120とSD128をあわせたものである。南部で緩く屈曲するが、北西-南東方向におおむね直線的に伸びる溝で、中軸線はN-30°-W、長さは58.20mである。断面形は皿状で、底面は一部に深くなる箇所があるもののおおむね平坦である。壁はなだらかに立ち上がる。幅は82-160cm前後で、北部で大きく幅を広げ、3.5mを超えるまでになる。深さは22-46cmで、底面の標高を比較すると部分的に高低差はあるもののほぼ一定しており、一方向に傾くことはない。覆土の状態 第3-8層であり、自然堆積とみられる。最下層の第8層は砂を多く含んでおり、この段階で流水があった可能性がある。北端の土層断面における第3・4層や第5層、第6層のあり方から、本遺構内でさらに時期が細分される可能性も考えられる。重複するSD130Aがこのいずれかに相当する可能性もあろう。南端はSI112上面まであり、SI111付近まで続く可能性がある。SI112付近での土層観察からは、本遺構はIVb層を切り、IVa層に覆われていることが確認されている。北端の土層断面観察では、本遺構がIII層に覆われていることが知られるのみであり、IVa・IVb層との関係は確認できない。遺物 遺物は僅かで器種は高環と埴が主体で高環・埴・壺・ミニチュア土器・甕も含まれる。埴は小さい凹み底をケズリで作出した内斜口縁で深身、大形で裏に近いもの1個体、胎土精良な平底の内斜口縁で深身のもの1個体、小形の土師器1個体、高環は脚部中空柱状ばかり3個体あり、うち中空柱状脚を持ち環部有縁で口縁部反するもの1個体、中空柱状脚で下半屈曲するもの1個体、壺は折返し状の複合口縁の口縁部片と胴部片、ミニチュア土器は鉢形とみられるもの1個体、大きな礫1点等である。本遺構の年代は中期中葉(TK216段階)前後と考えられる。

#### SD128b (第23図、図版七〇・七一)

位置 III区調査区、南東端はBオ-23-21・Cオ-3-1付近、北西端はCオ-11-4・5・9付近にあり、Cオ-2、Cオ-6、Cオ-7グリッドに渡って位置する。南東端にSD125が近接してある。重複 北部SI116付近と北西端における土層観察から本遺構は新旧2時期に分けられるため、新しい溝をSD128a、古い溝をSD128bとする。北部や中央付近の平面図には底面付近に段を持つように描かれているが、この段より下位が本遺構に相当するとみられる。南東端でSI112の覆土上半を切り、遺構全体がSD128aに、中央付近がSE100に、北西端がSI116とSD130Bにそれぞれ切られる。部分的に並行してあるSD130Aとも重複するが、新旧関係は確認できていない。土層堆積の状況から、南東端はSI111東壁際の覆土上層まで続いている可能性がある。北西部は湧水対策の溝と堤防及び調査区外のため不明である。形状・規模 南部で緩く屈曲するが、北西-南東方向におおむね直線的に伸びる溝で、中軸線はN-30°-W、長さは58.20mである。断面形は逆台形状で、上半で大きく開きなだらかとなる。南端では形状はやや不明確となる。底面は一部に深くなる箇所があるもののおおむね平坦で、幅は50-100cm前後である。深さは22-66cmで、底面の標高を見ると中央付近でやや深くなるが大きな差異はなく、一方向に傾くこともない。覆土の状態 第9-11層であり、自然堆積とみられる。第9・10層は砂を多く含んでおり、この段階で流水があった可能性がある。南端はSI112上面まであり、SI111付近まで続く可能性がある。SI112付近での土層観察からは、本遺構は

IV b層を切り、IV a層に覆われていることが確認されているため、土層としては古墳時代中期と見ることができ。遺物 なし。本遺構の年代は、土層や遺構のあり方から古墳時代中期と考えられ、SD128 aに近い中期中葉（TK216 段階）前後となる可能性が高い。

#### SD130A（第23図）

位置 Ⅲ区調査区、南東端はCオ-2-14・15付近、北西端はCオ-7-7・12付近にあり、Cオ-2、Cオ-7グリッドに渡って位置する。南東端西側にSE114が近接してある。重複 北半が並行するSD128a・128bと重複するが、新旧関係は確認できていない。土層観察からSD128aは複数の時期に細分できる可能性があると考えられているが、このうちのいずれかが本遺構に相当する可能性はある。形状・規模 南西向きに緩く弧状を描きながら北西-南東方向に伸びる溝で、中軸線はN-27°-W、長さは24.30mである。断面形は逆台形状で、幅は62-110cm、深さは16-37cmである。底面の標高を見ると地点ごとに若干の高低差はあるが大きな差異はなく、一方に傾くこともない。覆土の状態 不明である。SD128aは土層断面のあり方からいくつかの段階に細分されるかも知れないとされるが、本遺構はSD128aに合流するように重複しており、細分されたうちのいずれかに相当する可能性がある。仮に本遺構がそのうちのいずれかの段階にあたるのであれば、層序の関係から古墳時代中期の所産となる。ただ、古墳時代前期の溝とされるSD125・119は本遺構の南東方向を同じくして存在しており、本遺構も合わせて直線状に並ぶ一連の遺構として捉えることもできるかも知れない。遺物 遺物はごく僅かで、古墳時代中期の壺と甕のみである。壺は複合口縁状の口縁部のもの1個体、甕は単口縁で大形の球胴のもの1個体である。本遺構の年代は古墳時代中期前葉～中葉（TK73-216段階）頃と考えられる。

#### SD130B（第23図、図版七〇・七一）

位置 Ⅲ区とV区にまたがっており、Cエ-5、Cオ-1・6・11グリッドに位置する。Ⅲ区では西側にSI117が近接してあるほか、西4mには本遺構とほぼ並行するSD132がある。V区では、北端で遺構名不明の溝状遺構が近接してあるほか、東1.5mに本遺構と並行するSD145がある。重複 北部でSD128を切る。北端は調査区外となる。形状・規模 屈曲しながら南北方向に伸びる溝で、南部で3条に分岐する。東側が新しく西側2条が古いことからa・b・cを付して区別するが、b・cの新旧は明らかではない。中軸線は北部N-16°-W、中央N-18°-E、南部は130aがN-14°-W、130bがN-12°-E、130cがN-37°-Eである。長さは全体で47.92mで、それぞれ北部10m、中央19.2m、南部は130aが10.2m、130bが6.48m、130cが18.72mである。断面形は北部は逆台形状で、中央から南部はほぼすべて浅い逆台形となっており、底面は僅かに丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。北部には壁の一部に段が認められる。幅は北部～中央で42-65cm、南部130aが38-68cm、130bが30-80cm、130cが26-60cmである。深さは北部～中央で13-44cm、南部130aが13-22cm、130b・130cが10cmである。北部ほど深くなっているがこれは北部の地山が高いためであり、標高で比較すると各地点で10cmほどの差異しかなく、一方に傾斜することはない。覆土の状態 北部で確認した覆土は第1-2b層であり、自然堆積とみられる。最下層の第2b層は明るい色の粘土層である。第1層は砂を多く含むためこの段階で流水があった可能性があるが、砂を多く含む土層は各地点で様々な層位から確認されており、全体として流水がある状況の中で埋没したものとみることができよう。遺物 遺物は遺物ごく僅かで、器種は土鉢、須恵器瓶類、武蔵型甕のみであり、これ以外は古墳時代前期～中期破片2点である。須恵器瓶類は高台付の胴部下半～台部で白色針状物質を多

く含み、南比企産の可能性が高いもの1個体、武蔵型裏は断面コの字の口縁部片で端部外面沈線状に凹むもの1個体、土鍾は中形位の完形のもの1個体である。本遺構の年代は9世紀後半前後と考えられる。

#### SD130C (第23図、図版七二)

位置 III区とIV区にまたがっており、Cエ-18-19・20・24・25、Cエ-19-11・16・17-25、Cエ-23-5、Cエ-24-1グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南東40mにSD128及びSD130Bがある。重複なし。調査時にはSD130Bと同一の遺構としていたが、距離は大きく離れており確実に同一とは言えないことから別遺構とした。IV a・IV b層を切り、III層に覆われる点は共通しているため、同一遺構の可能性はある。形状・規模 大きくS字状に湾曲する東西方向の溝で、土層堆積の状況からa期からd期までの4期に分けられる。

a期 東西方向にS字を描くように湾曲する溝で、長さは20.4mである。b期、c期を切っており、断面形は皿状で底面は丸みを持ち、小さな凹凸が目立つ部分もある。西端の土層断面では段を持つ立ち上がり確認でき、a期の中も細分できる可能性がある。幅は溝東部となるIII区で163-258cm、西端で243cmであり、ほぼ2.5mほどの幅で続くと推定される。底面の高さは標高24.30-24.45mで大きな高低差はなく、一方に傾斜することもない。

b期 a期と同様東西方向にS字を描くように湾曲する溝で、長さは22.4mである。c期を切り、a期に切られる。断面形は逆台形状で底面は平坦であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる部分が多いが、a期に切られずに残存する部分でみると上半では大きく開きならかな立ち上がりとなる。幅は確認できる部分で45-180cmであり、a期に切られなければ2mを超えるものと思われる。底面の高さは標高24.10-24.20mとほぼ平坦となるように掘り込まれており、一方に傾斜することはない。

c期 III区の一部とIV区において確認した。d期を切り、a・b期に切られる。遺構覆土自体が確認できない部分も多く平面形は定かではないが、a・b期同様東西方向にS字を描くように湾曲する溝と推定され、西端は大きく南に屈曲する。長さは20.9mである。断面形は皿状で底面は丸みを持ち、小さな凹凸が目立つ部分もある。幅は確認できる部分で120-260cmであり、a・b期に切られなければさらに幅は広がったと考えられる。底面は一方に傾斜することなく、標高は24.10-24.50mと高低差は大きい。

d期 IV区でのみ確認したもので、遺構北縁がc期に切られる。c期の溝と平行に東西方向に伸びており、西端まで屈曲せず直線的に続いている。長さは9.34mである。断面形は浅い皿状で底面は南から北へと緩やかに低くなっており、小さな凹凸が目立つ。幅は確認できる部分で317-522cmであり、c期に切られなければさらに幅は広がったと考えられる。底面の標高は24.20-24.40mで東西での高低差はほとんどなく、一方に傾斜することもない。遺構の状況から、人為的な遺構ではない可能性もあるだろう。

覆土の状態 覆土上面をII層とIII層が覆っており、各期の遺構はIV a・IV b層を掘り込む。覆土は各層とも自然堆積とみられる。a期覆土は第1-3層で第2・3層は砂を多量に含み、第3層は前後の土層とは異なる明るい色調の砂からなる。b期は土壌主体の第4・5層、c期はともに砂を含む第6・7層で、第7層は土壌と砂層が薄く互層をなして堆積する。d期は第8・9層で、第8層は砂を多量に含む。第7層はもろんだが、全体として流水とともに堆積した可能性が高いとみられる。遺物 なし。覆土の状況などから本遺構の年代は古代と推定され、より古い遺構となる可能性もある。

#### SD132 (第23図、図版七一・七二)

位置 III区調査区、Cオ-6-13・18・23、Cオ-11-3グリッドに位置する。東にSI117が近接してあるほ



か、東4mには本遺構とほぼ並行するSD130Bがある。重複なし。南端は調査区外となる。本遺構周辺は微高地で、溝の東側が高く、西側が低い。本遺構は微高地の周囲を巡るように掘られた可能性も考えられる。

**形状・規模** 南北方向に直線的に伸びる溝で、北端は浅くなり確認できない。中軸線はN-3°-W、長さは14.40mである。断面形は丸みを持つ逆台形状で、幅は33-80cm、深さは断面図の部分で27cmである。底面の標高差は確認できていないが大きな高低差はなさそうで、一方向に傾くことはないと思われる。**覆土の状態** 覆土は自然堆積とみられる第1・2層で、ともに多量の砂を含む。埋没時に流水があった可能性がある。V層を地山として覆土上層をIVc層が覆っていることからすると、古墳時代前期以前の遺構となろう。

**遺物** 遺物は石器台の脚部片かとみられるもの1個体である。本遺構の年代は古墳時代前期と考えられる。

#### 4. 土坑

Ⅲ区においては、Ⅱ区と同様にほぼIVa層を確認面として遺構を確認している。確認面の標高は24.6m前後である。Ⅲ層に覆われるとすればこれらの土坑は古代の所産と考えられるが、各遺構とⅢ層などの上位層との関係は確認できていないため、時期の下限は限定できない。

##### SK115 (第22図、図版七二)

**位置** Ⅲ区調査区、Cオ-2-18グリッドに位置する。東にSD128が近接してあるほか、南東2mにSE100がある。重複なし。**形状・規模** 調査時にはSK081としていた遺構である。平面形は不整形円で、規模は長径0.95m、短径0.94m、深さ1.16mである。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり、上半で僅かに外傾する。北東部上半は、なだらかな段を持つように外傾して立ち上がる。**覆土の状態** 3層に分層でき、第1・第2層は炭化物を含む。自然堆積と考えられる。**遺物** なし。本遺構の年代は不明である。

##### SK118 (第22図、図版七三)

**位置** Ⅲ区調査区、Cオ-7-2グリッドに位置する。北東にSD128が近接してあるほか、北東8mにSK121がある。重複なし。**形状・規模** 平面形は隅丸長方形で、中軸線はN-48°-Eである。規模は長径1.42m、短径1.22m、深さ0.45mである。底面は平坦で、壁は直線的にやや外傾して立ち上がる。

**覆土の状態** 黒褐色土ブロックなどを含む暗褐色土(第1層)であり、人為堆積の可能性がある。**遺物** 土師質土器小皿1個体と土師器片1点のみである。小皿はSE101出土の小皿と類似する。本遺構の年代は11世紀前半-中葉かと考えられる。

##### SK121 (第22図、図版七三)

**位置** Ⅲ区調査区、Cオ-7-9グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南西4mにSD128、南西8mにSK118がそれぞれある。重複なし。**形状・規模** 平面形は長方形で、西端より東端がやや幅広い。中軸線はN-68°-Eで、規模は長径1.48m、短径0.84m、深さ0.44mである。底面は西に向かって緩やかに低くなるがほぼ平坦で、壁は直線的に垂直気味に立ち上がる。**覆土の状態** 黒褐色土や灰褐色土ブロックを多く含む暗褐色土(第1層)であり、人為堆積と考えられる。**遺物** なし。本遺構の年代は不明である。

## SK124 (第19図、図版七三)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-6-25、Cオ-11-5グリッドに位置する。南西にSD128が近接してであるとみられる。  
重複 南東部でSI116カマド煙道を切る。形状・規模 平面形は隅丸長方形で、南端が広く、北端は狭い。中軸線はN-15°-Wで、規模は長径0.78m、短径0.40m、深さ0.16mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 覆土はブロック状の焼土や炭化材を含む暗赤褐色土(第1層)であり、人為堆積の可能性はある。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK134 (第22図、図版七三)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-11-12グリッドに位置する。西1.5mにSK135がある。重複 なし。形状・規模 平面形は隅丸長方形で、中軸線はN-30°-Wである。規模は長径0.63m、短径0.48m、深さ0.41mである。底面は南から北へと傾斜しており、壁は外傾して立ち上がるが北側はなだらかな段を持つ。覆土の状態 覆土は緻密な明灰褐色土(第1層)だが、自然堆積かどうかは明確にしない。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK135 (第22図、図版七三)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-11-12グリッドに位置する。東1.5mにSK134がある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-35°-Wで、規模は長径0.94m、短径0.48m、深さ0.16mである。底面は緩やかな凹凸があり、壁は外傾して丸みを持って立ち上がる。覆土の状態 覆土は緻密な灰褐色土(第1層)だが、自然堆積かどうかは明確にしない。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## 5. 性格不明遺構

Ⅱ区と同様Ⅲ区にも明確な遺構として捉えることができなかつた遺物集中があり、これらを性格不明遺構として記述する。

## SX127 (第22図)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-7-16グリッドに位置する。南西にSD128が近接してある。重複 なし。形状・規模 楕円形で、南北方向の中軸線はN-66°-Wである。規模は長径1.76m、短径1.10mである。覆土の状態 不明である。遺物 Bカ-6-13 Na 1-15で遺物は範囲内に集中しており、標高は24.448-24.652m、層位的にはⅣa層に相当する。遺物は一定量あり、壺・甕主体で高坏は僅かであり、中形壺・碗がごく僅かに含まれる。碗は内斜口縁状の口縁部片1点、中形壺は破片数点、高坏は坏部大形で有種の破片、脚部は中空柱状で内面強い螺旋状のナデと粘土のシワがある個体の破片、壺は複合口縁1個体、複合口縁の口縁部片1個体、突出する平底2個体、甕は小形1個体、大形1個体、単口縁口縁部片1個体、平底1個体、支脚かと推定される土製品1点である。本遺構の年代は中期中葉(TK216段階)前後と考えられる。

## SX133 (第22図、図版七三)

位置 Ⅲ区調査区、Cオ-6-22、Cオ-11-1・2グリッドに位置する。北にSK134・135が近接してある。重複 遺物出土範囲とSK135が重複する。新旧関係は不明である。形状・規模 溝状に細長い範囲内に遺

物が出土する。幅約1m、長さ4mほどで、範囲は東へと広がる可能性もある。土器と鉄製品は標高24.7m前後から出土しており、層的にはⅢ層前後に相当するとみられる。杭は打ち込み杭で5本確認され、北西-南東方向に直線的に並ぶ4本とそれに直行する方向に位置する1本とがある。各杭の間隔は不均等である。杭列の方向はN-67°-Wであり、さらに南東へと続いていた可能性がある。何らかの用途を持つ柵列ともみられ、遺物は流水などにより柵列周辺に集中したものと推測される。覆土の状態 掘り込みを伴う遺構の可能性もあるが、詳細は不明である。遺物 遺物は土器、鉄製品、杭である。土器は陶器鉢片1点、陶器甕片1点、陶器大甕2個体、瓦器片1点である。本遺構の年代は近世と考えられる。

#### 6. その他の遺物 (第80図、第65表、図版一二二)

遺構外から出土した遺物のうち2点を図示した。完形の石製紡錘車1点(1)、雁股式の鉄鎌1点(2)である。

## 第5節 V区の調査

### 1. 竪穴住居跡

S1139 (第25・80・81図、第66表、図版七五・一二二)

位置 V区調査区内北端、Bエ-25・14・15・19・20グリッドに位置する。北西にS1144Aが、西にS1144Bがそれぞれ近接してあるほか、東2.5mにS1141、南3mにS1150・155、東2mにSK215、SE137がそれぞれある。重複 なし。平面形 やや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-69°-Eである。規模 南北方向が4.88m、東西方向が5.28mで、北辺付近は4.75mほど短い。覆土の状態 第1・第2層で、ともに火山灰と見られる白色土粒(Hr-FAか)を含み、第2層は炭化物を多く含む。住居跡ほぼ中央の50×30cmの範囲に炭化物や灰が集中するほか、カマド周辺に炭化物や灰、粘土が多量に出土する。第2層付近からの出土であり、カマドから流出したものであろう。壁 残存壁高は21-29cmで、壁は垂直気味に立ち上がる。床面 場所により10cmほどの高低差があるが、おおむね平坦である。中央付近の床面は硬化している。掘方・貼床 なし。柱穴 なし。壁溝 なし。火処 カマドが東壁際中央にある。天井部は失われているが、袖部は残存している。煙道部は壁を18cm「U」字状に掘り込んで作られており、カマドの規模は100×80cmである。カマド掘り方は94×87cmの不整形で、床面より10cmほど掘り込まれたのち青灰色粘土などを含む第6層で埋め戻されて作られる。中央の13×23cmほどの部分が浅く凹んでおり、支脚を据えた孔かとも推測される。袖部は青灰色粘土を主体とする第5層でカマド掘り方上に作られており、東壁から54cmほどの長さを確認できる。火床面は床面と同じ高さの平坦面で、火床面から煙道へはなだらかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第1-第4層で、第1層は天井崩落後の堆積、青灰色粘土などを含む第2層は天井部、第3層は炭化物層、焼土ブロック主体の第4層は天井内面の崩落であろう。貯蔵穴 なし。遺物 遺物は住居跡内全体から出土しており、層的には第1層下位-第2層に多く、カマド周辺にも土器片が多い。量は一定量あり、器種は武蔵型甕主体に土師器環、須恵器環、須恵器甕、原始灰釉長頸瓶などであり、古墳前期8-9期の遺物が多量に混入する。土師器環はロコロ成形の内面黒色処理されたもの3個体+a、須恵器環は底部糸切り離し後無調整のもの6個体+a(1・2)うち1個体は住居跡外出土、原

始灰釉長頸瓶1個体はSK175C出土土器と遺構間接合している。甕は口縁部コの字状の武蔵型甕4個体(3・4)、底部平底2個体(5)、台付2個体、須恵器甕は1点(6)、須恵器紡錘車(須恵器環底部転用)1点(7)である。古墳前期の混入遺物は大塚系とみられる白い軽い胎土の壺頸部片1点、頸部突帯上にハケによるキザミを施す超大形壺1個体、鉢は小形丸底形、甕はS字主体で直口縁や上半で直立気味となる口縁部などである。本遺構の年代は9世紀中葉～後葉と考えられる。原始灰釉長頸瓶は9世紀初頭頃の混入であろう。

#### S1141 (第26・81図、第67表、図版七五・七六・一一一)

位置 V区調査区内北端、B才-21-11・12・13・16・17・18・21・22・23グリッドに位置する。周囲にSK206-216、SE137が近接してあるほか、西2.5mにS1039がある。東及び北に住居跡はないが、遺物集中であるSX136が東10mにある。近接する土坑群は本住居跡と関連する可能性もあろうか。重複なし。

平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-2°-Wである。規模 東西方向が6.90m、南北方向が6.60mである。覆土の状態 第1～第5層で、第1・第2層は火山灰かと見られる白色土粒を僅かに含む。第2層は炭化材を含み、壁寄りから上層構築材ともみられる炭化材が出土しており、焼失したのとも考えられる。炭化材は南壁際に多く、径は6～8cmで長さ1mを超えるものもある。垂木や桁材であろうか。第3層は砂層、第4層は砂層下の黒褐色土、第5層は壁の崩落であろう。壁 残存壁高は16～20cmで、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1～P4)ある。P1は径46×36cm、深さ27cm、P2は径42×40cm、深さ23cm、P3は径37×32cm、深さ16cm、P4は径36×32cm、深さ15cmで深さは一定せず、全体に浅い。柱間寸法は、P3・P4間が3.28m、P1・P2間が3.60m、P4・P1間が3.06m、P4・P2間が2.64mで、P2がやや北東にずれた配置となっている。4本とも覆土は砂を含む黒色土で、柱痕は確認できない。

入口ピット 南壁際中央に2本ある(P6・P7)。南北に並んで重複しており、P6がP7を切る。P6は南北に長い楕円形で径50×30cm、深さ14cm、P7は円形とみられ径27×24cm、深さ10cmである。覆土はP6が第4・第6層で自然堆積、P7は第7層で人為堆積と考えられる。壁溝 なし。火処 P3・P4間の東寄り、P3から西0.3mほどの位置に焼土が集中する部分があり、炉と考えられる。床面から8cmほど浅く皿状に掘り込まれた地床で、底面に被熱痕跡は無い。規模は80×62cmで、覆土は焼土や炭化物を含む黒褐色土(第8層)である。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は円形で、規模は97×92cm、深さは床面から22cmである。底面は北寄りの径40cmほどの部分が深く、その周囲に床面下5cmほどの深さの平坦面が巡る。覆土は炭化物を含む黒色土である。遺物 壁際と炉周辺に多く、東壁際南寄りと炉西側で完形に近く復元できる個体が出土する。遺物 壁際と炉周辺に多く、東壁際南寄りと炉西側で完形に近く復元できる個体が出土する。床面からはやや浮いた位置で出土するものが多い。遺物量は多く、器種は大形壺が最も多く、甕も多い。小形壺、器台、高坏は少量ずつある。鉢は内外面赤彩で口縁部短くくの字に折れる浅い甕形のもの1個体、外面と口縁部内面のみ赤彩で小形丸底状の頸部片1個体(小形壺の可能性あり)、器台は完形で受部有段、脚部3孔2個体(1・2)、小形壺は長い直口縁3個体くらいあり、底部凹み底1個体、ほぼ完形で中期の埴のようなつづれた甕形で平底、口縁部短く直立1個体(3)、高坏は少なく、脚部長く中空、下半で折れて大きく開き孔なしのもの1個体(4)、大形壺は二重口縁壺1個体(8)、ほぼ完形で刻み目を持つ二重口縁壺1個体(6)、ほぼ完形の折り返し口縁で底部木葉痕1個体(7)、大塚系とみられる砂っぽい白い胎土の口縁部片1個体(5)、二重口縁片1個体、大きな突出する平底1個体、大きな球胴の胴部1個体、甕はほぼ完形のS字台付甕2個体(9)あり、胴部などで肩で外面ハケのみ、内面は頸部と胴部上半ハケ、口唇部内面沈線状に凹み、台部内面下端僅かに折り返し、台部内面もハケのもの1個

体、最大径は胴部上半だがややなで肩で台面内面折返し1個体、ほかS字2個体、直口縁2個体、台部2個体、口縁部く字で器壁うすいが強く被熱する小形の台付甕1個体である。本遺構の年代は8期と考えられる。

#### SI144A (第27図、図版七六)

位置 V区調査区内北端、Bエ-25-18・19・23・24グリッドに位置する。南東にSI139が近接してあるほか、北東4mにSD130Cがある。重複 南部でSI144Bと重複するが、調査時期が異なるため遺構から新旧関係は確認できない。西部は地山を床面下まで除去してしまったため不明である。床面の高さはSI144Bとほぼ同一である。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置は不正確な部分がある。不整な方形で、南北方向の中軸線はN-8°-Eである。規模 南北方向は5.55mである。東西方向は不明で、4.7m程を調査している。覆土の状態 第1-第3層で、第1・第2層に火山灰と見られる白色土粒を含み、第1層により多い。壁 残存壁高は24-34cmで、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦とみられる。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡内南西部の床面からやや浮いた位置から多く出土する。遺物量は少なめで器種は甕、大形甕主体に鉢、小形甕が僅かにある。器台と高環はなく、9世紀代の遺物が混在する。甕には古い様相があるが、甕はさほど古く見えない。鉢は口縁部が直立するように上に伸びる北陸の甕のような形状1個体、小形丸底形1個体、小形甕は胴部片僅か、大形甕は明確な段の二重口縁で内面段明瞭、頸部直立の口縁-胴部片1個体、突出する平底1個体のほか胴部片がある。超大形甕は突出する平底1個と胴部片である。甕はS字でハケ整形主体のもの1個体、台部1個体、磨石片1個体である。混入する9世紀代の遺物はロク口成形土師器環1個体+α、武蔵型甕のこ字状口縁部2個体+α、平底底部3個体、台部1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SI144B (第27・81図、第68表、図版七六)

位置 V区調査区内北端、Bエ-25-12・13・17・18グリッドに位置し、東にSI139が近接してある。西側に住居跡などの遺構は確認されていない。重複 北部がSI144Aと重複するが、調査時期が異なるため遺構から新旧関係は確認できない。北東辺は地山を床面下まで除去してしまったため不明である。床面の高さはSI144Aとほぼ同一である。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置は不正確な部分がある。南西辺がやや狭い方形で、南西-北東方向の中軸線はN-47°-Eである。規模 北西-南東方向は4.26mである。南西-北東方向は不明だが、確認した東隅が確かであれば3.82mである。覆土の状態 酸化した鉄分を多く含む赤褐色土(第1層)である。壁 残存壁高は13cmである。壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦とみられる。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1-P4)ある。P1は径35cm、深さ21cm、P2は径30cm、深さ14cm、P3は径34cm、深さ20cm、P4は径32cm、深さ24cmで全体に浅い。柱間寸法は、P1・P2間が2.02m、P3・P4間が1.82m、P3・P1間が2.38m、P4・P2間が2.60mで、P2がやや北東にずれた配置となっている。4本とも覆土は黒褐色土である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 北隅のP1付近に集中するほか、南隅のP4周辺や住居跡中央付近にまとまる。遺物は少なめで器種は甕主体に大形甕と鉢が混じる。高環は僅かで、9世紀代の武蔵型甕が僅かに混入する。鉢は明確な二重口縁状の口縁部で赤彩、底部凹み底2個体(1)、口縁部く字で口唇部外面面取りされ上端は尖る小形甕形1個体、ナデ整形で薄手の小形丸底形1個体、口径広く

くの口縁部1個体、底部凹み底2個体、高環は柱状の脚部片1点、大形甕は口縁部ハの字に開くもの1個体、丸く外反する甕のような形1個体、折返し口縁1個体、甕はハケ整形主体のS字3個体+aで単口縁は見当たらない。台部3個体で内面下端折返しがある。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S I 1 4 6 A (第28・81図、第69表、図版七六)

位置 V区調査区、Bオ-21-1・2・6・7グリッドに位置する。北4mにSI141、北3mにSE137、SK212・213・214がそれぞれある。重複 西部でSI150を切り、南部がSI146Dに切られる。SI146Bとも重複するはずだが、新旧関係は確認できていない。SD140は重複する位置的にあるが、1b層から掘り込まれる新しい遺構であるため本遺構とは切り合わない。なおここでは5軒が互いに重複しており、重複関係は古い順にSI150→146A・146B(この2軒の新旧関係は不明)→146D→146Cである。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。南半がSI146Dに切られるため不明だが、方形ないし長方形とみられる。南北方向の中軸線はN-9°-Wである。規模 東西方向は5.23mである。南北方向は不明で、およそ2.70m分が調査できている。覆土の状態 砂を多く含む褐色土(第5層)である。壁 残存壁高は6-23cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。

火処 不明である。住居跡中央の土層断面の交差する付近、北壁から2mほどのところで炭化物や焼土が集中するためここが灰の可能性はあるが、断定できない。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は住居跡北西隅に多い。遺物量は僅かで器種は甕主体に鉢・甕片のみである。鉢は口径大きい小形丸底形1個体(1)、須恵器蓋模倣環状に口縁直立気味のもの1個体(2)、甕は折返し口縁の破片1個体、大廓系とみられる白く軽い胎土の甕胴部片1点、甕は外面ハケを際間なく施すS字の口縁-胴部上半1個体(3)である。本遺構の年代は9期でもやや古い方と考えられる。

#### S I 1 4 6 B (第28・81図、第70表、図版七六・七七)

位置 V区調査区、Bエ-25-5、Bオ-16-21、Bオ-21-1グリッドに位置する。西4mにSI155・156、南東4mにSI147がそれぞれある。重複 北辺でSI150を切り、東部がSI146Dに切られる。SI146Aとも重複するはずだが、新旧関係は確認できていない。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。東半がSI146Dに切られるため不明だが、方形ないし長方形とみられる。南北方向の中軸線はN-21°-Wである。規模 南北方向は5.13mである。東西方向は不明で、およそ2.70m分が調査できている。覆土の状態 砂を多く含む第6層である。壁 残存壁高は12-16cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は北西隅に集中する。遺物量は少なく、甕主体で甕もあり、鉢や中形甕を僅かに含む。器台は1点のみである。鉢は小形丸底形で小形1個体(1)のほか、赤彩で二重口縁状、半球状のもの、内斜口縁状などの破片が少量ずつある。中形甕は球形のもの1個体のほか、内外面赤彩口縁部片、胴部片などが少量ずつである。甕は単口縁で外面ハケ1個体(3)、折返し状口縁1個体(2)、中期の甕のような複合口縁状のもの1個体、甕はS字ばかり3個体くらいあり、外面調整はハケばかりで、ナデ・ケズリは入らない。本遺構の年代は9期と考えられる。

## S I I 4 6 C (第28・82図、第71表、図版七六・七七・一一一)

位置 V区調査区、Bオ-16-22・23グリッドに位置する。北西4mにSI150がある。重複 北部でSI146Dを、南部でSI147を切る。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。東西方向に長い長方形で、カマドを通る南北方向の中軸線はS-11°-Eである。規模

東西方向が3.55m、南北方向が2.88mである。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は炭化物と焼土を多量に含む。炭化物と焼土は南東部に多く、細長い炭化材もいくつか確認できる。上屋が焼失した際に生じたものと考えられる。壁 残存壁高は7~33cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。

火処 カマドが南壁際東寄りに位置する。天井部・袖部とも確認できず、残存状態は良くない。粘土を使用せずに構築した可能性もあろう。煙道部は壁を32cm方形に掘り込んで作られており、火床面は床面とほぼ同じ高さで、火床面から煙道へは平坦に続いたのち直線的に立ち上がり確認面に至る。覆土は第1~第3層で第1層は住居跡覆土第1層と、第3層は住居跡覆土第2層と同一である。カマドに由来する炭化物や焼土は目立たない。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は不整な隅丸方形で、規模は65×56cm、深さは床面から8cmである。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。覆土はカマド由来と推定される焼土や炭化物を多量に含む黒褐色土(第1層)で、底面からやや浮いた状態で礫1点が出土する。遺物 第1層より上位に多く、南東部にまとまる。遺物量は僅かで、武蔵型甕のような胎土の甕主体で、須恵器環、土師器甕とみられるもの、須恵器甕が少量ずつ混じる。須恵器環は二重底部で完形1個体(1)、瓦鉢1個体(2)、球胴甕はほぼ完形のもの1個体(3)、底部1個体(4)で、ともに胎土は武蔵型甕のような緻密精良な土である。このほかにも甕片はあるが、ほぼすべて武蔵型甕に近い胎土である。須恵器甕は内面薄い同心円甲ぎ、外面平行甲ぎの同一個体の2点(5)である。本遺構の年代は8世紀中葉と考えられる。

## S I I 4 6 D (第28・82図、第72表、図版七六・七七・一一一)

位置 V区調査区、Bオ-16-21・22・23、Bオ-21-1・2・3グリッドに位置する。南にSI147が近接してあるほか、北7mにSI141が、西5mにSI155・156がそれぞれある。重複 北部及び西部でSI150・146A・146Bを切り、南東部がSI146Cに切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。方形で、南北方向の中軸線はN-7°-Wである。規模 東西方向が6.55m、南北方向が6.32mである。覆土の状態 第3・第4層で、第3層は砂を多く含む。壁 残存壁高は11~31cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 壁際に多い。南壁際西寄りでは、壁に沿って高環が多数出土する。遺物量は少なめで器種は甕と甕主体に高環も多い。鉢は少量、ミニチュア土器は僅かである。鉢はほぼ完形で内外面赤彩の小形丸底形1個体(1)ほか小形丸底形1個体あり、高環は棒状の脚部で下半湾曲しつつ広がるもの1個体(3)、細い中実柱状脚で環部小さく有稜のもの1個体(2)、中実柱状脚で下半ならかに大きく水平に近く開くもの1個体(4)ほか、中実柱状の脚片などが僅かにある。甕は頸部直立し二重口縁とみられるもの1個体、荒い作りで紐積痕残り歪み大きいもの1個体、球胴の胴部下半・底部でドーナツ底1個体、甕はS字2個体くらいでこのうち1個体(6)の外面胴部上半ハケはやや疎疎であり新しい要素、台部3個体うち1個体は下端折返しあり、単口縁は大形で胴部やや長く外面胴部ハケ1個体(5)、ミニチュア土器は鉢形2個体(7)である。本遺構の年代は10期と考えられる。

## S1147 (第25・82図、第73表、図版七七)

位置 V区調査区、Bオ-16-17・18・22・23グリッドに位置する。北にS1146Dが、東にSD160がそれぞれ近接してあるほか、南6mにS1148・158・161がある。重複 北壁際がS1146Cに切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。また、北壁はさらに北側であった可能性がある。Ⅲ層に覆われ、Ⅳ層を掘り込んで構築されている。東西方向に長いやや不整な長方形で、南北方向の中軸線はN-25°-Wである。規模 東西方向が3.30m、南北方向が2.12mである。覆土の状態 第2-第4層で、第2・第3層は砂を含む。壁 残存壁高は15-26cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡中央から西側に多い。床面付近から出土しているものは少破片など僅かで、遺存状態の良い土器の多くは床面から浮いた状態である。遺物は一定量あり、器種はS字甕主体に大形壺、高環、鉢などが少量ずつ混じる。また、9世紀代の武蔵型甕が混入する。鉢は小形丸底形で丁寧なミガキを施し外面口縁部上半に僅かに凹凸線状の段を持つもの1個体、高環はハの字に開く脚部で大きな孔あり1点、大形壺は赤彩の二重口縁で白色胎土1個体(1)、突出する平底1点、大廓系とみられる白い軽い胎土の破片数点、甕はS字で胴部まで肩で外面ハケ、器壁は薄いもの3個体+α(2・3)である。本遺構の年代は8期でも新しい方と考えられる。

## S1148 (第25・82図、第74表、図版七八)

位置 V区調査区、Bエ-20-10・15、Bオ-16・6・11グリッドに位置する。西にS1154が近接してあるほか、東3mにS1158、南西3mにS1149A、西4mにS1167、SK200がそれぞれある。重複 西隅がSK198に切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。方形で、南西-北東方向の中軸線はN-36°-Eである。規模 北西-南東方向が4.36m、南西-北東方向が3.78mである。覆土の状態 炭化物を少量含む第1層である。壁 南西壁付近以外は床面近くまで削られている。残存壁高は4-18cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 南隅にある。平面形は楕円形で、規模は70×58cm、深さは床面から18cmである。底面はほぼ平坦で壁はなだらかに立ち上がる。覆土は砂を多量に含む暗褐色土(第2層)である。遺物 南西壁際に多いが、これは北東部の覆土がほとんど残っていないためであり、本来のあり方ではないと考えられる。遺物は少なく、器種は甕主体に鉢も多い。壺は僅かで高環はなく、平安時代の遺物が少量混入する。鉢は精製で密なミガキの小形丸底形が多く2個体+α(1)、大形の丸底形1個体、有段口縁状で口径大きく平たい鉢1個体、器台は二重口縁状の受部片1点、小形壺は底部~胴部片1個体(鉢の可能性あり)、甕かみとみられる大きな鉢形の口縁部片1点、壺は大形だが少し小さく黒い胎土の球胴で外面細かいハケを施し平底1個体、甕は外面胴部ほぼハケ整形のみでナデやミガキはなく、S字2個体+α(2)、台部2個体+α、ミニチュア土器は1個体である。甕に古い様相があるが鉢の位置付けが難しい。本遺構の年代は8期-9期初頭と考えられる。

## S1149A (第29・82図、第75表、図版七八)

位置 V区調査区、Bエ-20・5・10グリッドに位置する。西にS1176が近接してあるほか、北東3mにS1148、南西3mにS1177、北西3mにS1167、北4mにS1154がそれぞれある。重複 南東壁中央付近



がSK149Bに切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。方形で、南西-北東方向の中軸線はN-48°-Eである。規模 北西-南東方向が2.50m、南西-北東方向が2.63mである。覆土の状態 炭化物を含む暗灰褐色土(第1層)である。壁 残存壁高は11-14cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 壁際を中心に僅かに出土する。器種は甕主体に甕と高坏僅かにあり、ミニチュア土器らしき破片が1点のみ出土する。鉢はない。高坏は坏部片など数点、甕は伊勢型らしき赤褐色胎土の二重口縁の口縁部片で各段とも稜は下に突出するもの1個体ほか胴部片数点、甕は単口縁(1)とS字各1個体、台部2個体である。本遺構の年代は9期でもやや古い方かと考えられる。

## S1150 (第28・82図、第76表、図版七六・七八)

位置 V区調査区、Bエ-25・5・10、Bオ-21・1・6グリッドに位置する。西にSI155が近接してあるほか、西1.5mにSI156、北3mにSI139、北東4mにSI141がそれぞれある。重複 南東部を中心にSI146A・146B・146Dに切られる。SD140は重複する位置的にあるが、1b層から掘り込まれる新しい遺構であるため本遺構とは切り合わない。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。南北方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はN-21°-Wである。規模 東西方向が4.94m、南北方向が5.85mである。覆土の状態 第7・第8層で、第7層は少量の砂を含む。壁 残存壁高は3-8cmで、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 住居跡中央西寄りに炉がある。平面楕円形の地床とみられ、規模は70×43cmで床面から皿上に6cm掘り込まれている。底面は南北両端と中央部の3ヶ所が被熱により硬化赤変する。覆土は焼土や炭化物を多く含む黒褐色土(第1層)である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は少なく、炉周辺に比較的まとまる。器種は甕主体に大形甕、鉢、器台、中形甕が混じる。鉢は小形丸底形で口縁部片と体部片があり、精製・赤彩の口縁部もあり、器台は大きな孔の脚部3孔1個体(1)、中形甕は薄手で精良な内外面赤彩のもの1個体、大形甕は胴部片僅か、甕は外面ハケ整形主体でケズリも僅かにあり、形状の崩れたS字で上端に面を持ち頭部外面沈線状に凹む口縁-胴部上半のもの1個体(2)がある。本遺構の年代は9期古あるいは8期新と考えられる。

## S1154 (第27・82図、第77表、図版七八)

位置 V区調査区、Bエ-20・14・15グリッドに位置する。西にSI167とSK200、東にSI148が近接してあるほか、南4mにSI149Aがある。重複 南東壁がSK198と重複するが、新旧関係は不明である。調査時の状況からは、SK198を切る可能性が高い。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。北東-南西方向に長い長方形で、カマドを通る北西-南東方向の中軸線はS-37°-Eである。規模 北東-南西方向が3.18m、北西-南東方向が2.62mである。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を含む第1層である。壁 残存壁高は12-15cmで、壁は外傾して立ち上がる。床面 不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 カマドが南東壁際中央に位置する。天井部は確認できず、残存状態は良くない。煙道部は壁を34cm「U」字状に掘り込んで作られており、現存するカマドの規模は97×80cmである。現存する袖部は左右とも地山砂質土の掘り残しによるもので、壁際からの長さは右側40cm、左側20cmを確認できる。火床面は床面とほぼ同じ高

さて、煙道へと平坦に続いた後ならかに立ち上がり確認面に至る。覆土は第2・第3層で、第2層は炭化物や焼土を多量に含む。貯蔵穴 なし。遺物 カマド前面で出土する土器片が本住居跡に伴うと考えられる。遺物量は少なく、器種は武蔵型甕と須恵器環、土師器環で構成され、古墳前期土器が多く混じる。土師器環はロクコ成形で底部は糸切り離し後無調整1個体、須恵器環は底部糸切り離し後無調整4個体うち焼成不良2個体(1)、大きな石が入るもの1個体(2)、甕は武蔵型甕3個体である。本遺構の年代は9世紀中葉と考えられる。

#### S I 1 5 5 (第30図、図版七八)

位置 V区調査区、Bエ-25・4・5・9・10グリッドに位置する。東にS1150が近接してあるほか、北3mにS1139が、東5mにS1146Aがそれぞれある。重複 南西部でS1156を切る。平面形 南北方向に長い長方形で、中軸線はN-1°-Eである。規模 東西方向が2.88m、南北方向が3.45mである。覆土の状態 第5・第6層で、第6層は炭化物を多く含む。覆土上層はIVa層、IVb層に相当する第1層、第2層に覆われる。壁 残存壁高は18-22cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。床面の標高は24.25m程である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 掘方底面は細かな凹凸があり、黒色土主体の第7層で住居跡全体が貼床される。床面からの深さは2~5cmで、壁際が溝状にやや深くなっている。柱穴 なし。壁溝 不明である。火鋸 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 特に集中する部分はなく、住居跡内全体から出土する。床面からは浮いている遺物が多い。遺物は一定量あり、器種は甕片主体に大形壺、中形壺、高環があり、器台は僅かである。中形壺はほぼ完形の厚手な広口で底部丸みを持つ平底1個体、薄手な胴部片1点、高環はほぼ完形で環部有種、脚部ラッパ状に開くもの1個体ほか破片数点あり、大形壺はハの字に開く口縁部1個体、突出する平底1個体ほかいくつかの個体の胴部片あり、甕は外面胴部鋭いハケ目の個体多く、単口縁で細かいハケの台付甕1個体、形状の崩れたS字4個体、単口縁1個体、台部2個体である。本遺構の年代は9期でもやや新しい方かと考えられる。

#### S I 1 5 6 (第30・83図、第78表、図版七八・七九)

位置 V区調査区、Bエ-20-24、Bエ-25・3・4・5・9グリッドに位置する。東にS1150が近接してあるほか、東3mにS1146B、南西5mにSX152がそれぞれある。重複 北部の床面付近までの覆土がS1155に切られる。平面形 隅丸方形で、南西-北東方向の中軸線はN-37°-Eである。規模 北西-南東方向が3.85m、南西-北東方向が4.16mである。覆土の状態 第3・第4層で、第4層は焼土と炭化物を多量に含む。焼土と炭化物は壁際に多く、床面直上ないし床面からやや浮いた状態で出土する。上層焼失に伴い生成されたものだろう。棒状の炭化材は上屋に使用された木材が炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は14-30cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。床面の標高は24.30m程である。北西部及び南隅付近で、床面直上で薄く間もなく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた葦状の敷物の可能性がろう。北東部に認められないのはS1155に切られるためと考えられる。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 土層断面には現れていないが、住居跡の壁際に溝状に深く掘り込まれた後貼床されているとみられる。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1~P4)ある。P1は径23×26cm、深さ8cm、P2は径33×26cm、深さ13cm、P3は径29×28cm、深さ14cm、P4は径26×22cm、深さ

18cmで全体に浅い。柱間寸法は、P1・P2間が2.12m、P3・P4間が2.32m、P3・P1間が2.50m、P4・P2間が2.45mである。覆土は4本とも炭化物と焼土を含む黒褐色土（第1層）である。壁溝不明である。火処不明である。貯蔵穴 南隅にある。平面形は不整な隅丸方形で、規模は72×64cm、深さは床面から30cmである。底面は丸味を持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は第2・第3層で、第2層は焼土と炭化物を含む。底面及び壁面に堆積する第3層は白色粘土を多量に含む。白色粘土は貯蔵穴内の周囲でも多量に確認されており、付近に貯蔵していた可能性が考えられる。遺物 住居跡内各所から出土するが、中央部は少ない。遺物は多めで器種は甕と大形壺が多く、中形壺、鉢、高坏が僅かにある。器台はなく、中世や古代の遺物が混入する。鉢は薄手で精製の小形丸底形1個体、中形壺は球胴で平底1個体（1）、高坏は小さく有稜の坏部1個体（2）、稜はなく内面細かいミガキの坏部1個体、大形壺は厚手な単口縁で突出する平底を持ち外面ハケのちなデの超大形のもの1個体（6）、大廓系とみられる白い軽い胎土の破片数点で頸部片もあり、ハの字に開く直口縁2個体、甕形で口縁部内湾し赤彩され細かいハケ整形1個体（4）、折返し口縁1個体、薄手でやや小型の二重口縁1個体（3）、口縁部ハの字で端部外面垂直の面となり上端はつまみ上げ赤彩1個体（5）、胴部外面5mm間隔でハケによる連続刻み目の破片1点、甕は外面ハケ整形主体で一部ナデもあり、S字で肩が張る胴部のは3個体あり、このうち同形同大2個体（7）、単口縁2個体、台部4個体うち内面下端折返し1点、小さい台部1個体、甕形か壺形のミニチュアとみられるもの1個体、角柱状で白色凝灰岩製の砥石1点（8）である。このほか中世陶器片1点、平安時代の土師器ロコロ整形坏1点が出土する。高坏に新しい要素があり小形丸底鉢もあることなどから、本遺構の年代は8期末頃ないし9期初頭と考えられる。

## S1157 (第30・83図、第79表、図版七九・一二一)

位置 V区調査区、Bエ-19・10・15・20、Bエ-20・6・11・12・16・17グリッドに位置する。北東にSX152が近接してあるほか、東7mにS1167・176がそれぞれある。重複なし。中央は幅2mのトレンチにより失われている。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。方形で、南北方向の中軸線はN-10°-Eである。規模 東西方向が6.30m、南北方向が5.90mである。覆土の状態 第1・第2層で、第2層は炭化物を含む。壁 残存壁高は10-22cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 調査部分にはない。壁溝 不明である。火処 調査部分にはない。貯蔵穴 調査部分にはない。遺物 西半に多く、壁際からやや距離をおいて出土し、床面からは10cm程度浮いている。器種は大形壺主体で甕が少量あり、鉢と器台が僅かに含まれる。高坏はない。鉢は小形丸底形で赤彩、精製1個体（1）、器台は受部端部外面斜めの面となり内面外周平坦で端部斜めに立ち上がるもの1個体、大形壺は折返し口縁で突出する平底1個体（3）、口縁部ハの字に開き上端外面垂直な面でも平ら、胴部ナデ・ミガキで調整され、底部は突出する平底で中央が凹むもの1個体（2）、胴部外面ハケで胴部に焼成後に径6.5cmの円形の孔穿孔1個体、台付甕は台部内面折返しと砂貼付なくハの字に開き気味のもの2個体、器種不明の赤彩された小さい台部1個体である。剣形の石製模造品1点（4）は混入だろう。本遺構の年代は8-9期と考えられる。器台や甕に古い様相があることからすると、8期寄りであろうか。

## S1158 (第29・83図、第80表、図版七九・一二一)

位置 V区調査区、Bオ-16・2・3・4・7・8・9・13グリッドに位置する。東にSD160が近接してあ

るほか、南2mにSI166、南東3mにSD190A、西2mにSI148、北東3mにSI161がそれぞれある。重複なし。南東部は幅2mのトレンチによって失われている。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。北辺が長く南辺が短いびつな長方形で、南北方向の中軸線はN-34°-Wである。東辺は掘り過ぎか掘り足りない可能性がある。規模 東西方向が7.80m、南北方向が6.22m、南辺は5.90m程度である。覆土の状態 炭化物を僅かに含む第1層である。炭化物は床面付近に多い。壁 残存壁高は12-20cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡内各所から出土しており、南壁際中央付近に集中する。床面から浮いているものがほとんどだが、南壁際の集中部分では床面付近からも出土する。遺物は多く、器種はハケ囊主体に大形壺、高坏、ミニチュア土器、鉢などが僅かに混じる。壺と器台は見当たらず、中期土器が混入しており、中期前半の有段高坏部(3)なども含まれる。鉢は高台が付く小形丸底形でほぼ完形の砂っぽい胎土1個体(1)ほか破片僅かにあり、高坏はハの字に開く脚部で脚部3孔のものなど破片少量で、中空柱状で下半2段に緩やかに開くもの1個体(2)(中期の混入の可能性あり)、大形壺は二重口縁片や単口縁で長く外反するものなど数個体あるが破片僅か、囊はS字が10個体以上と多く、シャープなハケで薄手硬質なもの2個体(4・5)、口唇部上面が面取りされるもの1点、単口縁4個体以上でこのうち北陸っぽい口縁部直立するもの1個体、台部10個体以上、平底2個体以上、ミニチュア土器は破片僅かである。赤彩土器は破片で20点くらいあり、小形壺や中形壺のようなものが多いが高坏や器台が含まれる可能性もある。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S1161 (第31図、図版七九・八〇)

位置 V区調査区、Bオ-16-9・10・14・15・20 グリッドに位置する。南西にSD160が近接してあるほか、南西3mにSI158、南5mにSX164がそれぞれある。重複 南東部がSD190A及びSI162と重複する。SD190Aとは覆土の差異も僅かなため現地では新旧関係を確認できていないが、出土遺物や他遺構との関連などからSD190Aに切られるものとする。平面的な観察からSI162を切るものとみられる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。やや不整形な方で、南北方向の中軸線はN-24°-Wである。東辺南半は掘り足りない可能性がある。規模 東西方向が4.60m、南北方向が4.90mである。覆土の状態 炭化材を多く含む第1層である。炭化物は床面直上ないし床面からやや浮いた状態であり、南東部を除く住居跡内各所から出土する。上屋に使用された木材が焼失に伴い炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は10-18cmである。壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 不明である。遺物 特に集中する部分はなく、住居跡内各所から出土する。床面からはやや浮いているものが多い。遺物は少なめで器種は囊主体に大形壺、鉢、高坏、ミニチュア土器などが混じる。鉢は多めで高坏やミニチュア土器は僅かである。中期前葉～中葉(TK73-216段階)の遺物が混入している。赤彩遺物は大形～中形壺とみられるもの数点のみである。鉢は有段口縁状で硬質なもの1個体、半球状でハケ整形で薄手のもの1個体ほか4個体くらいあり、粗製の鉢のようなもので紐積み痕残るもの1個体、高坏は赤彩の脚部片、甌は底部小さく1孔の破片、大形壺は胴下半～底部片1個体でこのほか折返し口縁の破片などあり、壺片は単口縁で厚手の破片、囊は破片ばかりで単口縁多く、S字1～2個体、単口縁3～4個体、台部2個体で端

部折返しあり、ミニチュア土器は破片少量である。大形礫は大きな砲弾型のもの1点があり、研磨痕と凹みが各所にある。金床石の可能性もあろうか。混入する中期遺物は塊で、内斜口縁の1個体を含め丸底かと思われるもの3個体ある。本遺構の年代は9期でもやや新しい方かと考えられる。

#### S I 1 6 2 (第31・84図、第81表、図版八〇・一一二)

位置 V区調査区、Bオ-16・5・10・15、Bオ-17・1・6・11グリッドに位置する。南にSX164が近接してあるほか、西4mにSD160、西5mにSI158がそれぞれある。重複 北西辺がSD190Aと、北隅がSI161と重複する。SD190Aとは覆土の差異も僅かなため現地で新旧関係を確認できていないが、出土遺物や他遺構との関連などからSD190Aに切られるものと考えられる。平面的な観察からSI161に切られるものとみられる。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-28°-Eである。規模 東西方向が4.18m、南北方向が4.28mである。覆土の状態 白色土粒を含む第2層である。壁 残存壁高は10-19cmで、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 不明である。遺物 東西の壁寄りに少なく、中央の南北に長い範囲にまとまる。床面からはやや浮いているものが多い。遺物は一定量あり、器種は甕と大形壺主体で、鉢、器台、高環が混じる。鉢は短い単口縁で頸部やや丸くつぶれた小袋形のもの2個体、有段口縁鉢1個体(1)、小形丸底形1個体、くの字壁のように直線的に反する口縁部で頸部一旦くびれる北陸系かとみられるもの1個体、器台は環部半球状のもの2個体(2)、高環は破片ばかりで、ハの字に開く脚部は下半が屈曲気味に大きく開く形状、大形壺は形状の崩れた折返し口縁2個体(3)、有段状口縁1個体、二重口縁で内面に傾斜した面を持つもの1個体、長い単口縁でハの字に開くもの2個体、突出する平底2個体、浅く凹み底部2個体、平底1個体、赤彩された底部2個体(凹み底1、やや突出1)、甕はS字5個体+aで外面胴部上半のハケはやや右上がりて粗いものが多く(4)、縦や右下がりもある。単口縁は2個体+a、台部2個体+a、完形の菅玉1点(5)である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### S I 1 6 6 (第32・84図、第82表、図版八〇)

位置 V区調査区、Bオ-11-18・19・23・24グリッドに位置する。東にSD160が近接してあるほか、北西2mにSI158、南2mにSI182がある。重複 北西部でSD190Aと重複する。覆土の差異も僅かなため現地で新旧関係を確認できていないが、出土遺物や他遺構との関連などからSD190Aに切られるものと考えられる。平面形 南東隅が突出する不整な方形で、南北方向の中軸線はN-21°-Eである。規模 東西方向が4.53m、南北方向が4.03mで、北辺付近は短く3.70mほどである。覆土の状態 砂粒を含む第1層である。壁 残存壁高は14-18cmで、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。入口ピット 東壁際中央に1本(P1)ある。平面形は楕円形で、ほぼ円形の柱穴に浅い掘り込みが伴う。全体の規模は径44×37cm、柱穴部分は径37×30cm、深さ22cmである。覆土は柱穴部分が炭化物を含む第2層、浅い掘り込みは第3層で、第2層は自然堆積、第3層は人為堆積とみられる。なお、住居跡中央付近では東西方向に並ぶ柱穴状のシミが数基分床面で確認されており、本住居跡と重複する櫛列等の遺構が存在した可能性がある。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は僅かで、個別に取り上げたのはSD190A周辺で床面から約10cm浮いた数点のみである。器種は鉢・甕主体で壺少量あり、高環は

僅かである。鉢は薄手で口縁部長い精良な小形丸底形4個体(1)である。高坏は中空柱状の脚部で内面縦の強いナデのもの1個体(2)があるが、これはSD190A部分からの出土である。壺は平底1個体、単口縁1個体、甕は厚手でオレンジ色の胎土のもの1個体(中期の混入か)、S字で胴部外面はハケ主体で一部ナデ・ケズリありのもの1個体、小形台付甕の台部1個体である。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S1167 (第33・84図、図版八〇)

位置 V区調査区、Bエ-20-8・9・13・14グリッドに位置する。東にSI154が近接してあるほか、東4mにSI148、南東3mにSI149、北西4mにSX152がそれぞれある。重複 南西部がSI176と重複する。新旧関係は確認できていないが、出土遺物などからSI176に切られるとみられる。南東部がSK200に切られる。南東部は幅2mのトレンチによって失われている。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。やや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-21°-Wである。規模 東西方向が4.62m、南北方向が4.80mで、北辺付近は短く4.00mほどである。南辺付近が長いのは、掘りすぎの可能性もあろうか。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は炭化物を含む。壁 残存壁高は22-27cmで、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認できない。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 なし。遺物 住居跡中央南西寄りの長さ1.5mほどの南北に細長い範囲に遺物が集中する。SK200付近から遺物が多く出土するが、これはSK200に伴うものであり本遺構とは関連しない。遺物は床面からやや浮いており、器種の主体は甕で大形の小型丸底鉢があり、器台が多く高坏は少ない。壺と中形壺は僅かである。鉢は小型丸底形で口径大きい(底部穿孔の可能性あり)もの1個体(1)、小型丸底形で凹み底の底部片2個体、有段口縁状1個体、器台は口縁部で6個体(脚部でも6個体)あり(2・3)、受部有稜で口縁短く外反して立ち上がる形態が多く、脚部の孔は3孔中心である。中形壺は直口縁壺の口縁~胴部1個体(6)、甕のような胎土でくの字口縁の内外面に赤彩されたもの1個体、高坏は少なく、坏部小さく有稜1個体(4)、棒状の脚部(口縁~脚部残存)1個体(5)ほか口縁部片3個体、壺は口縁部片5個体あり、単口縁1個体、有段で内面赤彩1個体(8)、有段で内外面に赤の縦線がはいるもの1個体(7)、大廓系の口縁部片(SI141出土の大廓系の口縁部と同じ白くて脆い土器)1個体、口縁部上端にハケ状工具による刻み目を施す壺口縁部片1個体、甕はS字台付甕C類主体で5個体あり(9)、平底で口縁部丸く外反し厚手なハケ整形の中期の甕類似のもの2個体、ミガキ整形で短い口縁部1個体、台部7個体である。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### S1170 (第31図、図版八〇)

位置 V区調査区、Bオ-11-10・15グリッドに位置する。東にSI171、西にSD160が近接してあるほか、西2mにSI181がある。重複 なし。南西隅がトレンチに浅く切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。平面形は方形で、南北方向の中軸線はN-5°-Eである。規模 東西方向が3.08m、南北方向が2.94mである。覆土の状態 第1~第3層で、第1層は砂と火山灰と考えられる白色土粒を含む。第1層はIV a層、第2層はIV b層の可能性もある。壁 残存壁高は24-32cmで、壁は垂直気味に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 不明である。遺物 個別に取り上げた遺物はない。遺物は僅かで、器種は甕主体で大形壺、高坏、鉢、器台が少量ずつ混じる。鉢は小型丸底形状の破片少量、器台は二重口縁状の受部のもの1個体、高坏は

破片数点で脚部はハの字状であり棒状の脚部なし。大形壺は単口縁2個体、口縁部垂直に面取りされるもの1個体で口縁部垂直な平面を作る個体や胴部片あり、裏は胴部外面ハケ調整主体でケズリもあり、S字1個体、直口縁数点、形状の崩れたS字のような肥厚した僅かな段を持つS字と別系統ともみられる口縁部1個体である。本遺構の年代は9～10期と考えられる。

#### SI171 (第31・84図、第84表、図版八〇)

位置 V区調査区、Bオ-11-10・15、Bオ-12-6・11グリッドに位置する。西にSI170が近接してあるほか、東4mにSX172がある。重複 なし。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明瞭な部分がある。住居跡ではない可能性もある。南西隅が突出するやや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-2°-Eである。規模 東西方向が3.84m、南北方向が3.78mである。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は砂と火山灰と考えられる白色土粒を含む。第1層はIVa層、第2層はIVb層の可能性もある。壁 残存壁高は19-28cmで、壁は垂直気味に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 不明である。火処 なし。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡内南西部の床面からやや浮いた位置にまどまどあり、これ以外には中央部や北東部で少数の破片が出土する。遺物は多めで器種は甕主体に高環、埴が少量ずつ混じる。埴は見当たらない。甕、高環、壺、ミニチュア土器(甕形か)などの前期土器が比較的多く混入する。中形壺は口縁部やや内湾するもの2個体、高環は坏部有種1個体(1)、脚部中空で上から押しつぶしたような形状でややハの字に開き下端で大きく開くもの2個体(2)、甕は胎土や作り、厚さとも前期系統のものではなく、厚手で大形のもの3個体(4)、小形1個体(3)である。器高低く作りの粗い台付甕台部は前期の混入とも考えたが、伴う可能性があろう。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。

#### SI175A (第34・84・85図、第85表、図版八〇・八一・一一一)

位置 V区調査区、Bエ-15-15・20・25、Bオ-11-11・16・21グリッドに位置する。西にSI177が近接してあるほか、南東2mにSI182・188がそれぞれある。重複 南東部でSK199を切り、北部がSI175Bに、西壁付近がSK175Cに、東壁付近がSK201に切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明瞭な部分がある。住居跡ではない可能性もある。南北方向にやや長い方形で、南北方向の中軸線はN-3°-Eである。規模 東西方向が5.72m、南北方向が6.48mである。覆土の状態 第5～第7層である。壁 残存壁高は23-30cmで、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるがおおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は多いが床面付近には少なく、第1・第2層中から多く出土する。平面的には南東隅、北西隅を除く住居跡全体から出土しており、中央南東寄り集中する。遺物は一定量あり、器種は器台・鉢・中形壺・高環・壺・甕である。鉢は小形丸底形でやや大形1個体+α(1)、器台は口縁部有種の受部片1個体、中形壺は直口縁2個体+α(2・3)、高環は中空で上の方のみ中央の脚部2個体(4)、中空柱状脚1個体、大形壺は2個体+α(5)、甕は形状の崩れたS字状口縁台付甕3個体(6)、単口縁1個体、台部1個体、平底2個体で受口状口縁の甕はない。鉢形のミニチュア土器3個体(7)、壺形のミニチュア土器1個体(8)である。本遺構の年代は9期新-10期古と考えられる。

なお、SI175A内覆土上層にはSK175Cと近い時期の遺物が多く、面的に焼土や炭化材が確認できる部分もある。こうした点は、SI175A内覆土上層にSK175C類似の土抗があったことを示すと考えられる。よって以

下、SI175A 出土遺物の中で土抗に関連するとみられる遺物をまとめ、一部を図示する。遺物は少なく器種は土師器環、須恵器鉢、武蔵型甕、砥石である。土師器環はロコウ成形で大形1個体、小形2個体+α、須恵器鉢は1個体(9)、武蔵型甕は2個体+αで台部2個体、平底2個体(10)、砥石1点(11)である。

#### S I 1 7 5 B (第34・85図、第86表、図版八〇・八一)

**位置** V区調査区、Bエ-15-20・25、Bオ-11-16・21グリッドに位置する。西にSI177、SK175C、南東にSK199がそれぞれ近接してあるほか、南東5mにSI182・188がある。重複 SI175A内にあり、SI175Aを切る。**平面形** 北西辺が狭いやや不整な方形で、北西-南東方向の中軸線はN-46°-Wである。**規模** 南西-北東方向が3.44m、北西-南東方向が3.00mである。北西辺は短く、2.80mほどである。**覆土の状態** 第3・第4層で第3層は白色土粒を含む。覆土上層にはIVa層に相当する第2層が堆積する。炭化材数点が南西壁際の床面付近から出土する。**壁** 残存壁高は37-42cmであり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。**床面** 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。**掘方・貼床** 不明である。**柱穴** 不明である。**壁溝** 不明である。**火処** 不明である。**貯蔵穴** 不明である。**遺物** 遺物は住居跡中央北東寄りの床面上20~30cmから多く出土し、南西壁寄りには少ない。器種は埴、中形壺、高環、鉢、甕であり、埴は内斜口縁で丸底深身1個体(1)、中形壺は1個体(4)、高環は中空柱状の脚部1個体(2)、下半で強く屈曲するもの1個体、やや細い中空柱状の脚部で下半丸く開くもの1個体(3)、鉢は薄手のもの1個体、甕はやや長胴化した単口縁2個体である。本遺構の年代は中期中葉(TK216段階)と考えられる。

#### S I 1 7 6 (第33・85図、第87表、図版八一・一二)

**位置** V区調査区、Bエ:20・3・4・8・9グリッドに位置する。東にSI149A、南にSI177が近接してある。**重複** 北西部がSI167と重複する。新旧関係は確認できていないが、出土遺物などからSI167を切ると思われる。遺構全体がSK218と重複するが、本遺構下位にはIVa・IVb層が堆積しており、SK218はそれよりさらに下位にあるため直接の切り合い関係はない。中央部は幅2mのトレンチによって失われている。

**平面形** 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。東西方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はN-10°-Eである。**規模** 東西方向が5.42m、南北方向が4.23mである。**覆土の状態** 第1~第3層で、第1層は炭化材と焼土、第3a層は炭化物をそれぞれ含む。第1層に相当する焼土と炭化材の集中は住居跡東壁際中央付近にある。焼土と炭化材はほぼ水平に薄く広がるように分布しており、火葬墓に類似する遺構の存在が想定できる。南東隅の床面上約10cmの位置にも同様の焼土と炭化材の集中があり、ここでは多数の遺物を伴う。**壁** 残存壁高は15-28cmであり、壁は丸みを持って直線的に立ち上がる。**床面** 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。**掘方・貼床** なし。**柱穴** 不明である。**壁溝** 不明である。**火処** 不明である。**貯蔵穴** 不明である。**遺物** 古墳時代中期と平安時代の遺物があり、古墳時代中期は南西部で、平安時代の遺物は南東部の上層からそれぞれ出土しており、ほとんど混在しない。こうしたことから、古墳時代中期の住居跡の東部上層に平安時代の火葬墓があり、それらを一つの遺構として捉えたのではないかと推定される。あるいは、2軒の住居跡を1軒としてしまった可能性もあろう。中期の遺物はごく僅かで、器種は甕主体で高環、埴が混じる。埴は平底で内斜口縁1個体(1)、高環は大形で有種の環部1個体(2)、中空で短い柱状の脚部1個体(3)、甕は厚手の口縁部1個体、突出する平底2個体であり、このほか一括遺物の中に甕口縁部1個体、底部1個体、半球状の埴1個体、高環片などがある。平安時代の遺物もごく僅かで、器種は武蔵型甕片主体に土師器環、須恵器環、須恵器甕



が混じる。須恵器環2個体(4・5)ほか破片あり、武蔵型甕口縁部1個体(6)、須恵器甕胴部片1点(7)である。遺物の年代は中期中葉(TK216段階)と9世紀後半と考えられる。

S1177A(第32・85図、図版八一)

位置 V区調査区、Bエ-15-18・19・20・23・24・25グリッドに位置する。東にS1175A・175B、SK175C、南西にS1178、北にS1176がそれぞれ近接してある。重複 南壁際中央付近の覆土がSX177Bに切られる。

平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。やや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-10°-Wである。規模 東西方向が6.37m、南北方向が5.71mである。覆土の状態 第2～第4層で、上面にIVa層が堆積する。壁 残存壁高は18-38cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 南西部に2本(P1・P2)があるが、詳細は不明である。P1は径40cm、深さ20cm以上、P2は径30cm、深さ5cm程度である。壁溝 なし。火処 なし。貯蔵穴 なし。遺物 住居跡東半から僅かに出土する。器種は甕主体に埴があり、高坏が僅かに含まれる。古墳前期遺物は少量混入する。埴は半球状で平底1個体、口縁部直立し須恵器蓋模倣環状1個体(1)、高坏は明確な二重口縁の高坏1個体、甕は小形1個体、大形で厚手1個体である。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。中期中葉寄りであろうか。

S1178(第29・85図、第89表、図版八二)

位置 V区調査区、Bエ-15-12・13・17・18グリッドに位置する。北東にS1177、南東にSK217がそれぞれ近接してある。西側に遺構はない。重複 なし。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。方形で、南北方向の中軸線はN-5°-Eである。規模 東西方向が3.70m、南北方向が3.74mである。覆土の状態 火山灰と考えられる白色土粒を含む黄褐色土(第1層)である。壁 残存壁高は8-10cmであり、壁は短く垂直気味に立ち上がる。床面 おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 なし。火処 なし。貯蔵穴 なし。遺物 東西の壁際から僅かに出土する。器種は中形甕、器台、甕、台付甕である。器台は脚部上半片で脚部3孔1個体、中形甕は内湾しない長い直口縁1個体(1)、甕は口径大きく長い口縁部(異形、高坏の可能性あり)1個体(2)、赤彩で二重口縁1個体、甕は台部1個体である。本遺構の年代は8期と考えられる。

S1179(第36図、図版八二)

位置 V区調査区、Bオ-6-23・24、Bオ-11-3・4グリッドに位置する。北東にSK192が近接してあるほか、北西2mにS1188、西4mにSK195がそれぞれある。重複 土層では確認していないが、北東部でS1180を切るとみられる。北西壁西半は幅2mのトレンチによって失われている。平面形 方形で、南西-北東方向の中軸線はN-59°-Eである。規模 北西-南東方向が2.58m、南西-北東方向が2.83mである。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は炭化物を含む。西隅部では床面からやや浮いた状態で炭化材が多数出土する。上屋に使用された木材が焼失に伴い炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は7-11cmであり、壁は短くやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火

処 不明である。ただ、北東壁際中央で白色粘土が出土しており、カマドがあった可能性がある。粘土の範囲は30-35cmで、壁を掘り込むように北東壁から6cm程突出している。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡全体から出土するが、中央部から西隅付近に多い。遺物は少なめで、器種は甕主体に埴があり、高坏は僅かに含まれる。埴は内斜口縁で小形凹み底1個体、内斜口縁で甕状2個体、口縁部直立する丸底のもの1個体、高坏は坏部2個体、脚部中空柱状で中央が膨らむエンタシス状2個体、壺は直口縁の甕形で口縁部内外面裝飾様の粗い縦ミガキのもの1個体、甕はSI167出土の甕と似たナデ整形のやや細長い甕1個体、胴部外面タテ方向のケズリのやや細長い甕2個体である。S字甕口縁部も数点あるが混入であろう。本遺構の年代は中期後葉(TK208段階)と考えられる。

#### S1180 (第36図、図版八二)

位置 V区調査区、Bオ-11-3・4・8・9グリッドに位置する。北にSI181・182、東にSK191が近接しているほか、西2mにSI188がある。重複 東壁がSK192に切られる。土層では確認していないが、南壁中央付近がSI179に切られるとみられる。中央部は幅2mのトレンチによって床面付近までの覆土が失われている。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。東辺が西辺より短いやや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-2°-Eである。規模 東西方向が4.17m、南北方向が4.75mである。西辺は短く、3.70mほどである。覆土の状態 砂を多く含む暗灰褐色土(第1層)である。壁 残存壁高は13-16cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 南西部に1本(P1)ある。径48×40cm、深さ10cmである。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は甕破片4点のみである。台付甕台部2点あり、うち1点は台部下端内面に折り返しがある。外面ハケの胴部は2点で外面調整はハケ主体でナデも施す。本遺構の年代は9期-10期で10期に近いと考えられる。

#### S1181 (第35・85図、第90表、図版八二)

位置 V区調査区、Bオ-11-8・9・13・14グリッドに位置する。東にSD160、南にSI180が近接しているほか、東2mにSI170、北4mにSI166がそれぞれある。重複 西部がSI182に切られる。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。南北方向にやや長い方形で、南北方向の中軸線はN-3°-Wである。規模 東西方向が3.53m、南北方向が4.08mである。覆土の状態 第1・第2層で、第2層は砂を含む。壁 残存壁高は13-28cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸がある。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。中央部床面下に掘り込みがあり、これが貼床の可能性もある。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡内北半を中心に僅かに出土する。器種は甕主体に鉢、中形壺、高坏、壺、甕などである。鉢は口縁〜体部ハの字に開き底面は丸みを持つ平底のもの1個体(1)、内面口縁部に段があるもの1個体ほか数点あり、壺は大きな直口縁の壺口縁部で外面ハケのちミガキ調整のもの1個体、高坏は中空柱状の脚部片と有椀で浅い坏部片、甕は台付甕で胴部外面ハケ調整主体で台部は内外面砂貼付で下端折返しのもの1個体である。本遺構の年代は8期新相〜9期古相と考えられる。

## S1182 (第35・85図、第91表、図版八二・八三)

位置 V区調査区、Bオ-11・7・8・11・12・13・14・17・18グリッドに位置する。西にS1188、北西にS1175A、北にSD190A、S1166、南東にS1180がそれぞれ近接してある。重複 南東隅でS1181を切る。中央部は幅2mのトレンチによって失われている。北壁際中央には東西方向に主軸を持つ長方形の擾乱があり、ちょうど床面付近までの覆土が擾乱される。平面形 方形で、東辺より西辺が短い。南北方向の中軸線はN-34°-Wである。規模 東西方向が7.06m、南北方向が7.03mである。西辺は6.40mほどである。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は火山灰と考えられる白色土粒を多く含む。東壁際中央に炭化物の集中がある。範囲は1.10×0.80m程である。壁 残存壁高は18-30cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1-P4)ある。湧水により完掘していないため確認できた深さのみを表記する。P1は径42×37cm、深さ18cm以上、P2は径43×37cm、深さ16cm以上、P3は径42×39cm、深さ17cm以上、P4は径77×48cm、深さ26cm以上である。柱間寸法は、P3・P1間が3.36m、P4・P2間が3.03m、P4・P3間が2.94m、P2・P1間が3.30mである。覆土はP1・2・4が第4層、P3が第5層である。壁溝 不明である。火処 住居跡北部のP3・P1間にちがある。床面から5cmほど浅く皿状に掘り込まれた地床跡で、平面形は円形、規模は60×55cmである。底面は被熱により広範囲が赤変しているが、中央南東寄りの最も低い径15cmほどの部分とその北側は赤変していない。低い部分は土器等を設置した痕跡、北側の赤変しない部分は焚き口を示すとも考えられる。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は隅丸長方形で、規模は127×90cm、深さは湧水により完掘していないため不明だが20cm以上ある。壁は段を持って立ち上がっており、床面から10cm下に幅10cm前後の平坦面が全周する。遺物 北東部の東壁際からほぼ方形の土師器壺1個体が横位の状態で出土する。底部は欠損しており、口縁部下に土師器片3点を敷いている。意図的に設置したものだろう。南壁際東寄り、貯蔵穴南西部では、床面からやや浮いた状態で径10cm程度の赤色顔料の塊が出土する。器種は埴・甕・高坏・小形壺で、前期9期-10期の遺物が多く混入する。前期の遺物は甕主体に鉢、高坏が混じるもので、小形壺は破片、高坏は有稜の坏部とハの字に開く脚部、甕は胴部外面ハケ調整の台付甕で台部下端内面に折り返し1個体、突出する平底1個体、平底1個体である。中期の遺物は埴が内斜口縁で丸底の完形1個体(1)、甕は大形やや長胴1個体である。焼粘土塊1点も出土するが、これは前期の可能性もある。本遺構の年代は中期後葉(TK208段階)と考えられる。

## S1183 (第36・85図、第92表、図版八三)

位置 V区調査区の南西縁、Bエ-10・4・9・10・14・15グリッドに位置する。近接する住居跡はなく、北東10mにS1188、北東5-10mにSK185B・196・197、SX185Bがそれぞれある。重複 SK203・204と重複しており、土層では確認できていないがSK203・204を切ると思われる。北西部の床面でも径1.6mほどの黒色土部分を確認しており、これも土抗の可能性もある。北部は幅2mのトレンチによって床面付近まで失われている。平面形 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。住居跡ではない可能性もある。南北方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はN-15°-Wである。規模 東西方向が4.58m、南北方向が5.40mである。覆土の状態 第1・第2層で、共に粘土ブロックを含む。壁 残存壁高は10-19cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝

不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡中央部や南西隅などから出土する。SK203・204の範囲と重なる部分に多いため、これらの土抗の遺物とも考えられる。遺物は多く、裏主体に器台、大形壺、鉢が混じる。赤彩遺物は20点くらいある。鉢は折返し口縁状2個体、二重口縁1個体、二重口縁で赤彩1個体、小形丸底形2個体+ $\alpha$ (1)、中形壺は直口縁2個体(うち1個体は赤彩)ほか破片あり、器台は3個体+ $\alpha$ でこのうち1個体は明確な赤彩で二段の孔(2)、大形壺は折返し口縁で口唇部キザミ1個体、折返し口縁で折返しの下端キザミ2個体(3)、赤彩1個体、裏はS字台付裏1個体(5)ほかS字4個体+ $\alpha$ 、単口縁4個体+ $\alpha$ 、底部台付9個体+ $\alpha$ 、中央凹む平底2個体+ $\alpha$ 、単口縁の小形裏片少量、小形台付裏台部で4孔のもの1個体(4)である。本遺構の年代は8期新-9期古と考えられる。

### S1188 (第37・86図、第93表、図版八三)

位置 V区調査区、Bエ-15-5・10、Bオ-6-21・22、Bオ-11-1・2・6・7・11グリッドに位置する。北東にS1182、北にS1175A、南にSK195・197がそれぞれ近接してあるほか、東3mにS1179・180がある。

重複 なし。中央部は幅2mのトレンチによって床面付近まで失われている。平面形 南北方向に長い長方形で、南北方向の中軸線はN-23°-Wである。規模 東西方向が6.68m、南北方向が9.42mである。東辺の拡張と貼床による床面の作り替えを伴う建替がなされているとみられ、建替前の規模は東西方向が6.40m程と推定される。覆土の状態 第1～第5層である。第4・第5層は建替に伴う貼床層であり、第4a層は固く締まっている。西壁際中央で、中軸線方向に長い棒状の炭化材が出土する。壁 残存壁高は18-34cmであり、壁は外傾して立ち上がる。建替前の壁高22-44cmである。床面 建替前、建替後とも緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。覆土第4a層の状況から、建替後の南壁際中央は硬化していたと考えられる。掘方・貼床 建替前の掘方・貼床は不明である。建替に伴い第4・第5層で貼床されるが、東壁際の拡張部分は地山をそのまま床面としている。柱穴 主柱穴とみられるものが9本(P1-P3・P6-P11)ある。北西隅のP6-P8、西壁際中央のP9・P10は建替等に伴い柱作り替えられたものと推定されるが、新旧関係は不明である。P1は径42×37cm、深さ27cm、P2は径72×56cm、深さ40cm、P3は径84×60cm、深さ22cm、P6は径48×44cm、深さ20cm、P7は径58×34cm、深さ18cm、P8は径30×24cm、深さ45cm、P9は径48×45cm、深さ40cm、P10は径52×43cm、深さ20cm、P11は径60×58cm、深さ35cmである。柱間寸法は、P6～P8とP1間が3.80m・3.70m・3.28m、P9・P10とP2間が3.51m・3.57m、P11・P3間が3.46m、P9と・P6～P8間が3.39m・3.10m・2.84m、P10と・P6～P8間が3.73m・3.55m・3.33m、P2・P1間が2.92m、P11とP9・P11間が3.38m・2.92m、P3・P2間が3.48mである。覆土は第1・第2・第5～第8層で、砂粒を含む層が多い。入口ピット 南壁際東寄りのP5が入口ピットと考えられる。径76×68cm、深さ20cmで、南寄りの底面が小さく凹む。壁溝 北壁際と東壁際南半にある。北壁際は建替前に伴うとみられ、幅14～34cm、深さ4cmである。東壁際は建替後の施設と考えられ、幅28～52cm、深さ16cmと北壁際の壁溝より幅広い。火処 住居跡北部に建替前に伴うと考えられるかがある。掘り込みの有無等是不明だが地床がとみられ、被熱により赤変した範囲は平面楕円形で規模は86×54cmである。赤変範囲の北端には粘土の存在が確認されている。焼土上面及び周辺で長方形の礫2点が出土しており、灰石の可能性もある。建替に伴う貼床では、炉周辺の径2～2.5mの範囲で炭化物と焼土の層が厚さ2～5cmの砂層を挟んで2層堆積することが確認されている。建替後の炉の痕跡の可能性もあろうか。貯蔵穴 南東隅にある(P4)。平面形は隅丸長方形で、規模は110×94cm、深さは33cmである。底面は小さく平坦で、壁はなだらかに

立ち上がる。覆土は第3・第4層で、共に砂粒を多く含む。遺物 住居跡内各所から出土する。建替に伴う貼床層から出土するものもあるが、多くは床面から大きく浮いており、建替後に伴う遺物が主体とみられる。遺物は多く、甕主体で壺、鉢もある。高坏、砥石は僅かで、平安時代の遺物も少量混入する。赤彩土器片10数点は鉢や中～小形壺だろう。鉢は小形丸底1個体+αでおそらく3個体くらいあり(1)、中形壺は底部上げ底1個体、大形壺は折返し口縁1個体、単口縁1個体、底部は突出する平底3個体、平底1個体、甕はS字より単口縁がやや多くS字2個体+α、単口縁3個体+α、単口縁の胴部上半片1個体(2)、底部は台部4個体+α、平底2個体、ミニチュア底部片1個体、片岩製砥石1点(4)、砂岩製の砥石1点(3)である。平安時代の遺物は9世紀後半とみられ、器種は須恵器高台付坏1個体(5)、武蔵型甕などである。本遺構の年代は9期と考えられる。

## 2. 井戸

### SE137 (第26図)

位置 V区調査区、Bオ-21-11グリッドに位置する。北東にSI141が近接してあるほか、北西2mにSI139がある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径1.10m、短径1.00m、深さ1.06mである。断面形は筒状で底面は丸く、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 第1～第3層で、第1層は火山灰と考えられる白色土粒を多く含む。第2・第3層が人為堆積、第1層は自然堆積とみられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。古墳時代の可能性もある。

### SE138 (第38図)

位置 V区調査区北部、Cオ-1-25グリッドに位置する。近接する遺構はなく、西2mにSD145、西6mにSD130Cがそれぞれある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径1.13m、短径1.10m、深さ0.63mである。断面形は浅い筒状で底面は凹凸があり、壁は段を持って立ち上がる。井戸ではなく土坑とした方が良いかもしれない。覆土の状態 第1～第3層で、第1層は火山灰と考えられる白色土粒を多く含み、第1・第2層は自然堆積の可能性がある。第3層は掘りすぎかもしれない。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。古代以降の可能性もある。

## 3. 溝

### SD140 (第38図)

位置 V区調査区、Bエ-25-10、Bオ-21-6・7グリッドに位置する。南2mにSI146B・146Dがある。重複 本遺構はIc層上面から掘り込まれIb層に覆われる遺構であり、中世以降の所産と考えられる。平面的にはSI150・146Aと重複する位置にあるが、本遺構の底面は竪穴住居跡の確認面から20cmほど上であり、本遺構の掘り込みはSI150・146Aに影響しない。形状・規模 東西方向に続く直線状の溝であり、東西両端は不明である。西側は幅広く、中央付近で幅を狭めて東側へと続く。幅が変化する部分には溝と直行する浅い掘り込みがある。中軸線はN-60°-E、確認できた長さは6.10m、西側の幅は0.80～1.02m、深さ0.34m、東側の幅は0.50m、深さ0.12m、中央の掘り込みは長さ0.76m、幅0.33m、深さ0.43m

である。覆土の状態 第1・第2層である。遺物 遺物は僅かで古墳時代前期～中期初頭の土器と9世紀代の武蔵型甕や内面黒色処理の土師器破片などであり、他遺構などからの混入であろう。本遺構の年代は中世以降と考えられる。

## SD145 (第38図)

位置 V区調査区、Cオ-1-14・18・19・23・24グリッドに位置する。西に1.4-2mの距離を置いて並行するSD130Baがあるほか、東2mにSE138がある。重複 なし。遺構の位置と形状からSD130Bと関連する遺構と見られる。SD130BがIV a・IV b層を切り皿層に覆われるとされるため、本遺構もほぼ同様に構築された可能性が高い。形状・規模 SD130Baと平行するように南北方向に伸びる溝で、中央部分でくの字に屈曲する。北端は不明である。全体の中軸線はほぼN-0°で長さは9.94m、北部の中軸線はN-21°-E、南部はN-13°-Wである。断面形は浅い逆台形状で底面は平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。幅は66-87cm、深さは18cmである。覆土の状態 不明である。遺物 遺物はやや多いが、すべて古墳時代前期～中期の土器であり、混入と考えられる。本遺構の年代は遺構の状況や土層から古代と考えられ、SD130Bと同様9世紀後半頃の可能性がある。

## SD160 (第39図)

位置 V区調査区、Bオ-11-14・19・24、Bオ-16-4・9・13・14・18グリッドに位置する。西側にSI158・166・181、東側にSI161・170、北端にSI147がそれぞれ近接してある。重複 中央部でSD190Aと重複する。土層では新旧関係を確認できていないが、現地での所見からSD190Aを切るとみられる。発掘調査時にはSD190Aとの重複部分の南北で別の溝としていたが、遺構の状況などから1条の溝と判断した。部分的に幅2mのトレンチに切られている。形状・規模 調査時にSD160とSD189としていた遺構である。北半で緩く西に屈曲するが、ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝で、全体の中軸線はN-7°-Wで長さは27.20m、北部の中軸線はN-11°-W、南部はN-2°-Wである。断面形は丸味を持つ逆台形状で底面はおおむね平坦であり、壁は大きく外傾して立ち上がる。幅は80-130cm前後、深さは12-24cmである。底面の標高を比較すると部分的に高低差はあるもののほぼ一定しており、一方向に傾くことはない。覆土の状態 不明である。遺物 遺物は僅かで、古墳時代前期～中期の土器が出土する。高環1個体がある。本遺構の年代は古墳前期～中期であろう。

## SD187 (第40図、図版八三)

位置 V区調査区、V区南端、Aオ-21-17・18・22、Bエ-5-5・9・10、Bオ-1-1・2グリッドに位置する。周囲に遺構はなく、南東12mにVI区SD220・221がある。重複 なし。部分的に幅2mのトレンチに切られている。東西両端は調査区外へ続くかと推定される。土層の堆積状況から、IV b層上面を掘り込み面とし、II層、III層及びIV a層に覆われるとみられる。形状・規模 緩く屈曲しながら北西-南東方向に伸びる溝であり、全体の中軸線はN-47°-Wで長さは17.52m、北部の中軸線はN-58°-W、南部はN-40°-Wである。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。幅は46-70cm、深さは14-42cmである。底面の標高を比較すると調査した部分の南北で20cmほどの差があり、北から南へと緩やかに傾斜していることがわかる。覆土の状態 第1-5層であり、自然堆積とみられる。第2層及び第5層に明褐色粘土が多量に含まれるが、これは火山灰の可能性もあろう。Hr-FAか。遺物 出土遺物

はない。遺構や土層の状況から本遺構の年代は古墳時代中期と考えられる。より古くなる可能性もある。

#### SD190A (第39図、図版八三)

位置 V区調査区、Bオ-11-17・18・23・24、Bオ-16-4・5・10・15、Bオ-17-11グリッドに位置する。南にSI182が近接してあるほか、西3mにSI175A、東2mにSX164がそれぞれある。重複 IV層下位で確認した遺構であり、IV a層に覆われV層を切る。重複するSI161・162・166とは覆土の差異も僅かなため現地で新旧関係を確認できていないが、出土遺物や他遺構との関連などからSI161・162・166を切るものとする。中央部ではSD160と重複し、土層では新旧関係を確認できていないが現地での所見からSD160に切られるとみられる。東端は調査区外となる。形状・規模 緩く屈曲しながら南西-北東方向に伸びる溝であり、中軸線はN-43°-Eで長さは20.80mである。断面形は丸味を持つ逆台形状で底面は幅の狭い平坦面となっており、壁は外傾して直線的に立ち上がる。幅は30-110cm、深さは18-30cmである。底面の標高を比較すると調査した部分の南北で20cmほどの差があり、北から南へと緩やかに傾斜していることがわかる。

覆土の状態 覆土は砂粒を含む第1～第3層で、自然堆積の可能性が高い。遺物 南端などから出土する。遺物はやや多く、器種は埴、高坏、壺である。前期の土器もあるが、これは周辺の遺構からの混入であろう。埴は内斜口縁で小さい凹み底1個体、赤彩の内斜口縁1個体、高坏は坏部有稜で脚部は中空柱状で下半大きく屈曲して開く1個体、中空柱状の脚部1個体、小形壺1点、壺は複合口縁状の口縁部1個体である。本遺構の年代は中期初頭ないし前葉(TK73段階)と考えられる。

#### SD190B (第39図)

位置 V区調査区、Bオ-16-5・10グリッドに位置する。南東にSX164が近接してある。重複 北部でSI162と重複する。SD190Aと並行するあり方などから、本遺構はSD190Aと近い時期の所産と推定される。SI162との新旧関係は確認できていないが、前記の状況などからSI162を切るものとする。形状・規模

SD190Aと並行して長く掘られた溝と推定されるが、確認できたのは長さ2.36m分のみである。南西-北東方向に伸びており、中軸線はN-27°-E、幅は45cmで断面形や深さは不明である。覆土の状態 不明である。遺物 なし。遺構の状況からSD190Aと近い時期の所産と推定されるため、本遺構の年代は中期初頭ないし前葉(TK73段階)と考えられる。

#### 4. 土坑

V区SK217、175C、201は6mくらいの一定の距離をおいて直線的にある。V区SK149B、198もやはり6mくらいずつ離れて位置する。

#### SK149B (第29・86図、第94表、図版八四)

位置 V区調査区、Bエ-20-5グリッドに位置する。西3mにSI176、南西3mにSI177、北5mにSK198、東5mにSK202がそれぞれある。重複 SI149Aを切る。形状・規模 平面形は細長い楕円形で、中軸線はN-10°-W、規模は長径1.50m、短径0.55m、深さ0.15mである。底面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。遺構の状況から火葬墓の可能性が考えられる。覆土の状態 2層に分層でき、第1層は炭化物和焼土、灰を多く含む。人為堆積と考えられる。第2層は地山や重複するSI149A覆土の可能性がある。

**遺物** 第1層から炭化物や焼土とともに出土する。遺物はごく僅かで、武蔵型甕主体に須恵器環も多く僅かに土師器環が混じる。甕、須恵器環は遺構外東側にも多く出土しており、これらは本遺構出土物が周囲に移動したものとみられる。土師器環はロクロ整形で器高低底部系切り離し後無調整のもの1個体、須恵器環は3個体(1・2)、口縁部コの字状の武蔵型甕は1個体で台部を持つ。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

#### SK175C (第34・86図、第95表、図版八四)

**位置** V区調査区、Bオ-15-15・20グリッドに位置する。北にSI177、北東にSI175Bが近接してあるほか、西6mにSK217、東6mにSK201がそれぞれある。**重複** 東辺でSI175Aを切る。**形状・規模** 平面形は南北方向に細長い隅丸長方形で、中軸線はN-1°-Eである。規模は長径2.52m、短径1.12m、深さ0.17mである。底面は平坦で、壁は丸みを持って立ち上がる。遺構の状況から火葬墓の可能性が考えられる。**覆土の状態** 炭化物や焼土、砂質土ブロックなどを含む暗褐色土(第1層)である。土抗内のほとんどは砂質土ブロックを含む土であり、底面及び壁面付近のみ炭化物や焼土がある。人為堆積と考えられる。

**遺物** 遺構内の主に底面からやや浮いた位置で遺物が出土する。なお、同時期の遺物は本遺構の南でも確認されている。遺物は少なく、ロクロ整形土師器環2個体(1)、須恵器皿1個体(2)、原始灰輪高台付長頸瓶1個体(3)、コの字状の口縁部の武蔵型甕片、混入とみられる粗い縦方向のナデが施された大型甕1個体、甕ないし鉢の破片である。本遺構の年代は9世紀代と考えられる。

#### SK185B (第40図、図版八四)

**位置** V区調査区、Bオ-6-11・16グリッドに位置する。北西にSK196が近接してあるほか、東3mにSX185Aがある。**重複** なし。**形状・規模** 平面形は楕円形で、中軸線はN-79°-Eである。規模は長径1.26m、短径1.03m、深さ0.32mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。**覆土の状態** 遺構上面にはIVa層とみられる暗褐色土が堆積する。覆土は第1・第2層であり、第1層は多量の粘土を、第2層は炭化物を含む。人為堆積の可能性もある。**遺物** 一定量あり、器種は甕主体に大形壺、中形壺、高環、鉢、器台がある。鉢は二重口縁状で薄手のもの1個体、内斜口縁状で甕形1個体、小さく口径大きい甕形1個体、器台は受部二重口縁状の破片数点、小形壺は厚手、球胴の胴部片、中形壺は赤彩単口縁の口縁部片や胴部片のほか凹み底1個体、高環は破片数点、大形壺は単口縁1個体、突出する平底1個体のほか胴部片、甕は胴部外面ハケ整形主体でナデのものも少しあり、S字1個体、口縁部括れ上平斜め上方に直線的に伸びる北陸系かとみられるもの1個体、単口縁1個体、台部1個体、平底1個体、小形台甕の台部2個体である。本遺構の年代は9期頃と考えられる。

#### SK191 (第36図、図版八四)

**位置** V区調査区、Bオ-11-4グリッドに位置する。西にSI180、南西にSK192が近接してあるほか、北5mにSD160がある。**重複** なし。SD160の延長線上にあるため重複する可能性があるが、詳細は不明である。**形状・規模** 柱穴状の土坑で、遺構の状況はSK202に類似する。平面形は楕円形で、中軸線はN-80°-W、規模は長径0.64m、短径0.50m、深さ0.40mである。底面は丸く、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土の状態** 第1・第2層で、第1層は多量の粘土ブロックを含む。人為堆積と考えられる。**遺物** なし。本遺構の年代は不明である。攪乱の可能性もある。



## SK192 (第36図、図版八四)

位置 V区調査区、Bオ-11-4グリッドに位置する。南西にSI179、北東にSK191が近接してある。重複 西部でSI180を切る。形状・規模 平面形は楕円形である。中軸線はN-80°-Wで、西側が柱穴状に深くなる。規模は長径1.47m、短径1.08m、東半部分の深さ0.05m、柱穴状部分は長径0.95m、短径0.68m、深さは0.52mである。東半底面は平坦で立ち上がりはゆるやか、柱穴状部分は底面小さく平坦で平面形は隅丸方形を呈し、中位の段より上位は平面楕円形となる。壁はやや外傾して立ち上がる。柱穴状部分と浅い楕円形部分が別遺構となる可能性も考えられる。覆土の状態 第1～第4層で、第1・第2層が上位の浅い部分、第3・第4層が柱穴状部分の覆土である。第1・第2層は火山灰と考えられる白色土粒を含み、自然堆積とみられる。第3・第4層は多量の砂を含んでおり、人為堆積の可能性もある。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

## SK195 (第37図、図版八四)

位置 V区調査区、Bオ-6-22グリッドに位置する。北にSI188が近接してあるほか、南2mにSX185A、西3mにSK197がそれぞれある。重複 なし。上面がトレンチにより浅く削られている。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-62°-W、規模は長径1.30m、短径0.98m、深さ0.08mである。底面は平坦で、壁は短く垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 砂や粘土を含む灰褐色土(第1層)であり、人為堆積の可能性もある。遺物 9～10期の甕片5点が出土するが、混入であろう。本遺構の年代は不明である。攪乱の可能性もある。

## SK196 (第40図、図版八五)

位置 V区調査区、Bオ-6-16グリッドに位置する。南にSK185B、北にSK197が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は細長い楕円形で、中軸線はN-23°-W、規模は長径1.36m、短径0.59m、深さ0.10mである。浅い皿状の掘り込みで底面は平坦であり、壁は短く外傾して立ち上がる。覆土の状態 炭化物とともに2～3cm大の骨片が多数出土する遺構であり、火葬墓と考えられる。第1・第2層ともに炭化物・骨片を含むが、上層にあたる第1層に多い。骨片は平面的には土抗中央付近にまとまっており、中心の径20cm程の範囲に特に集中する。人為堆積と考えられる。遺物 南寄りから多く出土する。遺物量は僅かで、ロケロ整形の土師器環で口唇部が開く形のもの1個体、口縁部コの字状の武蔵型甕1個体である。古墳前期土器片が僅かに混入する。本遺構の年代は9世紀中葉～後半と考えられる。

## SK197 (第37図、図版八五)

位置 V区調査区、Bオ-6-21グリッドに位置する。北にSI188、南にSK196が近接してあるほか、東3mにSK195がある。重複 なし。形状・規模 平面形は長方形で、西端はやや丸味を持つ。中軸線はN-77°-Eで、規模は長径1.23m、短径0.63m、深さは不明だが0.30m程度とみられる。底面は平坦で、壁は直線的に垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 黒褐色土や灰褐色土のブロックからなる暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。遺物 古墳前期9～10期の土器が出土するが、混入であろう。遺物は破片12点のみで、鉢かと思われる赤彩の薄く精製の口縁部片1点、壺片4点、甕片7点である。本遺構の年代は不明である。攪乱の可能性もある。

## SK198 (第25図、図版八五)

位置 V区調査区、Bエ-20-15グリッドに位置する。北西にSI154、南東にSI148が近接してある。重複 南東部でSI148を切る。北西部がSI154と重複するが、新旧関係は不明である。調査時の状況からは、SI154に切られる可能性が高い。形状・規模 平面形は細長い楕円形で、中軸線はN-30°-W、規模は長径1.60m、短径0.65m、深さ0.11mである。底面はおおむね平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。覆土の状態 暗褐色土(第1層)で上面に炭化物や焼土がある。炭化物は南北両端付近に顕著で、中央付近には骨片が散乱しており、火葬墓と考えられる。人為堆積の可能性が高い。遺物 遺構内全体から土師器片が出土しており、焼成良好な口径13.2cmの須恵器環1個体、口縁部コの字状で受け口状となる武蔵型甕1個体がある。本遺構の年代は9世紀代と考えられる。

## SK199 (第34図、図版八五)

位置 V区調査区、Bオ-11-11・16グリッドに位置する。北西にSI175Bが近接してあるほか、北東2mにSK201、西3mにSK175Cがそれぞれある。重複 土層では確認していないが、遺構全体がSI175Aに切られるとみられる。形状・規模 平面形はやや不整な隅丸長方形で、南西端が広く、北東端は狭い。中軸線はN-47°-Eで、規模は長径1.21m、短径1.00m、深さ0.08mである。底面は平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。覆土の状態 覆土は砂質土を含む第1層であり、人為堆積の可能性が高い。遺物 なし。本遺構の年代は重複関係から古墳前期かそれ以前と言えるが、構築時期は限定できない。

## SK200 (第33図、図版八六)

位置 V区調査区、Bエ-20-9・14グリッドに位置する。南にSI176、北東にSI154が近接してあるほか、南2mにSK218、北東3mにSK198がそれぞれある。重複 遺構全体でSI167を切る。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-17°-Eである。規模は長径2.35m、短径1.86m、深さ0.53mである。断面形は皿状で底面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。覆土の状態 炭化物や焼土を含む第1・第2層で、自然堆積と考えられる。遺物 多量の土師器片が覆土中から出する。器種は甕・壺主体に高坏が混じる。器台は僅かに含まれる。中形壺は単口縁破片、大形壺は底部凹み底2個体、甕は胴部外面ハケ整形のものも多くS字と単口縁があり、S字は口縁部が上に長く伸びた形状のもの1個体、台部2個体がある。本遺構の年代は9～10期と考えられる。

## SK201 (第34・86図、第96表、図版八六)

位置 V区調査区、Bオ-11-16グリッドに位置する。西にSI175Bが近接してあるほか、東2mにSD190、南西2mにSK199、西6mにSK175Cがそれぞれある。重複 西辺でSI175Aを切る。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-35°-Wである。規模は長径1.46m、短径1.06m、深さ0.28mである。底面は僅かに丸味を持ち、壁はやや外傾して短く立ち上がる。なお、西側のSI175A覆土上面において本遺構に接するように焼土と炭化材の集中が確認されており、これも遺構の一部であった可能性がある。この場合、遺構は東西に中軸線をとる長い楕円形の遺構で、中軸線はN-86°-W、規模は長径2.00m、短径1.10m程となる。いずれにせよ遺構の状況から火葬墓の可能性が高い。覆土の状態 覆土は共に炭化物を含む第1・第2層で、第1層は焼土も含む。人為堆積と考えられる。東西方向主軸の土抗となる場合は第1層のみが覆土になるとみられる。遺物 遺物はごく僅かで、ロクロ整形の深身土師器環1個体(1)、口

径大きく頸部は丸く外反し器壁薄い武蔵型甕1個体(2)である。本遺構の年代は9世紀前半と考えられる。

SK202 (第40図、図版八六)

位置 V区調査区、Bオ-16-1・2グリッドに位置する。近接する遺構はなく、北東3mにSI158、北西5mにSK149Bがある。重複なし。形状・規模 柱穴状の土抗で、遺構の状況はSK191に類似する。平面形は円形で、規模は長径0.77m、短径0.68m、深さ0.49mである。底面は平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 第1・第2層で、第1層は多量の粘土ブロックを含む。人為堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。

SK203 (第36図、図版八六)

位置 V区調査区、Bエ-10-9・10グリッドに位置する。南西にSK204が近接してあるほか、北東9-13mにSK185B・196・197、SX185Bがそれぞれある。重複 SI183内にあり、土層では確認できていないがSI183に切られるとみられる。形状・規模 平面形は不整な楕円形で、中軸線はN-52°-W、規模は長径2.15m、短径1.96m、深さ約0.10mである。底面は凹凸があり、壁は外傾して丸みを持って立ち上がる。覆土の状態 覆土は暗褐色土で、自然堆積かどうかは明確にしない。遺物 遺構内各所から出土する。SI183出土遺物の中にも本遺構出土遺物が含まれる可能性がある。遺物は少なく、器種は甕、壺主体に高坏、鉢が僅かに入る。鉢は赤彩で内斜口縁状の口縁部片、中形壺は直口縁状の破片2個体分、高坏は赤彩と赤彩されないものの破片、大形壺は突出する平底3個体、平底1個体、口縁部は直口縁の破片のみ、甕は胴部外面ハケ整形主体の破片でS字あり、胴部外面荒く鋭いハケ調整1個体、厚い単口縁で端部外面が垂直な面となる北陸系かと思われるもの1個体、台部2個体である。本遺構の年代は9期古段階と考えられる。

SK204 (第36図、図版八六)

位置 V区調査区、Bエ-10-4・9グリッドに位置する。北東にSK203が近接してあるほか、北東7-11mにSK185B・196・197、SX185Bがそれぞれある。重複 SI183南西部と重複しており、土層では確認できないがSI183に切られるとみられる。形状・規模 平面形は不整楕円形で、2基の土抗が重複しているようにも見える。中軸線はN-47°-Eで、規模は長径2.33m、短径1.93m、深さ約0.10mである。底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。底面は完掘していない可能性がある。覆土の状態 覆土は暗褐色土で、自然堆積かどうかは明確にしない。遺物 遺構内から僅かに出土する。SI183出土遺物の中にも本遺構出土遺物が含まれる可能性がある。器種は壺と甕で、壺は大～中形の胴部片で外面ナデ・ミガキ、甕は胴部、台部、頸部片で外面はハケ整形で台部下端折返しである。本遺構の年代は9～10期と考えられる。

SK206 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-21グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、南にSI141、SK208・209、東にSK209、南西にSK216がそれぞれ近接してある。重複なし。形状・規模 平面形は不整円形で、規模は長径0.84m、短径0.74mである。深さは底面まで掘っていないため不明で、確認面下34cm分を調査している。壁は外傾して立ち上がる。井戸の可能性もあろう。覆土の状態 2層に分層でき、第1層は粘土と土壌の層が薄く互層を成すため水性堆積と見られる。第2層は砂を多く含む。自然堆積と考えられる。遺物 古墳時代前期10期頃の土師器甕片1点と甕片1点がある。本遺構の年代は不明である。

## SK207 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-21 グリッドに位置する。SI141 周辺の土抗の一つであり、南に SI141、北に SK206、西に SK216 がそれぞれ近接してある。重複 SK208 に切られる。形状・規模 柱穴状の遺構であり、平面形は楕円形で、中軸線は N-50°-W、規模は長径 0.56 m、短径 0.46 m、深さ 0.38 m である。底面は丸く、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 2層に分層でき、第2・第3層とも灰褐色粘土を多く含む。自然堆積と考えられる。遺物 SK207・208 として古墳時代前期9期前後の胴部外面粗いハケ目の甕片4点が出土する。本遺構の年代は不明である。

## SK208 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-21 グリッドに位置する。SI141 周辺の土抗の一つであり、南に SI141、北に SK206、東に SK209 がそれぞれ近接してある。重複 SK207 を切る。形状・規模 柱穴状の遺構であり、平面形は不整形で、規模は長径 0.40 m、短径 0.37 m、深さ 0.23 m である。底面は丸く、壁は外傾して立ち上がっており、西側は中位に段を持つ。覆土の状態 灰褐色粘土を含む暗褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 SK207・208 として古墳時代前期9期前後の胴部外面粗いハケ目の甕片4点が出土する。本遺構の年代は不明である。

## SK209 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-22 グリッドに位置する。SI141 周辺の土抗の一つであり、南に SI141、西に SK206-208 がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径 0.68 m、短径 0.66 m、深さ 0.30 m である。底面は丸く、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 2層に分層でき、ともに火山灰と見られる白色土粒を含む。自然堆積と考えられる。遺物 古墳時代前期の土師器甕片1点のみである。本遺構の年代は不明である。

## SK210 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-23 グリッドに位置する。SI141 周辺の土抗の一つであり、西に SI141 が近接してある。重複 なし。形状・規模 柱穴状の遺構であり、平面形は円形で、規模は長径 0.77 m、短径 0.75 m、深さ 0.38 m である。底面は丸く小さく遺構南寄りにあり、壁は北側では途中で段を持つようになだらかに、南側では外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 2層に分層でき、第1層は焼土と炭化物を多量に含む。自然堆積と考えられる。遺物 古墳時代前期10期前後の胴部外面ハケ調整の厚手な甕片3点のみである。本遺構の年代は不明である。

## SK211 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-13 グリッドに位置する。SI141 周辺の土抗の一つであり、西に SI141、南西に SK212 がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線は N-62°-E、規模は長径 0.44 m、短径 0.35 m、深さ 0.15 m である。底面は丸く小さく遺構東寄りにあり、西側は平坦面となった後短く外傾して立ち上がり、東側は底面からそのまま外傾して立ち上がる。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を含む灰褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 古墳時代前期9期前後の胴部外面ハケ調整の甕片2点のみである。本遺構の年代は不明である。

SK212 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-13グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、北にSI141、北東にSK211、西にSK213・214がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 柱穴状の遺構であり、平面形は不整形円で、規模は長径0.32m、短径0.28m、深さ0.28mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を含む暗褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 遺物は古墳時代前期～中期の大形壺片1点のみである。本遺構の年代は不明である。

SK213 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-12グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、北にSI141、東にSK212がそれぞれ近接してある。重複 SK214を切る。形状・規模 浅い柱穴状の遺構であり、平面形は円形で、規模は長径0.28m、短径0.26m、深さ0.07mである。底面は丸味を持ち、壁はなだらかに立ち上がる。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を含む暗褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から古墳時代土抗の可能性はある。

SK214 (第26図、図版八七)

位置 V区調査区、Bオ-21-12グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、北にSI141、東にSK212がそれぞれ近接してある。重複 SK213に切られる。形状・規模 浅い柱穴状の遺構であり、平面形は円形で、規模は長径0.28m、短径0.26m、深さ0.09mである。底面は丸味を持ち、壁はなだらかに立ち上がる。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を含む暗褐色土(第2層)である。自然堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から古墳時代土抗の可能性はある。

SK215 (第26図、図版八八)

位置 V区調査区、Bオ-21-16グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、東にSI141が近接してあるほか、南2mにSE137、北3mにSK216がそれぞれある。重複 なし。形状・規模 柱穴状の遺構であり、平面形は楕円形で、中軸線はN-33°-W、規模は長径0.60m、短径0.47m、深さ0.40mである。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 砂質粘土や火山灰と見られる白色土粒を含む灰褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から古墳時代土抗の可能性はある。

SK216 (第26図、図版八八)

位置 V区調査区、Bオ-21-21グリッドに位置する。SI141周辺の土抗の一つであり、南東にSI141、東にSK206-208が近接してあるほか、南3mにSK215がある。重複 なし。形状・規模 浅い柱穴状の遺構であり、平面形は楕円形で、中軸線はN-19°-W、規模は長径0.48m、短径0.38m、深さ0.18mである。底面は丸く小さく遺構北寄りにあり、南側は平坦面となった後短く外傾して立ち上がり、北側は底面からそのまま外傾して立ち上がる。覆土の状態 火山灰と見られる白色土粒を僅かに含む暗褐色土(第1層)である。自然堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から古墳時代土抗の可能性はある。

## SK217 (第40図、図版八六)

位置 V区調査区、Bエ-15-13グリッドに位置する。北西にSI178が近接してあるほか、北東6mにSK175Cがある。重複なし。形状・規模 平面形は細長い楕円形で、中軸線はN-18°-Wである。規模は長径1.30m、短径0.53m、深さ0.48mである。底面はおおむね平坦で、壁は直線的に垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 粘土ブロックを多量に含む第1層であり、人為堆積と考えられる。遺物なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から時期不明の擾乱か中近世土壌墓の可能性が考えられる。

## SK218 (第33図、図版八七)

位置 V区調査区、Bエ-20-3・4グリッドに位置する。北2mにSI167、SK200、東2mにSI149A、南2mにSI177がそれぞれある。重複なし。遺構全体がSI176と重複するが、本遺構直上にはIVa・IVb層が堆積しており、SI176はそれより上位にあるため直接の切り合い関係はない。遺構上面の大部分が幅2mのトレンチに切られる。形状・規模 平面形は不整な隅丸方形で、中軸線はN-42°-E、規模は長径2.34m、短径2.00m、深さは湧水のため明確ではないが、0.50m程度とみられる。壁は垂直気味であり、上半で角度をなだらかに変えて立ち上がる。覆土の状態 覆土は砂や礫を含む黒褐色土で、自然堆積とみられる。遺物なし。土層の状況から本遺構の年代は古墳前期かそれ以前と考えられる。

## 5. 性格不明遺構

明確な遺構として捉えることができなかった遺物集中等を性格不明遺構として記述する。不整形の掘り込みを持つものや火葬墓と考えられる遺構もある。

## SX136 (第41図、図版八八)

位置 V区調査区、Bオ-21-10・15・20・25、Bオ-22-6・11・12・16・17・21・22グリッドに位置する。近接する遺構はなく、西10mにSI141、東10mにはⅢ区SI112がそれぞれある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-0°、規模は長径12.00m、短径7.00mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.2-24.5m前後と幅があり、24.3m付近に多い。出土層位はIV層中位に相当すると推定される。平面的には範囲の周辺部には少なく、中央に特に集中する部分がある。遺物は多く、器種は壺主体に大形壺、中形壺、高環、鉢、器台からなる。壺は僅かにある。鉢は甔のような荒っぽいハケ整形の口縁部1個体、二重口縁状に段を持って口縁部となるもの1個体、内斜口縁状に口縁部の字に折れて内湾するもの1個体、小形丸底形4個体、小形丸底で赤彩1個体、器台は脚部3孔のもの3個体+α、中形壺は長い直口縁でハの字に開く口縁部4個体+α、底部凹み底2個体+α、赤彩のような破片少量、高環は5個体あり、中実柱状の脚部を持つ高環状装飾器台で坏部下端が鐮状に張り出すもの1個体、坏部有稜で脚部細く中実柱状のもの4個体である。甔は底部やや大きい1孔の底部片1個体、大形壺は単口縁で頸部ハケ状工具によるキザミある粘土貼付け1個体、単口縁でハの字に丸く外反して開くもの2個体、二重口縁口縁部片4個体+α、突出する平底5個体、平底で少し凹み底3個体、大廓系とみられる白く夾雑物多く入る軽い土器片数点ある。甔はS字が主体であり、胴部外面はハケ整形主体でヨコハケが一部にある。球胴の甔類似の胴部外面ナデの甔1個体ある。S字は19個体+αあり、このうち胴部外面ヨコハケで口唇部内面上端に沈線状の凹みを持ち肩が張る器形のもの3個体、口唇部内面上端に沈線状の凹み

を持つもの3個体である。単口縁は9個体 +  $\alpha$  あり、うち単口縁台付1個体、口縁部丸く外反するもの1個体、口縁部直立して上半折れて外反1個体である。台部は18個体 +  $\alpha$ 、平底8個体 +  $\alpha$  である。本遺構の年代は9期でも古い方かと考えられる。

SX142 (第41図、図版八八)

位置 V区調査区北端、Cオ-1-21、Cオ-6-1グリッドに位置する。周辺に遺構は少なく、西7mにSX143、東7mにSD130Bがある。重複なし。形状・規模 径約0.70mの範囲内に数個体の土師器が出土する小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 遺物が出土する標高は24.4-24.5m前後であり、層位的にはほぼIV層に相当すると推定される。遺物は僅かで、精製の小形台付甕1個体のほか被熱裏片5点(下半内面ハケ外面ナデ・ケズリ)である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX143 (第41図、図版八八)

位置 V区調査区北端、Cエ-10-4・5グリッドに位置する。周辺に遺構は少なく、東7mにSX142がある。重複なし。形状・規模 径約0.50mの範囲内に数個体の土師器が出土する小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 遺物が出土する標高は24.5-24.6m前後であり、層位的にはほぼIV層に相当すると推定される。遺物は僅かで、中形甕は胴部上半～中位が残存し球脚でおそらく長い直口縁のもの1個体、裏は胴部外面ハケのみの整形のほかナデやケズリ後ハケもあり、台付甕台部2個体うち1つは底部内外面に砂貼付、胴部外面ナデの平底裏1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

SX152 (第42図、図版八九)

位置 V区調査区、Bエ-20-12・17・18・22・23グリッドに位置する。南西にSI157が近接してあるほか、南東4mにSI167がある。重複なし。形状・規模 IV・V層を握り込む。住居跡と想定して調査したが住居跡とはならなかったものである。形状は北西部がトレンチに切られる方形としているが、定かではない。図示した形状の中軸線はN-45°-W、規模は南西-北東方向6.20m、北西-南東方向は調査部分で3.16m、深さは0.28mである。覆土の状態 不明である。地山であるIV・V層とあまり変わらないものであったとみられる。遺物 遺構内各所から僅かに出土する。遺物は裏や大形甕片のみと僅かであり、大形甕は頸部片や胴部片で胴部外面はミガキやナデ整形、裏は胴部外面ハケ整形の裏片数個体である。本遺構の年代は9～10期と考えられる。

SX164 (第42図、図版八九)

位置 V区調査区、Bオ-11-25、Bオ-12-21、Bオ-16-5、Bオ-17-1グリッドに位置する。北にSI162、北西にSD190Bが近接してある。重複なし。形状・規模 IV層を握り込む住居跡と想定して調査したが住居跡とはならなかったものである。形状は方形としているが、定かではない。図示した形状の中軸線はN-14°-E、規模は東西方向4.11m、南北方向は4.68m、深さは約0.12mである。覆土の状態 不明である。地山であるIV層とあまり変わらないものであったとみられる。遺物 遺構内南東部と北西部にまとまる。遺物は少なく、器種は裏と中形甕が多く、大形甕・高環・器台も混じる。器台は口縁部外反で赤彩1個体、中形甕は二重口縁で内面段ありの口縁～胴部片1個体、直口縁で口縁部やや内湾し長い口縁～胴部片1個体、赤彩のやや長い直口縁1個体など、高環はハの字だが長い中実柱状で下半で丸く開く脚部2

個体あり、うち3孔のもの1個体、大形壺は二重口縁口縁部片、胴部片など僅か、裏は胴部外面ハケで、一部ナデ・ケズリのものあり、単口縁3個体、S字2個体、口縁部丸い単口縁1個体、台部1個体である。このほか器種不明で胴部から直立する口縁部で口径大きく、外面丁寧なやや斜め右下がりの密なミガキで調整される大きな鉢形となるもの1個体がある。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### SX172 (第42・86図、第97表、図版八九)

位置 V区調査区、Bオ-12・7・8・9・12・13・14グリッドに位置する。西4mにSI171、南4mにSX174がそれぞれある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-78°-W、規模は長径5.50m、短径4.20mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.1-24.35m前後であり、24.25m付近に多い。出土層位はIV層下位に相当すると推定される。平面的には範囲内いくつかの集中部分が存在する。遺物は多く器種は裏主体で、大形壺、鉢が一定量ある。器台と高坏は僅かだが器台もある。鉢は小形丸底形4個体で赤彩は2個体あり、うち小形のもの1個体、口径大きく二重口縁のもの1個体(1)、器台は脚部3孔のもの1個体、高坏は細長い脚部で、絞って作っているため上半中実で下半開くもの1個体ほか、同様の形の破片少量、大形壺は折返し口縁2個体、単口縁でハの字に開くもの3個体、細い棒状浮文2本貼付の二重口縁で上段が直線的に開き厚手のもの1個体、二重口縁で明瞭な段を持ち上段直線的に開く大廓系ともみられるもの1個体である。裏は胴部上半外面上がり斜めのハケで粗いハケのものもあり、S字10個体、単口縁5個体、台部20個体、平底3個体、小形裏1個体、炬器台1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX174 (第42図、図版八九・九〇)

位置 V区調査区、Bオ-7・13・14・18・19・23・24、Bオ-12・3・4グリッドに位置する。南にSX186Bが近接してあるほか、北4mにSX172がある。重複なし。形状・規模 中間で括れる平面不整形円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-0°である。遺物はより南からも出土する可能性があるためさらに規模が大きくなると推測されるが、現状での規模は長径10.70m、短径4.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.0-24.25m前後であり、24.15m付近に多い。出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は多く、範囲内いくつかの小さなまとまりを作るように存在する。前期土器がまとまっており、これ以外の時期の混入は少ない。器種は裏や大形壺が多く、器台、中〜小形壺、鉢、甗などもある。器台や赤彩遺物の多さ、甗の様相、高坏に棒状脚部がないといった古い要素があるが、有段口縁鉢など、新しい要素もみられる。鉢は小形丸底状でコップ形をした凹み底のもの1個体、有段口縁鉢で薄手のもの1個体(新しい要素だろう)、器台は全部で4個体あり、うち2個体は赤彩、有窓器台の可能性もある大型が2個体あり脚部二段3孔1個体、脚部3孔赤彩が1個体、小形は受部有稜2個体である。小形壺は増形で凹み底1個体(新しい時期のものか)、二重口縁状の短い口縁部が付く赤彩壺で精製のもの1個体、このほか、底部上げ底2個体でうち1つは赤彩、中形壺は長い直口縁で大形壺のような壺1個体、つぶれた球胴の胴部1個体、球胴の胴部2個体、赤彩の球胴壺1個体、底部凹み底2個体、高坏は少なくとも有孔の脚部片2個体+α、無孔らしいもの2個体、甗は多くきれいな逆台形をしており底部単孔のもの5個体+α、大形壺は単口縁6個体、折返し口縁2個体、二重口縁1個体、二重口縁で段にキザミあり1個体、二重口縁で口唇部にハケを使ったキザミあり1個体、底部平底と突出する平底5個体+α、裏は外面調整ハケ主体で胴部上半右上がりハケで密のものとして粗いものもあり、ケズリ後ハケの個体もある。S字は多く20個体+αあり、



うち口唇部上面に沈線状の凹み2個体+ $\alpha$ 、単口縁は16個体+ $\alpha$ うち端面面取り1個体、口縁部上半が直立するもの1個体である。台部は22個体+ $\alpha$ でこのうち内外面に砂貼付け10個体、平底7個体+ $\alpha$ 、小形台付甕1個体、ミニチュア土器に近い小形台付甕1個体がある。本遺構の年代は8期新〜9期古と考えられる。

#### SX177B (第32・86図、第98表、図版一二二)

位置 V区調査区、Bエ-15-19グリッドに位置する。東にS1175A、SK175Cが近接してあるほか、東7mにSK201、南西6mにSK217がそれぞれ近接してある。重複 北半でS1177Aを切る。形状・規模 南北方向の土層断面と焼土及び遺物の状況から土抗状の遺構と判断したものであり、詳細は明らかにならない。平面形は楕円形とみられ、南北方向の中軸線は推定でN-15°-W程度、規模は長径2.30m、短径1.90m前後、深さは0.18mである。焼土が遺構範囲内南東部で面的に確認でき、範囲は長径1.00m、短径0.50m程度である。火葬墓とみられる楕円形ないし隅丸長方形の土抗となる可能性が高い。覆土の状態 炭化物と焼土を多量に含む黒褐色土(第1層)である。遺物 焼土付近から多く出土する。遺物は少なく、器種は武蔵型甕主体に須恵器環、須恵器瓶類、紡錘車があり、前期-中期遺物が混入する。遺物の一部はSK175Cに関わるかもしれない。須恵器環は3個体(1)でこのうち1個体は焼成不良(2)、須恵器瓶類2点、武蔵型甕は小形1個体(3)、大形4個体+ $\alpha$ (4)、台部2個体+ $\alpha$ 、平底2個体+ $\alpha$ で底部径は約4.3cm、紡錘車は3点で完形1個体(5)、孔が貫通しない未製品1個体(6)、破片1個体(7)である。本遺構の年代は9世紀後半と考えられる。

#### SX185A (第43図、図版九〇)

位置 V区調査区、Bオ-6-12・17・18グリッドに位置する。北2mにSK195、西3mにSK185Bがそれぞれある。重複 なし。形状・規模 覆土と地山の区別が困難であったため、壁の位置については不明確な部分がある。不整形の土抗状の遺構であり、規模は長径3.56m、短径3.53m、深さ0.34mである。断面形は浅い皿状で底面は丸く壁はなだらかに立ち上がるが、南部にもう一段断面皿状に深くなる部分がある。覆土の状態 覆土は第1・第2層で共に粘土ブロックを含むほか、第1層には炭化物が含まれる。人為堆積の可能性もある。遺構上面にIVa層が堆積する。遺物 遺構内各所から出土する。遺物は一定量あり、器種は甕主体で大形甕、中形甕、鉢、器台、高坏が混じる。鉢は小形丸底形5個体+ $\alpha$ のうち赤彩1個体、口径大きく内斜口縁状に口縁部折れて外傾し外面折返し口縁状のもの1個体、器台は脚部3孔で受部有段のもの3個体+ $\alpha$ 、中形甕は直口縁で長いハの字に開く口縁部2個体+ $\alpha$ 、底部凹み底3個体+ $\alpha$ でこのうち赤彩2個体+ $\alpha$ 、高坏は坏部片や脚部片など僅かで、脚は太めで下半が丸く外反する形状でありハの字に開く脚はなし、大形甕は二重口縁の破片2個体、単口縁で丸く外反1個体、赤彩で長い単口縁の甕1個体+ $\alpha$ 、突出する平底2個体、突出する平底で中央凹む3個体、甕は胴部外面ハケ整形主体で、ナデも少しあり、形状の崩れたS字6個体+ $\alpha$ 、単口縁12個体+ $\alpha$ 、台部12個+ $\alpha$ で平底見当たらず、このほか9世紀代の非クロコ土器環1個体が混入する。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX186A (第43・85図、第99表、図版九〇)

位置 V区調査区、Bオ-6-10・15、Bオ-7-6・11グリッドに位置する。近接する遺構はなく、東7mにSX186B、東8mにSX174がそれぞれある。重複 なし。形状・規模 南西部の境界が不明だが平面楕円形の遺物集中とみられる。集中範囲の南北方向の中軸線はN-78°-W、規模は長径7.90m、現状での

短径は4.90 mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.3-24.5 m前後であり、24.4 m付近に多い。出土層位はIV層中に相当すると推定される。遺物は北西部に多く、他にも範囲内に小さなまとまりを作るように存在する。遺物は多めで器種は甕主体に大形甕、中形甕、鉢が混じる。高坏、器台、ミニチュア土器は僅かである。鉢は二重口縁で薄手かつ精製のもの3個体+αでこのうち2個体は赤彩、うち二重口縁部み底1個体(1)、器台は口縁部二重口縁状の受部片1点、小形甕は胸部片数点、中形甕は口縁部まっすやや開いて立ち上がる埴形の口縁部片1個体、高坏はハの字に開く脚部で有孔のもの1点、厚手で脚部外面ハケ整形で甕のような胎土1点、赤彩で薄手の坏部片のような破片があり、大形甕はハの字に長く開く口縁部の口縁-胸部上端片で赤彩され胸部上半へら描きあり1個体(2)、ハの字に長く開く口縁部で上端幅狭く折返し状に粘土貼付け赤彩のもの1個体、大形の埴形で薄い精製の口縁部片で内面ハケ、外面ミガキのもの1個体、甕は胸部外面ハケ整形主体で、S字5個体+α、単口縁4個体+α、台座8個体+αで内面折返しではなく底部内外面砂貼付は3個体、小形甕1個体、ミニチュア土器は高坏のような脚部片で脚部上半細長いもの1点である。本遺構の年代は8期新-9期古と考えられる。

#### SX186B (第43図、図版九〇)

位置 V区調査区、Bオ-7-3・8・9・13・14グリッドに位置する。北にSX174が近接してあるほか、西7mにSX186Aがある。重複 なし。形状・規模 楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-17°-Eである。遺物はより南からも出土する可能性があるため規模はさらに大きくなると推測されるが、現状での規模は長径6.40m、短径3.60mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は23.95-24.2 m前後であり、24.0 m付近に多い。出土層位はIV層に相当すると推定される。遺物は南端付近に多く、他にも範囲内に小さなまとまりが存在する。遺物量は多く、前期土器主体に中期土器が混入する。器種は大形甕と甕が多く、中形甕、小形甕、鉢、高坏、器台、ミニチュア土器が混じる。鉢は大型の小形丸底形で外面ハケ調整1個体、小さい小形丸底形で胴-底部片1個体、器台はハの字に開く脚部で大きめの孔を持つもの1個体、小形甕は小さい甕形で短く開く口縁部のもの3個体、中形甕は赤彩球胴でハの字に開く口縁部1個体、下ぶくれの胸部で平底1個体、凹み底2個体、小さい凹み底1個体、高坏はハの字に開く大きめの孔を持つ脚部1個体、上半のみ中実の柱状の脚部1個体、大形甕は胸部上半縄文のようなハケ状工具による連続刺突文で二重口縁1個体、幅広く外反する折返し口縁で3本一組の棒状浮文4組貼付1個体、単口縁で丸く外反する口縁部2個体、突出する平底5個体+α、甕は胸部外面ハケ主体の調整で、S字11個体+α、単口縁2個体+α、口縁部上半が直立する北陸系ともみられるもの1個体、台座5個体+α、平底1個体+α、ミニチュア土器は甕形1個体、口径大きい甕形かとみられるもの1個体である。中期前葉~中葉の混入する土器は甕、甕があり、甕は退化した二重口縁状の口縁部片1個体、甕は大形で同形同大のもの2個体である。本遺構の年代は9期くらいと考えられ、甕等に古い要素があることからやや古い段階ともみられる。

#### SX228 (第43図、図版九〇・九一)

位置 V区調査区、Bエ-15-1・2グリッドに位置する。周囲に遺構はなく、北9mにSI178がある。重複 なし。形状・規模 土器器数個体が一直線上に出土するものである。遺物の南東部で確認した状況からは溝状の遺構である可能性が高く、遺物は溝内に並んでいたものと思われる。底面はほぼ平坦で壁は垂直気味に直線的に立ち上がるが、北西側は上位で平坦面を作るように屈曲したあとならかに立ち上がる。遺構の中軸線はN-61°-Eで、規模は長さ0.58m、深さ0.33m、平坦面以下の深くなる部分の幅は0.26m、

底面の幅 0.18 mである。なお距離は離れているが、遺構の形状等はSD190Aに類似するとの所見もある。

**覆土の状態** 第1～第3層であり、第1層は火山灰と考えられる白色土粒を、第3層は砂を含む。第2層は多量の炭化材と微量の焼土を含む。各層とも自然堆積とみられる。遺物 各個体は逆位ないし横位の状態で出土する。遺物の状況から自然の流入などではなく、人為的に設置したものとする。遺物は一定量あり、器種は甕主体に埴、高坏、中形甕が少量ずつある。完形に近く復元できるものが多く、接合しない破片は少ない。埴は深身の内斜口縁で平底1個体、須恵器蓋模倣環状の段を持つ口縁部で平底のもの1個体、中形甕は埴形の口縁部片1点、高坏は短い柱状の脚部で下半屈曲して大きく平らに開くもの1個体、柱状の脚部片1点、甕は厚手で球胴のほぼ完形の台付甕1個体、厚手で直口縁の大形甕3個体である。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)で中葉寄りと考えられる。

## 第6節 VI区の調査

### 1. 溝

#### SD255 (第60・61図、図版九一)

**位置** VI区南端、Aオ-21-10・15、Aオ-22-6・7・11・12グリッドに位置する。北に0.8-1.6mの間隔においてSD340が並行してある。重複 なし。西側は調査区外へと続く。東側はVII区へ続き、SD255a・255cとなる。**形状・規模** 調査時にはSD220としていたものである。僅かに湾曲しつつ東西方向に伸びる溝であり、中軸線はN-68°-Eで長さは10.20mである。断面形は幅の広い逆台形状で底面はやや丸味を持つ幅の広い平坦面となっており、壁は外傾して立ち上がる。幅は208-140cm、深さは24-50cm以上である。底面の標高を比較すると部分的に高低差はあるもののほぼ一定しており、一方に傾くことはない。**覆土の状態** 遺構上面を表土(第1層)、旧耕作土(第2層)、1層(第3・第4層)が覆う。覆土は第5～第14層であり、自然堆積とみられる。各層とも土壌や粘土、砂などが薄く互層を成しており、流水の環境の中で堆積した可能性が高い。砂が多い第6層、明褐色粘土を含む第7・第8・第10～第13層・第16層、砂と粘土主体の第9・第14層など土層はそれぞれに特徴があり、これを元に時期を細分することも可能であろう。**遺物** なし。

#### SD340 (第60・61図、図版九一)

**位置** Aオ-21-15、Aオ-22-11・12・17・18グリッドに位置する。南に0.8-1.6mの間隔においてSD255が並行してある。北4mには遺物集中心がある。重複 なし。西側は調査区外へと続く。東側はVII区へ続き、SD340となる。**形状・規模** 調査時にはSD221としていたものである。僅かに湾曲しつつ東西方向に伸びる溝であり、中軸線はN-72°-Eで長さは10.10mである。断面形は逆台形状で底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がる。幅は40-63cm、深さは6-11cmである。底面の標高を比較すると部分的に高低差はあるもののほぼ一定しており、一方に傾くことはない。**覆土の状態** 砂粒を多量に含む第1層で、水性堆積とみられる。**遺物** なし。

## 2. 性格不明遺構

## SX219 (第62図、図版九一)

位置 VII区調査区、Aオ-22-22グリッドに位置する。近接する遺構はなく、南4mにSD340がある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の小規模な遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-55°-W、規模は長径1.30m、短径0.55mである。覆土の状態 不明である。遺物 遺物は僅かで器種は壺とミニチュア土器のみである。中形壺は球胴でハの字に開く長い口縁部を持つ平底で外面ハケ整形のもの2個体、ミニチュア土器はすべて壺形状のもの5個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。祭祀的な遺構であろう。

## 第7節 VII区の調査

## 1. 竪穴住居跡

## S1256 (第44図、図版九二)

位置 VII区調査区、Aオ-20-15・20、Aカ-16-11・12・16・17グリッドに位置する。西にSK267が近接しているほか、北西8mにSI354A・354Bがある。重複なし。中央部が幅2mのトレンチにより浅く切られる。平面形 隅丸方形で、南北方向の中軸線はN-43°-Wである。規模 南西-北東方向は5.73m、北西-南東方向が5.40mである。覆土の状態 第1～第3層である。西部P1東側で床面からやや浮いて炭化材が出土する。壁 残存壁高は20-32cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが3本(P1-P3)ある。P1は径30×27cm、深さ58cm、P2は径40×34cm、深さ51cm、P3は径32×25cm、深さ13cmと北側の2本のみが深い。柱間寸法は、P1・P2間が3.16m、P2・P3間が3.12mである。覆土や柱痕の有無は不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。中央やや西、P1の東約1.4m付近で焼土が確認されており、ここに灰があった可能性はある。貯蔵穴 南隅にある。平面形はやや不整な隅丸方形で、規模は77×73cm、深さは35cmである。底面は小さく、壁は段を持って立ち上がる。遺物 遺物は住居跡全体にあり、床面付近から出土するものも多い。器種は壺と大形壺が多く、高環、鉢、小形壺などが混じる。鉢と小形壺は少ない。鉢は半球状で薄手でゆがんだ平底の雑な作りのもの1個体、口縁部大きく開き、小さい胴部がつくと推定(高環坏部にも見える)されるもの1個体、雑な作りの平底で体部つぶれた球状(大形鉢、小形壺か)のもの1個体、高環は坏部有縁で脚部は中実棒状で下半屈曲して開く1個体、脚部ややハの字で下半屈曲して開く1個体、脚部柱状で上半のみ中実、下半開く2個体、脚部中実柱状で下半屈曲して開く1個体、大形壺は単口縁2個体、超大形の胴部片、裏は胴部外面の調整がハケよりナデ、ケズリ主体であり、S字2個体、単口縁8個体、台部2個体+a、少し厚手で中期の裏のように見えるもの1個体がある。本遺構の年代は10期末と考えられる。

## S1263 (第46図、図版九三)

位置 VII区調査区、Aカ-22-1・2・5・6グリッドに位置する。北にSI264、西にSK259がそれぞれ近

接してあるほか、北東3mにSK258がある。重複なし。南東隅がトレンチに切られる。平面形 やや不整な方形であり、南北方向の中軸線はN-32°-Wである。規模 東西方向は3.67m、北西-南東方向が3.30mである。南西隅が突出するのは掘りすぎの可能性もあろう。覆土の状態 第1~第4層である。

壁 残存壁高は30-52cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1~P4)ある。P1は径33×25cm、深さ23cm、P2は径67×52cm、深さ15cm、P3は径46×39cm、深さ12cm、P4は径39×33cm、深さ12cmで4本とも浅く、径はP2がやや大きい。柱間寸法は、P4・P1間が2.17m、P3・P2間が2.32m、P3・P4間が1.83m、P2・P1間が2.06mである。覆土や柱痕の有無は不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 北平にままとっており、多くは床面付近から出土する。器種は甕主体で、高坏、小形壺、埴、大形壺などが少量ずつあり、中形壺、埴はごく僅かである。埴は赤褐色の胎土で体部から丸く一旦括れた後口縁部で大きく外反する1個体、小形壺は粗い調整の体部片1点のみ、高坏は脚部で見ると中実棒状2個体、稜がなく頸細い坏部1個体、大形壺は胴下半のみで、外面はハケのちナデおよびミガキ1個体、ハの字に開く口縁部1個体、同一個体とみられる底部、甕は少し長胴で平底、頸部狭く口縁部ハの字、外面ナデとミガキで胎土赤褐色1個体、頸部狭くハの字に開く口縁部片1個体、やや長胴の突出する底部で外面ハケのちナデ1個体、やや長胴の突出する底部で外面粗いナデ1個体、直口縁で外面ハケ整形1個体である。また、前期の甕のような単口縁の甕片や形状の崩れたS字状口縁片、台付甕台部片、小形の甕なども少量出土している。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

#### S1264 (第44図、図版九二)

位置 VII区調査区、Aカ-21-10・15、Aカ-22-6・11グリッドに位置する。南にSI263・SK259、東にSK258がそれぞれ近接してある。重複なし。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-9°-Wである。規模 東西方向が4.20m、南北方向が4.68mである。覆土の状態 第1~第4層で第3・第4層に焼土と炭化物が含まれ、第4層に多い。炭化物は床面付近にあり、平面的には南東隅から北西隅にかけての範囲に集中する。壁 残存壁高は28-43cmであり、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 柱穴はないが、南東隅(P1)と北東隅(P2)に掘り込みがある。P1は平面不整な隅丸長方形で規模は131×94cm、深さ20cm、P2は平面弧草形で規模は94×47cm、深さ16cmで、ともに覆土は不明である。本住居跡に伴わない遺構の可能性もある。壁溝 北西隅の壁際にある。断面形はU字状で幅は18-34cm、深さ8-13cmである。覆土は不明である。火処 不明である。住居跡北西部、北壁、西壁双方から1.5mほどの床面で焼土が確認されており、ここに炉があった可能性はある。貯蔵穴 南西隅にある。平面形は楕円形で、規模は77×76cm、深さは13cmである。底面は広く、壁は緩やかに立ち上がる。遺物 炭化物が集中する北壁際西寄りの床面付近にままとっている。遺物はやや多く、器種は甕主体で、高坏、大形壺、埴が少量混じる。小形壺は小形で凹み底1個体のみ、高坏は中実柱状の脚部で坏部小さく有稜1個体、ハの字に開く脚部1個体ほか破片少量、大形壺は胴部下半~底部片で内面細かいハケ、外面ケズリのちミガキの突出する平底1個体のみ、甕は前期系統のものはまったくなく、単口縁主体で口縁部はハの字や外反、肥厚するものなど形態は様々であり、胴部の被熱痕が顕著なもの5個体があるほか破片少量がある。口縁部丸く外反するもの1個体、ほぼ完形で口縁部内湾するもの1個体、口縁部垂直な面でも頸部細く丁寧な作り

の平底のハケ甕1個体、オレンジ色で赤褐色の大粒子含む胎土で口縁部丸く外反し胴部やや長い台付甕1個体である。このほか大形高環の口縁-体部片のようだが、外面ハケ、内面ハケでナデやヨコナデはなく口縁端部は平らに潰れている器種不明の個体がある。口径は約18cmで器壁は薄く、大きな脚部が付くとみられる。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられ、V区SI263とほぼ同じか、やや新しいものと見る。

#### SI265 (第46図、図版九二・九三)

**位置** VII区調査区、Aカ-21-22・23、Bカ-1-2・3グリッドに位置する。南西にSX252が近接してあるほか、北西4mにSK268がある。重複なし。南東隅がトレンチに浅く切られる。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-19°-Wである。規模 東西方向が3.85m、南北方向が4.18mである。覆土の状態 第1-第4層で第3・第4層に焼土と炭化物が含まれ、第4層に多い。炭化物は床面付近にあり、平面的には西壁際中央から北東隅にかけての範囲に集中する。炭化材の形状や状態は確認できていないが、床面に敷いた筵状の敷物が炭化したものの可能性があろう。壁 残存壁高は37-40cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 不明である。壁溝 不明である。火処 不明である。炭化物出土範囲の床面で赤変している部分がいくつかあり、いずれかが炉であった可能性はある。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は方形で、規模は58×51cm、深さは25cmである。底面は小さく、壁は段を持って立ち上がる。**遺物** 住居跡内各所から出土する。遺物は少なめで器種は甕と高環主体で、小形丸底鉢、中-小形甕、炉器台、大形甕などが少量ずつ混じる。小形丸底鉢は完形で小さい凹み底1個体、小形甕は一部欠損の中-小形で小さい凹み底のもの1個体、口縁部2個体、高環はほぼ完形で中実棒状の脚部で環部鉢状に大きく開くもの1個体、中実棒状の脚部2個体うち一つは環部小さく有縁、中空柱状の脚部1個体、ハの字に開き3孔の脚部で作り粗く異形のもの1個体、大形甕は二段目が大きく丸く外反する二重口縁の口縁部片のみ、甕はS字はなく、やや小振りな単口縁台付甕1個体、単口縁の口縁部で丸く外反するものなど3個体、台部3個体うち一つは端部内面折り返し、X字形の被熱した炉器台1個体である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### SI295 (第47図、図版九三・九四・一〇一)

**位置** VII区調査区、Bオ-4-15、Bオ-5-6・7・11・12グリッドに位置する。南東にSI330が近接してある。重複 大部分がSD255と、南西隅がSD340と、北辺がSI334とそれぞれ重複し、それらすべてに切られる。平面形 部分的に残った部分から、平面形は方形と推定できる。南北方向の中軸線はN-31°-Wである。規模 東西方向は4.58m、南北方向は4.62mである。覆土の状態 第1-第3層で、第1層は炭化物を含む。壁 残存壁高は7-13cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが2本(P1・P2)ある。P1は径49×45cm、深さ40cm、P2は径44×43cm、深さ45cmで2本とも深く掘り込まれる。P1・P2間の柱間寸法は2.24mで、本来は4本柱穴であったと思われる。覆土は2本とも4層に分層でき、ともに第3層が柱痕部分とみられる。このほか、南西隅にP3がある。径36cm、深さ24cmで覆土は第2-第4層である。壁溝 不明である。火処 不明である。**貯蔵穴** 南東隅にある。平面形は隅丸方形で、規模は109×84cm、深さは41cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がった後上位で角度を緩やかにし、特に西側では広くなだらかな斜面となり床面に至る。**遺物** 残存部分から遺物が出土する。遺物量は多く、器種は甕主体に大形甕、中形甕、高環、器台、

甕が混じり、中期前葉～中葉の遺物が混入する。器台は脚部無孔で完形1個体、中形甕は胴部1個体、底部凹み底3個体、高坏はほぼ完形の元層敷系高坏1個体、中空柱状の脚部で下半屈曲して開くもの2個体、中空柱状の脚部で下半二段に開くもの1個体、太く短い中空柱状の脚部1個体、甕は1/2欠損する底部1孔のもの1個体、大形甕は胴～底部片で突出する平底1個体、直立する長い口縁部のもの1個体、甕は胴部外面ハケ整形多く一部にナデ、ケズリがあり、S字台付甕で台部内外面砂貼付のもの3個体、単口縁台付甕2個体、完形の単口縁の平底で胴部外面多方向のミガキ1個体、単口縁1個体、台部2個体、砥石2点である。中期前葉～中葉の遺物は甕のみで、口縁～胴部片で胴部丸くハケ整形でオレンジ色の胎土のもの1個体、大型の甕で胴部外面ハケのちなデ、口縁部斜めに面取りされるもの1個体である。高坏や台付甕に古い要素があるが、本遺構の年代は9期前後と考えられる。

## S1315 (第48図、図版九四)

位置 VII区調査区、Aオ-24・20・25、Aオ-25・21、Bオ-4-5、Bオ-5-1グリッドに位置する。南にS1352、北にSD340がそれぞれ近接してあるほか、東3mにS1330がある。重複 北東部がSK356と重複する。土層では確認できていないが、SK356を切るとみられる。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-30°-Wである。規模 東西方向が5.18m、南北方向が5.10mである。覆土の状態 不明である。壁 残存壁高は6～20cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1・2・5・6)ある。P1は径45×43cm、深さ41cm、P2は径36×29cm、深さ40cm、P5は径35×33cm、深さ37cm、P6は径30×27cm、深さ42cmで4本とも深く掘り込まれている。柱間寸法は、P6・P1間が2.88m、P5・P2間が2.70m、P5・P6間が1.83m、P2・P1間が1.88mで、長方形に配置される。覆土や柱痕の有無は不明である。このほか住居跡中央に掘り込みがある(P4)。P4は主柱穴の範囲内のほぼ中央にあり、平面形は不整な隅丸長方形で規模は181×75cm、深さ20cmである。底面は南北両端が深く、中央が浅くなっており、壁はなだらかに立ち上がる。覆土は第1～第3層で自然堆積とみられる。入口ピット 南壁際東寄りに1本(P3)ある。全体の平面形は不整楕円形で、南側の深く大きな円形部分に北側の浅い掘り込みが付随する。規模は径63×47cm、深さは南側で32cm、北側で16cmである。覆土は第1～第14層で、粘土ブロックを多量に含む層や混入物の少ない黒色土層などが薄く水平に堆積する。人為堆積と考えられ、上層には炭化物や焼土が含まれる。壁溝 南西部で短く途切れるほかは壁際を全周する。断面形はU字状で幅は18-42cm、深さ4-11cmである。覆土は不明である。火処 不明である。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は隅丸方形で、中央が円形に深く掘り込まれ、周囲に浅い段があり、浅い部分は壁溝と一体となる。規模は109×84cm、中央の円形部分は59×55cm、深さは円形部分で52cm、段は12cmである。底面はやや丸味を持ち、壁は直線的に立ち上がる。覆土は第1～第10層である。遺物 住居跡全体から出土するが、西半に特に多い。遺物量は多く、当該期の器種組成が良く確認できる。甕、壺、高坏、埴はそれぞれ多くの個体数があり、これに甕、壺、紡錘車、砥石、片岩塊、片岩破片、軽石、礫が混じる。甕は中形が多く、次いで大形であり小形は僅かである。埴は7個体あり、内斜口縁で深身丸底1個体、内斜口縁で浅身大形丸底1個体、内斜口縁で深身2個体、内斜口縁で深身平底1個体、口縁部丸く外反し深身丸底1個体、半球状の深身で底部丸みを持つ平底1個体、小形甕は胴径10cm以下で胴部算盤玉状1個体、胴～底部完形1個体、壺はほぼ完形で胴部算盤玉状1個体である。中形甕は5個体ある。やや大きめは2個体で二重口縁状でやや厚手1個体、厚手で長い単口縁1個体、中間的な大きさ

のものは3個体あり、長い単口縁2個体、短い単口縁で囊形1個体、小さめは1個体で長い単口縁を持ち胴部算盤玉状である。高環は環部大きく有稜で脚部ややハの字で下半屈曲し大きく開く完形のもの1個体、環部大きな有稜5個体、脚部は4個体あり、うち中空柱状1個体、ややハの字で下半屈曲して大きく開くもの3個体、甕は球胴の無底式1個体、大形甕は3個体で二重口縁状1個体、単口縁2個体、甕は8個体あり、胴部外面はナデ調整主体だが胴長の形状の個体はケズリ、厚手で紐積み痕残すものもケズリを施す。底部は平底主体だろう。前期系統の口縁部くの字状のもの3個体、厚手で胴部上半紐積み痕残すもの3個体、厚手だが口縁部くの字1個体、厚手でやや胴長1個体である。紡錘車は片岩製で1/2残存1個体、四角柱状の砥石1個体、一辺13cmくらいの立方体の緑色片岩塊で表面敲打痕あるもの1個体、結晶片岩や雲母片岩の割片で一部研磨痕あるもの4点、長さ10cmくらいの軽石1点、礫は長さ約30cmで焼けハジケあるもの1点、長さ18cmくらいの棒状礫1点である。本遺構の年代は中期中葉（TK216段階）と考えられる。

### S1321（第47図、図版九四・九五）

位置 VII区調査区、Bオ-9-2・3・7・8グリッドに位置する。西にSD343、南にSP392・393がそれぞれ近接してあるほか、西5mにSI359・364がそれぞれある。重複 北部でSK376と重複するが、新旧関係は不明である。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-37°-Wである。規模 東西方向が3.41m、南北方向が3.96mである。覆土の状態 第1～第5層で、第2・第3層は灰白色粘土を含み、第5層は焼土と炭化物を含む。焼土や炭化物は壁際に多く、出土位置は壁際が高く、中央に近いほど低い。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられる。多くは重木であろうか。壁 残存壁高は8-17cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 東部と西部に各1本（P1・2）がある。P1は径49×31cm、深さ45cm、P2は径31×27cm、深さ10cmであり、P1は深く掘り込まれている。覆土はそれぞれ第1～第3層が堆積する。壁溝 東壁際を除く各辺に断続的に見られる。断面形はU字状で幅は12-20cm、深さ3-5cmである。覆土は暗褐色土（第6層）である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 南壁及び西壁に近い位置から多く出土する。遺物は一定量あり、器種は高環が多く、甕、甕、鉢などが混じる。鉢は半球状で完形1個体、囊形に近い形の完形1個体、小形で短い直立気味の口縁部が付き丸みを持つ平底で葉形形の完形1個体、中形甕は胴部1個体、中形甕は球胴の胴部のみ、高環は4個体ありすべて中空柱状の脚部で環部は有稜であり、脚部中空柱状で下半屈曲して大きく開くもの2個体、脚部ハの字に近く開き下半更に開くもの2個体、大形甕は単口縁の破片少量、甕は単口縁の破片のみでS字はなく台部1個体のみ、折返し状の単口縁を持つ小形甕1個体がある。高環などに古い要素はあるが、本遺構の年代は中期中葉（TK216段階）と考えられる。

### S1326（第46図、図版九五）

位置 VII区調査区、Bオ-4-12・13・16～18・22グリッドに位置する。東6mにSI334、南6mにSD255・383がそれぞれある。重複 西辺でSI361を、北東部でSD386を、北辺～東辺でSD362をそれぞれ切り、中央部が南北に細長くSD343に切られる。平面形 方形で南西隅がやや突出する。南北方向の中軸線はN-14°-Wである。規模 東西方向が4.77m、南北方向が4.93mである。覆土の状態 炭化物や白色土粒を含む黒褐色土（第1層）である。住居跡中央から北東隅付近で炭化材が多数出土する。上屋に使用された木材のほか、床面に敷いた葦状の敷物が焼失し炭化したものの可能性があらう。壁 残存壁



高は14-18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 なし。壁溝 東壁際と南壁際東寄りに断続的に見られる。断面形はU字状で幅は14-27cm、深さ2-16cmで南壁際は深い。掘り過ぎもあろうか。覆土は暗褐色土(第2層)である。火処 不明である。住居跡中央東寄りで焼土が確認されており、ここに灰があった可能性はある。貯蔵穴 なし。遺物 炭化物が出土する北東隅に集中する。遺物は多めで、器種は甕主体に大形壺、直口縁赤彩中形壺、高坏、小形壺、ミニチュア土器などが少量ずつ混じる。赤彩土器は少量ある。小形壺は2個体、直口縁中形壺は内外面赤彩で口縁部直線的で極めて長いもの1個体ほか破片2-3個体、高坏は中空柱状の脚部3個体+ $\alpha$ 、大形壺はごく僅かで、内外面赤彩された口縁部片などの赤彩土器片や凹み底底部片など、甕は口縁部で見て全部で10個体くらいあり、胴部外面調整はハケ主体だがナデ・ケズリ・ミガキも多い。S字は3個体、口縁部内面に受口状の段を持つもの3個体、単口縁で胴部外面はハケ後ケズリでケズリ主体1個体、大形の単口縁で頸部丸く胴部外面ハケ1個体、単口縁で胴部外面ミガキ1個体、台部は6個くらいで平底僅かにあり、鉢形とみられるミニチュア土器2個体+ $\alpha$ である。本遺構の年代は10期と考えられる。

## S1330 (第49図、図版九五)

位置 Ⅷ区調査区、Bオ-5-2・3・7・8グリッドに位置する。北西にSI295、北にSD255がそれぞれ近接してあるほか、西3mにSI315がある。重複 北辺がSD340に、北東部がSK328・329に切られる。南東部がSX301と重複するが、本遺構覆土より上層にあるため直接関連はしない。平面形 やや東西方向に長い隅丸方形で、南北方向の中軸線はN-14°-Wである。規模 東西方向が6.90m、南北方向が6.13mである。覆土の状態 第1-第10層で、第3層は焼土と炭化物を含む。西側の床面からやや浮いた位置で炭化材が出土する。上層に使用された木材が焼失し炭化したものとみられるが、材の使用箇所を特定するには至らない。壁 残存壁高は9-18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。北壁際の床面下でa・b・c層が確認されており、これらが貼床となる可能性はある。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1-P4)ある。P1は径40cm、深さ27cm、P2は径73×63cm、深さ36cm、P3は径58×57cm、深さ31cm、P4は径57×48cm、深さ30cmで4本とも一定の深さを持ち、P2は径がやや大きく底面が二段に掘り込まれる。柱間寸法は、P4・P1間が3.72m、P3・P2間が3.93m、P3・P4間が3.12m、P2・P1間が3.18mであり、住居跡の形状に合わせるように長方形に配置される。P1・P2では柱板が確認できる。壁溝 確認できた部分では壁際を全周する。断面形はU字状で幅は15-27cm、深さ6-10cmで覆土は暗褐色土(第11層)である。火処 不明である。中央部北東寄りの床面で焼土が確認でき、これが灰であった可能性はある。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は楕円形で、規模は66×58cm、深さは45cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がる。覆土は第1-第4層である。遺物 住居跡中央部に多く、P2上面に集中する。遺物は多めで器種は甕、壺、高坏が多く、ミニチュア土器が僅かにある。赤彩土器片は1点のみで器台、小形壺、中形壺、鉢はほとんどない。鉢は須恵器蓋模倣環状の形状の破片のみ、小形壺はP2出土のもの1個体があるがやや新しい時期のものとも思える。高坏は中実柱状の脚部3個体+ $\alpha$ あり、うち中実柱状の脚部で坏部小さく有種1個体、中空柱状の脚部2個体+ $\alpha$ 、壺は単口縁のものど頸部長く丸く外反し上端で短く二重口縁となるものなどあり、底部は突出する平底2個体+ $\alpha$ 、甕は単口縁のみでS字なく、個体数は7-8個体あり、胴部外面ハケ後ケズリのもの2-3個体、少し小さめのもの1個体、

台部6個体+ $\alpha$ 、平底1個体+ $\alpha$ 、台付囊形の完形のミニチュア土器1個体、メノウ原石1点、白玉1点である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### S1334 (第50・86図、図版九五)

位置 VII区調査区、Bオ-4-14・15・19・20・25、Bオ-5-11・16・21グリッドに位置する。西6mにS1326がある。重複 南東部でS1295を、南西部でS1387を切り、南東部がSD255に切られる。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-17°-Wである。南辺が中央で屈曲する形に見えるが、本来は直線であったと考える。規模 東西方向が7.38m、南北方向が6.94mである。覆土の状態 第1～第8層で、床面直上に堆積する第8層に炭化物が多量に含まれる。上屋に使用された木材のほか、床面に敷いた筵状の敷物が焼失し炭化したものの可能性がある。壁 残存壁高は6～32cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1～P4)ある。P1は径101×87cm、深さ53cm、P2は径82×70cm、深さ57cm、P3は径61×53cm、深さ40cm、P4は径66×54cm、深さ43cmで4本とも深く掘り込まれており、東側の方が深く径が大きい。柱間寸法は、P4・P1間が4.16m、P3・P2間が4.10m、P3・P4間が3.90m、P2・P1間が3.80mと配置は方形であり、住居跡の形状に合わせるように東西方向がやや長い。P3以外では中央に柱痕が確認できる。柱痕の径は底面付近で10-16cmである。壁溝 西壁際中央で途切れるほかは壁際を全周する。断面形はU字状で幅は10-34cm、深さ2-14cmで覆土は黒褐色土(第9層)である。火処 不明である。中央部北西寄りの床面で焼土が確認でき、これが炉であった可能性はある。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は方形で、規模は77×63cm、深さは28cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がる。遺物 住居跡内各所から出土しており、壁寄りに多い。遺物は多めで、器種は囊主体に高坏、中形壺が混じる。大形壺、器台片は少量である。器台は赤彩脚部片1個体、小形壺は3個体+ $\alpha$ 、高坏は中空柱状の脚部が多く、坏部では5個体、脚だと3個体ある。有稜坏部1個体、中実棒状で下半水平に近く大きく開く脚部1個体、大形壺は口縁部直口縁状の小破片のみで底部突出する平底2個体+ $\alpha$ 、胴部下端下膨れの個体あり、壺は胴部外面調整はハケ主体だがハケ後ケズリ、ナデもあり、中期にみられる厚手なハケ壺もある。形状の崩れたS字1個体、単口縁2個体+ $\alpha$ 、台部4個体、平底1個体、小形壺は2個体+ $\alpha$ で北陸系とみられる直立する口縁部1個体、単口縁1個体である。器種不明の板状鉄製品(1)は1点出土する。有茎の石鐮(2)は弥生時代遺物の混入だろう。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### S1352 (第51図、図版九六)

位置 VII区調査区、Aオ-24-15・20、Aオ-25-6・11・12・16・17グリッドに位置する。南にS1353、北にS1315がそれぞれ近接してある。重複 なし。覆土上層には遺物集中であるSX300・302があり、共に本遺構に伴う遺物の可能性がある。平面形 方形で、北西-南東方向の中軸線はN-44°-Wである。規模 南西-北東方向が6.10m、北西-南東方向が5.84mである。覆土の状態 第1～第7層である。南東壁際から多数の炭化材が確認されており、上屋に使用された木材が焼失により炭化したものの可能性がある。壁 残存壁高は23-30cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1～P4)ある。P1は径67×63cm、深さ49cm、P2は径65×53cm、深さ42cm、P3は径

36×35cm、深さ48cm、P4は径62×58cm、深さ50cmで4本とも深く掘り込まれており、径は北西側の2本が大きい。柱間寸法は、P4・P1間が2.92m、P3・P2間が2.90m、P3・P4間が2.78m、P2・P1間が2.84mと配置はほぼ方形であり、住居跡の形状に合わせるように南西-北東方向がやや長い。4本とも土層断面で柱痕が確認できる。このほか北側にP5がある。径58×50cm、深さ38cmで、形状と土層断面から柱穴と考えられ、柱痕らしき土層も確認できる。用途は不明であり、本住居跡に伴わない可能性もあろう。壁溝 壁隙を全周する。断面形はU字状で幅は15-35cm、深さ3-15cmで覆土は黒褐色土(第7層)である。火処 中央北寄りの床面で焼土と炭化物が確認されており、ここが炉と考えられる。全体の形状や掘り込み等は不明だが、焼土は径20cm程度の楕円形に、炭化物の範囲は径80cm程の不整形に確認された。長軸の一端が硬化変化した長径100cm程の楕円形の地床とも推定できる。貯蔵穴 不明である。遺物 壁寄りから多く出土する。遺物はやや多く、器種は甕・壺主体で鉢が少量混じる。炉器台や砥石はあるが、受口状の甕や高坏はほとんどない。赤彩土器片は1点のみである。鉢は丁寧な薄い作りの小さい平底の鉢1個体、小形丸底鉢1個体、北陸系とみられる受け口状に口縁部が直立する二重口縁の鉢片1個体、コップ形の粗製の鉢とみられるもの(口縁部の横ナデが不明確でミニチュア土器のように口縁部波打つ)1個体、中形壺は直口縁2個体、大形壺は二重口縁1個体、折返し口縁1個体、二重口縁状で砂多く粗い胎土の大廓系の可能性もある口縁部片1個体、長い直口縁壺1個体である。甕は胴部上半のハケは粗いものが多くケズリ後上半タテハケ、下半斜めハケを施す。S字2個体+a、単口縁5個体、台付5個体で内面粗い折返しあり、平底1個体+a、炉器台1個体、砥石は仕上げ砥か中砥とみられるもの1点である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### S1353 (第52図、図版九六)

位置 VII区調査区、Aオ-24・5・10、Aオ-25・1・6グリッドに位置する。南東にSI355、北にSI352がそれぞれ近接してある。重複 東隅がSK357に切られる。覆土上層に遺物集中であるSX296・299があり、本遺構に伴う遺物の可能性がある。南東壁付近上層にも遺物集中であるSX297があり、これも伴う可能性があろう。平面形 隅丸方形であるが、各辺はやや外に張り出すように丸味を持ち、南西辺は不安定に湾曲する。南北方向の中軸線はN-41°-Wである。規模 南西-北東方向が4.61m、北西-南東方向が4.38mである。南西辺がやや掘りすぎているとすれば、南西-北東方向の規模はこれよりやや小さくなると思われる。覆土の状態 第1-3層で、第2層は炭化物を含む。壁 残存壁高は5-13cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化面は確認されていない。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P3・4・8・9)ある。P3は径37×35cm、深さ31cm、P4は径55×44cm、深さ37cm、P8は径26×23cm、深さ25cm、P9は径34×30cm、深さ28cmで4本とも一定の深さがある。柱間寸法は、P9・P3間が2.10m、P8・P4間が2.23m、P8・P9間が2.15m、P4・P3間が2.12mと配置は整った方形であるが、住居跡の外形とは傾きが異なる。P4を除く3本では土層断面や底面形状から柱痕が確認でき、P4も柱穴内西端底面に柱痕とみられる凹みがある。このほか北側にP1・P2、南側にP7がある。P1は平面円形の浅い掘り込みで、径40cm、深さ10cmで底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がる。覆土中に焼土を多量に含んでおり、人為堆積と考えられる。P2は径44×41cm、深さ4cmで底面は凹凸があり、壁は短く外傾して立ち上がる。覆土は粘土ブロックを含む第1・2層で人為堆積のようにも見える。P1・P2とも用途は不明で、本遺構に伴わない可能性もある。P7は径35×31cm、深さ8cmで底面は丸味を持ち、壁は外傾して立ち上がる。覆土は第1-3層

で、少なくとも粘土ブロックが多い第2・3層は人為堆積と考える。入口ピットの可能性がある。壁溝なし。火処 不明である。貯蔵穴 南東壁際中央にあるP6は貯蔵穴の可能性ある。平面形は楕円形で、規模は径70×60cm、深さ27cmである。底面はほぼ平坦で、壁は中位に段を持って立ち上がる。覆土は第1～第3層である。遺物 南部などから出土する。遺物は少なく器種は甕主体で大形甕、高坏、中形甕、埴、片岩片などがある。埴は半球状で平底1個体、中形甕はやや小さいもの1個体ほか中形や中～小形くらいの個体の破片少量、高坏は小さい有稜の坏部と中実柱状の脚部2個体であり、P3・P6出土の有稜の高坏坏部1個体、甕は極めて粗い作りで指ナデがはっきり残る折返し口縁が特徴的な1個体、甕はS字なく単口縁のハケ甕多く、底部で見ると台付2個体+α、平底1個体+αで台部は内面粗い折返しあり。片岩破片は6点でうち研磨あるものは2点である。本遺構の年代は中期初頭と考えられる。

#### S1354A (第53・54・87・88図、第101表、図版九六・九七・一二二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-2・3・4・8・9グリッドに位置する。西にS1355が近接してあるほか、西5mにS1353がある。重複 東半の大部分でS1354Bを切る。覆土上層に遺物集中であるSX287・288・289があるが、このうちSX287・288の遺物は本遺構に伴うと考えられる。平面形 方形で、西壁中央に方形の張出部を持つ。南北方向の中軸線はN-10°-Wである。規模 東西方向が4.90m、南北方向が4.60mである。張出部は壁からの長さ1.05m、幅1.35mで、先端の幅1.00mである。覆土の状態 第1～33層で、壁寄りの床面近くでは粘土ブロックを含む層がある。第23層に含まれる焼土はカマドからの流出だろう。壁 残存壁高は18-32cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。一部に硬化面はあるとされるが、位置と範囲は不明である。張出部は先端に向かって緩やかに高くなっている。掘方・貼床 不明である。中央西寄りのカマド前面には長い楕円形の掘り込みがある。土層断面には現れないが床面下に相当するとみられるため、掘方の一部の可能性ある。規模は長径2.18m、短径0.65m、深さは床面から0.20mで覆土は不明である。柱穴 主柱穴とされるものが2本(P1・2)ある。P1は径71×52cm、深さ19cmと径が大きく浅い形状で、P2は径45×41cm、深さ41cmで深く掘り込まれており、中央に柱痕とみられる土層が確認できる。P1・P2間の柱間寸法は2.80mである。P1は柱穴ではない可能性もあろうか。このほか北西隅にP3がある。規模は径40×27cm、深さ6cmで用途は不明であり、本遺構に伴わない可能性もある。壁溝 張出部とカマドを除き壁際を全周する。断面形はU字状で幅は11-33cm、深さ2-15cmで覆土は暗褐色土(第27層)である。張出部への屈曲部はピット状に凹んでおり、南側は径16×12cm、深さ不明、北側は径34×28cm、深さ21cmである。火処 カマドが南壁際西寄りに位置する。天井部は崩落しているが、袖部はほぼ全体が確認できるなど残存状態は良い。煙道部は壁を52cmV字状に掘り込んで作られているとみられ、現存するカマドの規模は136×94cmである。袖部は明褐色粘土を主体に構築されており、壁からの長さは左70cm、右82cmである。カマド前面は床面からやや高くなった後火床面で緩やかに低くなる。火床面中央には焼土主体の暗褐色土(第7層)上に土器片と埴(1)と高坏(9)を重ねて作出した支脚があり、この後方で火床面はやや高くなる。支脚は手前に傾いており、先端の高さは火床面上25cmである。煙道へは緩やかに高くなった後平坦になり、先端は段を持って内湾気味に立ち上がり確認面に至る。袖部と煙道部内面は内湾する旧状を良くとどめており、被熱により広範囲に極めて顕著に硬化赤変している。覆土は第1～6・第8-10層で、第1・第3層は崩落した明褐色粘土主体の天井粘土層、焼土を多量に含む第2・第4-第6層は天井内面の崩落で第5層が主体であり、第4層は焼土の他に灰を多量に含む。第8-10層は天井崩落以前の流入土であろう。貯蔵穴 南

西隅にある。平面形は不整楕円形で、規模は径100×90cm、深さ23cmである。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がるが、カマド側はやや急になっている。覆土は第1～第4層で、第1・第3層は焼土を含む。遺物は東側に多く、カマド周辺から流入したようにも見える。遺物 カマドと貯蔵穴からも出土するが、全体としては住居跡東側に多い。遺物量は多く、器種は甕主体で、甕、大形甕、中形甕、高環、埴、小形甕、ミニチュア土器、滑石製模造品とその未製品、原料となる滑石の剥片などが混じる。このうち甕、甕、大形甕、高環、埴が多く、中形甕、小形甕、ミニチュア土器は少ない。台付甕などの前期土器が入っているが、これは混入だろう。大形の高環で埴が多く甕も明確に組成される点は、小さめの高環で埴が少ないSI263よりも新しい様相ともみられる。埴は全部で12個体ある。形状は様々だが、底部は確認できるものでは凹み底が多く、平底もある。丸底は1点のみ(1)である。口縁部が直線的にひらく半球状1個体、口縁部ハの字に直線的に開き平底でほぼ方形1個体(3)、口縁部直線的で体～口縁部に浅い段を持つもの1個体(4)、須恵器蓋模倣埴のように体部～口縁部に段を持つもの1個体、深身で内斜口縁8個体+ $\alpha$ (1・2)、小形甕3個体うちほぼ方形2個体(5・6)で1個体は鉢形で潰れた球胴で丸底、中形甕はやや長い単口縁2個体、高環は大形で環部有稜のもの多く脚部は中空柱状で長い。中位が膨らむエンタシス状のもの1個体あり、方形1個体(7)、環部6個体+ $\alpha$ (8)、脚部で9個体+ $\alpha$ あり、赤彩で脚部下半二段に開くもの1個体、下半で屈曲2個体(9)、少しためて下半二段に開き、激しく被熱する羽口とも思われるもの1個体、鉢はつぶれた甕形で丸底ほぼ方形1個体、甕は単口縁で底部大きく単孔1個体(10)、口縁部なく底部大きく単孔で異形1個体(11)、大形甕は単口縁1個体、口縁部長く、二重口縁風の僅かな段を持つもの1個体(12)、口縁部直線的に外反し口唇部斜めの面で須恵器風に沈線入る1個体(13)、P2出土の胴部下半～底部片で赤彩1個体、甕は厚手で球胴のもの3個体(14・15)、単口縁で薄手1個体、単口縁で胴部外面ハケ1個体、小形甕は鉢としてもよさそうつぶれた形で被熱するもの1個体、ミニチュアは鉢形1個体(16)、甕形かと思われるもの1個体(17)、器種不明は内外面赤彩の口縁部で口径大きくやや開いて直線的に長く立ち上がる口縁部で灰色の胎土のものであり、甕かとも思われる。

滑石製模造品関連では、円盤2点(21・22)、剣形2点(23・24)、剣形未製品1点(25)、白玉1点(26)、管玉1点(20)、未製品と滑石剥片多数、砥石1点(18)、台石とみられるもの1点(19)である。円盤2点中1点(21)はほぼ方形で2孔であり、平坦で側面も研磨し円形に仕上げる。22は大きく1孔で未製品とみられるが、別器種かもしれない。剣形2点はともに1孔ありで片面有稜、白玉1点は側面平坦、管玉1点はカマド出土で表面被熱のためか一部剥落する。未製品は薄い板状に仕上げたものも多数あり、カマド一括としても多く出土する。剥片は滑石やグリーンタフなど多数あり、貯蔵穴からの出土も確認できる。本遺構の年代は中期前葉～中葉(K73～216段階)と考えられる。中期中葉寄りであろうか。

#### SI354B (第53・54図、図版九七)

位置 VII区調査区、Aオ-20-23・24、Aオ-25-3・4・9グリッドに位置する。西4mにSI355がある。

重複 南辺と東辺を除く大部分がSI354Aに切られる。平面形 北東部を中心に大部分がSI354Aに切られるが、残存部分から南北方向にやや長い方形と推定される。南北方向の中軸線はN-24°-Wである。規模 東西方向が4.00m、南北方向が4.70mである。覆土の状態 第a-g層で、炭化物や焼土はあまり認められない。壁 残存壁高は18-28cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明だが、住居跡の各隅で確認されたP1・2・4は覆土の状況などから掘方ともみられることから、住居跡の四隅を中心に深く掘り込まれて貼床されたものであ

た可能性がある。柱穴 主柱穴とされるものが2本(P3・5)確認されているが、本来は4本主柱穴であったと推測される。P3は西側がSI354Aに切られており、径33×24cm、深さ32cm、P5は上面がすべてSI354Aに切られており、残存部分では径26×24cm、深さは床面から41cmで、P3では柱痕とみられる土層が確認できる。P3・P5間の柱間寸法は2.34mである。このほか北東隅にP1、南東隅にP2、南西隅にP4がある。規模はP1は径96×46cm、深さ27cm、P2は径52×29cm、深さ32cm、P4は径96×65cm、深さ14cmである。3基とも覆土は粘土を多く含むものであり、掘方の一部と考える。壁溝

確認部分では壁際を全周する。断面形はU字状で幅は16-32cm、深さ2-15cmで覆土は第c・g層である。

火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 南東部に多い。遺物は僅かで器種は甕主体に中形壺、大形壺、高環を僅かに含む。中形壺はやや長い口縁部1個体、高環は上半中実下半中空の棒状の脚部で下半2段に開き赤彩1個体、大形壺はP2出土の赤彩された胴部下半-底部1個体、内外面赤彩で口径大きく口縁部直立気味に立ち上がる胎土灰色のもの1個体、甕は胴部外面調整がハケ後ナデなしミガキが多く、口縁部はS字や受口はなく単口縁ばかりである。単口縁1個体、台部2個体+α、薄手で精良な胎土の甕片1個体である。赤彩遺物はやや多いが甕などに古い要素はなく、本遺構の年代は10期と考えられる。

#### S1355 (第54図、図版九七)

位置 VII区調査区、Aオ-20-21・22、Aオ-25-1・2グリッドに位置する。北西にSI353、東にSI354Aが近接してあるほか、東4mにSI354Bがある。重複 なし。覆土上層に遺物集中としてのSX298があるが、本遺構とは直接関連しないとみられる。覆土上位に堆積する土層中の遺物であろうか。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-37°-Wである。方向はSI353、SI354Bと類似する。規模 南西-北東方向が4.73m、北西-南東方向が4.48mである。南東辺南隅付近の方形の張出は本住居跡に伴わないと考える。覆土の状態 第1-20層で、覆土中位に粘土を多量に含む層(第7・11・13層等)とその上下に炭化物や焼土を含む層(第2・6・7・14・15層等)がある。土層根の痕跡であろうか。第17・19層など床面付近の層にも炭化物や焼土が顕著にみられる。炭化材は住居跡全体から出土するが、中央では床面から、壁際では床面からやや浮いて出土する。上層に使用された木材が焼失し炭化したものであろう。壁 残存壁高は23-44cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明だが、土層断面に示された第21層は掘方であろう。また、北隅や南隅の壁際にある不整形の掘り込み、P1・3-5も掘方とみられることから、壁際は溝状に深く掘り込まれた後埋め戻されて貼床されたものと推測する。深さは床面から10-20cmである。柱穴 不明である。壁溝 北西壁際西寄り、南東壁際中央にそれぞれ確認できる。断面形はU字状で幅は18-20cm、深さ2-9cmで覆土は粘土ブロック層である。火処 不明である。貯蔵穴 東隅にあるP2が貯蔵穴と考える。平面形は楕円形で、規模は径62×52cm、深さ42cmである。底面は小さくほぼ平坦で、壁は丸味を持って立ち上がる。覆土の詳細は不明だが自然堆積とみられ、上層に白色粘土を含む。遺物 住居跡内各所から出土しており、南北両隅部に少ない。遺物はやや多く、器種は甕主体で大形壺、中〜小形壺、高環、鉢が混じる。高環はやや少なく器台はない。鉢は小形丸底形が多く5個体+αで赤彩の可能性あるものあり、小形丸底形で口径大きく口縁部長いもの1個体、中形壺は単口縁で短い口縁部の甕のような形のもの1個体+α、口縁部長く直口縁で底部凹み底1個体+α、高環は中空柱状の脚部で長い脚部4個体、中実柱状の脚部1個体、ハの字の脚部で孔あり1個体、甕は底部直径約1.5cmの一孔の破片1個体、大形壺は口縁部内面に段を持つ二重口縁多く3個体、単口縁2個体+α、大廓系かとも推定される粗いナデ整形で胎土砂多量頸部直立するもの1個体、大形壺と直口縁中形壺のもの

とみられる赤彩甕片 20 点くらいあり、甕は胴部外面ハケ調整でケズリが多く入るものが主体である。口縁部は S 字（3 個体）と直口縁（7 個体）があり単口縁主体、口縁部肥厚し受口状になりかけの形状のもの 1 個体、底部は台付 9 個体 +  $\alpha$ 、平底 3 個体 +  $\alpha$  で台付が多く台部下端面折返しあり。単口縁小形台付甕 1 個体、ミニチュアは鉢形 11 個体のうち小 2 個体、大 1 個体でこれ以外は中のサイズ、台付甕形 1 個体、甕形（高さ約 10cm）1 個体である。本遺構の年代は 9 期と考えられる。

#### S I 3 5 8（第 55 図、図版九七・九八）

位置 VII 区調査区、A オ - 19 - 6・7・11・12 グリッドに位置する。東 4 m に SD350、南東 7 m に SI369 がそれぞれある。重複 なし。南西部の一部は調査区外となっているため不明である。平面形 やや東西方向に長い長方形で、南北方向の中軸線は N - 21° - W である。規模 東西方向が 4.50 m、南北方向が 3.78 m である。覆土の状態 第 1 - 3 層で、第 3 層は炭化物と焼土、灰を多量に含む。炭化材は南東部付近が少ないほかはほぼ住居跡全体から床面直上ないしやや浮いた状態で出土する。形状を保持したまま遺存するものはないが、材の方向は求心的に住居跡の中心を向いており、上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられる。壁 残存壁高は 11 - 28 cm であり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 壁寄りが溝状に深く掘り込まれ、黒褐色土（第 4 層）で埋め戻されて貼床されているとみられる。深さは床面から 7 - 20 cm である。柱穴 北壁際東寄りに P 1 がある。規模は径 41 × 40 cm、深さ 11 cm で用途は不明である。壁溝 なし。火処 不明である。貯蔵穴 なし。

遺物 住居跡中央北寄りに多い。遺物は多めで、器種は甕主体に高環もやや多く、大形甕、中形甕、鉢（あるいは小形甕か）、ミニチュア土器が少量ずつ含まれる。口縁部は器種に関わらず内湾する個体が多い。布留系であろうか。鉢は完形の小型甕に近い小形丸底形で小さい凹み底を持ち口縁部やや内湾 1 個体、中形甕は口縁部やや長く少し内湾し外面スス付着する甕として使用されたとも思えるもの 1 個体、口縁 - 胴部残存するもので胴部下半を境に胎土変わり口縁部やや短く内湾し外面スス付着と被熱の痕跡があり甕として使用された可能性あるもの 1 個体、高環は 2 個体でやや大形で環部有稜 1 個体、ほぼ完形で環部は小さく有稜で脚部細い中実柱状で下半大きく開く 1 個体、大形甕は赤彩の薄い胴部片と突出する平底片のみ、甕はハケ甕とハケ後ケズリの甕があり後者のほうが多そうである。薄手のものは 1 個体あるが胴部外面は上半ハケで下半ケズリであり全面ハケではない。甕は S 字を含めやや厚手なものが多い。中期に多く見られる厚手な単口縁の甕もあり、胴部外面の調整はハケ後横ケズリで他の前期甕と同様の調整を施す。S 字 1 個体単口縁 4 個体うち 1 点は内湾し器壁厚い口縁部、単口縁で形状の崩れた S 字で胴部外面ハケ後横ケズリ 1 個体、単口縁のハケ甕で口縁部外反 1 個体、台部 2 個体、平底 1 個体、ミニチュアは小さい鉢形 1 個体、甕形かとみられるもの 1 個体である。S 字甕がろうじて残り塊もないが器壁の厚い甕が認められる。本遺構の年代は 10 期と考えるが、中期初頭とすることもできようか。

#### S I 3 5 9（第 55 図、図版九八）

位置 VII 区調査区、B オ - 3 - 24・25、B オ - 4 - 21、B オ - 8 - 4・5、B オ - 9 - 1 グリッドに位置する。北に SI364、南に SK363 が近接してあるほか、南東 3 m に SI361 がある。重複 なし。覆土上層に遺物集中としての SX308・309 があり、このうち SX309 は本遺構に伴う可能性があるが、SX308 は本遺構と直接関連しないものとする。SX308 は覆土上位に堆積する土層中の遺物であろうか。平面形 東西方向に長い長方形で、西辺がやや短い。南北方向の中軸線は N - 26° - W である。規模 東西方向が 5.65 m、

南北方向が4.90mで、西辺は4mほどである。覆土の状態 第2～9層で、第8・9層の一部は貼床の可能性もある。第4層はP3覆土のようにも見える。中央北寄りでは、床面から大きく浮いて炭化材が出土する。壁 残存壁高は10-18cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 なし。第8・9層の一部は貼床の可能性もある。柱穴 4本(P1・4-6)確認されている。P1は楕円形の掘り込み内に2基の柱穴があるもので、全体の規模は径123×89cm、深さ16cm、西側柱穴は径33×31cm、床面からの深さ28cm、東側柱穴は径23×16cm、床面からの深さ25cmである。P4は径25×19cm、深さ23cm、P5は径17×15cm、深さ24cm、P6は径29×24cm、深さ20cmである。P4、P5は主柱穴の可能性もあるが、P1、P6は用途不明であり、本住居跡に伴わない可能性もある。仮に伴わないとすると、土層観察からP1は本住居跡より古いと考えられる。このほか東壁際に円形のP2、南西部に径100cmと40cmの円形の掘り込みが接続したような形のP3がある。規模はP2は径43×36cm、深さ10cmで底面ほぼ平坦であり、壁は短く外傾して立ち上がる。P3は径121×100cm、深さ17cmで底面は丸味を持ち、壁はなだらかに立ち上がる。ともに本住居跡に伴わない可能性があり、仮に伴わないとすると、土層観察からP3は本住居跡より古いとみることができる。壁溝 なし。

火処 不明である。貯蔵穴 不明である。P3が貯蔵穴となる可能性はある。遺物 北東部とP3上面に多い。北東部の遺物は床面から大きく浮いている。遺物量は多めで、器種は甕主体で大形壺、鉢、中形壺などが混じり、ミニチュア土器や高環、丸玉が僅かに含まれる。鉢は小形丸底形2個体、半球状で薄いもの2個体+α、中形壺は粗製の単口縁2個体、短い単口縁1個体、高環は中実柱状の脚部2個体で棒状に近く上位中実で下位中空であり内面に棒状工具を差し込んでケズリのため内面三角錐状となる。大形壺は赤彩胴部片1個体、厚く大形の折返し口縁1個体、黒い胎土で屈曲して外反する口縁部1個体、単口縁1個体+α、赤彩単口縁1個体、突出する平底1個体+α、甕は胴部外面ハケ整形主体で鋭く細いイケのものもあり、S字が8個体以上うち端部内面が沈線状に凹むもの1個体、形状の崩れたS字1個体、単口縁3個体+α、ミニチュアは鉢形1個体、丸玉は完形3点、砥石は破片1点である。S字甕はあるが鉢は変形著しく高環は棒状の脚部であり、本遺構の年代は10期と考えられる。

### S1360 (第56図、図版九八)

位置 VII区調査区、Bオ-8・9・10・15・20、Bオ-9-11-16グリッドに位置する。南にS1364が近接している。重複 なし。北西側は調査区外となっているため不明である。平面形 不明であり、残存部分から方形かと推定する。南北方向の中軸線はN-14'-Wである。規模 調査したのは東西方向が約5.80m、南北方向が4.50m分である。覆土の状態 第3-10層で、第4・5・8層に焼土と炭化物が含まれる。炭化材は調査部分全体から出土しており、材の方向は南北方向主体に東西方向のものもある。上屋に使用された木材が焼失し炭化したものとみられる。第9・10層など床面付近の上層の一部は貼床の可能性もある。

壁 残存壁高は11-20cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸を持つ。掘方・貼床 床面で溝状や不定形の掘り込みが確認されており、これらは掘方と考えられる。深さは床面から全体的には6-20cmで、南壁寄りで50cm程の深い部分がある。特に深い部分は柱穴の可能性もあろう。柱穴 不明である。壁溝 南壁際、東壁際それぞれに確認できる。断面形はU字状で幅は10-23cm、深さ3-8cmで覆土は第7・10層である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 個別に取り上げた遺物はない。遺物は僅かで器種は甕主体に中形壺、大形壺、高環片が混じる。中形壺は頸部片など1個体、高環はハの字に開く脚部で有孔の破片、坏部破片など、大形壺は突出する平底片、甕は台付の単口縁で胴部



外面ハケ整形多いもの2～3個体、単口縁の甕はやや厚手で、新しい時期のように見える。本遺構の年代は9～10期と考えられ、単口縁で厚手の甕が伴うとすれば10期だろう。

#### SI361 (第56図、図版九八)

位置 VII区調査区、Bオ-4-11・16・17・21グリッドに位置する。西側にSP388～391が近接してあるほか、北西3mにSI359、南西3mにSI366がそれぞれある。SP388～391は本住居跡の西辺とほぼ平行して等間隔に並ぶ柱穴であり、本住居跡に伴う遺構の可能性もある。重複 南隅でSB395の北東柱穴を切り、東部がSI326に切られる。東部ではSD362とも重複するが、新旧関係は不明である。平面形 やや不整な方形で、南北方向の中軸線はN-31°-Wである。規模 東西方向が4.49m、南北方向が4.08mである。覆土の状態 第1～9層で、第3層に炭化物が含まれる。第5～9層など床面付近の土層の一部は貼床とみられる。壁 残存壁高は22-27cmであり、壁はやや外傾して立ち上がる。床面 土層断面では凹凸が著しいと見えるが、本来はおおむね平坦と考える。掘方・貼床 中央が浅く、壁寄りがやや深く掘り込まれ、第5～9層の一部が埋め戻されて貼床されたと考える。深さは床面から3-17cmで南西隅付近が最も深い。柱穴 南東隅に1本(P1)ある。径40×23cm、深さ17cmである。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。P1が貯蔵穴となる可能性はある。遺物 住居跡内各所からまばらに出土する。遺物は少なく器種は甕主体で壺が少量あり、高坏は僅かである。中形甕は短い直口縁1個体、中形甕かともみられる白い胎土の赤彩土器は1点のみ、高坏は脚部ハの字で有孔1個体、大形甕は雑な作りの折返し口縁1個体である。甕は単口縁2個体のみで口縁部片少なく、胴部外面ケズリの甕はない。北陸系かともみられる口唇部外面にやや内側に傾いた面取りがあるもの1個体、台部5個体すべて下端内側に端部折返し、突出する平底で胴部ハケ整形1個体、ミニチュアは台付甕台部1個体である。本遺構の年代は8～9期と考えられる。

#### SI364 (第57図、図版九九)

位置 VII区調査区、Bオ-8-5・10、Bオ-9-1・6グリッドに位置する。北にSI360、南にSI359、東にSX325がそれぞれ近接してある。重複 なし。SX325は遺物集中で、本遺構に伴う可能性はある。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-24°-Wである。規模 東西方向が3.73m、南北方向が3.88mである。覆土の状態 土層としては示していないが、粘土粒などを含む緻密な黒褐色土や暗褐色土である。壁 残存壁高は8-13cmであり、壁は大きく外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 北東部に1本(P1)ある。径43×33cm、深さ12cmである。壁溝 なし。火処 不明である。貯蔵穴 なし。遺物 なし。本遺構の年代は、遺構の状況から前期と考えられる。

#### SI366 (第57・86図、第102表、図版九九・一〇四)

位置 VII区調査区、Bオ-3-4・5・9・10・14・15、Bオ-4-1・6・11グリッドに位置する。南にSD255・340、北西にSD378がそれぞれ近接してあるほか、北東3mにSI361がある。重複 西部でSK365を、北部でSB395の柱穴2本を、全体でSD372を切り、中央部がSD350に切られる。SD372は本住居跡の掘方の可能性がある。平面形 方形であり、南北方向の中軸線はN-12°-Eである。規模 東西方向が6.42m、南北方向が5.95mである。覆土の状態 第1～7層で、壁寄りに炭化物や焼土を含

む層がある。壁 残存壁高は18-30cmであり、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。掘方・貼床 不明だが、SD372が本住居跡の掘方の可能性がある。仮にそうだとすると、住居跡の壁寄りを溝状に深く掘り込み、第12・13層で埋め戻して貼床したことになる。柱穴 1本(P1)ある。規模は径40×30cm、深さ33cmである。本住居跡に伴わない可能性もある。壁溝 不明である。火処 不明である。貯蔵穴 南東隅にある。平面形は楕円形で、規模は径112×78cm、深さ50cmである。覆土は不明である。遺物 住居跡内各所からまばらに出土する。遺物は台付甕と丸玉のみとごく僅かである。甕は胴部上端片1点、台部片2点のみで、胴部外面調整は上半はタテハケ後ナデ、上半は右下がりの細かいハケ、丸玉は完形1点(1)である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

### S1369 (第58図、図版九九)

位置 VII区調査区、Aオ-14-23・24・25、Aオ-19-3・4・5グリッドに位置する。東にSD351が近接してあるほか、北西7mにSI358がある。重複 中央がSD350に切られる。北西壁の一部がSK371に切られるとされる。平面形 方形で、南北方向の中軸線はN-43°-Wである。規模 南西-北東方向が5.53m、北西-南東方向が5.75mである。覆土の状態 第1-16層で、第5層に炭化物、第7層に焼土、第14層に灰白色粘土が含まれる。壁 残存壁高は26-43cmであり、壁は外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。硬化部分の有無や範囲は不明である。住居跡中央から西隅にかけてでは、床面直上で薄く隙間なく広がる稲藁状の炭化材が面的に確認されている。床面に敷いた籐状の敷物が炭化したものの可能性がある。掘方・貼床 不明である。柱穴 主柱穴とみられるものが4本(P1・2・3・4)ある。P1は径65×53cm、深さ48cm、P2は径68×65cm、深さ43cm、P3は径80×56cm、深さ34cm、P4は径63×58cm、深さ68cmで4本とも一定以上の深さがあり、西部のP4が最も深い。柱間寸法は、P4・P1間が3.00m、P3・P2間が2.97m、P3・P4間が2.80m、P2・P1間が2.98mと配置は整った方形であり、住居跡の平面形と相似形になる。P1では土層断面で柱痕に相当する土層が確認できるほか、P4では底面で柱痕部分が深く掘り込まれる。壁溝 壁際を全周する。断面形はU字状で幅は8-36cm、深さ6-17cmで覆土は第16層である。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 住居跡中央部の北半に多い。器種は甕、大形壺、中形壺、鉢、高環で構成される。甕には中期にみられる厚手の甕があるほか中形～小形壺も多いが、小形丸底鉢や折返し口縁の大形壺も出土する。鉢は小形丸底形ばかりで、大形で口縁部が極端に長いもの1個体、中形4個体+α、小形丸底鉢に付く脚部の可能性がある小さい脚部片1個体、中～小形壺はやや長い口縁部3個体+α、長い口縁部1個体、高環は中実柱状の長い脚部3個体、坏部小さく有稜4個体+α、小さく有稜の坏部で中空柱状の脚部1個体、坏部有稜で口縁～体部外反し、中実棒状の脚部1個体、大形壺は小さく折返し口縁1個体、中期に多くみられる短く厚手の単口縁の口縁部1個体、甕は形状の崩れたS字口縁部2個体、上半が長く伸びるS字1個体、単口縁3個体+αうち単口縁で厚手の胎土精良な土器片砥石と同一個体1個体、台部8個体うち1つは底部内外面に砂貼付、平底4個体+α、中形甕は直口縁1個体、ミニチュア土器は鉢形1個体、甕形2個体ほか数個体あり、土器片砥石は厚手の甕の破片を使ったもの1点である。柱穴出土遺物は、P1がハケ甕片1点、P2が小形丸底鉢片1点、台付甕台部片2点(1点は外面ハケで内面折返して底部内外面砂貼付、1点は背の高い台部)、P3は単口縁の甕口縁部片1点、壺口縁部片で幅の狭い折返し口縁1点、径が大きい大形の台付甕台部1点である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## S1387 (第50図、図版九五)

位置 VII区調査区、Bオ-4-15グリッドに位置する。南東にSI295、南にSD255がそれぞれ近接してある。  
 重複 南壁を除く大部分がS1334に切られる。平面形 南東隅と南辺が確認でき、残存からみた南北方向の中軸線はN-12°-Wである。規模 不明で、残存部分は東西方向が2.90m、南北方向が0.44mである。S1334南辺形状の不自然さも勘案すると、S1334と一体の遺構であり、S1334の一部となる可能性もあろうか。  
 覆土の状態 不明である。壁 残存壁高は3-13cmであり、壁は短く外傾して立ち上がる。床面 緩やかな凹凸はあるが、おおむね平坦である。掘方・貼床 不明である。柱穴 南壁際に1本(P1)である。規模は径15×13cm、深さ20cmである。覆土は不明で、本住居跡に伴わない可能性もある。壁溝 南壁際と東壁際にある。断面形はU字状で幅は12-17cm、深さ6-9cmである。火処 不明である。貯蔵穴 不明である。遺物 遺物は僅かで、中期とみられる有稜の高環部片1点、粗い胎土の小形-中形の壺片とみられるもの1点、ハケ裏片3点のみである。本遺構の年代は、裏片などから9-10期と考える。

## 2. 掘立柱建物跡

## SB395 (第59図、図版九一・一〇〇)

位置 VII区調査区、Bオ-3-10・15、Bオ-4-6・11グリッドに位置する。北東にSI326、北西にSK377が近接してあるほか、西2mにSD378・379がある。重複 柱穴がSI361・366、SD350と重複し、これらに切られる。遺構範囲内にSP388・389があるが、これらとの新旧関係は確認できていない。SX307は本遺構以後の遺物であろう。形状・規模 東西棟であり、桁行2間(4.37-4.48m)、梁間1間(3.85-4.26m)の側柱建物で、中軸線は北列ではほぼ東西方向を向くが、全体としてはN-88°-Eである。柱穴は6本(SK380・367・375・374・373・368)で配置は長方形となる。柱穴の平面形は隅丸長方形のものが多く中軸線は遺構の中軸に沿っており、SK373を除くすべてで薄い層を積み重ねた裏込め土が確認できる。SK380は平面隅丸長方形で規模は109×83cm、深さ77cmで底面西側が一段低くなっており、柱は低い部分の東寄りにある。柱根の径は約20cmである。SK367は平面隅丸長方形で規模は81×63cm、深さ71cmで北辺中央底面において柱部分のみ一段低くなっており、柱根の径は約18cmである。SK375は平面隅丸長方形で規模は100×64cm、深さ70cmで底面の東西2ヶ所が柱痕状に低くなっており、西側の深さはやや浅く58cmである。SK374は平面隅丸長方形で規模は88×52cm、深さはSI366床面から51cm、周辺の遺構確認面からの深さは70cmである。底面西側が一段低くなっており、柱は低い部分のほぼ中央にある。底面付近の上層で見える柱根の径は約9cmである。SK373は不整形円形で規模は71×62cm、深さはSI366床面から45cm、周辺の遺構確認面からの深さは64cmである。SK368は平面隅丸長方形で規模は89×80cm、深さ78cmで土層断面では柱根を確認できない。柱間寸法は桁行2.10-2.38mで、北側の柱間は共に2.20mである。SK380・367・373では底面直上から柱材各1点が出土する。樹種はSK367・373がクワ属、SK380が広葉樹である。遺物 各柱穴から遺物が僅かに出土するが、量は少ない。古墳前期土器主体で、古代の破片かとみられるものも僅かにある。SK367では前期のハケ裏片1点、SK368では前期の壺片2点、ハケ裏片でケズリも施すもの1点、SK375では壺片3点のうち2点は外面ハケ整形、ハケ裏片1点、VII区SK380では前-中期の壺片1点、古代の武蔵型裏かとみられる破片2点である。本遺構の年代は、遺構の重複状況などから8-9期かそれ以前と考えられる。

## 3. 溝

S D 2 5 5 (第60・61・88図、第103表、図版一〇〇・一〇一・一〇二)

位置 VII区調査区、Aオ・22・23・24、Bオ・3・4・5、Bカ・1グリッドに位置する。北側にSD372・381、SI366、南側にSI330、SK273がそれぞれ近接してある。重複 SI295・334、SD340を切り、SD255・343・381・383・384に切られる。西側はVII区調査部分へと続く。東側は調査区外となる。形状・規模 僅かに屈曲しながら東西に直線的に続く溝であり、大きくa-cの3時期に分けられる。全体の中軸線はN-37°-E、長さは78.20mである。

a期 調査部分では途切れず続いており、b期、c期に切られる。断面形は皿状で底面は細かな凹凸があるが平坦面を持ち、部分的に細く深く掘られる部分がある。壁はなだらかに大きく開いて立ち上がる。D・D'土層断面などから、a期の中を細分できる可能性がある。幅は南北の立ち上がりが確認できるB・B'土層断面付近で303cmあり、300-350cmほどの幅で続くと推定される。底面の高さは標高23.70-23.90mとやや幅があるが、大きな高低差はない。深さは25-60cmである。東半は東へと僅かに傾斜している。土層はA・A'で5a-5d層、B・B'で3a-3f層、C・C'で4a-4h層、D・D'で42-57層、西壁で23-25c層であり、砂主体に粘土や土壌などの薄い層が互層を成して堆積する。水性堆積と考えられる。

b期 c期の溝等に大部分が切られるため不明な部分が多い。土層断面でも確認できない地点があるが、a期と同様に直線的に続く溝とみられ、a期を切り、c期に切られる。断面形は浅い皿状で底面は緩やかな凹凸を持つがほぼ平坦で、壁は外傾して大きく開いて立ち上がる。幅は残存部分で130-136cmであり、本来は200cm前後と思われる。底面の高さは標高23.86-23.94mとほぼ平坦で、東へと僅かに低くなるようにも見える。深さは21-43cmである。土層は水性堆積と考えられ、A・A'で4a-4d層、C・C'で3a-3d層で、a期と似て砂主体に粘土や土壌などの薄い層が互層を成して堆積する。色調はa期の層よりやや明るい。

c期 調査部分では途切れず続いており、a期、b期を切る。断面形は浅い皿状で底面は細かな凹凸を持つがほぼ平坦で、壁は外傾して大きく開いて立ち上がる。幅は確認面で約2.5mで土層断面では225-338cmだが、C・C'や北壁では670cm程の幅が確認でき、浅く広い溝であったことがわかる。底面の高さは標高23.82-24.04mとやや幅があるが大きな高低差はなく、一方に傾斜することもない。深さは13-42cmである。土層はA・A'で2a-2e層、B・B'で2a-2f層、C・C'で2a-2c層、D・D'で23-38層、西壁で2a-6・8-22層である。a・b期と同様に砂、粘土、土壌などの薄い層が互層を成して堆積するため水性堆積と考えられるが、層の主体は土壌や粘土であり、色調もa・b期より明るく褐色を呈している。なお、これら明るい色調の土壌や粘土については、弘仁元年七月(818年)の地震に伴う地下土壌の噴出物と想定される泥流およびそのブロックに相当する、との推定もある。その場合、本遺構の廃絶は地震発生の時ということになる。

遺物 遺物は多くはない。前期遺物が多く、僅かに中期遺物、さらに9世紀代とみられる土師器、須恵器が入る。前期、中期はおそらく混入で、9世紀代の遺物が本遺構に伴うものと考えられるが、a・b・c期いずれの時期に属するか明らかでないものは少ない。前期9-10期の遺物は多く、壺・甕主体に高坏・中形甕、器台が含まれ、台付甕台部の破片を使った土器片砥石1点、中実棒状の脚部の赤彩された高坏1個体(5)がある。中期前葉～中葉の遺物は埴・小形甕などである。9世紀代の遺物は北武蔵型環3個体、ロクロ成形の土師器環1個体、平底の土師器非ロクロ成形環1個体、須恵器環8個体+α(3)、須恵器高台付環1個体(4)、須恵器甕片1点、須恵器皿1点などである。

a期に限定できる遺物は9世紀前葉とみられる口径12cm・底径6.5cmの須恵器環1個体(2)のほか、前期9-10期の壺・甕主体の遺物である。b期の遺物は前期9-10期と9世紀代の遺物があり、9-10期は壺・

甕・高坏・中形甕・器台など、9世紀代は北武蔵型坏1個体(1)、須臾器甕類破片1点である。層位や遺物などから本遺構の年代はa・b・c期ともほぼ9世紀代で、a期は9世紀前葉に限定できるものと考えられる。

#### SD340 (第60・61図、図版一〇二)

位置 VII区調査区、Aオ-22-18-20・25、Aオ-23・16・21-24、Bオ-3-3-5グリッドに位置する。南側にSI315、SK356、北側にSI366、SD372が近接してある。重複 SI295・330を切り、SD255・350・381・383に切られる。SD341、SK273との新旧関係は不明である。西側はVII区調査部分へと続く。東側は調査区外となる。東端で遺物集中であるSX282と重複するが、この遺物は本遺構に伴う可能性が高い。形状・規模 緩やかに湾曲しつつ東西方向に伸びる溝で、中央西寄りでクランク状に屈曲する。中軸線はN-68°-E、長さは74.60mである。断面形は逆台形状で底面は平坦であり、壁は外傾して直線的に立ち上がるが途中で角度をやや緩やかに変える。東寄りでは底面は丸味を持つ。幅は30-106cm、深さは22-46cmで底面の標高は23.85-24.00mで西側ほど低くなっており、僅かだが傾斜していると言える。

覆土の状態 覆土はIII層に覆われる。下層は黒色土、中層は砂、上層は褐色土をそれぞれ主体とし、砂、粘土、土壌が薄く互層を成して堆積する。水性堆積と考えられる。遺物 遺物は少なく、古墳時代前期9-10期の甕、壺片、中期前葉～中葉土器の甕、壺、碗片などがあるが小破片ばかりであり、混入の可能性が高いとみる。9世紀前葉のSD255に切られるとされる重複関係からすると、本遺構の年代は9世紀前葉かそれ以前となる。よって古墳時代に遡る可能性もあるが、遺構の状況からSD255に近い時期の所産としておきたい。

#### SD341 (第60・61図、図版一〇二・一〇三)

位置 VII区調査区、Aオ-24-16-18・23・24グリッドに位置する。北側にSD255、南側にSD342がそれぞれ近接してある。重複 西端でSD350に切られる。東端でSD340と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模 北西を向くコの字状の溝で、西部の中軸線はN-62°-W、東部の中軸線はN-43°-Eであり、長さは15.60mである。断面形は逆台形状で底面はおおむね平坦だが、部分的に斜めになるところがある。壁はやや急に立ち上がる。幅は30-38cm、深さは10-29cmで、底面の標高を比較すると部分的に高低差はあるもののほぼ一定しており、一方向に傾くことはない。覆土の状態 粘土ブロックを僅かに含む黒褐色土(第1層)であり、自然堆積とみられる。遺物 遺物は古墳時代前期9-10期の壺、甕片、中期の壺、碗片など僅かであり、すべて混入とみられる。本遺構の年代は重複関係から中世以前であることがわかるのみだが、遺構の状況から古代にまで遡る可能性は低いように思われる。

#### SD342 (第60図)

位置 VII区調査区、Aオ-24-9・14・18・19グリッドに位置する。北側にSD341が近接してあるほか、南西6mにSD351がある。重複 なし。形状・規模 北西-南東方向に直線的に伸びる溝で、中軸線はN-29°-W、長さは7.92m、幅22-33cm、深さは3-8cmである。これ以外の形状等詳細は不明である。

覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は不明だが、SD350とほぼ同方向に延びる遺構の状況から中世遺構の可能性があると見える。

#### SD343 (第60図)

位置 VII区調査区、Aオ-24-23、Bオ-4-3・8・12・13・17・22、Bオ-9-1・2・6・11・16グリッド

に位置する。南端にSD340・341、東側にSI321、西側にSI360・361がそれぞれ近接してある。重複SI326、SD255・386を切る。SD383とも重複しており、SD383を切るとみられる。形状・規模 北西・南東方向に直線的に伸びる溝で、中軸線はN-17°-W、長さは29.40mである。断面形は逆台形状で底面はおおむね平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。幅は28-62cm、深さは3-21cmである。底面の標高は地点による大きな差異はないが、北端は南端より13cm低いいため僅かだが北に傾いていると言える。覆土の状態 不明だが、黒褐色の緻密な土とみられる。遺物 遺物は古墳時代前期9-10期の壺、甕、赤彩中形壺の破片であり、すべて混入の可能性が高いとみる。本遺構の年代は不明だが、SD350とほぼ同方向に延びる遺構の状況から中世遺構の可能性があると見えよう。

## SD350 (第60・61図、図版一〇三)

位置 VII区調査区、Aオ-10・14・15・19・23・24、Bオ-3・8グリッドに位置する。東3mにSD351、東9mにSD342、東10mにSD343がそれぞれある。重複 SI366・369、SB395、SD255・340・341・372・379、SK374を切る。SD383とも重複しており、SD383を切るとみられる。形状・規模 調査区を縦断し北西・南東方向に直線的に伸びる溝で、SI366との重複部で屈曲する他、南部で複数条に分かれる部分がある。中軸線はN-22°-W、長さは94.20mである。断面形は逆台形状で底面は平坦だが丸味を持つ部分が多く、壁は下半がやや急で中位で角度を変えて緩やかに立ち上がる。幅は43-122cm、深さは7-57cmである。底面の標高を比較すると南端は北端より25cm低いいため、僅かだが南に傾いていると言える。覆土の状態 下層は地山である黒褐色土ブロックを含むが、中層-上層は火山灰と考えられる白色土粒を多量に含む緻密な褐色土層であり、自然堆積とみられる。上位の褐色土層は1層に近い。遺物 遺物は僅かて、常滑産かとみられる中世陶器裏片1点が出土する。これ以外は古墳時代前期の甕、壺、高環、中期の甕、甌、平安時代須恵器環などの小破片である。本遺構の年代は中世と考えられる。

## SD351 (第60・61図、図版一〇三)

位置 VII区調査区、Aオ-15・19・20・24グリッドに位置する。西3mにSD350、東6mにSD342がそれぞれある。重複 なし。南端は幅2mのトレンチに切られる。形状・規模 SD350とほぼ平行に北西・南東方向に直線的に伸びる溝で、掘り込みが浅いため途中で途切れ、南端でやや幅が広がる。中軸線はN-27°-W、長さは42.00mである。断面形は鍋底状で底面は平坦だが丸味を持ち、壁は短くやや急に立ち上がる。幅は30-165cm、深さは2-7cmである。底面の標高を比較すると南端は北端より30cm低いいため、溝底面は南に傾いていると言える。覆土の状態 多量の砂と火山灰と考えられる白色土粒を含む暗褐色土(第1層)であり、自然堆積とみられる。土質や色調等は1層やSD350上層に近いように見える。遺物 遺物は古墳時代前期の甕、壺、段にキザミを持つ有段口縁壺片、中期の壺、高環片など僅かて、すべて混入とみられる。本遺構の年代は不明だが、SD350とほぼ同方向に延びる遺構の状況から中世遺構の可能性があると見えよう。

## SD362 (第60・61・88図、第104表、図版一〇四)

位置 VII区調査区、Bオ-4・13・18グリッドに位置する。東6mにSI334がある。重複 SI326、SD343・386に切られる。SI361、SK394との新旧関係は不明である。SI326の掘方の可能性もあろうか。なお、東側に遺物集中としてのSX332があるが、この遺物は本遺構に関連する可能性があると考えられる。形状・規模 L字状の溝で、北辺の中軸線はN-70°-E、長さは4.28m、東辺の中軸線はN-13°-W、長

さは5.00mである。断面形は皿状で、底面は凹凸を伴いつつ丸味を持ち、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。東辺では溝の中心より東側に最底面があり、東側より西側がなだかな立ち上がりとなっている。幅は64-207cm、深さは16-22cmである。底面の標高は各辺で差があり、東辺は北辺より15cmほど低い。覆土の状態 覆土は第1-第6層で地山である明褐色土のブロックを多く含んでおり、人為堆積の可能性がある。

遺物 遺物は僅かで古墳時代前期の鉢、甕であり、鉢は口縁部く字に開く口径大きい鉢の口縁部片で薄手精製のもの1点、甕は胴部外面調整がハケ主体でナデ、ケズリもあるもので、単口縁1個体(1)、S字1個体、台部1点がある。出土遺物から本遺構の年代は古墳前期9-10期と考えられる。

#### SD372 (第57図、図版九九・一〇四)

位置 VII区調査区、Bオ-3-4・5・9・10・14・15、Bオ-4-1・6・11グリッドに位置する。南にSD255・340、北西にSD378がそれぞれ近接してあるほか、北東3mにSI361がある。重複 北部でSB395の柱穴2本を切り、全体がSI366に、中央部がSD350に切られる。西部でSK365と重複し、SK365を切るとみられる。なお、本遺構はSI366の掘方の可能性がある。形状・規模 方形に巡る溝であり、中軸線はN-11°-E、規模は東西6.28m、南北5.66mで底面は緩やかな凹凸を持つがおおむね平坦で、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。幅は88-144cm、深さは22-36cmである。覆土の状態 覆土は地山である明褐色土のブロックを多く含む第12・13層であり、人為堆積とみられる。遺物 遺物は古墳時代前期の甕、甕片など僅かで、S字甕片、北陸系かとみられる口縁部上端外面が垂直に面取りされ上端つまみ上げられる甕片、甕片などである。出土遺物から本遺構の年代は古墳前期9-10期と考えられ、これは遺構の重複関係とも合致する。

#### SD378 (第60・61図、図版一〇四)

位置 VII区調査区、Bオ-3-14・19グリッドに位置する。北にSD379、東にSI366、SB395、SD350・372、南にSK365がそれぞれ近接してある。重複 なし。形状・規模 南北方向に直線的に伸びる溝であり、中軸線はN-1°-Eで長さは3.31mである。断面形は逆台形状で底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がるが、東側は上半でややなだらかとなる。幅は68-84cm、深さは13-24cmである。底面の標高はほぼ一定しており、一方に傾くことはない。なお、土層断面に示されるように本遺構周囲には第5-第7層が薄く堆積していることが確認されている。これらはSD379覆土と類似しており、SD378・379双方を含む幅の広い浅い溝が存在した可能性もある。その場合、土層断面の東西両端のなだかな立ち上りを活かし、幅3m程度の浅い溝が南北方向に伸びていたと推定する。覆土の状態 覆土は第1-第4層で地山である明褐色土のブロックを多く含んでおり、人為堆積の可能性もある。遺物 なし。本遺構の年代は遺物からは特定できないが、遺構の状況から古墳前期と考えられ、9期の可能性が高い。

#### SD379 (第60・61図、図版一〇四)

位置 VII区調査区、Bオ-3-14・19グリッドに位置する。東にSK377、南東にSB395、南にSD378がそれぞれ近接してある。重複 SD350に覆土が切られる。上層に遺物集中としてのSX385があるが、遺物出土の高さと本遺構確認面との差は僅かであり、SX385の遺物は本遺構に伴う可能性が高いと考える。形状・規模 L字状の溝で、北辺の中軸線はN-78°-W、長さは2.72m、東辺の中軸線はN-7°-E、長さは1.58mである。断面形は皿状で底面は緩やかな凹凸を伴いつつ丸味を持ち、壁はなだらかに外傾して立ち上がる。

幅は52-73cm、深さは2-11cmである。覆土の状態 覆土は第1・第2層で地山である明褐色土の粒子を多く含んでおり、人為堆積の可能性もある。また、これらはSD378 周辺で確認された第5-第7層と同じ土層の可能性もある。遺物 古墳時代の甕胴部片1点のみである。本遺構の年代は出土遺物からは特定できないが遺構の状況から古墳前期と考えられ、SX385 出土遺物からすると9期の可能性が高い。

## SD381 (第60図)

位置 VII区調査区、Bオ-3-4グリッドに位置する。南にSD255が近接してある。重複 SD340を切る。遺構の方向などからSD341と同一遺構となる可能性がある。形状・規模 北西-南東方向に伸びる溝であり、中軸線はN-49°-Wで長さは2.45m、幅は42-59cmである。形状等詳細は不明である。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は重複関係から古代かそれ以降となるが、遺構のあり方からSD341と同様にSD350をはじめとする南北方向に延びる一群の溝より古い段階の中世遺構と考えたい。

## SD383 (第60・61図)

位置 VII区調査区、Aオ-22・23・24、Bオ-4・5、Bカ-1グリッドに位置する。北側にSI334、南側にSI330がそれぞれ近接してある。重複 SI295、SD255・340・384を切る。SD343・350とも重複しており、SD343・350に切られるとみられる。東側は調査区外となる。形状・規模 SD255と平行し、SD255上層に掘られた溝である。僅かに屈曲しながら東西に直線的に続いており、西端は浅くなって途切れる。平面的には西へと続く部分は確認できないが、西壁土層断面にあらわれている可能性はある。中軸線はN-37°-E、長さは66.00mである。断面形は皿状で底面は緩やかな凹凸を持ち、壁はなだらかに立ち上がっており、D-D'土層断面などに見られるように底面が鋭角的に深く掘り込まれる部分もある。幅は52-144cmであり、D-D'土層断面では浅く広く立ち上がるために200cm以上の幅が確認できる。底面の高さは標高24.00m前後で一定しており大きな高低差はないが、D-D'土層断面付近のみ23.70mとなっている。深さは11-32cmである。覆土の状態 覆土はIV a・IV b層を切り、III層に覆われる。覆土はA-A'で1a・1b層、B-B'で1a-1c層、C-C'で1a・1b層、D-D'で22a-22f層であり、砂と粘土、土壌などの薄い層が互層を成して堆積する。水性堆積と考えられる。SD255c覆土に似るが、それより色調は暗く砂はより多い。遺物 遺物は少なく、SD255・383として取り上げられた前期～中期初頭の土器と9世紀代の須恵器、土師器があるのみで、遺物からの時期の特定は難しい。本遺構の年代は重複関係から9世紀代かそれ以降の所産となり、遺構の状況からSD255に近い時期を想定できよう。

## SD384 (第60図)

位置 VII区調査区、VII区南端、Aオ-23-17グリッドに位置する。北にSD340が近接してある。重複 SD255を切り、SD383に切られる。形状・規模 東西方向に伸びる溝であり、中軸線はN-65°-Eで長さは2.30mである。SD383などと似た断面皿状の水性堆積の溝と思われるが、詳細は不明である。幅は28-40cm、深さは6cmである。覆土の状態 不明である。遺物 なし。本遺構の年代は重複関係からは9世紀代かそれ以降の所産となるが、遺構の状況を見るとSD255に近い時期が想定できよう。

## SD386 (第60・61図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Bオ-4-17・22・23グリッドに位置する。北にSP392・393、西にSI361、東にSX332



がそれぞれ近接してある。なお、SX332 東側には南北方向に中軸線をとる本遺構類似の溝状遺構の存在が写真で確認できる。重複 SD362 を切り、S1326、SD343 に切られる。形状・規模 東西方向に直線的に伸びる溝であり、中軸線はN-86°-Eで長さは4.03mである。断面形は皿状で底面は丸味を持ち、壁は外傾して立ち上がるが、南側はなだらかである。幅は53-72cm、深さは13-23cmである。底面の標高はほぼ一定しており、一方向に傾くことはない。覆土の状態 覆土は第1-第6層で地山である明褐色土のブロックを多く含んでおり、人為堆積の可能性もある。なお、土層断面南側の第1・2・5・6層はSD362覆土かもしれない、その場合SD362と同時に埋没した可能性が出てくる。遺物 遺物は鉢と甕片のみと少なく、鉢は小形丸底形の破片2点、甕片は18点で胴部外面調整がハケ主体にナデ、ケズリが施されるもので、S字1点、単口縁1点がある。本遺構の年代は遺物から古墳前期9-10期とみられ、これは遺構の重複関係とも合致する。

#### 4. 土坑

##### S K 2 5 3 (第44図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Aカ-21-17-18グリッドに位置する。西にSX252が近接してある。重複 なし。形状・規模 調査時にSK081としていた遺構である。平面形は丸味の強い隅丸方形で、中軸線はN-2°-E、規模は長径2.91m、短径2.87m、深さ0.14mである。底面付近の状況は明確に得ないがほぼ平坦と思われる、壁はなだらかに立ち上がる。覆土の状態 IV-V層に似る黄褐色土(第1層)である。遺物 遺構内に土器片がほぼ水平に広がるように集中する。器種は甕主体に中形壺、高坏、鉢がある。高坏が多く、中形壺、鉢は少ない。S字甕は胴部ヨコハケを持ち、高坏はハの字に開く有孔の脚部であるなど古い要素もある。鉢は赤彩の丸い平底で口縁くの字に開く1個体、中形壺は短い単口縁で外面ナデ1個体、高坏は4個体くらいで脚はややハの字で下端大きく開く形状であり、有孔のもの2個体、甕は胴部外面調整がハケ主体でナデも施すがケズリは少なく、S字1個体、単口縁4個体、台部1個体、平底3個体である。本遺構の年代は8期と考えられる。

##### S K 2 5 8 (第48図)

位置 VII区調査区、Aカ-22-7-12グリッドに位置する。西にSI264、南西にSI263が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は長方形で、西端より東端がやや幅広い。中軸線はN-45°-Wで、規模は長径2.00m、短径1.26m、深さ0.54mである。底面はほぼ平坦で南東に向かって緩やかに低くなっており、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 灰褐色土ブロックを多く含む第2-第4層であり、人為堆積と考えられる。上面はIVa層に覆われる。遺物 南部に遺物がまとまる。遺物は甕と大形壺のみと僅かであり、大形壺は平底片、甕は単口縁1個体、受口状になりきっていない形状のもの1個体、台部片などである。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

##### S K 2 5 9 (第48図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Aカ-21-5、Aカ-22-1グリッドに位置する。東にSI263、北にSI264が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で南端が狭く、北端は広い。中軸線はN-20°-Eで、規模は長径1.94m、短径1.48m、深さ0.38mである。底面は平坦で、壁は丸味を持って立ち上がり、上半でほぼ垂直になる。覆土の状態 第2-第4層であり、上面はIVa層に覆われる。周辺の地山と類似する覆土とされ、

遺構かどうか疑問もある。遺物 遺物は裏と中形壺のみと僅かであり、中形壺は胴部片、裏は胴部外面調整がハケ、ハケ後ケズリ、ケズリのみと各種あり、単口縁片と台部片が認められる。本遺構の年代は9～10期と考えられる。

#### SK267 (第46図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Aオ-20-14・15・19・20グリッドに位置する。東にSI256が近接してある。重複 なし。

形状・規模 平面形は長方形で中軸線はN-75°-E、規模は長径2.68m、短径1.96m、深さ0.61mである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的にやや外傾して立ち上がる。覆土の状態 地山IV-V層に相当する黒色土や灰褐色粘土ブロックを多量に含む第1・第2層であり、人為堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

#### SK268 (第48図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Bカ-1-6グリッドに位置する。南東にSX272が近接してある。重複 なし。形状・

規模 平面形は長方形で、各辺は丸味を持つ。中軸線はN-32°-Wである。規模は長径1.56m、短径1.30m、深さ0.52mである。底面は緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は直線的に垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 不明である。周辺の類似する遺構から推測すると人為堆積の可能性がある。遺物 遺物は古墳時代前期9～10期の胴部外面調整がハケとナデの裏と大形壺のみであり、混入と考えられる。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

#### SK273 (第55図、図版一〇五)

位置 VII区調査区、Bオ-5-14・15グリッドに位置する。南にSK274、北にSD255・383が近接してある。

重複 南半がSD340と重複するが、新旧関係は不明である。形状・規模 平面形は方形で、中軸線はN-21°-W、規模は長径1.26m、短径1.13m、深さ0.44mである。底面は緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 地山IV-V層に相当する黒色土や褐色粘土ブロック、灰褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。特に上半に灰褐色粘土の大きなブロックが目立つ。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

#### SK274 (第56図、図版一〇六)

位置 VII区調査区、Bオ-5-14・15グリッドに位置する。北にSD340、SK273が近接してある。重複

SI149Aを切る。形状・規模 平面形は隅丸方形で、中軸線はN-4°-W、規模は長径1.08m、短径1.06m、深さ0.72mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 地山IV-V層に相当する黒色土や褐色粘土ブロック、灰褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。上層に灰褐色粘土ブロックが多い。遺物 遺物は古墳時代前期9～10期の中形壺1点と胴部外面ケズリ調整の裏1点のみであり、混入と考えられる。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

#### SK278 (第56図、図版一〇六)

位置 VII区調査区、Aオ-25-19・20グリッドに位置する。南にSX285が近接してある。重複 なし。

形状・規模 平面形は隅丸方形で、中軸線はN-14°-Wである。規模は長径1.00m、短径0.88m、深さ0.31mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土の状態 地山IV-V層に相当する黒色土や

褐色粘土ブロック、灰褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。上層に灰褐色粘土ブロックが多い。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

SK328 (第49図、図版一〇六)

位置 VII区調査区、Bオ-5-8グリッドに位置する。東にSK329が近接してある。重複 SI330内にあり、SI330を切る。形状・規模 平面形は長方形で、中軸線はN-22°-Wである。規模は長径1.46m、短径1.09m、深さ0.52mである。底面は平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。覆土の状態 灰白色や橙褐色の粘土ブロックを多く含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。遺物 なし。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

SK329 (第49図、図版一〇六)

位置 VII区調査区、Bオ-5-8グリッドに位置する。西にSK328が近接してある。重複 西半でSI330を切る。形状・規模 平面形は長い長方形で、中軸線はN-22°-Wである。規模は長径1.75m、短径0.73m、深さ0.30mである。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に垂直気味に立ち上がる。覆土の状態 灰白色や橙褐色の粘土ブロックを含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。遺物 中央北寄りの床面から浮いた位置で径15cm程の円形の川原石1点が出土する。このほか古墳時代前期9～10期の壺片と胴部外面ケズリ調整主体の裏片4点のみが出土するが、混入であろう。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

SK356 (第48図、図版一〇六)

位置 VII区調査区、Bオ-4-5、Bオ-5-1グリッドに位置する。北にSD340が近接してある。重複 SI315と重複する。土層では確認できていないが、SI315に切られるとみられる。形状・規模 平面形は不整形円形である。中軸線はN-31°-Eで、規模は長径2.13m、短径1.74m、深さ0.38mである。中央に平坦な底面があり、壁は不規則な段差を伴い緩やかな傾斜で立ち上がる。覆土の状態 第1～第8層で、第1～第3層はSI315の掘方の可能性もある。覆土には第5・第6層を中心に炭化材が多く含まれる。自然堆積とみられる。遺物 遺構内中央西寄りの覆土下層から多く出土する。器種は壺が多く、甕、器台、高坏、鉢が混じる。鉢は丁寧な作りの大形の小形丸底形2個のうち1個体赤彩、器台は受部二重口縁状で脚部大きく3孔を持ち脚下端短く開くもの1個体他脚部1点、中形壺は直立気味に長く立ち上がる口縁部1個体、高坏は下半丸く外反する脚部片1点、壺は胎土精良だが歪み大きく荒い作りで被熱などにより割かれるように破片化するもの3個体あり、うち内外面に強く粗いミガキで胎土灰色のもの2個体、1個体は胴部外面ナデとケズリで仕上げられ指頭旺盛顕著、突出する平底3個体、平底1個体、甕は胴部外面ハケ整形主体でナデ、ケズリはあまりなく、単口縁1個体、S字1個体、台部5個体である。本遺構の年代は8～9期と考えられる。

SK357 (第52図、図版一〇七)

位置 VII区調査区、Aオ-25-1・6グリッドに位置する。南東にSI355が近接してある。重複 SI353を切る。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-3°-E、規模は長径1.28m、短径0.82m、深さ0.36mである。遺構中央の底面はほぼ平坦で、壁は段を持って外傾して立ち上がる。覆土の状態 第1～第4層であり、第2・第3層に炭化物が含まれる。自然堆積とみられる。遺物 遺構内南側では底面から大きく浮いた位置に壺口縁部がある。北側では壁に接して土器片が出土するほか、底面から浮いた状態で甕が出土する。

器種は大形壺、甗、高坏などであり、甗などの古墳時代前期土器が少量混入する。高坏は大きく有稜の坏部でハケのちナデ・ミガキ調整のもの1個体、甗は鉢形で底部1孔1個体、大形壺は長く直立気味の二重口縁状の口縁部で端部僅かに内湾するもの1個体ほか胴部片、甗は口縁部片1点である。本遺構の年代は中期中葉（TK216段階）前後と考えられる。

#### SK363（第55図、図版一〇七）

位置 VII区調査区、Bオ-3-19-20グリッドに位置する。南にSK377、北にSI359、西にSD350が近接してある。重複なし。形状・規模 平面形は楕円形で、中軸線はN-40°-W、規模は長径1.50m、短径1.31m、深さ0.63mである。底面は小さく平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がるが、上位に緩やかな段を持つ部分もある。覆土の状態 第1～第4層で第2層に炭化物が含まれる。総じて緻密であり、自然堆積とみられる。遺物 遺物は僅かで、鉢片2点、高坏片4点、壺片4点、胴部外面調整ハケ主体にハケ後ケズリも一部にある甗片15点である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SK365（第57図、図版一〇七）

位置 VII区調査区、Bオ-3-9グリッドに位置する。北にSD378が近接してある。重複 東部がSI366に切られる。SD372とも重複しており、SD372に切られるとみられる。形状・規模 東側は不明だが、残存部分からすると平面形は長方形である。中軸線はN-88°-Wで、規模は長径1.87m、短径1.73m、深さは0.16m、底面は緩やかな凹凸はあるがもののおおむね平坦で、壁は丸味を持ってなだらかに立ち上がる。土抗としているが、溝の可能性もある。覆土の状態 粘土粒や粘土ブロックなども含む緻密な黒褐色土（第8-11層）であり、自然堆積とみられる。遺物 器種は甗主体に大形壺、鉢、高坏などが混じる。壺は古相だが、赤彩高坏の形状は新しいように見える。鉢は精製で体部～口縁部に僅かな段を持つ平底でカップ形1個体ほか破片少量、高坏は赤彩でややハの字の脚部で下端大きく開く1個体、ハの字の脚2個体、大形壺は二重口縁2個体、折り返し口縁1個体、突出する平底2個体、平底1個体、甗はS字1個体、直口縁の折り返し状で頸部に継ぎ目が残る中型1個体、台部2個体+αである。本遺構の年代は8～9期と考えられる。

#### SK370（第56図、図版一〇七）

位置 VII区調査区、Aオ-24-11-16グリッドに位置する。北東にSD341が近接してある。重複 SD350に切られる。形状・規模 平面形は長方形で、中軸線はN-62°-E、規模は長径2.02m、短径1.41m、深さは東から西へと深くなる柱穴状の斜めの掘り込みがある。規模等は不明である。覆土の状態 灰褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色土や暗灰褐色土が一定の厚みを持って水平に堆積しており、人為堆積の可能性はある。柱穴部分も土抗覆土と類似する灰褐色粘土ブロックを含む黒褐色土で、柱穴上位の土層に大きな乱れはない。柱穴状の掘り込みを持つ長方形土抗と言えよう。遺物 遺物は古墳時代前期9期頃の鉢、壺、甗であり、混入と考えられる。鉢は小形丸底形1点、壺は2点、短くくの字の口縁部1、甗は胴部外面調整ハケ主体で一部ケズリのもの5点である。本遺構の年代は不明である。遺構の状況から中世の可能性はある。

#### SK371（第58図）

位置 VII区調査区、Aオ-19-4グリッドに位置する。東にSD350が近接してある。重複 SI369を切ると思われるが、覆土上層にはSI369覆土が堆積する。土層のみからするとSI369に切られる可能性がであろう。

**形状・規模** 平面形はやや不整な楕円形で、中軸線はN-48°-E、規模は長径0.59m、短径0.48m、深さ0.34mである。底面は平坦で、壁は短く外傾して立ち上がる。**覆土の状態** 覆土は焼土を含む第17層であり、自然堆積とみられる。**遺物** 器壁厚く精良な胎土で表面赤く断面黒色の古墳時代前期のハケ裏片1点のみである。本遺構の年代は不明だが、古墳時代前期の可能性がある。

S K 3 7 6 (第47図、図版一〇七)

**位置** VII区調査区、Bオ-9-7グリッドに位置する。北東3mにSX323がある。**重複** SI321と西半が重複するが、新旧関係は不明である。**形状・規模** 掘方を持つ柱穴と考える。平面形は円形で、規模は長径0.68m、短径0.59m、深さ0.45mである。断面形は逆台形状で底面は平坦だが緩やかな凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。**覆土の状態** 第1-第8層で、第5層は柱痕であろう。第2-4・6-7層はほぼ水平で粘土主体の層と黒色土層が交互に堆積する人為堆積土であり、掘方内に充填した裏込め土とみられる。第1層も裏込め土の一部か。**遺物** 古墳時代前期のハケ裏片1点のみである。本遺構の年代は不明だが、古墳時代前期の掘方を持つ柱穴の可能性がある。

S K 3 7 7 (第57図、図版一〇八)

**位置** VII区調査区、Bオ-3-19-20グリッドに位置する。東にSP390-391、西にSD379、南にSB395、北にSK363がそれぞれ近接してある。**重複** なし。**形状・規模** 平面形は長方形で、中軸線はN-56°-Wである。規模は長径1.54m、短径1.14m、深さ0.33mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。**覆土の状態** 第1-第3層である。灰白色粘土ブロックを含むが全体に緻密であり、自然堆積とみられる。**遺物** 遺物は僅かで、古墳時代前期とみられる裏片2点、前-中期の壺片2点、超大形甕胴部片3点である。本遺構の年代は古墳時代前期～中期と考えられ、前期に遡る可能性がある。

S K 3 9 4 (第46図、図版一〇八)

**位置** VII区調査区、Bオ-4-13グリッドに位置する。西にSD343、北にSI326が近接してある。**重複** SD362と重複するが、新旧関係は不明である。**形状・規模** 平面形は楕円形で、中軸線はN-19°-Wである。規模は長径0.60m、短径0.47m、深さ0.26mである。底面は丸味を持ち、壁は垂直気味に立ち上がる。**覆土の状態** 不明である。**遺物** なし。本遺構の年代は不明である。

5. 性格不明遺構

S X 2 5 1 (第64図、図版一〇八)

**位置** VII区調査区、Aカ-21-2・3・6-8・12・13グリッドに位置する。西にSX254が近接してある。**重複** なし。**形状・規模** 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-20°-W、規模は長径7.00m、短径5.20mである。**覆土の状態** 不明である。**遺物** 標高は24.3-24.4m前後であり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく、甕主体に大形甕、中形甕、高環などが僅かに混じり、炉器台や鉢もある。鉢は薄手で緩く外反する口縁部片1点、中形甕は球脚で凹み底1個体ほか長い直口縁の口縁部あり、高環は脚端部片1点、大形甕は突出する平底2個体、平底1個体、胴部片あり、甕は形状の崩れたS字3個体+α、単口縁1個体+α、台部1個体+α、炉器台はほぼ完形で台付甕台部に極め

てよく似た作りのもの1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX252 (第64図)

位置 VII区調査区、V区北端、Aオ-25-20・25、Aカ-21-16・17・21・22グリッドに位置する。東にSK253、北東にSI265、西にSK278がそれぞれ近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-32°-E、規模は長径7.30m、短径4.70mである。

覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.3-24.4m前後であり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、甕主体に大形壺、高坏、ミニチュア土器が混じる。小形壺は僅かである。小形壺は胴部片数点、内外面赤彩の破片数点、中形壺は破片数点、高坏は上端のみ中実の棒状脚で下端は屈曲するもの1個体、内外面赤彩の坏部片、脚部片ほか破片少量、大形壺は伊勢型状に大きく開く二重口縁1個体、突出する平底2個体+αほか胴部片多数、甕はS字15点、単口縁10点、台部3個体、平底4個体、甕形の小形土器は外面ハケでミニチュアより少し大きく口縁歪む広口甕形1点、ミニチュアは鉢形3個体、壺形かと思われるもの1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX254 (第64図、図版一〇八)

位置 VII区調査区、Aカ-21-6・11グリッドに位置する。周辺に遺構は少なく、東にSX251が近接してある。

重複なし。形状・規模 平面楕円形の小規模な遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-40°-W、規模は長径0.65m、短径0.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.3-24.4m前後であり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで古墳前期土器主体に中期前葉～中葉の土器が少量混じる。前期はハケ甕片ばかりでS字1個体、中期は被熱する内斜口縁碗片である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX260 (第65図)

位置 VII区調査区、Aカ-16-19・20・24・25グリッドに位置する。北にSX261が近接してある。重複なし。

形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-68°-E、規模は長径3.90m、短径2.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.2-24.4m前後であり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、器種は甕主体に大形壺、高坏が少量ずつ混じる。器台、ミニチュア土器は各1点のみである。器台は脚部片1点のみ、高坏は長い棒状の脚部で上半中実、下半丸く開き、坏部は小さく有稜でハの字に開く1個体ほか破片2点、大形壺は頸部片、胴部片、底部片など数点のみで突出する平底2個体、甕は薄手で球胴主体であり基本的に台付甕とみられる。S字はなく単口縁3個体、台部4個体+α、少し厚手の単口縁ケズリ甕1個体、単口縁で口縁端部斜めに面取り1個体、口縁部受口状2個体、小形単口縁台付甕1個体、ミニチュア土器で壺形かと思われるもの1個体である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### SX261 (第65図、図版一〇八)

位置 VII区調査区、Aカ-16-24・25、Aカ-21-5グリッドに位置する。南にSX260が近接してある。

重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-58°-E、規模は長径2.80m、短径1.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.35-24.45m前後であり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は甕、壺、鉢など僅かであり、鉢は小形丸底形1

個体、小形壺は胴部片1点、中形壺は直口縁1個体、大形壺は折返し口縁1個体、直口縁1個体、平底1個体、突出する平底1個体、台付甕は単口縁1個体である。本遺構の年代は9期前後と考えられる。

#### SX266 (第65・88～90図、第105表、図版一〇八・一一〇九・一二二)

位置 Ⅷ区調査区、Aカ-16-8グリッドに位置する。西にSX279が近接してある。重複なし。形状・規模 平面円形の特に遺物量の多い遺物集中であり、規模は長径3.50m、短径3.00mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.22-24.37mであり、出土層位はⅣ層中位に相当すると推定される。平面的には中心部分に特に多い。遺物は多く、器種は壺が主体で高環、埴も多く、甕はない。石製模造品も多数出土する。埴は7個体+αあり深身が多いが浅身もあり、内斜口縁は6個体うち平底1個体(1)、雑な作りの平底1個体(2)、丸底4個体(3・4)で、被熱のためか外面赤褐色のもの3個体、明褐色3個体である。須恵器蓋模倣環状に口縁部直立し丸底で内面一部赤褐色は1個体(5)ある。小形壺は13個体で、平底4個体(7)、平底で中央大きく凹む1個体(8)、なだらかな平底1個体、胴部潰れた平底1個体(9)、小さい平底4個体(10・11)、丸底1個体(12)、平底で胴部縦長1個体(13)、蓋は小形壺形で胎土は他の小形壺にない砂っぽいもの1個体(6)、中形壺は6個体で直口縁多く、凹み底1個体(16)、上端須恵器蓋模倣環状に段あり丸い平底1個体(15)、赤彩平底1個体(14)、平底1個体、凹み底1個体、丸底1個体、高環は10個体+αあり環部は大きく有稜で脚部は中空柱状であり棒状に近いものはない。環部浅く有稜1個体(20)、環部下端の稜が鈎状に水平に突出する1個体(17)、脚部上半ハの字に開き下半丸く外反して開く1個体(18)、脚部下半屈曲して大きく水平に近く開く4個体(23・24)、脚部下半屈曲してハの字に開く3個体(19・21)、脚部下半屈曲して内湾して開く1個体(22)、脚部下半重口縁状に開く1個体(25)、大形壺は4個体+αで、重口縁状2個体(26)、長くハの字に開く単口縁1個体、口縁部形態不明大形壺1個体(27)、突出する平底1個体、ミニチュア土器は壺形1個体(29)、鉢形3個体(28)である。

石製模造品は製品では円盤4点〔2孔1(30)、1孔2(31・32)、無孔1(33)〕、剣形12点〔鑄有5(34・35・36・37・38)、鑄無・整形3(39・40・41)、不整形・有孔3(42・43・44)、不整形無孔1(45)〕、刀子形1点(46)、白玉1点(47)、未製品は整形・研磨あるもので11点(円盤2、剣形3、白玉?1、不明5)、剥片類は60点である。本遺構の年代は中期中葉(TK216段階)か中期後葉(TK208段階)にかかる時期と考えられる。祭祀的な遺構であろう。

#### SX269 (第62図)

位置 Ⅷ区調査区、Aカ-22-17・18グリッドに位置する。北西3mにSX270がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.60m、短径0.50mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.16-24.23mであり、出土層位はⅣ層下位に相当すると推定される。遺物は少なく、古墳時代前期の大形壺1個体のみである。口径は小さく頸部括れ口縁部は大きく外反し胴部丸く張る、胴部外面ハケのちミガキ調整で赤彩だがほとんど剥落している。本遺構の年代は古墳時代前期と考えられる。

#### SX270 (第62図)

位置 Ⅷ区調査区、Aカ-22-17グリッドに位置する。南東3mにSX269がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.65m、短径0.10mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.16-24.22mであり、出土層位はⅣ層下位に相当すると推定される。遺物は中形壺と大形壺底部片のみであり、中形壺は一部欠で胴部丸くつぶれ凹み底で口縁部は内面が内湾し外面は有段

状でS字に似た形1個体、大形壺は外面縦方向の密なミガキを施す平底の底部片である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX271 (第62図、図版一〇九)

位置 VII区調査区、Aカ-22-11グリッドに位置する。南にSI264が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.26mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は甕形ミニチュア土器で明橙色胎土の1個体のみである。本遺構の年代は前期と考えられるが、中期の可能性もある。

#### SX272 (第64図、図版一〇九)

位置 VII区調査区、Bカ-1-6・7グリッドに位置する。北西にSK268、南にSI265がそれぞれ近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.23-24.25mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は少なく、甕主体に鉢が僅かに混じるもので、鉢は大形の小形丸底形でミガキはないが丁寧にココナデが施される1個体ほか体部-底部片など少量、甕は単口縁で上半右下がり斜位、中位横、下半右下がり斜位のハケのもの1個体、S字はハケ整形で胴部ココナデあり1個体、台部は内面下端折返して底部内外面砂貼付1個体、平底1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

#### SX277 (第65図)

位置 VII区調査区、Aカ-11-12・16・17グリッドに位置する。南東3mにSX306がある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-56°-W、規模は長径4.00m、短径2.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.16-24.17mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。器種は大形壺、甕、高環が多く、鉢、ミニチュアが僅かに混じる。鉢はきれいな小形丸底形で内外面ミガキ1個体、やや大形の破片1点、中形壺は凹み底1個体、高環は中実柱状の脚部で下半二段に開く1個体、坏部小さく有稜3個体、大形壺は折返し状の二重口縁多く単口縁少しあり、二重口縁3個体+ $\alpha$ 、くの字襷縁の単口縁1個体、口縁部直立気味に立ち上端短く外板して開く1個体、頸部突帯を持ち胎土特徴的に砂多い1個体、底部は突出する平底1個体、甕は胴部外面調整はハケあるがナデも多く、S字1個体、単口縁1個体、台部3個体+ $\alpha$ 、平底1個体で台部外面ハケのものあり、ミニチュア土器は甕形1個体、鉢形(小形)1個体である。小形丸底鉢は精製で甕はハケ調整が少なく、壺は二重口縁が多いが段は不明瞭となっている。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX279 (第65図、図版一〇九)

位置 VII区調査区、Aカ-16-7グリッドに位置する。東にSX266が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-74°-W、規模は長径2.20m、短径1.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.25-24.28mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。遺物は僅かで甕、壺、高環片などであり、高環は小破片のみ、大形壺は段の小さい二重口縁や折返し口縁状で内面僅かに段があるものなど、甕は胴部外面の整形はハケもあるがナデ、ケズリが多く施され口縁部は形状の崩れたS字や単口縁などあり、台付甕台部で内面下端折返しなし1個体、凹み底1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。



SX280 (第64図、図版一一〇)

位置 VII区調査区、Bカ-1-12グリッドに位置する。北西にSX335が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.00m、短径0.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.23-24.30mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は僅かで甕、大形壺、埴などのみであり、埴は口縁部内斜で深身、一部被熱1個体、大形壺は胴部片、甕は丸く外反する単口縁で胴部外面ハケ整形、前期の甕のような胎土のもの1個体、厚手で丸く外反する口縁部で胴部外面ケズリ1個体である。本遺構の年代は、主に埴の状況から中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。中期前葉寄りであろうか。

SX281 (第64図、図版一一〇)

位置 VII区調査区、V区北端、Bオ-5-15・20グリッドに位置する。北にSD255・383、南にSD340、SX282が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.50m、短径0.35mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27-24.30mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は壺と高環のみと僅かであり、高環は脚部太いハの字状で下端は短く屈曲して開き環部有稜1個体、大形壺は口縁部やや長く、丸く外反するものである。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX282 (第64図、図版一一〇)

位置 VII区調査区、Bオ-5-15グリッドに位置する。北にSD255・383、SX281が近接してある。重複 SD340の範囲内にある。SD340の出土遺物の可能性が高い。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27mである。遺物は僅かで、ほぼ完形の北武蔵型で底部はケズリで丸い平底1個体他片断数点あり、古墳時代前期の土器片が少し混じる。本遺構の年代は9世紀中葉と考えられる。

SX283 (第64図、図版一一〇)

位置 VII区調査区、Bオ-5-4グリッドに位置する。西にSI330、南にSX284が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.20mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は甕と高環のみと僅かであり、高環は上端のみ中実の柱状の脚部で下半が2段に開くもの1個体、甕は台付甕で外面胴部下半ケズリのものである。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX284 (第64図、図版一一〇)

位置 VII区調査区、Aオ-25-24グリッドに位置する。北にSX283が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.50m、短径0.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.17-24.19mであり、出土層位はIV層下位に相当すると推定される。遺物は大形壺と甕のみと僅かで、大形壺は二重口縁の破片で外面ハケのちなデ、端部垂直気味に面取りし上につまみ上げ1個体、甕は胴部外面ハケ整形主体で単口縁とS字あり、台部2個体+α、単口縁1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX285 (第64図、図版一〇〇)

位置 VII区調査区、Aオ-25-14グリッドに位置する。北にSK278が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.50m、短径0.35mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27-24.38mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は甕と甕のみで甕かであり、小破片はほとんどない。甕は底部1孔の完形1個体、甕はS字甕の口縁-胴部上半片で胴部外面ハケ整形1個体、単口縁で口縁部上半片に直立気味となり内面丸く反し胴部外面ハケのケズリ1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX286 (第64図、図版一〇〇)

位置 VII区調査区、Aオ-25-9グリッドに位置する。南西にSI354A・354Bが近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.41mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は径8.5cmの深身な鉢形のミニチュア土器のみで、内外面とも底部はケズりで口縁部ヨコナデ1個体である。本遺構の年代は9-10期と考えられる。

## SX287 (第64図、図版一〇〇・一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-25-8グリッドに位置する。東3mにSX286がある。重複 SI354Aの範囲内にある。SI354A上層の遺物と考えられる。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径2.20m、短径0.90mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.30-24.49mであり、出土層位的にはIV層中位-上位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、甕、甕主体に碗が僅かにある。碗の形態は様々だがすべて深身とみられ、内斜口縁2個体、須恵器蓋摸倣坏状に口縁部上位に段あり1個体、口縁部下半反し上半内湾でおそらく平底1個体、ハの字に開く体-口縁部1個体、大形甕は口縁部須恵器甕風に沈線入り上端つまみ上げて底部突出する平底1個体、超大形甕は胴部上半-底部片で最大径40cmくらいあり突出する平底のもの1個体、甕は口縁部く字で端部斜めに面取りされる球胴の口縁部-底部1個体、やや長い胴部で口縁部ハの字に開き底部丸底の口縁部-底部1個体である。本遺構の年代は中期前葉-中葉(TK73~216段階)と考えられる。中期前葉寄りであろうか。

## SX288 (第64図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-25-4・9グリッドに位置する。東3mにSX286がある。重複 SI354Aの範囲内にある。SI354A上層の遺物と考えられる。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.38mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は大形甕片、高環脚部のみと僅かであり、古墳時代前期の台付甕、甕、高環片が混じる。高環は中空柱状の太く短めの脚部で下半屈曲して開き内面は紐柱み痕顕著である。本遺構の年代は中期中葉-後葉(TK216~208段階)と考えられる。中期中葉寄りであろうか。

## SX289 (第64図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-25-3グリッドに位置する。南東4mにSX290がある。重複 SI354Aの範囲内上層にある。SI354Aの遺物の可能性もある。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.39mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は高環のみと僅かである。高環は脚部ラッパ状に開き下端で短く屈曲して開き3孔のもの1個体、長く太い中空柱

状の脚部で下端が屈曲する大形のもの1個体である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX290 (第64図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-20-23グリッドに位置する。北にSI354Bが近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.35mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.44-24.50mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく高環、大形壺、甕からなり、高環は中空柱状の脚部で内面螺旋状の強いナデ、大形壺は胴部片、甕は胴部片と台付甕台部で台部は小さくハの字に開く。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX291 (第62図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-20-17・18グリッドに位置する。西にSX292が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.40m、短径0.70mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.48-24.32mであり、出土層位はIV層中位-上位に相当すると推定される。遺物は僅かで器種は高環、甕、壺、中形壺、小形壺、ミニチュア土器からなる。小形壺は赤彩破片、中形壺は直立してハの字に開く口縁部1個体、高環は中実柱状の脚部で下半屈曲して開くもの、甕は胴部片、甕はハケ甕などの胴部片で小さくハの字に開く台部1個体、平底1個体、ミニチュア土器は甕形かとみられるものである。本遺構の年代は10期と推定される。

SX292 (第62図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-20-17グリッドに位置する。東にSX291が近接してあるほか、西3mにSX293がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.70m、短径0.55mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.38-24.47mであり、出土層位はIV層中位-上位に相当すると推定される。遺物は少なく、器種は甕片主体に鉢が僅かにある。胴部外面ハケ調整の甕はあるが、碗はない。鉢は小形甕形で口縁部はくの子で鉢にしては深身のもの、甕は外面ハケのちケズリで前期系統の単口縁甕があり、長い単口縁が1個体ある。本遺構の年代は10期末と考えられるが、中期初頭の可能性もあろう。

SX293 (第62図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-20-16グリッドに位置する。北東にSI355が近接してあるほか、東3mにSX292がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中で、集中範囲の規模は長径0.80m、短径0.30mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.44-24.48mであり、出土層位はIV層中位-上位に相当すると推定される。遺物は僅かで高環と壺片のみであり、高環は中空柱状脚で下端で屈曲し環部下端は段のような有稜1個体、棒状の脚部1個体、壺は折返し状の口縁で上端斜めにつまみ上げられ内外面沈線状に凹むもの1個体である。本遺構の年代は10期末と考えられるが、中期初頭の可能性もあろう。

SX294 (第62図、図版一一一)

位置 VII区調査区、Aオ-19-15グリッドに位置する。西にSD351が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.60mである。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.33-24.34mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は大型

壺のみと少なく、大形壺は折返し口縁で口縁部径極めて大きく丁寧な作りでミガキ調整1個体、頸部細く球胴で胴部外面調整ナデとみられるもの1個体ほか突出する平底片などである。本遺構の年代は10期末と考えられるが、中期初頭の可能性もあろう。

#### SX296 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-6グリッドに位置する。北東2mにSI352がある。重複 SI353の範囲内上層にある。SI353の遺物の可能性がある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.10m、短径0.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.32-24.35mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく、甕主体に高環が僅かにある。高環は坏部片2点うち1点有稜、甕は厚手な球胴で突出する平底1個体、厚手な単口縁で胴部外面ナデ・ケズリ1個体である。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。

#### SX297 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-1グリッドに位置する。南東にSI355が近接してある。重複 SI353の南東壁付近上層にあり、SI353の遺物の可能性もある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.40m、短径0.25mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.36-24.41mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は甕、中形壺、高環、埴などである。鉢は作り荒く不整な凹み底で体部は下膨れであり体-口縁部が直立し茶碗のような形状1個体、内斜口縁の破片1点、中形壺は球胴の胴部片、高環は脚部上半のみ中実の棒状の脚部で内面は上端尖るようにケズリ、甕は外面ナデ・ケズリの胴部片のほか平底1個体、突出する平底1個体である。本遺構の年代は10期末と考えられるが、中期初頭の可能性もあろう。

#### SX298 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-2グリッドに位置する。北東3mにSI354Aがある。重複 SI355範囲内の上層にあり、SI355とは直接関連しない遺物とみられる。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.35mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.38-24.41mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。SI355覆土上位に堆積する上層中の遺物であろうか。遺物は僅かで、甕主体に高環と埴が少量ずつある。埴は内斜口縁2個体、高環は中実棒状の脚部1個体ほか破片少量、甕は厚手のナデ甕で一部ハケを施すものである。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。

#### SX299 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-1・6グリッドに位置する。北西にSX296、南東にSK357が近接してある。重複 SI353の範囲内上層にある。SI353の遺物の可能性がある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.80m、短径1.20mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.36-24.37mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、甕主体に埴と高環が僅かにある。埴は半球状で体部上端に僅かに段を持ち口縁部直線的に立ち上がるもの1個体、高環は破片僅か、甕は厚手なナデ甕片のみでケズリを施すものもある。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。

SX300 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-12グリッドに位置する。北西3mにSX302がある。重複 SI352の範囲内上層にあり、SI352出土遺物の可能性がある。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態不明である。遺物 標高は24.32mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は高環のみである。高環は上半のみ中実の長い棒状の脚部1個体、ハの字に開き下端で開く脚部で内外面ハケ調整1個体、小さい有稜の環部底面3個体である。本遺構の年代は9期新相と考えられる。

SX301 (第64図、図版一一二)

位置 VII区調査区、Aオ-25-22、Bオ-5-2グリッドに位置する。北にSI330が近接してある。重複 SI330南西部と重複するが、本遺構覆土より上層にあるため直接関連しないとみられる。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-13°-W、集中範囲の規模は長径2.40m、短径2.00mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27-24.44mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。器種は大形壺と甕主体に高環、中形壺があり、古墳時代前期土器が僅かに混入する。中形壺は口縁部片と胴部片1個体+α、高環は柱状の脚部で下半が屈曲し環部は大きく有稜1個体、太めの脚部で下半は屈曲し大きく開く2個体、甕は寸胴で下半直線的にすぼまる無底式であり作りはやや荒い1個体、大形壺は二重口縁状で口縁-底部までであるもの1個体、前述のものと同じ二重口縁の口縁部片1個体、甕は単口縁で大型厚手2個体がある。本遺構の年代は中期前葉～中葉(TK73～216段階)と考えられる。中期中葉寄りであろうか。

SX302 (第64図、図版一一三)

位置 VII区調査区、Aオ-25-16・17グリッドに位置する。南東3mにSX300がある。重複 SI352の範囲内上層にあり、SI352出土遺物の可能性がある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.70m、短径0.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.35-24.39mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は高環と鉢のみである。鉢は完形の小平丸底形1個体、凹み底1個体、高環はSX300出土高環と似たハの字に開く脚部で下半が開く形状のもの1個体である。本遺構の年代は9期新相と考えられる。

SX303 (第64図、図版一一三)

位置 VII区調査区、Bカ-1-1、Aカ-21-21グリッドに位置する。西にSX327が近接してある。重複 なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.00m、短径0.60mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27-24.32mであり、出土層位はIV層下位～中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、高環主体に壺・甕片が混じる。高環は僅かにハの字に開き上半のみ中実の脚部1個体、棒状の脚部で細く長い中空のもの1個体、稜のない環部で赤黒い胎土のもの1個体、大形壺は胴部片、甕は胴部外面調整がハケ主体にナデ、ケズリを施す破片である。本遺構の年代は10期と考えられる。

SX304 (第65図、図版一一三)

位置 VII区調査区、Aオ-25-9・10グリッドに位置する。南にSX305が近接してある。重複 なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.60m、短径1.10mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.03-24.11mであり、出土層位はIV層下位～中位に相当すると推定される。遺物

は少なく、器種は厚手の甕主体に中形壺、高坏、甗が混じる。中形壺は赤褐色胎土の胴部片1個体、高坏は薄手精製の坏部で作りシャープであり鋭利な有稜で胎土赤褐色のもの1個体、甗は厚手な大形の鉢形で底部に大きな1孔のもの1個体、甕は厚手で大形の胴部片1個体、厚手で丸い頸部1個体である。このほかやや古い様相で混入の可能性がある土器が少量あり、甕はS字で胴部外面ハケ調整のみでナデ、ケズリなし1個体、鉢は荒い作りの小形丸底形1個体、ほか甕・壺片少量である。本遺構の年代は中期前葉（TK73段階）と考えられ、古相の遺物は混入したものと捉えることとする。

#### SX305（第65図、図版一一三）

**位置** VII区調査区、Aオ-25-4・9グリッドに位置する。北にSX304が近接してある。**重複** なし。**形状・規模** 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.80m、短径0.45mである。**覆土の状態** 不明である。**遺物** 標高は24.02-24.04mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。遺物は僅かで器種は甕のみである。甕は少し白っぽいなめらかな胎土でくの字口縁、厚手で外面は細かいハケのちナデ、ケズリを施すもの1個体である。本遺構の年代は中期前葉（TK73段階）と考えられる。

#### SX306（第65図、図版一一三）

**位置** VII区調査区、Aカ-11-11グリッドに位置する。北東3mにSX277がある。**重複** なし。**形状・規模** 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.50m、短径0.45mである。**覆土の状態** 不明である。**遺物** 標高は24.04-24.08mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。遺物は少なく、器種は甕主体に中形壺、高坏、大形壺が僅かにあり、ほかに9世紀代の焼成不良の須恵器坏片1点が混入する。中形壺は口縁部片、高坏は中実柱状の脚部片など、大形壺は胴部片、甕は厚手で単口縁2個体、薄手でくの字1個体である。S字甕片数点と台部2個体は混入だろう。本遺構の年代は中期前葉～中葉（TK73～216段階）と考えられる。中期前葉寄りであろうか。

#### SX307（第63図、図版一一三）

**位置** VII区調査区、Bオ-3-15グリッドに位置する。北東にSB395の柱穴であるSK367が近接してある。**重複** SB395の範囲内にあるが遺構とは関連せず、SB395以後の遺物とみられる。**形状・規模** 小規模な遺物集中である。**覆土の状態** 不明である。**遺物** 標高は24.40-24.43mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は高坏、ミニチュア土器のほか甕、大形壺片である。高坏はほぼ完形で坏部小さな有稜で脚部は細長くハの字に開き下端短く外反するもの1個体、大形壺片は胴部片、甕は胴部外面ハケ整形主体で厚手の甕片も少量あり、S字3点、ミニチュア土器は台付甕形1個体である。本遺構の年代は10期末と考えられるが、中期初頭の可能性もあろう。

#### SX308（第63図、図版一一三）

**位置** VII区調査区、Bオ-3-24・25グリッドに位置する。北東にSX309が近接してある。**重複** SI359の範囲内の上層にあり、SI359とは直接関連しない遺物の可能性が高い。**形状・規模** 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-23°-W、規模は長径4.40m、短径3.30mである。**覆土の状態** 不明である。**遺物** 標高は24.44-24.53mであり、出土層位的にはIV層中位-上位に相当すると推定される。SI359覆土上位に堆積する土層中の遺物であろうか。遺物は多く、器種は甕主体に高坏、大形壺が多くあり、鉢、中形壺は僅かで器台は1点のみである。S字甕や器台は混入かとも思われるが、本遺構に

伴う可能性も否定できないのではないかと考えた。鉢はハの字に直線的に開く大型のもので下半に沈線あり、小形丸底形の退化したものとみられるもの1個体、器台は直線的に外傾して開く口縁部の受部片で内面赤彩のもの1点、埴は須恵器蓋椀椀状の口縁部で丸底かとみられるもの1個体、中形壺は胴部片、直立する口縁部片など数点、高環は環部は有稜、脚部は中空柱状でやや太く短めであり下端で平らに大きく開く形が多い。環部は7個体+α、脚部は7個体+αうち中空柱状の脚部上半1個体、下半で大きく水平に開く1個体、大形壺はくの字裏風の口縁部でハケ整形1個体、短く二重口縁状で内面に段あり北陸系の裏のような形状1個体、折返し口縁状で荒い作り1個体、長くハの字に開く単口縁で口縁-底部までであるもの1個体、突出する平底3個体のうち2個体は木炭痕あり、裏はS字が胴部外面調整ハケのほかナデ、ケズリありで、口縁部上半が長く伸びる形状の崩れたもの4個体、台部1個体である。厚手な単口縁は8個体、突出する平底2個体、やや薄くハケ使用の前期の裏のようなもの1個体、小形でシャープなくの字でケズリ多用しやや長胴1個体、単口縁で口唇部内側に内湾する布留裏風のもの1個体、口縁部くの字で上半が屈曲して外反1個体、それ以外の厚手な単口縁4個体、ミニチュア土器状の底部片1点である。本遺構の年代は中期前葉（TK73段階）でも古相と考えられる。中期初頭と言えようか。

#### SX309（第63図、図版一一四）

位置 VII区調査区、Bオ-8-5グリッドに位置する。南西にSX308が近接してある。重複 SI359の範囲内の上層にあり、SI359出土遺物の可能性がある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.50m、短径0.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.37mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく、器種は裏主体で大形壺も多い。大形壺は広口の単口縁1個体、やや小さめの単口縁でなで肩のハケ整形1個体、二重口縁1点、超大形らしい厚手の破片1点ほか胴部片少量、裏は胴部外面ハケ整形主体でケズリやナデ入り、S字は2個体、単口縁1個体である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX310（第63図、図版一一四）

位置 VII区調査区、Bオ-8-4・21グリッドに位置する。東にSD343、SX324が近接してある。重複 なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.31-24.36mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで裏と鉢のみであり、鉢は小形丸底形で口径大きく口縁部短め1個体、裏は形状の崩れたS字で胴部外面ハケ1個体ほか胴部片少量ある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

#### SX311（第63図、図版一一四）

位置 VII区調査区、Bオ-8-9・10グリッドに位置する。東にSI364が近接してある。重複 なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.45m、短径0.40mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.40-24.41mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく器種は裏がほとんどで、ほか大形壺片1点、埴とみられる破片1点、中形壺1点のみである。埴は半球状の口縁部片1点、中形壺は直立する口縁部片1点、大形壺は折返し口縁状の口縁部片1点、裏は口縁部くの字で頸部僅かに丸くやや厚手で胴部外面細かいハケのちナデ、底部平底でやや下膨れの形状2個体である。遺物の時期はSX305に近いものとみられる。本遺構の年代は中期前葉～中葉（TK73～216段階）と考えられ、中期前葉寄りの可能性がある。

## SX312 (第63図、図版一一四)

位置 VII区調査区、Bオ-9-11グリッドに位置する。西にSI360、SD343が近接してある。重複なし。

形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.27mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで、甕片主体に大形甕片、高坏片があり、中期の甕は見当たらない。高坏は坏部片や胴部片3点で脚部は下半で丸く開くタイプだろう。大形甕は胴部片少量、甕は胴部外面ハケ整形のほかナデ、ケズリのもあり、S字1点、台部1点、平底1点がある。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## SX313 (第63図、図版一一四)

位置 VII区調査区、Bオ-9-12・13グリッドに位置する。近接する遺構はなく、SX312・314・323がそれぞれ5mほどの距離を置いて周囲にある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.00m、短径0.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.30-24.35mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで器種は甕、大形甕、中形甕、高坏のみであり、中形甕は口縁部内湾し外面細かいハケ1個体、高坏は脚部片1点、大形甕は胴部片、甕は薄手で胴部外面ハケ整形の破片である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

## SX314 (第63図、図版一一四)

位置 VII区調査区、Bオ-9-17グリッドに位置する。近接する遺構はなく、それぞれ5mほどの距離を置いて南西にSX312、南東にSX313がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.80m、短径0.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.34-24.38mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで器種は甕、中形甕などのみであり、中形甕は薄手で球胴の破片5点、甕は薄手のハケ甕多く胴部外面にハケ整形のちナデ、ミガキ多く入る破片10点、中期の甕のような厚手の甕片3点である。本遺構の年代は、前期系統の薄手なハケ甕が多いものの中期の厚手な甕もあることから10期ないし中期初頭と考える。

## SX316 (第63図、図版一一四)

位置 VII区調査区、Bオ-5-21グリッドに位置する。南にSI334が近接してある。周囲に3-4mの距離を置いてSX317・320・333がある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-70°-E、規模は長径2.00m、短径1.00mである。覆土の状態 不明である。

遺物 標高は24.28-24.35mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、器種は甕主体に大形甕、高坏、鉢が僅かに入る。鉢は薄手の小形丸底形で口縁部二重口縁状1点あるが、混入かもしれない。埴は小形甕のような形状で内斜口縁のように短くくの字の口縁部で外面被熱1個体、中形甕は胴部ほぼ完存し胎土柔らかく凹み底で胴部は扁平な円形で頸部極めて細い1個体、高坏は大形のしっかりした作りの有椀で完形の坏部1個体、太い中空柱状の脚部片で下半で屈曲し大きく開き内面紐積み痕顕著1個体ほか脚部片など破片少量、大形甕は長くラッパ状に開く口縁部で内外面赤彩1個体、甕は厚手のナデ甕で底部平底で単口縁1個体、中形のやや長い胴部で頸部丸く丸底状のナデ甕1個体、口縁部-胴部上半の破片で厚手のナデ甕で口縁部丸いもの1個体である。台付甕台部片は3点あるが、混入であろうか。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられ、前期の様相を示す土器が僅かに含まれる。



SX317 (第64図、図版一一五)

位置 VII区調査区、Bオ-5-22グリッドに位置する。西3mにSI334、SX316がある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-6°-W、規模は長径2.20m、短径0.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.25-24.29mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく、器種は大形壺主体に甕片少量あり、高環は僅かである。高環は脚部片でおそらく棒状で下半2段に開くもの2点、大形壺は突出する平底で底部-胴部下半1個体、甕は胴部外面ハケ整形のほかケズリ、ナデの破片があり、S字1個体、僅かにS字のように屈曲する単口縁1個体である。本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX318 (第64図、図版一一五)

位置 VII区調査区、Bオ-5-18グリッドに位置する。南にSD255が近接してあるほか、東4mにSX322がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中である。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.30mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく、器種は壺と甕のほか高環が僅かにあり、高環は中空柱状の脚部片1点、環底部小さく有種の破片1点、脚端部片1点、壺は口縁部ハの字に開き上端で受口状に直立し欠損部被熱のため支脚転用かとみられるもの1個体、ハの字に開くもの1個体、甕は中期の厚手な甕はないが、やや厚いハケ甕があり、単口縁で胴部外面はナデ、ケズリのほかハケが施されるもの2個体がある。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

SX319 (第64図、図版一一五)

位置 VII区調査区、Bオ-10-3グリッドに位置する。北東側は調査区外であり、近接する遺構はない。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.28-24.29mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。層位と周囲の同種の遺構の状況などからすると本遺構の年代は古墳時代前期~中期と推定されるが、出土遺物が確認できないため詳細は不明である。

SX320 (第64図、図版一一五)

位置 VII区調査区、Bオ-10-1グリッドに位置する。南3mにSX316がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.55m、短径0.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.33-24.34mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで器種は壺片主体に甕片が僅かにあり、大形壺は明確な段を持つ二重口縁の口縁-胴部1個体、甕は厚手な単口縁1点である。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

SX322 (第64図、図版一一五)

位置 VII区調査区、Bオ-5-24グリッドに位置する。南にSD255が近接してあるほか、西4mにSX318がある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.55m、短径0.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.11-24.24mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は壺と高環主体に甕が僅かに含まれ、高環は二重口縁1個体、小さく有種の環部1個体、中実棒状の脚部で棒状部分10cmくらいで少し短め1個体、中空柱状の脚部で中央が膨らむエンタシス状1個体、大形壺は胴部-底部で突出する平底1個体、ハの字に開く口縁部1個体、

突出する平底1点、甕は口縁部片と薄手な胴部片である。本遺構の年代は、中実柱状の高環などから中期前葉（TK73段階）前後と考えられる。

#### SX323（第63図、図版一一五）

位置 VII区調査区、Bオ-9-8グリッドに位置する。北東3mにSX338、南西4mにSI321、SK376、北西5mにSX313がそれぞれある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.90m、短径0.60mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.29-24.32mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで器種は甕片主体に大形甕、高環、埴、中形甕、小形甕が僅かに含まれ、中期的な様相の土器の中に前期系統のものが混じる。小形甕は平底で小形丸底の可能性もあるもの2点、中形甕は球胴に近い胴部片1個体、高環は坏部片2点、脚部片1点、大形甕は突出する平底片1点ほか胴部片僅か、甕は胴部は薄く外面ハケ整形のものほか厚手、やや厚手な破片もあり、S字2点、単口縁1点、台部2点、厚手な口縁部片1点がある。本遺構の年代は10期ないし中期前葉（TK73段階）と考えられる。

#### SX324（第63図、図版一一五）

位置 VII区調査区、Bオ-4-22グリッドに位置する。西にSD343、SX310、東にSP392が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-41°-W、規模は長径2.30m、短径1.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.12-24.23mであり、出土層位はIV層下位-中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり器種は甕主体に高環、大形甕、中形甕が混じる。中形甕は胴部片や口縁部片など数点、鉢は小形丸底形のような体部片1点、高環は中実棒状やや長めの脚部で下半屈曲して開く1個体、上半のみ中実棒状で下半屈曲して開く脚部1個体、坏部有稜の破片2点、丸く立ち上がる坏部1点、大形甕は二重口縁1点ほか胴部片僅か、甕は胴部外面ハケ整形主体でナデ、ケズリ多く入り、中期的な様相の甕はなく、形状の崩れたS字5点、単口縁15点、台部8個体+α、平底3個体、小形甕の口縁部2点である。本遺構の年代は10期末と考えられる。

#### SX325（第63図）

位置 VII区調査区、Bオ-9-6グリッドに位置する。西にSI364が近接してある。重複なし。SI364と近接しており、SI364に関連する遺物の可能性はある。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径0.50m、短径0.30mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.29-24.33mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は鉢片主体に壺片と甕片が少量ずつある。大形鉢は口径大きく口縁部くの字で凹み底の薄手な精製のもの1個体、中形甕は薄手な口縁部片、甕は二重口縁破片1点、甕はやや厚手なハケ甕片10点である。本遺構の年代は10期と考えられる。

#### SX327（第64図、図版一一五）

位置 VII区調査区、Bオ-5-5、Bカ-1-1、Aカ-21-21グリッドに位置する。東にSX303が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-36°-W、規模は長径1.80m、短径0.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.31-24.38mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、器種は甕主体に高環がある。高環は中実柱状の脚部でおそらく上半のみ中実で下半中空のもの1個体、ほか坏部片、脚部片数点、甕は中形の薄

手で胴部外面ハケ主体にナデ、ケズリを施し口縁部丸く外反2個体、大形の薄手で胴部外面ハケ主体にナデ、ケズリを施し口縁部丸く外反1個体、台部は内面端部折返しなしのもの3個体、少し厚手な胴部少量、器種不明として直立する口縁部で径は小さめ、外面ハケのちヨコナデで鉢ともみられるもの1個体がある。甕は前期と中期のちょうど中間的な様相を示すとみられ、本遺構の年代は10期末と考えられる。

#### SX331 (第63図)

位置 VII区調査区、Aオ-24-22グリッドに位置する。北にSD255・383、南にSD340が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-88°-W、規模は長径1.70m、短径0.90mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.18-24.30mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで、器種は甕主体に大形壺、鉢、高環、中形壺が混じる。鉢は小形丸底形で調整はナデとミガキそれぞれの破片2点、中形壺は胴部片、高環は環部、脚部片5点くらいで内外面赤彩の環部片あり、大形壺は平底1個体、頸部1個体ほか胴部片、甕は前期系統のハケ甕のほか中期的な厚手な甕があるがS字はなく、薄手の単口縁のハケ甕で胴部外面ケズリ施すもの2個体、厚手のナデ甕で単口縁2個体、突出する平底1個体である。本遺構の年代は前期末-中期初頭と考えられる。

#### SX332 (第63図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bオ-4-18グリッドに位置する。西にSI326、SD362が近接してある。重複なし。写真では東側に南北方向に中軸線をとる溝状の掘り込みが確認できる。SD386に類似する遺構で、本遺構がその溝と関連する可能性も否定できない。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-24°-W、規模は長径2.80m、短径1.50mである。SD362に伴う遺物の可能性がある。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.20-24.29mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで器種は高環、鉢主体に甕、小形壺、甕が僅かに含まれる。鉢は口径大きく僅かに受け口状の口縁部で小さい凹み底を持つ薄手精製1個体、小形壺は口縁部短いく字1個体、高環は内外面赤彩で小さい稜を持つ半球状の環部1個体ほか環部、脚部片数点、甕は鉢形で底部1孔で底部小さいもの1個体、甕は胴部外面調整ハケとケズリの甕片数点である。本遺構の年代は9期と考えられる。

#### SX333 (第63図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bオ-4-24・25グリッドに位置する。南3mにSI334、東5mにSX316・320がある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-45°-E、規模は長径1.90m、短径0.50mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.25-24.36mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく甕主体に高環が多く、大形壺、中形壺、甕、壺も僅かに含まれる。器台は脚部片1点あるが混入だろう。壺は内斜口縁の平底で被熱のもの1個体、中形壺は胴部片や短く外反する口縁部片など数点、高環は大形有稜の環部ほぼ完存1個体、太く上半中実で下半斜めに屈曲して開く脚部1個体、下端で大きく屈曲して開く脚部片1個体ほか脚部、環部片10点、甕は鉢形とみられる底部1孔の破片1点、大形壺は突出する平底1個体ほか胴部片僅か、甕は厚手な甕の単口縁3点ほか胴部片あり、このほかS字口縁4点と台部2個体があるがこれは混入かもしれない。本遺構の年代は10期ないし中期前葉(TK73段階)と考えられる。

## SX335 (第64図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bカ-1-11・12グリッドに位置する。南東にSX280が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-52°-E、規模は長径1.50m、短径0.70mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.20-24.23mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は僅かで甕主体に高坏、鉢各1点がある。鉢は小形丸底形の口縁部片1点、高坏は丸く外反する脚端部片1点、甕は単口縁でハケのちげズリ1個体ほか大きな台部片がある。本遺構の年代は前期末、10期新相と考えられる。

## SX336 (第62図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bカ-1-7・8グリッドに位置する。それぞれ3m程の距離をにおいてSI265、SX272・280・339が周囲にある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-57°-W、規模は長径2.50m、短径2.00mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.23-24.31mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は少なく器種は甕主体に高坏、壺が僅かにある。中形壺は胴部片3点、前期の可能性のある赤彩壺片1点、高坏は中空柱状で中央が膨らむエンタシス状の脚部1個体ほか脚部片2点、甕は厚手で直立気味に立ち上がる口縁部の甕1個体ほか厚手の胴部片が僅かにある。前期系統と見える単口縁ハケ甕片も数点あるが、混入かもしれない。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

## SX337 (第63図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bオ-9-10・15、Bオ-10-11グリッドに位置する。西にSX338が近接してある。重複なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-40°-E、規模は長径4.00m、短径2.90mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.23-24.37mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物は一定量あり、器種は甕主体で中形壺、高坏、碗もある。甕はやや薄く胴部外面ハケ整形で古相だが、内斜口縁碗はさほど古くはならない。混入とみられる古墳前期土器はハケ甕主体でS字口縁部片15点、単口縁5点、台部6個体+aがあり、ほか器台がみられる。碗は底部形状が不明で、内斜口縁3個体、半球状2個体、ハの字に直線的に開くもの1個体、須恵器蓋模倣坏状に段を持つもの3個体、中形壺は凹み底1個体ほか口縁部片や体部片などあり、高坏は坏部小さな有稜で脚部は中空柱状でややハの字で下端大きく開く1個体、坏部6個体、脚部2個体+a、坏底部-脚部上半を意図的に割り取り台のようにしたもの1個体、甕は4個体+aでハケ甕もあり、厚手1個体、厚手でハケ整形1個体、やや薄く頸部丸いナデ整形1個体、やや薄くハケ整形1個体、平底3個体+aである。本遺構の年代は中期前葉(TK73段階)と考えられる。

## SX338 (第63図)

位置 VII区調査区、Bオ-9-14グリッドに位置する。東にSX337が近接してある。重複なし。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.00m、短径0.80mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.23-24.25mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで器種は甕片主体で鉢やミニチュア土器が僅かにある。鉢は二重口縁状で口縁部上半直立気味になる薄手のもの1個体、丸みを持つ平底底部片1個体、甕は胴部外面調整がハケのちげズリ、ナデであり、形状の崩れたS字2点、台部3点うち内面下端折返し1点、平底1点、ミニチュア土器はつぶれた壺形1個体がある。

本遺構の年代は10期前後と考えられる。

SX339 (第62図、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bカ-1-3・4グリッドに位置する。西2mにSI265、北西3mにSX336がある。  
 重複 なし。形状・規模 平面楕円形の遺物集中であり、集中範囲の南北方向の中軸線はN-42°-E、規模は長径2.90m、短径0.90mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.13-24.21mであり、出土層位はIV層中位に相当すると推定される。遺物はごく僅かで裏主体に小形壺1点がある。小形壺は口縁部丸く外反し球胴とみられるもの1個体、裏はやや厚手で胴部外面調整はナデ、ケズリ主体で胎土も中期的であり、口縁部外面丸く内面くの字のもの1個体、平底1個体、台部1個体ほか僅かに胴部片がある。本遺構の年代は中期初頭と考えるが、前期末の可能性もあろう。

SX385 (第63・90図、第106表、図版一一六)

位置 VII区調査区、Bオ-3-14・19グリッドに位置する。南東にSD378、東にSD350が近接してある。  
 重複 SD379上層に位置するが、遺物出土の高さとSD379遺構確認面との差は僅かであり、SD379に伴う遺物の可能性が高いと考える。形状・規模 小規模な遺物集中であり、集中範囲の規模は長径1.00m、短径0.55mである。覆土の状態 不明である。遺物 標高は24.15-24.23mであり、出土層位的にはIV層中位に相当すると推定される。各土器片は一定の高さでほぼ水平に広がるように出土する。遺物は少なく、器種は裏主体に大形壺、中形壺が混じり、高坏は僅かに含まれる。中形壺はやや長い直口縁で胎土白っぽく赤彩1個体、凹み底2個体、高坏は径小さめで新相にみえる坏部片1点、大形壺は折返し口縁の口縁部1個体、くの字口縁の裏形で、口縁部内外面と胴部上端赤彩1個体(1)、二重口縁の小破片1点、裏は胴部外面ハケ調整主体であり、S字6個体+α、口唇部上面に面取りあり1個体(2)、単口縁4個体+α、台部5個体+αで内面折返しや底部内外面砂貼付などあり、平底1個体である。鉢や高坏などの決め手に欠けるが赤彩土器は一定量あり裏も古相とみられるため、本遺構の年代は9期と考える。

6. ビット

SP388・389・390・391・392・393の6基が調査区北部にある。SP388・389・390・391は一定の間隔を開けて直線的に並んでおり、柵列と考えられる。柱穴列の方向はSI361南西辺と平行しており、関連する可能性がある。SP392・393も2本が近接して位置するため、一体として何らかの遺構であったとみられる。柱穴を結ぶ方向はSI321南東辺とほぼ平行しており、関連が窺われる。柱間寸法は、SP391・390間が1.22m、SP390・389間が1.19m、SP389・388間が1.38m、SP391・388間が3.80mである。SP392・393間は1.57mである。本遺構の年代は明確にしないが、関連が伺われる遺構と同時期であるとすればSP388・389・390・391は古墳時代前期、SP391・388は古墳時代中期の所産となる。

SP388 (第58・59図、図版一一七)

位置 VII区調査区、Bオ-4-11グリッドに位置する。北西にSP389、北東にSI361、SB395の柱穴であるSK375が近接してある。重複 SB395の範囲内にある。新旧関係は不明である。形状・規模 平面形は円形で、規模は長径23×20cm、深さ13cmである。覆土の状態 第1・第2層であり、人為堆積の可

能性がある。遺物 なし。

SP389 (第58・59図、図版一一七)

位置 VII区調査区、Bオ-4-11グリッドに位置する。北西にSP390、南東にSP388、北東にSI361、東西にSB395の柱穴であるSK367・375が近接してある。重複 SB395の範囲内にある。新旧関係は不明である。形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長径30×23cm、深さ15cmである。覆土の状態 第1・第2層で、人為堆積の可能性がある。遺物 覆土中から古墳時代前期の土師器裏口縁部片が1点出土する。

SP390 (第58・59図、図版一一七)

位置 VII区調査区、Bオ-4-16グリッドに位置する。北西にSP391、南東にSP389、北東にSI361、南にSB395の柱穴であるSK367が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長径38×29cm、深さ27cmである。覆土の状態 第1～第3層であり、人為堆積の可能性がある。遺物 覆土中から古墳時代前期の土師器裏胴部片が1点出土する。

SP391 (第58・59図、図版一一七)

位置 VII区調査区、Bオ-3-20グリッドに位置する。南東にSP390、東にSI361が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長径31×26cm、深さ16cmである。覆土の状態 第1～第7層で、第3～第7層が裏込め土、第1・第2層が柱痕部分とみられ、柱痕部分の径は7～9cmである。遺物 なし。

SP392 (第54図、図版一一七)

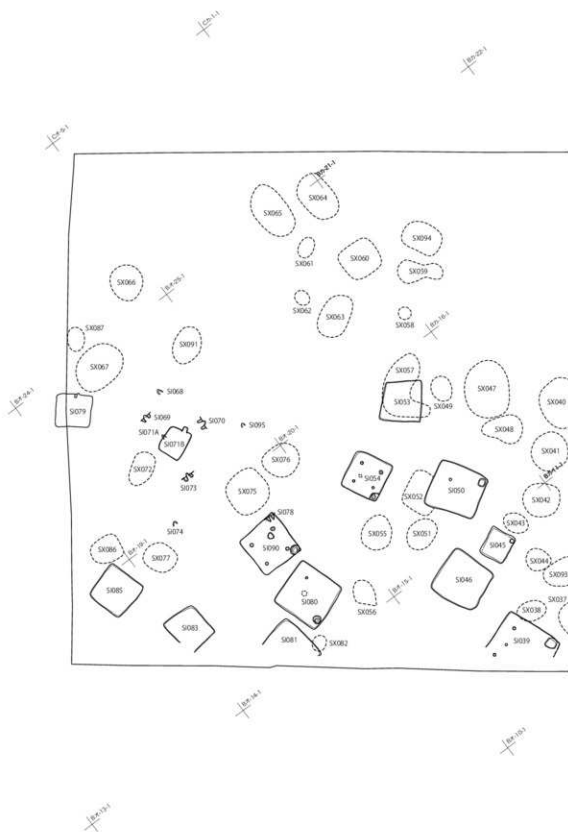
位置 VII区調査区、Bオ-4-22・23グリッドに位置する。東にSP393が近接してある。重複 なし。形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長径75×60cm、深さ33cmで中央の径約30cm部分が深く、周囲に浅い掘り込みがある。覆土の状態 第1～第4層で、第3・第4層が裏込め土、第2層が柱痕部分とみられ、柱痕部分の径は8～11cmである。遺物 覆土中から古墳時代前期の土師器裏胴部片が5点出土する。

SP393 (第54図、図版一一七)

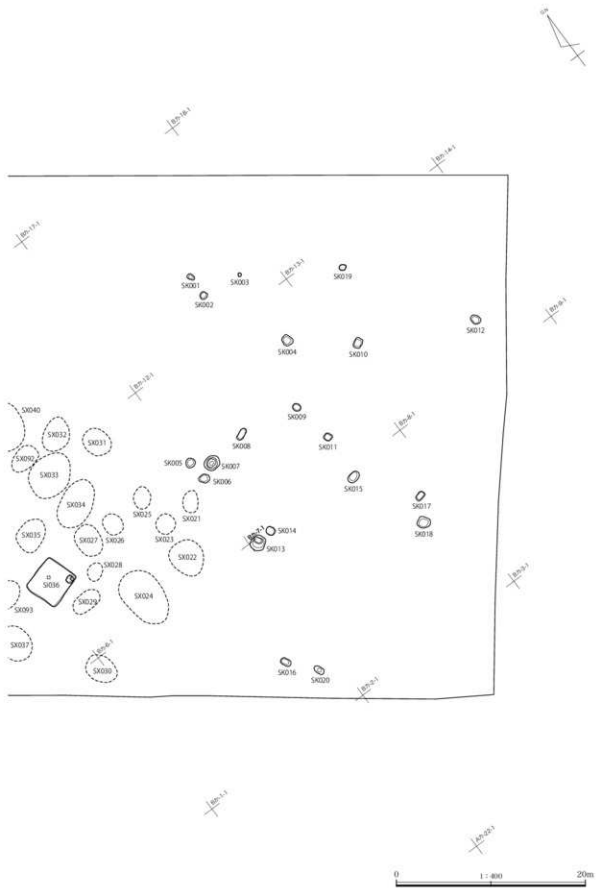
位置 VII区調査区、Bオ-4-23グリッドに位置する。西にSP392が近接してある。重複 なし。上面がトレンチにより浅く削られている。形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長径36×28cm、深さ39cmである。覆土の状態 第1・第2層であり、人為堆積の可能性がある。遺物 覆土中から古墳時代前期の土師器裏胴部片が1点出土する。

7. その他の遺物 (第90・91図、第107表)

Aオ-25-10グリッドから出土した完形の勾玉1点(90図Ⅶ-1)と共に、東地区から出土した縄紋・弥生時代の遺物を示す(91図)。出土位置はⅡ区(3,4,8)、Ⅲ区(2)、Ⅴ区(1)、Ⅵ区(5)、Ⅶ区(6,7)で、いずれも包含層または他時代の遺構に混入していたものである。1-6が縄紋晩期、7,8が弥生土器となる。鉢で内面文様のある3や浮線文の小形鉢6は西地区出土土器で対応する同種例が認められず注目されるものである。

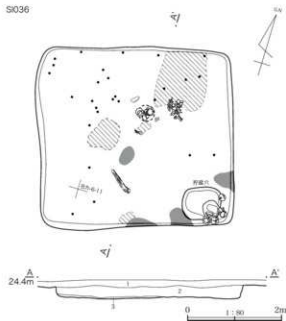


第4図 東Ⅱ区 全体図



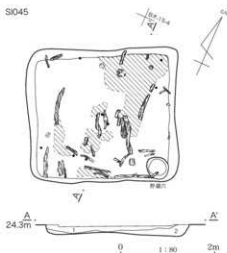


SI036



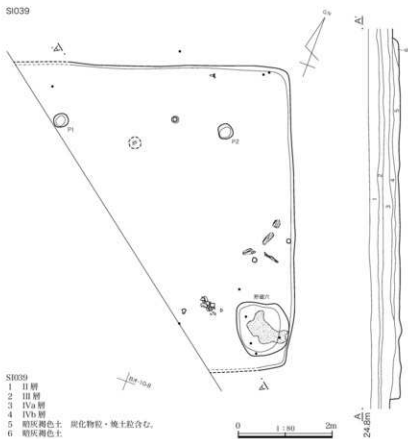
- SI036  
 1 灰褐色土 白色粘微量、マンガング・鉄分粒や少量、しまり・粘性強、遺物少量、IVb層  
 2 灰黄褐色土 黄白色粘土粒やや多量、炭化物微量、鉄分・マンガング少量、しまり・粘性強、遺物多量。  
 3 浅黄褐色土 黄白色粘土多量含む、部分的に炭化物をやや多量含む、しまりやや弱、粘性強。

SI045



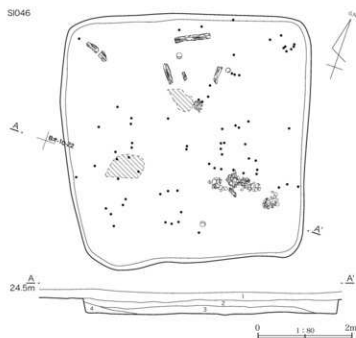
- SI045  
 1 灰黄褐色土 白色粘微量、酸化鉄少量、しまりやや弱、粘性強、遺物少量。  
 2 灰黄色土 炭化物やや少量、焼土少量、灰黄色粘土ブロック一面に含む、しまりやや弱、粘性強。底面付近に炭化材多量、ワラ状炭化物。

SI039

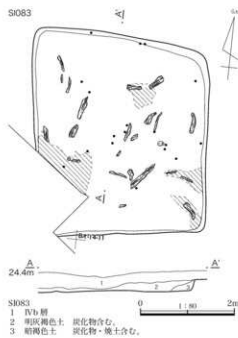


- SI039  
 1 II層  
 2 III層  
 3 IVa層  
 4 IVb層  
 5 暗灰褐色土 炭化物粒・焼土粒含む。  
 6 暗灰褐色土

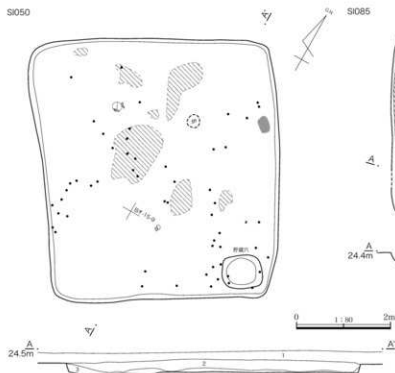
第5図 東II区 遺構実測図1



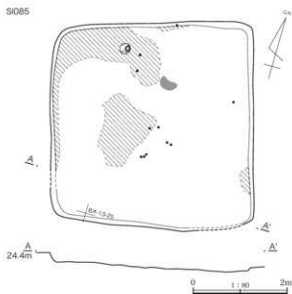
- SI046
- 1 褐色土 白色粒子やや少量。マンガンを鉄分やや少量。しまり・粘性強。遺物多量。IVb層
  - 2 褐色土 焼土粒子ブロックやや少量。炭化物少量。マンガンを鉄分やや少量。遺物多量。
  - 3 灰黄色土 白色砂質粘土やや多量。鉄分・マンガンをやや多量。しまり弱。粘性強。
  - 4 褐色土 白色粒子微量。



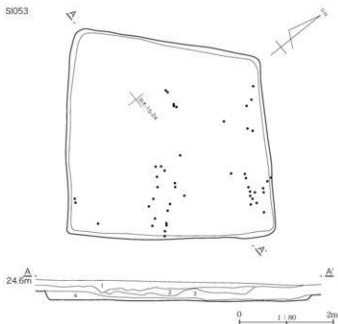
- SI083
- 1 IVb層
  - 2 褐色褐色土 炭化物含む。
  - 3 褐色土 炭化物・焼土含む。



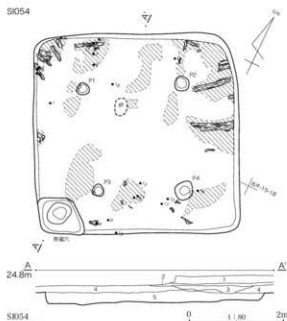
- SI050
- 1 褐色土 白色粒微量。鉄分やや多量。マンガンをやや少量。しまり・粘性強。IVb層
  - 2 褐色土 部分的に黄褐色粘土(砂質)ブロック少量。白色粒微量。炭化物・焼土一部は解伏に含む。
  - 3 褐色土 黄褐色粘土粒やや少量。鉄分粒微量。炭化物・焼土少量。



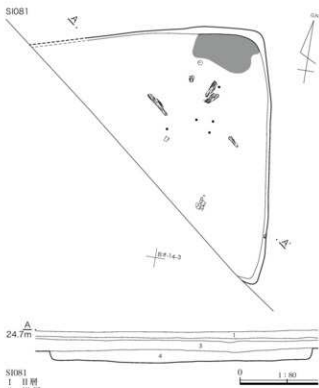
第6図 東Ⅱ区 遺構実測図2



- S1053
- 1 灰褐色土 白色粒子多量、マンガング粒多量、粘土微量、しまり強、粘性強? 遺物含む、IVa層
  - 2 灰黄褐色土 白色粒中少少量、マンガング粒多量、1層に深るか、白黄色砂質土多量、しまり強、粘性強
  - 3 湖灰色土 白色粒微量、マンガング粒微量、しまり・粘性強、部分的に黄白色粘土ブロック含む、IVb層
  - 4 にぶい黄褐色 黄白色粘土・炭化物・白色粒少量、鉄分含む。



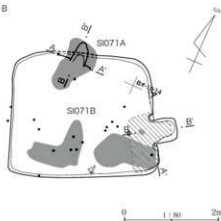
- S1054
- 1 目層
  - 2 面層
  - 3 湖灰色土 白色粒子を極めて多量含む、鉄分粒・マンガング粒少量、しまり非常に強、粘性強、IVa層
  - 4 湖灰色土 白色粒子微量、マンガング粒・鉄分粒少量、しまり非常に強、粘性強、IVb層
  - 5 湖灰色土 白色粒極めて微量、マンガング粒・鉄分少量、黄白色粘土(砂質)ブロック部分的に少量、炭化物・焼土粒少量、しまり・粘性強。



- S1081
- 1 目層
  - 2 面層
  - 3 IVb層
  - 4 灰褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。

第7図 東Ⅱ区 遺構実測図3

SI071A-071B



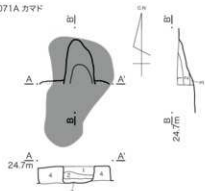
SI071A カマド

- 1 赤褐色土 黒色土に多くの焼土粒・炭化物を含む。しまり・粘性弱。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック(2cm大)と黒色土の凝土層。しまり・粘性弱。
- 3 黒色土 黒色土に若干の炭化物が混入。しまり・粘性弱。
- 4 灰褐色土 灰色粘土と黒色土の凝土層。しまり・粘性強。

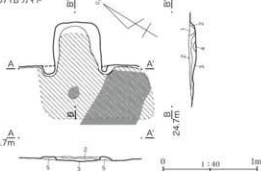
SI071B カマド

- 1 黒褐色土 灰色粘土層に焼土・焼土ブロックが多量に混入。しまり・粘性強。
- 2 赤褐色土 黒色の灰に炭化物が少量混入。しまり・粘性弱。
- 3 黒色土 黄灰色粘土。しまり・粘性強。
- 4 黄灰色粘土 黄灰色粘土・灰色粘土と焼土ブロック(5mm大)の凝土層。
- 5 黄灰色粘土

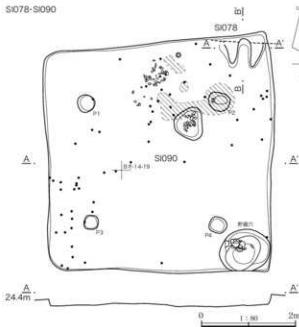
SI071A カマド



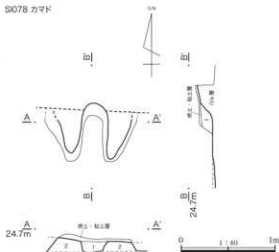
SI071B カマド



SI078-SI090



SI078 カマド



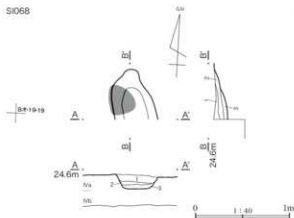
SI078 カマド

- 1 黒褐色土 黒色土に若干の焼土・炭化物を含む。しまり弱。
- 2 灰褐色土 黒色土と灰黒褐色土の粘土(シルト)との凝土層。しまり強。

第8図 東Ⅱ区 遺構実測図4

第4章 東地区の遺構と遺物

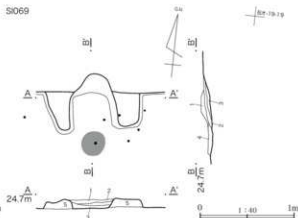
SI068



SI068 カマド

- 1 黒色土 黒色土と多量の炭化物と少量の焼土を含む。しまり・粘性弱。
- 2 赤黒色土 焼土に少量の黒色土を含む。しまり・粘性弱。
- 3 黒褐色土 黒色土に若干の焼土を含む。しまり強。粘性弱。

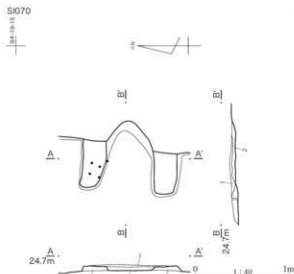
SI069



SI069 カマド

- 1 赤褐色土 多量の焼土ブロックと灰色粘土の混土層。しまり強。粘性弱。
- 2 赤黒色土 黒色土と少量の焼土・若干の灰の混土層。しまり・粘性弱。
- 3 灰黒色土 黒色土に若干の焼土層が混入。しまりやや弱。粘性やや強。
- 4 黒色土 黒色土に少量の炭化物が混入。しまりやや弱。粘性やや強。
- 5 不明

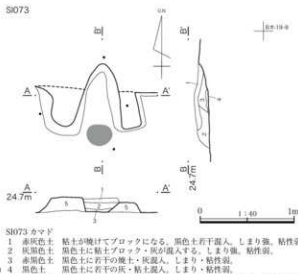
SI070



SI070 カマド

- 1 赤褐色土 多量の焼土に少量の黒色土が混入。しまり強。粘性弱。
- 2 赤黒色土 黒色土と多くの焼土と若干の炭化物が混入。しまり・粘性弱。
- 3 黒色土 黒色土と少量の炭化物が混入。しまり・粘性弱。
- 4 灰黒色土 灰色粘土(シルト)と黒色土の混土層。しまり強。粘性弱。

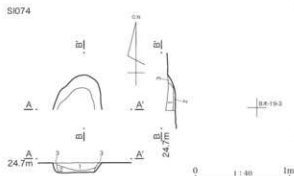
SI073



SI073 カマド

- 1 赤灰色土 焼土少焼けてブロックになる。黒色土若干混入。しまり強。粘性弱。
- 2 灰黒色土 黒色土に粘土ブロック・灰が混入する。しまり強。粘性弱。
- 3 赤黒色土 黒色土に若干の焼土・灰混入。しまり・粘性弱。
- 4 黒色土 黒色土に若干の灰・粘土混入。しまり・粘性弱。
- 5 黒灰色土 青灰色の砂質の多い粘土(シルト)と黒色土の混土層。しまり・粘性強。

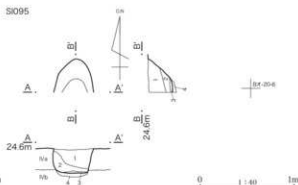
SI074



SI074 カマド

- 1 灰黒色土 黒色土に灰・砂・粘土混入。しまり・粘性弱。
- 2 赤黒褐色土 黒色土に多くの焼土粒・粘土を含む。しまり強。粘性弱。
- 3 黒灰色土 粘土を主体に若干の黒色土が混入。しまり弱。粘性やや強。

SI095



SI095 カマド

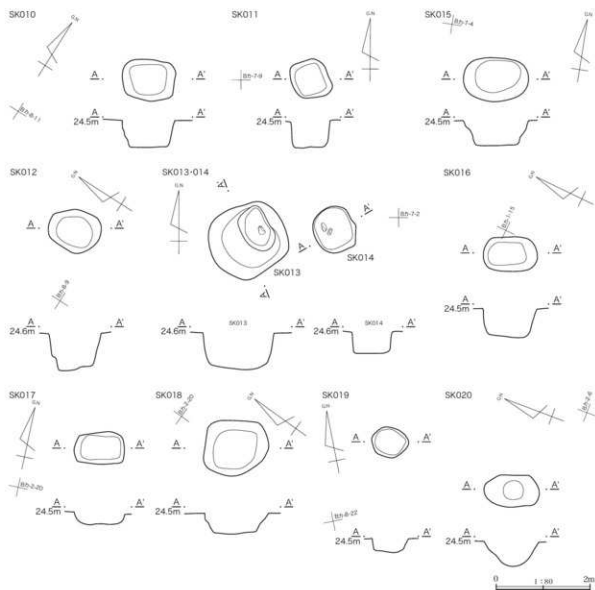
- 1 赤黒褐色土 黒色土に多くの焼土粒と砂粒。若干の灰色粘土混入。しまり・粘性弱。
- 2 黒色土 黒色土に砂粒を多く含む。しまり・粘性弱。
- 3 赤褐色土 黒色土と焼土ブロック。しまり強。粘性弱。
- 4 灰黒色土 黒色土に灰色粘土(シルト)が少量混入。しまり強。粘性やや強。

第9図 東Ⅱ区 遺構実測図5

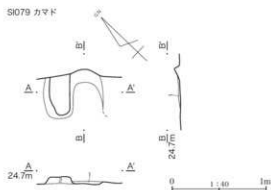
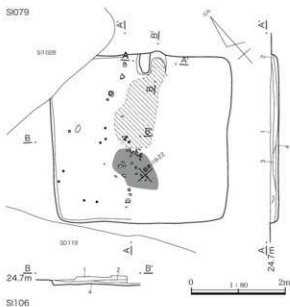


- SIO80
- 1 lc層 2 Ⅱ層 3 Ⅲ層
- 4 褐色土 白色粒微量、マンガング・鉄分粒微量、炭化物・焼土粒少量、遺物多量含む、しまり・粘性強、IV層
- 5 灰黄色土 砂質粘土多量、マンガング・鉄分粒少量、炭化物・焼土部分的に多量含む、しまり強、粘性やや強
- 6 によい棕色 粘質土、焼土粒・焼土ブロック多量、炭化物少量、しまり・粘性強
- 7 灰黄褐色土 粘土質、灰色粘土ブロック多量、マンガング・鉄分粒少量、しまり・粘性強

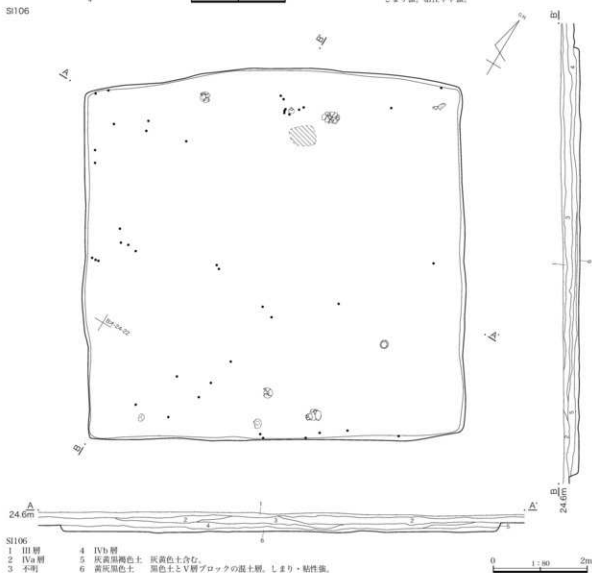




第11図 東Ⅱ区 遺構実測図7



- S1079
- 1 褐色土 褐色色粘質土主体、鉄分粒子少量、白色粒子やや多量、炭土・炭化物極めて微量、しまり強。
  - 2 褐色土 褐色色粘質土主体、鉄分粒子やや多量、白色粒子微量、炭土・炭化物やや少量、しまり強。
  - 3 暗赤褐色 粘土多量に含む。
- S1079 カマド
- 1 黒褐色土 黒色土に少量の粘土粒・炭化物が入る、しまり・粘性強。
  - 2 黒褐色土 黒色土に多量の粘土・粘土ブロック混入、しまり強、粘性やや強。



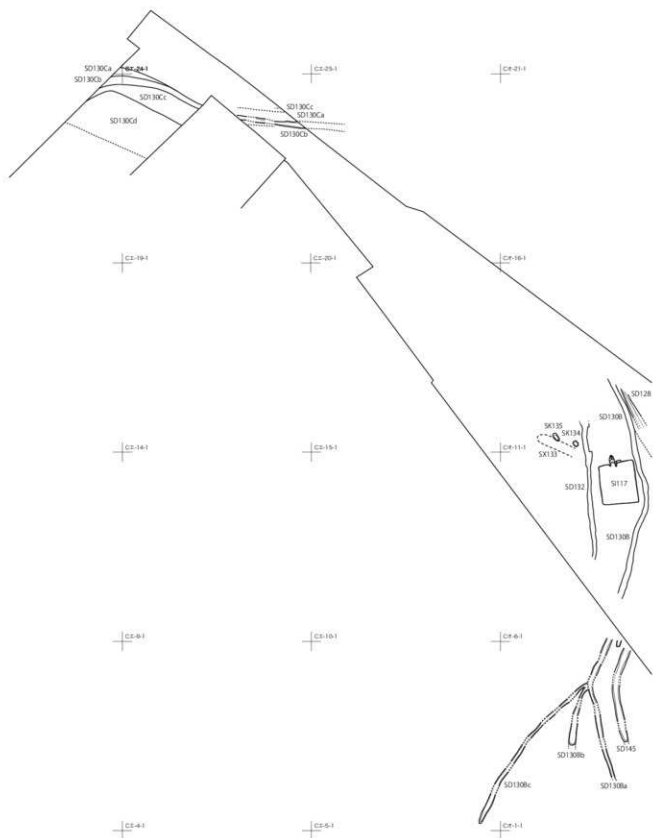
第12図 東川区 遺構実測図1



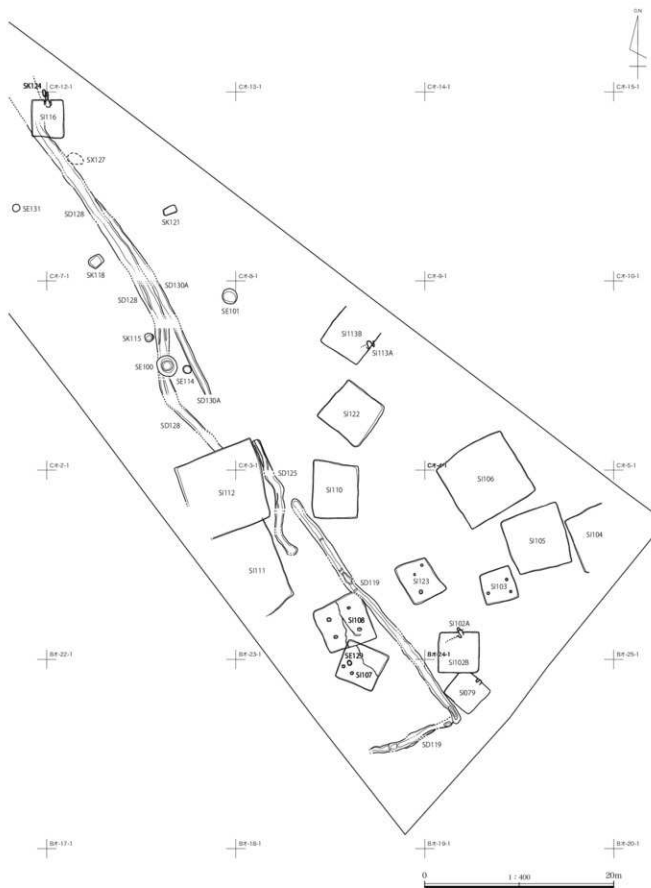


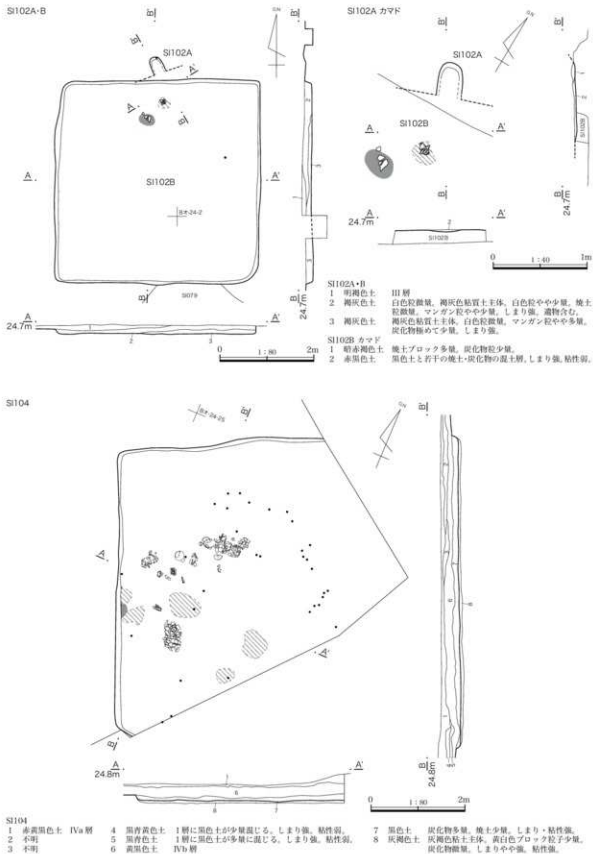
第13図 東II区 遺構実測図8



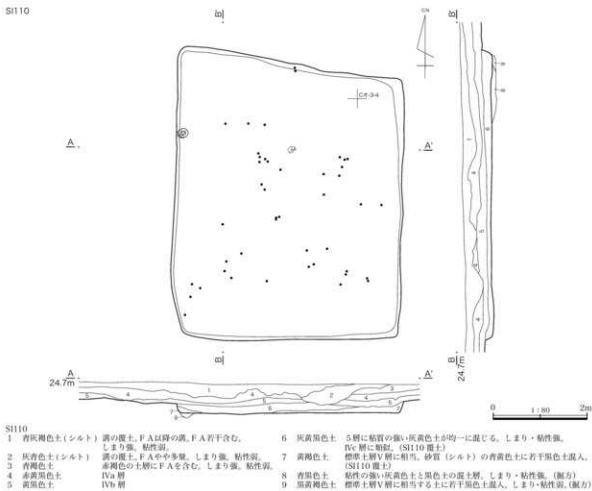
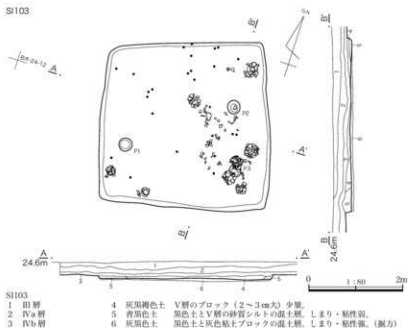


第14図 東Ⅲ・Ⅳ区 全体図



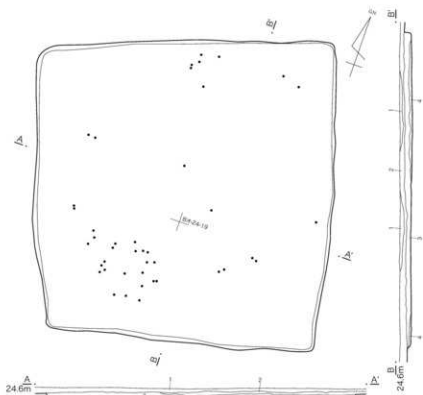


第15図 東川区 遺構実測図2



第16図 東川区 遺構実測図3

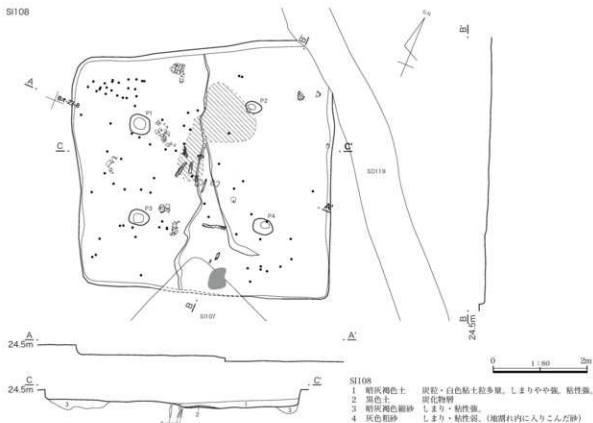
SI105



- SI105  
 1 赤黄褐色土 IVa層  
 2 黄褐色土 IVb層  
 3 灰黄褐色土 灰黄色土含む。  
 4 黄褐色土 V層類似の砂質粘土含む。

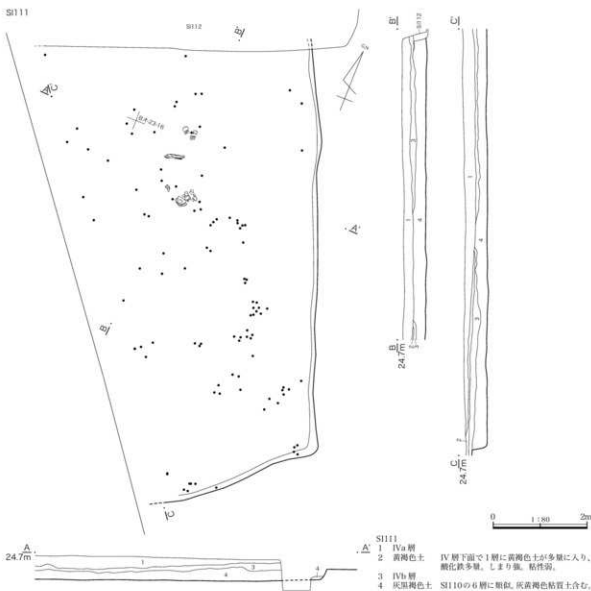
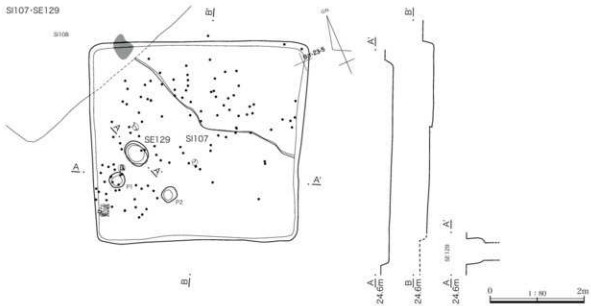
0 1.80 2m

SI108



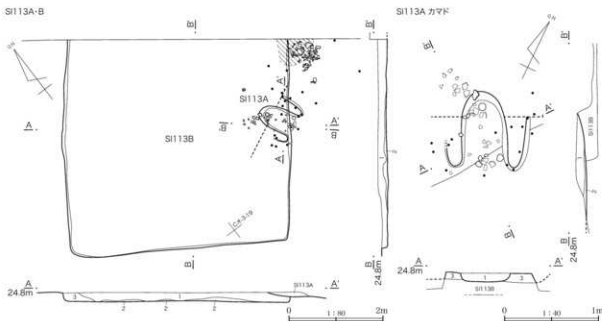
- SI108  
 1 暗灰褐色土 炭粒・白色粘土粒多量。しまりやや強。粘性強。  
 2 黒色土 炭化物層  
 3 暗灰褐色細砂 しまり・粘性強。  
 4 灰色粗砂 しまり・粘性弱。(地割れ内に入りこんだ砂)

第17図 東川区 遺構実測図4



第18図 東Ⅲ区 遺構実測図5





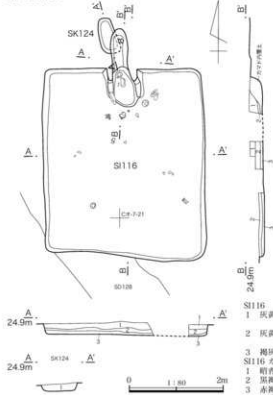
SI113A カマド

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物少量、しまり強、粘性弱。
- 2 橙褐色土 焼土多量含む。
- 3 黒漆褐色土

SI113B

- 1 灰黄褐色土 灰黄褐色砂質土主体、マンガングやや多量、鉄分粒少量、白色粒子やや少量、しまり強、遺物含む。
- 2 灰黄褐色土 灰黄褐色砂質土主体、白色粒子極めて少量、しまり強。
- 3 暗褐色土 灰黄褐色砂質土主体、白色粒子ごく微量、マンガングやや少量、しまりやや強、マンガングやや少量。

SI116-SK124



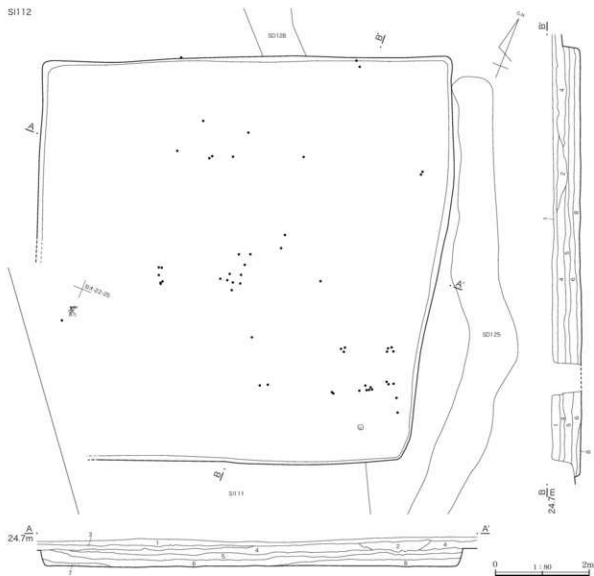
- SK124
- 1 暗赤褐色土 焼土粒多量、しまりやや強、粘性弱。

SI116 カマド

- 1 灰黄褐色土 砂質粘土主体、白色粒子やや少量、焼土粒極めて微量、マンガングやや少量、鉄分粒微量。
  - 2 灰黄褐色土 砂質粘土主体、白色粒子微量、炭化物・焼土粒少量、マンガング少量、鉄分粒微量。
  - 3 褐灰色土 やや粘質土主体、白色粒子極めて微量、マンガングやや多量、鉄分粒微量。
- SI116 カマド
- 1 暗青灰褐色土 天井部粘土、ソデとは同質。
  - 2 黒褐色土 カマド内に残った材か、炭化材層。
  - 3 赤褐色土 焼土・灰と青灰色土の最土層（火灰）しまりやや弱、粘性弱。
  - 4 暗赤褐色土 焼土と炭化材含む。
  - 5 明黄褐色土 黄褐色粘土、青灰色粘土、炭化物、焼土、少量含む。
  - 6 黒褐色土 黄褐色土・青灰色土・若干の炭化物・焼土の混土層、しまり・粘性弱。

第19図 東川区 遺構実測図6

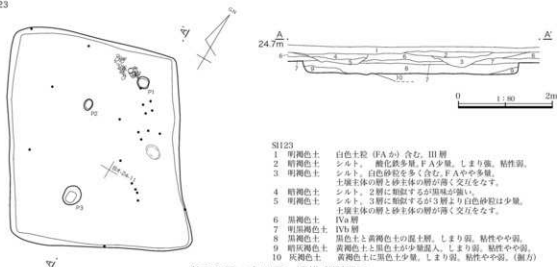
SI112



SI112

- |           |          |                                   |
|-----------|----------|-----------------------------------|
| 1 IVa層    | 5 暗黒褐色土  | 黄褐色土少量含む。                         |
| 2 SD128層土 | 6 灰黒褐色土  | 灰黄褐色粘質土含む。                        |
| 3 明褐色土    | 7 暗青灰褐色土 | V層相当の青黄土。(シルト質)に黒色土が若干混入。しまり・粘性弱。 |
| 4 IVb層    | 8 黒褐色土   | 黒色土にV層ブロックの凝土層。しまり・粘性強。           |

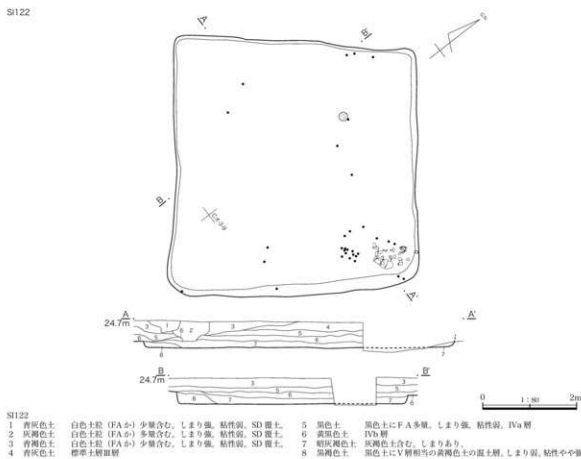
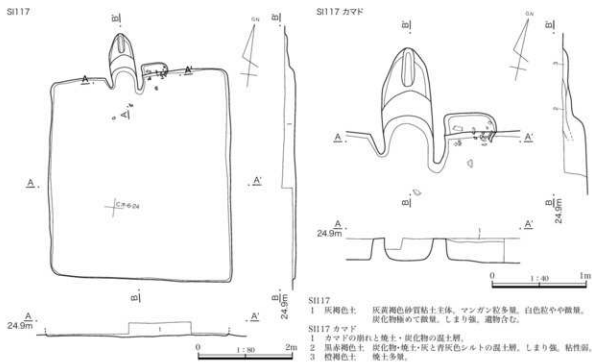
SI123



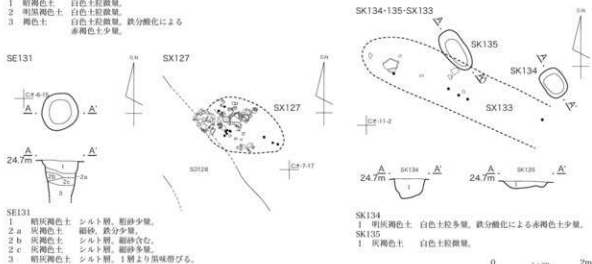
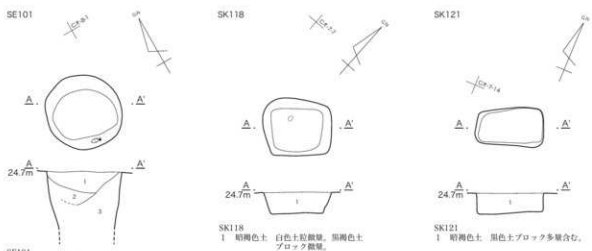
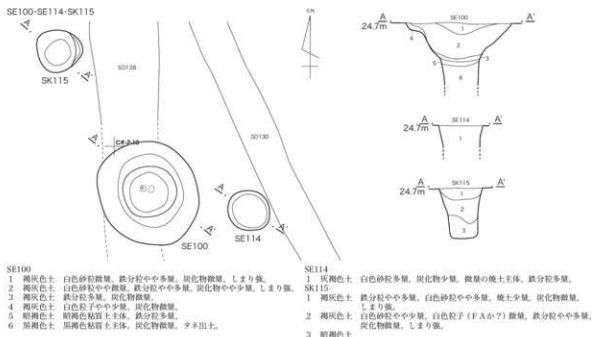
SI123

- |         |   |
|---------|---|
| 1 明褐色土  | 白色土段 (FA含む)含む。II層                                 |
| 2 暗褐色土  | シルト。酸化鉄多量。FA少量。しまり強。粘性弱。                          |
| 3 明褐色土  | シルト。白色砂粒を多く含む。FA中や多量。<br>土壌主体の層と砂主体の層が薄く交互をなす。    |
| 4 暗褐色土  | シルト。2層に類似するが渠味が強い。                                |
| 5 明褐色土  | シルト。3層に類似するが3層より白色砂粒は少量。<br>土壌主体の層と砂主体の層が薄く交互をなす。 |
| 6 黒褐色土  | IVa層  |
| 7 明黒褐色土 | IVb層  |
| 8 黒褐色土  | 黒色土と黄褐色土の凝土層。しまり弱。粘性や中弱。                          |
| 9 暗褐色土  | 黄褐色土と黒色土が少量混入。しまり弱。粘性や中弱。                         |
| 10 灰褐色土 | 黄褐色土に黒色土少量。しまり弱。粘性や中弱。(側方)                        |

第20図 東川区 遺構実測図7



第21図 東川区 遺構実測図8



第22図 東川区 遺構実測図9

第4章 東地区の遺構と遺物

SD119-125-128a-b-130A-B-C-132



SD125

- 1 灰褐色土 灰褐色粘質土主体，F A極めて微量，砂多量（明砂）。
- 2 暗灰褐色土 黄灰褐色粘質土主体，炭化物微量，黄灰褐色粘土粒・ブロック少量，しまりやや弱，粘性強。

SD130B

- 1 暗灰褐色土 砂少量含む。
- 2a 黒褐色土 白色土粒少量，砂少量含む。
- 2b 灰褐色土 粘質土。

SD128a-b

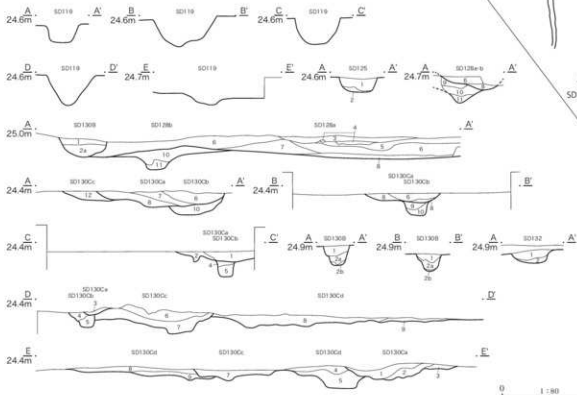
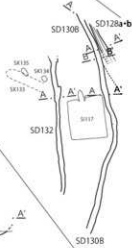
- 3 暗青褐色土
- 4 暗青灰色土
- 5 青灰色土
- 6 暗青褐色土
- 7 暗青色土
- 8 青灰色土 砂少量含む。
- 9 黒褐色土 砂少量含む。
- 10 暗青灰色土 砂少量含む。
- 11 暗青灰色土

SD130Ca-b-c-d

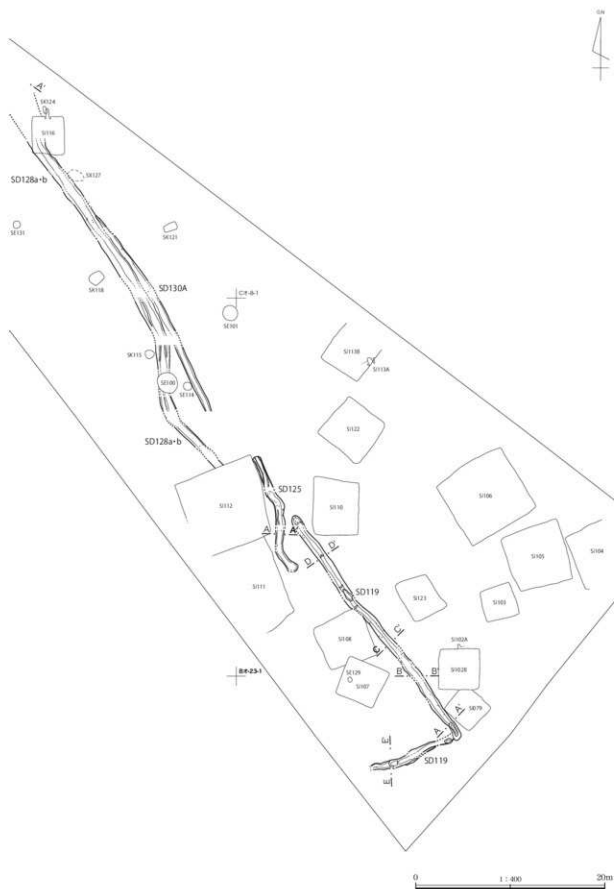
- 1 暗灰褐色土 粘土粒少量，白色土粒少量。
- 2 暗灰褐色土 砂多量。
- 3 明灰褐色土 砂多量。
- 4 灰褐色土
- 5 暗灰褐色土
- 6 明灰褐色土 砂少量。
- 7 灰褐色土 砂少量，土層と砂が強く交互をなす。
- 8 暗灰褐色土 砂多量。
- 9 灰褐色土

SD132

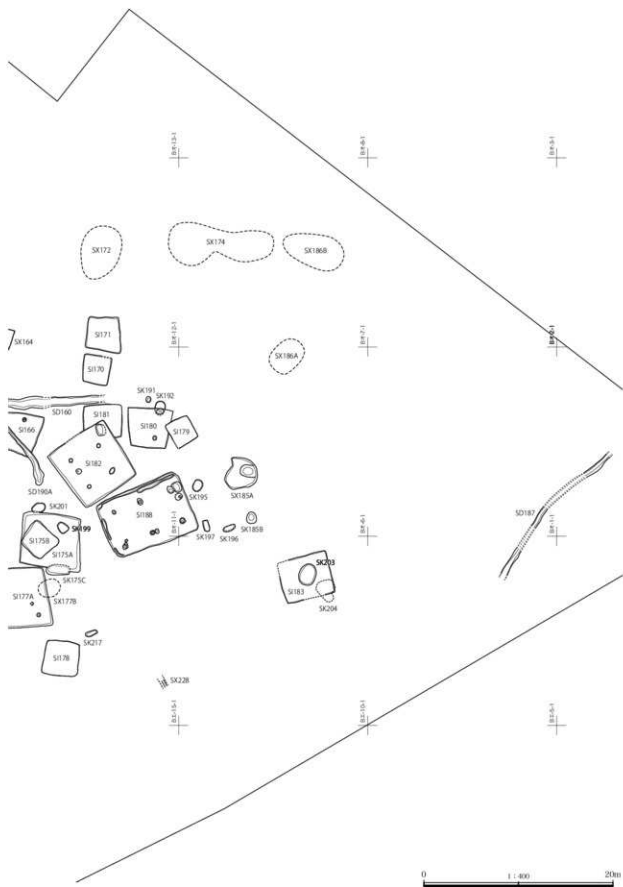
- 1 青灰色土 砂少量含む。
- 2 暗青灰色土 砂少量含む。



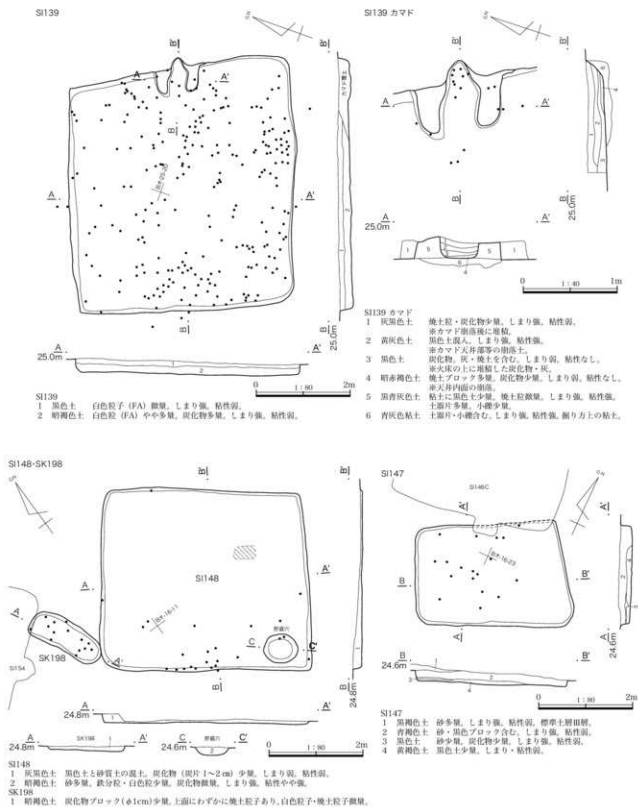
第23図 東川区 遺構実測図10



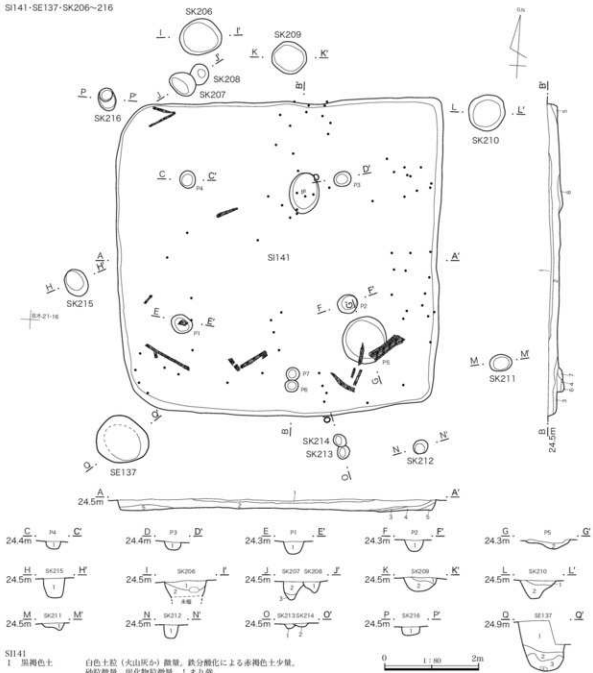








第25図 東V区 遺構実測図1



SI141

- 1 黒褐色土 白色土粒(火山灰)少量。鉄分酸化による赤褐色土少量。砂粒微量。炭化物粒微量。しまり強。
- 2 灰黄褐色土 白色土粒(火山灰)少量。鉄分酸化による赤褐色土少量。砂粒微量。炭化物粒微量。炭化材(φ5~10cm)微量。しまり強。
- 3 上二黄褐色土 鉄分酸化による赤褐色土微量。砂粒少量。しまり強。
- 4 黒褐色土 鉄分酸化による赤褐色土少量。砂粒少量。炭化物粒微量。しまり強。
- 5 黒褐色土 鉄分酸化による赤褐色土少量。砂粒少量。炭化物粒微量。しまり強。
- 6 期灰黄褐色土 鉄分酸化による赤褐色土少量。砂粒少量。しまり強。
- 7 黄灰色土 鉄分酸化による赤褐色土微量。砂粒少量。しまり強。
- 8 黒褐色土 焼土粒微量。鉄分酸化による赤褐色土微量。炭化物少量。炭化材(φ0.5~2cm)少量。しまり強。

SI141 P1~P5

- 1 黒色土 砂粒少量。しまり弱。粘性強。
- 2 黒色土 鉄分酸化による赤褐色土少量。炭化物少量。しまり強。

SK206

- 1 褐色灰土 灰褐色粘質土多量。マンガング粒・鉄分粒やや多量。しまりやや強。

SK216

- 1 期褐色粘質土 SK137 灰褐色粘土ブロック少量。鉄分粒やや多量。しまりやや弱。

SK207-208

- 1 期褐色粘質土 灰褐色粘土・ブロック多量。炭化物微量。鉄分粒やや多量。しまりやや弱。
- 2 期褐色粘質土 同上。

SK209

- 3 灰黄褐色土 灰褐色粘質土主体。しまりやや弱。

SK210

- 1 期褐色粘質土 白色土粒・鉄分粒少量。炭化物微量。しまり強。鉄分粒やや多量。白色粒微量。しまり強。
- 2 期褐色粘質土 同上。

SK211

- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多量。しまりやや弱。粘性強。
- 2 灰黄褐色粘質土 鉄分粒やや多量。砂粒少量。しまりやや弱。粘性強。

SK212

- 1 期褐色土 鉄分粒多量。白色粒少量。しまりやや弱。

SK213-214

- 1 期褐色粘質土 白色粒微量。鉄分粒多量。しまりやや弱。粘性強。
- 2 灰褐色土 鉄分粒多量。白色土粒少量。しまりやや弱。

SK215

- 1 期灰褐色粘質土 白色粒少量。鉄分粒・砂質粘土ブロック粒少量。しまり・粘性強。

SK216

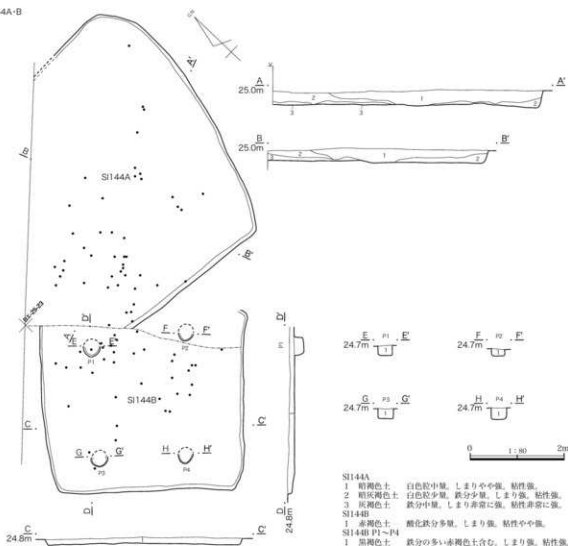
- 1 期褐色粘質土 SK137 白色粒微量。鉄分粒多量。しまりやや弱。粘性強。

SK217

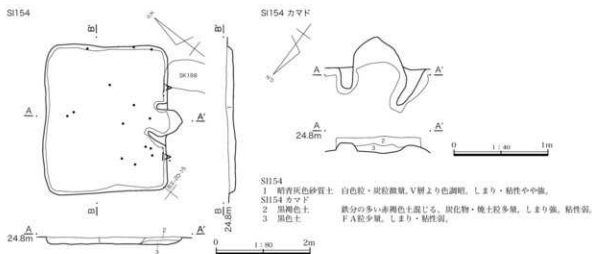
- 1 期灰褐色土 自然地形。F A(白色土粒)多量。シト質。人為堆積。シルト質。人為堆積。黄褐色ブロック少量。シルト質。
- 2 青灰色土 同上。
- 3 青灰色土 同上。

第26圖 東V区 遺構実測図2

SI144A・B



SI154

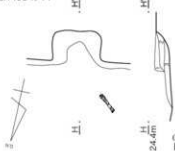


第27図 東V区 遺構実測図3

SI146A-B-C-D-SI150



SI146C カマド



SI146A-B-C-D-SI150

- 1 黒色土 砂粒多量、炭化物・焼土多量、しまり強、粘性弱。
- 2 黄褐色土 黄褐色の砂と黒色土の混土、しまり強、粘性弱。
- 3 灰褐色土 砂多量、しまり強、粘性弱。
- 4 黒褐色土 黒色土とコ屑の混土、しまり強、粘性弱。
- 5 明褐色土 コ屑に砂多量、しまり・粘性弱。
- 6 青褐色土 砂・灰褐色土少量、しまり・粘性弱。
- 7 青褐色土 砂少量、しまり・粘性弱。
- 8 明青灰色土 黒色土少量、しまり・粘性弱。

SI146C カマド

- 1 黒色土 砂多量、炭化物・焼土粒多量、しまり強、粘性弱。
- 2 黒褐色土 炭化物・焼土少量、しまり・粘性弱。
- 3 黄褐色土 砂質土、しまり・粘性弱、S1 層土2層。

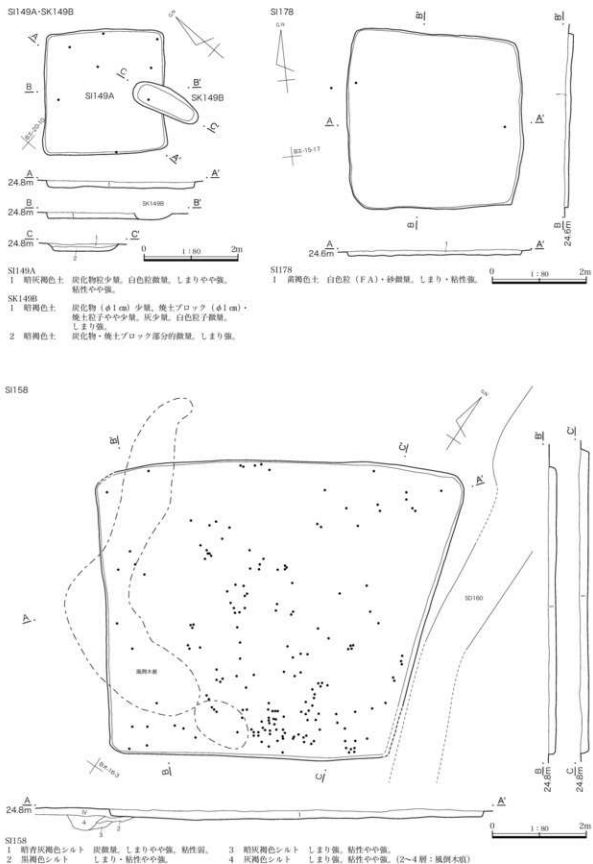
SI146C 貯蔵穴

- 1 黒褐色土 焼土ブロック・炭化材・炭化物多量、しまり・粘性弱。

SI150 貯

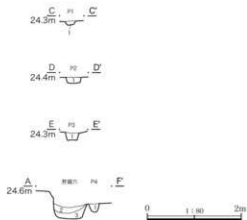
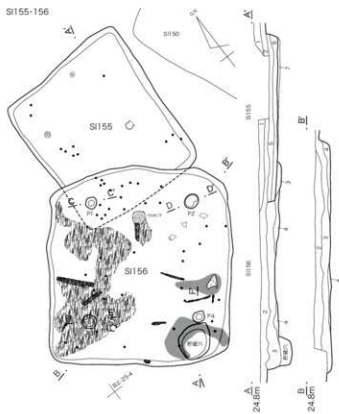
- 1 黒褐色土 黒色土と青灰色砂の混土、焼土粒・灰少量、しまり強、粘性弱。

第28図 東V区 遺構実測図4



第29図 東V区 遺構実測図5

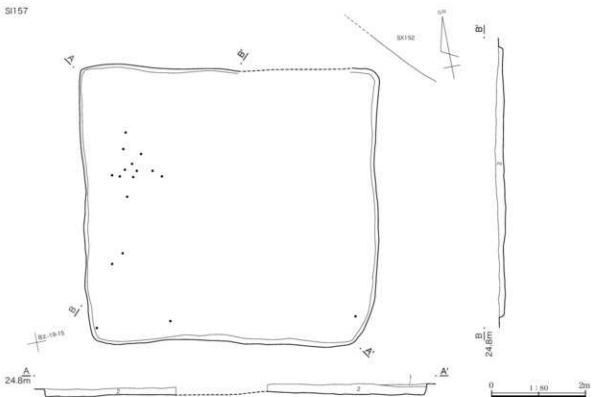
SI155-156



SI155-156

- 1 暗褐色土 白色粘粉が多量。鉄分粒子少量。しまり強。IVa層
  - 2 暗褐色土 白色粘粉やや多量。鉄分粒子少量。しまり・粘性弱。IVb層
  - 3 灰褐色土 黄灰色砂質土主体。鉄分粒少量。塵(φ1~3cm)少量。
  - 4 暗褐色土 黄灰色シルト多量。木炭炭化物・焼土多量。しまり強。
  - 5 暗褐色土 白色粒子・炭化物微塵。しまり強。
  - 6 暗褐色土 炭化物やや多量。しまり強。
  - 7 暗青灰色土 黄灰色土少量。しまり・粘性弱。SI155の陥り床。
- SI156 P1~P4 貯蔵穴
- 1 黒褐色土 砂質土と黒色土の混土層。炭化物少量。焼土微塵。しまり・粘性弱。褐色の砂質土少量。炭化物・焼土粒微塵。しまり・粘性弱。
  - 2 黒褐色土 黄灰色粘土ブロック多量。黒色土少量。

SI157

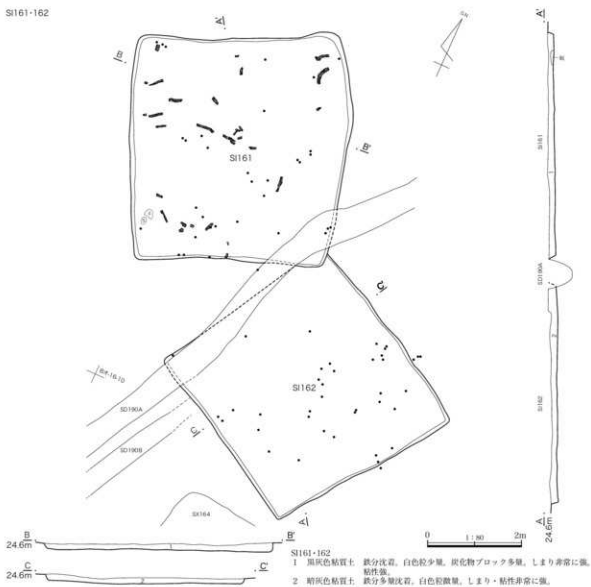


SI157

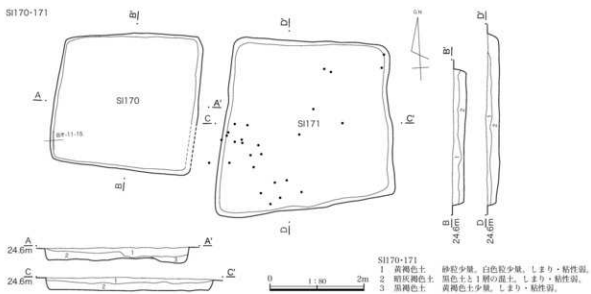
- 1 暗褐色土 白色粘粉やや多量。鉄分やや多量。
- 2 暗褐色土 白色粘粉少量。鉄分やや多量。炭化物微塵。

第30図 東V区 遺構実測図6

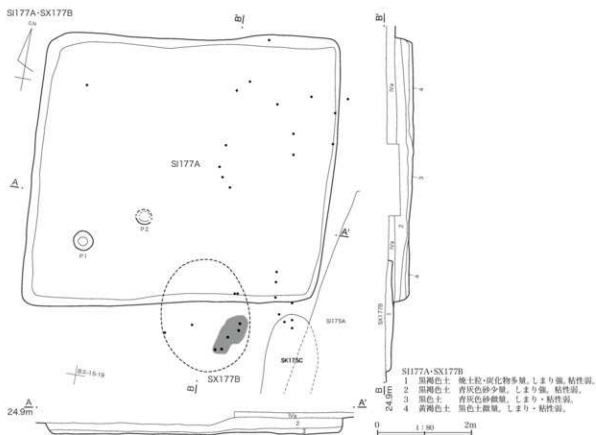
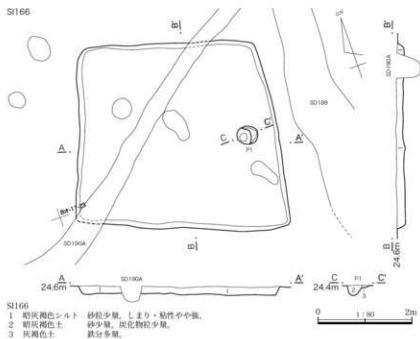
SI161-162



SI170-171



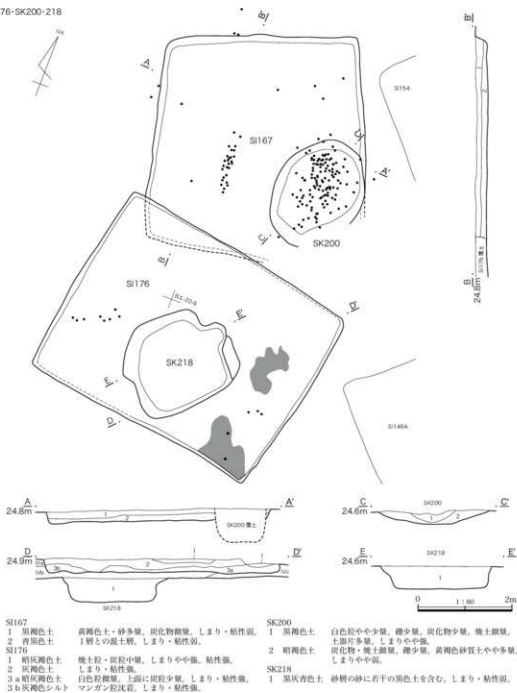
第31図 東V区 遺構実測図7



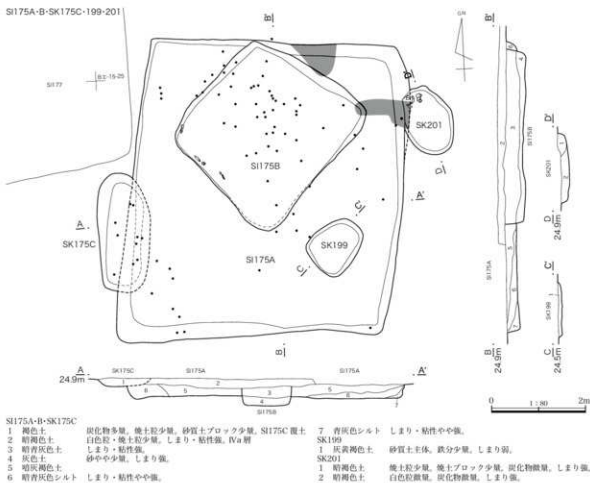
第32図 東V区 遺構実測図8



SI167-176-SK200-218



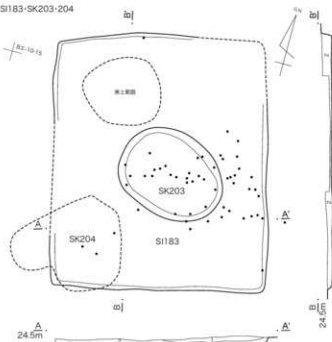
第33図 東V区 遺構実測図9



第 34 図 東V区 遺構実測図 10

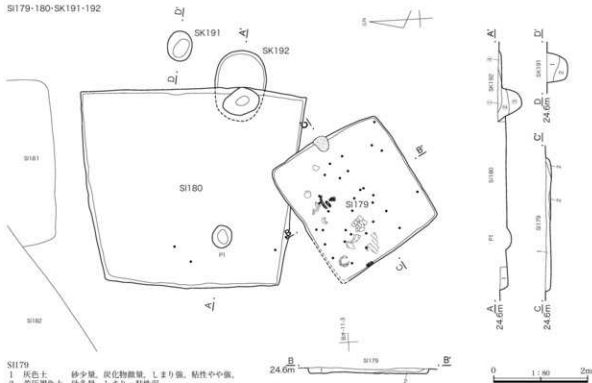


SI183-SK203-204



- SI183
- 1 暗灰褐色土 炭化物粒微量、砂少量、粘土ブロック少量、しまりやや強。
  - 2 淡灰褐色土 炭化物粒やや少量、粘土ブロックやや多量、しまり強。

SI179-180-SK191-192

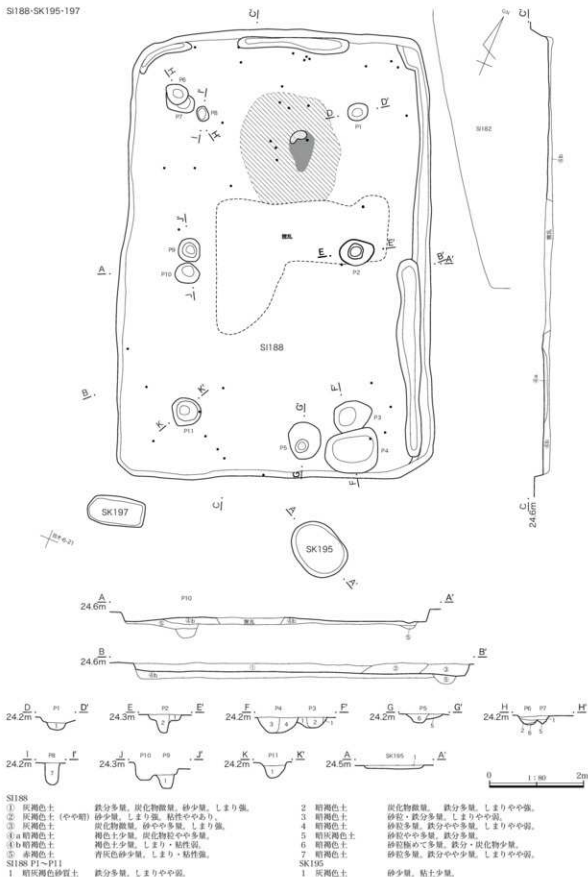


- SI179
- 1 灰色土 砂少量、炭化物微量、しまり強、粘性やや強。
  - 2 黄灰褐色土 砂多量、しまり・粘性弱。
- SI180
- 1 暗灰褐色土 砂多量、しまりやや強。
- SK191
- 1 褐色土 明褐色粘土ブロック多量。
  - 2 暗褐色土 明褐色粘土ブロック微量。

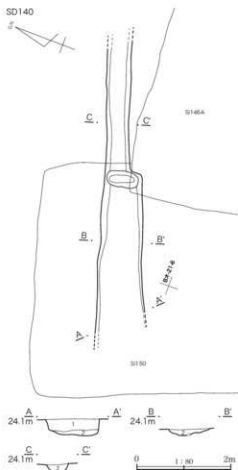
- SK192
- ① 淡灰色土 白色粒やや少量、炭化物少量、しまりやや強。
  - ② 暗灰色土 白色粒微量、粘土上、しまり強。
  - ③ 淡黄灰色土 粘質砂やや多量、しまりやや弱。
  - ④ 淡灰色土 砂やや多量、しまりやや弱。

第36図 東V区 遺構実測図12

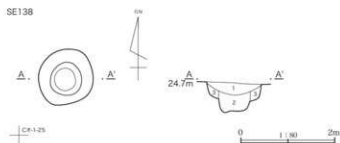
SI188-SK195-197



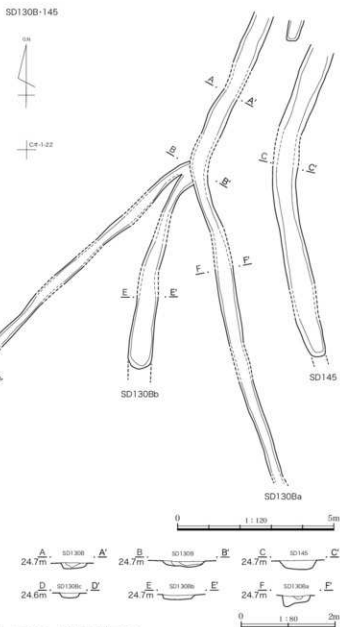
第37図 東V区 遺構実測図13



SD140  
 1 暗褐色土 白色粒微量。I類に似る。しまり・粘性やや強。  
 2 暗褐色土 I類に似る。しまり・粘性やや強。

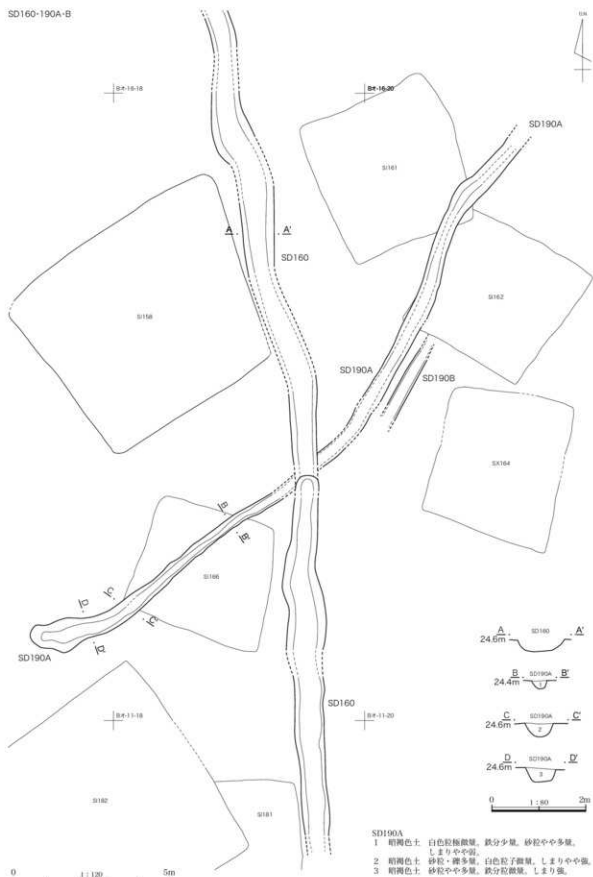


SE138  
 1 灰褐色粘土 白色粒子(チファラ?)少量。マンガシ粒少量沈着。しまり・粘性非常に強。  
 2 暗褐色土 マンガシ粒少量沈着。しまり・粘性強。  
 3 灰褐色粘土 鉄分粒少量沈着。しまり強。粘性非常に強。



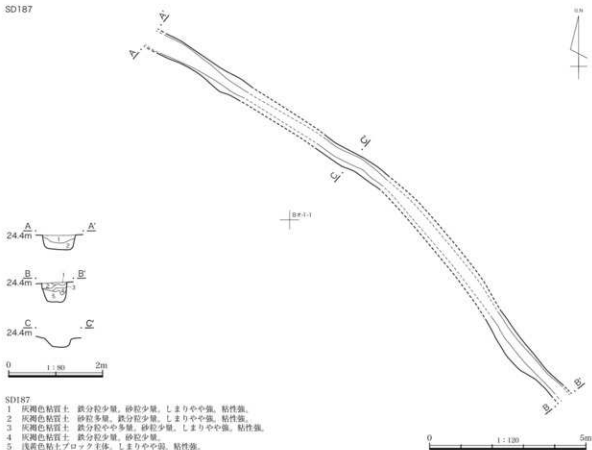
第38図 東V区 遺構実測図14

SD160-190A-B



第39図 東V区 遺構実測図15

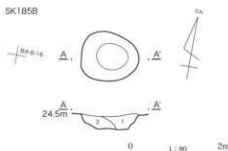
SD187



SD187

- 1 灰褐色粘質土 鉄分粒少量、砂粒少量、しまりやや弱、粘性強。
- 2 灰褐色粘質土 砂粒多量、鉄分粒少量、しまりやや弱、粘性強。
- 3 灰褐色粘質土 鉄分粒中量多量、砂粒少量、しまりやや弱、粘性強。
- 4 灰褐色粘質土 鉄分粒少量、砂粒少量。
- 5 浅黄色粘土ブロック主体、しまりやや弱、粘性強。

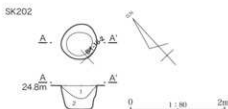
SK185B



SK185B

- 1 暗褐色土 粘土多量、しまり強。
- 2 暗褐色土 カーボン多量、粘土ブロック少量、しまりやや弱。

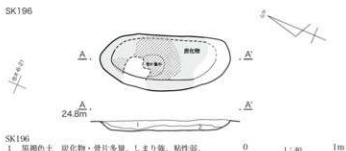
SK202



SK202

- 1 黒褐色土 田耕ブロックと青灰色砂のブロック粘土質、しまり強、粘性弱。
- 2 青褐色土 青褐色砂ブロックに少量の黒色土混入、しまり強、粘性弱。

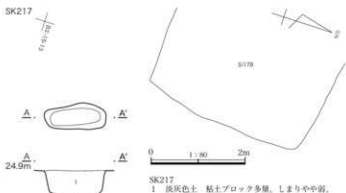
SK196



SK196

- 1 黒褐色土 炭化物・骨片多量、しまり強、粘性弱。
- 2 灰褐色土 炭化物・骨片少量、しまりやや弱、粘性強。

SK217

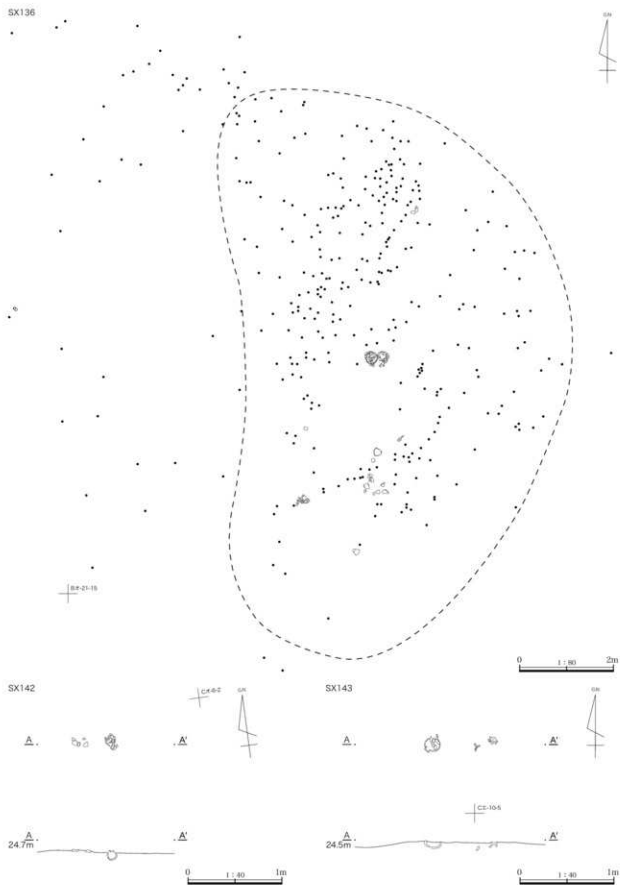


SK217

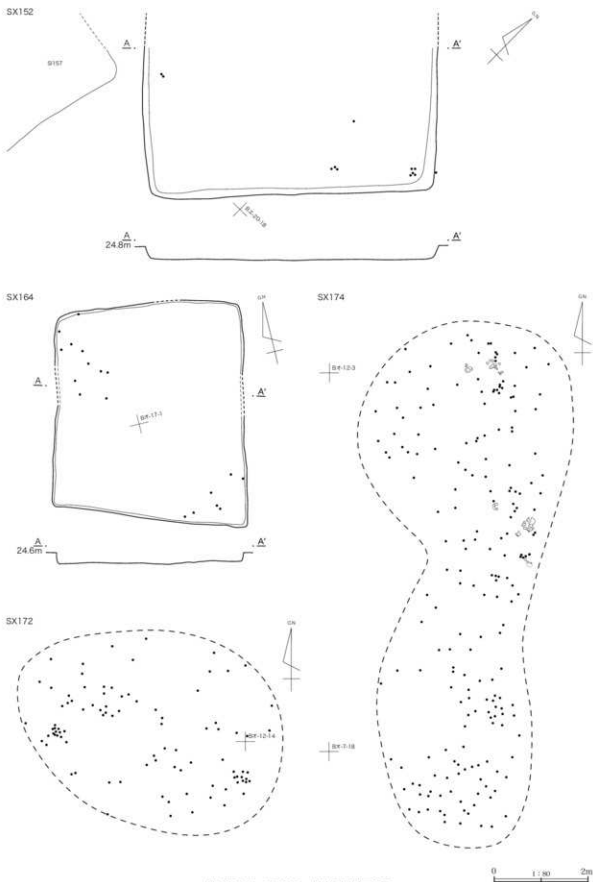
- 1 灰褐色土 粘土ブロック多量、しまりやや弱。

第40図 東V区 遺構実測図16

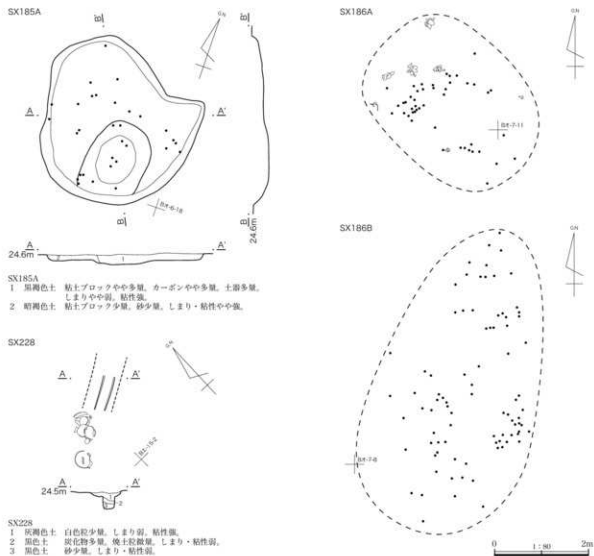




第41図 東V区 遺構実測図17

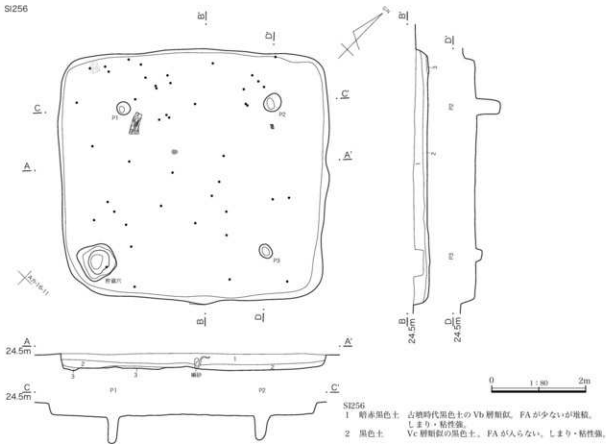


第 42 图 東V区 遺構実測図 18

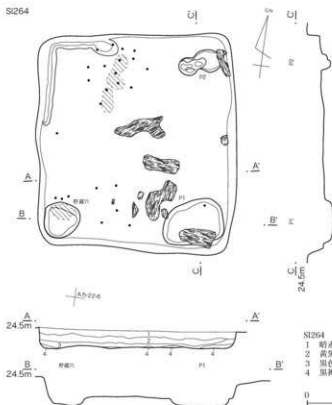


第43図 東V区 遺構実測図19

SI256



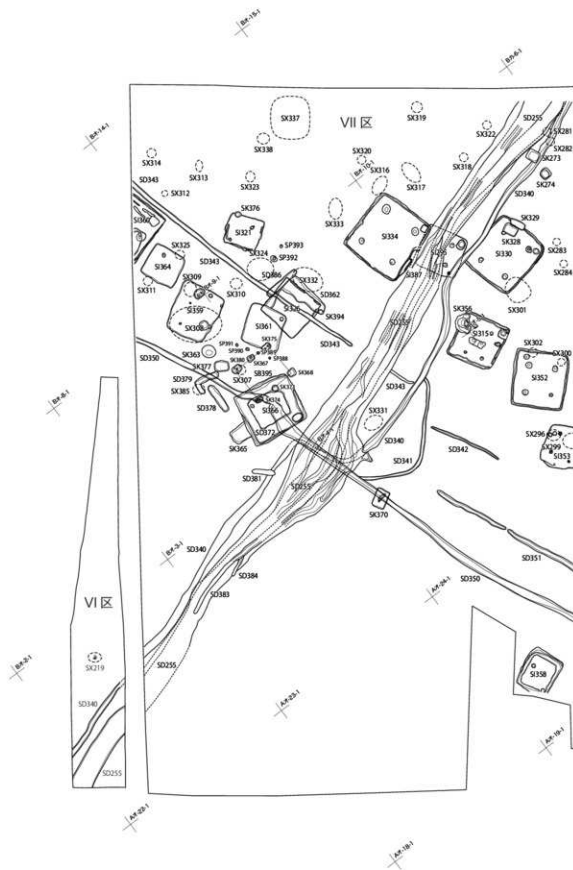
SI264



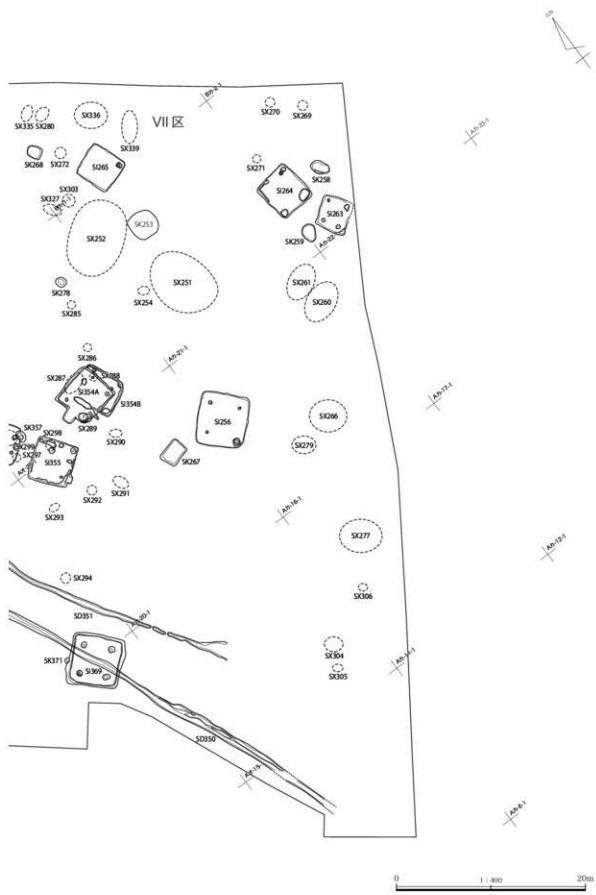
SK253

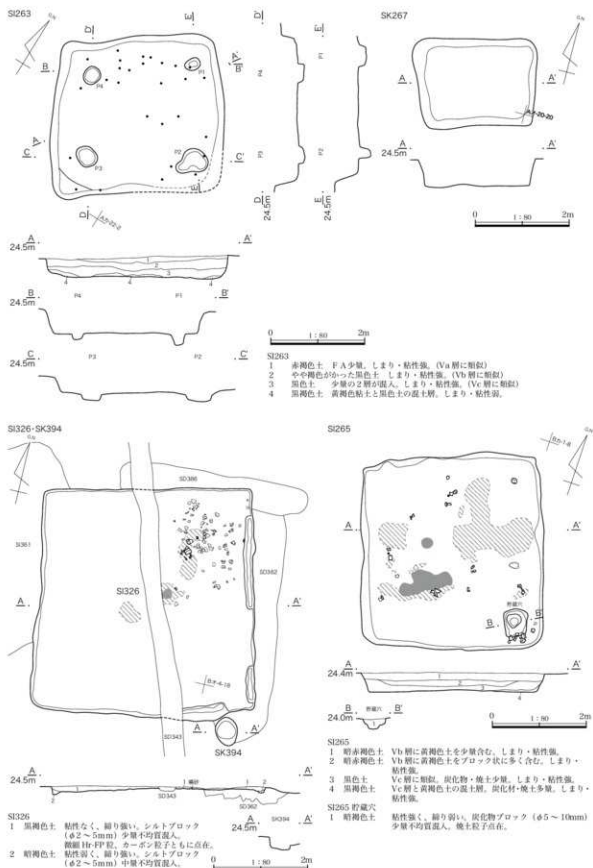


第44図 東VII区 遺構実測図1

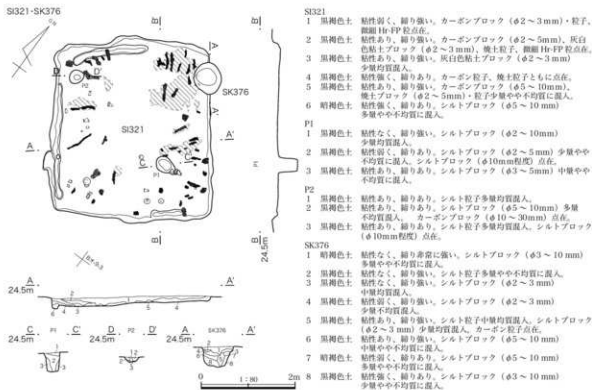
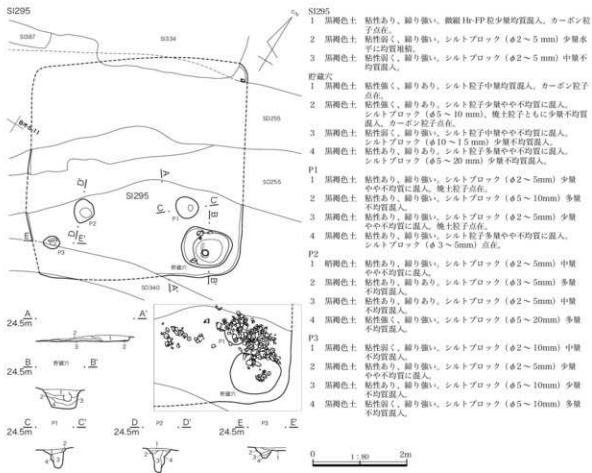


第45図 東VI・VII区 全体図



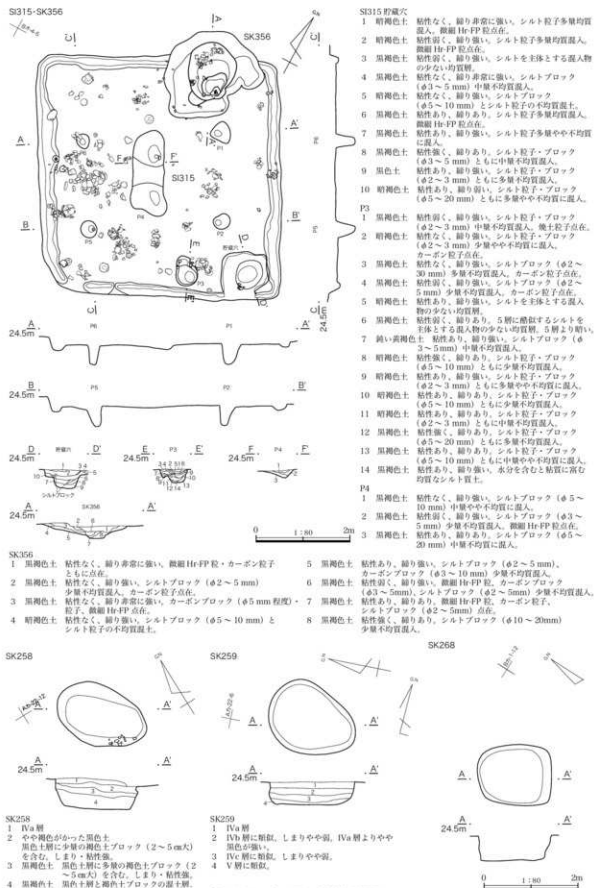


第46図 東VII区 遺構実測図2



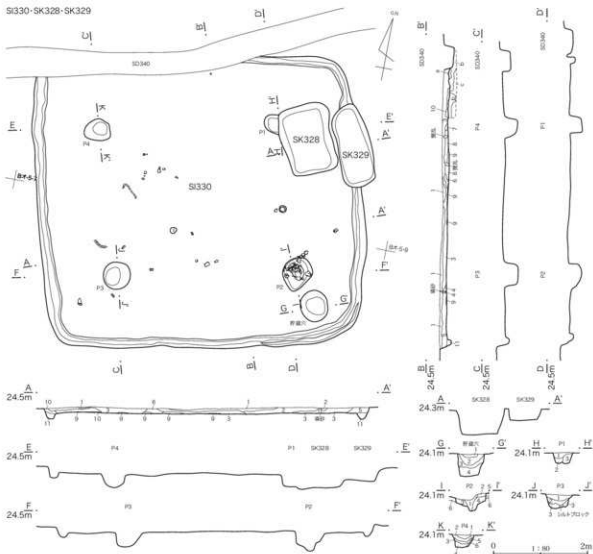
第47図 東VII区 遺構実測図3





第48図 東VII区 遺構実測図4

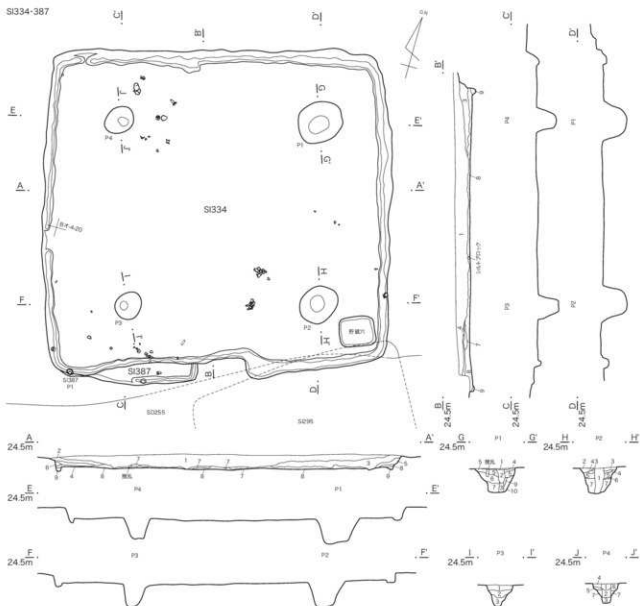
SI330-SK328-SK329



SI330	粘性弱く、締り強い。微細 Hr-FP 粒少量や中不均質に混入。再鉄化。	P1	黒褐色土	粘性弱く、締り強い。カーボンブロック (φ2~10 mm) 少量不均質混入。カーボンブロック (φ2~10 mm) 点在。		
2	暗褐色土	粘性なく、締り強い。微細 Hr-FP 粒・シルトブロック (φ3~5 mm) とともに少量不均質混入。	2	黒褐色土	粘性あり、締りあり。カーボン粒中量不均質混入。カーボンブロック (φ5~10 mm)、シルトブロック (φ5~10 mm) とともに少量不均質混入。	
3	黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~5 mm) 少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒・カーボン粒子・焼土粒子点在。	3	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ3~5 mm) 少量や不均質に混入。カーボン粒子点在。	
4	暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ3~5 mm) 中量不均質混入。焼土粒子点在。	P2	1	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5 mm) 少量や不均質に混入。
5	黒褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~5 mm) 中量や不均質に混入。	2	鈍い黄褐色土	粘性なく、締り強い。シルト粒子多量均質混入。	
6	黒褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3 mm) 少量均質混入。	3	黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック (φ2~3 mm) 少量や不均質に混入。	
7	暗褐色土	粘性弱く、締り強い。微細 Hr-FP 粒少量や中不均質に混入。	4	暗褐色土	粘性弱く、締り強い。円礫 (φ10~20 mm) 少量不均質混入。	
8	暗褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~3 mm) 少量不均質混入。	5	暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。	
9	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト質土にカーボン粒少量や中不均質に混入。再鉄化発達。	6	黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルト粒中量不均質混入。	
10	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ3~5 mm) 中量不均質混入。再鉄化発達。	P3	1	暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3 mm) 少量不均質混入。カーボンブロック (φ3~5 mm) 点在。
11	暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルト粒子多量や中不均質に混入。	2	暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ5~10 mm) 中量不均質混入。カーボンブロック (φ3~5 mm) 点在。	
a	暗褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~20 mm) 多量不均質混入。再鉄化発達。	3	黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~10 mm) 多量や不均質に混入。	
b	黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~20 mm) 中量不均質混入。再鉄化発達。	P4	1	黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルト粒子中量均質混入。
c	灰黄褐色土	粘性なく、締りあり。シルトブロック。	2	黒褐色土	粘性あり、締り強い。カーボン粒多量均質混入。	
野取穴	1	黒褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3 mm) 中量や不均質に混入。	3	黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルト粒子多量や中不均質に混入。シルトブロック (φ5~10 mm) 少量不均質混入。
1	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5 mm) 中量均質混入。	4	黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルト粒子多量不均質混入。シルトブロック (φ5~10 mm) 少量不均質混入。	
3	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5 mm) 少量や不均質に混入。シルトブロック (φ10 mm 程度) 点在。	5	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒少量不均質混入。シルトブロック (φ2~3 mm) 点在。	
4	黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ5~10 mm) 少量不均質混入。	6	黒褐色土	粘性弱く、締りあり。シルト粒子多量や中不均質に混入。	

第 49 図 東VII区 遺構実測図 5

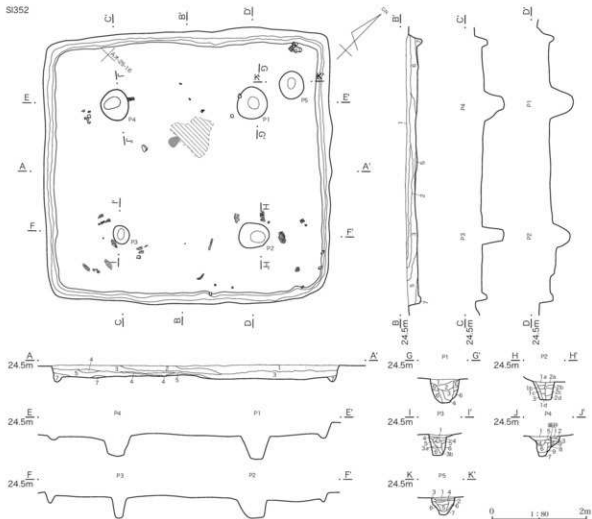
SI334-387



- SI334
- |         |  |        |   |
|---------|--|--------|---|
| 1 黒褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルト粒子、微細Hr-FP粒ともに少量不均質混入。シルトブロック(φ2~3mm)少量中不均質に混入。 | 9 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)、カーボンブロック(φ2~10mm)ともに点在。       |
| 2 暗褐色土  | 粘性なく、締り強い。微細Hr-FP粒少量均質混入。シルトブロック(φ3~5mm)少量不均質混入。             | 10 P2  | 1 黒褐色土  |
| 3 暗褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)、微細Hr-FP粒、カーボン粒子点在。                 | 2 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)多量不均質混入。                      |
| 4 暗褐色土  | 粘性弱く、締り強い。微細Hr-FP粒少量均質混入。微細Hr-FP粒点在。                         | 3 黒褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量中不均質に混入。                               |
| 5 黒褐色土  | 粘性弱く、締り強い。カーボンブロック(φ3~5mm)とともに少量不均質混入。                       | 4 暗褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルト粒子・ブロック(φ5~20mm)ともに多量不均質混入。                |
| 6 黒褐色土  | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子中量均質混入。微細Hr-FP粒点在。                            | 5 黒褐色土 | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ2~10mm)少量中不均質に混入。シルトブロック(φ20mm程度)点在。 |
| 7 暗褐色土  | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量中不均質に混入。カーボン粒子点在。                           | 6 黒褐色土 | 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量中不均質に混入。                               |
| 8 黒褐色土  | 粘性弱く、締り強い。カーボン粒子・ブロック(φ2~5mm)ともに多量不均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)点在。  | 7 黒褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)中量中不均質に混入。                    |
| 9 黒褐色土  | 粘性弱く、締りあり。シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。カーボン粒子、微細Hr-FP粒ともに点在。       | P3     | 1 黒褐色土  |
| P1 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量中不均質に混入。カーボン粒子点在。                 | 2 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)少量中不均質に混入。                    |
| 2 黒褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ2~5mm)少量中不均質に混入。                          | 3 暗褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量中不均質に混入。門階(φ5~10mm)点在。                 |
| 3 黒褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ5~10mm)点在。                                | P4     | 1 黒褐色土  |
| 4 暗褐色土  | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)中量中不均質に混入。シルト粒子少量不均質混入。            | 2 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量中不均質に混入。                     |
| 5 黒褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ5~10mm)多量中不均質に混入。                         | 3 黒褐色土 | 粘性弱く、締りあり。細砂粒多量不均質混入。                                   |
| 6 暗褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ5~20mm)中量不均質混入。シルト粒子中量中不均質に混入。            | 4 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。                      |
| 7 黒褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ5~10mm)多量中不均質に混入。                         | 5 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)少量均質混入。                       |
| 8 黒褐色土  | 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ3~5mm)多量中不均質に混入。                          | 6 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。                      |
|         |  | 7 黒褐色土 | 粘性なく、締りあり。シルトブロック(φ2~5mm)中量中不均質に混入。                     |

第50図 東VII区 遺構実測図6

SI352



SI352

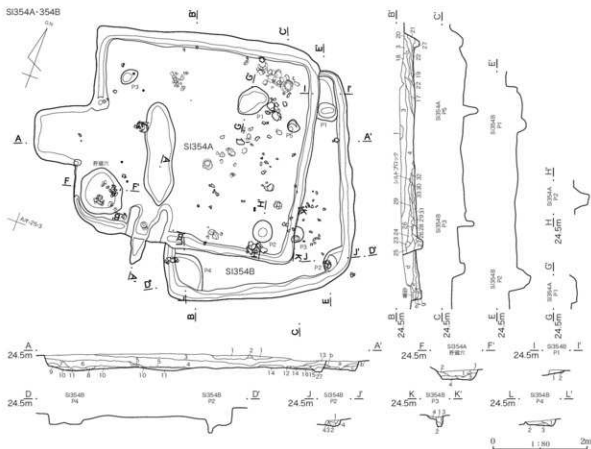
- 1 暗褐色土 粘性なく、締り強い。微細砂粒中量均質混入。微細 Hr-FP 粒少量不均質混入。カーボン粒子点状。  
 2 暗褐色土 粘性なく、締り強い。1層に微細砂粒。1層より微細 Hr-FP 粒の程度が小さい。  
 3 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ3~5mm) 少量不均質混入。シルトブロック (φ10~20mm)・微細 Hr-FP 粒・カーボン粒子不連続点状。  
 4 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) と黒褐色土 (10YR2/3) の不均質混入。  
 5 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。  
 6 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm) 中量均質混入。  
 7 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子多量均質混入。  
 ※ 1・2・7層中に腐鉄発達。  
 P1  
 1 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm)・微細 Hr-FP 粒少量不均質混入。  
 2 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~20mm) 少量や不均質に混入。微細 Hr-FP 粒点在。  
 3 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ5~20mm) 少量不均質混入。  
 4 暗褐色土 粘性弱く、締りあり。シルトブロック (φ5~10mm) 中量均質混入。  
 5 暗褐色土 粘性なく、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  
 6 暗褐色土 粘性弱く、締りあり。シルト粒子中量や不均質に混入。  
 P2  
 1a 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量均質混入。  
 1b 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~10mm) 中量や不均質に混入。  
 1c 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 中量均質混入。  
 1d 暗褐色土 粘性あり、締り弱い。細砂粒多量均質混入。  
 2a 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 多量や不均質に混入。  
 2b 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子多量均質混入。  
 2c 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量均質混入。  
 2d 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子・細砂粒ともに中量均質混入。  
 3 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子・細砂粒ともに中量均質混入。

P3

- 1 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量や不均質に混入。  
 2 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~10mm) 中量不均質混入。  
 3a 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量や不均質に混入。  
 3b 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量や不均質に混入。  
 4 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量や不均質に混入。  
 5 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量均質混入。  
 6 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量や不均質に混入。  
 P4  
 1 暗褐色土 粘性弱く、締りあり。シルト粒子少量や不均質に混入。  
 2 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。シルトブロック (φ3~5mm) 中量や不均質に混入。  
 3 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。  
 4 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。シルトブロック (φ3~5mm) 中量不均質混入。  
 5 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。  
 6 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質に混入。シルトブロック (φ5~10mm) 中量や不均質に混入。  
 7 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。細砂粒少量や不均質に混入。  
 8 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  
 9 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。  
 P5  
 1 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm)・微細 Hr-FP 粒・カーボン粒子点状。  
 2 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~10mm) 中量不均質混入。  
 3 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。  
 4 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ5~20mm) 中量不均質混入。  
 5 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。  
 6 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均質混入。  
 7 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量や不均質に混入。

第 51 圖 東VII区 遺構実測図 7

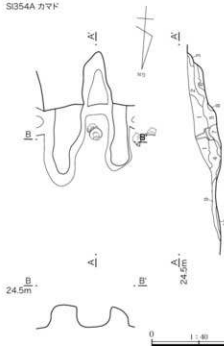




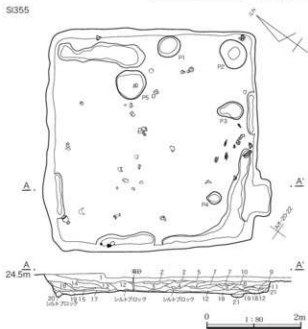
- SI354A
- |         |   |            |  |
|---------|---|------------|--|
| 1 黒褐色土  | 粘性なく、締り強い。微細1Hr-PP粒。シルト粒子とも少量や不均質に混入。                                 | 25 黒褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ3~5mm)少量均質に混入。                              |
| 2 黒褐色土  | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子少量均質混入。微細1Hr-PP粒点存在。                                   | 26 黒褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)中量や不均質に混入。カーボン粒点存在。                               |
| 3 黒褐色土  | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子中量均質混入。微細1Hr-PP粒点存在。                                   | 27 暗褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~3mm)少量や不均質に混入。焼土ブロック(φ2~3mm)・カーボン粒子とも点存在。 |
| 4 黒褐色土  | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ5~20mm)少量不均質混入。                        | 28 黒褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。カーボン粒点存在。                     |
| 5 暗褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルト粒子・シルトブロック(φ5~10mm)の不均質混入。                               | 29 黒褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)少量や不均質に混入。シルト粒子少量均質混入。                            |
| 6 黒褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。シルトブロック(φ2~5mm)。微細1Hr-PP粒点ととも点存在。            | 30 暗褐色土    | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)中量不均質混入。  |
| 7 黒褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。微細1Hr-PP粒点存在。        | 31 暗褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量や不均質に混入。  |
| 8 暗褐色土  | 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。   | 32 黒褐色土    | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)少量や不均質に混入。  |
| 9 暗褐色土  | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子少量や不均質に混入。シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。                     | 33 黒褐色土    | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。   |
| 10 暗褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。  | SI354A カマド |  |
| 11 暗褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。                                    | 1 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)。焼土ブロック(φ2~5mm)とも少量不均質混入。             |
| 12 暗褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。                        | 2 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック(φ2~5mm)中量や不均質に混入。焼土ブロック(φ10mm)粒点存在。                       |
| 13 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。                        | 3 明赤褐色土    | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック。  |
| 14 黒褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量や不均質に混入。                       | 4 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック(φ2~5mm)中量や不均質に混入。焼成灰ブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。                  |
| 15 暗褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。                      | 5 褐色土      | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。焼土ブロック(φ10~20mm)少量不均質混入。                   |
| 16 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)多量不均質混入。                                     | 6 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。焼土ブロック(φ10mm)粒点。カーボン粒子とも点存在。               |
| 17 暗褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)中量不均質混入。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ10mm)粒点存在。      | 7 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。焼土ブロック(φ10~20mm)多量不均質混入。   |
| 18 暗褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質に混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量や不均質に混入。                      | 8 暗褐色土     | 粘性弱く、締り強い。混入物の少ない均質質。  |
| 19 暗褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。 | 9 暗褐色土     | 粘性なく、締り強い。カーボン粒子。焼成灰とも中量や不均質に混入。焼土ブロック(φ2~5mm)点存在。                         |
| 20 黒褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)点存在。                             | 10 暗褐色土    | 粘性あり、締り強い。混入物の少ない均質質。  |
| 21 黒褐色土 | 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量や不均質に混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量均質混入。                       | SI354A 貯蔵穴 |  |
| 22 黒褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。シルト粒子少量均質混入。                        | 1 黒褐色土     | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量均質混入。焼土ブロック(φ2~5mm)点存在。                         |
| 23 暗褐色土 | 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量均質混入。焼土ブロック(φ3~5mm)点存在。                              | 2 暗褐色土     | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量均質混入。シルトブロック(φ10~20mm)少量不均質混入。                  |
| 24 暗褐色土 | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~3mm)中量や不均質に混入。                       | 3 暗褐色土     | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)。焼土ブロック(φ2~5mm)とも少量や不均質に混入。                      |
|         |   | 4 暗褐色土     | 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)中量や不均質に混入。                                       |

第53図 東VII区 遺構実測図9

S354A カマド



S355



- 17 黒褐色土 粘性強く、締りあり。カーボン粒子中量不均質混入。焼土粒子点在。  
 18 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量不均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。カーボン粒子点在。  
 19 黒褐色土 粘性強く、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。カーボンブロック(φ2~3mm)-焼土ブロック(φ2~5mm)ともに点在。  
 20 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  
 21 焼黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ3~10mm)多量不均質混入。カーボン粒子-焼土粒子ともに点在。

SP392-393



SP392

- 1 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量やや不均質に混入。シルトブロック(φ2~3mm)少量やや不均質に混入。  
 2 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ3~5mm)中量やや不均質に混入。  
 3 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ3~5mm)少量不均質混入。  
 4 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ3~5mm)中量やや不均質に混入。

SP393

- 1 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量やや不均質に混入。シルトブロック(φ4~10~20mm)点在。  
 2 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)中量やや不均質に混入。

第54図 東VII区 遺構実測図10

S354B

- a 暗褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。  
 b 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。  
 b' 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。  
 c 黒褐色土 粘性弱く、締りあり。シルト粒子多量不均質混入。  
 d 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シ微細Hr-FP粒点在。  
 e 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)点在。  
 f 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。シルトブロック(φ10~20mm)点在。  
 g 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルト粒子多量均質混入。

S354B P1

- 1 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ2~5mm)・(φ10~20mm)ともに少量不均質混入。  
 2 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。シルトブロック(φ5~10mm)点在。

S354B P2

- 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。  
 2 黒褐色土 粘性弱く、締りあり。シルト粒子多量やや不均質に混入。  
 3 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ3~5mm)中量均質混入。  
 4 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子-シルトブロック(φ2~3mm)ともに中量やや不均質に混入。

S354B P3

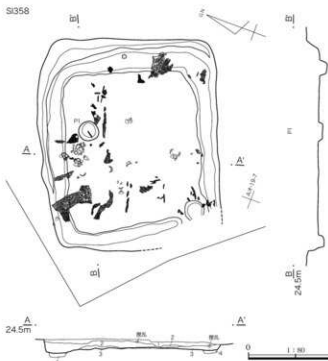
- 1 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)、カーボンブロック(φ5~5mm程度)ともに点在。  
 2 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。シルトブロック(φ5~10mm)点在。  
 3 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量やや不均質に混入。  
 4 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)多量不均質混入。

S354B P4

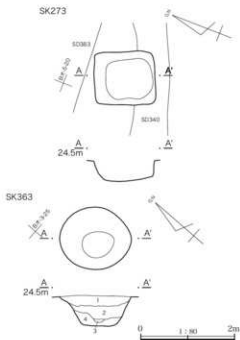
- 1 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。カーボンブロック(φ10mm程度)点在。  
 2 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。  
 3 暗褐色土 粘性なく、締りあり。シルト粒子多量やや不均質に混入。

S355

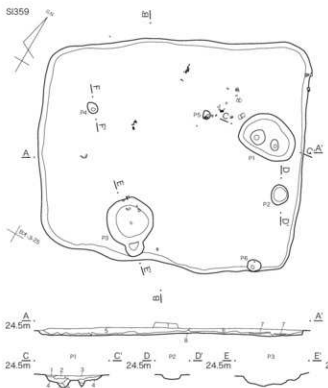
- 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。微細Hr-FP粒-カーボン粒子ともに点在。  
 2 黒褐色土 粘性なく、締り強い。カーボン粒-ブロック(φ2~3mm)ともに少量不均質混入。シルトブロック(φ3~5mm)-焼土粒子-微細Hr-FP粒点在。  
 3 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)-粒子ともに少量やや不均質に混入。カーボンブロック(φ2~5mm)点在。  
 4 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。カーボン粒子点在。  
 5 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。カーボン粒子-焼土粒子ともに点在。  
 6 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。カーボン粒子-焼土粒子ともに点在。  
 7 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)多量やや不均質に混入。カーボン粒子点在。  
 8 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルトブロック(φ3~5mm)少量不均質混入。カーボンブロック(φ5mm程度)点在。  
 9 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。少量やや不均質に混入。微細Hr-FP粒-カーボン粒子ともに点在。  
 10 黒褐色土 粘性なく、締りあり。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。シルトブロック(φ20~30mm)点在。  
 11 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。  
 12 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)中量やや不均質に混入。カーボンブロック(φ2~5mm)-焼土ブロック(φ2~3mm)ともに点在。  
 13 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子-ブロック(φ2~5mm)ともに多量やや不均質に混入。カーボン粒子(φ2~5mm)少量不均質混入。  
 14 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量やや不均質に混入。シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。シルト粒子点在。  
 15 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~10mm)中量不均質混入。カーボン粒子点在。  
 16 黒褐色土 粘性強く、締り強い。シルト粒子中量やや不均質に混入。シルトブロック(φ2~5mm)少量やや不均質に混入。カーボン粒子点在。



- SK358
- 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。微細 Hr-FP 粒点在。
  - 2 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量均質混入。
  - 3 黒褐色土 粘性強く、締り強い。カーボン粒子・焼土粒子・焼成灰の不均質混入。
  - 4 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~20mm) 中量やや不均質に混入。



- SK273
- 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子中量やや不均質に混入。微細 Hr-FP 粒点在。
  - 2 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均質混入。カーボン粒子点在。
  - 3 黒褐色土 粘性なく、締り強い。微細砂粒混入。
  - 4 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均質混入。

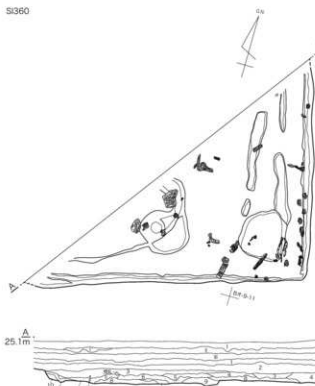


- SK359
- 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。微細 Hr-FP 粒少量やや不均質に混入。
  - 2 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。微細 Hr-FP 粒少量やや不均質に混入。カーボンブロック (φ2~5mm) 点在。
  - 3 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。微細 Hr-FP 粒点在。
  - 4 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量不均質混入。シルトブロック (φ3~5mm) 点在。
  - 5 暗褐色土 粘性なく、締りあり。微細 Hr-FP 粒少量不均質混入。カーボン粒子点在。
  - 6 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子・ブロック (φ3~5mm) 多量不均質混入。
  - 7 暗褐色土 粘性なく、締り非常に強い。シルト粒子・ブロック (φ3~5mm) のやや不均質な混入。
  - 8 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量やや不均質に混入。シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均質混入。
  - 9 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。
- P1
- 1 黒褐色土 粘性弱く、締りあり。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック (φ2~3mm) 少量不均質混入。カーボン粒子点在。
  - 2 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm) 少量やや不均質混入。シルトブロック (φ10~20mm) 点在。
  - 3 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック (φ2~5mm) 点在。
  - 4 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルトブロック (φ5~20mm) 中量均質混入。
  - 5 黒褐色土 粘性あり、締りあり。シルトブロック (φ5~20mm) 多量やや不均質に混入。
  - 6 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ5~30mm) 多量不均質混入。

第 55 図 東VII区 遺構実測図 11



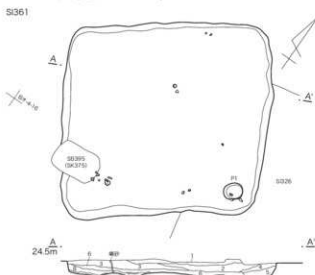
SI360



SI360

- I 灰青褐色土 粘性なく、締り非常に強い。旧耕作土。グライ化が進行するやや砂質な層。
- II 灰青褐色土 粘性なく、締り非常に強い。I層に類似するが、微細Hr-PP粒が確認される。
- III 褐色土 粘性なく、締り非常に強い。これもI層に似るが構成土層が均質なシルト質で目礫よりもさらに粒度の小さい微細Hr-PP粒が存在。細化が進み頭状発達。粘性弱く、締り強い。微細砂粒多量混入。微細Hr-PP粒存在。頭状発達。
- 1 暗褐色土 粘性なく、締り非常に強い。微細Hr-PP粒少量不均質混入。反状発達。
- 2 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。混入物の少ない緻密均質層。反状発達。
- 3 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)多量不均質混入。微細Hr-PP粒確認。反状発達。
- 4 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)多量不均質に混入。カーボン粒子。微細Hr-PP粒確認。
- 5 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質に混入。カーボン粒子(φ5~20mm)点在。
- 6 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)中量不均質に混入。焼土ブロック(φ2~3mm)点在。
- 7 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)多量ミナを以て埋積。
- 8 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。カーボンブロック(φ5~20mm)少量不均質混入。焼土ブロック(φ2~5mm)少量不均質に混入。不均質に混入。
- 9 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質に混入。
- 10 暗褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)中量不均質混入。

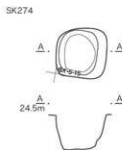
SI361



SI361

- 1 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)中量不均質に混入。微細Hr-PP粒存在。
- 2 黒褐色土 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。シルトブロック(φ3~5mm)点在。
- 3 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質に混入。微細Hr-PP粒・カーボン粒子ともに存在。
- 4 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)多量不均質混入。微細Hr-PP粒存在。
- 5 暗褐色土 粘性あり、締り強い。シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。微細Hr-PP粒存在。
- 6 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量不均質混入。
- 7 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。シルトブロック(φ2~3mm)点在。
- 8 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。
- 9 黒褐色土 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質に混入。シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。
- PI 1 黒褐色土 粘性なく、締り強い。シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質に混入。シルトブロック(φ10mm程度)点在。

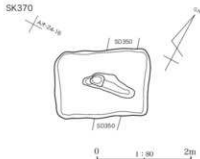
SK274



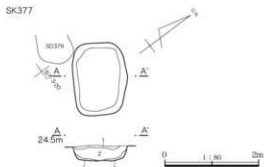
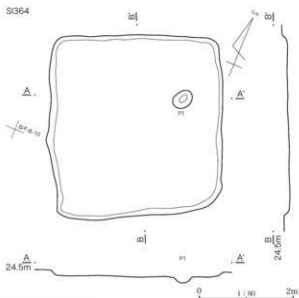
SK278



SK370

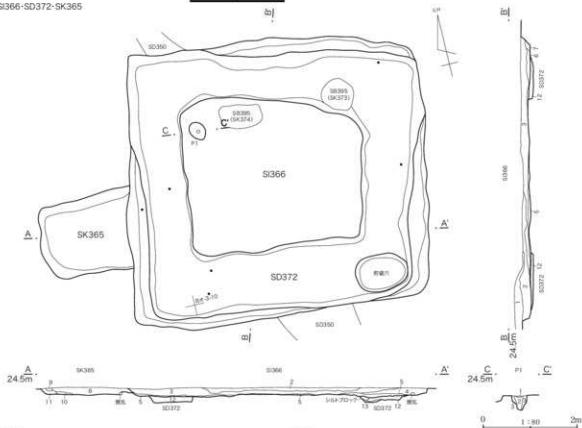


第56図 東VII区 遺構実測図12



- SK377
- 1 黒褐色土 粘性弱く、締り強い、シルトブロック (φ2~5mm) 少量の貫入。
  - 2 黒褐色土 粘性あり、締り強い、シルトブロック (φ2~10mm) 少量や平均的貫入。
  - 3 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ5~20mm) 中量不均貫入。

SI366-SD372-SK365



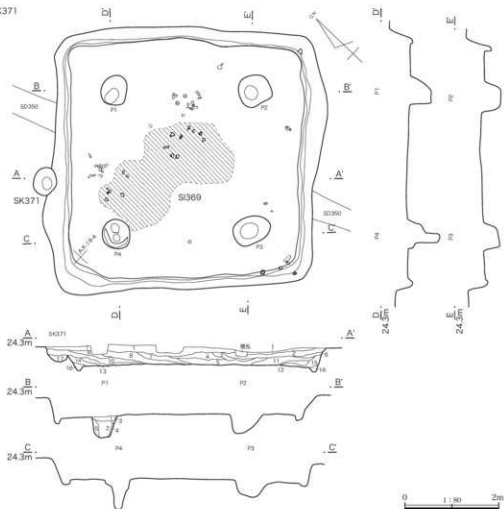
- SI366
- 1 暗褐色土 粘性なく、締りあり、細砂層、微細Hr-FP粒少量や不均貫入。
  - 2 黒褐色土 粘性なく、締り強い、シルト粒子中量均貫入、シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均貫入、微細Hr-FP粒点存在。
  - 3 黒褐色土 粘性弱く、締りあり、シルト粒子中量均貫入、シルトブロック (φ3~5mm) 少量不均貫入、微細Hr-FP粒点存在。
  - 4 黒褐色土 粘性弱く、締りあり、シルト粒子少量均貫入、シルトブロック (φ3~5mm)、ホーソップブロック (φ5mm程度)、微細Hr-FP粒点存在。
  - 5 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子中量均貫入、シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均貫入、シルトブロック (φ10~20mm) 点存在。
  - 6 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子中量不均貫入、シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均貫入。
  - 7 暗褐色土 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ2~10mm) 少量不均貫入、焼土粒点存在。

- SK365
- 8 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子少量や不均貫入、シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均貫入。
  - 9 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ3~5mm) 多量や不均貫入。
  - 10 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子多量均貫入。
  - 11 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子少量や不均貫入。
- SD372
- 12 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子中量や不均貫入、シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均貫入。
  - 13 暗褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子・ブロック (φ5~10mm) とともに多量や不均貫入。

- SI366 P1
- 1 黒褐色土 粘性弱く、締りあり、シルト粒子多量や不均貫入。
  - 2 黒褐色土 粘性あり、締りあり、シルト粒子多量均貫入。

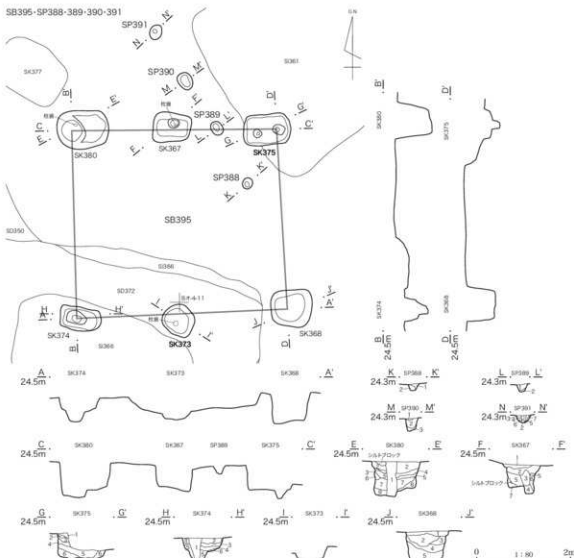
第57図 東VII区 遺構実測図 13

SI369-SK371



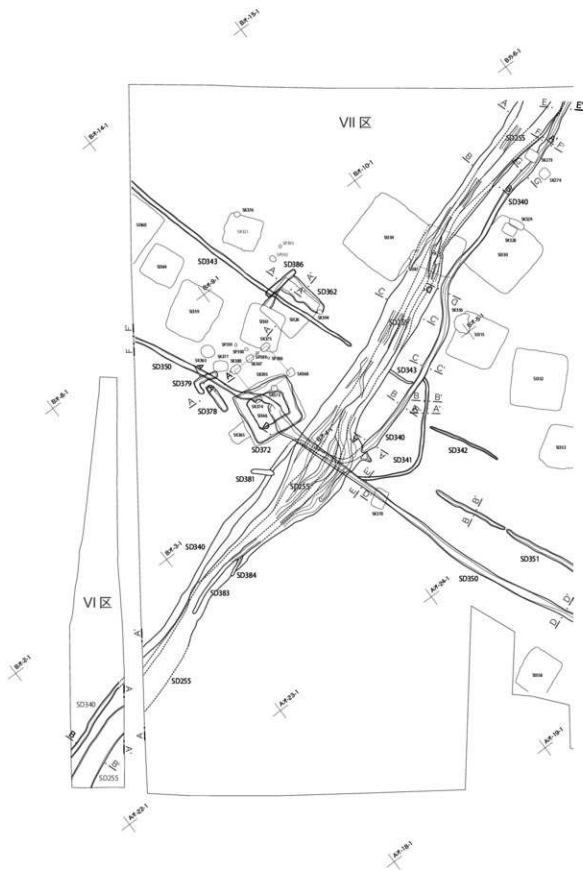
- |              |   |              |   |
|--------------|---|--------------|---|
| <b>SI369</b> |   | 11 黒褐色土      | 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ2~10mm) 少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒点。                              |
| 1 黒褐色土       | 粘性なく、締り強い、シルト粒子・ブロック (φ2~3mm) とともに中量均質混入。微細 Hr-FP 粒・カーボン粒子とも存在。         | 12 黒褐色土      | 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ2~3mm) 点。   |
| 2 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルト粒子少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒点。                                     | 13 黒褐色土      | 粘性弱く、締りあり、シルトブロック (φ2~5mm) 点。   |
| 3 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~10mm) 少量不均質混入。シルトブロック (φ20~50mm)、微細 Hr-FP 粒とともに点。 | 14 黒褐色土      | 粘性あり、締りあり、シルトブロック (φ2~3mm) 少量不均質混入。シルトブロック (φ10~20mm)、灰白色粘土ブロック (φ20mm 程度) 点。 |
| 4 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm) 少量不均質混入。シルトブロック (φ10mm 程度) 微細 Hr-FP 粒とともに点。  | 15 黒褐色土      | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~20mm) 中量不均質混入。  |
| 5 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。カーボンブロック (φ5~10mm) 点。                | 16 黒褐色土      | 粘性あり、締りあり。シルトブロック (φ2~5mm) 点。   |
| 6 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm) 少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒点。                         | SK371        |   |
| 7 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~10mm) 少量不均質混入。焼土粒子点。                              | 17 黒褐色土      | 粘性あり、締り強い。微細 Hr-FP 粒、焼土粒子とともに点。   |
| 8 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。シルトブロック (φ5~10mm) 点。                 | SI369 P1     |   |
| 9 黒褐色土       | 粘性なく、締り強い。シルトブロック (φ2~3mm) 微細 Hr-FP 粒とともに点。                             | 1 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 多量不均質混入。  |
| 10 黒褐色土      | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) シルトブロック (φ10~20mm)、微細 Hr-FP 粒少量不均質混入。        | 2 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 多量不均質混入。焼土粒子点。                                    |
|              |   | 3 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~10mm) 少量不均質混入。  |
|              |   | 4 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 多量不均質混入。   |
|              |   | 5 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。   |
| <b>SP288</b> |   | 2 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。   |
| 1 黒褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒確認。                        | 3 黒褐色土       | 粘性なく、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。   |
| 2 暗褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルトブロック (φ5~20mm) 多量不均質混入。                                    | <b>SP391</b> |   |
| <b>SP289</b> |   | 1 黒褐色土       | 粘性なく、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  |
| 1 黒褐色土       | 粘性弱く、締りあり。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。微細 Hr-FP 粒確認。                        | 2 黒褐色土       | 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量不均質混入。   |
| 2 暗褐色土       | 粘性弱く、締り強い。シルト粒子多量不均質混入。   | 3 黒褐色土       | 粘性弱く、締りあり。シルト粒子多量不均質混入。   |
| <b>SP390</b> |   | 4 黒褐色土       | 粘性あり、締り強い。シルト粒子中量不均質混入。   |
| 1 黒褐色土       | 粘性なく、締り強い。シルト粒子少量均質混入。  | 5 暗褐色土       | 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  |
|              |   | 6 黒褐色土       | 粘性あり、締りあり。シルトブロック (φ2~5mm) 少量不均質混入。   |
|              |   | 7 黒褐色土       | 粘性あり、締りあり。シルト粒子多量均質混入。  |

第 58 図 東VII区 遺構実測図 14

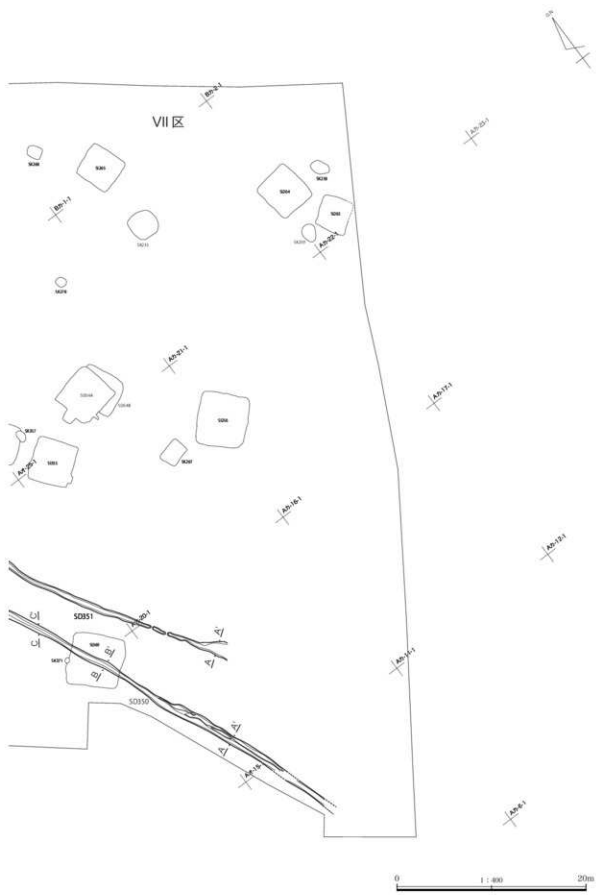


SK367	1 黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルト粒子・ブロック ( $\phi 2 \sim 3$ mm) とともに中量の中不均質に混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量不均質混入。	5 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック ( $\phi 10 \sim 20$ mm) 少量中不均質に混入。	
	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 3$ mm) 少量や不均質混入。シルトブロック ( $\phi 10 \sim 20$ mm)・微細Hr-FP粒・カーボン粒子点状。	6 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。	
	3 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 多量不均質混入。シルト粒子少量不均質混入。	SK375	1 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック ( $\phi 3 \sim 10$ mm) 少量中不均質に混入。微細Hr-FP粒確認。
	4 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量中不均質に混入。シルト粒子少量不均質混入。	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック ( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量不均質混入。	
	5 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルト粒子少量不均質混入。	3 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック ( $\phi 3 \sim 10$ mm) 少量中不均質に混入。	
	6 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 少量不均質混入。	4 黒褐色土	粘性強く、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量不均質混入。	
	7 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 中量不均質混入。	5 黒褐色土	粘性強く、締り強い。シルトブロック ( $\phi 3 \sim 10$ mm) 中量中不均質に混入。シルト粒子少量均質混入。カーボンブロック点状。	
SK368	1 暗褐色土	粘性なく、締り強い。微細Hr-FP粒を含む微細砂粒多量均質混入。	6 黒褐色土	粘性強く、締り強い。シルトブロック ( $\phi 10 \sim 20$ mm) 中量不均質混入。シルト粒子少量均質混入。	
	2 暗褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 中量不均質混入。シルトブロック ( $\phi 50$ mm 程度) 点状。	SK380	1 黒褐色土	粘性なく、締り強い。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 3$ mm) 少量不均質混入。
	3 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 5$ mm) 多量不均質混入。シルト粒子中量均質混入。	2 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 5$ mm) 少量中不均質に混入。シルトブロック ( $\phi 10$ mm 程度) 点状。	
	4 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 中量不均質混入。	3 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 10$ mm) 中量不均質混入。シルトブロック ( $\phi 20$ mm 程度) 点状。	
	5 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量不均質混入。	4 黒褐色土	粘性弱く、締りあり。細砂粒多量均質混入。	
SK374	1 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒子多量均質混入。	5 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 2 \sim 3$ mm) 中量均質混入。	
	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い。シルト粒子中量均質混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量不均質混入。	6 黒褐色土	粘性弱く、締りあり。細砂粒多量均質混入。	
	3 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルト粒子多量均質混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 点状。	7 黒褐色土	粘性弱く、締りあり。シルト粒子少量均質混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量中不均質に混入。	
	4 黒褐色土	粘性あり、締りあり。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 20$ mm) 中量不均質混入。シルト粒子少量中不均質に混入。	8 黒褐色土	粘性なく、締り強い。シルト粒子多量中不均質に混入。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量中不均質混入。	
			9 黒褐色土	粘性弱く、締り強い。シルトブロック ( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量不均質混入。	

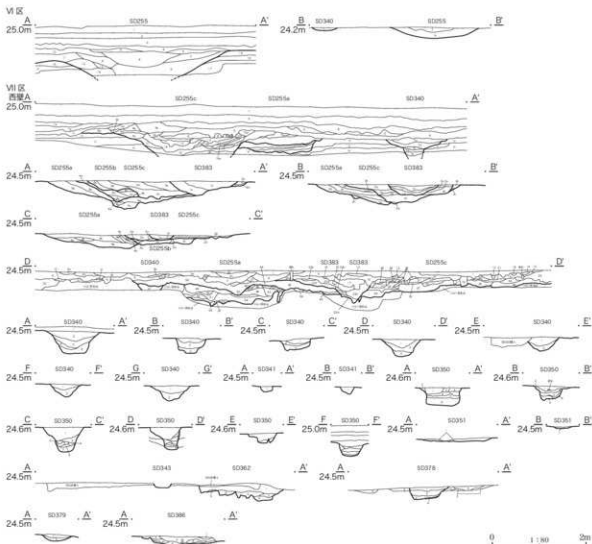
第59図 東VII区 遺構実測図15



第60図 東VII区 遺構実測図16



第4章 東地区の遺構と遺物



VI区

SD255

- 1 灰オリーブ 粘質土。土面にワウ、しまりや中強。
- 2 にぶい黄褐色 鉄分やや少量。しまりや中弱。
- 3 にぶい黄褐色
- 4 灰褐色 砂質土主体。AS-5か。
- 5 灰褐色 灰褐色粘質土主体。鉄少量。
- 6 灰褐色 灰褐色粘質土。砂粒はAS-Bに似る。
- 7 浅黄色 3層に似る。灰褐色粘土主体。砂粒やや多量。
- 8 浅黄色 浅黄色粘土ブロック粒子主体。
- 9 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色粘土粒子より層の粘質土と砂粒の混土層。鉄分少量。しまりや中弱。
- 10 7層とはほぼ同じ。粘質土やや多量。砂粒多量。
- 11 7層とはほぼ同じ。
- 12 7層とはほぼ同じ。
- 13 7層とはほぼ同じ。
- 14 灰褐色土 浅黄色粘土少量。暗褐色粘質土やや多量。砂粒多量。しまりや中弱。
- 15 砂粒主体。11層に似る。鉄少量。白色砂粒。しまりや中弱。
- 16 12層にほぼ似る。灰褐色土。浅黄色粘土少量。砂粒主体。しまりや中弱。
- 17 暗灰褐色土 粘質土多量。砂粒やや多量。
- 18 粘質土 粘質土主体。砂粒やや少量。

SD340

- 1 暗褐色土 粘質土。砂粒多量。鉄分やや多量。

西壁 A-A'

- I 灰褐色土 粘性なく、締り非常に強い。目録作。グライ化が進行するやや砂質な層。
- II 灰褐色土 粘性なく、締り非常に強い。I層に類似するが、微細Hr-FP粒が確認される。
- III 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。微細砂粒多量混入。微細Hr-FP粒点在。質鉄塊混。
- IV 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。
- V 灰褐色土 粘性なく、締り強い。微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。
- VI 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。微細砂粒多量混入。微細Hr-FP粒確認。

VII

灰褐色土

- 1a 暗褐色土 粘性なく、締り非常に強い。As-6多量均質混入。微細Hr-FP粒少量均質混入。Hr-FP粒 (φ5~10mm) 点在。
- 1b 灰褐色土 粘性なく、締り非常に強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 1c 灰褐色土 粘性なく、締り非常に強い。細砂粒。微細Hr-FP粒確認。
- 2a 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。Hr-FP粒 (φ5~10mm) 点在。
- 2b 灰褐色土 粘性なく、締り強い。中砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 3a 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。Hr-FP粒 (φ5~20mm) 点在。
- 3b 灰褐色土 粘性なく、締り強い。やや乱れた細砂粒。微細Hr-FP粒確認。
- 3c 褐色土 粘性なく、締り強い。やや乱れた細砂粒。微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。
- 4a 灰褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。Hr-FP粒 (φ5~10mm) 点在。
- 4b 褐色土 粘性なく、締り強い。やや乱れた細砂粒。微細Hr-FP粒確認。
- 4c 褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 5 灰褐色土 粘性なく、締り非常に強い。細砂粒少量不均質混入。
- 6 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒少量不均質混入。微細Hr-FP粒確認。
- 7a 暗褐色土 粘性なく、締り強い。微細Hr-FP粒少量均質混入。
- 7b 灰褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 7c 灰褐色土 粘性弱く、締り強い。微細砂粒少量均質混入。微細Hr-FP粒確認。
- 7d 暗褐色土 粘性弱く、締り強い。微細砂粒やや不均質に混入。
- 7e 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 9 灰褐色土 粘性なく、締り強い。やや乱れた灰褐色粘土ブロック。
- 10a 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒少量均質混入。微細Hr-FP粒点在。
- 10b 灰褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。浅黄色粘土ブロック (φ10~20mm) 多量や不均質に混入。
- 11 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 12 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。
- 13 灰褐色土 粘性弱く、締り強い。細砂粒。浅黄色粘土ブロック (φ5~10mm) 多量不均質混入。
- 14 暗褐色土 粘性なく、締り強い。細砂粒。微細Hr-FP粒点在。

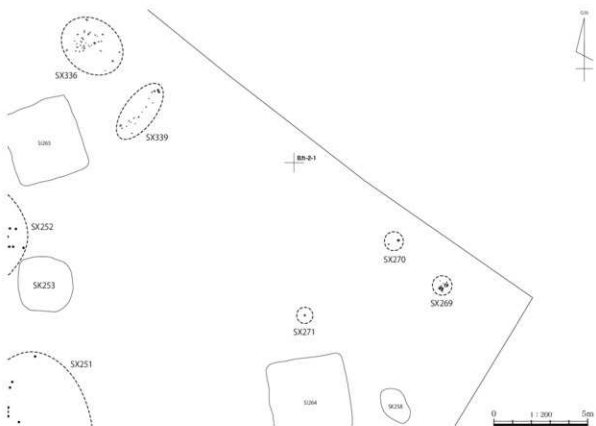
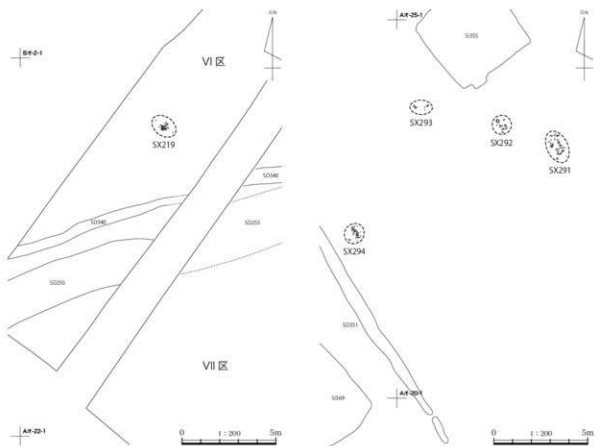
第61図 東VII区 遺構実測図17



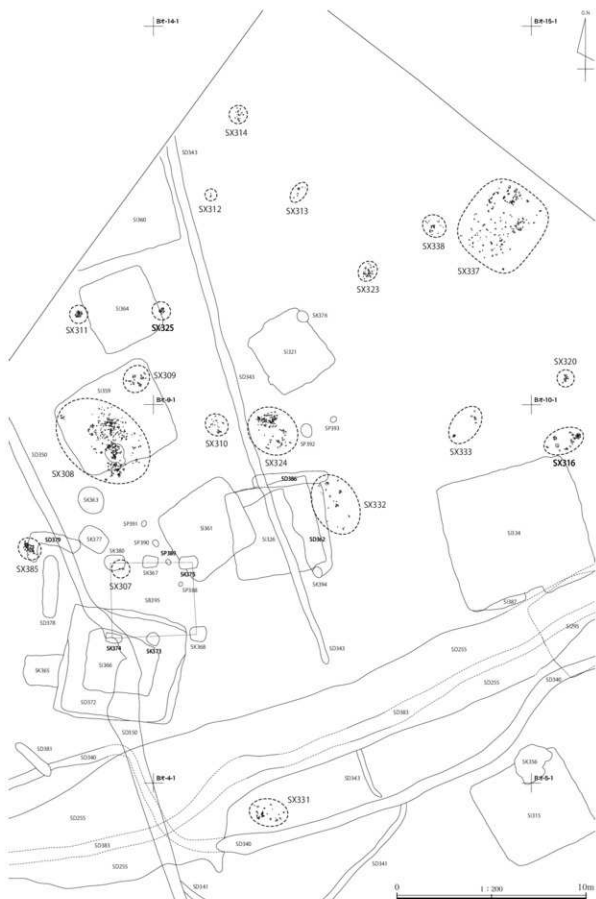


第4章 東地区の遺構と遺物

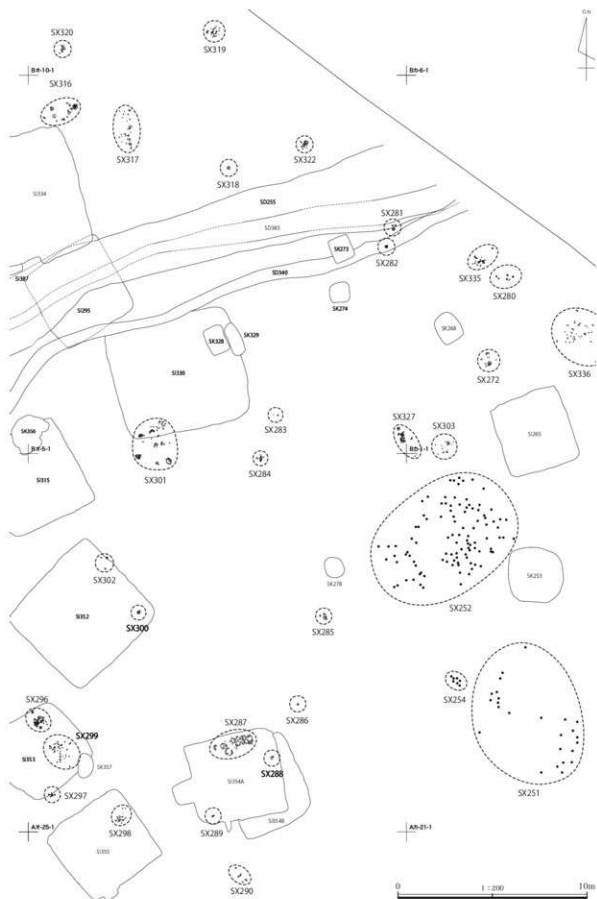
3 黒褐色土	粘性なく、締りあり、細砂層と微細砂層が散次のラミナを呈して堆積。	2 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。シルトブロック(φ20mm程度)・微細Hr-FP粒ともに点在。
SD340 C-C'		3 黒褐色土	粘性なし、締り強い、微細砂粒中量や不均質混入。微細Hr-FP粒点在。
1 暗褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子が散次のラミナを呈して堆積。微細Hr-FP粒混入。	4 暗褐色土	粘性なし、締り強い、シルトブロック(φ10~20mm)少量不均質混入。微細Hr-FP粒点在。
2 黒褐色土	粘性なく、締り強い、細砂層と微細砂層が散次のラミナを呈して堆積。	5 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルトブロック(φ10~20mm)中量均質混入。カーボン粒子点在。
3 黒褐色土	粘性なく、締り強い、シルトブロック(φ2~3mm)少量不均質混入。微細Hr-FP粒混入。	6 黒褐色土	粘性あり、締り強い、土山(シルト質の均質な層)に懸粒、カーボン粒子点在。
SD340 D-D'		7 黒褐色土	粘性あり、締り強い、混入物の少ない均質層。本層中に原状発達。
1 灰黄褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子多量均質混入。微細Hr-FP粒混入。	SD362	
2 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルト粒子が散次のラミナを呈して堆積。微細Hr-FP粒混入。	1 暗褐色土	粘性なく、締り強い、シルトブロック(φ5~20mm)少量不均質混入。
3 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルト粒子少量や不均質混入。微細Hr-FP粒混入。	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルト粒子少量均質混入。シルトブロック(φ5~10mm)点在。
SD340 E-E'		3 黒褐色土	粘性弱く、締りあり、シルトブロック(φ5~10mm)中量や不均質に混入。
1 灰黄褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子多量均質混入。微細Hr-FP粒混入。	4 黒褐色土	粘性あり、締りあり、シルトブロック(φ5~10mm)中量不均質混入。
2 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルト粒子が散次のラミナを呈して堆積。微細Hr-FP粒混入。	5 黒褐色土	粘性なく、締り強い、シルトブロック(φ2~3mm)少量均質混入。
SD340 F-F'		6 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。
1 灰黄褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子多量均質混入。微細Hr-FP粒混入。	SD351	
2 黒褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子が散次のラミナを呈して堆積。微細Hr-FP粒混入。	1 暗褐色土	粘性あり、締りあり、微細砂粒少量均質混入。微細Hr-FP粒中量均質混入。
SD340 G-G'		SD378	
1 灰黄褐色土	粘性なく、締り強い、シルト粒子多量均質混入。微細Hr-FP粒混入。	1 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルトブロック(φ3~10mm)少量不均質混入。微細Hr-FP粒点在。
2 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルト粒子が散次のラミナを呈して堆積。微細Hr-FP粒混入。	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルトブロック(φ2~10mm)少量不均質混入。微細Hr-FP粒混入。
SD341		3 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルトブロック(φ5~20mm)中量不均質混入。
1 黒褐色土	粘性あり、締り強い、微細Hr-FP粒、シルトブロック(φ5~10mm)ともに点在。	4 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルト粒子多量不均質混入。
SD350 A-A'		5 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルトブロック(φ5~10mm)少量不均質混入。
1 暗褐色土	粘性弱く、締り強い、微細Hr-FP粒点在。一部に微細砂粒のラミナが認められる。	6 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルトブロック(φ2~3mm)点在。
2 暗褐色土	粘性なく、締り強い、微細Hr-FP粒点在。微細砂少量均質均質混入。	7 暗褐色土	粘性強い、締りあり、シルト粒子多量均質混入。
3 黒褐色土	粘性なく、締り強い、微細砂粒中量均質混入。カーボン粒子点在。	SD379	
4 暗褐色土	粘性弱く、締り強い、微細Hr-FP粒少量や不均質に混入。微細砂粒少量不均質混入。	1 黒褐色土	粘性あり、締りあり、シルト粒子多量均質混入。
5 黒褐色土	粘性強く、締り強い、微細Hr-FP粒少量不均質混入。	2 黒褐色土	粘性あり、締り強い、シルト粒子多量均質混入。
6 黒褐色土	粘性強く、締り強い、カーボン粒子点在。	SD386	
SD350 B-B'		1 黒褐色土	粘性なく、締り強い、シルトブロック(φ2~3mm)少量や不均質に混入。
1 暗褐色土	粘性なく、締り強い、微細砂粒中量均質混入。微細Hr-FP粒・カーボン粒子ともに点在。	2 黒褐色土	粘性弱く、締り強い、シルトブロック(φ2~3mm)少量均質混入。
2 黒褐色土	粘性なく、締り強い、微細砂粒中量や不均質均質に混入。	3 黒褐色土	少量不均質混入。シルトブロック(φ2~3mm)少量や不均質に混入。カーボン粒子点在。
3 暗褐色土	粘性弱く、締りあり、微細砂粒少量均質混入。微細Hr-FP粒・カーボン粒子ともに点在。	4 黒褐色土	粘性弱く、締りあり、シルトブロック(φ2~5mm)少量不均質混入。
4 黒褐色土	粘性あり、締り強い、微細Hr-FP粒点在。		
5 黒褐色土	粘性強く、締り強い、カーボン粒子点在。		
SD350 C-C'			
1 暗褐色土	粘性なく、締り強い、微細砂粒中量や不均質混入。微細Hr-FP粒・カーボン粒子ともに点在。		



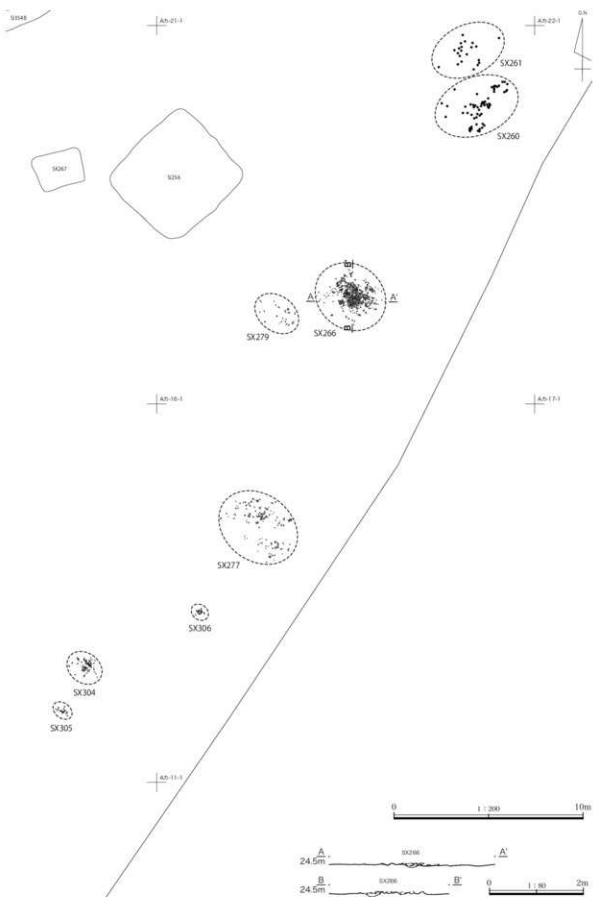
第 62 图 東VII区 遺構実測図 18



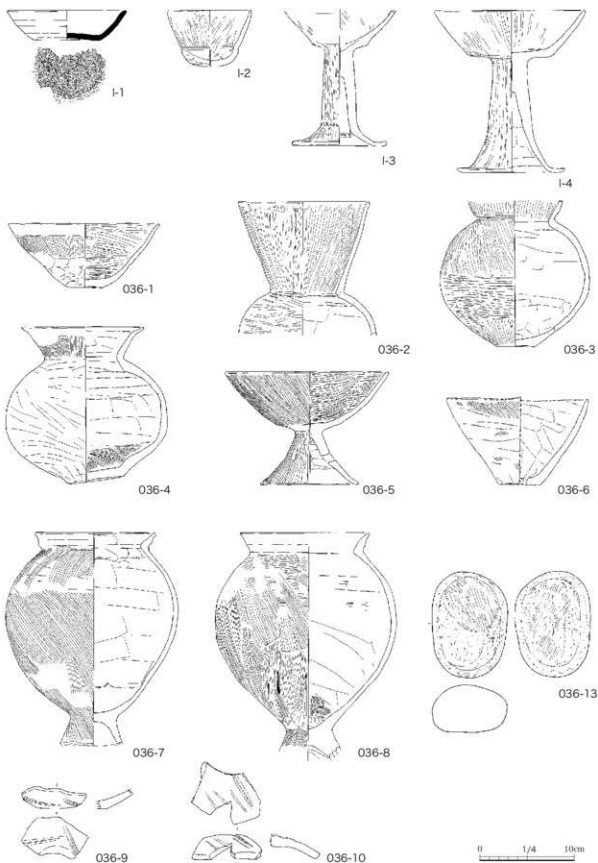
第63図 東VII区 遺構実測図19



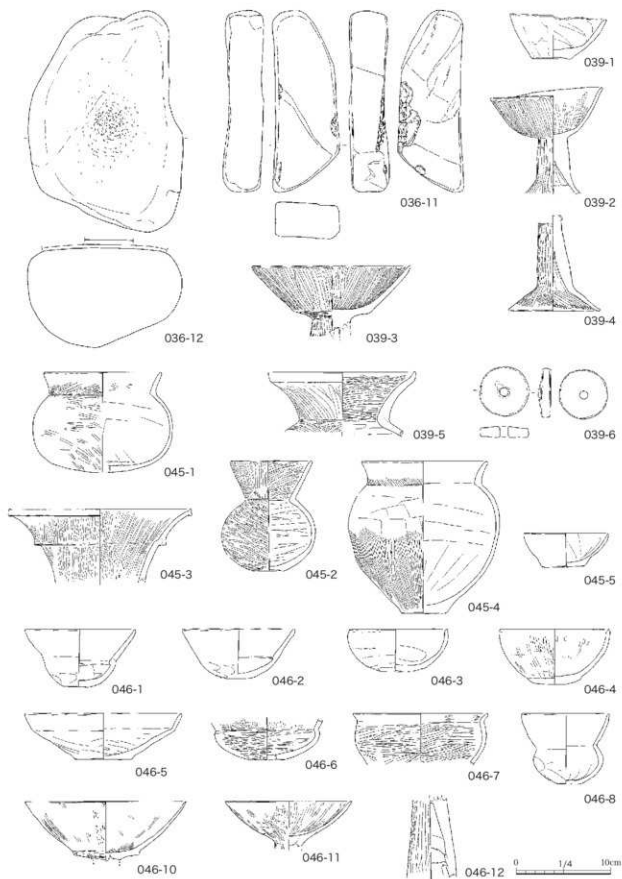
第 64 図 東VII区 遺構実測図 20



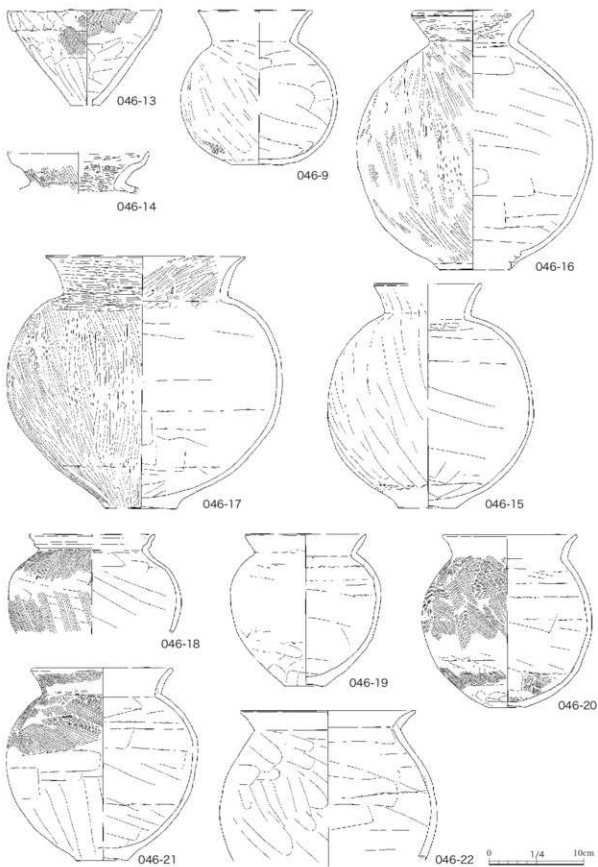
第65図 東VII区 遺構実測図 21



第66图 東地区 出土遺物実測図1 (1/4)

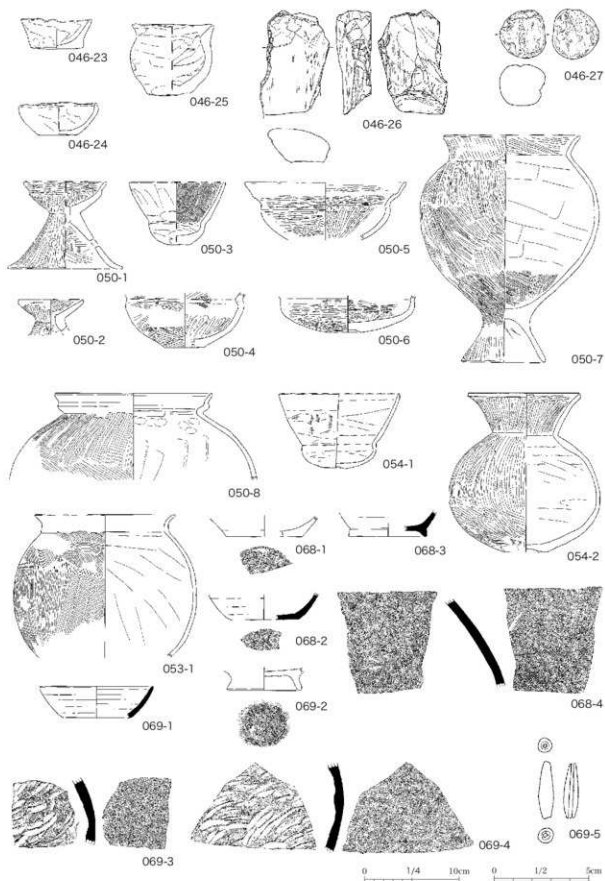


第 67 図 東地区 出土遺物実測図 2 (1/4)

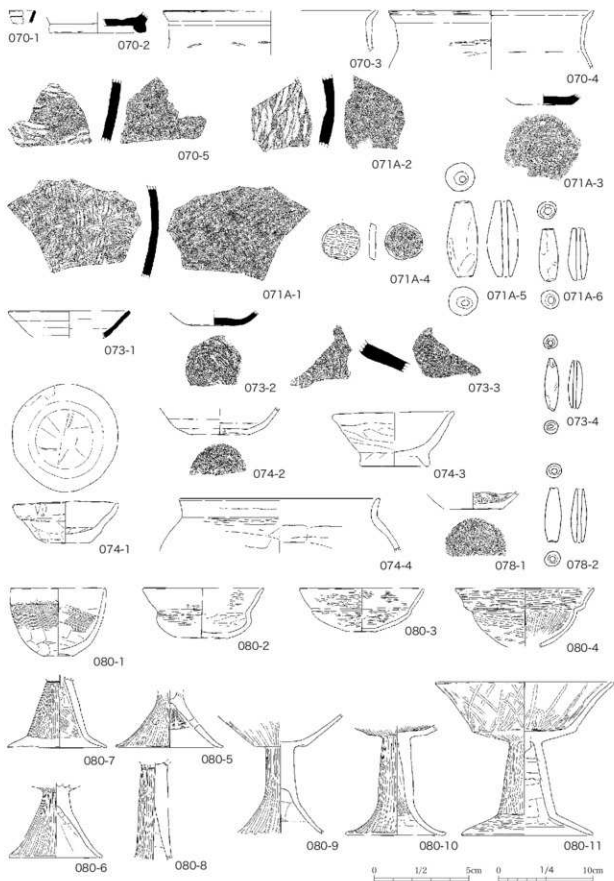


第 68 図 東地区 出土遺物実測図 3 (1/4)

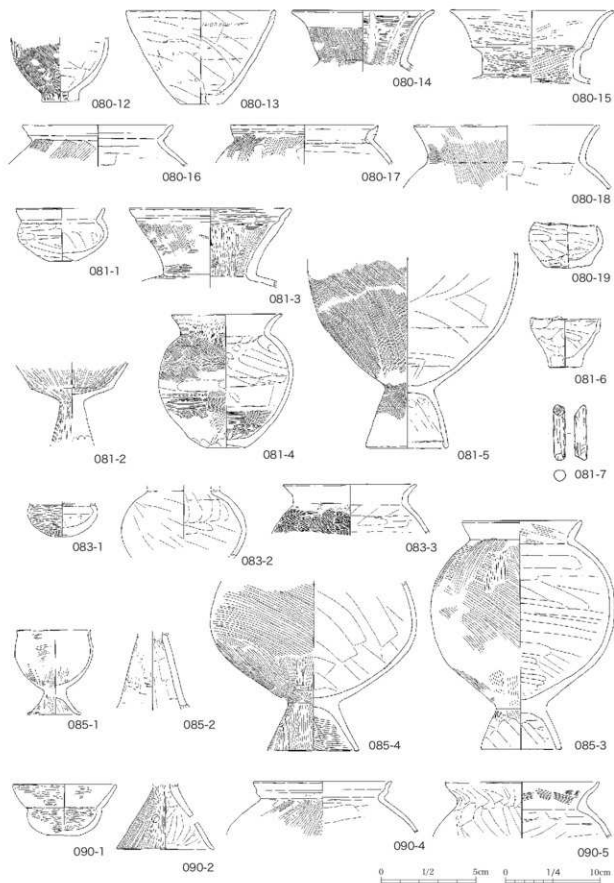




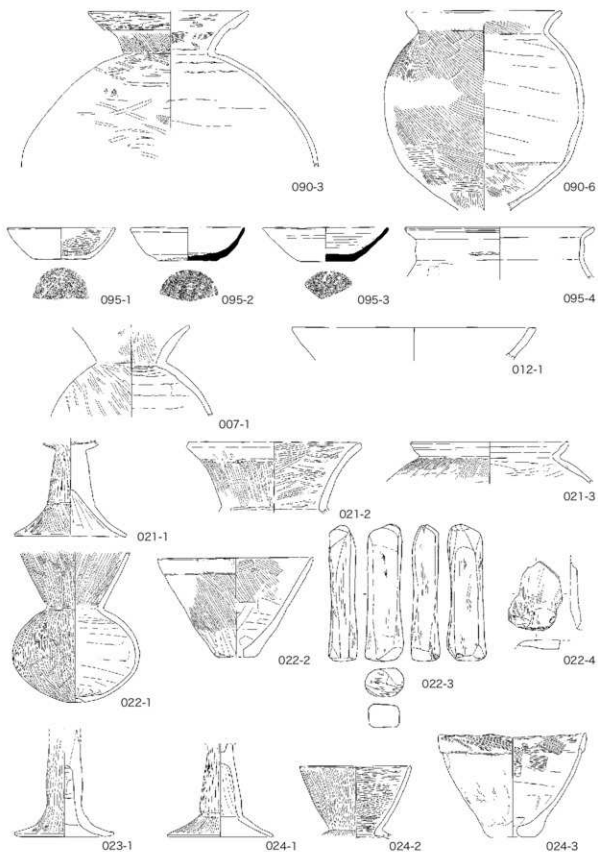
第 69 図 東地区 出土遺物実測図 4 (069-5 は 1/2、他は全て 1/4)



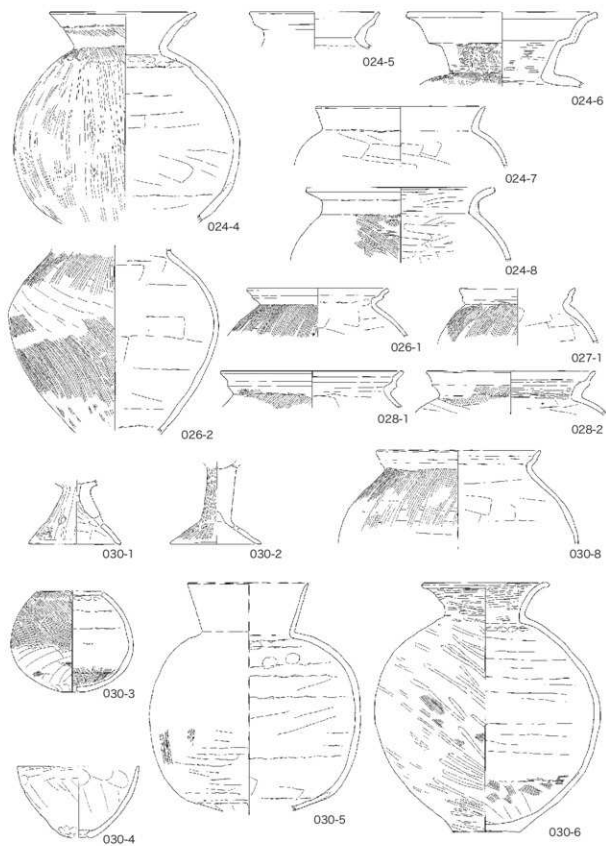
第70図 東地区 出土遺物実測図5 (071A-5・6、073-4、078-2は1/2、他は全て1/4)



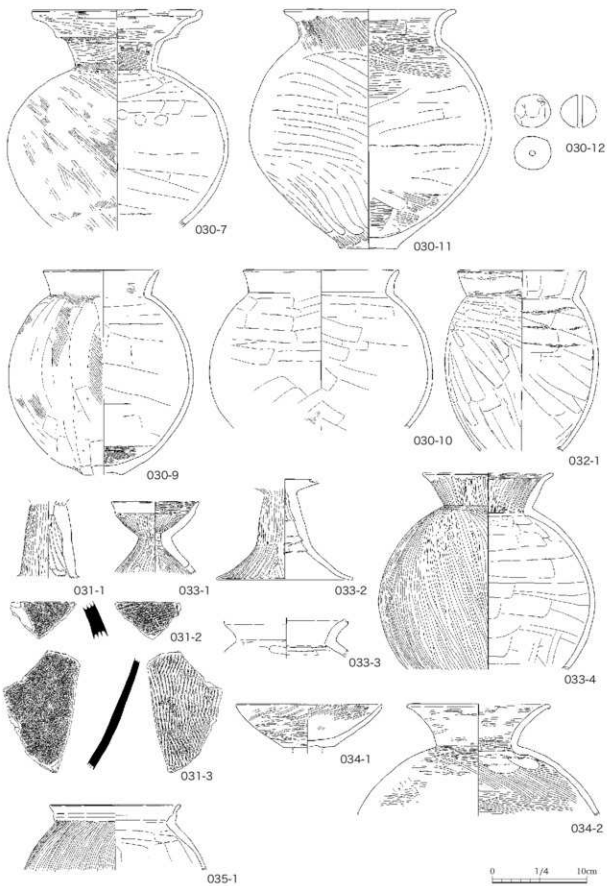
第71図 東地区 出土遺物実測図6 (081-7は1/2、他は全て1/4)



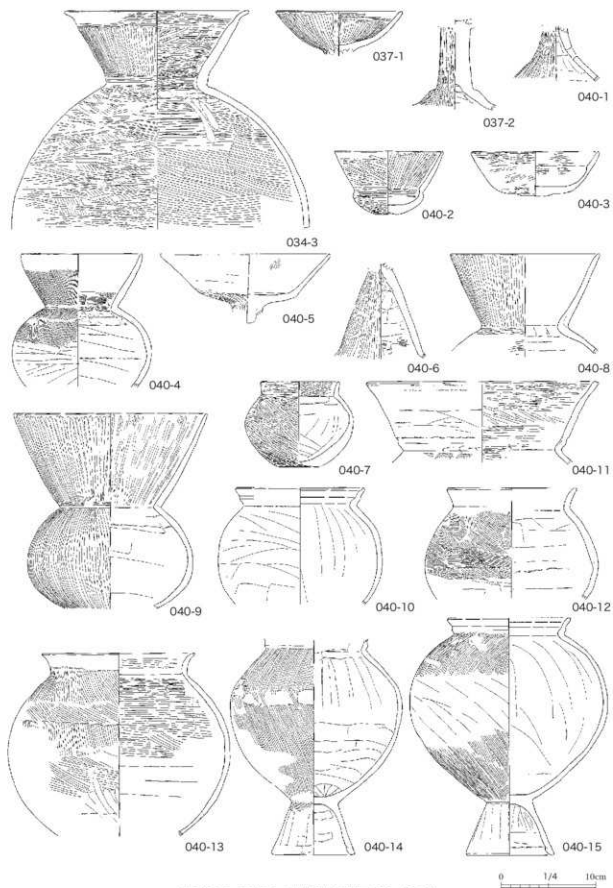
第 72 図 東地区 出土遺物実測図 7 (1/4)



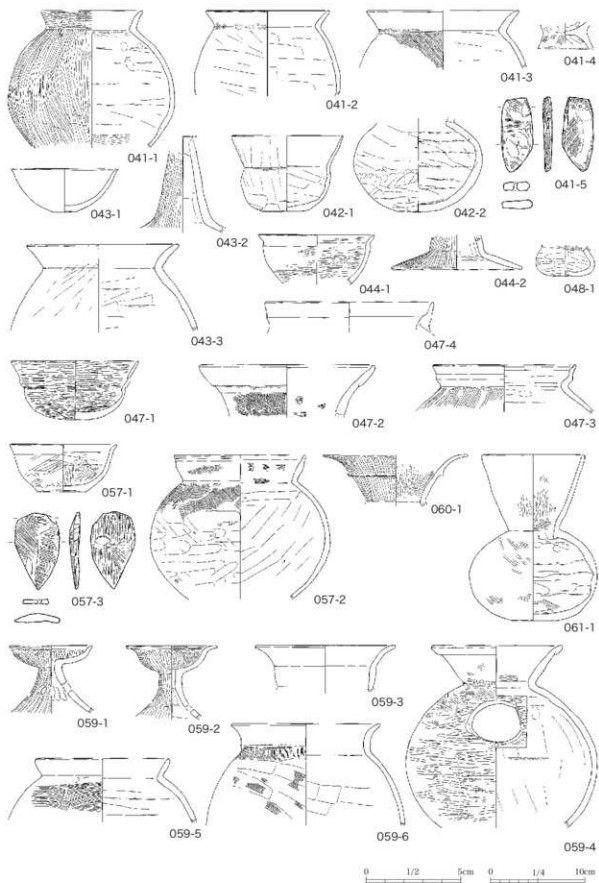
第73図 東地区 出土遺物実測図8 (1/4)



035-1  
 第74图 東地区 出土遺物実測図9 (1/4)

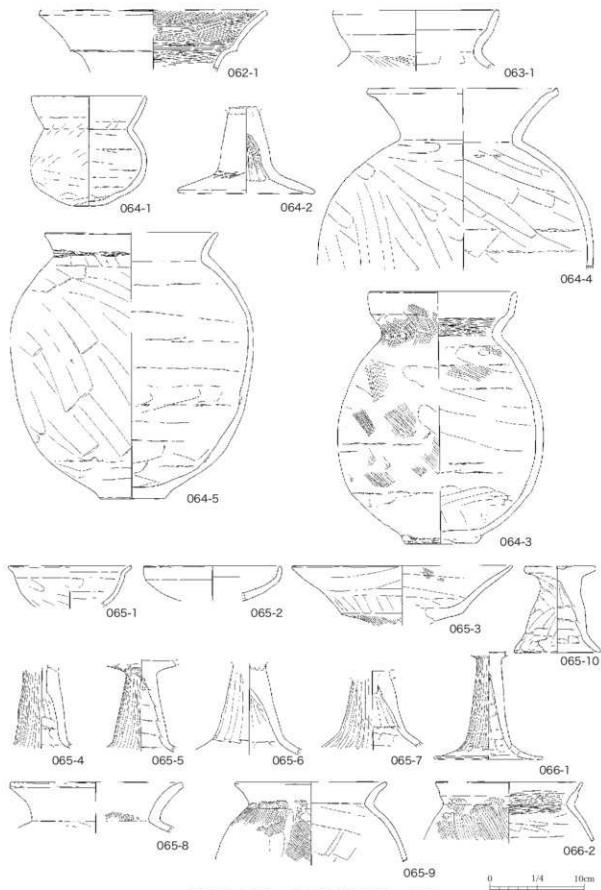


第75図 東地区 出土遺物実測図10 (1/4)

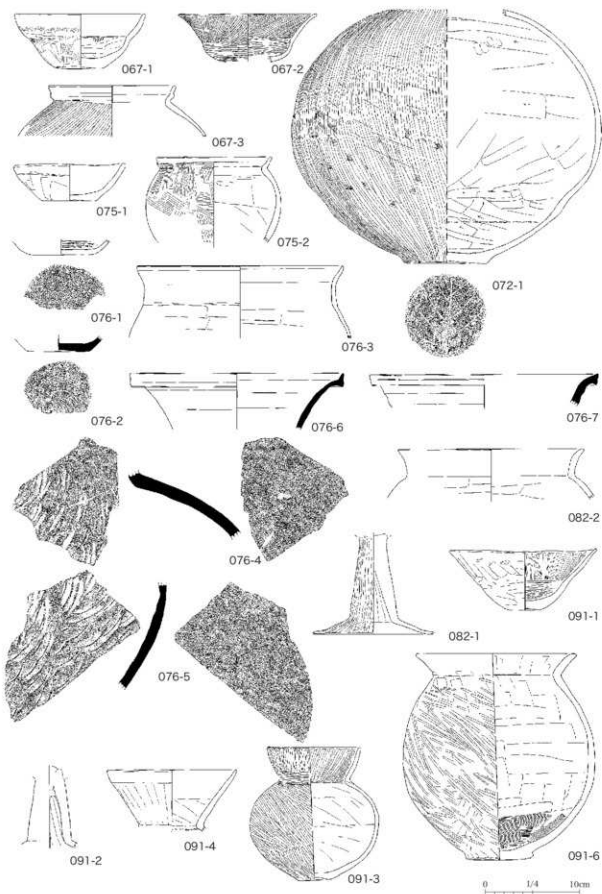


第76図 東地区 出土遺物実測図11 (041-5、057-3は1/2、他は全て1/4)

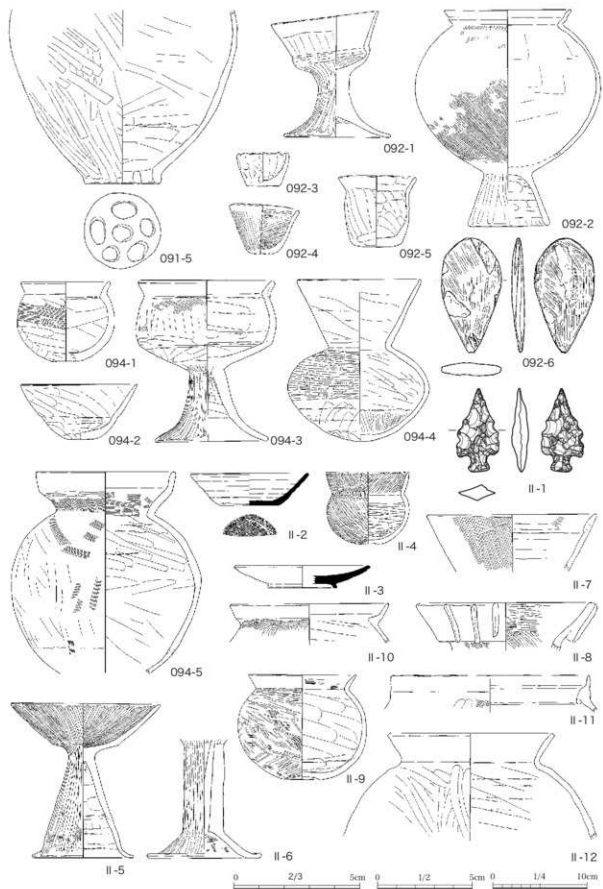




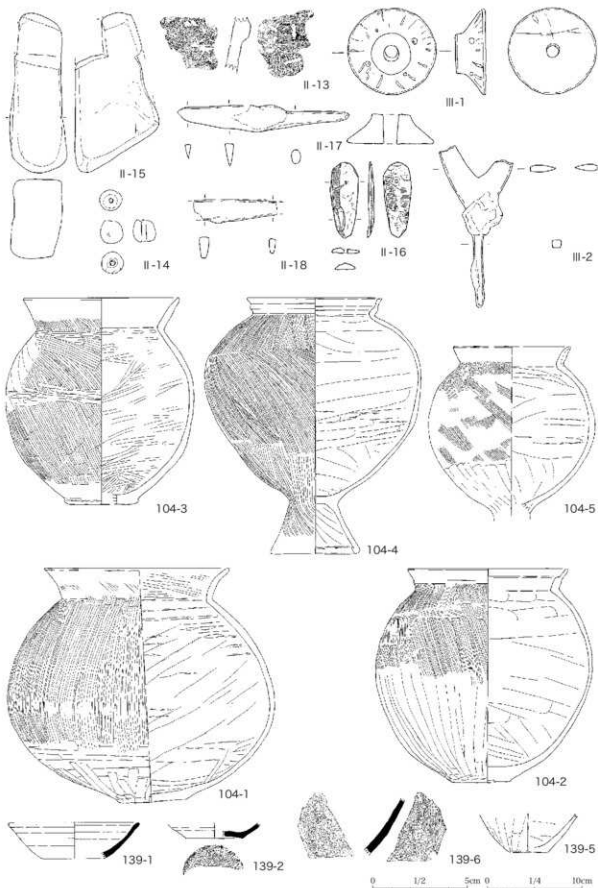
第77図 東地区 出土遺物実測図 12 (1/4)



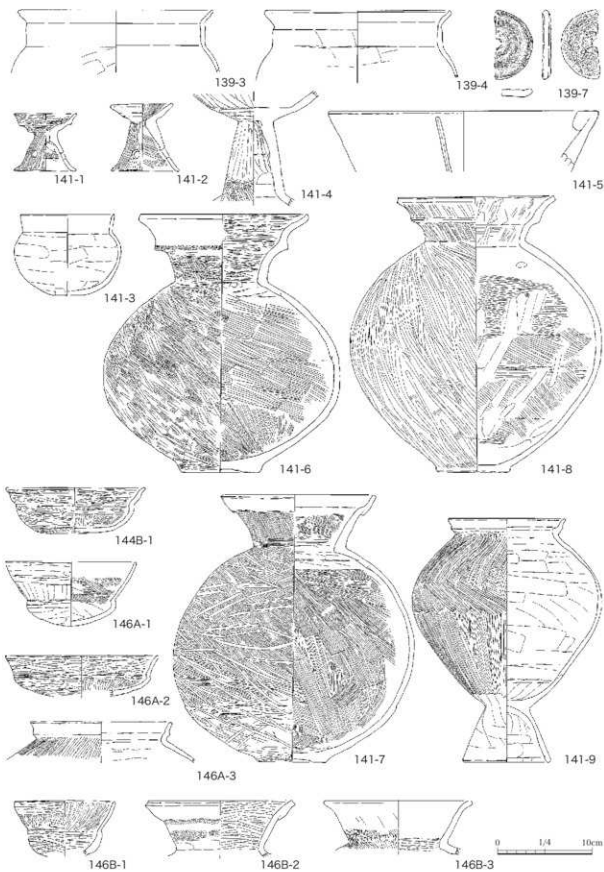
第78图 東地区 出土遺物実測図13 (1/4)



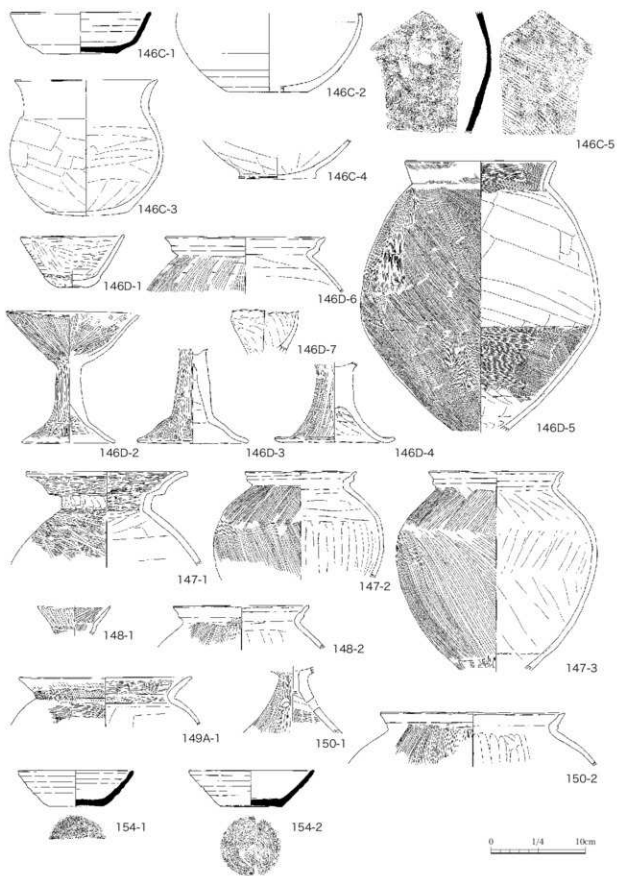
第79図 東地区 出土遺物実測図14 (II-1は2/3、092-6は1/2、他は全て1/4)



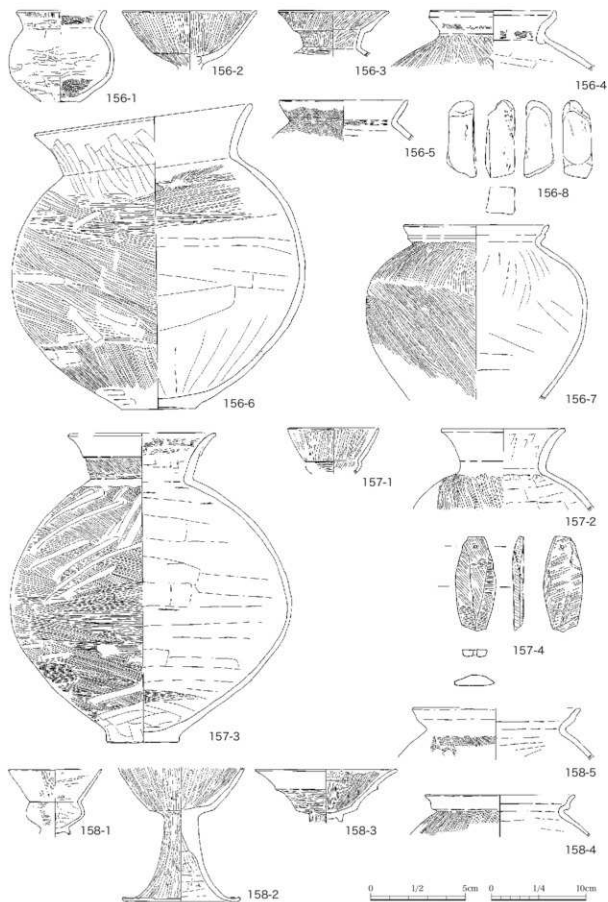
第80図 東地区 出土遺物実測図15 (II-16~18, III-1・2は1/2、他は全て1/4)



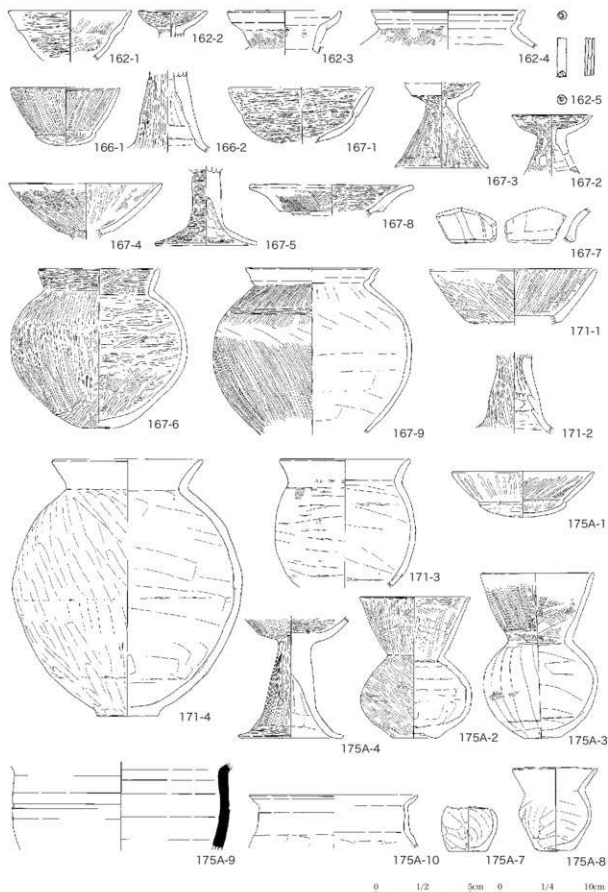
第81図 東地区 出土遺物実測図16 (1/4)



第 82 图 東地区 出土遺物実測図 17 (1/4)

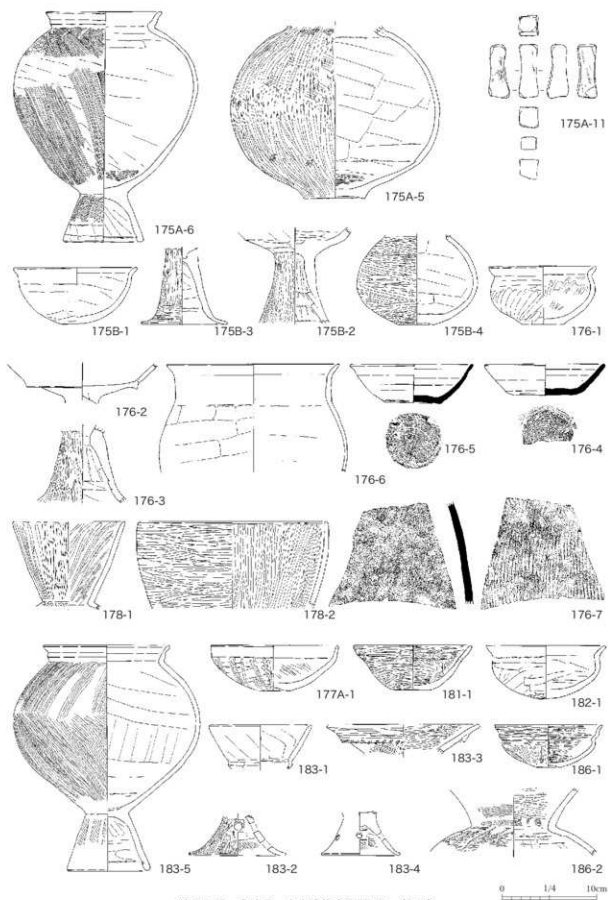


第83図 東地区 出土遺物実測図 18 (157-4は1/2、他は全て1/4)

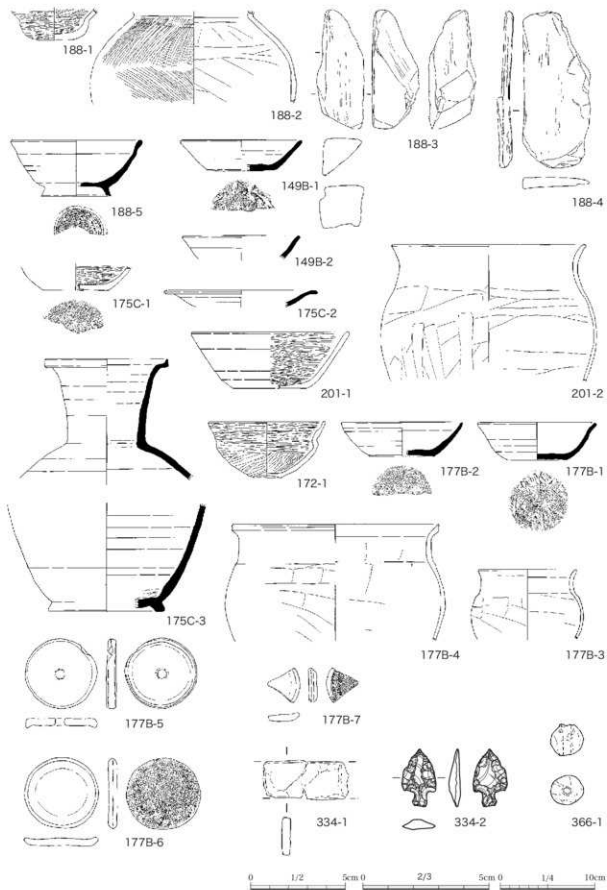


第84図 東地区 出土遺物実測図19 (162-5は1/2、他は全て1/4)

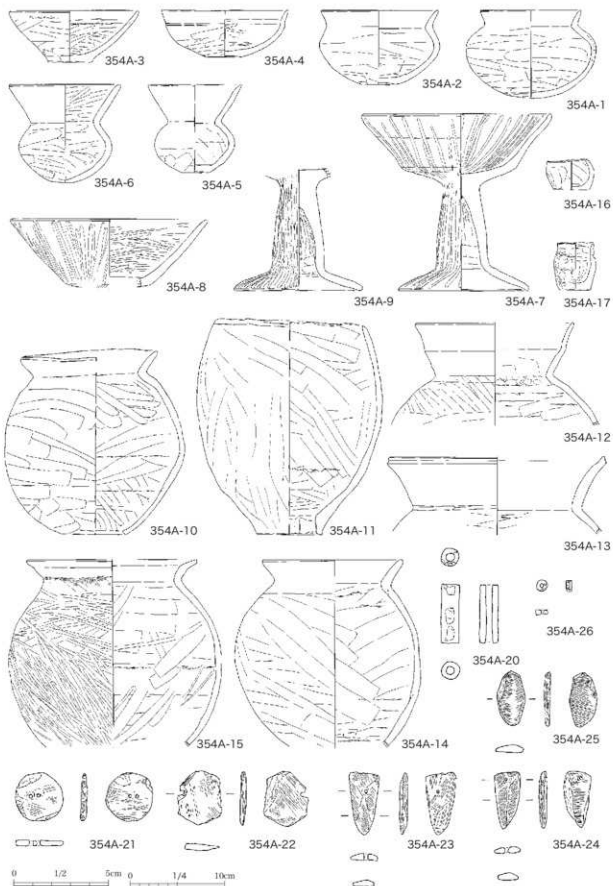




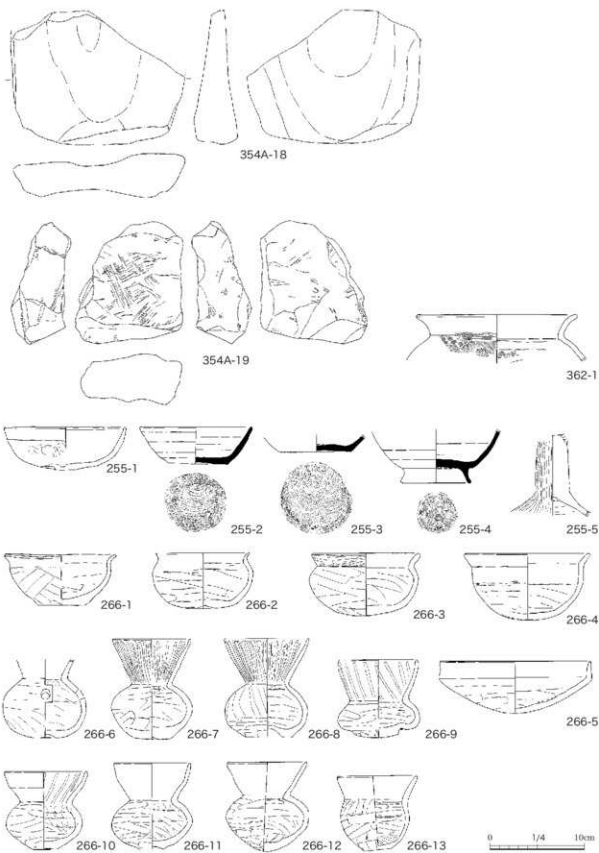
第 85 図 東地区 出土遺物実測図 20 (1/4)



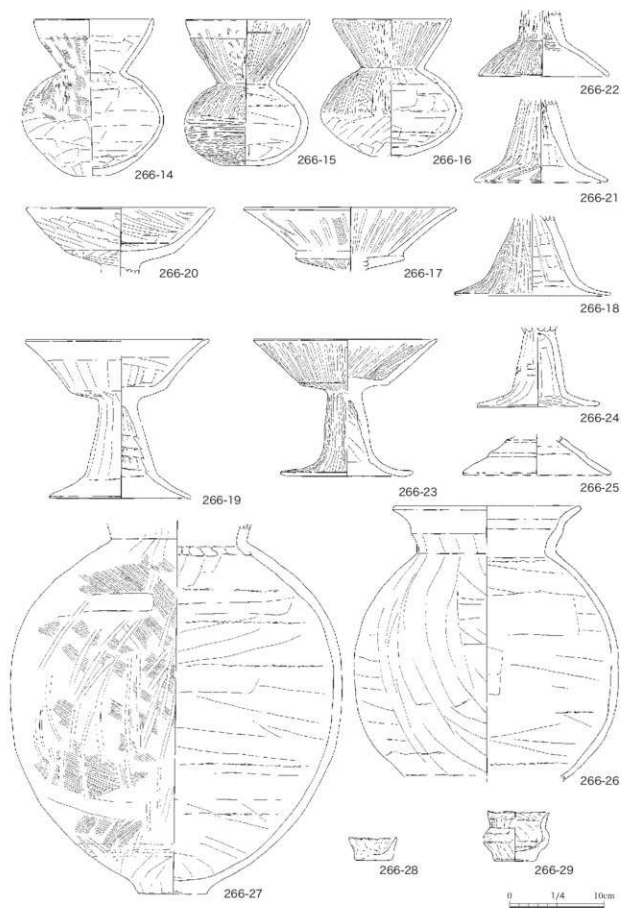
第 86 図 東地区 出土遺物実測図 21 (334-1、366-1 は 1/2、334-2 は 2/3、他は全て 1/4)



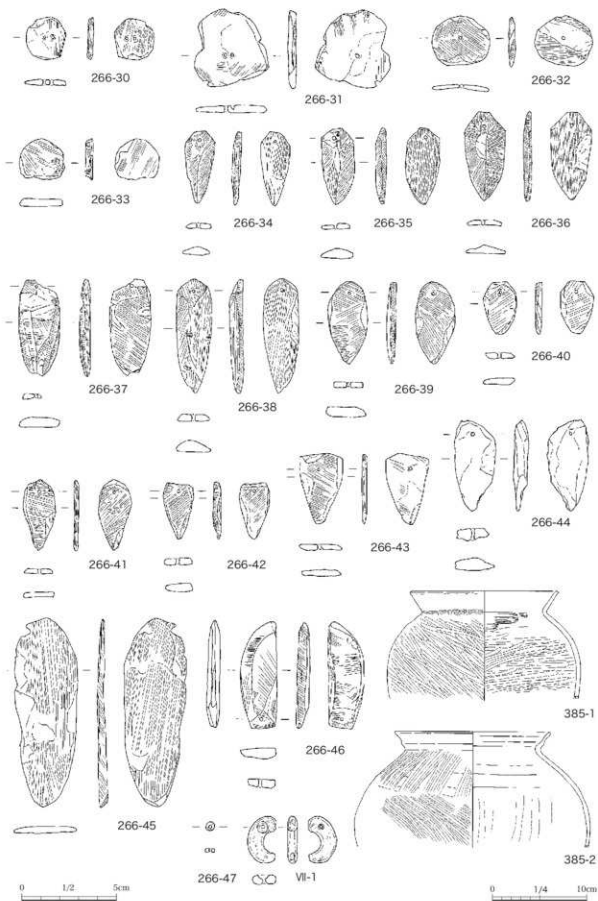
第 87 図 東地区 出土遺物実測図 22 (354A-20-26 は 1/2、他は全て 1/4)



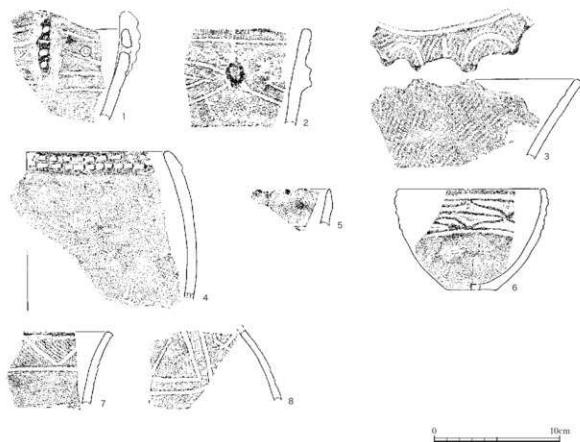
第 88 图 東地区 出土遺物実測図 23 (1/4)



第89図 東地区 出土遺物実測図24 (1/4)



第90図 東地区 出土遺物実測図25 (385-1・2は1/4、他は全て1/2)



第91図 東地区 出土遺物実測図26 (1/3)

第2表 I 区遺構外出土遺物観察表

番号 種類 源種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵前 坪	口 覆 12.7 高 3.2 底 7.0	内面口縁-底部ロコナデ。外面口縁-体部ロコナデ。底部回転糸切り難し後無調整。底部わずかに上げで、連続しない直線状の浅い沈線あり。	N5/O 灰 やや緻密 白・黒粗-細粒少 白輝散 硬質	口縁-体部1/4, 底部 2/3 A#-11-20 No.1・7
2 土師器 鉢	口 覆 8.8 高 6.0 底 2.0	小形丸底。内面口縁部-底部ナデ、口縁部上半ココナデ後口縁部縦方向のミガキ、体-底部方向不明のミガキ。外面口縁部6本/1cmのハケのち口縁部上半ココナデ後縦方向のミガキ。体部上端はハケ後横方向のミガキにより凹凸。体-底部ケズリ。口縁部上端はわずかに直立する。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒少、赤 褐粗粒微	口縁部1/3, 体-底 部2/3 A#-11-8 No.2
3 土師器 高坪	高 残 14.5 脚 覆 10.0	柱状脚。坪部小さく有様。脚部上半のみ中実で下半2段に開く。脚部下半上位の屈曲やや明瞭。内面外部体-底部方向不明のミガキ。脚部下半方向6本/1cmのハケのちココナデのち上半横方向のナデ。外面脚部下半6本/1cmの縦方向のハケのちココナデのち坪部-脚部縦方向の密なミガキ。脚柱部に脚部ミガキの工具の当たりあり。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、赤 褐粗粒微	坪部口縁-体部一部、 底部一部欠、脚部上半 完存。脚部下半2/3 A#-11-20 No.7・8
4 土師器 高坪	口 覆 16.0 高 17.3 脚 覆 11.5	柱状脚。坪部小さく有様。脚部上半のみ中実で下半2段に開く。内面坪部口縁-体部縦方向。底部方向不明の密なミガキ。脚部縦方向のケズリのち下端ココナデ。外面坪部-脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端に脚部ミガキの工具の当たりあり。ミガキは坪部後脚部に施す。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤褐粗粒・砂粗- 細粒多 硬質	坪部口縁-体部一部、 底部-脚部上半完存、 脚部下半一部 A#-11-8 No.2・3

第3表 II 区 S1036 出土遺物観察表

番号 種類 源種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 16.2 高 6.9 底 3.6	小形丸底形。口径大きく、口縁部と体部の境は内面は明確な線、外面はわずかな段となる。口縁部わずかに内肉し上端外反。底部くぼみ底。内面口縁-体部縦方向。底部-一方の密なミガキ。ミガキはほぼどし新しい。外面口縁部縦方向の6本/1cmのハケ。体部下端-底部縦方向の右へのケズリ後口縁部ココナデ。口縁-体部縦方向のナデ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗-細粒少、赤 褐粗-細粒微、金雲母・白粗 粒微	鈔内 ほぼ完形 32
2 土師器 中形碗	口 14.0 高 残 13.3	口縁部長くハの字に開く。内面口縁部ココナデ。胴-底部ケズリ。内面口縁部縦方向の密なミガキ。胴部上半横方向のナデで磨損残存。外面口縁部縦方向の密なミガキ。胴部上半縦方向のケズリ後横方向の密なミガキ。胴部最大径は16cm前後だろう。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂粗-細粒多、白 粗-細粒少 硬質	南東隅 口縁-胴部上半完存 3
3 土師器 中形碗	頸 覆 8.2 高 残 15.7 底 4.0 胴 16.0	口縁部下内湾する。内面口縁部縦方向のミガキ。胴-底部縦方向のナデ。調整は下半1寧で上半寛く、胴部上端粘土の継ぎ目あり。外面口縁部9本/1cmのハケ後縦方向のミガキ。胴部縦方向のミガキ。胴部上半縦方向、下半横方向のケズリ後上半斜位。下半横方向。下端縦方向の密なミガキ。ミガキはほぼどし新しい。底部-一方のミガキ。胴部上端口縁部ミガキの工具の当たりによるとみられる列点あり。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗粒多、砂粗- 細粒微、白粗-微粒微、金雲 母粗粒微	北部と東部の接合 口縁部1/6, 胴部はほぼ 完存、底部完存 6-11
4 土師器 中形碗	口 13.0 高 16.7 底 10.0 最大 17.3	口縁部ハの字に開き、上端で内湾気味に開く。歪みあり。外面全体・内面口縁部の表面は細かく調整し調整不明瞭。外面ミガキの可能性あり。内面口縁部縦方向のナデ後上端ココナデ。胴部上半-中位横方向のナデで上半粗粒顕著。下半接合部としての粘土の継ぎ目あり。これより下位の胴部下半-底部は斜位の放射状の10本/1cmのハケ。外面口縁部縦方向の10本/1cmのハケ後上端ココナデ。胴部斜位の丁寧なナデ。胴部下端縦方向の丁寧なナデ。底部ケズリ後丁寧なナデで浅く凹凸。	2.5YR7/6 橙 やや緻密 砂・白・赤褐粗 粒少	南東隅 ほぼ完形 1
5 土師器 高坪	口 17.4 高 12.0 脚 10.4 脚孔 8.0	坪部内外面・脚部外面赤彩だろう。内面坪部上から見て4分角の横方向の密なミガキ。脚部縦方向のナデ後下半ココナデ。上端粘土のしぼり目残存。坪部側から差し込んだ粘土の先端があり。脚部3孔で内面調整後水平方向に穿つ。外面は胴-脚部縦方向の密なミガキで坪部底部のみケズリ後ナデ。坪部境は明瞭で、一部ミガキにより不明瞭。脚部ミガキは穿孔後。ミガキ下の調整不明。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、砂・白 粗粒微、金雲母粗粒微	南東隅 ほぼ完形 2
6 土師器 甌	口 覆 15.1 高 9.5 底 4.4 孔径 1.4	成形は丁寧だが歪みあり。ココナデ無し。内面体-底部斜位のナデ後口縁部縦方向のナデ。体-底部工具の当たり顕著。孔は横方向のケズリで規則に粘土のめくれあり。外面口縁-体部斜位の5本/1cmのハケ後斜位のナデ。底部ケズリ後ナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗-細粒少、白 赤褐粗-細粒微	南東隅 完形 5



7 土師器 台付甕	口 12.9 高 残 22.8 最大 18.4	S字口縁。内面口縁部ナデ後ヨコナデ。段がナデ消され一部内湾する面となる。頸部ナデで面取り。胴部横方向の軽いナデで粘土のしぼり目縁の縦方向の凹凸消滅。胴部下平積み上げ止後の後合面あり。底部及び台部下平ナデで底部径4cm、台部上面径2.6cmの部分に砂細・細粒多量に貼付。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向、下半縦方向のケズリ後上半左下がり斜位。下半右下がり斜位の6本/1cmのハケ。台部ナデ後6本/1cmのハケ。胴部下平被熱により一部赤変一部表面割傷。内面胴部下平黒く変色。外面胴部上半・中位煤が付着。台部下端欠損面は摩耗しており、欠損した状態で使用されていた可能性あり。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 砂細粒少、赤褐・白細粒微、砂粗粒微 硬質	胴内3点の接合 口縁・台部上半はぼ定存 8-31-33
8 土師器 台付甕	口 13.8 高 残 24.3 最大 19.4	単口縁だが上端外反し頸部がびれるためS字状に見える。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半・中位5本/1cmのハケ後横方向のナデで、ヘラ工具の当たりのような深い沈線あり。胴部下平・底部8本/1cmのハケ後底部ケズリ。胴部下平横方向のナデ。台部ナデ。外面口縁部ヨコナデ。胴部上端左への横方向、上半上への斜位。下半上への縦方向の5本/1cmのハケ。ハケは荒く浅い。台部8本/1cmのハケのうち軽いナデ。内面胴部下端黒色に変色。外面口縁・胴部煤が付着。台部厚く、下半は意図的に欠損させている可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂細粒多、赤褐・白細粒微、金雲母細粒微 硬質	中央部 口縁・底部ほぼ定存。 台部1/2 9
9 土製品 磁石	長 4.0 幅 7.0 厚 1.0 重 26.9	中形傘状底部片を再利用したもの。10と同一個体の破片の可能性あり。表面に條割様の痕跡がある。	10YR5/4 鈍い黄褐 やや粗い 赤褐粗・細粒少、砂細粒少、白細粒微 やや硬質	完形 覆土
10 土製品 磁石	長 5.4 幅 7.4 厚 1.2 重 残 44.6	中形傘状上部片を再利用したものの。9と同一個体の破片の可能性あり。表面に條割様の痕跡がある他、縁辺の一部が平滑に研磨される。	5Y6/6 橙 やや粗い 赤褐粗・細粒少、砂細粒少、白細粒微 やや硬質	一部欠 覆土
11 石器 磁石	長 19.4 幅 6.8 厚 3.7 重 928.4	不整形柱状の川原石を整形せず磁石としたもの。平坦な両側面を主に使用している他、表面上半も使用したと見られる。側面一部敲打による異線あり。右側面一部被熱により赤変。	5Y6/1 灰 やや緻密 硬質	中央部 完形 30
12 石器 磁石	長 24.5 幅 15.5 厚 10.6 重 6,060	不整形立方体の大形川原石を整形せず使用したと見られる。平坦な表面一面のみを研磨面として使用。磨痕は確認できない。中央の径6cmほどの部分に敲打痕があり、中心の径3cmの部分に集中する。台石としても使用が、裏面は凹凸がありこのままでは水平に設置できない。	N4/0 灰 緻密 ホルンフェルス(砂岩起源)	中央部 完形 10
13 石器 磨石	長 11.2 幅 8.0 厚 5.0 重 553.2	楕円形の磨石。表面の特に上半の凸出部分が研磨される。裏面左寄りの浅く凹み部分もやや平滑であり、使用した可能性がある。	2.5Y8/1 灰白 やや粗い 安山岩	中央部 完形 7

第4表 Ⅱ区 S1039 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法尺 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 残記
1 土師器 鉢	口 10.3 高 4.9 底 4.3	平底で体・口縁部は直線的にハの字に開く。ヨコナデ無く、口縁部歪みあり。内面口縁・底部斜位のナデ。外面口縁・体部軽いナデで粘土のシワが残る。底部丁寧なナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐微・細粒少、砂・白・透明・半透明粗・細粒少 やや軟質	東部 ほぼ完形 5
2 土師器 高坏	口 12.0 高 残 11.4	器壁薄く華奢な作り。坏部半球状で歪みあり。胴部上半柱状で上位中央、下位中央。内面坏部口縁・体部ヨコナデ・底部ナデ後放射状の粗いミガキ。胴部上半横状工具による上端を頂点とする横方向のケズリ、下半ヨコナデ。外面坏・胴部縦方向の密なミガキ。胴下半は胴部が直立するよう一台の高さで欠損する。意図的な欠損の可能性あり。胴部上端径3.1cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐微・細粒少、砂・白・透明・半透明粗・細粒少 やや軟質	南東隅 坏部口縁・体部一部欠 、底部・胴部上半定存 10
3 土師器 高坏	口 径 16.8 高 残 7.5	坏部有梗。胴部中空柱状。内面坏部放射状の密なミガキ。胴部上端横状工具による横方向のケズリ。外面坏部及び胴部上端縦方向、坏部底部横方向のそれぞれ密なミガキ。胴部上端径4.0cm。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐微・細粒少、砂・白・透明・半透明粗・細粒少 硬質	南東隅 坏部口縁・体部1/2、 底部定存、胴部上端一 部 10

4	土師器 高杯	高 残 10.2 脚 径 9.8	脚部上半棒状で上位中央、下位中空。下半稍曲して両曲しつ開く。 内面口縁部底面ケズリ後ミガキ。脚部上半棒状工具による横方向の丁寧なケズリ。下半斜位の5本/1cmのハケ後下端12本/1cmのハケ後下端ヨコナデ。外面脚部上端横方向ミガキ、脚部下半縦方向の12本/1cmのハケ後下端ヨコナデ後上半縦方向の密なミガキ。脚部上端径2.5cm。	10YR5/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂・白・透明・半透明粗粒・細粒少、赤褐粗・粗粒	北東部 脚部上半完存、下半3/4
5	土師器 甕	口 15.7 高 残 6.9	口縁部ハの字に開き、上端短く直立し外面平坦面となる。内面口縁部上端ヨコナデ後口縁部横方向の密なミガキ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部上端ヨコナデ。口縁部斜位のためのミガキ。胴部上端横方向の6本/1cmのハケ後横方向のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂粗・細粒多、白・赤褐粗・粗粒少、砂礫散、金雲母細粒散	北部 口縁部ほぼ完存
6	土製品 紡錘車	径 5.3 厚 1.2 孔径 0.85 重 36.4	平面円形。表面丁寧なナデ。表面は平滑で厚さはほぼ一定だが、中央の孔周辺は穿孔に伴い部分的に歪む。	10YR6/4 鈍い黄褐色 やや緻密 砂・白・透明・半透明・赤褐粗粒少	北東部 完形

第5表 II区 SIO45 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形甕	口 径 12.6 高 10.7 最大 15.0	薄手で精緻な作り。やや潰れた球割で口縁部短く立ち上がる。底部丸底。表面剥落している部分多く調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ後横方向のミガキ。胴・胴部斜位のナデで胴部下接合部としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁・胴部上半斜位の8本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ後斜位の密なミガキ。胴部下半横方向主体のケズリ後上半横方向、中位・下半斜位のミガキ。外面全体赤彩。口縁部内面赤彩の可能性あり。	5YR6/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂粗・細粒多、白・赤褐粗・細粒散 やや軟質	北東部 口縁・胴部下位1/2
2 土師器 中形甕	口 8.8 高 11.8 底 3.0 最大 10.0	口縁部直線的にハの字に開く。胴部球割で底部凹む。内面口縁部斜位のミガキ。胴部上半横方向の強いナデ。下半横方向のナデ。底部方向のナデ。外面口縁部縦方向のミガキ。胴部下半横方向のケズリ後胴部斜位のミガキ。底部ケズリ。外面全体・内面口縁部赤彩の可能性あり。外面被熱による厚付着。赤変、焼けハジケあり。	7.5YR5/4 鈍い褐色 緻密 白・赤褐細粒散	北西部 ほぼ完形
3 土師器 甕	口 径 19.5 高 残 8.0	伊勢型の二重口縁。精良な胎土で精緻な作り。内外面ともヨコナデ後縦方向のミガキ。	10YR5/3 鈍い黄褐色 緻密 砂・白・赤褐粗・細粒散	南西部 口縁部1/4
4 土師器 甕	口 13.4 高 16.2 底 5.0 最大 16.2	単口縁。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半・中位横方向のケズリ。下半・底部斜位のケズリ。外面口縁・胴部上半横方向の5本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ・胴部上半横方向の左へのケズリ後胴部中位・下半横方向の粗い5本/1cmのハケ。底部外周粘土のめくれあり。底部ケズリ後ナデ。	5YR5/6 明赤褐色 粗い 砂礫・細粒多、赤褐粗・細粒少、金雲母細粒散 やや硬質	北部 口縁部一部欠
5 土師器 ミニチュア (鉢形)	口 9.0 高 3.8 底 4.6	内面赤彩。赤色顔料容器の可能性もあろうか。ヨコナデなく口縁部薄く歪みあり。底部整形は丁寧。内面口縁・底部丁寧なナデで工具痕顕著。外面口縁・体部斜位ナデのみで細かな凹凸残る。底部周方向の丁寧なナデ。	10Y5/3 鈍い黄褐色 やや緻密 砂礫・細粒少、白・透明粗粒・細粒散 やや硬質	完形 S-045 No.10

第6表 II区 SIO46 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 11.8 高 6.3 底 2.6	小形丸底形。口縁部上端が内湾する。表面全体が細かく剥落しており調整不明瞭だが、全体ミガキの可能性あり。内面口縁部ヨコナデ。体・底部丁寧なナデ。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ケズリ。底部は不整形円形。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐粗・細粒多、砂・白粗・細粒少 軟質	北部 ほぼ完形
2 土師器 鉢	口 12.1 高 5.5 底 2.7	小形丸底形。口縁部と体部の境は内面は段となるが、外面はほぼ平坦に続く。表面全体が細かく剥落しており調整不明瞭だが、全体ミガキの可能性あり。内面口縁部ヨコナデ。体・底部ナデ。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ナデにより不明瞭な形状の平底。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤褐粗・細粒多、砂・白粗・細粒少 軟質	南部 ほぼ完形

3	土師器 鉢	口 10.5 高 4.7 底 2.5 最大 10.8	薄手、半球状、口唇部は内面丸みを持つ斜めの面で、上端はわずかに斜めの外方につまみ上げられる。内面口縁部ココナデ、体・底部ナデ、外面口縁部ココナデ、体部ナデで底土の織ぎ目残る。底部はくぼみ底でないナデであり、体部下半・底部外周のケズリにより底部が作出される。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粒・細粒少、赤褐・白黒・粗粒微	北部 ほぼ完形 45
4	土師器 鉢	口 復 11.8 高 5.9 底 5.5	半球状。底部は厚く突出する丸底。内面表面の凹凸著しい。内面口縁・体部縦方向の密なミガキ、底部調整不明。外面口縁部ココナデ、体部鋭いナデ後口縁・体部やや粗い縦方向のミガキ。体部に粘土のシワ残る。底部ナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂粗粒多、赤褐・白黒・粗粒微	北部 口縁・体部 1/6、底部 完存 44-46
5	土師器 鉢	口 復 16.8 高 4.9 底 6.0	口径大きく、口縁部は体部から屈曲して立ち上がり直線的に外傾する。底部は突出する平底。器壁薄く歪み少ない丁寧な作り。内外面ともミガキの可能性あるが、単位はつかぬ。内面口縁部ココナデ、体・底部縦方向のナデ。外面口縁部ココナデ、体・底部ナデ。体部外面紙行転用のためか斜位の直線的な縦割あり。	7.5YR6/6 橙 やや微密 砂粗・細粒少、赤褐・白黒・粗粒微 やや硬質	中央部 口縁・体部 1/6、底部 2/3 27
6	土師器 鉢	体 復 11.2 高 残 4.3 底 復 3.7	小形丸底形。口径大きく、口縁部と体部の境は明確に括れる。底部平底。内面口縁部縦方向の密なミガキ、底部放射状のケズリ後体・底部縦方向の密なミガキ。外面口縁部縦方向の密なミガキのち頸・体部縦方向のミガキ、底部ナデ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗粒少、砂粗粒微	口縁・体部 1/6、底部 一部 覆土
7	土師器 鉢	口 復 14.4 高 残 5.6	内面口縁状に口縁部短く外反する。内外面ともミガキの可能性あるが、単位はつかぬ。内面口縁部ココナデ後横方向のミガキ。体部縦方向の密なミガキ。外面口縁部ココナデ、体部横方向のミガキ。口は破片全体が融熱により変質している。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、白・赤褐粗粒微、砂硬質	東部 口縁・体部 1/5 21
8	土師器 小形壺	口 9.4 高 7.5 底 2.4	小形丸底形。底部小さく平底。口縁部はわずかに内湾し上端で直立気味となる。表面全体が細かく凋落しており調整不明瞭だが、全体ミガキの可能性あり。内面口縁部ココナデ、体部ナデ、底部強いナデ。外面口縁部ココナデ、体・底部ナデ。底部付近はケズリの可能性あり。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤褐粗・粗粒多、砂・白黒・粗粒少 やや軟質	南部 ほぼ完形 16
9	土師器 中形壺	口 12.2 高 16.5 底 5.5 最大 16.7	口縁部への字に開く。口縁部周辺の表面細かく凋落しており調整不明瞭。内面口縁部ココナデ、胴・底部ケズリ。外面口縁部ココナデ、胴部密なし斜位の6本/1cmのハケ後斜位の丁寧なナデ。胴部下端はほぼ無調整で粘土のシワあり、凹む。底部中央ナデ、外周部ケズリ。底部平底で中央浅く凹む。胴部中位より下位は比熱により赤変。塗として使用か。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐粗・粗粒多、白・砂粗・細粒少、透明粗粒微	西部 口縁部・胴部上半はほぼ 完存、胴部下半2/3、 底部完存 68-69
10	土師器 高坏	口 復 17.2 高 残 6.3	坏部全体で表面細かく凋落しており調整不明瞭。器壁薄く精緻な作り。坏部底部に明確な段を持つ。内面坏部口縁・体部縦方向、底部方向不明のミガキ。外面坏部口縁部ココナデのち縦方向のミガキ。底部縦方向のミガキのち胴部の縦方向のミガキ。口縁・胴部内外面赤灰。	2.5YR6/6 橙 やや微密 砂粗・細粒少、白・赤褐粗・粗粒微、透明粗粒微	北東部 坏部口縁・体部 1/4、 底部完存 40
11	土師器 高坏	口 13.5 高 残 5.2	器壁薄い。外面坏部底部と体部の接合部分でわずかに粘土のめくれあり。内面坏部放射状のミガキ。外面坏部底部・胴部上端縦方向のケズリ。体部縦方向のケズリ後口縁部ココナデのち坏部・胴部上端縦方向のミガキ。外面坏部底部・胴部上端のケズリは口縁・体部接合面のものだろう。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗・粗粒少、白黒・粗粒微	北部 坏部 2/3 58
12	土師器 高坏	高 残 8.9	中空柱状形。内面胴部上半横方向のナデで縦横直線著。外面胴部上半縦方向の密なミガキ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗粒多、砂・赤褐粗粒微、白黒・粗粒微	中央部 胴部上半完存 13
13	土師器 瓶	口 16.5 高 10.3 底 3.0 口径 1.4	やや粗い作りで下半は入念に調整される。ココナデ無口縁部の高さ一定しない。内面口縁部付道横方向の5本/1cmのハケ及び9本/1cmのハケ後体・底部縦方向のケズリ。底部1孔で孔周辺粘土のめくれあり。外面口縁部粘土層付で前部圧痕残る。体部一部に9本/1cmのハケ下へのケズリ。体部無調整部分に粘土のシワ残る。底部ナデ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤褐粗・粗粒少、白黒・粗粒微	東部 口縁部 2/3、体・底部 ほぼ完形 20-27
14	土師器 壺	口 15.2 高 残 4.5	受け口の二重口縁。胴部上端できれいに欠損しており、意図的に割った可能性あり。内面口縁部ココナデ、頸部縦方向の6本/1cmのハケ後口縁・胴部縦方向の密なミガキ。胴部上端ナデで粘土のめくれあり。外面胴部縦の6本/1cmのハケ後口縁部ココナデ後胴・胴部縦方向のミガキ。	2.5YR6/6 橙 やや微密 砂粗粒多、砂粗粒微、白黒・粗粒微、全雲母粗粒微	北西隅 口縁・胴部完存 64
15	土師器 壺	口 復 11.5 高 24.0 底 6.4 最大 22.0	ミガキ施さない碗形・調整は丁寧。口径小さく口縁部への字に開く。内面口縁部ココナデ、胴・底部横方向のナデで下半積み上げ休止後の接合痕あり。上端前部圧痕残る。外面口縁部ココナデ後口縁・胴部丁寧な上へのケズリ。胴部下半接合痕あり。胴部下端無調整で粘土のシワや凹凸残る。底部一方の粗いケズリで中央浅く凹む。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗・粗粒少、砂粗粒少 やや硬質	東部 口縁部 1/3、胴部 2/3、 底部完存 22-32-33-66

16	土師器 壺	口 13.1 高 27.7 底 径 7.6 最大 径 25.3	内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。口径小さく口縁部ハの字に開き上端つまみ上げ。内面口縁部横方向のミガキ、胴部横方向のいし斜位のナデで上端土の継ぎ目とめくれ、下半に積み上げ休止後の接合痕が残る。外面横方向のミガキで上端外側でへら状工具の当たりあり。胴部縦方向のいし斜位のミガキ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 赤褐礫・細粒砂、 砂・白細粒砂 やや軟質	北東隅 口縁・胴部上端一部欠 胴部1/3、底部一部 37.39-78
17	土師器 壺	口 21.3 高 27.0 底 径 7.5 最大 径 29.4	口窄作り。口径大きく口縁部ハの字に開き上端外反する。口縁部内外縦横状に表面剥落。内面口縁部横方向の8本/1cmのハケ後斜位の密なミガキ、胴・胴部横方向の丁寧なナデで、上端に指頭正直、下半に接合痕が残る。外面口縁部横方向の8本/1cmのハケ後横方向の密なミガキ。胴部上端横方向、胴部縦方向の密なミガキで下半に接合痕あり。底部縦方向のケズリで中央部に凹む。	7.5YR7/6 橙 やや微密 砂礫多、砂礫・ 粗粒礫、赤褐礫・細粒礫 硬質	東部 口縁部5/6、胴部一部 欠、底部完存 22-23-32-66-74-75
18	土師器 甕	口 13.4 高 残 10.7 最大 径 18.6	S字口縁。外面胴部表面剥落顕著。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向、中位斜位のナデで縦やかな凹凸残る。外面口縁部ココナデ、胴部やや斜位の左へのケズリ後半は左下がり斜位の下の8本/1cmのハケ、中位上への右下がり斜位の8本/1cmのハケ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂・赤褐・白・透 明粗粒砂、砂・赤褐・白・透 明粗粒礫 やや硬質	南部と南西部の接合 口縁部完存、胴部上半 5/6 3-71
19	土師器 甕	口 径 12.8 高 16.2 底 径 4.2 最大 径 16.2	単口縁で小形。内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。全体に調整痕あり。口縁部の歪み大きく、上端は水平ではない。内面口縁部ココナデとみられる。胴・胴部やや丁寧なナデで胴部上半組織痕が残る。外面口縁部ココナデとみられる。胴部主に横方向のナデだが調整甘く、粘土のめくれ等目立つ。胴部下端荒い下へのケズリ。底部一方のケズリで凹む。	7.5YR6/6 橙 粗い 赤褐礫・細粒砂、砂・ 白粗・細粒砂 やや軟質	中央部 口縁部2/3、胴部3/4、 底部完存 34-35
20	土師器 甕	口 径 14.3 高 18.4 底 径 3.5 最大 径 18.2	単口縁。調整は全体に甘く胴部は平滑でない。内面口縁部ココナデ、胴部下平接合痕あり。接合痕胴部下平8本/1cmのハケ後接合し内面全体ナデ。胴部上半組織痕と指頭正直、表面の縦やかな凹凸残る。外面口縁部8本/1cmのハケ後ココナデ、胴部やや粗い縦方向後半上半のみ横方向の8本/1cmのハケ後胴部下平軽いなデ後胴部下端横方向、胴部一方のケズリ。底部凹む。胴部下平の接合に伴う粘土の継ぎ目顕著。胴部中位・下半粘土のシワあり。外面胴部中位保付着。内面胴部下平・底部黒く変色。	5YR6/6 橙 粗い 赤褐礫・細粒砂、砂・ 白粗・細粒砂 やや軟質	中央部 口縁部1/2、胴部5/6、 底部完存 52
21	土師器 甕	口 径 15.2 高 20.5 底 径 5.5 最大 径 20.4	単口縁。口唇部は面取り以外に丸く収める部分あり。調整は64より丁寧で歪み少ない。内面口縁部ココナデ、胴・胴部横方向のナデで下半接合痕あり。上半組織痕が残る。外面口縁部8本/1cmのハケ後軽いなココナデ。胴部上半斜位の8本/1cmのハケ、下半縦方向の上へのケズリ後中位横方向の左へのケズリ。胴部ハケ後口縁部接合し更にハケ調整される。底部隅方向のケズリのち中央ナデで凹む。外面胴部上半保付着。内面胴部下平・底部黒く変色。	10YR5/3 鈍い黄褐色 粗い 砂・透明細粒砂、赤褐 礫・粗粒砂、白細粒礫 やや硬質	南東隅 口縁・胴部1/2、底部 完存 76
22	土師器 甕	口 18.7 高 残 16.2 最大 径 23.2	単口縁。器壁厚く口縁部ハの字に外反し端部薄く仕上げる。胴部下平の欠陥面は積み上げ休止後の接合部とみられる。内面口縁部ココナデ、胴部横方向のナデで上半積み上げ休止後の接合痕あり。外面口縁部ココナデ、胴部斜位のナデで接合部はやや歪調整。外面胴部中央被痕による赤変と保付着。	10YR6/3 鈍い黄褐色 粗い 赤褐礫・細粒砂、砂礫・ 粗粒砂、白粗・細粒礫 やや硬質	東部 口縁・胴部中位一部欠 23-66-74-75
23	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 7.6 高 3.3 底 径 5.7	口縁部ココナデ無く凹凸著しい。内面口縁部・底部丁寧なナデ。外面口縁・底部ナデで体部下端に指頭正直痕が残る。底部は丁寧に整形された平滑な平底。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫多、白細粒 礫 硬質	中央部 ほぼ完形 31
24	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 8.1 高 3.5 底 径 4.0 最大 径 8.5	表面全体が細かく剥落しており調整不明瞭。口縁部ココナデ無いため高さは一律でなく内湾する。内面口縁部・底部ナデ。外面口縁部・底部ナデ。底部上げ底で口縁部に比べ丁寧に成形されている。小形丸底鉢の体・底部の可能性もあろうか。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 赤褐礫・細粒砂、 砂・白粗・細粒砂 やや軟質	東部 ほぼ完形 18
25	土師器 ミニチュア (壺形)	口 8.7 高 7.6 底 径 4.9 最大 径 8.8	全体に荒い作り。内面口縁部横方向の粗いなデ。体部横方向、底部縦横状の凹凸をそのまま残す強いナデ。外面口縁部横方向の粗いなデ。体・底部荒いなデで底部凹凸目立つ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒 砂、金雲母粗粒礫、白細粒礫 硬質	南部 ほぼ完形 4
26	土器 砥石	長 残 11.1 幅 7.3 厚 3.6 重 残 341.3	大形の薄片を素材とする。下半欠陥。表面を主要な使用面とし、裏面と左側面を使用する。表面は凸面、裏面は凹面。側面は不整な平面。上端と左側面は素材の主要剥離面をそのまま残し、右側面は剥離と高打により整形する。使用方向は、擦痕からすると縦方向のみ。中底・仕上げ砥。	10Y7/1 灰白 微密 ホルンフェルス(泥岩起源)	一部欠 1

27 石器 浮子	長 5.1 幅 4.8 厚 4.3 重 32.9	軽石を整形し、隅丸の直方体状に加工したもの。加工痕は確認できない。	5YR/1 灰白 やや緻密 流紋岩質軽石	東部 完形 17
----------------	-----------------------------------	-----------------------------------	----------------------------	----------------

第7表 II区 SIO50 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	口 8.8 高 9.3 脚 径 12.4 受孔 1.1 脚孔 1.1	受部は深く口縁部は複合口縁状。脚部3孔でハの字に開く。ミガキは全体に密。内面受部上端横方向の密なミガキ後体・底部に中心を避け弧状に湾曲する一方のミガキ。脚部周方向の6本/1cmのハケ後上半横方向のケズリ及び下端ココナデ後斜位の粗いミガキ。外面受部口縁部横方向の密なミガキ、体部斜位の6本/1cmのハケ後斜位のミガキ、脚部縦方向のミガキ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗・細粒少、白 細粒少 硬質	中央部 受・脚部上半ほぼ完存 脚部下半一部 44
2 土師器 器台	口 7.0 高 残 3.8 受孔 1.05 脚孔 1.05	受部は浅く口縁部は直線的で端部面取りされる。脚部3孔。内面受部斜位の密なミガキ、脚部上半横方向のケズリ。外面受部口縁部ココナデ後体部ケズリ後縦方向のミガキ、脚部縦方向の密なミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂粗粒少、砂粗粒 微。金雲母・白・赤褐細粒 硬質	北部 受・脚部上半完存 50
3 土師器 鉢	口 径 10.2 高 6.7 底 2.7	小形丸底形。口縁部は直線的に開く。内面口縁部斜位の16本/1cmのハケ、体・底部周方向のナデ。外面口縁部縦方向のナデ、口縁部下半・体部横方向のナデで、体部はケズリに近い。底部1寧なナデ。平底。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗粒少、赤褐粗 粒多、砂・白粗・細粒少 硬質	中央部 口縁部3/4、底部 完存 17
4 土師器 鉢	高 残 5.9 底 径 4.1	全体に作りやや粗い。口径大きく、体部上端括れる。内面口縁部横方向の12本/1cmのハケ後斜位の粗いミガキ、体部ナデ後上半一部12本/1cmのハケ、下半・底部やや粗い放射状のミガキ。外面口縁部斜位の12本/1cmのハケ、体部上端ナデ後口縁・体部上端やや粗い横方向のミガキ、体部下半横方向の12本/1cmのハケ後下端横方向のケズリ後斜位の乱雑なミガキ。底部わずかに凹な平底で多方向のミガキ。体部径12.6cm。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗・細粒少、白 細粒微 硬質	西部と南内側の接合 口縁部下半・底部1/3 5-15
5 土師器 鉢	口 径 17.2 高 残 6.2	口縁部二重口縁状で、下半で括れ上半は直線的に開く。内面口縁部上半ココナデ、下半横方向の12本/1cmのハケ後口縁部横方向のミガキ。体部放射状のミガキで粘土の継ぎ目あり。外面口縁・体部縦方向の12本/1cmのハケ後口縁部ココナデ及び体部横方向のケズリ後口縁・体部横方向のミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂粗粒多、砂粗粒 微。金雲母・白・透明・半透 明粗・細粒微 硬質	中央部 口縁・体部破片 12・一括
6 土師器 鉢	高 残 3.9 底 3.0	体部径大きく浅い。内面体・底部12本/1cmの放射状のハケ後口縁・体部横方向の12本/1cmのハケ後体・底部放射状のやや粗いミガキ。口縁・体部上半斜位ないし横方向の粗いミガキ。外面口縁・体部上半横方向の12本/1cmのハケ後体・底部横(周)方向のケズリ後口縁・底部横(周)方向のミガキ。底部凹む。	7.5YR4/2 灰褐 やや緻密 砂粗粒多、砂粗粒 微、白・赤褐粗・細粒微 硬質	中央部 体部1/3、底部完存 13-42
7 土師器 台付甕	口 径 14.6 高 24.3 台 9.0 最大 19.0	単口縁。先に作成した底・胴部下半は10本/1cmの細かいハケ。後に接合したそれ以外の部分は5本/1cmの粗いハケが密に施される。内面口縁部横方向のハケ後ココナデ、胴部下半斜位のハケ後胴部横方向のナデ及び底部ナデ。胴部下半の接合痕跡少ない。台部上半斜位のケズリ後横方向のナデ後下半ココナデ。外面口縁部縦方向のハケ後ココナデ。胴部縦方向ないし斜位のハケで下方が先に施される。台部縦方向のハケ後下半軽いココナデ。外面胴部中位煤付着。内面胴部下半・底部黒く変色。	7.5YR5/3 鈍い褐 やや粗い 砂粗・細粒多、白 ・赤褐粗・細粒微 硬質	中央部 口縁部2/3、胴・台部 ほぼ完存 21
8 土師器 甕	口 径 17.0 高 残 9.3	S字口縁。胴壁薄くハケは深くシャープ。胴部最大径は27cmほど。内面口縁部ココナデ、胴部上半・中位ナデで上端指頭状痕残る。縦やかな窪面の凹凸あり。外面口縁部ココナデ。胴部上半・中位横方向の左へのケズリ後中位上への斜位の4本/1cmのハケ後上半横方向の下への4本/1cmのハケ。外面胴部中位煤付着。	7.5YR8/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂・透明・半透明 細粒多、白粗粒少、赤褐粗粒 微 硬質	中央部 口縁・胴部上半1/2 47

第8表 II区 SI053 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 径 15.0 高 残 15.2 最大 径 19.6	内外面とも表面剥落しており調整不明。単口縁で器壁薄く口縁部丸味を持って外反する。内面口縁部ココナデ。胴部上端横方向、上半・下半斜位の上へのケズリ。外面口縁部ココナデ。胴部上端右下がり斜位の、上半・下半縦方向の7本/1cmのハケ後上半横方向の7本/1cmのハケ。	7.5YR7/8 黄褐色 粗い、砂組・粗粒多、白・赤陶組・細粒焼 やや軟質	東部 口縁部1/6、胴部1/3 38・一括

第9表 II区 SI054 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 13.0 高 8.2 底 1.8	小形丸底形で口縁部は長く僅かに内凹し、体部小さい。底部小さく凹む。内面口縁部横方向のナデ後上端ココナデ、体・底部横方向のナデ。外面口縁部斜位の20本/1cmのハケ後横方向のナデ後上端ココナデ。体部横方向のナデ、底部ケズリ後ナデ。	10YR5/2 灰黄褐色 やや緻密 砂組粒多、砂粗粒 微、白・透明・赤陶組・細粒 微 やや硬質	西部と北部の接合 口縁部2/3、体・底部 はほぼ完成 3-15-19
2 土師器 中形甕	口 径 11.9 高 16.9 底 4.2 最大 径 16.2	口縁部ハの字に開き、端部直取り。外面の成形・調整丁寧だが胴部下半・底部は粗い。内面口縁部ココナデ後上半横方向のミガキ後口縁部縦方向のミガキ、胴・底部横方向のナデで胴部上半横横直り。外面口縁部縦方向の5本/1cmのハケ後縦方向のミガキ、胴部斜位の5本/1cmのハケ後上半縦方向のケズリ・下半横方向のケズリ後胴部縦方向のミガキ。底部横方向のケズリ。	10YR5/8 赤 やや緻密 赤陶組・粗粒少。 砂・白・透明細粒少 やや軟質	西部 完成 4

第10表 II区 SI068 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	高 残 2.2 底 径 8.2	内外面とも表面の剥落顕著。ロクロ成形。内面体・底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り難し後無調整。	10YR8/3 浅黄褐色 緻密 砂・赤陶組・粗粒微 やや軟質	体・底部1/6 B ㊦-19-14 №4
2 須恵器 環	高 残 2.8 底 径 7.0	内外面とも表面の剥落顕著。内面体・底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部手持ちケズリか。	2.5Y6/1 黄灰 やや粗い 青灰障・粗粒微、 白細粒微 やや軟質	体・底部1/6 B ㊦-19-14 №5
3 須恵器 高台付杯	高 残 2.7 台 径 8.2	内外面とも表面の剥落顕著。高台はハの字に開き、体部との境が沈線状に凹む。内面体・底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。高台は体部下端・底部外周に貼付け。底部切り難し方法不明。	5Y6/1 灰 やや緻密 青灰組・粗粒微、 白組・細粒微 やや軟質	体・底部1/6 B ㊦-19-14 №5
4 須恵器 甕	高 残 9.5	内面胴部内当具痕後ナデで縦積痕あり。外面胴部浅い平行叩き。内面わずかに自然輪付着。古墳中明か。	N6/0 灰 緻密 青灰・白組・粗粒微 硬質	胴部破片 B ㊦-19-14 №3

第11表 II区 SI069 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 環	口 径 12.2 高 3.3 底 径 7.2	内面口縁・底部ロクロナデ。外面口縁・体部ロクロナデ。底部回転糸切り難し後無調整か。	N5/0 灰 やや緻密 青灰・白細粒少 硬質	口縁・底部1/6 B ㊦-19-13
2 土師器 高台付杯	高 残 2.4 台 径 8.0	ロクロ成形。杯部内面黒色処理。高台はハの字に開く。内面底部一方の密なミガキ。外面底部糸切り難し後高台貼付け。	10YR6/4 鈍い黄褐色 やや粗い 白・透明・半透明 粗粒多、白・透明・半透明障 粗粒微、赤陶組粗粒微 硬質	カマド右側 底部・台部3/4 B ㊦-19-13 №10
3 須恵器 甕	高 残 7.2	内面胴部深い同心門当具痕。外面胴部浅い平行叩き。外面僅かに白く変色。	N6/0 灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白障・粗粒微 硬質	カマド左側 胴部破片 B ㊦-19-13 №3

4 須恵陶 甕	高 残 9.6	内面割部深い回心門当具状、外面割部浅い平行叩き。	N6/O 灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白礫・粗粒微 硬質	カマド両側 割部破片 B ㊦-19-13 № 5
5 土製品 土練	長 3.0 幅 0.8 孔 0.2 重 1.67	平面梨形、断面門形。表面ナデ。	7.5YR5/4 鈍い青 やや緻密 砂・白・透明・半 透明粗・細粒少 やや軟質	カマド右側 完形 B ㊦-19-13 № 11

第12表 II区 SI070 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 緑釉陶器 樽	高 残 1.4	内面口縁部ロクロナデ。外面口縁部ロクロナデ。	7.5Y6/3 オリーブ黄 緻密 透明粗・微粒少 硬質	口縁部破片 B ㊦-19-9 № 3
2 須恵陶 瓶類	高 残 2.2 台 復 10.2	底部内面僅かに自然軸付着。内面割部周方向の強いナデで凹凸顯著。外面割部下端ロクロナデ。底部ナデ後高台貼付け。底部切り離し方法不明。底部には高台に沿う連続した工具の当たりあり。	N5/O 灰 やや粗い 白粗・細粒少、黒 色細粒少、白礫微 硬質	底・台部 1/3 B ㊦-19-9 № 4
3 土師器 甕	口 復 23.0 高 残 4.4	武蔵型。内面口縁部ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデで下半に工具の当たりあり。	5YR4/3 鈍い赤褐 やや粗い 砂・白・透明細粒 少、砂・白・透明粗粒微、金 雲母粗粒微 硬質	口縁部 1/6 B ㊦-19-9 № 10
4 土師器 甕	口 復 22.0 高 残 6.2	武蔵型。口縁部外面上端沈線状に凹む他、口縁部内面上端沈線状に僅かに凹む。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデで下半に工具の当たりあり。胴部上端横方向のケズリ。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 砂・白・透明細粒 少、砂・白・透明粗粒微、金 雲母粗粒微 硬質	口縁部破片 B ㊦-19-9 № 6
5 須恵陶 甕	高 残 6.8	内面割部深い回心門当具状、外面割部浅い平行叩き。	5Y5/1 灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白粗粒微 硬質	胴部破片 B ㊦-19-9 № 5

第13表 II区 SI071A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵陶 甕	高 残 9.8	内面割部回心門当具状。外面割部浅い格子叩き。	N5/O 灰 緻密 青灰・白粗・細粒微 硬質	胴部破片 4
2 須恵陶 甕	高 残 7.7	内面割部深い回心門当具状。外面割部浅い格子叩き。	2.5GY6/1 オリーブ灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白粗粒微 硬質	胴部破片 7
3 須恵陶 杯	高 残 1.1 底 6.0	表面細かく割落しており調整不明瞭。内面割部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	5Y8/1 灰白 やや緻密 灰白・赤褐粗・粗 粒微、白細粒微 やや軟質	底部はほぼ完存 8
4 土製品 円盤 門盤	長 3.9 幅 4.1 厚 0.7 重 14.04	内面黒色処理されたロクロ成形の土師器杯底部を円形に削って作られている。表面は底部内面で一方の密なミガキ。裏面は底部外面で回転糸切り離し。側面は細かく割られた状態そのままであり、研磨はされない。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂・透明・半透明 細粒少 やや硬質	完形 5
5 土製品 土練	長 4.0 幅 1.6 孔 0.4 重 9.09	平面梨形、断面門形。表面ナデ。上下両端は一方のケズリにより平皿に仕上げられる。	10YR6/4 鈍い黄橙 緻密 砂・透明粗・細粒少 硬質	完形 3
6 土製品 土練	長 2.8 幅 1.0 孔 0.3 重 2.59	平面梨形、断面門形。表面ナデ。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 砂・透明・赤褐粗 ・細粒少 やや硬質	完形 3

第 14 表 II 区 SI073 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口 径 13.0 高 残 2.9	内面口縁-体部ロクロナデ。外面口縁-体部ロクロナデ。	5Y7/1 灰白 やや緻密 灰白粗-細粒少、 白粗-細粒微 やや軟質	口縁-体部破片 B f-19-3 № 8
2 須恵器 坏	高 残 1.6 底 径 6.0	内面体-底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り難し 後無調整。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 灰・白・赤褐微- 細粒微 やや軟質	体部下半 1/4, 底部 2/3 カマド
3 須恵器 甕	高 残 3.5	内面胴部上端同心円当具痕。外面胴部ロクロナデ。外面は浅い格子印 きの可能性あり。	N6/0 灰 やや緻密 白粗-微粒少、砂・ 青灰粗粒微	胴部上端破片 B f-19-3 № 1
4 土製品 土罐	長 2.8 幅 0.7 孔 0.3 重 1.33	平面梨形、断面円形。表面ナデ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 砂粗-細粒少、白 ・赤褐粗-細粒微 やや軟質	ほぼ完形 カマド

第 15 表 II 区 SI074 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口 径 11.2 高 4.5 底 径 4.7	非ロクロ成形で全体に調整甘く歪みあり。口縁部2ヶ所に保付首。灯 明転用。内面体-底部理方向のナデ後口縁-体部ココナデ。外面口縁 -体部軽いなデ後口縁部ココナデ。底部一方向のケズリ。体部粘土の 継ぎ目や指痕圧痕顕著。底部は不整形円形。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂・黒・透明細粒 多、白・赤褐粗-細粒微 硬質	完形 B f-14-22 № 13
2 土師器 坏	高 残 2.9 底 径 6.6	ロクロ成形。内面体-底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回 転糸切り難し後無調整だろう。底部僅かに上げ底。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 赤褐粗-細粒少、 砂・白・透明粗-細粒微 やや硬質	体-底部 1/3 B f-14-22 № 12
3 土師器 高台付坏	口 径 13.0 高 5.9 台 7.5	非ロクロ成形。坏部内面黒く変色。高台は厚くハの字に開く。内面体 -底部ナデ後口縁-体部ココナデ。外面口縁部ココナデ後体部斜位の ケズリ。底部ナデ後高台貼付け。高台貼付けは体部調整後。体部粘土 の継ぎ目残る。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 透明・半透明細粒 多、白・赤褐粗-細粒微 やや硬質	口縁-体部 2/3, 底部 完存 B f-14-22 № 8
4 土師器 甕	口 径 21.4 高 残 5.7	口縁部短く直立気味に立ち上がる。内面口縁部ココナデ。胴部上端横 方向のナデ。外面口縁部ココナデ後胴部上端横方向の左へのケズリ。 胴部上端工具の当たりあり。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂・透明細粒少、 白・赤褐粗粒微	口縁-胴部上端破片 B f-14-22 № 1

第 16 表 II 区 SI078 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	高 残 2.8 底 径 6.3	ロクロ成形で内面黄色処理。内面体-底部ロクロナデ。外面体部ロク ロナデ。底部回転糸切り難し後無調整。底部僅かに上げ底。	10YR5/4 鈍い黄褐 やや緻密 砂・白粗-細粒微 やや硬質	体-底部 1/2 B f-14-19 № 19
2 土製品 土罐	長 2.9 幅 0.8 孔 0.3 重 1.79	平面梨形、断面円形。表面ナデ。	2.5Y6/3 鈍い黄 緻密 砂・白・赤褐粗-細粒 微 やや軟質	完形 B f-14-19 № 21



第17表 II区 S1080 出土遺物観察表

番号 種類 添種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 10.2 高 7.3 底 3.2	深手で半球状。底部凹む。内面体部横方向の8本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ、体-底部ナデ。外面体部縦方向の8本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ、体-底部横(周)方向のケズリ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 肌、赤褐-細粒多、白細粒 少、赤褐-細粒 硬質	西部 口縁部1/6、体部1/3、 底部完存 228
2 土師器 鉢	口 復 13.0 高 5.5 底 5.4	表面細かく割傷しており調整不明瞭。口径大きく、口縁部わずかに内湾する。内面口縁部ヨコナデ後横方向のミガキ、体部ナデ、底部調整不明。外面口縁部ヨコナデ後下半部横方向のミガキ、体部横方向のミガキで上に粘土の敷き目あり。平底でナデかと思われるが調整不明。底部わずかに凹む平底で多方向のミガキ。体部径10.1cm。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂肌-細粒少、白 -赤褐肌-細粒 やや軟質	中央部3点の接合 口縁部1/3、体-底部 完存 144・201・240一括
3 土師器 鉢	口 復 13.2 高 4.6 底 3.0	内外面赤彩。薄手でやや歪みあり。口径大きく、体部上端外面凸縁状に凹み。内面は段となる。底部は平底だが内外面とも緩やかな凹凸がある。内面口縁-底部横方向のミガキ。外面口縁-底部横方向のミガキ。体部径10.6cm。	2.5YR5/4 鈍い赤褐 やや軟質 砂肌-細粒少、白 -赤褐-透明-赤褐肌-細粒 やや軟質	2点の接合 口縁-底部1/6 B1・14.8Na1・3
4 土師器 鉢	口 復 14.8 高 残 6.3	口径大きく、口縁部二重口縁状。薄手で軽質な胎土。内外面ともミガキ前にハケ調整されているとみられる。内面口縁部横方向のミガキ、体部放射状のミガキ。外面口縁-体部横方向のミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤褐肌-細粒 微、金雲母・白・透明・半透明 明肌-細粒 硬質	貯蔵穴東端2点の接合 口縁-体部1/4 86・259
5 土師器 高坏	高 残 5.7 脚 11.5 脚孔 0.9	脚部ハの字に大きく開く。脚部3孔。器台の可能性もあり。上端は7.5YR8/4 浅黄橙 の突出部分の接合部から欠陥。内面脚部上半横方向の10本/1cmのハケ後下半ヨコナデ。外面脚部縦方向の10本/1cmのハケ後下半ヨコナデ後縦方向の密なミガキ。脚部上端径2.7cm。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂・赤褐肌-細粒 少、白細粒 やや軟質	中央部 脚部2/3 288
6 土師器 高坏	高 残 7.9 脚 復 10.0	脚部ハの字に開く。胎土精良で硬質。内面脚部上半横縁状の強いケイイテ飛込範囲のヨコナデ後上端ナデ。外面脚部下半ヨコナデ後体部底部-脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径2.8cm。坏部-脚部のミガキは途切れず続く。	5YR5/6 明赤褐 やや軟質 砂肌-細粒少、白 肌-細粒微、金雲母・赤褐肌- 細粒 硬質	中央部 脚部上半完存、下半 1/6 195
7 土師器 高坏	高 残 7.5 脚 復 10.6	脚部は下に向かって広がる柱状で、下端傾曲して大きく開く。脚部内面黒褐色。内面脚部上半横方向の粘土のしぼり目後横方向の6本/1cmのハケ後上半しぼり目を若干横方向の強いナデ及び下半ヨコナデ。外面脚部上半横方向の6本/1cmのハケ及び下半ヨコナデ後上半横方向の密なミガキ。脚部上端径2.7cm。	10YR6/4 鈍い黄橙 緻密 白・透明・半透明細粒 粗粒 硬質	中央部3点の接合 脚部上半5/6、下半 1/6 181・193・203
8 土師器 高坏	高 残 10.4	脚部柱状で上半中央。上端は坏部底部の突出部分の接合部から欠陥。内面脚部上半横方向の丁寧なケズリで、上端は工具が斜り鋭角的に凹む。外面脚部上半横方向の密なミガキ。上端にミガキの当たりがあるが、その上からさらにミガキが施される。脚部上端径2.8cm。	7.5YR6/6 橙 やや軟質 砂・赤褐肌-細粒 少、白細粒 硬質	伊内 脚部上半完存 183
9 土師器 高坏	高 残 12.8	表面割傷しており調整不明な部分多い。脚部柱状で下半二段に開く。下半ならだらかに開き、下端で更に大きく開く。内面坏部体-底部調整不明だがミガキの可能性高い。脚部上半ナデ後下半ヨコナデ。上端は丸く丁寧に調整される。外面は坏部体部縦方向のミガキで粗密不明、底部調整不明で粘土の敷き目残る。脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径3.0cm。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや粗い 砂肌-細粒多、赤褐 肌-細粒微、金雲母細粒 やや軟質	貯蔵穴内と貯蔵穴北 部2点の接合 坏部体部1/6、底部 2/3、脚部上半完存、 下半1/3 40-41
10 土師器 高坏	高 残 11.8 脚 復 10.7	坏部有縁。脚部中空柱状で下半二段に開く。下半ならだらかにハの字に開き、下端大きく開く。内面坏部放射状の密なミガキ。脚部上端脚状工具による横方向のナデ、上半横方向のナデ、下半横方向の8本/1cmのハケ後横方向のナデ後下半ヨコナデ。外面坏-脚部縦方向の密なミガキ。ミガキ下にハケ調整の可能性あり。脚部上端径3.0cm。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂肌-細粒多、赤 褐・白・透明・半透明肌-粗 粒微、砂肌-細粒 やや軟質	西部 坏部体部一部、底部 1/2、脚部上半完存、 下半1/6 22
11 土師器 高坏	口 復 19.2 高 16.4 脚 復 14.0	坏部有縁。脚部中空柱状で下半結曲して大きく開く。内面坏部口縁-体部ヨコナデ後縦方向の規則的な疎らなミガキ、体部下半斜位のミガキ、底部多方向のミガキ。脚部上半横方向のケズリで傾斜残り。上端に坏部底部から差し込まれた突出部があり先端はナデで尖る。下半横方向のナデのちヨコナデ。外面坏部口縁-体部交差する斜位の疎らなミガキ、底部縦方向の疎らなミガキ。脚部上半横方向の密なミガキ。下半は下端のみヨコナデ後下半全体横方向の密なミガキ。脚部上端径3.5cm。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂肌-細粒多、赤 褐・白肌-細粒微 硬質	中央部 坏部1/4、脚部上半完 存、下半1/4 272

12	土師器 甌	高 残 6.9 底 4.0 口径 1.4	体部丸く底部は突出する。内面体・底部横方向のナデ。底部1孔で胴部は横方向の12本/1cmのハケ。外面体部縦方向の12本/1cmのハケ、底部無いナデ。	10YR5/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗・細粒 少、白細粒少 やや硬質	東部 体部下平・底部はぼん 存在 130
13	土師器 甌	口 径 16.0 高 10.0 底 4.2 口径 1.0	成形は丁寧で外面調整は粗い。ココナデ無し。内面口縁-胴部丁寧な斜位のナデで粘土の継ぎ目あり。上端の継ぎ目のみ5本/1cmのハケ残る。底部1孔で孔周辺粘土のくれあり。外面口縁-底部軽いなデで特に上半に縦横粗や粘土のシワ残る。	5YR5/6 明赤褐 やや微密 砂・白・赤褐細粒 少、赤褐粗粒 やや硬質	南部 口縁部1/6、体部1/3、 底部1/2 267
14	土師器 壺	口 径 12.8 高 残 6.5	内面口縁部の上端及び縦方向に散赤赤彩。幅は1cm前後。縦の赤彩は全周12条前後と推定。外面も同様の赤彩が施された可能性高い。内面口縁部横方向の7本/1cmのハケ後上端ココナデ後縦の赤彩部分ナデ。胴部上端ナデで粘土のくれあり。外面口縁-胴部上端縦方向の7本/1cmのハケ後口縁部上半ココナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂細粒少、砂粗粒 硬質	北西部 口縁-胴部上端1/6 221
15	土師器 壺	口 径 17.6 高 残 7.0	二重口縁で口縁部外面のみ異なる粘土を貼り付け赤褐色を呈する。口縁部表面剥落のための調整不明。内面口縁部斜位のミガキ、胴部斜位の密なミガキ、胴部上端ナデ後縦方向のミガキ。外面口縁部横方向のミガキ、胴部縦方向の12本/1cmのハケ後口縁部接合後横方向のミガキ、胴部上端横方向のミガキ。	7.5YR7/6 橙 口縁部外面 5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂粗・細粒少、 赤褐・白粗・細粒 やや硬質	中央部 口縁-胴部上端1/4 179
16	土師器 壺	口 径 16.0 高 残 4.5	S字口縁。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデで器面の縁やかな凹凸残る。外面口縁部ココナデ。胴部上半横方向の左へのケズリ後縦方向のやや粗い5本/1cmのハケ。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い 砂・白・透明・半 透明細粒少、赤褐粗粒 硬質	西部4点の接合 口縁-胴部上半1/2 43-45-46-56
17	土師器 甌	口 径 15.7 高 残 4.2	胎土精良で泥み無く硬質。壺等の胎土に近い。口縁部上半薄く下半厚く受口状で、外面は横方向の多条の沈線があるように見える。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデで口縁部接合時の粘土が無調整のまま残る。外面口縁部ココナデ。胴部上端縦方向の6本/1cmの赤彩一定の距離を置いて施す縦方向のナデ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや微密 砂細粒少、砂・白・ 赤褐粗・細粒 硬質	南部 口縁-胴部上半1/4 92
18	土師器 壺	口 径 19.8 高 残 6.9	単口縁で口縁部長い。内面口縁部ココナデ。胴部上半ナデのち上端ケズリ。外面口縁部ココナデ能口縁-胴部上半斜位の上への6本/1cmのハケ。外面胴部上端一部保付着。	10YR5/3 鈍い黄褐 粗い 砂粗・細粒多、砂雑 粒、白・赤褐薄・細粒 硬質	中央部2点と西部の 接合 口縁-胴部上半1/2 197・201・233
19	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 6.5 高 5.1 底 4.8 口径 7.8	全体に歪みあり。ココナデなし。底部凹凸がある平底。内面底部一方内・口縁-体部横方向の強いナデ。外面口縁部横方向のナデ。体部斜位の強いナデで粘土の継ぎ目あり。底部無いナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや微密 砂・白・赤褐粗・ 細粒少 やや硬質	西部 完形 296

第18表 II区 SI081 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 9.5 高 5.6 底 3.0 口径 9.7	口縁部短く反外しわずかに内湾する。底部大きく凹む。成形・調整は特に口縁部が丁寧。外面表面剥落著しい。内面口縁部ココナデ。体部上半横方向のナデ。体部下平・底部斜位の強いナデ。外面口縁部ココナデ。体部上半横方向のナデ。体部下横方向のケズリ後斜位のナデ。底部ケズリ後ナデ。	7.5YR7/6 橙 やや微密 砂・白・赤褐・半 透明粗・細粒少 やや硬質	北東隅 完形 4
2 土師器 高杯	高 残 8.3	杯部有梗で梗は鋭く、脚部上半中実棒状。内面杯部体部ココナデ後体-底部放射状のミガキ。体部下端接合粗あり。外面杯部体-底部ココナデ後杯-脚部縦方向のミガキ。杯部ココナデは丁寧で、杯部底部に同心円状の凸が残る。ミガキは脚部密。杯部は粗密不明。脚部上端径2.5cm。	7.5YR7/6 橙 やや微密 砂細粒多、金雲母 粗・細粒 やや硬質	杯部体部一部、底部 2/3、脚部上半完存 一底
3 土師器 壺	口 径 17.3 高 残 8.5	口縁部長くハの字に開き上端は内外面とも沈線状に凹む。外面表面剥落のための調整不明。内面口縁部横方向の6本/1cmのハケ後上・下端縦方向のミガキ後縦方向の密なミガキ。胴部上端ナデ。外面口縁部縦方向の6本/1cmのハケ後口縁-胴部上端横方向のミガキ。ミガキの粗密不明。口縁部上端ココナデと見られるがミガキの可能性あり。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂・赤褐・白・透 明・半透明粗・細粒少 やや硬質	中央部 口縁-胴部上端1/6 7

4 土師器 甕	口 11.8 高 14.3 最大 復 14.4 底 4.0	小形。底部は広いケズリで作出。調整特に外面広い。胴部接合痕は内外面とも2ヶ所にあり。ハケは8本/1cm。胴部下半・底部斜位のハケ・接合後上半・胴部斜位のナデ・底部ナデ・接合後胴部上半斜位のナデ・強いナデ・口縁部接合後口縁部軽いヨコナデ。口縁部下半粘土のめくれ。胴部上半粘土の織目と断面直線あり。外面胴部下半無調整ない縦方向のハケ・接合後接合部横方向のハケ・接合後胴部上半・中心斜位のハケ後胴部上半斜位のハケ・口縁部接合後口縁部縦方向のハケ後ヨコナデ・胴部中心横方向のナデ・胴部下半縦方向のケズリ・底部一方のケズリ。胴部上半粘土の織目あり。外面胴部部分的に保付着。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白粗・細粒少、赤褐斑・細粒微 金雲母細粒微 やや硬質	南東隅 ほぼ完成
5 土師器 台付甕	高 残 20.9 台 8.7	内面胴部中心・底部斜位のナデで接合痕2ヶ所あり。底部径5.5cm。台部上端径4cmの範囲に径1mm前後の砂粘付。台部斜位のナデで下端折返し状に粘土粘付。台部上端折返し痕残り。外面胴部中心斜位。下半縦方向、台部上半斜位の7本/1cmのハケ、台部下半ナデ。外面胴部中心保付着。同部下半・台部被熱により赤変。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂・白粗・細粒少 微密 赤褐斑・細粒微 やや硬質	東部 胴部下半2/3、底・台部一部欠 1・2・3・SI82 №2
6 土師器 ミニチュア (鉢形)	口 7.5 高 5.3 底 3.4	平底。成形底部で丁寧だが上甘く口縁部の歪み大。内面口縁・底部横方向の軽いナデ。組織微緻。外面口縁・体部横方向ないし斜位の軽いナデで器面の凹凸あり。上半粘土のシワ顕著。底部ナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや微密 砂・白粗・細粒少 やや硬質	完形 9
7 石製品 棒状	長 2.9 幅 0.6 厚 0.6 重 1.89	用途不明の棒状石製品。断面円形で直径は一定。直線的な棒状で上下両端は斜め。全体が研磨により整形され、側面には多角形状に細長い研磨面が連続する。研磨面は側面は縦方向ないし斜位。上下両端は多方向。下端には側面が研磨されずに一部残る。	2.5Y5/4 黄褐 微密 黄斑	北東隅 完形 5床直

第19表 II区 SI083 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	高 残 3.6 底 1.8	小形丸底形で底部小さく凹む。胎土粗いが丁寧な作り。内面体・底部周方向のナデ後口縁・体部上半ヨコナデ後口縁斜位のミガキ。外面体部横方向のケズリ後横方向の密なミガキ。底部周方向のケズリ後ミガキ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、赤褐斑・白粗・透明・半透明粗・細粒少 硬質	中央部 口縁部一部、体部2/3、底部完存 16
2 土師器 中形甕	高 残 7.7 胴 7.0 胴 13.4	下腹は接合面で欠損する。内面胴部上半横方向の強いナデで器面の凹凸よく組織痕残り。下半斜位のナデ。外面胴部丁寧な斜位のナデ。ミガキの可能性あるが確認できず。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒多、赤褐・白粗・細粒少、金雲母粗・細粒微 やや硬質	中央部 胴部1/2 8の一括
3 土師器 甕	口 14.3 高 残 5.3	単口縁で口縁部下半直立気味。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向のケズリ後横方向の粗いナデ。組織痕あり。外面口縁・胴部縦方向の15本/1cmのハケ後胴部上半横方向の15本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ。外面口縁部下半・胴部上端を除く口縁・胴部上半保付着。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白粗・半透明粗・細粒少、金雲母粗粒微 硬質	口縁・胴部上半3/4 覆土

第20表 II区 SI085 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 台付鉢	口 復 8.0 高 9.0 台 5.8 最大 8.3	薄手で精緻な作り。表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁・体部上半調整不明だがミガキと推定される。体部下半・底部放射状の縦方向のミガキ。胴部縦方向のナデ。外面口縁・体部上半横方向のミガキ。体部下半・胴部縦方向のミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや微密 砂・赤褐粗・細粒微、白細粒微 やや軟質	東部 口縁部一部、体部1/2、胴部3/4 8
2 土師器 高坪	高 残 8.6	中央柱状脚。胴部上半は直線的に開き、下半縮曲して開く。内面胴部縦線方向のナデ後上半棒状工具による横方向の丁寧なケズリ。上端粘土のシワあり。外面胴部上半縦方向のナデで下に工具の当たり面著。下半横方向のナデ。胴部上端径3.2cm。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、金雲母・白・赤褐・透明粗・粗粒微 硬質	東部 胴部上半完存 8

3	口 径 12.8 土師器 台付甕	高さ 24.5 台 8.5 最大 19.5	単口縁。ハケはすべて 5 本/1 cm のハケ。外面表面の剥落著しい。内面口縁部横方向のハケ後ヨコナデ、胴部横方向のナデで上半は丁寧に、下半は強く施される。底部放射状のナデ。上部斜位のナデで、上端径 4.2 cm の部分に径 0.5 cm 程度の白が多い砂粒付。外面胴部下半 - 台座縦方向のハケ後胴部上半 - 中位斜位のハケ後上半縦方向の粗いハケ後口縁部ヨコナデ、胴部中位部分的に横方向のナデ・台座斜位のナデ。	7.5YR4/3 褐 やや粗い 砂礫 - 細粒少 やや軟質	北部 口縁部 1/2、胴部一部 欠、底 - 台座完全 11
4	土師器 台付甕	高さ 18.0 台 9.7 最大 径 22.0	ハケはすべて 5 本/1 cm のハケ。内面胴 - 底部斜位のナデ、下半接合痕あり内面僅かに膨らむ。台座横方向のハケで、上端径 4.3 cm の部分に径 0.5 cm 程度の砂粒付。下部粘土のめくれあり。外面胴部斜位のハケ後胴部下半 - 台座縦方向のハケ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂礫 - 細粒多、金 泥、赤海組 - 細粒微 硬質	北部 胴部中位 - 下半 1/4、 底 - 台座完全 10

第 21 表 II 区 SI090 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 11.0 高 5.5 底 3.4	小形丸底形。口縁部と体部の境は沈没状に凹み。口縁部は僅かに内湾しつつハケの間に開く。平底。内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁 - 体部横方向のミガキ。底部多方向のミガキ。外面胴部上半斜位の 9 本/1 cm のハケ・下半 - 底部周方向のケズリ後口縁 - 体部横方向のミガキ。底部のミガキ不明。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤海組 - 細粒多、 砂組 - 細粒少、白細粒少 やや軟質	北部 ほぼ完形 63
2 土師器 器台	高 残 7.0 脚 径 10.4 受孔 0.9 脚孔 0.9	脚部 3 孔でハケの間に開く。内面脚部横方向のケズリ・下端ヨコナデ後縦方向のナデ。外面脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径 2.6 cm。	5YR5/4 鈍い褐 やや緻密 砂礫粒少、白・赤 海・透明細粒微 硬質	脚部 1/6 23
3 土師器 甕	口 径 17.0 高 残 16.6	外面折返し状の複合口縁。ハケはすべて 8 本/1 cm のハケ。内面口縁部下半横方向のハケ後上半ヨコナデ後上半横方向のミガキ。胴部上半横方向のナデが上端一部ケズリあり。上端組織粗残。外面口縁部上半横方向のハケ後横方向のミガキ。下半縦方向のハケ、折返し部下面はナデが一部に粘土のめくれ残。胴部上半横方向のハケ後横方向のミガキ。胴部最大径は 32 cm 程度だろう。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂礫 - 細粒多、白 ・細粒少、砂礫微 やや硬質	貯蔵穴内 口縁部ほぼ完全、胴部 上半 1/2 56
4 土師器 甕	口 径 14.8 高 残 5.3	S 字口縁。内面口縁部ヨコナデで上端部に沈没状に凹む。胴部上半横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半斜位の左へのケズリ後縦方向の 5 本/1 cm のハケ。外面胴部上半縦付着。	10YR4/2 灰黄褐 やや粗い 砂礫 - 細粒多、白 ・赤海・透明粗 - 細粒微 硬質	中央部 口縁 - 胴部上半破片 66
5 土師器 甕	口 径 16.4 高 残 6.0	単口縁で胴部は外面丸く、内面鋭角的。口縁部上端は内湾する。内面口縁部縦方向の 9 本/1 cm のハケ後上半ヨコナデ、胴部上半横方向のナデで組織粗あり。外面口縁部ヨコナデ後胴部上半斜位の上的ケズリ後口縁部斜位の上的ケズリ。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 砂礫粒多、白・赤 海組 - 細粒微、砂組粒微 硬質	中央部 口縁 - 胴部上半 1/4 46
6 土師器 甕	口 径 16.6 高 残 21.3 最大 径 21.3	単口縁。台付甕の可能性あり。ハケはすべて 5 本/1 cm のハケ。内面口縁部斜位のハケ後ヨコナデ、胴部下半斜位のハケ後胴部下半で接合し胴部斜位のナデ。胴部下半接合部の器壁厚く、接合痕としての粘土の塊き目あり。外面口縁部ヨコナデ、胴部下半縦方向のハケ後接合口縁縦方向のハケ後接合部横方向のハケ。外面口縁 - 胴部一部縦付着。欠損後に被熱した調色の異なる破片の嵌合。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂礫 - 細粒多、白 細粒少、赤海組 - 細粒微、金 泥母粗粒微 硬質	北部 口縁部 1/6、胴部 1/2 62

第 22 表 II 区 SI095 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 11.6 高 3.3 底 6.0	ロクロ成形。内面黒色地埋。内面口縁 - 体部横方向の密なミガキ。底部一方の密なミガキ。外面口縁 - 体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤海組 - 細粒少、 砂組 - 細粒微 やや軟質	口縁 - 体部 1/6、底部 1/2 B f-14.5 № 3-16
2 須恵器 杯	口 径 12.2 高 3.5 底 6.4	内面口縁 - 底部クロコナデ。外面口縁 - 体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。底部外周粘土のめくれあり。	N4/0 灰 緻密 白細粒少、黒組 - 細粒 1/3 硬質	口縁部 1/4、体 - 底部 B f-19.5 № 10
3 須恵器 杯	口 径 13.6 高 3.6 底 5.6	焼成不良。表面の摩滅著しい。内面口縁 - 底部クロコナデ。外面口縁 - 体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	2.5Y7/1 灰白 やや緻密 灰障 - 細粒少、赤 海組 - 細粒微 軟質	口縁 - 底部 1/5 B f-19.5 № 8-9

第4章東地区の遺構と遺物

4 土師器 壺	口 径 20.0 高 残 5.5	式模型。口縁部断面コの字状。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデでへう状工具の当たりあり。胴部上端横方向のケズリ。	2.5YR3.6 暗赤褐 やや微密 砂・白磁・微粒少 ・砂・白・赤褐粗粒微 硬質	口縁-胴部上半 1/4 B 7-19.5 № 17
---------------	---------------------	---	---	------------------------------

第23表 II区 SK007 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形壺	口 径 12.4 高 残 9.7	口縁部ハの字に開き、上位で直立気味となる。外面は表面が細かく剥落しており調整不明瞭。内面口縁部縦方向の密なミガキ、胴部上半横方向のナデで指面仕肌と粘土の継ぎ目残る。胴部上端粘土のめくれあり。外面口縁部縦方向の密なミガキ、胴部上半斜位の密なミガキ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや微密 砂・白・赤褐粗粒 少・砂・白粗粒微 硬質	口縁部一部、胴部上半 完存 1層

第24表 II区 SK012 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 瓦質土器 内耳土器	口 径 26.0 高 残 3.4	ロクロ成形。内面口縁部ロクロナデ。上端は平面面。外面口縁部ロクロナデ。外面全体ス付着。	N3/1 暗灰 緻密 金雲母微粒少、砂細・ 微粒少、砂粗粒微 硬質	口縁部破片 覆土

第25表 II区 SX021 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	高 残 10.3 脚 径 12.0	中央柱状部で柱状部下端に段を持ち、下半丸く開く。精緻な作り。内面杯部底部方向不明の密なミガキ、脚部下半ヨコナデのうち上半縦方向のナデ。外面杯部底部-脚部上半縦方向の密なミガキ後脚柱部下端横方向の強いミガキのち脚部下半やや斜位のミガキ。	5YR5.6 明赤褐 やや微密 白粗粒少、白・砂 粗粒微 硬質	外底部一部、脚部上 半完存、下半 1/6 B 3-6-10 № 6-10
2 土師器 壺	口 径 18.6 高 残 7.6	折返し口縁。口唇部は斜めの平坦面となる。内面口縁部周方向に向くつかの単位に分けて施す横方向の密なミガキ。胴部上端ナデ。外面口縁部粘土貼付後 6 本 / 1 cm の縦方向のハケ後粘土貼付部ヨコナデ後ミガキ後胴部上端横方向のミガキ。口縁部のミガキは上位粗く下位は密。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂細-細粒多、白 ・透明細粒少 硬質	口縁部 1/4 4
3 土師器 壺	口 径 17.0 高 残 4.5	S字口縁。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向のナデで指面仕肌むずむずに残る。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向のケズリ後 6 本 / 1 cm のハケ。	10YR8/3 浅黄褐色 やや粗い 砂・白・透明粗・ 微粒少、赤褐粗-細粒微 硬質	口縁部一部、胴部上半 粗粒少、赤褐粗-細粒微 3/4 1-2-3

第26表 II区 SX022 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形壺	頸 径 6.1 高 残 15.9 底 径 1.7 胴 径 13.6	球胴で口縁部長く直線的。底部は小さく深く凹む。内面口縁部・外面全体赤彩。ミガキはすべて密。内面口縁部縦方向のナデ後縦方向のミガキ。頸部横方向のナデ。胴-底部周方向のナデで底部工具肌・胴部上半粗粒微残る。外面口縁-胴部上半斜位の 9 本 / 1 cm のハケ後胴部下半斜位のケズリ後口縁-胴部縦方向のミガキ。底部周方向の一回のケズリで作出。	10YR5/8 赤 やや微密 砂細-細粒少、白 ・透明粗-細粒微 硬質	口縁部下半 1/3、胴- 底部完存 19
2 土師器 甗	口 径 16.6 高 10.6 底 径 4.0 孔 径 1.6	口縁部粘土貼付。ヨコナデなく。口唇部には粘土のシワがそのまま残る。内面口縁-体部横なし斜位の 6 本 / 1 cm のハケのち体-底部横方向のケズリ。底部 1 孔。外面口縁部粘土貼付後縦方向の 6 本 / 1 cm のハケのち体部下半縦方向の強いケズリ。底面広いナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂細-細粒少、赤 褐粗-細粒微。白粗粒微 やや硬質	口縁-底部 1/2 SX022 № 10-12、 SX023 № 3
3 石器 砥石	長 残 14.6 幅 4.2 厚 3.0 重 242.0	四角柱状。側面 4 面と下面が使用面であり、側面縦方向、下面一方向の磨痕あり。側面各角部は、面取りされるような斜めの研磨面となっている。使用面は平面かやや凸面。中底-仕上げ区。	5Y7/2 灰白 緻密 ホルンフェルス(泥岩起源)	完形 16
4 石器 砥石	長 残 7.4 幅 残 5.7 厚 残 1.1 重 残 47.2	磨理で欠損した破片。確認できた使用面は一面のみ。使用面は丸みを持つ凸面で、周囲を剥離により整形している。磨痕は縦方向がほとんどだが、中央部に僅かに斜位のものがある。中底-仕上げ区。	10Y7/1 灰白 緻密 ホルンフェルス(泥岩起源)	破片 13

第 27 表 II 区 SX023 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	高 残 11.5 脚 径 10.6	上半のみ中央の棒状脚で下半丸く開く。被熱により部分的に赤色や黒色に変色。内面脚部上半横方向のケズリ。下半ヨコナデ。外面脚部下半5本/1cmの縦方向のハケのちヨコナデのち脚部全体縦方向の密なミガキ。	7.5YR6/4 橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白 ・赤海粗-細粒微 やや硬質	脚部1/4 1

第 28 表 II 区 SX024 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	高 残 10.0 脚 径 11.2	柱状脚で下半屈曲する。器壁薄く丁寧な作り。内面脚部上半環状のナデのち下半ヨコナデ。外面脚部下半8本/1cmの縦方向のハケのちヨコナデのち脚部全体縦方向の密なミガキ。屈曲部はミガキ施されぬ部分が多い。屈曲部の上5mmにミガキ以前の縦線状の仕痕あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗-細粒少、白 細-微粒微 やや硬質	脚部上半完存、脚部下 半1/2 覆土
2 土師器 中形壺	口 径 11.9 高 残 7.8	口縁部長くハの字に開く。内面口縁部横方向の密なミガキ。胴部上端ナデで粘土の継ぎ目あり。外面口縁部縦方向の密なミガキのち胴部上端縦方向の密なミガキ。内面口縁部、外面全体赤彩。胴部は全周がほぼ同じ位置で欠損しており、転用目的に意図的に欠損させたものと考えられる。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂粗粒少、砂粒粗 微、透明・白細粒微 硬質	口縁部1/2、胴部完存 25
3 土師器 甗	口 径 15.8 高 11.0 底 径 4.8 孔 0.7	口縁部粘土貼付。ヨコナデなし。内面口縁部-体部上半9本/1cmのハケのち体部丁寧なナデ。底部1孔で上下端は口徑広い。口縁部は粘土貼付により内側に盛り上がり、調整はわずかで粘土の継ぎ目やめくれが残る。外面口縁部粘土貼付ナデのち部分的に9本/1cmのハケ。体部軽いナデで粘土のシワ残る。底部ナデで扇形状の仕痕あり。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤海粗-細粒少、 砂・白粗-細粒微 やや硬質	口縁-体部中位2/3、 体部下半-底部完存 19-22
4 土師器 壺	口 径 15.6 高 残 22.5 最大 24.3	折返し口縁。内面口縁部ヨコナデ。胴部ナデで上半粘土の継ぎ目と折返し口あり。下半には胴部接合による粘土の継ぎ目あり。外面口縁部斜位の5本/1cmのハケのち粘土貼付のちヨコナデ、胴部縦方向の5本/1cmのハケ縦方向の密なミガキ。	7.5YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 赤海・砂粗-細粒 少、白細粒少 やや硬質	口縁部3/4、胴部上半 完存、胴部下半1/3 B4-6-2№17-47-51 -53
5 土師器 壺	口 径 14.0 高 残 4.0	二重口縁。口縁部上半は器壁薄く、下半は厚い。受口状になるS字帯と形壺が類似する。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ケズリ。外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 赤海粗粒・白粗粒 微、砂粗粒少 硬質	口縁部上半2/3、口縁 部下半-胴部上端完存 76
6 土師器 壺	口 径 20.2 高 残 8.0	二重口縁。口唇部は外向きの斜めの平坦面、上端わずかに上につまみ上げられる。内面口縁部上半ヨコナデでミガキの可能性あり。下半横方向の7本/1cmのハケのち横方向の粗いミガキ、胴部上半ナデ。外面口縁部上半ヨコナデでミガキの可能性あり。下半7本/1cmのハケのち下端のみ粗い横方向のミガキ。ミガキを施す工具の当たりあり。胴部上端7本/1cmのハケのち粗い縦方向のミガキ。	5YR7/6 橙 やや粗い 赤海粗-細粒・砂 粗粒少、白細粒微 硬質	口縁部-胴部上端1/4 20-21・24
7 土師器 壺	口 径 18.2 高 残 6.5	単口縁。内外面とも表面が細かく剥落するため調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデ。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデ。口縁部下端粘土の継ぎ目あり、ナデ工具の当たりあり。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤海粗-細粒多、 灰白硬-粗粒少 やや軟質	口縁部1/4、胴部上半 1/6 58-64
8 土師器 壺	口 径 20.2 高 残 7.9	単口縁で、頸部外面に粘土貼付により外面は丸く外反。内面口縁部横方向のナデ、胴部上半ケズリのち横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半8本/1cmのハケのち頸部粘土貼付。	10YR7/2 鈍い黄橙 粗い 砂粗-細粒多、赤海粗 粒微 やや硬質	口縁部-胴部上端1/5 41-59-06-07

第 29 表 II 区 SX026 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 15.2 高 残 5.3	S字口縁。内面口縁部ヨコナデ。頸部一部横方向のナデで粘土の継ぎ目あり。胴部上半軽いナデで折返し口のような縦やかな凹凸残る。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のケズリ後縦方向の8本/1cmのやや粗いハケ。外面胴部上半横付着。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗粒多、白・赤 海・透明細粒少 やや硬質	口縁-胴部上半1/2 9-11

2 土師器 壺	高 残 19.8 最大 22.4	単口縁。内面胴部横方向の軽いナデで緩やかな凹凸目立つ。下半粘土の継ぎ目あり。胴部下半で接合した痕跡であろう。外面胴部斜位の上へのケズリのうち胴部上半は縦方向の6本/1cmの粗いハケ。下半は斜位の6本/1cmのハケ。外面胴部下半被熱により変色し表面剥落。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂粒多、白・赤 赤部一部欠 白・透明細粒少、赤褐粗粒微	胴部一部欠 2・3・4・6・覆土
---------------	---------------------	--	--	---------------------

第30表 II区 SX027 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 12.4 高 残 6.0	S字口縁。内面口縁部上端わずかに凹む。内面口縁部ココナデ。胴・胴部上横方向のナデで指廻し痕等わずかに残る。外面口縁部ココナデ。胴部横方向のケズリ後口縁部下半・胴部上半斜位の7本/1cmのやや粗いハケ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂・白・透明細粒 多 硬質	口縁部・胴部上半 1/6 B 9-6-12 No.5

第31表 II区 SX028 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 19.5 高 残 3.9	S字口縁。内面口縁部上端わずかに凹む。内面口縁部ココナデ。胴・胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ。口縁部下半・胴部上端斜位の6本/1cmのハケ。	10YR5/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂・白・透明細粒 多 硬質	口縁部・胴部上端 1/6 6
2 土師器 壺	口 径 18.0 高 残 4.7	口縁部S字類似の受口状で、口縁部下半厚く上半薄く内面段となる。1等な作り。内面口縁部上半ココナデ。段の下部は横方向のナデ。下半5本/1cmのハケ。胴部上端横方向のケズリ。外面口縁部ココナデ後口縁部下半・胴部5本/1cmのハケのうち胴部横方向のナデ。要に類似するが、胎土、調整、表面の状況などから窺とした。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・砂粒・微粒少 硬質	口縁部・胴部上端 1/6 4

第32表 II区 SX030 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	高 残 6.9 脚 径 9.8 受孔 0.45 脚孔 1.1	脚部3孔でハの字に開き、下半やや内湾する。内面受部底部は表面剥落のため調整不明。脚部の孔は上下から穿孔しているため中央が狭く上下両端が広い。脚部上端横方向のケズリ。上半縦裂状のしぼり目。下半斜位のナデ。外面脚部6本/1cmの縦方向のハケ後縦方向のナデのうち下端縁にココナデ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂粒・細粒少、白 細・微粒微 やや硬質	受部底部一部、脚部上半完存、脚部下半 1/2 27
2 土師器 高坏	高 残 8.5 脚 径 9.7	中央棟状脚で下半屈曲し円曲しながらハの字に開く。脚部3孔で下半脚壁薄い。内外面とも表面剥落著しく調整不明。内面脚部ナデが、外面脚部縦方向の粗く密なミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂・赤褐粗・細粒多、 砂・赤褐微、白砂・細粒微 やや軟質	脚部上半完存、脚部下半 1/2 B 9-6-1
3 土師器 甗	口 径 7.0 高 10.7 底 2.3 孔径 0.7	中形甗を転用し、口縁部を除去し底部穿孔したもので、内面胴部上半・中位ナデで指廻し痕や組織痕あり。上端は裏口縁部を欠損させたまま無調整。下半接合痕とみられる粘土の継ぎ目あり。接合後7本/1cmのハケ。底部焼成後穿孔。外面胴部7本/1cmの斜位のハケ後上端縦方向のハケ及び下半斜位のケズリ。底部及び底部外周ケズリにより作出される上辺で不整形円形。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂・赤褐粗・細粒 少 白・透明・半透明細・粗 粒微 やや硬質	ほぼ完形 B 8-10-5 No.26
4 土師器 甗	口 径 13.0 高 7.6 底 2.5 孔径 1.6	全体に調整少なく、ココナデなし。内面外部縦方向ないし斜位のナデ後口縁部横方向のナデ。底部不整形形の1孔。外面外部斜位のナデ後口縁部横方向のナデ、底部に粘土のめくれわずかにあり。底部周辺ナデで指廻し痕顕著。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粒・細粒少、白 砂・赤褐粗・微粒、砂・赤褐 微 硬質	ほぼ完形 76-84
5 土師器 壺	口 径 12.8 高 残 24.3 最大 22.6	口縁部直線的に立ち上がる。胴部は上半と下半が張り出すための隅丸形状を呈し、器壁に細粒みの凹凸を残す。内外面とも表面が細かく剥落するため調整不明。口縁部ココナデと見られる。ミガキの有無不明。胴部横方向の軽いナデで組織痕や指廻し痕顕著。胴部下半2ヶ所に接合痕とみられる粘土の継ぎ目あり。下方の接合部分は器壁の傾曲部となる。外面口縁部ココナデとみられ、ミガキの可能性ある。器部には調整痕あり。胴部縦方向の6本/1cmのハケ後横方向のナデ。ミガキの有無不明。下部の胴部接合部には貼り付けた粘土が帯状に確認できる。帯状粘土上位はケズリ。	5YR7/6 橙 やや粗い 砂粒・細粒少、白 砂・赤褐粗・細粒微、砂・赤褐 微 やや硬質	口縁部一部欠、胴部 2/3 63-64-74-一括

6 土師器 甕	口 13.6 高 26.6 底 7.2 最大 24.2	口縁部ハの字に開き、肩部水平になる。球胴で底部突出する上げ底。内外面とも表面が細かく剥落するため調整不明瞭。内面口縁部横方向の密なミガキ、胴部上半-中位横方向のナデ、上端縮頸部、頸部直線残る。胴部下半9本/1cmのハケ後ナデ、ハケ+ナデとも底部付近斜位で上方は横方向、胴部下半で積み上げ体止後に接合していると考えられ、粘土の継ぎ目あり。ハケは接合前と後に施す。外面口縁部横方向のミガキ、胴部斜位の9本/1cmのハケ及び胴部下端-底部横方向のケズリも胴部斜位のミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂粒多、赤褐・白細粒少、砂・赤褐礫-粗粒微 やや硬質	ほぼ完形 28-29
7 土師器 甕	口 径 18.2 高 残 23.3 最大 23.7	口縁部二重口縁で中位の段は粘土貼付により作出される。内面口縁部横方向のミガキ、頸部8本/1cmの密なハケ、胴部上半ケズリ、胴部中位-下半横方向のナデで中位に頸部直線残る。中位と下半2ヶ所に積み上げ体止後の接合痕とみられる粘土の継ぎ目あり。外面口縁部横方向のミガキ、頸部縦方向の8本/1cmのハケ後横い横方向のミガキ、胴部上半-中位右下がりが斜位の8本/1cmのハケ、下半左下がりが斜位の8本/1cmのハケのち胴部斜位の粗いミガキ、胴部下半のハケは積み上げ体止前の調整だろう。	5YR7/6 橙 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒少、白細粒少、砂・赤褐礫微 硬質	口縁部1/4、頸部ほぼ 完存、胴部2/3 63-64-74-一括
8 土師器 甕	口 17.5 高 残 10.0 最大 25.6	S字口縁。内外面とも表面が細かく剥落するため調整不明瞭。内面口縁部コナデ、胴部上半ナデで緩やかな凹凸残る。外面口縁部コナデ、胴部上半横方向のケズリ後縦方向の5本/1cmのやや粗いハケ。	7.5YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂・赤褐・白粗-細粒少 やや硬質	口縁部完存、胴部上半 1/2 3-4-5
9 土師器 甕	口 径 12.3 高 22.8 底 4.2 最大 19.8	単口縁で胴部やや長い。内面口縁部6本/1cmのハケ後コナデ。胴部上半-中位横方向のナデで緩やかな凹凸あり。胴部下半接合面あり。内面に粘土の継ぎ目残る。継ぎ目より下位は接合前に施された6本/1cmのハケ。外面口縁-胴部斜位の6本/1cmのハケ後口縁部コナデ。胴部縦方向のナデ。胴部下端-底部横方向のケズリ、上げ底。内面胴部中位以下わずかに黒色に変色。外面胴-底部被熱により赤変。	5YR6/4 鈍い橙 粗い 砂粗-細粒少、赤褐・白粗-粗粒微 硬質	口縁部1/5、胴部1/3、 底部完存 37-38-69
10 土師器 甕	口 径 16.6 高 残 16.8 最大 23.8	単口縁。口縁部外半気味に立ち上がる。内面口縁部コナデ。胴部上半横方向、下半斜位のナデ。外面口縁部コナデ。胴部上半内面調整に似る丁寧な横方向のナデで、縦にいくつかの単位に分割して施す。中位無調整。下半7本/1cmのハケ後斜位のケズリ。	10YR6/6 明黄橙 粗い 砂粗多、砂礫微、白粗-粗粒微 硬質	口縁部1/3、胴部1/6 96
11 土師器 甕	口 径 18.4 高 25.5 底 6.0 最大 25.9	口縁-頸部丸みを持って外反する。内面全体横方向の5本/1cmのハケ後口縁部上半コナデ、胴部中位及び底部中心に丁寧な光沢を持つナデ。胴部中位接合面あり、内面に粘土の継ぎ目残る。外面全体斜位の5本/1cmのハケのち口縁部上半コナデ、胴部上半-中位横方向、下半斜位の丁寧で密なナデ。ハケはきれいに消え一部光沢あり。底部ナデ。内面胴部中位以下わずかに黒色に変色。外面胴部下端-底部被熱により赤変。胴部上半保存者。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 赤褐礫-粗粒多、砂・白粗-細粒少 硬質	口縁-胴部1/2、底部 完存 85-91-97
12 土師器 丸玉	長 3.4 幅 3.9 孔径 0.5 重 40.7	やや不整な球状。表面ナデ。孔径は一定している。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂粗-粗粒多、白粗-粗粒微、透明細粒微 硬質	完形 18

第33表 II区 SX031 出土遺物観察表

番号 種類 器種	出量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	高 残 8.4	中空柱状胴。内面胴部上半縦方向の強いナデで粘土のめくれとシワ顯著。上端は平底胴部の棒状の粘土が差し込まれていたとみられる。外面胴部上半縦方向の密なミガキ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒少、白粗-粗粒微 硬質	胴部上半完存 B 8-G-24 No 1
2 須恵器 甕	高 残 4.0	内面胴部ナデ。外面胴部平行叩き。	7.5Y2/1 黒 やや緻密 灰白礫-細粒少 硬質	胴部破片 B 8-G-24 No 21
3 須恵器 甕	高 残 13.0	内面胴部浅い木目様の当て具痕。外面胴部平行叩き。	10Y5/1 灰 緻密 白礫-粗粒微 硬質	胴部破片 B 8-G-24 No 31



第34表 II区 SX032 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 13.7 高 残 19.2 最大 16.4	単口縁。口縁部外面の調整甘い。長胴。内面口縁部横方向のナデ後上端ヨコナデ。胴部斜位の丁寧なナデで上半組積痕顕著。外面口縁部斜位のヨコナデで組積痕残り。下半にへう状工具の当たりあり。胴部上端上への、上半左への、中位-下半左上へのケズリのち上半横方向の強いナデ。外面胴部上半一部腐付着。	10YR3/2 黒褐 やや粗い 白磁-細粒砂、砂 黒-細粒鉄、金雲母細粒鉄	口縁-胴部上端完存。 胴部上半-中位 2/3、 胴部下半 1/2 B 3-11-3 № 14

第35表 II区 SX033 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	口 径 9.4 高 残 7.8 受孔 1.4 脚孔 1.4	受部は体部上端で縁を持ち、口縁部への字に外反して開く。脚部3孔とみられる。内面受部体部縦方向の密なミガキ後口縁部横方向の密なミガキ。底部の孔は横方向のケズリ。脚部上半ケズリ、一部7本/1cmのハケ後縦方向のミガキ。外面受部口縁部ヨコナデ。受部体部-脚部上半縦方向の密なミガキ。受部には一部磨ないし斜位のミガキあり。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂細粒砂、白・赤 褐黒-細粒鉄、金雲母細粒鉄	受部 1/3、脚部上半 1/4 29-32
2 土師器 高杯	高 残 10.7 脚 径 14.6	表面部分的に剥落しており調整不明瞭。中空柱状脚で下半への字に開く。内面杯底部調整不明。脚部上半縦方向の強いナデのち中位組積み後横方向のナデ。下半ヨコナデ。中位の組積痕顕著。外面杯底部-脚部全体縦方向の密なミガキ。	7.5YR6/6 橙 粗い 砂・赤褐黒-細粒多。 白磁-細粒鉄、赤褐黒鉄 やや硬質	脚部 5/6 B 3-6-22 № 23
3 土師器 甕	口 径 13.2 高 残 4.1	二重口縁とみられる。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のナデで粘土のめくれあり。外面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のナデ。	2.5Y7/2 灰黄 粗い 砂黒-細粒砂、赤 褐黒-細粒鉄、白細粒鉄 硬質	口縁部 1/3 42
4 土師器 甕	口 14.0 高 残 21.0 最大 径 23.2	口縁部への字に開き上端外反する。胴部下半は接合部から欠損した可能性あり。内面口縁部横方向の9本/1cmのハケ後縦方向の密なミガキ後上端横方向の密なミガキ。胴部横方向のナデで上端粘土のめくれと指頭正痕残り。外面口縁部上端ヨコナデ後口縁-胴部縦方向の密なミガキで、頸部にわずかに横方向のミガキとへう状工具の当たりあり。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂細粒多、白磁- 粗粒鉄、砂粗粒鉄 硬質	口縁部一部欠、胴部 1/3 B 3-6-22 № 42

第36表 II区 SX034 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 径 16.0 高 残 4.6	特に外面内面が表面細かく剥落しており調整不明瞭。丁寧な作り。内面杯口縁-体部横方向の8本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ後横方向やや斜位のミガキ。外面杯口縁部ヨコナデのち口縁-体部横方向主体のミガキ。底部縦方向のミガキ。ミガキ下にナデやハケあるかもしれないが不明瞭。脚部上端径 3.3 cm。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂細粒多、砂粗粒 鉄、白・赤褐黒-細粒鉄 やや硬質	杯口縁-体部 1/3、 底部完存 37
2 土師器 甕	口 径 15.4 高 残 11.9	外面表面部分的に剥落しており調整不明瞭。口縁部への字に開く。内面口縁部ヨコナデ後横方向のミガキ。頸部横方向の6本/1cmのハケ後横方向のミガキ。胴部上半横方向の6本/1cmのハケ後上半中心にナデ。上端に組積痕・指頭正痕残り。外面口縁部ヨコナデ後横方向のミガキ。胴部上端横方向、上半斜位のケズリのち胴部上半全体横方向のミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂細粒多、砂粗 粒鉄、白・赤褐黒-細粒鉄、 金雲母細粒鉄 硬質	口縁部 1/3、頸部完存 、胴部上半 1/4 B 3-6-18 № 1
3 土師器 甕	口 径 19.7 高 残 23.4 最大 31.9	口縁部への字に開き、上端内湾後外反。内面僅かに段あり。内面口縁部横方向の5本/1cmのハケ後横方向のミガキ。上端を除き口縁部は4分調でミガキ充填。胴部横方向の5本/1cmのハケ後上半部分的にナデ。上端に組積痕・指頭正痕残り。外面口縁-胴部上端横方向、胴部斜位の5本/1cmのハケ後口縁部横方向後縦方向の密なミガキ。胴部横方向のミガキ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂黒-細粒砂、白 ・赤褐黒-細粒鉄、金雲母細 粒鉄	口縁部一部欠、胴部上 半 1/2 10

第 37 表 II 区 SX035 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 復 14.0 高 残 7.0	S字口縁。内面口縁部ヨコナデで下半調状にわずかに凹凸。胴部上半横方向のナデで粗積粒と細やかな表面の凹凸残る。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向の6本/1cmのハケ。ハケ下の調整は見えない。	10YR7/2 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫粒少、白・赤 陶質・細粒散 やや硬質	口縁・胴部上半 1/2 B 9-6-16 № 51

第 38 表 II 区 SX037 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	口 13.6 高 残 4.7	坏部半球状。内面外部口縁部横方向のミガキ後口縁・底部放射状のミガキ。外面外部縦方向の密なミガキ後脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径 2.7 cm。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤陶質・細粒少、 砂・白・透明・半透明組・粗 粒少 硬質	坏部一部欠 B 9-10-9 № 5
2 土師器 高坏	高 残 9.5	坏部内面・外面全体赤彩。脚部中央棒状で下半段を持って開き、下端で外気味に大きく開く。坏部は接合面で欠損する。内面坏部ミガキ。脚部上半横方向の右へのナデ、下半ヨコナデ。上端は小さく丸く凹む。外面脚部上下半への縦方向のケズリ後縦方向のミガキ。下半縦方向の6本/1cmのハケ後縦方向のミガキ。脚部上端径 3.2 cm。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや硬質 砂・白細粒多、砂 ・白粗粒散 やや硬質	脚部上半完存、脚部下 半一部 覆土、B 9-10-9 № 22

第 39 表 II 区 SX040 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	高 残 6.1 受孔 0.5 脚孔 1.0	脚部3孔でハの字に開く。内面脚部上半横方向の左へのケズリ、下半横方向の右へのナデ。外面脚部縦方向のミガキ。上端は接合面で欠損しているのと見られる。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫・細粒多、白 ・赤褐・透明組・細粒散 やや硬質	脚部上半完存 B 9-11-7 № 28
2 土師器 鉢	口 11.5 高 6.8 底 2.4	小形丸底鉢。口縁部は長く直線的にハの字に開く。凹み状。内面口縁部ヨコナデ後縦方向のミガキ。体・底部縦方向の強いナデ後体部横方向のミガキ。外面口縁部上端ヨコナデ後口縁部斜位のミガキ。体部下半横方向のケズリ後体部横方向のミガキ。底部一方のケズリ後方向不明のミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤陶質・細粒 少、白・透明・半透明組・粗 粒散 やや硬質	完形 B 9-11-7 № 39
3 土師器 鉢	口 復 13.6 高 4.7 底 4.0 × 3.2	口径大きい。体・口縁部はハの字に直線的に立ち上がるが、内面には横を持つ。底部はケズリによる作出で楕円形に突出する。表面剥落著しく調整不明。内面口縁部ヨコナデ後口縁・体部横方向のミガキ。底部多方向のミガキ。外面口縁部ヨコナデ・体部横方向の左へのケズリ後口縁・体部横方向のミガキ。底部ケズリ後多方向のミガキ。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂礫・細粒多、白 ・透明・半透明粗粒散 やや硬質	口縁・体部 1/3、底部 完存 B 9-11-7 № 48・80-81
4 土師器 中形甕	口 復 13.0 高 残 14.2 最大 14.9	口縁部ハの字に開き、上端直立気味に立つ。ハケはすべて9本/1cmのハケ。内面口縁部下横方向のハケ後上半ヨコナデで下端粘土のめくれあり。胴部斜位のナデで上半粗積粒顯著で断面巨粒も残る。中位接合面としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部上端ヨコナデ後中位・下半縦方向のハケ。胴部上半右下がり斜位のハケ後上端右上がり斜位のハケ・中位・下半横方向のナデ。	5YR7/6 橙 やや粗い 砂・赤陶質・細粒 少、白・透明粗粒散 やや硬質	口縁部 2/3、胴部上半 はび完存、胴部下半 1/2 B 9-11-7 № 89-90
5 土師器 高坏	口 復 18.0 高 残 7.4	坏部有縁。下端欠損部には突出部が残っており、これを脚部側に差し込んで接合すると見られる。内外面とも表面の剥落著しく調整不明。内面外部口縁・体部ヨコナデ後縦方向のミガキ。底部調整不明。外面外部口縁・体部ヨコナデ及び横方向のナデで体部下端の縁に僅かに粘土のめくれあり。底部斜位のナデ。脚部上端縦方向のミガキ。脚部上端径 3.3 cm。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂礫・細粒少、赤 陶・白粗・細粒散、金雲母黒 やや硬質	坏部口縁・体部 1/3、 底部完存 B 9-11-7 № 40
6 土師器 高坏	高 残 10.2	中央柱状脚・脚部は僅かに内湾しつつ開き、下半で裾曲する。上端は接合面から欠損する。内面脚部上端螺旋状につながる粗積粒が無調整のまま残り、粘土のシワ顯著。脚部上半下位横方向の7本/1cmのハケ後中位・下位横方向のケズリ。外面脚部上半縦方向の密なミガキ。脚部上端径 2.5 cm。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤陶質・細粒 少、金雲母・白・透明・半透 明組・細粒散 硬質	脚部上半 1/2 11

第4章 東地区の遺構と遺物

7 土師器 甕	口 径 8.2 高 9.1 底 3.8 最大 11.6	短口縁の小形壺形。底部は焼成後穿孔で孔は楕円形、径0.56×0.72cm。小口縁の転用か。内面口縁部ヨコナデ後斜位のミガキで下縁粘土のめくれあり。体部上半ナデで細積頓あり。中位-底部縦方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ後粗い横方向のミガキ。体部横方向のケズリ後斜位の密なミガキ。底部一方のケズリ後多方向のミガキ。底部横かに凹む。外面体部被熱により赤変。	10YR8/1 灰白 やや粗い 砂粗-細粒多、白 やや硬質	口縁部1/3、胴-底部 ほぼ完存 B 8-11-7 №.7
8 土師器 壺	口 径 18.2 高 10.7	口縁部直線的に長く開き口径大きい。口縁部内面中心に表面剥落しており調整不明。内面口縁部上半ヨコナデ下縦方向のナデ後縦方向のミガキ。胴部上端横方向のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、白 赤褐-透明粗-細粒微 やや硬質	口縁部1/4、胴部上端 一部 B 8-11-7 №.86
9 土師器 壺	口 径 20.8 高 20.8	口縁部直線的に長く開き口径大きい。口縁部内面中心に表面剥落しており調整不明。内面口縁部上半ヨコナデ後縦方向のミガキ。胴部横方向のナデで上半細積頓あり。外面口縁部上半ヨコナデ後縦方向のミガキ。下端ミガキの工具の当たりあり。胴部横方向のミガキ。胴部下縦方向のケズリ後胴部縦方向のミガキ。ミガキは胴部・口縁部・胴部の順に施される。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤褐粗-細粒多、 砂・白粗-細粒少 やや硬質	口縁部1/3、胴部1/6 B 8-11-7 №.
10 土師器 壺	口 径 13.8 高 12.5 最大 17.6	S字口縁で内面上端は沈降状に凹む。ハケ無し。内面口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ、胴部横方向のケズリ。外面胴部下部分的に被熱により赤変。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白 赤褐-透明粗-細粒微少 やや硬質	口縁部1/6、胴部1/3 16
11 土師器 甕	口 径 24.8 高 8.9	S字口縁で口縁部上半が極端に長い。上端斜めに面取り。内面口縁部ヨコナデ後横方向のミガキ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部S字部ヨコナデ後上位部分接合し横方向のナデ後上半ヨコナデ。接合部に明確な粘土の継ぎ目あるほか上位部分にも種かに粘土の継ぎ目あり。胴部上端右下がりが斜位のケズリ後左下がりが斜位の7本/1cmの粗いハケ。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白 赤褐-透明粗-細粒微少 やや硬質	口縁部-胴部上端2/3 1-5-7-8-9
12 土師器 甕	口 径 13.8 高 11.9	単口縁。ハケはすべて7本/1cmのハケ。内面口縁部ヨコナデ、胴部横方向の強いナデで中位接合頓としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部ヨコナデ。胴部中位斜位のハケ後中位横方向のハケ後上手-中位斜位のハケ後下横方向のケズリ。胴部粘土の継ぎ目あり。外面口縁-胴部上半被熱により赤変。	5YR7/6 橙 粗い 赤褐粗-細粒多、砂礫 -細粒少、白粗-細粒微 やや軟質	口縁部-胴部上端 2/3、胴部中位1/3 7
13 土師器 甕	口 径 16.4 高 19.4 最大 23.7	口縁部丸く外反する。ハケはすべて4本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後ヨコナデ。胴部上半横方向の密なハケ後下半横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ。胴部斜位のハケ後上手及び中位に縦方向のハケ・下半縦方向のナデ。下手には接合頓としての粘土の継ぎ目あり。胴部横かに凹む。外面胴部中位係付着。	2.5YR6/6 橙 粗い 赤褐粗-細粒多、砂礫 -細粒少、白粗-細粒微 やや軟質	口縁部2/3、胴部1/4 B 8-11-7 №. 47-64-66-67
14 土師器 台付甕	高 23.0 台 8.8 最大 18.4	S字口縁。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端横方向のナデ。胴部上半-中位縦方向のナデで器面の凹みあり。胴部下縦-底部縦方向のナデで底部碗状に工具痕あり砂粘付なし。胴部下接合頓としての粘土の継ぎ目横かにあり。台部横方向のナデで下端折返し状に粘土貼付け。台部上端径4.6cmの部分に径0.5-1cm程度の金雲母を含む砂粘付け。外面口縁部ヨコナデ、胴部横方向の左へのケズリ後下半左上がり斜位の6本/1cmのハケ後上半左下がりが斜位の6本/1cmのハケ。台部右下がりが斜位の6本/1cmのハケ後縦方向の疎らなナデ後下横方向のナデ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂・白・赤褐・透 明粗-細粒少 やや硬質	口縁部一部、胴部 1/2、底-台部完存 6
15 土師器 台付甕	口 径 13.1 高 25.4 台 9.4 最大 21.1	S字口縁。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半縦方向のナデで器面の凹みあり。下半斜位のナデで接合頓としての粘土の継ぎ目あり。底部径4cmの部分及び台部上端径3cmの部分に径0.5-1cm程度の砂粘付け。台部上半縦方向の強いナデ。下半横方向のナデで下端折返し状に粘土貼付け。外面口縁部ヨコナデ。胴部斜位の上へのケズリ後下半左下がりが斜位の粗い7本/1cmのハケ・下半右下がりが斜位の粗い7本/1cmのハケ。台部下半縦方向のナデ。内面胴部下縦黒く変色。外面胴部中位係付着。台部内外面・外面底部被熱により赤変。	10YR3/3 暗褐 やや緻密 砂粗-細粒少、白 赤褐-透明粗粒微 やや硬質	口縁部1/3、胴部2/3、 底-台部完存 16

第40表 II区 SX041 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形壺	口 10.8 高 残 14.6 最大 径 17.8	口縁部短く立ち上がる。内面口縁部ココナデでミガキの可能性あり。下縁粘土のめくれあり。胴部下斜位の5本/1cmのハケ後胴部下半接合後胴部横方向のナデ。胴部上半・中位縦横痕と首頸直痕。下半接合痕としての粘土の継ぎ目残る。外面口縁部ココナデ後横方向の密なミガキ。胴部上半縦方向ないし斜位の7本/1cmのハケ・下半横方向のケズリ後胴部全体縦方向の密なミガキ。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂・白・赤褐相 - 細粒少 硬質	口縁部2/3、胴部1/2 B 9-11-1 No.26
2 土師器 壺	口 径 13.2 高 残 9.0 最大 径 15.6	薄手で単口縁。内面口縁部ココナデ。胴部上半・中位横方向のナデ。外面口縁-胴部上部縦方向の8本/1cmのハケ後口縁部ココナデ・胴部上半・中位斜位のケズリ。外面胴部中位縦付着。	7.5YR8/3 浅黄褐色 やや粗い 砂・赤褐相-細粒 多、白磁粒少、砂・赤褐相 やや硬質	口縁-胴部上半1/5 9
3 土師器 壺	口 径 16.3 高 残 6.2	単口縁。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデ。外面胴部上半斜位の8本/1cmのハケ後口縁部ココナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂相-細粒多、白 ・赤褐相-細粒少 硬質	口縁-胴部上半1/4 B 9-11-1 No.47
4 土師器 台付甕	高 残 2.9 台 5.9	内面底部横方向のナデ。台部上端ナデ。台部斜位のナデ。下部平皿で内外面に粘土のめくれあり。外面胴部下端縦方向のナデ。台部斜位の8本/1cmのハケ。外面胴部下端縦付着。台部内外面被熱により赤変。	10YR8/3 浅黄褐色 粗い 砂・赤褐相-細粒多、 白磁粒 やや硬質	台部完存 2
5 石質模造品 圓形	長 3.9 幅 1.6 厚 0.4 重 5.5 孔 0.17	表・裏・左側面にやや広く剥離面を残す。平面二等辺三角形で上部は平皿。断面は長方形。側面はほぼ直線的に研磨されるが、右側面上位のみ中央に稜を持つ。断面は表面が水平方向主体で上下に斜位。側面・裏面は斜位。1孔で表面からの穿孔。	5G2/1 緑黒 緻密 緑色付	完形 B 9-11-1 No.24

第41表 II区 SX042 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 11.9 高 8.1 底 4.9	小形丸底形。成形・調整は広くやや歪みあり。底部は不整な平底。内面口縁部ココナデ。体-底部周方向のナデ。外面口縁-体部縦方向の8本/1cmのハケ後口縁部ココナデ・体部上半縦方向の上へのケズリ後体部下半横方向のケズリ。底部一方向のケズリ。	5YR7/6 橙 やや粗い 砂相-細粒多、白 ・赤褐相-細粒少 やや硬質	ほぼ完形 9
2 土師器 中形壺	高 残 9.6 底 4.7 胴 13.8	球胴で底部は丸みを持つやや不整な平底。上端は口縁部の接合面でごく粗する。内面胴部斜位のナデで上半・中位縦横痕顕著。下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。底部一方向のナデ。外面胴部上半横方向のナデ。中位斜位のナデ後胴部下半・底部周方向の左へのケズリ。胴部中位縦横痕あり。	5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂相-細粒多、白 ・赤褐相-細粒少 やや硬質	胴部一部欠、底部完存 ドリッド

第42表 II区 SX043 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 径 11.0 高 4.6 底 2.5	薄手、半球状で丁寧な成形。被熱のため全体に軟質で赤褐色を呈し、表面の調整著しく調整不明。底部は平底で僅かに浅く凹む。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 砂・白・赤褐相 - 細粒少 軟質	口縁-体部一部、底部 完存 6
2 土師器 高坪	高 残 9.3	中位柱状脚で下半平皿状で開く。上端は坯部接合面でごく粗。坯部底部側から脚部に接合した突出部分明瞭に残る。坯部底部調整不明。脚部上半棒状工具による横方向の丁寧なケズリ。下半横方向のナデ。外面脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径2.9cm。	10YR8/4 浅黄褐色 やや粗い 砂・赤褐相-細粒 少、白磁粒 硬質	脚部上半一部欠 14-16
3 土師器 壺	口 径 16.2 高 残 9.3	単口縁で厚手。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデで縦横痕わずかに残る。外面口縁部ココナデ。胴部上半斜位のナデ。	10YR8/3 浅黄褐色 粗い 砂相-細粒多、赤褐相 -細粒少、白磁-細粒 やや軟質	口縁-胴部上半1/3 4

第43表 II区 SX044 出土遺物観察表

番号 種類 跡類	法長 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 径 12.4 高 残 5.3	口径大きく口縁部短い。被熱のため全体に赤褐色を呈し、表面の割落著しく調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ後口縁-体部横方向のミガキ。外面口縁部ヨコナデで、横方向のミガキの可能性あり。体部横方向のミガキ。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 砂礫-細粒少、赤褐礫-細粒数、白粗-細粒数、金雲母細粒数 やや硬質	口縁-体部 1/6 B 4-10-19
2 土師器 高坪	高 残 3.7 脚 長 14.0	中空柱状脚と見られ、下半部曲し直線的に大きく開く。内面脚部上半横方向のケズリ、下半横方向のナデ後下端ヨコナデ。外面脚部下端ヨコナデ後脚部縦方向の密なミガキ。	5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒少、白粗-細粒数 やや硬質	脚部上半一部、下半 1/3 B 4-10-19

第44表 II区 SX047 出土遺物観察表

番号 種類 跡類	法長 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 13.5 高 6.4 底 1.7	器壁薄く歪み少ない精緻な作り。口径大きく、口縁部は複合口縁状で上半は直線的に外傾する。底部は平底でわずかに凹む。内外面とも横(縦)方向の密なミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや細密 砂・白・透明・半透明細粒多、砂・白・透明・半透明粗粒数、赤褐細粒数 硬質	口縁部 1/4、体-底部 実存 B 4-11-11 №21
2 土師器 甕	口 径 18.8 高 残 5.6	粘土貼付による複合口縁で、端部上につまみ上げられる。内面口縁部横方向の 11 本/1 cm のハケ後ヨコナデ。外面口縁部斜位の 11 本/1 cm のハケ後上半粘土貼付後ヨコナデ。	10YR6/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒少、白粗-細粒数、赤褐粗-細粒数 硬質	口縁部 1/6 7/9
3 土師器 甕	口 径 15.2 高 残 5.2	S 字口縁で、口縁部上端内面凹む。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のナデで指頭直痕残り。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向の 6 本/1 cm のやや粗いハケ。	7.5YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・透明・半透明細粒少、赤褐・白粗粒数 硬質	口縁-胴部上半 1/4 10
4 土師器 甕	口 径 18.0 高 残 3.2	成形・調整丁寧。口縁部内面受口状に凹み、器壁上半薄く下半厚い。外面わずかに S 字状に湾曲する。内外面とも口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 赤褐粗-細粒多、砂粗-細粒少、白粗粒少 やや硬質	口縁部 1/3 B 4-15-15 № 7, B 4-15-15-4 層

第45表 II区 SX048 出土遺物観察表

番号 種類 跡類	法長 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	高 残 3.3 底 3.5	小形丸底形とみられる。体部潰れた球割で底部と体部の境は不明瞭。底部中央部に凹む。外面全体及び内面口縁-体部上端、体部一部赤形。内面口縁部斜位のミガキ、体-底部横方向の荒いナデ。外面口縁部下端-体部斜位の 8 本/1 cm のハケ後横方向の粗いミガキ。底部ナデ、底部中央のくぼみは両方向のケズリ、径 1.5 cm。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒少、白粗粒少、砂・赤褐礫 硬質	体部一部欠、底部実存 4

第46表 II区 SX057 出土遺物観察表

番号 種類 跡類	法長 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 径 11.5 高 5.1 底 5.2	作り荒いが、内外面とも底部は丁寧に成形・調整される。平底で中央わずかに凹む。内面口縁部ヨコナデ。体-底部横方向のナデ後粗い放射状のミガキ。体部下粘土の継ぎ目あり。外面口縁部ヨコナデ、体部粗いナデ後上半一部 9 本/1 cm のハケ後横方向の粗いミガキ。体部粘土のシワ残る。底部丁寧なナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒少、白粗粒少、砂・赤褐礫 硬質	口縁部一部、体部 1/2、底部実存 B 4-15-19 № 9
2 土師器 甕	口 径 14.0 高 残 15.4 最大 径 19.2	単口縁で端部内外面が凹む。内面口縁部 9 本/1 cm のハケ後ヨコナデ、胴部上端横方向、上半-下半斜位の上へのケズリ。外面口縁-胴部上端斜位の 9 本/1 cm のハケ後ヨコナデ、胴部斜位の 9 本/1 cm のハケ後中位-下半斜位の上へのケズリ後中位-下半横方向のナデ。外面胴部中位一部縦付着。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白粗・透明・赤褐粗-細粒数 硬質	口縁部 1/3、胴部 1/2 10-12-1 一括

3 石製模造品 朝形	長	4.0	平面二等辺三角形で上部は丸味を持つ台形、表面Y字状の筋を持ち 断面は三角形。表面斜位。裏面垂直方向の擦痕で、裏面一部に斜位の 擦痕あり。1孔で表面からの穿孔。右上部をわずかに欠損する。	7.5GY4/1 暗緑灰 微塵 緑色片岩	ほぼ完成 B ㊦-15-18 №1
	幅	2.3			
	厚	0.5			
	重	残 5.3			
	孔	0.13			

第47表 II区 SX059 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	口 径 8.9 高 残 7.3 受孔 0.7 脚孔 1.0	受部は短く立ち上がり器部斜め上方に開く。脚部3孔でハの字に開く。 内面受部上端横方向、体・底部放射状の密なミガキ、脚部上平棒状工 具による成形・ナデ後脚部穿孔後下平コナデ後中位左への連続した ケズリ。外面受部口縁部横方向の密なミガキ、体・脚部縦方向の密な ミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや微塵 砂細粒少、白・赤 赤黒組-細粒微 硬質	受部 1/3、脚部上半 1/3 95-97
2 土師器 器台	口 径 9.8 高 残 7.8 受孔 0.8 脚孔 0.8	受部は深く丸味を持ち口縁部水平に開く。脚部上平柱状。下平ハの字 に開く3孔。内面受部口縁部周方向のミガキ、体・底部やや斜位の放 射状の密なミガキ、底部の孔径は上端で狭く0.65cm、脚部ナデ。外 面受-脚部縦方向の密なミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂細粒多、砂粗粒 微、赤黒組-細粒微 硬質	受部 1/3、脚部上半完 存 81・107-一括
3 土師器 壺	口 径 15.0 高 残 5.0	頸部わずかに膨らみを持ちながら直立し口縁部ハの字に開く。内外面 とも表面の剥落著しく調整不明。ココナデか。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂細-細粒多、白 黒-粗粒少、砂微塵 やや軟質	口縁-頸部 1/4 99
4 土師器 壺	口 径 14.0 高 残 19.5 最大 20.4	粘土貼付による複合口縁で、頸部狭く口縁部ハの字に開く。胴部上 平不正円形の焼成後穿孔あり、径5.3×5.0cm。内面口縁部横方向の6 本/1cmのハケ後ココナデ、胴部一部横方向の6本/1cmのハケ後縦方 向主体のナデで部分的に指部圧痕と指痕が残る。外面口縁部縦方向、 胴部上平斜位、中位以下横方向の6本/1cmのハケ後口縁部ココナデ、 胴部横方向のミガキ。	10YR8/3 浅黄橙 やや微塵 黒組-微粒多、砂 土黒-微粒少、白粗粒微、 赤黒組-細粒微 やや硬質	口縁部ほぼ完成、胴部 2/3
5 土師器 壺	口 径 14.4 高 残 6.9	単口縁。口縁部のココナデが弱いため形状均質ではない。内面口縁部 軽いココナデ。胴部上平横方向のナデで指痕が残る。外面口縁部軽い ココナデ。胴部上平横方向の7本/1cmのハケ後胴部上端横方向のナ デ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤黒組-細粒少、 砂細粒少、白粗粒少 やや硬質	口縁-胴部上半 1/6 56
6 土師器 壺	口 径 16.0 高 残 10.8	単口縁。胴部最大径は21cmほど。内面口縁部ココナデ。胴部上平横 方向のナデ。外面口縁部ココナデ。胴部上端縦方向、上平斜位の11 本/1cmのハケ後胴部上平斜位のナデ。上端のナデは強くケズリに近 い。	7.5YR7/6 橙 粗い 砂細粒多、砂微-粗粒 微、白・赤黒組-細粒微、黒 母粗粒微 硬質	口縁部 2/3、胴部上半 1/6 25-34-41

第48表 II区 SX060 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 15.6 高 残 5.5	二重口縁で中位の段は外面では甲段だが内面では傾かな湾曲のみ。周 部は丸くおさまる。内外面とも表面剥落しており調整不明。内外面 とも口縁部縦方向のミガキで、ミガキはすべて密とみられる。	5YR5/8 明赤黄 やや粗い 赤黒組-細粒多、 砂・白・透明半透明黒組-粗 粒少 やや軟質	口縁部 1/2 B ㊦-20-15 №10

第49表 II区 SX061 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形壺	頸 径 11.0 高 17.7 底 4.8 胴 径 13.7	やや潰れた球胴で口縁部長く直線的。表面細かく剥落しており調整不 明。ミガキはすべて密に施されたと思われる。内面口縁部下平8本 /1cmのハケ後口縁部縦方向のミガキ。胴部下平-底部8本/1cmのハ ケ後胴部横上げ後胴部縦方向のナデ・底部周方向のナデ。胴部上半に 粘土のシワと指痕。下半に横上げ休止による接合痕あり。胴部上端 口縁部接合の際の粘土が無調整のまま残る。外面口縁部縦方向のミガ キ、胴部斜位のミガキ。底部調整不明。胴部下平に遊星の穴を埋める ために粘土を貼った痕跡あり。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂細-細粒多、白 赤黒組-細粒微 軟質	口縁部 1/2、胴-底部 完存 B ㊦-20-19

第50表 SX062 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 径 24.4 高 残 6.6	伊勢型系甕か、二重口縁で端部面取りされる。内・外内面とも表面磨滑しており調整不明瞭。内面口縁部ココナデ後横方向の密なミガキ。外面口縁部ココナデ。ミガキの可能性あるが不明。	7.5YR7/6 橙 やや微黄 砂・赤褐斑・細粒少、白・透明・半透明細粒少 やや軟質	口縁部 1/3 1

第51表 SX063 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 径 17.8 高 残 6.3	口縁部複合口縁状。内面口縁部ココナデ、胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上端斜位のミガキ。ミガキの粗密は不明。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂・白堊・細粒少、透明・半透明・赤褐斑・細粒微 やや軟質	口縁部 1/2、胴部上端一部 1・2

第52表 II区 SX064 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形甕	口 径 12.3 高 10.7 底 4.3 胴 12.6	表面細かく磨滑しており調整不明瞭。口縁部わずかに内湾。内面口縁部横方向のナデ後ココナデ、胴部横方向のナデで磨積残存。下半粘土積み上げ休止による接合痕あり。底部横方向のナデで突出する。外面口縁部上半ココナデ。口縁部下半・胴部上半斜位のナデ。胴部中位・下半横方向のナデ後胴部下端・底部周方向のケズリ。底部は丸味を持ち形状不明瞭。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐斑・細粒多、砂・白堊・細粒微 やや軟質	口縁部 1/3、胴・底部 完存 55
2 土師器 高杯	高 残 9.3 脚 14.7	中柱状形で下半傾曲して大きく開く。内面脚部上半縦方向の強いナデで粘土のしぼり目そのまま残る。下半ココナデ。外面脚部上半横の丁寧な縦方向のナデで単位つかぬ。下端に工具の当たりあり。脚部下半ココナデ。脚部上端径 3.5cm。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂・白・透明細粒少、砂粗粒微、赤褐斑・細粒微、金雲母細粒微 やや硬質	脚部一部欠 52
3 土師器 甕	口 径 15.8 高 27.0 底 7.8 最大 22.0	全体に調整甘い。口縁部複合口縁状で上半直立。内面口縁部上半ココナデ。下半横方向の 6本/1cmのハケ。胴部上半・中位斜位の 6本/1cmのハケ後横方向のナデ。下半・底部横方向の 6本/1cmのハケ後斜位のナデで、各所に磨積痕。下半に粘土積み上げ休止による接合痕あり。外面口縁部ココナデ後縦方向の 6本/1cmのハケ。胴部上半・中位斜位のまばらな 6本/1cmのハケ後部分的なナデ。下半成形時のナデのみ。中位粘土の継ぎ目、下半接合痕あり。底部は輪状の粘土を貼り付けて作出する。調整少なく粘土の継ぎ目顕著。中央凹む。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂・白堊・細粒少、透明・半透明・赤褐斑・細粒微 やや軟質	口縁部 5/6、胴部一部欠、底部完存 38
4 土師器 甕	口 径 20.5 高 残 19.0 最大 29.5	口縁部ハ字に開き、端部面取りされ内面わずかに凹む。内面口縁部ココナデ。胴部上半・中位斜位の強いナデで磨積痕あり。外面口縁部縦方向の強いナデ後ココナデ。胴部上端横方向。胴部上半・中位斜位の強いナデ。胴部中位で高さを揃えて欠損しており、造形的な欠損の可能性あり。	7.5YR7/3 鈍い橙 やや粗い 砂・白堊細少、赤褐斑・細粒微、金雲母細粒微 やや硬質	口縁・胴部中位はほぼ完存 45-61
5 土師器 甕	口 径 18.4 高 28.4 底 7.0 最大 復 26.0	口縁部短く開く。胴部長い。内面口縁部ココナデ、胴部横方向のナデで下半に粘土積み上げ休止による接合痕々々あり。底部横方向のナデ。外面口縁部ココナデで下端に胴部ケズリの工具の当たりあり。胴部斜位の丁寧なケズリで下半接合痕あり。胴部下端・底部ナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤褐斑・細粒少、砂・白堊・細粒微、金雲母・透明・半透明細粒微 やや硬質	口縁部 1/6、胴部 1/3、底部 3/4 43

第53表 II区 SX065 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 13.2 高 残 4.4	口径大きく、口縁部内斜口縁状に短く外反する。内面口縁部ココナデ、体部横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、体部斜位の弱いナデで器面の凹凸や粘土のシワ残る。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒少、赤褐・白堊・細粒微 やや硬質	口縁・体部 1/6 57-115

2 土師器 鉢	口 径 14.8 高 残 3.8	表面全体が細かく剥落しており調整不明瞭。口径大きく、口縁部直立する。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデとみられる。	5YR5/6 明赤褐 粗い 赤褐相 - 細粒多、砂相 粒少、白細粒微 やや軟質	口縁 - 体部 1/6 54・56
3 土師器 高杯	口 径 23.6 高 残 5.9	内面杯部 6 本 / 1 cm のハケ後口縁 - 体部縦方向のナデ、底部多方向のナデ。外面杯部体部縦方向のナデ後口縁横方向のナデ、底部縦方向の 6 本 / 1 cm のハケ後一部ナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐相 - 細粒少、 砂相粒少、赤褐薄敷、白・黒 ・透明相 - 細粒微 硬質	杯部 1/2 45・55・59・89・91・95
4 土師器 高杯	高 残 8.5	中空柱状脚で下に向かってわずかに太くなり下手で屈曲する。上端に径 1.1 cm の孔があり、杯部底面の突出部が差し込まれるものとみられる。内面脚部上端縦方向の環状状の強いナデ後上横方向のナデで細粒微残る。外面脚部上横方向の密なミガキ。脚部上端径 3.7 cm。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂相 - 細粒少、金 雲母・赤褐・白・透明相 - 粗 粒微 硬質	脚部上半完存 90
5 土師器 高杯	高 残 9.8	中空柱状脚で下に向かってわずかに太くなり下手で屈曲する。内面脚部底面周方向の密なミガキ、脚部上端縦方向の強いナデ、上足組積微そのまま残す。下横方向のナデ。外面杯部底面やや斜位の 5 本 / 1 cm のハケ後横方向のナデ、脚部上横方向のやや幅広い密なミガキ。脚部上端径 3.2 cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂相 - 細粒少、白 ・赤褐相 - 細粒微 やや硬質	杯部底部 - 脚部上半完 存 109
6 土師器 高杯	高 残 9.7	中空柱状脚で下に向かって太くなり下手で屈曲する。内面脚部上横方向の粘土のしぼり目顕著。下横方向のナデ。外面脚部上横方向の丁寧なナデ後下半ヨコナデ。脚部上端径 3.5 cm。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや粗密 砂・赤褐相 - 細粒 少、白細粒少 硬質	脚部上半完存 42
7 土師器 高杯	高 残 8.3	中空柱状脚で下に向かって太くなり下手で緩く屈曲する。内面杯部底面ミガキ、脚部上横方向の強いナデで、上端に杯部底面から差し込まれた突出部が調整されずにある。中位組積微そのまま残る。下横方向のナデ。外面脚部一部斜位のケズリ後縦方向のやや幅広い密なミガキ。脚部上端径 4.2 cm。	10YR4/1 褐灰 やや粗い 砂相粒多、砂相 - 粗粒微、金雲母・白・赤褐相 粒微 硬質	脚部上半完存 89
8 土師器 甕	口 径 18.5 高 残 5.4	口縁部ハの字に開き、端部面取り中央わずかに凹む。内面口縁部横方向の 8 本 / 1 cm のハケ後ヨコナデ、胴部上端ナデ。外面口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 赤褐相 - 細粒多、 砂相 - 細粒少、白相 - 細粒微 やや硬質	口縁部は完存 48・58・70・160
9 土師器 甕	口 径 16.2 高 残 8.6	単口縁。胴部最大径は約 21 cm。内面口縁部ヨコナデ、胴部上横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ。口縁部下半 - 胴部上端縦方向、胴部上斜位の 6 本 / 1 cm のハケ後胴部上斜位ないし縦方向の部分的なナデ。外面口縁 - 胴部上横付着。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂相 - 細粒少、白 ・半透明・赤褐相 - 細粒微、 金雲母細粒微 硬質	口縁部 1/2、胴部上半 1/6 176
10 土師器 炉形台	受 径 7.6 高 9.3 脚 径 9.2	全体に作りは荒いが受部上面は平坦に調整される。内面脚部上端縦方向の強いナデ。中位一部横方向のナデで細粒微をそのまま残す。下横方向主体のナデで粗粒微あり。受部上面ナデで中央に粘土のシワ状の凹みを残す。側面 - 脚部上横ナデで、上から見て受部を右に捻っているため斜位の粘土のシワあり。下斜位の強いナデ後下端貼付後ナデ。貼付部上端は段となるが部分的にナデで消される。下端部粗粒微残す。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂相 - 細粒多、砂相微 ・半透明・赤褐相 - 細粒微、 透明粗粒 微 硬質	受部 1/2、脚部上半完 存、下半 1/2 199

第 54 表 II 区 SX066 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法號 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	高 残 11.5 脚 径 11.6 脚孔 1.0	脚部中空柱状で下半緩やかに水平に近く開く。内面杯部底面多方向のミガキ。脚部上半下位横方向の左へのケズリ後上位棒状工具による横方向の左へのケズリ、下半ヨコナデ。脚部 3 孔。外面杯部底面縦方向のミガキ。脚部下半ヨコナデ後脚部縦方向のミガキ。脚部上端径 2.8 cm。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐相 - 白・透 明・半透明・赤褐相 - 細粒少 硬質	脚部上半完存、下半 1/6 B1・24.5 No.1
2 土師器 甕	口 径 15.8 高 残 6.4	胎土精良で硬質。口縁部上半薄く下半厚く受口状で、外面は種かに S 字状に屈曲する。内面口縁部上半ヨコナデ。下半 5 本 / 1 cm のハケ、胴部上半 7 本 / 1 cm のハケ後横方向の強いナデ。外面口縁部ヨコナデ後口縁部下半 - 胴部上横方向の 5 本 / 1 cm のハケ。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗密 砂相 - 細粒少、白 相 - 細粒微 硬質	口縁 - 胴部上半 1/6 2



第55表 II区 SX067 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 14.0 高 5.9 底 5.3	口縁部大きく開き内湾。丸味を持つ平底。内面口縁-体部横方向の7本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ・体-底部主に周方向のナデ。外面口縁-体部縦方向の7本/1cmのハケ後口縁部上半ヨコナデ・下半軽い横方向のナデ・体部縦方向の下へのケズリ。底部ナデ後外周周方向のケズリ。	7.5YR8/3 灰黄橙 やや粗い 赤褐黒-細粒少、 砂組-細粒少、白組-細粒微 硬質	完形 4
2 土師器 鉢	口 復14.8 高 残5.1	小形丸底形で口縁部はハの字に開く。器壁薄くミガキはすべて密。内面口縁部斜位のミガキ後体部横方向のミガキ。外面口縁部斜位のミガキ後体部縦方向のミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 砂組-細粒多、砂 粒微、白・透明・赤褐組-細 粒微 やや硬質	口縁-体部1/6 15-16
3 土師器 甕	口 復13.6 高 残5.4	S字口縁。器壁薄くハケは割削。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデで器面の緩やかな凹凸あり。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半縦方向の5本/1cmのハケ。外面胴部上半保付着。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 白・透明・半透明 組-細粒少、砂・赤褐組-細 粒微 硬質	口縁-胴部上半1/4 20

第56表 II区 SX072 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	高 残27.0 底 9.0 最大 33.2	球胴で底部突出する平底。胴部下半接合痕あり。ここで器面凹む。内面上半横方向のナデで器面直線残る。中位斜位の右上への強いナデ。下半-底部縦方向の左へのナデ。底部径9cmの部分砂胎付け。調整は下位ほど先に施される。外面胴部上半-中位10本/1cmのハケ後中位斜位のケズリ・下半縦方向のケズリ・下半横方向のケズリ後胴部縦方向の密なミガキ。底部木製敷。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂組-細粒多、透 明・白・赤褐組-細粒少、金 雲母細粒微 硬質	胴部1/3、底部完存 B f-19-7 №7-10-16 17-19-23・25-28-3 3-35-36-30-40-41- 45

第57表 II区 SX075 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 12.0 高 4.0 底 6.0	全体に調整甘く歪みあり。平底で体-口縁部ハの字に開く。内面口縁-底部ヨコナデ。底部中央径3cm部分のみナデ。外面口縁部ヨコナデで粘土の磨き目明瞭。体部横方向の右へのケズリ、底部一方のケズリ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂・白・赤褐組- 細粒少、透明細粒少 硬質	ほぼ完形 1
2 土師器 甕	口 12.3 高 残9.1 最大 復14.5	S字口縁。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向、中位斜位のナデで器面の緩やかな凹凸残る。外面口縁部ヨコナデ。胴部縦方向の左へのケズリ後中位横方向の6本/1cmのハケ後上半・下半それぞれに縦方向の6本/1cmのハケ。口縁部にハケの工具の当たりあり。外面胴部中位保付着。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・白組-細粒少 、赤褐組-細粒微 やや硬質	口縁-胴部上半完存、 胴部中位1/3 11

第58表 II区 SX076 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	高 残1.6 底 復6.4	ロクロ成形。内面凹色処理。内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。内面体部横方向の密なミガキ。底部ミガキ。外面体部ロクロナデ。底部ナデ。切り離し方法不明。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂・赤褐組-細粒 少 やや軟質	体部下半-底部1/2 B f-14-25 №15
2 須恵器 環	高 残1.7 底 復6.5	表面細かく剥落しており調整不明瞭。内面体-底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 砂・白・赤褐組- 細粒少 やや軟質	体部下半一部、底部 3/4 B f-14-25 №20
3 土師器 甕	口 復22.0 高 残7.7	武蔵型。表面細かく剥落しており調整不明瞭。口縁部上端直立し外面僅かな平坦面となる。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ。胴部上端横方向のケズリ。胴部上端工具の当たりあり。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 砂・透明組-細粒 多、白・赤褐組-細粒微 硬質	口縁-胴部上端1/6 B f-14-25 №22

4	須恵跡 遺	高 残 7.4	内面頸部・胴部上端口ロナデ後胴部上端深い同心門当具痕、外面胴部上端口ロナデ後浅い格子印き。	5Y6/1 灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白礫・粗粒微 硬質	胴部上端破片 B ㊦-14-25 No.1-7
5	須恵跡 遺	高 残 11.3	内面頸部深い同心門当具痕、外面胴部口ロナデ後浅い格子印き。	5Y6/1 灰 やや緻密 青灰・白細粒少、 青灰・白礫・粗粒微 硬質	胴部破片 B ㊦-14-25 No.24
6	須恵跡 遺	口 径 23.0 高 残 6.0	口縁部内外面とも自然軸付着しており、外面に顕著。内面口縁部口ロナデ、外面口縁部口ロナデ。	10Y4/2 オリーブ灰 やや緻密 白・黒粗・細粒少 やや硬質	口縁部破片 B ㊦-14-25 No.4、B ㊦-19-7
7	須恵跡 遺	口 径 24.5 高 残 3.4	内面口縁部口ロナデ、外面口縁部口ロナデ。	N5/0 灰 やや緻密 白粗・細粒少、白 礫微 硬質	口縁部破片 B ㊦-14-25 No.19

第 59 表 II 区 SX082 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	高 残 10.7 脚 径 13.0	胴部中空柱状で下半部壁薄く傾曲して大きく開きわずかに凹曲する。上端は接合面で欠損する。内面脚部上半縁状工具を差し込んだの横方向の左へのケズリ、下半ココナデ。外面脚部上半縁方向の密なミガキ、下半縁方向のケズリ後ココナデ後縁方向の密なミガキ。脚部上端径2.9cm。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、赤 褐・白粗・細粒微、金雲母粗 粒微 硬質	胴部上半完存、下半部 26
2 土師器 甕	口 径 20.0 高 残 5.4	単口縁。内面口縁部ココナデ。胴部上半縁方向のナデ。外面口縁部ココナデ。胴部上半縁方向の左へのケズリ。外面胴部上半一部保付着。	10YR8/3 浅黄橙 粗い 砂粗・細粒多、赤褐 ・細粒少、白・透明・半透明 粗・細粒微 硬質	口縁・胴部上半破片 12

第 60 表 II 区 SX091 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 15.7 高 残 6.5 底 径 3.0	体部・口縁部間はわずかに凹むのみで角度変わらず大きくハの字に開く。底部浅く凹む。口縁部薄い。内面口縁部縦方向のミガキ、体・底部縦方向のミガキ。外面口縁部縦方向の6本/1cmのハケ後口縁部まばらな縦方向のケズリ・体部縦方向のケズリ後口縁部ココナデ・口縁部・体部まばらな横方向のナデ。底部縦方向のケズリ後ナデ。	10YR7/3 黄い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、白 ・赤褐粗・細粒微、金雲母粗 粒微 硬質	ほぼ完形 15
2 土師器 高坏	高 残 8.7	中空柱状脚。内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。内面脚部上半縦状の強いナデ、下半調整不明。上端に坯部底面から差し込まれた突出部がそのまま残る。外面脚部下半調整不明だが縦方向のミガキの可能性大。脚部上端径3.1cm。	2.5YR6/8 橙 粗い 赤褐隆・細粒多、砂・ 白・透明・半透明粗・細粒少 ・金雲母粗粒微 やや軟質	脚部上半完存 12
3 土師器 中形甕	頸 径 10.0 高 残 14.4 底 径 3.4 最大 13.7	口縁部短く内湾。歪みなく精緻な作り。ミガキは内外面とも密。内面口縁部やや斜位のミガキ、胴・底部斜位のナデで胴部中に接合痕としての粘土の継ぎ目。上端に造積痕あり。外面口縁部ココナデ後縁方向のミガキ、頸部縦方向のミガキ、胴部斜位のミガキ。底部ケズリ後縦方向のミガキ。	7.5YR6/4 黄い橙 やや粗い 砂粗・細粒少、金 雲母・白・赤褐粗・細粒微、 砂・赤褐隆 硬質	口縁部1/3、胴・底部 完存 S-091
4 土師器 中形甕	口 径 13.8 高 残 6.3	単口縁で上端僅かに内湾する。内面口縁部斜位のナデ後上半ココナデ。胴部上端粘土のめくれあり。外面口縁部縦方向のナデ後上端ココナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐隆・細粒少、 砂・白・透明・半透明粗・粗 粒少、金雲母粗粒微 やや硬質	口縁部一部欠 19
5 土師器 甕	高 残 18.5 底 径 8.2 胴 径 24.3	大形で胴部縦長。底部径2-3cmの6孔。内面胴部横方向のナデで下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。底部穿孔後ナデ。外面胴部縦方向の上への粗いナデで、下位はど強く施される。底部ケズリ後穿孔後ナデ。粘土のめくれ少ない。	7.5YR4/6 褐 やや粗い 砂・赤褐隆・細粒 少、白粗・細粒少、透明・半 透明粗粒少 硬質	胴部下半・底部完存 15

6 土師器 壺	口 復 17.1 高 22.3 最大 20.5 底 7.3	単口縁で厚手。内面胴部下平・底部周方向の10本/1cmのハケ後胴部下平で接合後胴部中央・口縁部横方向のナデ後口縁部ココナデ。外面胴部上下平下がり斜位の上へのケズリ・胴部中央横方向の左へのケズリ・胴部下平上がり斜位の上へのケズリ後口縁部ココナデ。胴部斜位のミガキ。底部周方向のケズリ後ナデ。外面胴部下平黒く黄色。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤褐斑・細粒 少、白・透明・半透明組・粗粒少、金雲母細粒 硬質	ほぼ完形 10
---------------	--	---	--	------------

第 61 表 II 区 SX092 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 台付鉢	口 復 11.4 高 13.6 脚 復 11.4	小形丸底形の鉢に脚部が付くが、鉢部は傾いて嵌合される。内外表面一部剥落のため調整不明瞭。内面鉢部口縁部ココナデ。体・底部周方向の強いナデ。脚部ナデ後ココナデ。脚部下平には9本/1cmのハケを施して歪みを補修した部分あり。外面鉢部口縁部横方向のナデ後ココナデ。体部横方向のナデ。底部・脚部縦方向の9本/1cmのハケ・脚部下端ココナデ後底部・脚部縦方向のナデ。脚部上縁長3.5cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 砂・白・透明・半透明細粒多、砂・赤褐・白粗粒 やや硬質	鉢部口縁・体部1/3、 底部・脚部完存 13
2 土師器 台付壺	口 復 13.6 高 23.1 最大 復 19.8 台 8.7	S字口縁。内外面とも表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁部ココナデ。胴部横方向のナデ。胴部下平・底部調整不明。台部周方向のナデ。下層粘土貼付後ナデで背頭圧痕残る。外面口縁部ココナデ。胴部上半縦方向の8本/1cmのハケ。下半斜位の8本/1cmのハケ。台部丁寧な縦方向のナデ。	10YR8/4 浅黄緑 やや粗い 砂粗・細粒多、白・赤褐・透明・半透明組・粗粒 やや硬質	口縁・胴部中央1/4、 胴部下平1/3、台部完 存 4・5
3 土師器 ミニチュア (鉢形)	口 復 5.6 高 3.6 底 3.5	ココナデなく口縁部波打ち内凹。底部平底で整形は丁寧。内面口縁・底部周方向の強いナデで工具痕顕著。外面口縁・体部ナデで粘土のシワ残る。底部周方向の丁寧なナデ。	2.5YR3 鈍い黄 やや緻密 砂・白・透明・半透明細粒少、砂・赤褐粗粒 やや硬質	口縁・体部2/3、底部 完存 B 8・11・2 No 3
4 土師器 ミニチュア (鉢形)	口 7.5 高 5.2 底 3.0	丁寧な造りでココナデなし。底部平底。内面口縁部横方向のミガキ。体部斜位の密なミガキ。底部周方向のミガキ。外面口縁・体部縦方向のミガキ。底部丁寧なナデ。	10YR8/1 灰白 やや緻密 白・赤褐・透明・半透明細粒少、白・赤褐粗粒 やや硬質	完形 10
5 土師器 ミニチュア (甕形)	口 8.4 高 7.6 最大 4.9 最大 8.8	上半と下半で胎土を違えている。底部平底。内面口縁部ココナデ後横方向のケズリ。胴部斜位のナデで結構顕著。体部下平・底部縦線状の強いナデ。外面口縁部ココナデ。胴部縦方向の下へのケズリ。胴部下平横方向のナデ。底部ナデ。	上半 7.5YR7/4 鈍い橙 下半 5YR7/8 橙 やや粗い 砂・赤褐粗・細粒多、白・赤褐・透明・半透明組・粗粒少 やや硬質	ほぼ完形 12
6 石製模造品 瓶形	長 5.9 幅 3.0 厚 0.6 重 14.7	無孔で表裏面に測線を残す。平面二等辺三角形で上部は丸味を持つ台形。断面は薄筒状で裏面平坦。表面は丸味あり。表裏面とも斜位ないし垂直方向の擦痕。側面は右が斜位。左が器面と平行。上部は直行する方向。	5G5Y1 オリーブ灰 緻密 ホルンフェルス	完形 9

第 62 表 II 区 SX094 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 復 9.6 高 8.5 最大 12.4 底 復 3.1	口縁部くの字に外反。平底。内面口縁部ココナデ。体・底部横方向及び斜位のナデ。体部上端粘土のめくれあり。外面口縁・体部上端ココナデ。体部横方向の9本/1cmのハケ後上平線。下半密な横方向のナデ。底部ナデ。	10YR7/4 鈍い黄緑 やや粗い 砂・赤褐斑・細粒 少、白・透明・半透明組・粗粒 やや硬質	口縁・体部2/3、底部 一部 55-67-68-69-81-86 -89-90
2 土師器 鉢	口 復 12.5 高 4.9 底 2.9	小形丸底形。体・口縁部は直線的にハの字に開くが、口縁部と体部の境に僅かな段を持つ。平底。内面口縁部斜位のナデ後上端ココナデ。体・底部周方向のナデ。外面口縁部上端ココナデ後口縁部斜位のナデ。体部上端縦方向のケズリ後体部横方向のケズリ。底部周方向のケズリ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤褐斑・細粒 少、白・透明・半透明組・粗粒少 やや硬質	口縁部1/3、体部1/2、 底部完存 9-10

3	土師器 台付鉢	口 14.6 高 17.3 最大 15.0 脚 12.1	鉢部は口縁部くの字に外反し体部下端に稜を持つ。内面鉢部口縁部コナデ、体部細いハケに似る横方向の強いナデ後体部下端・底部丁寧な横方向のナデで体部縦横と接合痕残る。脚部上半縦方向の粘土のしじり目そのまま残り、下位体部のナデで一部に粘土の継ぎ目残る。上端に坏部縦面から差込まれた突出部あり。下半コナデ。外面鉢部体部疎らな斜位の8本/1cmのハケ後口縁部接合後口縁部コナデ・体部縦方向のナデ後体部下・底部縦方向のナデ。脚部下半コナデ後部分的に縦方向のケズリ後縦方向の密なミガキ。脚部上端径3.6cm。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤褐黒・細粒 多、白・透明・半透明粗・粗 少、金雲母細粒 やや硬質	一部欠 91-93
4	土師器 中形碗	口 13.2 高 17.3 最大 15.2	胴部潰れた球形で突出する丸底、口縁部は長く直線的にハの字に開き、端部内湾。内面口縁部横方向の4本/1cmのハケ後上半コナデ・下半横方向のナデ。胴部下半・底部放射状の4本/1cmのハケ後下半で接合し胴部斜位のナデ。中位起稜あり。外面口縁部縦方向の4本/1cmのハケ後上半コナデ・下半横方向のナデ。胴部上半縦方向の4本/1cmのハケ後横方向のミガキ、下半斜位のケズリ後底部一方のケズリ。胴部下半接合・起稜痕顕著。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐黒・細粒 多、白・透明・半透明粗・粗 少、金雲母細粒 硬質	ほぼ完形 94
5	土師器 壺	口 14.9 高 残 21.5 最大 20.2	胴部厚く調整悪い。口縁部複合口縁状。内面口縁部横方向の10本/1cmのハケ後コナデ。胴部縦方向のナデで上半縦横と器面の凹凸あり。中位と下半に接合痕あり、粘土の継ぎ目と器口の厚みとして残る。外面口縁部上半コナデ、口縁部下半・胴部疎らな縦方向の10本/1cmのハケ後横方向のナデ後口縁部下半横方向のナデ。外面胴部中位盛付着。下半被熱により赤変。蓋として使用したものであろう。	5YR6/8 橙 やや粗い 砂・赤褐黒・細粒 多、白・透明・半透明粗・粗 少、金雲母細粒 やや硬質	口縁・胴部はほぼ完存 74

第 63 表 II 区遺構外出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石 石 石	長 2.3 幅 1.4 厚 4.5 重 1.07	有蓋で基部をわずかに括り込む。鎌身部縦線は先端が収線的で右側線はなだらかな、左側線は中段に鋭角がある。表面中央はステップの割線が連続し厚みを落とせていない。基部は平面方形で扁平。	5YR3/1 黒褐 細密 チャート	完形 B F-10.5 № 4
2 道志 土師 環	口 径 12.6 高 3.4 底 6.2	内面口縁・底部クロコナデ。外面口縁・底部クロコナデ。外面体部下端一部粘土のめくれあり。底部回転糸切り離し後無調整で、底部に切り離し前に糸が食い込んだ跡とみられる沈殿がある。SI071Aの遺物の可能性あり。	N5/0 灰 やや粗い 黒・灰・白粗・粗 粒少 やや硬質	口縁・底部 1/3 B F-19.8 № 16
3 灰桶 陶器 高台付皿	口 径 14.6 高 2.4 台 径 7.4	内面口縁・底部クロコナデ。全面施釉。外面口縁・底部クロコナデ。体・底部回転ケズリ後高台盛付け。高台は断面方形で低い。黒灰 14号形式段焼。	2.5Y7/1 灰白 細密 白・灰粗・細粒 硬質	口縁部 1/6、高台 1/3 B 区
4 土師 土師 小形碗	口 径 8.9 高 7.7 底 2.0	器壁薄く成形・調整丁寧。内面口縁部コナデ後斜位のミガキ。体・底部ナデ後周方向のミガキ。外面胴部 10 本/1cmのハケ後口縁部コナデ・胴部縦方向のケズリ後口縁・体部斜位のミガキ。底部ケズリ後一方のミガキ。底部は小さな小型円形で楕円に近くば。	2.5YR6/6 橙 やや硬密 砂・白・透明細粒 多、赤褐黒・細粒 硬質	ほぼ完形 B 区 S-088 № 14
5 土師 高杯	口 径 15.9 高 21.5 脚 10.9	坏部有稜。脚部細く開き下端外反。内面外部口縁部コナデ後口縁・底部縦方向の密なミガキ。脚部上半横方向の丁寧なナデで上端に粘土のシワあり。下半横方向の軽いナデで縦横と粘土のシワ残る。外面全体縦方向ないし斜位の 10 本/1cmのハケ後坏部上端と脚部下端コナデ後全体に縦方向の密なミガキ。脚部上端径 3.2cm。	2.5YR5/6 明赤褐 やや硬密 砂・白・透明細粒 少、白・透明粗粒 やや硬質	坏部 5/6、脚部上半完 存、脚部下半 2/3 B 区 S-088 № 22-23
6 土師 高杯	高 残 12.7 脚 12.3	脚部上半長い棒状で細長い孔が穿孔される。下半は楕円で開き下端水平に近い。内面脚部上半棒状工具を差し込んだ穿孔で、孔径上端 0.5cm、下端 1.3cm、脚部下半 9 本/1cmのハケ後コナデ。外面脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径 4.2cm。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 砂粗・細粒多、白 赤褐・透明粗・細粒 やや硬質	脚部上半完存、脚部下半 2/3 B 区 B F-6.21 № 4
7 土師 甌	口 径 18.2 高 残 6.1	口縁部内面粘土盛付け。口縁・体部直線的に開く。内面口縁部縦方向の 7 本/1cmのハケ後口縁・体部縦方向のナデ後口縁部斜位コナデ。外面口縁・体部やや斜位の 7 本/1cmのハケ。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白 赤褐粗・細粒 やや硬質	口縁・体部 1/6 B 区 B F-15.15-4 類
8 土師 壺	口 径 19.3 高 残 5.0	口縁部外面粘土盛付けによる複合口縁で、粘土上に 1.6cm程の凹溝で棒状浮文を貼付ける。確認できたのは3本のみであり全周の状況は不明。表面細かく調整しており調整不明瞭。内面口縁部上半横方向のミガキ、下半斜位のミガキ。外面口縁部下半横方向の 9 本/1cmのハケ後粘土盛付け後コナデとみられる調整後棒状浮文貼付。浮文は断面三角形。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白 赤褐粗・細粒 やや硬質	口縁部一部 B 区 B F-10.5 № 3

9 土師器 甕	口 径 11.5 高 11.2 底 3.8 最大 13.7	球胴、小形、内面口縁部横方向の10本/1cmのハケ後ココナデ、胴部上半-中位斜位のナデ。胴部下半-底部横方向のナデで胴部下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部ココナデ、胴部横方向主体の10本/1cmのハケ後胴部上半-中位右下がり斜位、下半右上がり斜位の粗いミガキ。胴部上半-下半は密なミガキ。底部横方向のケズリのみナデ。外面全体部付着。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや微密 透明・白細粒少 砂・白・赤褐粗粒微 硬質	口縁部一部、胴部上半1/2、胴部下半-底部完存 Ⅱ区 S-088 №24
10 土師器 甕	口 径 17.4 高 残 4.3	明確な受口状の胴部。成形・調整とも丁寧で特に口縁部は入念。内面口縁部ココナデ、胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ後胴部上端縦方向の6本/1cmのハケ。	7.5YR3/2 黒褐 やや微密 白・赤褐・透明粗 -細粒少 やや硬質	胴部一部、胴部上端1/4 Ⅱ区 B-1-6-1 № 12-4層
11 土師器 甕	口 径 21.6 高 残 4.0	受口状の口縁部。内面口縁部ココナデで下端粘土のめくれ明瞭。胴部上端ナデ。外面口縁部ココナデ。胴部上端やや斜位の8本/1cmのハケ後縦方向のナデ。	7.5YR7/6 橙 やや微密 赤褐薄-細粒少、 砂粗-細粒少 やや軟質	口縁-胴部上端一部 Ⅱ区 B-1-15-15 №7
12 土師器 甕	口 径 17.4 高 残 11.3	単口縁で口縁部斜めに面取りされる。内面口縁部ココナデ。胴部上半斜位のナデで組織微あり。外面口縁部ココナデ後胴部上半斜位ないし縦方向のナデ。	10YR7/3 鈍い黄橙 粗い 砂薄-細粒多、金雲母 ・白・赤褐粗-細粒微 硬質	口縁-胴部上半一部 Ⅱ区 B-1-19-8 № 17-20-21
13 埴輪 円筒	高 残 6.0	内面斜位のナデ。外面7本/2cmのタテハケ後に突帯粘付け。	5YR6/6 橙 やや微密 砂・赤褐粗粒少、 白細粒微 やや硬質	破片 Ⅱ区ハニワ
14 土製品 丸玉	長 2.4 幅 2.4 孔 0.6 重 11.0	やや不整な球状。表面ナデ。孔径は一定しているが、上端では孔縁へ粘土の裏り出しがある。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 砂粗-細粒多、白 ・赤褐粗-細粒微 やや硬質	完形 B-1-15-2 №9
15 石器 礫石	長 17.0 幅 6.1 重 8.9 重 残 1,051	長方形の板状の礫を元にする。一部欠損するほか被熱のため表面と内部が変化する。両端部を除く4面を使用しており、側面の粗い部分を主たる使用面とする。欠損の為不明確だが裏面も同様に高硬度に使用したと推定される。両側面は突出部分のみが平滑であり、使用硬度は高くない。各面とも深い磨痕は確認できない、S1081の遺物の可能性あり。	10YR8/1 灰白 やや粗い 砂岩	一部欠 B-1-14-17 №5
16 石製模造品 銅形	長 4.0 幅 1.3 厚 0.2 重 2.3	表面右側は枳形面そのままで、表面左下と裏面上下に潤滑面を残す。表面二等辺三角形で上部は丸味を持ち、断面は不正な三角形で裏面平直。下端は表面へ戻り返る。表面と右側面が斜位。左側面は垂直方向。裏面は水平方向の擦痕。1孔で表面からの穿孔。	5Y5/2 灰オリーブ 微密 緑色片岩	完形 B-1-19-3 №6
17 鉄製品 刀子	長 9.1 幅 1.4 厚 0.5 重 10.9	刃部は平様平造りで短い。両部は刃部側は側角。榫側は踏化により不明だが直向の可能性あり。茎は短く断面形は楕円形。		完形 B-1-19-12 №2-4
18 鉄製品 棒状	長 残 4.4 幅 1.1 厚 0.4 重 残 7.2	棒状の鉄製品で両端を欠損する。断面形は台形に近い長方形で、幅は0.7-1.1cmとテーパ状に変わる。刀子の可能性があろうか。		破片 B-1-19-18 №4

第64表 Ⅲ区 SI104 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 径 19.8 高 25.6 底 7.5 最大 28.4	調整は裏に類似。ハケはすべて5本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後ココナデ、胴部横方向、底部多方向のケズリで胴部上半組織微多が残る。外面口縁部斜位のハケ後ココナデ、胴部横方向の左へのケズリ後上半-中位縦方向のハケ-下半縦方向の下へのケズリ。底部主に一方方向のケズリで、成形・調整は丁寧。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂粗-細粒多、赤 褐薄-細粒少、白粗-細粒少 砂薄微	中央部 口縁-胴部一部欠損、 底部完存 2
2 土師器 甕	口 径 17.2 高 22.8 底 6.4 最大 23.2	口縁部受口状で上半薄く下半厚い。外面確かにS字状に屈曲。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の丁寧ナデ。中位斜位の丁寧ナデ。下半斜位のケズリ、底部一方方向のケズリ。外面口縁部ココナデ。胴部上半-中位斜位の7本/1cmのハケ後縦方向の7本/1cmのハケ後中位-下半縦方向のケズリ。底部一方方向の粗いケズリで中央粘土塊でぎざ不定形に凹む。内面胴部下半黒色に変色。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐薄-細粒多、 砂・透明・半透明粗-細粒少 白粗-細粒微 硬質	北部 口縁-胴部1/2、底部 完存 8-39

3 土師器 甕	口 16.6 高 22.0 底 径 8.0 最大 20.2	単口縁で口縁部長く上端僅かに外反。内面の仕上げ丁寧。内面口縁部ココナデ。胴部ナデ後横方向のミガキで下平密。上半皿。胴部下平で接合しているが頸縁は器壁の厚さと角度のみ。底部一方のミガキ。外面口縁-胴部斜位の6本/1cmのハケ後口縁部ココナデ・胴部上半部分約な右下がり斜位のナデ後胴部中位部分的な粗いミガキ。胴部下端粘土のめくれあり。底部底面ナデ。外面胴部下平-底部被熱により赤変。外面胴部中位保存着。	10YR5/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐磯-細粒少、 砂・白粗-細粒少 硬質	北部 口縁-胴部 2/3、底部 1/2 9-41-42
4 土師器 台付甕	口 14.4 高 27.3 台 9.5 最大 23.2	S字口縁で口縁端部上面が面となり中央わずかに沈降状に凹む。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向の丁寧なナデ。中位接合面あり強い横方向のナデで器面肥厚。下平斜位のナデ。底部径3.4cm。台部上端径3cmの範囲に径1-2mmの砂貼付。台部斜位のナデで下端折返し状に粘土貼付。外面口縁部ココナデ。胴部下平-台部縦方向ない斜位の5本/1cmのハケ後中位縦方向の8本/1cmのハケ後半上縦方向の8本/1cmのハケ。台部下平ココナデ。ハケは下から上に施され、胴部下平ハケ沈降は浅く断面は緩やか。中位-上半ハケ沈降は深く鋭い。外面胴部一部保存着。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒 多、白粗-細粒微 硬質	北西隅 口縁部はほぼ定存、胴部 2/3、底-台部定存 47-53-56-57
5 土師器 台付甕	口 12.5 高 残 18.1 最大 17.8	単口縁で外面粘土貼付により器壁厚い。内面口縁部ココナデ。胴部上半-中位横方向のナデで中位に接合面としての粘土の盛り目あり。下平縦方向のナデ。底部は接合面から欠損する。外面口縁部ココナデ。胴部右下がり斜位の9本/1cmのハケ後半下平縦方向の下へのナデ。外面胴部中位被熱により赤変し保存着。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂粗-粗粒多、砂・赤 褐磯微、白粗-細粒微 やや硬質	中央部 口縁-底部 1/2 5

第 65 表 Ⅲ区遺構外出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石製品 紡錘車	径 4.5 厚 1.6 孔径 0.8 重 36.09	上下両面は平坦・平滑で上面磨削あり。側面は湾曲し、多角形状に縦方向に面取りした工具痕が残る。側面には放射状の磨削と均等に配置した4孔あり。孔は尖頭状工具を回転して作出されるが高速回転ではない。縁周は粗いものと太いものがある。	5G4/1 暗緑灰 緑色岩	完形 5T №1
2 鉄製品 鉄線	長 残 8.5 幅 残 3.9 厚 0.4 重 残 15.4	履帯式の鉄線で、履帯部の断面は左右とも丸みを持ち、縁辺は内側は鋭利に、外側は平ら面となる。基部は断面方形である。		一部欠 西部一括

第 66 表 V区 SI139 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 径 14.0 高 4.8 底 径 6.5	内面口縁-体部クロコナデ。外面口縁-体部クロコナデ。底部切り離し方法不明。	5Y7/2 灰白 やや緻密 灰磯-細粒少、白・黒粗-細粒微 やや軟質	口縁-体部 1/6 覆土
2 須恵器 杯	高 残 1.7 底 径 6.0	内面体-底部クロコナデ。外面体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	N6/0 灰 緻密 黒磯-細粒微、白細粒 微 硬質	遺構外 体-底部 1/3 268
3 土師器 甕	口 径 21.0 高 残 6.5	武蔵型。口縁部断面コの字状。内面口縁部ココナデ。胴部上半ナデ。外面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のケズリ。	5YR4/3 鈍い赤褐 やや緻密 砂・白粗-微粒少、 砂・白・赤褐粗粒微 硬質	??' 前面床面上 25cm 口縁-胴部上半 1/6 100
4 土師器 甕	口 径 20.0 高 残 7.2	武蔵型。口縁部断面コの字状で上端わずかに内湾。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデ。外面口縁部上半ココナデ。口縁部下平-胴部上半横方向のケズリで胴部上端工具のあたりあり。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 砂粗-細粒多、白・透明粗-細粒少、金雲母粗 粒微 硬質	??' 前面床面上 10cm 口縁-胴部上半 1/6 91
5 土師器 甕	高 残 4.2 底 4.0	武蔵型。内面胴部下平-底部周方向の丁寧なナデ。外面胴部下平縦方向の上へのケズリ。底部一方のケズリ。	5YR4/4 鈍い赤褐 やや粗い 砂粗-細粒多、白 細粒少、金雲母粗粒微 硬質	??' 前面床面上 5cm 胴部下平-底部定存 カマド №4

6	遺患跡 壘	高 残 5.8	内面無文当貝類、外面木目が明瞭な板を使った浅い平行タタキ。	N5/ 灰白 やや緻密 黒・白粗・細粒少 、白障微 硬質	西部床面上 20 cm 胴部破片 154
7	土製品 紡錘車 紡錘車	径 7.4 厚 0.9 孔径 0.92 重 28.4	遺患部外底部の再利用。底部を残してそれ以外を除去し、欠削面を研磨し中央に穿孔して作成。平面円形。表面クロコナデ、裏面糸切り磨し後無調整。胴面は研磨により丸く仕上げられる。	N4/0 灰 やや緻密 黒粗・細粒少、白 細粒少、黒障微 硬質	付' 右袖外床面上 15 cm 1/2 カマド№.16

第 67 表 V区 SI141 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 器台	口 6.8 高 6.1 径 6.7 受孔 0.7 脚孔 0.7	受部二重口縁状。脚部3孔でハの字に開く。内面受部口縁・底部ココナデ後縦方向の粗いミガキ。穿孔部横方向のケズリで上端はケズリ後縦方向の粗いミガキ。脚部上端ナデ後中位斜位の10本/1cmのハケ後下端ココナデ。外面受部口縁部ココナデ・底部ナデ・脚部下端ココナデ後脚部縦方向のケズリ後受部口縁部横方向の密なミガキ・底部・脚部縦方向の密なミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗・細粒少、赤 褐粗・細粒微、金雲母粗粒微 硬質	東部床面上 11 cm 完形 6
2 土師器 器台	口 6.7 高 7.2 径 7.3 受孔 0.7 脚孔 0.9	受部外面は二重口縁状だが内面は直線的に開く。表面割落している部分多く調整不明瞭。脚部3孔でハの字に開く。内面受部縦方向の密なミガキ。穿孔部横方向のケズリ。脚部縦方向のナデ後斜位の8本/1cmのハケ後下端ココナデ。外面受部調整不明だがミガキの可能性高い。脚部縦方向の密なミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂粗・細粒少、赤 褐粗・細粒微、金雲母粗粒微 やや硬質	中央部床面上 19 cm 一部欠 3
3 土師器 小形壘	口 10.0 高 8.7 底 3.1 最大 11.5	器壁薄く成形・調整丁寧。底部小さい平底で口縁部短く直立。内面口縁部ココナデ。体・底部縦方向のナデ。外面口縁部ココナデ。胴部下半・底部縦方向のケズリ後胴部横方向のナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂・白粗・細粒少 、砂・白障微、赤褐粗・細粒 微 硬質	南東部床面上 3 cm 口縁・胴部 2/3、底部 完 1
4 土師器 高坪	高 残 12.2	坪部有稜。脚部上平たく中空で下半折曲する。内面坪部表面割落のため調整不明。脚部上平たく中空で中位横方向のやや粗いナデ。上半接合痕顯著。外面坪部体部斜位のナデ。底部縦方向のケズリ後斜位の10本/1cmのハケ後横方向のナデ。脚部縦方向のケズリ後縦方向の10本/1cmのハケ後上半縦方向の丁寧なナデ・中位縦方向の粗いミガキ。脚部上端径3.7cm。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤褐粗・細粒 少、白粗・細粒微 やや硬質	南東部 坪部体部一部、底部完 存、脚部上平 1/2 南東
5 土師器 壘	口 復 29.0 高 残 6.5	口縁部は器壁厚く外傾し、口縁部内面に粘土帯貼付けによる断面四角形の突帯。外面梯状浮文貼付けたが、本数と単位は不明。胎土白く軽い。表面割落著しく内外面とも調整不明。特徴から大塚日式並行以降と考えられるが、梯状浮文など古い様相も残す。	10YR8/2 灰白 粗い 白粗・細粒多 やや軟質	南東部床面上 4 cm 底部一部 29
6 土師器 壘	口 18.2 高 27.6 底 8.4 最大 25.4	二重口縁で成形・調整は丁寧。口縁部外面中位の稜にはハケ状工具によりキズミ目を施す。内面口縁部縦方向の9本/1cmのハケ後ココナデ後横方向のミガキ。胴部下半・底部やや斜位の放射状となる9本/1cmのハケ後胴部全体斜位の5本/1cmのハケ。中位接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部上半ココナデ後キズミ目、口縁部下半9本/1cmのハケ後横方向の粗いミガキ。胴部斜位の9本/1cmのハケ後斜位の密なミガキ。底部ナデで中央凹む。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや緻密 砂・白・赤褐・透 明粗・細粒少、砂・赤褐障微 硬質	北部床面上 29 cm・22 cm・9 cm・床直の接合 口縁・底部 2/3
7 土師器 壘	口 16.6 高 28.6 底 7.3 最大 25.8	口縁部粘土貼付けによる複合口縁で内面口縁部上半段あり。調整は内面丁寧で外面やや粗い。ハケはすべて10本/1cmのハケ。内面胴部斜位の丁寧なハケ・底部縦方向の丁寧なハケ後胴部上端接合し口縁部横方向のナデのハケ後上半ココナデ・口縁部下半・胴部上端横方向のナデ。胴部上端細粒微と接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁・胴部斜位のハケ後口縁部上半粘土貼付後ココナデ・口縁部下端横方向のナデ・胴部縦・横方向のミガキ。胴部下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。貼り付けた粘土が盛り上がる。底部ナデでドーナツ状に中央凹み周囲に本蓋痕。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、砂 ・白・透明・透明粗・細粒少 障微 硬質	口縁部 3/4、胴部 1/2、 底部完存 10
8 土師器 壘	口 16.7 高 29.4 底 7.8 最大 26.8	二重口縁で成形・調整は丁寧。ハケはすべて6本/1cmのハケ。内面口縁部上半横方向のナデ・下半横方向のハケ後上半ココナデ後口縁部縦方向の粗いミガキ。胴・底部縦方向のハケ後胴部上端横方向のナデ後胴部斜位の粗いナデ。胴部上端細粒微。胴部中位・下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部下半やや斜位のハケ後上半接合しココナデ後口縁部やや斜位のミガキ。胴部下半縦方向のハケ後胴部斜位のハケ後胴部斜位のミガキで下半やや粗い。底部多方向のミガキ。	5YR6/8 橙 やや粗い 砂・白障・細粒多 、赤褐粗・細粒少 やや硬質	ほぼ完形 5

9 土師器 台付罐	口 12.6 高 26.0 台 9.4 最大 20.2	S字口縁で口縁部内面わずかに沈降状に凹む。内面口縁部コナデ、胴縁部方向のナデで上半部面の凹凸と細粒あり。胴部下縁接合痕としての粘土の継ぎ目あり。これ以下は底部まで縦方向のナデ。台部上端一方、上-下位横方向の強いナデで下縁折返し状に粘土貼付け、外面口縁部コナデ、胴部7本/1cmのハケで下半・中位・上半の順に施文。台部縦方向のケズリ後主に横方向の丁寧なナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒 多、白粗-細粒微 硬質	北部・北東隅の床面上 3-8cm・床直の接合 口縁部は欠存、胴部 2/3、底-台部欠存 7
-----------------	--------------------------------------	--	--	---

第 68 表 V区 SI144B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 15.0 高 4.9 底 3.9	口縁部二重口縁状で底面凹む。内外面全体赤彩。表面剥落している部分多く調整不明瞭。内面口縁部コナデ後横方向のミガキ。体・底部放射状のミガキ後体部上半横方向のミガキ。体部上端粘土の継ぎ目残る。外面口縁部コナデ・体・底部縦方向のケズリ後体部上半横方向、下半縦方向、底部多方向のミガキ。	10YR8/2 灰白 やや粗い 砂粗-細粒多、白・赤褐粗-細粒微 やや硬質	北部床直 口縁部1/3、体部一部 欠、底部欠存 83b

第 69 表 V区 SI146A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 14.0 高 6.8	小形丸底形。丸底で口縁部は長くハの字に開き上半や内湾する。内面口縁部斜位の8本/1cmのハケ後上半コナデ・下半コナデ。体・底部一部斜位の8本/1cmのハケ後横方向のナデ。外面口縁部コナデ後縦方向の上へのケズリ後下半縦方向のナデ後上半横方向のナデ。体部斜位、底部多方向のケズリ後体部縦方向、底部一方のナデ、ナデ以前のケズリ明瞭に確認できる。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂粗粒少、白・赤褐・透明粗粒微、砂粒微 やや硬質	北西隅床面上9cm 口縁-体部2/3、底部 欠存 7a
2 土師器 鉢	口 径 16.4 高 残 4.4	体部上端内湾し口縁部短くハの字に開く。口縁部内面中央浅く凹む。内面口縁部-体部斜位の5本/1cmのハケ後口縁-体部上端横方向のミガキ、体部放射状のミガキ。外面口縁部縦方向のナデ後横方向のミガキ。体部縦方向のケズリ後縦方向のミガキ。体部上端ミガキを強く撫じ沈降状に凹む。	2.5Y8/1 灰白 やや緻密 砂粗粒少、白・赤褐・透明粗粒微 硬質	北西隅床面上6cm 口縁-体部1/3 5a
3 土師器 壺	口 15.2 高 残 4.3	S字口縁で内面口縁部上端わずかに沈降状に凹む。内面口縁部コナデ、胴部上半横方向のナデで縦粒あり。外面口縁部コナデ、胴部上半縦方向の5本/1cmのハケ。外面口縁-胴部上半縦付着。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂・白粗-細粒少、赤褐粗-細粒微 硬質	北西隅床面上9cm 口縁-胴部上半欠存 1a

第 70 表 V区 SI146B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 10.8 高 残 9.9	小形丸底形。口縁部はやや内湾しつつハの字に開く。内面口縁部上半コナデ・下半横方向のケズリ後斜位のミガキ。体部縦方向のナデ後横方向のミガキ。外面口縁部下半縦方向の下へのケズリ・上半横方向のケズリ後下半斜位のミガキ後上半横方向のミガキ。体部下半横方向のケズリ後体部縦方向のミガキ。体部上端は強いミガキにより沈降状に凹む。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 赤褐粗-細粒少、砂粗粒少、白粗-細粒微 硬質	北部床面上7cm 口縁-体部1/6 9
2 土師器 壺	口 径 16.0 高 残 6.1	粘土貼付による複合口縁。口縁部内外面赤彩と見られる。内外面表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁部横方向のミガキ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部縦方向の9本/1cmのハケ後上半粘土貼付け後コナデ・下半-胴部上端横方向のナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 赤褐粗-細粒多、砂・白粗-細粒少、金雲母粗粒微 やや硬質	北部床面上3cm 口縁部一部 5
3 土師器 壺	口 径 16.0 高 残 5.7	口縁部ハの字に開き上端外反。ハケはすべて5本/1cmのハケ。内面口縁部コナデ。胴部縦方向のハケで下縁粘土のめくれあり。胴部上端横方向のナデ。外面口縁-胴部上端縦方向ないし斜位のハケ後口縁部コナデ。	5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂粗-細粒少、赤褐・白粗-細粒微、金雲母粗粒微 硬質	北部床面上16cm 口縁-胴部上端一部 12



第71表 V区 SI146C 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 直造器 鉢	口 15.1 高 4.4 底 7.8	内面口縁-底部ロクロナデ。外面口縁-体部ロクロナデ。底部一方のケズリ後回転ケズリ。底部中央に一方のケズリ残るほか、同一方向を向く細い直線状の圧痕2本あり。内面火だすきあり。底部外面塗書の可能性あり。	7.5Y7/1 灰白 やや粗い 黒・白輝-細粒少 やや硬質	南部床面上6cm 口縁-体部一部欠、底部 底面 4
2 土師器 瓦鉢	高 残 8.4 底 復 8.4 体 復 20.0	ロクロ成形。内面体-底部ロクロナデ。外面体部ロクロナデ後体部下平-底部回転ケズリ。混入したり世紀後半の遺物か。	5YR7/5 鈍い橙 やや緻密 砂粗-細粒少、赤 褐粗-細粒微、白細粒微 硬質	東部床面上24cm 体-底部1/4 6
3 土師器 甕	口 15.3 高 14.5 底 8.8 最大 16.5	武藏型甕と似た精良な胎土で精緻な作り。球割で口縁部は丸く外反し底部丸味を持つ。内面口縁部ココナデ・胴部下半-底部斜位のナデ後胴部横方向のナデ。外面胴部下半斜位の右下へのケズリ後胴部上半斜位の左上へのケズリ後口縁部ココナデ。底部中央-一方のケズリ、周囲周方向のケズリ。外面胴部中央-底部係付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤褐粗-細粒少、 白・透明細粒少、砂粗-細粒 微	南東隅焼土上 ほぼ完了 1
4 土師器 甕	高 残 4.3 底 8.2	精良な胎土で精緻な作り。武藏型か。底部丸味を持つ平底で、外周隅切りにやや突出する。内面底部周方向のナデ後底部-胴部下半縦方向の丁寧なナデ。外面胴部下半横方向の右へのケズリ、底部周方向主体のケズリ。内面胴部下半黒色物質付着。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂・白細粒多、赤 褐粗-細粒微、砂粗-粗粒微 硬質	南東隅焼土上 胴部下半-底部底面 1・2
5 直造器 甕	高 残 13.0	内面短文当具帳、外面平行タタキ。	N6/ 灰 やや緻密 灰緑-粗粒微、黒 ・白粗-細粒微 硬質	中央部床直 胴部破片 7

第72表 V区 SI146D 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 11.1 高 5.7 底 3.0	小形丸底形。体-口縁部は直線的にへの字に開き、口縁部と体部の境に圧痕を施す。内凹。内面口縁部横方向のナデ、体-底部周方向のケズリ。外面口縁部上端ココナデ後口縁部横方向主体のナデ。体部周方向のケズリ、底部周方向のケズリ。内外面全体赤彩。	10YR7/3 鈍い黄橙 細密 砂・透明細粒多、砂・ 赤褐粗粒微、金雲母・白細粒 微 やや硬質	北部床直 口縁部2/3、体-底部 底面 完了 19d
2 土師器 高杯	口 14.3 高 14.1 脚 復 10.0	杯部小さく緩やかな有縁。中実柱状下半は緩やかに屈曲後湾曲して開く。内面杯部口縁部ココナデ後体-底部斜位の8本/1cmのハケ後口縁-底部斜位の放射状のやや粗いミガキ。胴部中央横方向の8本/1cmのハケ後上半横方向のケズリ。外面杯部口縁部-胴部下端ココナデ後全体縦方向の8本/1cmのハケ後杯部底部周方向のケズリ・胴部上半縦方向のケズリ後杯部-胴部上半縦方向のミガキ・胴部下半横方向の緩らなミガキ。胴部上端径2.7cm。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 赤褐粗-細粒少、 砂粗粒少、白粗-細粒微 硬質	南東隅床面上5cm・6 cmの接合 口縁-胴部上半はほぼ完 存、胴部下半2/3 33-34
3 土師器 高杯	高 残 10.1 脚 11.9	中空柱状下半は屈曲した後湾曲して開く。成形・調整は丁寧。上端は接合面から欠損。内面胴部上半横方向のナデ後胴部中央から欠損。内面胴部上半縦方向の密なミガキ。下半ココナデ後縦方向の12本/1cmのハケ後縦方向の粗いミガキ。胴部上端径2.7cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂・赤褐粗-細粒 少、白粗-細粒微 やや硬質	南部床面上9cm 胴部底面 完了 31
4 土師器 高杯	高 残 8.6 脚 12.8	ふん中実柱状下半は緩やかに開き下端反り返る。上端は接合面から欠損。内面胴部上端周方向のナデ、上半斜位のナデで組織あり。下半ココナデ。外面胴部縦方向の密なミガキ。胴部上端径3.0cm。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐粗-細粒少、 砂・白細粒少 やや硬質	南東隅床直 胴部一部欠 28
5 土師器 甕	口 16.2 高 残 28.8 最大 25.6	単口縁で胴部長く重形。放射痕跡無し。壺の可能性もあろう。ハケはすべて12本/1cmのハケ。内面胴部下端丁寧な横方向のナデ後胴部中央から欠損。内面胴部下半横方向のハケ後接合部やや粗いナデ後中央で接合後上半横方向の強いナデ後口縁部接合後口縁部横方向のハケ。胴部下半及び中央の接合部に粘土の継ぎ目。口縁部下端に粘土のめくれあり。外面口縁-胴部中央斜位のハケ・胴部下半縦方向のハケ後口縁部軽いココナデ。胴部中央及び上半に粘土の継ぎ目あり。外面胴部中央-下半黒痕あり。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐粗-細粒少、 砂・白・透明粗-細粒微 硬質	北西隅床直と北西部 の接合 胴部3/4、胴部2/3 2d・5d・12d

6 土師器 甕	口 復 17.2 高 残 5.9	S字口縁で内面口縁部上端は比喩状に凹む。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の左へのケズリ後縦方向の粗い6本/1cmのハケ。外面口縁-胴部上半横付着。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒少、白 ・赤海粗-細粒微 硬質	南壁跡床面上5cm 口縁-胴部上半1/4 29
7 土師器 ミニチュア (鉢形)	口 7.1 高 残 4.8 最大 7.2	ココナデなし。内面口縁-胴部斜位のナデ。外面口縁部ナデで前面に凹残る。体部斜位のナデ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂・白細粒少、砂 ・赤海粗粒微 やや硬質	北部はほぼ直 口縁-体部ほぼ完存 20d

第73表 V区 SI147 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 復 17.4 高 残 10.0	二重口縁で内面口縁部と外面全体赤彩。ハケはすべて12本/1cmのハケ。内面口縁部ココナデ・下半水平分理方向のハケ後口縁部横方向のミガキ。頸部横方向のハケ後横方向の粗いミガキ。胴部上半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ後横方向のミガキ。頸部縦方向の上へのケズリ後斜位の上へのケズリ。胴部上半斜位のハケ後粗い斜位のミガキで、ミガキは上位ほど欠。胴部上半粗粒微のわずかに残る。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒多、砂 粗粒微、金型母・白・赤海粗 -細粒微 硬質	中央部体面上24cm 口縁部1/2、胴部完存 、胴部上半1/3 9
2 土師器 甕	口 12.0 高 残 11.5 最大 復 18.1	S字口縁。口縁部上端内面は比喩状に凹む。内面口縁部ココナデ。胴部中位縦方向のナデ後上半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部中位左上がり斜位の6本/1cmのハケ後下半平下がり斜位の6本/1cmのハケ。外面胴部中位横付着。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや緻密 白・透明細粒少、 砂・白・赤海・透明粗粒微 硬質	中央部・北部の接合 口縁-胴部上半はほぼ完 存、胴部中位1/3 1・7-15-16-17
3 土師器 甕	口 14.4 高 残 21.3 最大 21.4	S字口縁で内面口縁部上端わずかに比喩状に凹む。内面口縁部ココナデ。胴部中位右上がり斜位の粗いナデ後上半・下半右上がり斜位のナデ。胴部中位器面の凹凸顕著。胴部下半接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部ココナデ。胴部上半横方向の左へのケズリ・胴部下半横らな縦方向の8本/1cmのハケ後中位-下半右がり斜位の5本/1cmのハケ後胴部上半右上がり斜位の5本/1cmのハケ。胴部下半横かに接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部-胴部中位横付着。外面胴部下半一部熱熱により赤染。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗粒多、白・赤 海・透明粗-細粒少、砂粗粒 微 硬質	中央部・北部・南部の 接合 口縁部、胴部上半-中 位1/2、胴部下半一部 11-14-15

第74表 V区 SI148 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 7.8 高 残 3.0	小形。器壁薄く精緻な作りで硬質。内面体部上端に横を持ち、口縁部は直線的にハの字に開く。内面口縁部ココナデ・下半斜位の10本/1cmのハケ後口縁部斜位のミガキ。体部横方向のケズリ後斜位のミガキ。外面口縁部ココナデ後斜位のミガキ。体部斜位の10本/1cmのハケ後横方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗-細粒少、白 ・赤海粗-細粒微 硬質	口縁-体部1/6 SI148南
2 土師器 甕	口 復 14.6 高 残 4.6	S字口縁。内面口縁部ココナデ、胴部上半縦方向のナデ後上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ。胴部上半横方向の左へのケズリ後縦方向の6本/1cmのハケ。外面口縁-胴部上半一部横付着。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂・白・透明・赤 海粗-細粒少 硬質	口縁-胴部上半1/6 覆土

第75表 V区 SI149A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口 復 18.6 高 残 5.1	単口縁。ハケはすべて8本/1cmのハケ。内面口縁-頸部横方向のハケ後粗いココナデで口縁端部のみ粗いココナデ。胴部上半横方向の丁寧なナデ。外面口縁-胴部上半や斜位の複数回のハケ後口縁部上半ココナデ・胴部上半縦方向のナデ後胴部上半横方向のハケ。外面口縁部-胴部上半横付着。	5YR6/4 鈍い橙 緻密 砂粗粒少、赤海粗-粗 粒微、白細粒微 硬質	北西部床直 口縁-胴部上半1/3 4

第76表 V区 SI150 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕台	高 残 7.0 受孔 1.15 脚孔 1.15	胴部3孔でハの字に開く。内面受部底部斜位のミガキ。穿孔部横方向のケズリ。胴部斜位なし横方向の8本/1cmのハケ後上半斜位のナデ。下半ヨコナデ。外面受部底部・胴部縦方向の密なミガキ。胴部上端径3.1cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 砂粒多、白・赤陶相-細粒微 硬質	鉢内南部床面上 受部底部・胴部上完 存、胴部下半一部 5
2 土師器 甕	口 径 19.8 高 残 5.6	形状の変容したS字口縁で口縁部上半は直線的に開き、内面は受口状で上端はわずかに比喩状に凹む。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半縦方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向の左へのケズリ後縦方向の粗い8本/1cmのハケ。外面口縁-胴部上半保付着。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂相-細粒少、白・赤陶相-細粒微 硬質	鉢内南部床面上7cm 口縁-胴部上半1/6 4

第77表 V区 SI154 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 径 12.4 高 3.8 底 径 5.8	内面口縁-底部クロコナデ。外面口縁-体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	N5/ 灰 やや緻密 黒・白粗-細粒少 硬質	中央部床面上9cm 口縁-底部1/3 3
2 須恵器 杯	口 径 13.4 高 3.9 底 径 6.5	内面口縁-底部クロコナデ。外面口縁-体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	N5/ 灰 やや粗い 黒・灰緑-細粒少、白粗-細粒少 硬質	南部床面上13cm 口縁-体部1/2、底部 完存 7

第78表 V区 SI156 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形甕	口 径 9.6 高 9.8 底 径 4.4 最大 11.3	胴部潰れた球形で平底。調整寛い。外面全体赤彩で黒く変色。ハケはすべて14本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後上半ヨコナデ。胴部下半-底部横方向のハケ後胴部下半で接合し胴部上半-中位横方向のケズリ後胴部下半横方向の粗いミガキ・底部一方のミガキ。外面口縁部縦方向のハケ後ヨコナデ後横方向のケズリ後横方向の疎らなミガキ。胴部下半縦方向のハケ後横方向のケズリ後横方向の疎らなミガキ。底部ケズリ後入念なミガキ。	7.5YR3/1 黒褐 やや粗い 砂・白細粒少、赤陶相-細粒微、砂・白粗粒微 硬質	北東部床面上5cmと 床面の接合 口縁部1/4、胴部1/2、 底部完存 34-43
2 土師器 高杯	口 径 14.4 高 残 6.0	杯部小さく有様。内面杯部縦方向の密なミガキ。外面杯部縦方向の密なミガキ。胴部上端径2.6cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 赤陶相-細粒少、 砂相-細粒少、金雲母・白粗 -細粒微 硬質	北東部床面上3cm 杯部はび完存 35
3 土師器 甕	口 径 11.8 高 残 4.8	二重口縁。薄手でミガキは密に施される。内面口縁部斜位のミガキ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁部上半斜位のミガキ、中位横方向のミガキ、下半縦方向のミガキ。胴部上端横方向のミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂相-細粒少、金 雲母・赤陶・白粗-細粒微 硬質	南側床面上15cm 口縁部1/2 1
4 土師器 甕	口 径 13.5 高 残 6.5	口縁部上端直立受口状。外面口縁-胴部・内面口縁-胴部上端赤彩。内面口縁部縦方向の8本/1cmのハケ後ヨコナデ。下端接合痕としての位上の継ぎ目顕著。胴部上半横方向のナデ。外面口縁-胴部上半斜位の8本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ後胴部上半斜位の密なミガキ。口縁部中位ミガキの工具の当たりあり。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂粒多、砂粗粒 微、赤陶相-細粒微、金雲母 ・白粗-細粒微 やや硬質	中央部床面上29cm 口縁-胴部上半1/3 10
5 土師器 甕	口 径 13.7 高 残 4.3	瘦形。口縁部外面形状はわずかに内湾。外面口縁-胴部上端・内面口縁-胴部上端赤彩。内面口縁部ヨコナデ。頸部縦方向の14本/1cmのハケ後ヨコナデ。胴部上端横方向のナデ。外面口縁-胴部上端斜位の14本/1cmのハケ後口縁部ヨコナデ。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 砂粒多、砂粗粒 微、金雲母・白・赤陶相-粗 粒微 硬質	南側床面上15cm 口縁-胴部上端1/2 1

6 土師器 甕	口 23.5 高 32.5 底 8.0 最大 31.4	単口縁。内面口縁部横方向の4本/1cmのハケ後コナデ、胴部下半部-底部横方向の8本/1cmのハケ後胴部下半で接合し中位横方向の丁寧なナデ後半横方向の4本/1cmのハケ・下半-底部縦方向のケズリ、外面胴部下半横方向の6本/1cmのハケ後胴部中位-上半斜位の4本/1cmのハケ・口縁部コナテ後胴部上半-口縁部縦方向の下への光沢ある寛いナデ・胴部左への線らな光沢あるナデ。胴部下端は成形時のナデのみ。底部多方向のケズリ。内面底部-胴部下半黒色物質付着。外面胴部下半被熱によりやや赤変。外面胴部中位保付着。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂礫-細粒多、赤褐礫-細粒少、白粗-細粒少、金雲母粗-細粒散 硬質	北東部床面上5cm 口縁-胴部一部欠、底部完存 34
7 土師器 甕	口 径 15.5 高 残 18.6 最大 径 23.6	S字口縁。内面口縁部コナデ、胴部上半縦方向のナデ後半横方向のナデ。外面口縁部コナデ、胴部上半横方向の左へのケズリ、中位-下半斜位の上への5本/1cmのハケ後半上半横方向の5本/1cmのハケ。外面口縁-胴部上半一部保付着。	10YR3/1 黒濁 やや粗い 砂・白・透明細粒少、砂・白・赤濁・透明細粒散 硬質	南部床面上5cmと床直の接合 口縁部1/2、胴部1/3-3/4
8 石函 砥石	長 8.1 幅 3.1 厚 2.9 重 91.35	四角柱状。側面4面が使用面であり、各面とも平滑に研磨され、磨痕わずかに残る。表面やや凸面で、他3面はすべて凹面。下端わずかに研磨される。一部被熱により赤変。中底-仕上げ砥。	2.5Y8/2 灰白 緻密 流紋岩	東室階床直 完形 14

第79表 V区 SI157 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 9.7 高 残 4.9	小形丸底形。口縁-体部内外面赤彩。薄手で口縁部は内湾気味にハの字に開く。内面口縁部上半コナテ・口縁部下半-体部横方向のナデ後口縁-体部縦方向のミガキ。外面口縁部下半横方向のケズリ後半上半コナテ後口縁部縦方向のミガキ、体部横方向のケズリ後横方向のミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂礫粒少、砂粒散 微、白・赤褐細粒散	南西部床面上10cm 口縁-体部1/4 16
2 土師器 甕	口 13.2 高 残 8.8	口縁部はハの字に開き、端部上面及び側面が直角に面取りされる。内面口縁部横方向のナデ後コナテ、胴部上半横方向のナデで上端に接合額としての粘土の継ぎ目と折面は残る。外面口縁部コナテで頸部やや強く振される。胴部上半斜位のミガキ。	10YR8/2 灰白 やや緻密 砂粗-細粒少、赤濁・白粗-細粒散、金雲母粗粒散 硬質	南西部床面上3-10cm の接合 口縁部完存、体部上半1/6 13-14-16
3 土師器 甕	口 16.0 高 33.0 底 7.8 最大 30.0	球脚。粘土貼付による複合口縁。ハケはすべて8本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後半横方向のケズリ後半上半コナテ。胴部下半横方向のハケ後胴-底部横方向のナデで胴部上半細粒散わずかに残る。胴部器面の凹凸あり。外面口縁部斜位のハケ後半上半接合コナテ。胴部斜位のハケ後胴部中位横方向主体のハケ後胴部上半コナテ・胴部上半斜位の丸縁なナデ・下半線らな横方向のケズリ・下端斜位のケズリ。ケズリは一部光沢あり。底部多方向のケズリ。外面胴部下半黒濁あり。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒多、白粗-細粒少、赤濁粗-細粒散、金雲母粗-細粒散 硬質	西部床面上6cm 口縁-胴部2/3、底部完存 1
4 石製模造品 銅形	長 残 4.9 幅 2.1 厚 0.6 孔 0.13 重 残 8.95	脚葉形で上部は台形。表面は2本の錐あり表面は平滑で、断面台形。表面に斜位の擦痕、側面に器面に対し垂直方向の擦痕あり。裏面に凹面に潤滑面。左下に成形段階の寛い磨痕が残る。1孔で表面からの穿孔。	10Y5/1 灰 緻密 黒色片岩	ほぼ完形 南東

第80表 V区 SI158 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 台付鉢	口 10.0 高 残 6.9	薄手。鉢部は体部小さく口縁部直線的にハの字に開く。表面刷落のため調整不明瞭。内面鉢部口縁部コナテ後横方向のミガキ、体-底部周方向のナデ、胴部上端ナデ。外面口縁部コナテ後横方向のミガキ、体部横方向のミガキ、脚部調整不明。脚部上端径2.9cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 砂礫粒多、白・赤濁・透明-細粒散、砂礫-粗粒散 やや軟質	南東階床面上3cm 鉢部ほぼ完存 162
2 土師器 高杯	高 残 14.3 脚 12.6	杯部小さく有縁。脚部は中空柱状で下半は緩やかに開き下端で外反する。内面杯部-底部縦方向の放射状のミガキ。脚部上端棒状工具を差し込んだ横方向の右へのケズリ、中位縦方向の粘土のしじり目とそれを消すためと見られる横方向のケズリ、下半横方向の10本/1cmのハケ後半横方向のナデで組積散あり。下端コナテ。外面杯部-脚部縦方向の8本/1cmのハケ後半杯部-底部周方向のケズリ後半杯部-脚部縦方向のミガキ。脚部上端径3.6cm。	7.5YR7/3 鈍い橙 やや粗い 砂礫粒多、白細粒少、赤濁粗-細粒散 硬質	南西部ほぼ床直 口縁-脚部上半ほぼ完存、脚部下半2/3 159

第4章 東地区の遺構と遺物

3 土師器 高坏	口 15.2 高 残 5.6	外部有椀で二重口縁状。精緻な作り。内面外部口縁部ココナデ・体部上半横方向の8本/1cmのハケ・体部下半・底部周方向のナデ後口縁・底部縦方向の放射状のミガキ。下端は脚部との接合面で欠損。外面外部口縁部ココナデ、体部縦方向のケズリ後体部下半・底部周方向のケズリ後体・底部周方向のミガキ。脚部上端縦方向のミガキ。脚部上端径3.6cm。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや微密 砂・赤褐粗・細粒 少、白粗・細粒微 硬質	北部床面上8cm 井部はぼ完存 155
4 土師器 甕	口 復 16.0 高 残 4.5	S字口縁。内面口縁部ココナデ、胴部上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上端右上がり斜位の7本/1cmのハケ後。	10YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗粒少、白・赤 褐粗・細粒微 硬質	口縁・胴部上端1/5 覆土
5 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 5.4	屈曲の緩いS字口縁。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向のケズリ後横方向のナデ。外面胴部上半斜位の8本/1cmのハケ後口縁・胴部上端ココナデ・胴部上半疎らな斜位のナデ。外面口縁・胴部上半保付首。	10YR7/2 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、金 雲母・白・赤褐粗粒微、砂礫 微 硬質	南東部と中央部床面 上3・5cm・床直の接 合 口縁・胴部上半1/2 56・132・140

第81表 V区 SI162 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 13.2 高 残 5.3	内外面とも体部上端に椀を持ち、口縁部は直線的にハの字に開く。器壁薄く成形丁寧だが調整やや荒い。内面体部のみ丁寧。内面口縁部横方向の右へのケズリ後斜位のミガキ、体部丁寧なナデ後横方向のミガキ。外面口縁・体部縦方向の左へのケズリ後横方向のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白 赤褐・半透明粗・細粒微 やや硬質	口縁・体部一部 覆土
2 土師器 器台	口 7.4 高 残 2.7 受孔 0.7	受部外面は縦やかな椀を持ち、口縁・体部は直線的に短くハの字に開く。内面受部口縁・底部縦方向の放射状のミガキ。穿孔部横方向のケズリ。外面受部口縁・底部横方向のミガキ、脚部上端縦方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒少、赤 褐粗・細粒微、白細粒微 硬質	中央部床直 受部完存 14
3 土師器 壺	口 復 12.1 高 残 4.6	粘土貼付による二重口縁。内外表面の剥落著しく調整不明瞭。内外面とも口縁部下半7本/1cmのハケ後口縁部上半を貼付後口縁部全体をココナデ。ハケは外面縦方向、内面横方向。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫・細粒多、白 赤褐粗・細粒微 硬質	口縁部 1/3 覆土
4 土師器 甕	口 復 16.4 高 残 3.0	S字口縁で内面口縁部上端は沈降状に凹む。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の左へのケズリ後左下がり斜位の6本/1cmのハケ後疎らな斜位の左上へのケズリ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗粒多、白・赤 褐粗・細粒微、砂粗粒微 硬質	北部床面上13cm 口縁・胴部上半1/6 8
5 石製品 軋玉 管玉	長 2.02 軋 0.46 重 0.73 孔径 0.20	円筒形。表面平滑で擦痕見えず光沢あり。両面穿孔で、中央でわずかに食い違ふ。	2.5GY2/1 黒 緻密 緑色岩	中央部床面上14cm 完形 1

第82表 V区 SI166 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 11.6 高 6.2	小形丸底形。薄手で精緻な作り。丸底で口縁部は内湾気味に長くハの字に開き、上端内面沈降状に凹む。内面口縁部ココナデ後縦方向のミガキ、体・底部周方向のナデ後縦方向の放射状のミガキ。外面口縁部ココナデ後縦方向のミガキ、体・底部周方向のケズリ後体部縦方向のミガキ後体部上端縦方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや微密 砂粗粒少、砂・赤 褐粗粒微、白細粒微 硬質	中央部床面上14cm 口縁・底部1/6 15
2 土師器 高坏	高 残 8.7	太い中空柱状脚で下半屈曲して開く。内面脚部上半縦方向の強いナデ後上端周方向のナデ・中位接合後横方向のナデで中位に組織収縮著。脚部下半ココナデ。外面脚部上端縦方向のケズリ後脚部縦方向のミガキ。脚部上端径4.0cm。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 砂粗・細粒多、白 粗粒少、赤褐・透明・半透明 粗・細粒微 硬質	南西隅 SD190A内 脚部上半3/4 16

第 83 表 V 区 SI167 出土遺物観察表

番号 種類 名称	法域 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 15.5 高 残 5.9	SK200 の遺物。口径大きく、体部上端内湾後口縁部ハの字に開く。底は外面からの力により破損。人為か。内面口縁部ココナデ後横方向のミガキ、体-底部横方向の 10 本/1 cm のハケ後ナデ後横方向のミガキ。外面口縁部ココナデ後口縁-底部縦方向の 10 本/1 cm のハケ後体-底部縦方向のケズリ後口縁-底部縦方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂肌-細粒多、赤陶肌-細粒少、金雲母・白細粒少 硬質	SK200 中央-北部底面上 15-30 cm の接合 口縁部 3/4、体部完存 17-67-71-73-78-81
2 土師器 器台	口 8.6 高 残 6.4 受孔 0.8 脚孔 1.6	受部口縁部短くハの字に開き上端外反。脚部 3 孔。内面受部体-底部斜位の放射状のミガキ後口縁-体部横方向のミガキ、穿孔部横方向のケズリ、脚部横方向のケズリ後下半横方向のナデ。外面受部口縁部ココナデ後体-脚部縦方向の 6 本/1 cm のハケ後体-脚部縦方向のミガキ後口縁部横方向のミガキ。脚部上端径 3.0 cm。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂・白・赤陶肌-細粒少、金雲母・白細粒 硬質	南部床面上 21 cm 受部-脚部上半完存 14
3 土師器 器台	口 8.0 高 9.2 脚 10.0 受孔 0.85 脚孔 0.85	SK200 の遺物の可能性高い。受部口縁部短くハの字に開く。脚部 3 孔で下端面取り。内面受部口縁部ココナデ後横方向のミガキ、体-底部横方向のケズリ後斜位のミガキ。ミガキは体-底部後口縁部、脚部上半粗いナデで粘土のしぼり目残る。下半横方向主体の 9 本/1 cm のハケ後軽いココナデ後中位-下半縦方向の確らなミガキ。外面受部口縁部ココナデ、体-底部横方向主体の 9 本/1 cm のハケ後横方向の粗いミガキ。脚部下端軽いココナデ後脚部縦方向の 9 本/1 cm のハケ後縦方向のケズリ後縦方向のミガキ。脚部上端径 3.4 cm。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤陶肌-細粒少、白細粒少、砂肌 硬質	南東部床面上 8-22 cm の接合 受部完存、脚部 2/3 16-63-64-110- 覆土
4 土師器 高坏	口 16.3 高 残 5.9	SK200 の遺物。坏部小さく有様。坏部内面表面の割著著しく調整不明。内面坏部縦方向の放射状のミガキ。外面坏部口縁-体部斜位の 9 本/1 cm のハケ後口縁部軽いココナデ、底部斜位のケズリ後口縁-底部斜位のミガキ。坏部上半にハケ目立つ。脚部上端径 2.9 cm。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤陶肌-細粒少、砂肌-細粒少 硬質	SK200 中央部底面上 5 cm 坏部一部欠 38
5 土師器 高坏	高 残 8.5 脚 残 11.1	SK200 の遺物。脚部柱状で上半中央、下半は直線的に大きく開く。内面脚部上半体状工具を差し込んだ横方向のケズリ、下半主に横方向の 10 本/1 cm のハケ後軽いココナデ。外面脚部下半斜位の 10 本/1 cm のハケ後脚部縦方向のケズリ後上半粗の伏い横方向の密なミガキ、下半横方向の粗いミガキ。脚部上端径 3.0 cm。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂肌-細粒多、白・透明細粒。赤陶肌-粗粒微 硬質	SK200 中央部底面上 15 cm -25 cm の接合 脚部上半完存、脚部下半 1/3 15-119
6 土師器 中形甕	口 13.0 高 17.0 底 3.4 最大 18.7	底部やや突出し、口縁部短く直立する。表面の痕跡から火にかかれたものとみられる。内面口縁部横方向の 7 本/1 cm のハケ後横方向のミガキ、底-胴部中位横方向の 7 本/1 cm のハケ後胴部上半-中位横方向のナデ後胴部上半横方向、中位-底部縦方向主体の粗いミガキ。最大径付近に磨痕 2 段あり。外面口縁部ココナデ後横方向のミガキ。胴部縦方向の 7 本/1 cm のハケ後上半横方向、中位横方向、下半縦方向のケズリ後脚部縦方向のミガキ。底部多方向のケズリ後主に一方方向のミガキ。外面胴部中位厚付着。胴部下半-底部被熱により赤変。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂肌-細粒多、赤陶肌-細粒少、白・透明・赤陶肌-細粒少 硬質	南部・南東部の床直- 床面上 24 cm の接合 口縁部 1/6、胴部 1/2、 底部完存 11-13-33-40-41-53 -55-59-68-76-77-7 9-85-103-111
7 土師器 壺	高 残 3.8	二重口縁の壺口縁部上半片で内外面に幅 7-15 mm の直線状の赤彩あり。胎土白く精良。内面口縁部横方向の 9 本/1 cm のハケ後ココナデ後横方向のミガキ。外面口縁部縦方向の 9 本/1 cm のハケ後ココナデ。	10YR8/2 灰白 やや緻密 砂・赤陶肌-細粒少、金雲母・白細粒 硬質	南部床面上 24 cm 口縁部一部 11
8 土師器 壺	口 復 17.6 高 残 3.4	二重口縁で内面赤彩。内面口縁部横方向の 9 本/1 cm のハケ後横方向のミガキ。外面口縁部下半縦方向の 9 本/1 cm のハケ後上半粘付・ナデ・ココナデ後縦方向の 9 本/1 cm のハケ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂肌-細粒少、白・赤陶肌-細粒微 硬質	西部床面上 14 cm 口縁部 1/6 3
9 土師器 甕	口 14.2 高 残 17.6 最大 21.3	S 字口縁で内面口縁部上端は沈線状に凹む。内面口縁部ココナデ、胴部上端縦方向のナデ後上半斜位のナデ後中位-下半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向、中位-下半斜位の左へのケズリ後上半及び下半縦方向の 6 本/1 cm のハケ後上半横方向の 6 本/1 cm のハケ。外面口縁部-胴部中位厚付着。外面胴部下半被熱により赤変。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 砂肌-細粒多、白・赤陶肌-透明・半透明粗-細粒少 硬質	南部・南東部の床直- 床面上 24 cm の接合 口縁部 4/5、胴部上半 完存、胴部中位-下半 1/3 11-14-28-30-41-53 -55-59-68-76-77-8 5-103-111-114-119 -120- 覆土

第84表 V区 SI171 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	口 18.0 高 残 5.9	坏部厚手で有縁。内面内口縁部ココナデ後体部横方向のナデ後口縁・体部斜位の粗いミガキ。外面内口縁部ココナデ後体部斜位のナデ後体部下平・底部横方向のケズリ後口縁・体部斜位の、体部下平・底部横方向の粗いミガキ。	7.5YR7/3 鈍い橙 やや粗い 砂礫・細粒少、赤 褐色・細粒微、白細粒微 やや硬質	西部床面上 9-12 cmの 接合 坏部 1/3 12-14-17
2 土師器 高坏	高 残 8.5	太い中空状胴で下平屈曲して開く。内面脚部上平縦方向の強いナデで粘土のシツ顯著、中位横方向のナデで総横直顯著。組織は一周程度、下平横方向のナデ。外面脚部縦方向のケズリ後縦方向のミガキ。脚部上端径 3.8 cm。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒 少、白細粒微	西部床面上 9-12 cmの 接合 脚部上平はほぼ完存。 15-16・覆土
3 土師器 甕	口 14.0 高 残 13.7 最大 復 15.0	小形。内面口縁部ココナデ。胴部上平斜位のナデで上平組織微。下平接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。外面口縁・胴部上平縦方向の 18 本/1 cmのハケ後胴部縦方向のナデ後口縁部ココナデ。胴部一部組織微あり。下平接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや硬質 砂礫多、砂・白 ・赤褐礫・粗粒微	南部床面上 2-6 cmの 接合 口縁・胴部 2/3 1-3-5・覆土
4 土師器 甕	口 16.0 高 27.4 底 6.5 最大 24.6	やや長胴。内面口縁部ココナデ。胴・胴部縦方向のナデで中位と下平に接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。外面胴部下平部分的な縦方向のケズリ後上平斜位。下平縦方向のナデ後口縁部ココナデ。胴部中位と下平に接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。底部多方向のケズリ。外面胴部下平縦方向により一部赤変、外面胴部上平・中位一部灰付着。	10YR7/2 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫・細粒多、砂 礫少、白・赤褐礫・細粒少	南部床面上 2-7 cmの 接合 口縁 2/3、胴部 1/2、 底部完存 1-4・覆土

第85表 V区 SI175A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 15.2 高 4.9	丸底で体部上端でくびれ口縁部大きくハの字に開く。内面口縁部ココナデ後斜位のミガキ。体・底部周方向のナデ後縦方向の放射状のミガキ。外面口縁部縦方向のミガキ。体部上端横方向の強いミガキ。体・底部ケズリでミガキの可能性あり。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐礫・細粒多、 砂礫・細粒少、白細粒少 やや軟質	北部床面上 22 cm 口縁部 1/6、体・底部 1/2 29
2 土師器 中形甕	口 11.8 高 15.1 底 4.8 最大 11.9	小さな球胴で口縁部長く立ち上がる。ハケはすべて 6本/1 cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ・中位・下平斜位のハケ後中位・下平横方向のケズリ後上平ココナデ後口縁部縦方向の粗いミガキ。胴部上平ナデで総横直と側面圧縮顯著。中位に接合痕あり角度大きく変化する。胴部中位・底部周方向のナデ。外面口縁部上平斜位のハケ・下平縦方向のハケ後口縁部上平ココナデ・下平縦方向のケズリ後口縁部縦方向のミガキ。胴部斜位のハケ後上平縦方向のケズリ・中位横方向のケズリ・下平縦方向のケズリ後胴部斜位のミガキ。底部ミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや硬質 砂礫・細粒多、白 細粒少、赤褐礫・細粒微 雲母粗・細粒微	北西部・中央部床面上 2-19 cmの接合 口縁部 1/2、体・底部 一部欠 38-64
3 土師器 中形甕	口 12.0 高 17.9 底 3.6 最大 12.2	小さな球胴で口縁部長く立ち上がる。調整や灰い。ハケはすべて 7本/1 cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後斜位の左上へのナデで上平ココナデ。胴・底部斜位の螺旋状のナデで胴部下平接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。外面口縁・胴部中位縦方向のハケ・胴部下平横方向のケズリ後口縁部上平ココナデ・胴部縦方向のナデ。胴部下平一部接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。底部ケズリ後ナデ。	10YR4/1 褐灰 やや硬質 透明細粒多、砂・ 赤褐礫・細粒少、雲母・白 粗・細粒微 やや硬質	北部床面上 22 cm 山丘完形 27
4 土師器 高坏	高 残 12.9 脚 11.2	坏部小さく有縁。脚部太く柱状で上平中実。下平は 2段に開き下平は水平に近く開く。内面内口縁部斜位のミガキ後体部縦方向のミガキ。脚部上平棒状工具による横方向のケズリ。下平ココナデ。外面内口縁部縦方向のミガキ。底部斜位のミガキ。脚部縦方向のミガキ後下平縦方向のミガキ。脚部上端径 3.4 cm。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐礫・細粒多、 砂・白粗・細粒少 やや硬質	北西部床面上 24 cm 坏部体・底部 1/2、脚 部上平完存、脚部下平 1/2 34
5 土師器 甕	高 残 18.5 底 6.5 胴 22.3	胴部中位に外面からの焼突による円みあり。乾燥面の不作為によるものか。内面胴部下平・底部斜位の 9本/1 cmのハケ後接合し胴部下平縦方向のナデ後中位・上平斜位のナデ。胴部下平と胴部上平に接合痕としての粘土の磨ぎ目あり。外面胴部下平部分的に横方向の 9本/1 cmのハケ・胴部上平横方向の 5本/1 cmのハケ後胴部上端斜位の 9本/1 cmのハケ後胴部縦方向の密なミガキ。底部多方向のケズリ後多方向のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒 少、透明細粒少、白粗・細粒 微	北西部床面上 18 cm 胴部上平 1/2、胴部下 平・底部完存 47

6	土師器 台付甕	口 12.3 高 24.6 台 8.6 最大 19.6	S字口縁。ハケはすべて10本/1cmのハケでハケ内部の縁は浅く不明瞭な部分あり。内面口縁部ココナデ。底部周方向のハケ後接合し割部斜位のナデ。台部斜位の強いナデで下端折返し状に粘土貼付。下縁は潰れて平坦になっている。底部径5cm。台部上端径4cmの範囲に径0.1-1mmの砂粒付。外面口縁部ココナデ。割部下半・台部縦方向ないし斜位のハケ後半縦方向のハケ後半縦方向のハケ。台部下半ココナデ。ハケは下から上に通され、割部下半ハケ比縁は浅く断面は縦やが、中位・上半ハケ沈線は深く鋭い。外面割部一部密着。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 砂・赤褐粗-細粒 多、白粗-細粒少 硬質	東部床直 ほぼ完形 1
7	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 4.7 高 4.9 底 4.3 最大 6.0	調整悪いが底部外面は平滑。外面全体に粘土のシワ顯著。内面口縁・底部斜位の強いナデ。外面口縁-体部斜位のナデ後一部縦方向の10本/1cmのハケ。底部ナデ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや密着 白・透明細粒多、 砂粗-細粒少 硬質	東部床直 完形 3
8	土師器 ミニチュア (甕形)	口 9.0 高 8.9 底 4.4	全体に悪い作りだが口縁部はココナデ。内面口縁部ココナデ。体・底部周方向のナデ。外面口縁部ココナデ。頸部無調整、体部縦ないし斜位の強いナデ。底部ナデで全面砂貼付。底部は丸味を持つ平底で中央小さく凹む。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒少、白・赤褐粗-細粒微 硬質	北西部床面上20cm ほぼ完形 39
9	須恵器 鉢	高 残9.2	内面割部クロコナデ。外面割部クロコナデで中位に沈線あり。体部上端径元径22.8cm。	2.5Y6/2 灰黄 やや密着 白・黒粗-細粒少、 白輝微 硬質	南西部床面上20cm 体部一部 22・覆土
10	土師器 甕	口 径18.0 高 残5.6	式成型。口縁部外面上端比縁状に凹む他、口縁部内面上端沈線状に窪みに凹む。内面口縁部ココナデ。割部上端横方向のナデ。外面口縁部ココナデ。割部上端横方向のケズリ。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 砂・白・透明細粒少、 砂・白・透明粗-粗粒微、 金雲母細粒微 硬質	南部床面上34cm 口縁部1/6 49
11	石器 砥石	長 5.7 幅 2.2 厚 2.2 重 28.93	四角柱状。側面4面と上端が使用面であり、各面にわずかに磨痕残る。下端は成形・研磨なし。裏面2ヶ所に欠損あり。断面は表面のみわずかに凸面。他の3面は凹面、中底・仕上げ砥。	2.5Y8/1 灰白 緻密 流紋岩	東部床面上20cm ほぼ完形 18

第86表 V区 SI175B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 13.2 高 6.0 底 2.1	内口縁で小さい平底。内面口縁部ココナデ、体-底部斜位のナデ。外面体部横方向のナデ後口縁部ココナデ。体部下半横方向の左へのケズリ。底部ケズリ後ナデ。体部下端を削り中央のみを残すことで小さな底部を作出している。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白・赤褐粗-細粒少、 金雲母細粒微 硬質	中央部床面上26cm ほぼ完形 74
2 土師器 高坏	高 残10.1	坏部有縁。脚部は太い中空柱状で下に向かって縦やかに開く。内面坏部体-底部周方向のナデ。脚部上端縦方向の強いナデ。中位横方向のナデで3段の縦横が明瞭に残り、粘土のシワも顯著。外面坏部体部斜位のナデ。底部斜位ないし周方向のナデ。脚部上半縦方向の密なミガキ。脚部上端径4.1cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒多、赤褐粗-細粒少、 白・透明粗-細粒微 硬質	中央部床面上27cm 坏部体部一部、坏部脚部-脚部上半ほぼ完存 44・北西
3 土師器 高坏	高 残8.2 脚 径9.3	脚部中空柱状で短く、下端丸く外反し水平に近く開く。上端は坏部底面の突出部から欠損する。内面脚部上端斜位のナデ。中位横方向のナデで接合痕としての粘土の縞目あり。下半ココナデ。外面脚部斜位の6本/1cmのハケ・下端ココナデ後半-中位縦方向のミガキ後半下半周方向のミガキ。脚部上端径3.5cm。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白粗-細粒少、 赤褐粗-細粒微、 金雲母粗粒微 硬質	中央部床面上13cm 脚部上半完存、脚部下半1/2 4
4 土師器 中形甕	高 残9.6 底 3.8 脚 径12.9	球脚で底部凹む。内面脚-底部周方向のナデ。外面割部上半縦方向ないし斜位の10本/1cmのハケ・割部下端横方向のケズリ後割部横方向のミガキ。底部周方向のケズリ後周方向のミガキ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白粗-細粒少、 赤褐粗-細粒微、 金雲母粗-細粒微 硬質	中央部床面上25-28cmの接合 割部1/2、底部完存 15-16-76・北西・北東・覆土



第87表 V区 S1176 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 11.6 高 6.2 底 4.5	口縁部短く外反して開く。平底。内面のみ表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁部コナナデ。体・底部周方向のナデ後体・底部縦方向のミガキ。ミガキの粗密不明。外面口縁部コナナデ。体部下端横方向のケズリ・体部上半横方向のナデ後体部斜位のナデ。底部周方向のケズリ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫・細粒少、白 砂礫・細粒少、赤褐粗・細粒微 硬質	ほぼ完形 4
2 土師器 高坏	高 残 4.3	坏部有縁で坏部底部外縁が脚状に突出する。表面はほぼ全面剥落しており調整不明。脚部上端径 3.6 cm。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤褐礫・細粒少、 砂礫・細粒少、白細粒微 やや軟質	坏部体部一部、底部 1/3 8
3 土師器 高坏	高 残 8.2	脚部中空柱状で太く、下半は縦やかに開く。欠損部の形状から、坏部底部に突出部を作出し脚部と接合していたとみられる。内面脚部上端横方向のナデ。上半縦方向の強いナデで粘土のシワ顯著。中位斜位のナデで組織痕明瞭に残る。外面脚部縦方向の密なミガキ。脚部上端径 4.2 cm。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 砂礫・細粒多、白 粗・細粒少、赤褐粗・細粒微 硬質	脚部上半完存 覆土
4 須恵器 坏	口 復 13.0 高 3.4 底 6.2	焼成不良で赤褐色を呈する。体部一部に外面に突出する歪みあり。内面口縁・底部クロコナデ。外面口縁・体部クロコナデ。底部除転糸切り離し後無調整で、一部ナデあり。	5Y6/6 橙 緻密 白・赤褐粗・細粒少 やや軟質	口縁・底部 1/3 3
5 須恵器 坏	口 13.2 高 4.3 底 6.0	内面口縁・底部クロコナデ。外面口縁・体部クロコナデ。外面体部下端糸切り離しの際に糸が食い込んだ痕跡あり。底部除転糸切り離し後無調整。	N5/0 灰 やや粗い 灰・白礫・細粒少 やや硬質	東部床面上 2-3 cm 口縁・体部一部欠、底部 完存 1-2
6 土師器 甕	口 復 18.4 高 残 11.5	甕型。内面口縁部コナナデ。胴部上半横方向の丁寧なナデ。外面口縁部コナナデ。胴部上半横方向の左へのケズリ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 砂・白細粒多、砂 礫・粗粒微、赤褐粗・細粒微 、金雲母粗・細粒微 硬質	口縁部 1/4、胴部上半 1/6 1
7 須恵器 甕	高 残 11.0	内面無文当具痕、外面平行タタキ。	N5/0 灰 やや粗い 白礫・細粒少、黒 粗・細粒微 硬質	南東部床面上 27 cm 胴部破片 1-3

第88表 V区 S1177A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 13.7 高 4.8 底 3.5	外面体部上端に縦い棱を持ち、口縁部短く直立。底部不整形に凹む。調整荒い。表面の剥落著しく調整不明瞭。内面口縁部コナナデでミガキの可能性あり。体・底部斜位のミガキで粗密不明。外面口縁部コナナデ。体部縦方向のナデ・体部下端横方向のケズリ後体部縦方向の疎らなミガキ。底部底いケズリ後軽いなデ。	2.5YR2/2 灰白 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒 少 やや軟質	東部床面上 15 cm 口縁部 3/4、体・底部 完存 9

第89表 V区 S1178 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 中形甕	口 復 12.0 高 残 9.4	口縁部長く直線的に立ち上がる。内面口縁部上端コナナデ後口縁部斜位のミガキ。胴部上端ナデで粘土のめくれあり。外面口縁部上端コナナデ後口縁部縦方向の9 cm、11 cmのハケ縦方向のミガキ。胴部上端斜位のミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂礫・細粒多、白 砂礫・細粒少 やや硬質	遺構外 口縁部 1/4 3
2 土師器 甕	口 復 20.2 高 残 9.2	口径大きく口縁部内湾気味に長く立ち上がるものとみられる。口縁部内外面赤彩で胎土やや白っぽい。内面口縁部縦方向の密なミガキ。外面口縁部縦方向密なミガキ。高坏の可能性もあろうか。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや緻密 砂礫・細粒少、白 ・赤褐粗・細粒微 硬質	北部 口縁部破片 2

第90表 V区 SI181 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 12.6 高 4.8 底 3.5	体部ハの字に開き、上端で緩く傾曲し口縁部内凹。平底。内面口縁部横方向の6本/1cmのハケ後横方向のミガキ、体・底部周方向のナデ後斜位のミガキ、体部上端接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁・体部斜位の6本/1cmのハケ・体部下端ケズリ後口縁・体部横方向のミガキ。底部多方向の丁寧なミガキ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや緻密 砂粗粒少、赤褐粗 - 細粒微、金雲母粗粒微	北西壁跡床面上8cm 口縁・体部1/2、底部 完存 2

第91表 V区 SI182 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 12.9 高 5.7	内面口縁で丸底。内面口縁部ココナデ。体・底部横方向のナデで底部表面の凹凸あり。外面体・底部周方向のナデ後口縁部ココナデ・体部横方向のハケのケズリ。体部上端接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁・底部部分的に厚付着。	2.5YR2 灰白 やや粗い 砂礫-細粒多、透明 明細粒少、白・赤褐粗-細粒 微	北西部床直 完形 8

第92表 V区 SI183 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 11.0 高 残 4.3	小形丸底形。器壁は口縁部厚く体部薄い。内面口縁部斜位の左上への強いナデ後体部横方向のナデ・口縁部上端ココナデ。外面口縁部斜位の左上へのナデ後口縁部上端ココナデ、頸部横方向のミガキ状のナデ、体部右方向のケズリ。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂・白粗-細粒少 - 明細粒少、白・赤褐粗-細粒 やや硬質	口縁・体部1/3 46-47
2 土師器 漆台 器	高 残 4.4 脚 径 10.4 脚孔 1.0	丸内面を除く脚部内外面赤彩。脚部6孔で上下2段各段3孔。ハケはすべて9本/1cmのハケ。上端は受部との接合面で欠損しており、接合面にはハケが施される。内面脚部下斜位のハケ後上半横方向の左上へのケズリ・下端ココナデ。外面脚部斜位の右下がりのハケ後縦方向のミガキ。脚部上端径3.2cm。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、金 雲母・白粗-細粒微	脚部上半完存、下半部 40-41
3 土師器 壺	口 径 16.4 高 残 3.3	口縁部外面キズミ目を持つ粘土貼付による複合口縁。ハケ、キズミ目は7本/1cmのハケ。内面口縁部ココナデ後横方向のミガキで、ミガキは全周を何単位かに分割し多角形状に施す。外面口縁部下横方向内し斜位のハケ後粘土貼付後上半ココナデ後下端斜位のキズミ目は上半横方向の粗いミガキ。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや緻密 砂粗-細粒少、金 雲母・白粗-細粒微	口縁部破片 北西
4 土師器 土台甕	高 残 4.7 台 径 8.5 孔 0.65	小形土台甕の台部と考えたが他器種の可能性あり。台部4孔で相対する2孔ごとに高さが異なる。内外面表面剥落により調整不明瞭。内面底部調整不明。台部横方向の7本/1cmのハケ後上半斜位のケズリ・下端おそろココナデ。外面台部ナデ・ココナデとみられる。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、白 雲母・白粗-細粒微	台部2/3 53
5 土師器 土台甕	口 径 13.2 高 24.1 台 径 8.8 最大 20.0	S字口縁。ハケはすべて5本/1cmのハケ。内面口縁部ココナデ、胴部横方向のナデ後上半及び下半横方向のナデ、底部剥落のため調整不明。台部縦方向内し斜位のナデ後下半ココナデ。台部上端径3cmの細部に径0.5-2mmの砂貼付。下端返し状に粘土貼付後ナデで粗面圧痕顯著。外面口縁部ココナデ。胴部斜位の左上へのケズリ後中位・下半斜位の左上がりのハケ後上半斜位の左下がりのやや粗いハケ。台部斜位のハケ後胴部下端・台部縦方向のナデ後下半おそろココナデ。台部はハケとナデが連続。外面胴部及び口縁部内外面やや黒く黄色。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い 砂・白・赤褐粗- 明細粒少	口縁部・底部2/3、台部 完存 4

第93表 V区 SI188 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	高 残 3.4 底 3.4	体部小さく扁平な球形で底部は丸味を持つ平底。内面口縁部斜位の8本/1cmのハケ後斜位のミガキ。体・底部周方向のケズリ後縦方向のミガキ。外面口縁・底部周方向の左上へのケズリ後縦方向のミガキ。	10YR6/3 鈍い黄橙 緻密 砂白・透明明細粒少、赤 褐粗-細粒微	北西隅床面上9cm 口縁・底部1/2 22

第4章 東地区の遺構と遺物

2 土師器 甕	高 残 9.8 最大 径 21.9	口縁部がないがS字口縁と推定される。内面胴部上端縁方向のナデ後上半 - 中位横方向ないし斜位のナデ。外面胴部上半 - 中位斜位の左上へのケズリ後中位左上がりの6本/1cmのハケ後上半左下がりの6本/1cmのハケ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂・白・赤褐・透明細 - 細粒少 硬質	南東隅 胴部上半 - 中位破片 9
3 石器 砥石	長 12.5 幅 5.3 厚 5.3 重 残 310.8	平盤角柱状で表面2面を砥石面とする。河原石などの転石を分類して作成したものとみられ、左右側面に原表面を残す。下端し調離面だろう。表面の広い平坦面を主要な使用面とし、裏面の斜位の平坦面も使用する。中砥。	5Y7/1 灰白 やや緻密 砂や粗粒のホルンフェルス	中央部味直 完形 39
4 石器 砥石	長 16.6 幅 7.6 厚 残 1.8 重 残 190.9	木束は角柱状の砥石で、裏面が陰理面から剥離するように欠損し、表面のみが残存したものと考える。表面を主要な使用面とし、左側面も砥石面としていたとみられる。中砥 - 仕上げ砥。	10Y5/1 灰 緻密 ホルンフェルス	南部 破片 38
5 須恵器 高台付坪	口 径 14.0 高 6.0 台 7.4	口縁端部は丸く肥厚。高台部はハの字に開き、下端は内側に傾く面で中央凹む。内面口縁 - 底部ロクロナデ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。底部回転赤切り履し後無調整で高台貼付。	N5/0 灰 粗い 黒粗 - 細粒多、白粗 - 細粒微 やや硬質	口縁 - 底部 1/2 覆土

第94表 V区 SK149B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坪	口 径 13.0 高 3.3 底 径 7.4	焼成不貞で、外面口縁 - 体部表面のみ灰色。内面口縁 - 底部ロクロナデ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。底部回転赤切り履し後無調整。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明細 - 微粒少、赤褐粗 - 細粒微 やや硬質	北西部味面上 14 cm 口縁 - 底部 1/2 8
2 須恵器 坪	口 径 12.6 高 残 2.5	内面口縁 - 体部ロクロナデ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。	7.5YR6/1 灰 緻密 黒粗 - 細粒微、白細粒微 硬質	口縁 - 体部 1/4 6

第95表 V区 SK175C 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坪	高 残 2.6 底 径 7.0	ロクロ成形。内面黒色処理。外面は表面の剥落著しく調整不円順。内面体部横方向の密なミガキ、底部一方向のミガキ。外面体部ロクロナデ。底部は回転赤切り履し後無調整だろう。	7.5YR5/4 鈍い褐 やや緻密 赤褐粗 - 細粒少、白細粒微 やや硬質	中央部味面上 5 cm 体部 - 底部 1/3 SI175 No.59
2 須恵器 皿	口 径 18.4 高 残 1.8	体部大きく開き、口縁部で水平に返る。内面口縁 - 体部ロクロナデ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。	5Y6/1 灰 やや粗い 灰・白腫 - 細粒少、黒粗 - 細粒微 やや硬質	南部味面上 4 cm 口縁 - 体部一部 1/6 81
3 原始灰釉 長頸瓶	口 径 13.2 高 残 24.5 台 径 12.5	頸部長く、口縁部に段を持ち胴部上平腫で肩。台部はハの字に開く方形。頸部下端の接合部は丁寧に調整される。外面口縁 - 胴部、内面口縁部及び底部自然軸付着。内面口縁 - 体部ロクロナデ。底部理方向のナデ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。底部ナデ後高台貼付。台部には約 50°の間隙で放射状に沈線があるが全周に存在するかどうかは不明。	10YR6/1 灰褐 やや緻密 白腫 - 細粒微、黒粗 - 細粒微 硬質	中央部味面上 2 cm と SI139 出土破片が接合 口縁 - 台部 1/4 SI175 No. 48-54-58-63-80-覆土、SI175B, SI177A No.21・覆土、SI139 No. 57-62-103-116

第96表 V区 SK201 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坪	口 径 16.9 高 6.0 底 8.0	ロクロ成形。内面口縁 - 体部横方向の密なミガキ。底部主に一方向の密なミガキ。外面口縁 - 体部ロクロナデ。底部多方向のケズリ後軽いナデ。内面黒色処理は確認できず。	5YR5/6 明赤褐 緻密 砂・白・透明細粒少、白粗粒微、赤褐粗 - 細粒微 硬質	体部 - 底部 1/6 SI175 No.19

2 土師器 甕	口 径 20.8 高 残 14.6	武蔵型。口縁部断面丸く外反。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向のケズリ後縦方向のケズリ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 砂・白・透明細粒 砂、白・粗粒微、金雲母粗 粒微 硬質	口縁部 1/2、胴部上半 1/6 I-SI175 № 25-SI175 東シヨウド
---------------	----------------------	---	--	--

第 97 表 V区 SX172 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 12.5 高 6.0 底 径 2.7	体部上端外面溝状に凹み、口縁部内面受口状に段を持つ。底部小さく凹む。内面口縁部ココナデ・体・底部周方向のナデ後体・底部斜位の放射状のミガキ後口縁・体部上端横方向のミガキ、外面口縁部ココナデ・胴部横方向のナデ・体部横方向のケズリ後口縁・体部横方向のミガキ。底部周方向のケズリ後ミガキ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂粗粒多、砂礫・ 粗粒微、白・赤褐粗粒微 硬質	中央部 ほぼ完形 27

第 98 表 V区 SX177B 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 径 12.8 高 4.0 底 径 6.2	内面口縁・底部クロコナデ。外面口縁・体部クロコナデ。底部回転軸 切り離し後無調整で、溝状のナデ及び稜状凸筋あり。内面火だきさ あり。	2.5Y8/1 灰白 やや粗い 灰礫・粗粒少、白 礫・粗粒微 やや軟質	南部床面上 4 cm 完形 29
2 須恵器 杯	口 径 13.0 高 3.6 底 径 6.8	焼成不良で特に底部寄りが良くない。内面口縁・底部クロコナデ。外 面口縁・体部クロコナデ。底部回転軸切り離し後無調整。	7.5Y5/4 鈍い褐 やや緻密 白礫・粗粒少 やや軟質	南部床面上 8 cm 口縁・底部 1/4 SI177 № 26-36
3 土師器 甕	口 径 10.5 高 残 7.4	小形の武蔵型。内面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の丁寧なナデ、 外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の左へのケズリ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗粒多、砂礫・ 粗粒微、白・赤褐粗・粗粒微 、金雲母粗粒微 硬質	南部床面上 7 cm 口縁・胴部上半 1/2 SI177 № 25
4 土師器 甕	口 径 22.0 高 残 12.4 最大 径 23.6	武蔵型。口縁部上端外面は沈殿状に凹む。内面口縁部ココナデ、胴部 上半横方向の丁寧なナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半横方向の左 へのケズリ。	7.5YR5/4 鈍い褐 やや粗い 砂粗粒多、砂・白 ・赤褐・透明礫・粗粒微 硬質	南部床面上 7-8 cm 口縁・胴部上半 1/6 SI177 № 25-26
5 土製品 紡錘車	径 7.6 厚 0.9 孔径 1.0 重 47.55	須恵器高台付杯底部の再利用。底部以外を除去し、欠損面を研磨し中 心に穿孔して作成。平面門形。表面クロコナデ、裏面ナデで高台粘付。 切り離し方法不明。側面は研磨により平滑に仕上げられる。表面黒色 物質付着。	7.5Y5/1 灰 やや粗い 黒褐粗・粗粒多、 白粗・粗粒微 やや軟質	南部床面上 18 cm ほぼ完形 SI177 № 23
6 土製品 紡錘車未製 品	径 7.9 厚 0.9 重 55.12	底径 6.6 cm の須恵器高台付杯底部の再利用。底部以外を除去し、欠損面を研 磨して作成。欠損面は丁寧に研磨し斜位の平坦面となる。平面門形。 表面クロコナデで若干研磨の可能性あり。裏面となる底部外面は回転 軸切り離し後無調整で、研磨されずにそのまま残る。	N4/0 灰 やや緻密 灰礫・粗粒微、黒 粗・粗粒微 硬質	完形 SI177B
7 土製品 紡錘車	径 径 6.8 厚 0.9 重 残 7.92	須恵器杯底部の再利用。底部以外を除去し、欠損面を研磨して作成し ており欠損面は丁寧に研磨され丸く仕上げられる。平面門形。表面 は須恵器杯底部の内外面をそのまま残る。表面クロコナデ、裏面回転 軸切り離し後無調整。	N4/0 灰 やや緻密 白・黒褐粗・粗粒 微 硬質	破片 SI177

第 99 表 V区 SX186A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 11.6 高 5.0 底 径 2.4	内外面全体赤彩。口径大きく体部上端で狭れ口縁部 S 字状。底部丸く 凹む。口縁部器壁薄。内面口縁部ココナデ・体部斜位のナデ後底部 主に放射状のミガキ後口縁・体部横方向のミガキ。外面体部横方向の ケズリ後口縁部ココナデ後口縁・体部上端横方向のミガキ・体部縦方 向のミガキ。底部周方向のケズリ後主に一方のミガキ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや緻密 砂粗・粗粒少、透 明細粒少、白・赤褐粗・粗粒 微 やや硬質	口縁部・体部 1/6、底 部完形 覆土

2	型 復 9.0 土師器 高 残 7.2	胴部上半縁別あり、外面口縁部下平 - 胴部上端赤彩。外面胴部のより下方や内面口縁部も赤彩の可能性あり。ハケはすべて11本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のハケ後コナデ横方向のミガキ。胴部上半縁方向のナデ後横方向のナデで接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部斜位のハケ後上位コナデ。胴部上半縁方向のハケ後横方向の粗いミガキ後三角形の縁別施文。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、透明粗 - 細粒少、金雲母・白・赤陶層 - 細粒微 硬質	口縁部下平一部、胴部上半1/6 61
---	---------------------------	--	---	-----------------------

第100表 VII区 SI334 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 鉄製品 不明	長 残 4.6 幅 2.0 厚 0.5 重 残 9.9	板状の鉄製品で両端を欠損する。幅はほぼ一定である。断面は長方形で、上端から下に向かって徐々に薄くなる。		破片 覆土
2 石造 石灘	長 3.3 幅 1.7 厚 0.7 重 2.29	有蓋で基部をわずかに伏り込む。蓋身部側縁は先端が直線的で中位に段があり、下平は扇面状で粗い割縁。裏面中央はステップの割縁が連続し厚みを落としていない。基部は平面方形で扁平。	N4/ 灰 磁膏 チャート	完形 覆土

第101表 VII区 SI354A 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 11.0 高 9.4	口縁部短く立ち上がり丸底。口縁部および内面は赤みの強い色調。胎土の選いか、小型変形。内面口縁部コナデ、底部一方のケズリ、体部下平横方向のケズリ後体部中央 - 上半横方向のナデ。外面体部 - 底部周方向のケズリ後体部上半横方向のナデ後口縁部コナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂眼 - 細粒少、透明・半透明細粒少、金雲母・白・赤陶層 - 細粒微 やや硬質	カマド尖床面上3cm 一部欠 102
2 土師器 埴	口 12.5 高 7.9 底 3.5	内口縁部で高さ高く凹み底。小型変形。内面口縁部コナデ、体へ底部左への横方向のケズリ後体部横方向のナデ。外面体部下平横方向のケズリ後体部上半横方向のナデ後口縁部コナデ、底部多方向のケズリ。外面体部下平 - 底部被熱のため黒く変色。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、白・赤陶層 - 細粒少、透明・半透明粗粒 やや硬質	南東側床面上9cm 口縁部 - 体部上半一部、体部下平 - 底部完存 57
3 土師器 埴	口 復 13.8 高 5.5 底 4.5	体 - 口縁部直線的に閉じ底部は明確な平底でわずかに凹む。成形・調整とも寛い。内面口縁 - 底部周方向のナデ後口縁部コナデで体部上半縁合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面体部下平横方向のケズリ後体部上半横方向のナデ後口縁部コナデ、底部一方のケズリ。	10YR6/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、白・赤陶層 - 細粒微、砂礫微 やや硬質	口縁部 - 体部上半 1/4、体部下平 - 底部完存 10 刷
4 土師器 埴	口 13.6 高 5.0 底 3.5	内面表面の割落著しく調整不明瞭。底部凹み底で体部下端に後あり。口縁部は短く直線的に閉く。内面口縁部コナデ後口縁 - 底部周方向のミガキ。外面口縁部コナデ、体部周方向の右へのケズリ。底部周方向のケズリ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、赤陶層 - 細粒少、白粗 - 粗粒微 やや硬質	南東側壁面床上13cm 口縁部 - 体部1/2、底部完存 58-60
5 土師器 小形埴	口 8.9 高 8.4 底 2.6	底部小さい凹み底。口縁部上半部厚く、端部薄い。内面口縁部コナデ、体 - 底部斜位のナデ。外面体部丁字架横方向のナデ後口縁部コナデ - 体部下平斜位のやや強いナデ、底部ナデ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、透明・半透明粗粒微、白・赤陶層 - 細粒微 硬質	北西部床面上27cm ほぼ完形 12
6 土師器 小形埴	口 10.8 高 9.4 底 2.5	底部は平底だが平面図は中心から偏った位置にあり。内面口縁部コナデ後横方向のナデ、体 - 底部横方向ないし斜位のナデ。外面口縁部コナデ、体 - 底部周方向のケズリ後体部上半横方向のナデ。	10YR6/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂眼 - 細粒多、透明・半透明粗粒少、白・赤陶層 - 細粒微 硬質	貯蔵穴内底面上7-10cm ほぼ完形 92-100
7 土師器 高坪	口 20.3 高 18.9 脚 14.0	坪部大きく有縁。中空柱状脚で上半は中央がやや膨らむ。口縁・脚部とも端部は内湾気味。内面坪部口縁 - 底部周方向のナデ後口縁部コナデ後口縁 - 底部縦方向の稀なるミガキ。脚部上半横方向の粗いナデで粘土のシワ顯著。下半コナデ。外面坪部体部横方向主体のナデ・底部ナデ後口縁部コナデ後口縁 - 底部稀なる縦方向のミガキ。稀の版面粘土の継ぎ目あり。脚部下平コナデ後全体縦方向の稀なるミガキ。脚部上端径3.8cm。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤陶層 - 細粒多、金雲母・白・透明粗粒少、白・赤陶層 - 砂粗粒微 やや硬質	中央部・南部床面上 9-12cm 一部欠 44-48

8	土師器 高坏	口 21.2 高 残 6.8	口径大きく器壁厚く厚部有様。内面内面体部下表面脱落著しい。内面内面体・底部周方向のナデ後口縁部ココナデ後全体やや粗い・横方向のミガキ。外面内面体口縁部ココナデ後口縁・体部やや粗い・縦方向主体のミガキ。底部横方向のケズリ後斜位のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂・赤褐粗・細粒少・透明・半透明細粒少、白粗・粗粒微・砂礫微	北部床面上 5 cm 弁部口縁・体部ほぼ完 16
9	土師器 高坏	高 残 13.0 脚 13.8	カマド内支脚軸用。中空柱状脚で上半は中央がやや膨らむ。脚端部は内面内面体・内面脚部上半縦方向の粗いナデで粘土の絞り目としてのシワ顯著で、焼成時に生じたと推定されるひび割れあり。上下下下・下半横方向のナデ後下半ココナデ。外面脚部上半縦方向のケズリ後下半縦方向のケズリ後下半ココナデ後全体縦方向のミガキ。脚部上半下平ケズリの工具の当り残る。脚部上端径 3.8 cm。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤褐粗・粗粒多、金雲母・砂粗粒少、白粗・粗粒微	カマド火床面上 14 cm 脚部完存 101
10	土師器 甌	口 14.7 高 19.7 底孔 6.0 最大 19.3	甌形で無底式。底部孔は円形。成形・調整荒く内面の凹凸著しい。内面口縁部ココナデ。胴部下半斜位のナデ後中位斜位の右上へのケズリ後上半斜位のナデで胴部下半と中位に接合痕としての粘土の織り目あり。底部の孔は横方向のケズリ後横方向のナデ。外面口縁部ココナデ。胴部横方向上体の左へのケズリ。	7.5YR6/4 鈍い橙 粗い 砂粗・粗粒多、白粗・粗粒少、金雲母粗粒・粗粒微	中央・北東部床面上 9-11 cm ほぼ完形 29-35-36-39-40-41
11	土師器 甌	口 径 16.0 高 23.1 底孔 6.0 最大 19.8	胴部縦長で口縁部なく無底式。全体に成形・調整荒い・内面口縁部周のみ調整丁寧。孔周辺黒く変色。内面胴部斜位のナデ後上半・中位斜位の強いケズリ。胴部下半接合痕としての粘土の織り目あり。底部孔部縦方向のケズリ。外面胴部上半斜位のナデ後胴部縦方向主体のナデ。底部周方向のケズリ。	7.5YR5/4 鈍い褐 粗い 砂粗・粗粒多、白粗・粗粒少、金雲母粗粒・粗粒微、砂礫微	南東側・東部床面上 6-12 cm 口縁・胴部 2/3、底部完存 51-53-59-65-66-71
12	土師器 甌	口 17.0 高 残 11.1	口縁部二部口縁状中位に縁を持ち上半縦く外反する。内面口縁部縦方向のナデ後ココナデ。胴部上半横方向のナデで結構直残り。上端は指節上順あり。外面口縁部ココナデ。胴部上半斜位の強いナデ後中位横方向のナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・粗粒多、砂礫微、白・赤褐粗・粗粒微	中央部床面上 17 cm 口縁・胴部ほぼほぼ完存 42
13	土師器 甌	口 径 23.2 高 残 8.2	口縁部はへの字に開き、端部斜めに面取りされ中央が溝状に凹む須恵器様のような形状。内面口縁部ココナデ。胴部上半横方向のナデで上段に接合痕としての粘土の織り目残る。外面口縁部ココナデ・胴部上端横方向の右へのケズリ後胴部横方向のミガキ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 赤褐粗・粗粒多、砂粗・粗粒少、白粗・粗粒微	北東部床面上 18 cm 口縁部 1/2 21
14	土師器 甌	口 15.0 高 20.0 最大 20.0	やや長脚で厚手。成形・調整荒く特に内面で器面の凹凸顯著。内面口縁部ココナデ。胴部上端横方向のナデで接合痕としての粘土の織り目あり。外面口縁部ココナデ・胴部上端斜位ないし横方向の左へのケズリで一部ケズリ後ナデあり。外面口縁・胴部中位保付首。	7.5YR7/4 鈍い橙 粗い 砂粗・粗粒多、金雲母・白・赤褐粗・粗粒少、砂礫微	北東部床面上 14-22 cm 口縁 2/3、胴部 1/2、底部完存 28-29
15	土師器 甌	口 18.2 高 残 20.0 最大 22.8	口縁部2段に開く。外面成形・調整やや甘く。外面胴部下半組積状の凹凸を残す。内面口縁部ココナデ。胴部縦方向の左へのナデ後斜位の右上への緩やかなケズリ後ごく緩やかな斜位のミガキで中位に接合痕としての粘土の織り目あり。外面口縁部ココナデ。胴部上端斜位の 20 mm/1 cm のハケ後上半・中位横方向ないし斜位のケズリ後胴部斜位のミガキ。ミガキは下半密で上半粗い部分あり。外面胴部上半・中位保付首。	7.5YR5/4 鈍い褐 やや粗い 砂・白・赤褐粗・粗粒少、透明細粒少、金雲母粗粒微	北東部床面上 13 cm 口縁・胴部中位完存、胴部下半 1/3 22
16	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 4.4 高 3.2 底 3.8 最大 5.1	ココナデなし。口縁部歪みあるが底部は丁寧な成形される。平底。内面口縁・体部螺旋状の斜位の強いナデ。底部一方のナデ。外面口縁・体部縦方向のミガキ。底部丁寧なナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 砂粗粒多、白粗粒少、赤褐粗・粗粒微	北西部床面上 30 cm 完形 13
17	土師器 ミニチュア (壺形)	口 3.8 高 5.1 底 3.2 最大 4.6	口縁部ココナデなく粘土組積付で口縁部を表す。底部丁寧な成形された平底。内面体・底部縦方向ないし斜位の強いナデ後口縁部縦方向のナデ。外面口縁・体部ナデで粘土のシワ顯著。底部丁寧なナデ。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 砂・白・透明細・微粒少	東室階床直 完形 62
18	石器 砥石	長 残 14.2 幅 18.3 厚 4.7 重 残 1,201	平面長方形で扁平。上側 1/2 程度を欠損する。表面 2 面を砥石面とし、両面とも深く平滑に研磨される。表面では砥石面周囲も平滑に仕上げられる。砥石面表面は表面では狭く、裏面では広い。石製機織品の製作に使用したものか。	2.5Y6/1 黄灰 やや緻密	東部床面上 4 cm 1/2 63
19	石器 台石	長 12.4 幅 11.3 厚 4.9 重 1,074	平面不整形で厚い板状。表面面と上面が剛硬面。これ以外は節理面である。石製機織品の素材を調整ないし切削等で取ったあとの残株とも考えられ、主に側面に敲打痕が残る。表面と一部裏面には、機織品製作用の台石として使用した際のものと思われる短い切刃痕が集中する。	N4/0 灰 やや緻密 砂質	南部床面上 4 cm 完形 106

第4章 東地区の遺構と遺物

20	石製品 管玉	長 3.08 幅 0.91 重 3.62 孔 0.46	円筒形。表面平滑で擦痕見えす光沢あり。両面穿孔で、中央でわずかに段差あり。表面に幾げハジケのような欠損あり。	2.5Y5/3 黄褐 緻密 頁岩	ほぼ完形 カマド一括
21	石製模造品 有孔門板	長 2.51 幅 2.48 厚 0.31 重 3.86	門形で断面は板状。双孔でともに裏面からの穿孔であり表面に穿孔時の剥離痕残す。擦痕は表裏面ともほぼ水平方向。側面は断面に直交する方向。表裏面には部分的に剥離面を残す。孔径右 0.13cm、左 0.15cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	西部床面上 18 cm 完形 7
22	石製模造品 有孔門板	長 2.82 幅 残 2.34 厚 0.30 重 2.83	小笠門形で断面は板状。側面は剥離状態のまま残っている部分が多く、上端のみ面が作出される。単孔で左側が欠損していると思われる。未製品の可能性もある。裏面からの穿孔であり表面に穿孔時の剥離痕残す。擦痕は表裏面とも斜位。側面は断面に直交する方向。裏面に大きく剥離面を残す。孔径 0.23 cm。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 緑色片岩	西部床面上 11 cm 一部欠 8
23	石製模造品 銅形	長 3.24 幅 1.55 厚 0.37 重 2.82	平面二等辺三角形で上部は直線的。断面は三角形状で裏面平直。1孔で裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕残す。擦痕は表裏面とも斜位。側面は上端のみ断面に直交で左右側面は斜位。一部に剥離面を残す。孔径 0.13 cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	北部床面上 8 cm 完形 14
24	石製模造品 銅形	長 2.86 幅 1.30 厚 0.44 重 2.47	平面二等辺三角形で上部は直線的。断面は三角形状で裏面平直。1孔で裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕残す。擦痕は表面斜位、裏面水平。側面は上端のみ断面に直交で左右側面は斜位。裏面左側に大きく剥離面を残す。孔径 0.14 cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	南部床面上 4 cm 完形 6
25	石製模造品 銅形	長 2.78 幅 1.46 厚 0.31 重 2.26	平面切門形で断面は板状だが表面は丸味を持つ。無孔。未製品の可能性もある。擦痕は表裏面とも水平に近い斜位。側面は斜位。部分的に剥離面を残す。	10GY5/1 緑灰 緻密 滑石片岩	南部床面上 8 cm 完形 104
26	石製模造品 白玉	長 0.33 幅 0.51 重 0.17 孔 0.19	平面門形で断面は板状。側面は平坦で平滑。中央 1孔。擦痕は表裏面は確認できず。側面は断面に直交。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色岩	南東部床面上 14 cm 完形 55

第 102 表 VII区 SI366 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土製品 丸玉	長 2.45 幅 2.50 孔 0.5-0.7 重 13.54	やや不整な球状。表面ナデ。穿孔の際に棒状工具を動かしているためか孔は楕円形で径も一定していない。上端では孔側へ粘土の張り出しがある。	10YR6/2 灰黄褐 緻密 白濁粒少、金雲母・細粒微 硬質	北東部埋設床面上 24 cm 完形 SI306 № 5

第 103 表 VII区 SD255 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.0 高 4.9	北式碗型。内面調整丁彫で口縁部内面丸く肥厚し底部は扁平な丸底。内面口縁-体部ココナデ。底部周方向の丁彫ココナデ。外面口縁部ココナデ。体部軽いナデで粘土のシワと指掘り痕残る。底部多方向のウズリ。	5YR6/6 橙 緻密 赤陶粒-細粒少、砂・透明細粒少、金雲母・白濁・細粒微 硬質	体部-底部 1/6 SD255aA + 23-24 +25, B + 3-2-5, B4 +4, B + 24-16-21
2 須恵器 杯	口 径 12.0 高 4.2 底 6.4	内面口縁-底部クロコナデ。口縁-体部粘土のシワ残る。外面口縁-体部クロコナデ。底部回転糸切り離し後外周-体部一部持ちちケズリ。	5Y7/1 灰白 緻密 灰粗粒微、白細粒微 やや硬質	完形 1
3 須恵器 杯	高 残 1.8 底 7.5	ロクロ成形。焼成不良のため土師器に近い色調。内面体-底部クロコナデ。外面体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤陶粒-細粒少、白細粒微 やや軟質	体部一部、底部完存 一括
4 須恵器 高台付杯	高 残 5.7 台 7.5	高台部はハの字に開く。内面体-底部クロコナデ。外面口縁-体部ロクロナデ。底部回転糸切り離し後無調整で高台貼付。外面底部-高台部黒色物質付着。	10Y6/1 灰 やや緻密 白濁-細粒少、黒陶-細粒微 硬質	体部一部、底部完存、 上部一部欠 SD255, 283A + 23- 20-25

5 土師器 高杯	高 残 8.7	中実柱状の脚部で下平は傾曲して開き、下端でさらに傾曲し大きく開く。胎土白く内面外部・外面脚部赤彩。内面外部不明でミガキの可能性高い。脚部上端横方向の丁寧なナデ。外面脚部縦方向のミガキ。	2.5YR8/2 灰白 やや硬質 砂・透明細粒少、 白細粒微、赤褐相・細粒微 やや硬質	脚部上半完存 2
----------------	---------	--	--	-------------

第 104 表 VII区 SD362 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 17.2 高 残 5.0	単口縁で口縁部は丸く外反する。ハケはすべて 12 本/1 cm のハケ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端斜位のハケ後横方向のナデで組織微あり。外面胴部上端・口縁部斜位のハケ後横方向のハケ後口縁部ヨコナデ。	10YR5/2 灰青褐 やや粗い 砂礫～細粒少、透 明細粒少、赤褐相・細粒 微	口縁・胴部上端破片 一括

第 105 表 VII区 SX266 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴	口 径 12.0 高 5.9 底 5.0	口縁部は丸く外反し大きな平底。成形・調整やや粗いが底部は丁寧。ヨコナデ後体部に粘土を貼付け補修・成形したような痕跡が内外面ともにもあり。内面口縁部ヨコナデ後体～底部周方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ。体部横方向ないし斜位のやや粗いナデ。底部多方向の強いナデ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫～細粒少、透 明細粒少、赤褐相・細粒 微	ほぼ完形 201・301・334
2 土師器 埴	口 径 10.0 高 5.9 底 3.0	口縁部は短く丸く外反し底部は不整な平底で凹凸著しい。成形・調整やや粗いが口縁部は丁寧。内面口縁部ヨコナデ。体部斜位の丁寧なナデ。外面底部上に周方向のケズリ後体部横方向のナデ後口縁部ヨコナデ。体部組織微残る。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫～細粒少、透 明細粒少、白・赤褐相～細粒 微	口縁・底部 1/2 288
3 土師器 埴	口 径 11.6 高 6.7	内斜口縁でいびつな丸底。内外面とも底部調整良く、口縁部は比較的丁寧。内面口縁部ヨコナデでミガキの可能性あり。体・底部斜位の縦敷状のナデ。外面体部横方向のナデ後底部上に周方向の粗いケズリ・口縁・体部上端ヨコナデ後口縁部横方向のミガキ。	5YR6/8 橙 粗い 砂礫～細粒多、透明細 粒少、白・赤褐相～細粒 微	口縁部 3/4、体・底部 完存 300・4 層下・5 層
4 土師器 埴	口 径 13.5 高 7.1	内斜口縁で深身な丸底。成形・調整丁寧。内面体・底部斜位の縦敷状のナデ後口縁・体部上半ヨコナデ。外面体部横方向のナデ後底部周方向のケズリ・口縁・体部上半ヨコナデ。体部組織微残る。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂・赤褐相～細粒 少、透明細粒少、白粗～細粒 微 やや硬質	口縁部 3/4、体・底部 ほぼ完存 343
5 土師器 埴	口 径 16.2 高 5.5	体部上端後を持ち最大径となり口縁部は直立する。内外面とも成形・調整は極めて丁寧で、外面体部ナデは光沢あり。内面表面細かく割落するため調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ、体・底部周方向のナデ。外面口縁部ヨコナデ、体・底部周方向のケズリ後周方向の光沢のあるナデ。	10YR7/4 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫～細粒多、赤 褐相～細粒少、透明細粒少、 白粗～細粒微 微	口縁部 1/4、体・底部 1/3 123・124
6 土師器 壺	高 残 8.4 底 2.2 胴 8.9 孔 1.1	胴部は下平が潰れた形の球脚で上半に上向き孔あり。外面底部中央小さく深く凹む。内面底部の中心からやや外れた位置に小さい凹みあり。内外面とも表面割落して調整不明瞭。口縁部は内外面とも不明で横方向のナデの可能性あり。内面胴部斜位のナデで中に組織微あり。底部周方向のナデ。外面胴部上半横方向のナデ、下半斜位のナデ。底部強いナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂礫・白粗～細粒少 砂礫微、赤褐相・細粒微 やや硬質	口縁部一部、体・底部 一部欠 137・4 層下・5 層
7 土師器 小形埴	口 径 8.4 高 10.7 底 4.2 最大 8.6	球脚で底部平底で厚い。口縁部上端内凹。底部は外面中央小さく凹み、内面中央小さく突出。内面口縁部横方向の 6 本/1 cm のハケ後上端ヨコナデ後口縁部縦方向の粗いミガキ。胴・底部周方向のナデで胴部上端組織微と粘土のシワあり。外面口縁部上端ヨコナデ後口縁部縦方向の光沢のないミガキ。胴部上半横方向のナデ後下半斜位のケズリ、底部ナデ。	10YR5/2 灰青褐 やや粗い 砂礫・細粒少、透 明細粒少、白粗～細粒微、金 雲母細粒微 微	口縁部 1/2、体部 2/3、 底部完存 141
8 土師器 小形埴	口 径 9.0 高 10.5 底 5.2 胴 8.8	胴部は下平が潰れた形の球脚。底部平底で外面大きく凹み内面は隆起する。内面口縁部ヨコナデ後横方向の粗いミガキ。胴・底部周方向のナデで上端に接合痕としての粘土の縦ミガキ。中に組織微あり。外面口縁部ヨコナデ後横方向の光沢のないミガキ。胴部上半横方向のナデで光沢のないミガキの可能性あり。胴部下半横方向のナデ後横方向の右へのケズリ、底部丁寧なナデ。	10YR7/3 鈍い黄褐色 やや粗い 砂礫・細粒多、透 明細粒少、赤褐相～細粒少、 白粗～細粒微 微	口縁部 1/4、体・底部 一部欠 75・74・76



9 土師器 小形甕	口 復 8.4 高 8.3 底 4.8 最大 8.8	胴部は大きく潰れて変形しており内面底部は変形に伴い器壁に亀裂入る。底部は突出する丸みを持つ平底。内面口縁部ココナテ後斜位の疎らなミガキ、胴-底部周方向のナデ。外面口縁部ココナテ後縦方向の疎らなミガキ、胴部横方向の丁寧なナデ、底部多方向のケズリ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫-細粒少、透明細粒少、白・赤陶粒-細粒 微	口縁部1/6、体-底部 完存 187
10 土師器 小形甕	口 復 8.9 高 8.4 底 2.7 最大 8.2	球脚で底部はやや突出する平底で浅く凹む。口縁部はハの字に開き上端で角度を変え直立気味に立ち上がる。内面口縁部ココナテ後やや斜位の疎らなミガキ、胴部上半ナデで指節圧痕と組織顕著。胴部下半-底部周方向のナデ。外面口縁部ココナテ、胴部横方向のナデ後下半横方向の右へのケズリ。底部周方向のケズリ。	10YR7/3 鈍い黄橙 やや粗い 砂礫-細粒多、赤陶粒-細粒少、透明細粒少、白組-粗粒微	口縁部1/6、体-底部 完存 287
11 土師器 小形甕	口 復 8.2 高 9.3 底 2.5 最大 8.6	口縁部長く上半直立気味。胴部やや扁平な球脚で底部突出して凹む。全体に作り悪い。内面口縁部ココナテ、胴部上端ナデで組織痕と指節圧痕あり。胴部中位-底部斜位のナデで胴部中位組織痕わずかに残る。外面口縁部ココナテ、胴部下半斜位の右下へのケズリ後胴部横方向のナデで下半に組織痕あり。底部微いケズリ。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂礫-細粒多、白・赤陶粒-粗粒微	口縁部1/3、体-底部 完存 320
12 土師器 小形甕	口 8.4 高 9.7 底 最大 8.8	球脚で底部突出する丸底。内面口縁部ココナテ、胴部上半横方向のナデ。胴部中位斜位のナデ、底部周方向のナデで風中痕に工具痕残る。外面口縁部ココナテ、胴部上半-中位横方向の丁寧なナデ、胴部下半横方向の右へのケズリ。胴部中位及び下半に組織痕あり。	7.5YR6/4 鈍い橙 やや粗い 砂礫-細粒多、白組-粗粒少、透明細粒少、砂礫微	口縁部1/2、体-底部 一部欠 290-210-211
13 土師器 小形甕	口 8.6 高 8.2 底 3.0	胴部縦長で底部に向かって細くなり、頸部細く括れる。全体に作りやや悪い。内面胴部下半-底部微い斜位のナデ後胴部横方向のナデ後口縁部ココナテ。胴部上半組織痕あり。外面胴部上半横方向のナデ後口縁部ココナテ、胴部中位-下半横方向の右へのケズリ。底部ケズリ後ナデ。	7.5YR7/4 鈍い橙 やや粗い 砂礫-細粒多、白組-粗粒少、透明細粒少、金雲母粗粒微	口縁部1/2、体-底部 完存 298
14 土師器 中形甕	口 復 12.8 高 16.9 底 4.0 最大 15.2	外面全体、内面口縁部赤彩。やや潰れた球脚で丁寧に整形された平底を持ち、口縁部はハの字に開き上端で直立気味になる。ハケはすべて9本/1cmのハケ。内面口縁部横方向のナデ後上半ココナテ。胴部上端ナデで指節圧痕残る。胴-底部周方向のナデで上半と下半に接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部縦方向のハケ後横方向のナデ後上半ココナテ。胴部上半右より斜位のハケ後横方向のナデ後胴部下半横方向の左へのケズリ。底部丁寧なケズリ。	2.5Y7/2 灰黄 やや微密 白・透明・黒細-微粒多、白組-粗粒微	口縁部1/2、胴部2/3、 底部完存 266-306-321-342-3 43-323-347-353-4 層下-5層
15 土師器 中形甕	口 復 13.2 高 15.6 底 5.0 胴 13.2	口縁部上端わずかに稜を持ち内面わずかに段あり。球脚で底部は丸みを持つびつぱら平底。内面口縁部横方向のナデ後上端ココナテ後縦方向のやや粗いミガキ、胴-底部周方向のナデで胴部上半組織痕あり。外面口縁部横方向のナデ後上端ココナテ後縦方向のやや粗いミガキ、胴部上半横方向のナデ後下半-底部横方向上体のケズリ後上半横方向のミガキ後下半横方向のミガキ-底部多方向のミガキ。	7.5Y7/4 鈍い橙 やや粗い 砂・赤陶粒-細粒少、白組微	口縁部1/3、胴-底部 完存 345-354-351-208
16 土師器 中形甕	口 復 12.7 高 14.7 底 3.7 最大 15.2	胴部扁平な球脚で底部はわずかに凹む平底。口縁部はハの字に開き、上端わずかに直立気味に角度を変える。内面口縁部縦方向のナデ後上端ココナテ後縦方向のミガキ。胴部上端微いナデで粘土のしじり目と指節圧痕残る。胴部上半-底部周方向のナデで上半及び下半に接合痕としての粘土の継ぎ目と組織痕あり。底部中央わずかに粘土塊付着。外面口縁部横方向のナデ後上端ココナテ後縦方向のミガキ。胴部中位横方向のナデ後上半横方向のミガキ-下半斜位のナデ後下端斜位の左下へのケズリ。底部周方向のケズリ。	7.5Y5/4 鈍い黄 やや粗い 砂・白組-細粒多、透明細粒少、金雲母・赤陶粒-粗粒微	口縁部1/2、胴部上半 1/3、胴部下半-底部 完存
17 土師器 高杯	口 復 22.7 高 残 6.6	坏手有椀で体部下端明瞭な段となりわずかに突出する。口縁端面凹みられる。表面摩滅のため調整不規則。内面坏部口縁部ココナテ、体-底部周方向のナデ後口縁-体部粗密不明の縦方向のミガキ。外面坏部口縁-体部粗密不明の縦方向のミガキ、底部斜位の9本/1cmのハケ後横方向のナデ後縦方向のミガキ。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 砂・赤陶粒-細粒少、白組-粗粒微	坏部11層-体部1/6、 底部2/3
18 土師器 高杯	高 残 8.5 脚 16.8	厚手な中空柱状の脚部で下半は緩やかに開く。成形・調整やや荒く、器壁は焼成前の補修により歪む部分あり。内面脚部上端縦方向の強いナデ、中位横方向のナデ後疎らな縦方向の深く細長いケズリ。下端ココナテ。外面脚部縦方向の上へのケズリ後下端ココナテ後脚部縦方向のやや粗いミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂・赤陶粒-細粒少、金雲母・白組-粗粒微	脚部一部欠 344-266-4層下-5層 やや微密

19	土師器 高坏	口 19.6 高 17.0 脚 15.2	大形で坏部有縁。中空柱状の脚部で下半屈曲し直線的に開く。内面坏部体部横方向の軽いケズリ後斜位のナデ後口縁部コナデ。底部横方向のナデ。脚部上端縦方向の強いナデ。中位成形のためのナデのみで組織顕著であり表面に稜も残る。脚部下コナデ。外面坏部体部横方向の丁寧なナデ後口縁部コナデ。底部斜位の強いナデ。脚部下半横方向の丁寧なナデ。下半コナデ。脚部上端径 4.2 cm。	2.5YR5.6 明赤褐 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒・透明細粒少、白粗・細粒 やや硬質	坏部口縁・体部 3/4、 底部・脚部上半完存、 脚部下 2/3 349
20	土師器 高坏	口 復 20.1 高 残 7.0	坏部有縁で全体に歪みあり成形・調整悪い。坏部底部と体部との接合部は接着補助のため 6~7 mm 間隙で斜位の比喩が施され、底部の口壁の上にて口縁部が接合される。脚部上端中央に径 1.3 cm の円筒状の粘土塊あり。内面坏部体部横方向のナデ後口縁部コナデ後口縁・体部斜位の幅広い粗いミガキ。底部ナデ後多方向の幅広いミガキ。脚部上端ナデ。外面坏部口縁・体部横方向のナデ後口縁部コナデ後口縁・体部斜位のナデで一部光沢あり。底部斜位のやや強いナデ。脚部上端横方向のナデ。脚部上端径 3.4 cm。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗・細粒多、白 細粒 硬質	坏部 1/2 127
21	土師器 高坏	高 残 8.8 脚 14.4	厚手。中空柱状の脚部で下手は緩やかに開く。成形・調整丁寧。内面脚部上半横方向の左へのケズリ後縦方向の深く細長いケズリ。下半コナデ。外面脚部下半コナデ後上半横方向の丁寧なナデ後下半斜位の緩らなミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、透 明細粒少、金雲母・白・赤褐 粗・細粒 硬質	脚部下端一部欠 127
22	土師器 高坏	高 残 6.9 脚 14.0	中空柱状の脚部で下半屈曲して開いた後内湾する。下半器壁薄い。調整のやや広く、外面ミガキも光沢あまりない。内面脚部上半粘土のシワあり。中位横方向の 6 本/1 cm のハケ後下半コナデ。外面脚部上端コナデ後脚部縦方向のケズリ後脚部縦方向のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、透 明細粒少、金雲母・白・赤褐 粗・細粒、砂・赤褐礫 硬質	脚部中位・下半一部欠 315・4 層下-5 層
23	土師器 高坏	口 復 19.6 高 14.6 脚 14.2	大形で坏部有縁。中空柱状の脚部で上半中央わずかに膨らみ下半屈曲して開き端部やや反り返る。内面坏部口縁部コナデ後口縁・体部やや強い斜位のミガキ。底部一方のミガキ。脚部上端斜位の強いナデ・下半コナデ後中位斜位の丁寧なナデ。外面坏部口縁部コナデ・体部横方向のナデ後口縁・体部縦方向のやや粗いミガキ。体部下端接合部のような広い溝状の凹みあり。脚部下端コナデ後底部・脚部縦方向のミガキ。脚部上端径 3.7 cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒・細粒 白粗・細粒 硬質	坏部口縁・体部 3/4、 底部一部欠、脚部はほぼ 完存 305
24	土師器 高坏	高 残 8.5 脚 13.1	中空柱状の脚部で下半屈曲して開き端部はほぼ水平になる。器壁薄く丁寧な作り。内面脚部上半長い棒状工具による横方向の左へのケズリ後上端強いナデ。下半コナデ後一部斜位のナデ。外面脚部下半コナデ後脚部縦方向のナデで中位に工具の当たりあり後上半横方向のナデ。脚部上端径 3.3 cm。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや粗い 砂粗・細粒少、白 ・赤褐粗・細粒、金雲母 硬質	脚部一部欠 297・317・155・355・4 層下-5 層
25	土師器 高坏	高 残 4.0 脚 復 16.0	二重口縁状に段を持って開く脚部。内外面とも表面剥落のため調整不明瞭。内面脚部中位横方向のナデで接合部としての粘土の継ぎ目あり。下半コナデ。外面脚部中位横方向のナデ。下半コナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 砂粗・細粒多、 赤褐粗・細粒少、白粗・細粒 やや軟質	脚部下 1/3 216・222・4 層下-5 層
26	土師器 壺	口 復 20.2 高 残 29.3 最大 復 28.2	口縁部二重口縁状で胴部はやや縦長。口縁部は丁寧に成形するが、胴部外面に組織の粗時である凹凸が著しく、調整は悪い。内面口縁部コナデ。胴部横方向の強いナデで胴部上端に粘土のめくれ。下半 2ヶ所に接合部としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁部コナデ。胴部下半斜位の 6 本/1 cm のハケ後胴部中位・下半横方向の左へのケズリ後口縁部下半・胴部全体縦方向の上へのケズリ。胴部下半粘土の継ぎ目あり。	7.5YR6/6 橙 粗い 赤褐礫・細粒多、砂・ 白粗・細粒少、透明細粒少 硬質	口縁部 1/4、胴部 1/3 351
27	土師器 壺	高 残 39.6 底 7.3 最大 復 34.4	大形の壺で胴部は縦長。底部突出し中央凹む。ハケはすべて 8 本/1 cm のハケ。内面胴部横方向のハケ後縦方向のナデ。胴部上端ナデで折頭は顕著に残り接合部としての粘土の継ぎ目あり。胴部下・底部斜位のナデ後底部上 14 cm 付近で接合し上半・中位横方向のナデ。胴部上半に粘土の継ぎ目。上半・下半に 4ヶ所の接合部としての粘土の継ぎ目あり。外面胴部下半横方向の丁寧なナデ後底部上 5 cm で接合し右上がりのハケ後斜位の強いナデ後底部上 9 cm で接合し胴部中位右下がりのハケ後底部上 23 cm で接合し右下がりのハケ後底部上 29 cm で接合し右下がりのハケ後左へのケズリ後胴部接合し胴部・胴部上端縦方向のナデ後胴部全体縦方向の一部光沢を持つナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂・赤褐礫・細粒 少、白粗・細粒少、透明細粒 硬質	胴部・胴部上半 1/2、 胴部下半・底部はほぼ完 存 322・352・A・16- 11.5 層
28	土師器 ミニチュア (鉢形)	口 5.1 高 2.5 底 4.0	コナデなし。口縁部歪みあるが底部は平坦で比較的丁寧に成形される。内外面とも折頭は顕著。平底。内面口縁・底部ナデ。外面口縁・底部ナデ。	10YR7/4 鈍い黄橙 粗い 砂粗・細粒多、透明粗 粒少、白・赤褐粗・細粒 硬質	完形 131

第4章 東地区の遺構と遺物

29	口 6.6 上縁高 5.3 ミニチュア (変形) 底 4.5 最大 7.2	口縁部コナデなし。二重口縁の形状を表したものが、底部丁寧に成形された平底で浅く凹む。内面口縁-底部斜位のナデで口縁下部に中縁に結構、胴部下半に接合痕としての粘土の継ぎ目あり。外面口縁-体部ナデで口縁下半に連続的な指掘り痕があり、口縁下部に接合痕としての粘土の継ぎ目、胴部上半に結構痕あり。底部丁寧にナデ。	10YR7/4 鈍い黄緑 やや緻密 砂・白・赤褐色 細粒少 硬質	変形 296
30	長 2.15 幅 2.07 厚 3.33 重 2.15	不整形で断面は板状。双孔とともに表面からの穿孔とみられ、裏面に穿孔時の剥離痕を残す。表裏面とも部分的に剥離面があり、表面左側及び側面右下はほとんど研磨されない。擦痕は表裏面ともほぼ同様の垂直方向、側面は器面に直交する方向。孔径左右とも0.16cm。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 36
31	長 4.09 幅 3.88 厚 0.42 重 9.91	不整形で断面は板状。節理面で割れた素材はぼそのまま種かな加工を加えて作ったものだろう。左上は欠損の可能性あり。双孔だが右側は貫通しない。左の孔は裏面からの穿孔とみられ、表面に穿孔時の剥離痕を残す。側面は剥離状態のまま厚化した部分が多く、一部研磨された器面に直交する方向の擦痕がある。表裏面にも僅かに剥離面がある。孔径右0.15cm、左0.14cm。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 12
32	長 2.53 幅 3.05 厚 0.32 重 3.56	筒形で断面は板状。単孔で裏面からの穿孔とみられ、表面に穿孔時の剥離痕を残す。表裏面とも良く研磨されるが裏面に大きな剥離面が残る。擦痕は表面は多方向の斜位、裏面は水平方向、側面は斜位。孔径0.14cm。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	筒形 271
33	長 2.12 幅 2.35 厚 0.47 重 4.22	厚みのあるD字形の不整形で断面は板状。側面のうち直線部分は剥離状態のままで、曲線の部分は研磨される。擦痕は表面は多方向の斜位、裏面は斜位、側面は器面に直交する方向。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 8
34	長 3.83 幅 1.58 厚 0.41 重 2.99	平面二等辺三角形で上部は台形。表面やや不明瞭なY字状の筋を持ち断面は三角形で、側面は薄い平断面となる。孔は表面からの穿孔で裏面に穿孔時の剥離痕がある。擦痕は表面が斜位、裏面が垂直方向、側面は器面に直交する方向であり、表裏面及び側面の一部に剥離面を残す。孔径0.15cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 33
35	長 3.97 幅 1.73 厚 0.56 重 5.37	平面二等辺三角形で上部は台形。表面Y字状の筋を持ち断面は三角形で、側面は薄い平断面となる。孔は上部中央に未貫通の径0.12cmの孔。左に裏面から穿孔の貫通孔があり、表面に穿孔時の剥離痕が残る。未貫通孔の周囲に筒形部の溝状の凹みあり。擦痕は裏面が垂直方向、表面と側面は多方向の斜位であり、表裏面及び側面のごく一部に剥離面を残す。孔径0.15cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 10
36	長 4.62 幅 2.13 厚 0.38 重 4.80	平面二等辺三角形で上部は台形。表面Y字状の筋を持ち断面は三角形で、側面は薄い平断面となる。孔は表面からの穿孔で裏面に穿孔時の剥離痕がある。擦痕は裏面が垂直方向、表面と側面は多方向の斜位であり、表裏面の一部に剥離面を残す。孔径0.15cm。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色粘板岩	変形 27
37	長 残5.05 幅 2.12 厚 0.54 重 残8.22	平面二等辺三角形で上部は幅広い台形。表面2本の筋を持ち断面は台形で、側面は平皿。孔は表面からの穿孔で裏面に穿孔時の剥離痕がある。擦痕は裏面と側面は斜位。表面は水平方向及び斜位で、各部分で角度を変えて研磨するため多数の稜ができていて、孔径0.15cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 274
38	長 6.02 幅 1.88 厚 0.68 重 11.05	平面二等辺三角形で上部は三角形。表面Y字状の筋を持ち断面は台高の三角形ないし台形で、側面は平皿。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕がある。擦痕は表裏面は垂直方向及び斜位、側面は右側縁が斜位、左側縁が器面に平行である。部分的に剥離面を残す。孔径0.17cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 32
39	長 4.26 幅 2.02 厚 0.47 重 6.60	平面扇形で上部は丸みを持つ。表裏面、側面の研磨により断面は板状で、側面はほぼ平皿。孔は表面からの穿孔で裏面に穿孔時の剥離痕がある。擦痕は表裏面、側面とも多方向の斜位であり、側縁付近の一部に剥離面を残す。孔径0.16cm。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色片岩	変形 29
40	長 2.75 幅 1.68 厚 0.37 重 2.83	平面二等辺三角形で上部は台形。表裏面の研磨により断面は板状で、側面は平皿な加工と剥離や節理のままとなる部分とがある。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕があり、穿孔し直したため径大きい。擦痕は表裏面、側面とも斜位であり、部分的に剥離面を残す。孔径0.13cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	変形 7
41	長 3.63 幅 1.63 厚 0.27 重 2.44	平面二等辺三角形で上部は剥離面そのままのため丸みを持つ。表裏面の研磨により断面は薄い板状で、側面は平皿な加工と剥離や節理のままとなる部分とがある。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕あり。擦痕は表裏面が斜位、側面は器面に平行であり、部分的に剥離面を残す。孔径0.16cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 頁岩	変形 328

42	石製模造品 胴形	長 2.87 幅 1.53 厚 0.42 重 2.93	平面二等辺三角形で上部は剥離面に規制されるため直線的。表裏面とも研磨されるため断面は薄い板状で、側面は平坦な加工面と剥離や部埋のままとなる部分がある。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕残り、孔径は裏側が大きい。磨痕は表裏面、側面とも斜位だが、裏面には磨裏面を多く残す。孔径0.16 cm。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色片岩	完形 327
43	石製模造品 胴形	長 3.68 幅 2.23 厚 0.28 重 3.38	平面二等辺三角形で上部は直線的。表裏面とも研磨されるため断面は薄い板状で、側面は平坦な加工面と剥離や部埋のままとなる部分がある。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕残り、孔径は裏側が大きい。磨痕は表裏面、側面とも斜位だが、裏面には磨裏面を多く残す。孔径0.15 cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	完形 5
44	石製模造品 胴形	長 4.82 幅 2.12 厚 0.73 重 9.00	平面不整な二等辺三角形。断面も不整で上部長方形状、下部三角形状。研磨は全くなく全体が剥離面であり、未製品とも考えられる。孔は裏面からの穿孔で表面に穿孔時の剥離痕残り。孔径0.15 cm。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 緑色片岩	完形 28
45	石製模造品 胴形	長 9.94 幅 3.32 厚 0.47 重 24.55	平面楕円形。断面は板状で下端厚く上辺ほど薄い。側面は平坦で無孔。未製品の可能性もある。磨痕は表裏面とも垂直方向、側面は斜位。部分的に剥離面を残す。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色片岩	完形 20
46	石製模造品 刀子形	長 5.58 幅 1.89 厚 0.71 重 11.53	平面形は縁部を直線とする半円形で刃部から基部へは段差なく繋がる。基部刃部側に剥離面が残るほかは全面研磨されるが、裏面縁部は剥離面に規制され斜位の研磨面となる。側面は平坦で先端から2.5 cm部分は刃部状に鋭角的であり、断面は基脚台形、刃部側三角形。孔は裏面からの穿孔とみられ、表面に穿孔時の剥離痕を残す。孔径0.16 cm。	5Y5/2 灰オリーブ 緻密 緑色片岩	完形 37
47	石製模造品 白玉	長 0.17 幅 0.47 重 0.70 孔 0.15	平面円形で断面形は板状。側面は平坦で平滑。中央1孔。磨痕は表裏面、側面とも確認できず。	10GY5/1 緑灰 緻密 緑色片岩	完形 19

第106表 VII区 SX385 出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口 径 16.0 高 残 11.5 最大 復 20.6	単口縁蓋のような形状で口縁端面面取りされる。内外面口縁-胴部上端赤彩で、外面はより下位まで赤彩の可能性あり。ハケはすべてり本/1 cmのハケ。内面口縁部ココナデ、胴部上端横方向のハケ後胴部上半-中位横方向のナデ後胴部上半-中位横方向のミガキ。外面口縁-胴部上端縦方向のハケ・胴部上半-中位横方向のハケ後口縁部ココナデ・胴部斜位のミガキ。	10YR7/4 鈍い黄橙 やや緻密 砂粗-細粒少、透 明細粒少、白・赤海粗-細粒 微 硬質	口縁-胴部中位 1/6 覆土
2 土師器 甕	口 径 16.7 高 残 12.3 最大 復 25.2	S字口縁。内面口縁部ココナデ、胴部中位縦方向のナデ後半横方向のナデ。外面口縁部ココナデ、胴部上半-中位横方向の左へのケズリ後胴部中位斜位の4本/1 cmのハケ後半上縦方向のやや粗い4本/1 cmのハケ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗-細粒多、白 ・赤海・透明・半透明粗-粗 粒少、金雲母粗-細粒微 やや硬質	口縁-胴部中位 1/4 1

第107表 VII区遺構外出土遺物観察表

番号 種類 器種	法量 (cm・g・ml)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石製品 勾玉	長 2.5 幅 1.5 厚 0.5 重 2.86	平面C字形で頭部はやや四角く扁平。全体に丁寧に研磨されている上に摩滅しているため、磨痕はわずかに残るのみ。孔は両面からの穿孔だが、主に表面から穿孔。孔径0.23 cm。	10Y5/2 オリーブ灰 緻密 滑石	完形 A t-25-10 No.1



## 第5章 自然科学分析

### 第1節 東Ⅶ区及び西C地区自然科学分析

(株) 火山灰考古学研究所

#### 1. あがた駅南遺跡東Ⅶ区及び西C地区の土層とテフラ

##### 1. はじめに

関東地方北部に位置する足利市域とその周辺には、赤城、浅間、榛名など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井、2011など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

足利市あがた駅南遺跡の東Ⅶ区及び西C地区の発掘調査では、沖積低地部の堆積物の良好な断面が作成されるとともに、縄文時代後晩期などの遺物が多く検出されたことから、地質調査を実施して土層の層序を確認するとともに、高純度で分析用試料を採取し、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定）を行って、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。

#### 2. 調査地点の土層層序

##### (1) 東Ⅶ区西壁

東Ⅶ区西壁では、下位より暗灰色泥層（層厚5cm以上）、灰色砂層（層厚7cm）、暗灰色泥層（層厚4cm）、灰色砂層（層厚7cm）、暗灰色泥層（層厚7cm）、黄灰色砂層（層厚3cm）の連続が認められる（図1）。それらを切って溝状遺構がつくられており、それは、下位より成層した褐色砂層（層厚19cm）、灰色シルトブロック混じり灰色砂層（層厚18cm）、桃色がかった黄色シルト層（層厚8cm）で埋没している。

その上位には、さらに下位より砂混じり灰色土（層厚9cm）、暗灰色土（層厚6cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、黄灰色砂質土（層厚7cm）、やや黄色がかった灰色土（層厚33cm）が形成されている。

##### (2) 西C地区トレンチ2

西C地区トレンチ2では、下位より灰色シルト層（層厚5cm以上、10層）、灰色シルト層（層厚12cm、9層）、やや黄色がかった灰色シルト層（層厚21cm、8層）、灰色シルト質砂層（層厚31cm、6b層）、灰色シルト質砂層（層厚43cm、6a層）、暗灰褐色泥層（層厚14cm、5層）、灰色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚9cm、4層）、暗灰褐色土（層厚21cm、1～3層攪乱土層）が認められる（図2）。

#### 3. テフラ検出分析

##### (1) 分析試料と分析方法

東Ⅶ区西壁において、層境にかからないように基本的に5cmごとに設定・採取された試料のうちの10試

料を対象として、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。分析方法は次のとおりである。

- 1) 分析対象の試料について、それぞれ 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃ で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。
- 5) テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。

## (2) 分析結果

東Ⅶ区西壁の試料 11 には、よく発泡した灰白色スポンジ状軽石型火山ガラスが少量含まれている。重鉱物(以下、不透明鉱物を除く)としては、斜方輝石、単斜輝石が認められる。それより上位では、試料 7～2 で白色のスポンジ状軽石型ガラスが検出 11～10 では火山ガラスが認められる。そのうち、試料 6 では、細粒の白色の軽石(最大径 3.4mm)が少しと、白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く認められる。この試料に含まれる重鉱物には、斜方輝石、角閃石、単斜輝石がある。

また、試料 1 には、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型火山ガラスが多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石と単斜輝石が認められる。

## 4. 屈折率測定(火山ガラス)

### (1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析によって特徴的な火山ガラスが検出された東Ⅶ区西壁の試料のうち、試料 6 と試料 1 の 2 試料に含まれる火山ガラスの屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度を向上させることにした。屈折率測定は、温度変化型屈折率測定法(壇原, 1993)による。屈折率対象は、いずれもテフラ検出分析後の篩別で得られた 1/8-1/16mm 区画粒子のうちの火山ガラスである。

### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表 2 に示す。この表には、足利市域とその周辺に降灰している後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。東Ⅶ区西壁の試料のうち、試料 6 に含まれる火山ガラス(30 粒子)の屈折率( $n$ )は、1.501-1.507 である。一方、試料 1 に含まれる火山ガラス(33 粒子)の屈折率( $n$ )は、1.524-532 である。

## 5. 考察

### (1) あがた駅南遺跡で認められるテフラ

ここでは、あがた駅南遺跡東Ⅶ区におけるテフラ分析で検出されたテフラ粒子の起源と指標テフラの降灰層準について、テフラの産状と火山ガラスの屈折率特性を含めたテフラ粒子の特徴から推定する。あがた駅南遺跡におけるこれまでのテフラ分析で検出された軽石や火山ガラスは、下位より次のようなテフラ粒子のタイプ区分が可能である。

タイプ a : 細かく発泡した白色の繊維束状軽石型ガラス。

タイプ b : 無色透明のバブル型ガラス。

タイプc：繊維束状軽石型ガラス。

タイプd：灰白色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプe：白～灰色の軽石やスポンジ状軽石型ガラス。軽石の瓶晶に、斜方輝石や角閃石が認められる。

タイプf：淡灰色、淡褐、褐色のスポンジ状軽石型ガラス。成層した粗粒火山灰層に多く多く含まれており、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石を多く含む。

タイプg：わずかに灰色がかかった白色のスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラス。斜方輝石や単斜輝石を伴う。

タイプaの火山ガラスは、火山ガラスの岩相から、約4.5万年前以前に赤城火山から噴出した赤城鹿沼軽石 (Ag-KP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011 など) に由来する可能性がある。また、タイプbのテフラは、その形態や色調から、始良 Tn 火山灰 (AT, 約2.8～3万年前, 町田・新井, 1976, 2011 など) と考えられる。さらに、タイプcのテフラは、岩相から、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003) などの浅間火山軽石流期 (荒牧, 1968) のテフラに由来すると思われる。

タイプdのテフラは、その岩相から、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010, 町田・新井, 2011 など) に由来すると思われる。そのすぐ上位の試料から検出されるタイプeのテフラは、岩相および火山ガラスの屈折率特性から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳波川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など)、あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) に由来すると思われる。本遺跡の位置とテフラの分布を考慮すると、前者に由来するテフラが多いと考えられる。

タイプfで特徴づけられるテフラ層は、層相、テフラ粒子の岩相、そして火山ガラスの屈折率特性から、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979) に同定できる。さらに、タイプgのテフラは、層位や岩相から、1783 (天明3) 年に浅間火山から噴出した浅間A軽石 (As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979) と考えられる。

今回の分析で検出された火山ガラスは、岩相から、タイプd (As-C)、タイプe (Hr-FA)、タイプf (As-B) に対応すると思われる。次にその層位について述べる。

## (2) 調査分析対象地点における指標テフラの層位

東VII区西壁の試料11には、火山ガラスの色調や形態、重鉱物の組み合わせから、As-Cが混在していると考えられる。試料6には、軽石や火山ガラスの岩相や火山ガラスの屈折率特性から、Hr-FAが比較的多く含まれている。その下位の試料8～10についても、角閃石が認められることから、Hr-FAが含まれている可能性が高い。

一方、上位の試料2～5にもHr-FAに由来する火山ガラスや角閃石などが含まれているが、試料1の粗粒火山灰層には、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。その屈折率特性および重鉱物の組み合わせから、このテフラ層はAs-Bに同定される。

したがって、As-Cの降灰層準は試料11以下にあり、Hr-FAの降灰層準は浸食などで失われている可能性がある。As-Cを含む暗灰色泥層の上位には、Hr-FAを二次的に含む砂層や暗灰色泥層が認められる。その上位に溝SD340がつくられている。この溝SD340の上位には、As-Bの粗粒火山灰層がある。Hr-FAとAs-Bの間



に層位があるこの溝状遺構を埋めた堆積物は、おそらく火山灰土に由来するために凝灰質で、818（弘仁9）年地震（能登ほか，1990，新里村教育委員会，1991 など）による斜面崩壊に由来する可能性が指摘される。

## 6. まとめ

足利市あがた駅南遺跡東Ⅶ区および西Ⅱ地区において地質調査を実施するとともに、東Ⅶ区においてテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定）を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C，3世紀後半）、榛名ニッ岳浅川テフラ（Hr-FA，6世紀初頭）に由来するテフラのほか、浅間Bテフラ（As-B，1108年）を認めることができた。東Ⅶ区の調査地点で断面が認められた溝SD340の埋積物は、層位や層相から、818（弘仁9）年地震（能登ほか，1990，新里村教育委員会，1991 など）による斜面崩壊に由来する水成堆積物の可能性がある。

## 文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。  
 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノジーの基礎的研究。第四紀研究，11，p.254-269。  
 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.53，p.41-52。  
 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」，東京大学出版会，p.138-149。  
 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地質研専報，no.14，p.1-45。  
 増原 徹（1993）温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」，p.149-158。  
 町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」。東京大学出版会，276p。  
 町田 洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」。東京大学出版会，336p。  
 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第2刷）」，東京大学出版会，336p。  
 新里村教育委員会（編）（1991）「資料集 赤城山麓の歴史地震—弘仁九年に発生した地震とその災害」，86p。  
 能登 健・内田憲治・早田 勉（1990）赤城山麓の歴史地震—弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析。信濃，42，p.755-772。  
 坂口 一（1986）榛名ニッ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「筑碁北原遺跡・今井神社古墳群・筑碁青柳遺跡」，p.103-119。  
 坂口 一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係—。群馬県埋蔵文化財調査事業部編「中居町一丁目遺跡3」，p.17-22。  
 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。  
 早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267。  
 早田 勉（2014）渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析。渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」，p.197-211。  
 早田 勉（2016）浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の層序と前橋泥流堆積物の層位。岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編「ナイフ形石器文化の発達期と変革期—浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」，p.6-14。

表1 あがた駅南遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	
西F地区北壁	2	**		pm(sp)	量	液状、液塊、棒、(灰)白	opx, cpx, am
	4	**		pm(sp)	量	液状、液塊、棒	opx, cpx
	6						opx, cpx
	8	*		pm(sp), bw	白、無色透明		opx, cpx, am
	9						opx, am, cpx
	10						opx, cpx
	11						opx, cpx
	12	*		pm(sp)	白、灰白		opx, am, cpx
	14						opx, cpx, am

\*\*\*:とくに多い, \*\*:多い, \*:中程度, \*:少ない, (\*):非常に少ない, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, b:縦縞束状, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, ()は量が少ないことを示す。

表2 屈折率測定結果

地点・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定数	
あがた駅南道路・西F地区北壁・試料4	1.525-1.531	30	本報告
あがた駅南道路・西F地区北壁・試料12	1.500-1.503	30	本報告
関東平野北西部の後期更新世後半以降の代表的指標テフラ			
浅間A(As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間B(As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
権名ニツ岳伊香保(Hr-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
権名ニツ岳渋川(Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.488-1.505		3)
浅間C(As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		1)
浅間D軽石(As-D, 約4,500年前 <sup>*)</sup> )	1.513-1.516		1)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)	1.508-1.513		1)
浅間麓岡軽石(As-Fo, 約8,200年前 <sup>*)</sup> )	1.508-1.516		2), 4)
浅間総社(As-Sj, 約1.0~1.1万年前 <sup>*)</sup> )	1.501-1.518		4)
浅間板鼻黄色(As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2(As-Ok2, 約2万年前)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1(As-Ok1, 約2万年前)	1.500-1.502		1)
浅間板鼻褐色(群)(As-BP Group, 約2.4~2.9万年前)	上部: 1.515-1.520		1)
	中部: 1.508-1.511		1)
	下部: 1.505-1.515		1)
給良Tn(AT, 約3万年前)	1.489-1.500		1)
権名箱田(Hr-HA, 約3万年前 <sup>*)</sup> )	未詳		2)

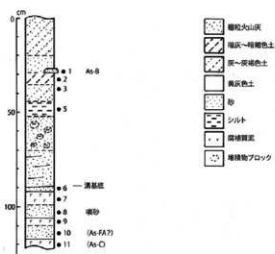


図1 東VII区西壁・南北セクションの土層柱状図

●: テフラ分析試料の層位  
数字: テフラ分析の試料番号。

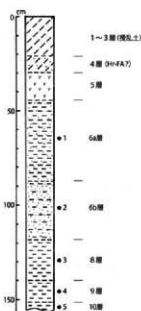


図2 西C地区トレンチ2の土層柱状図

●: 粒度分析試料の層位  
数字: 粒度分析の試料番号。

あがた駅南遺跡東VII区・西C地区テラフ分析写真図版



写真1 東VII区西壁・試料1 (As-B)

淡灰、淡褐、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。背景は1mmメッシュ。

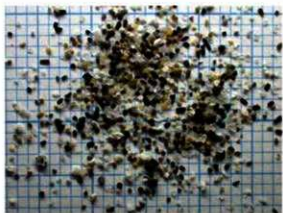


写真2 東VII区西壁・試料6 (Itr-FA混在)

珪晶に角閃石をもつ白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く認められる。背景は1mmメッシュ。

編註：発掘調査時点で委託した他の地点の分析については別添のCDに所収している。

## II. あがた駅南遺跡におけるプラント・オパール分析

## 1. はじめに

プラント・オパール（植物珪酸体）は、植物の細胞内に珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000, 2009）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

## 2. 分析試料

分析試料は、東VII区西壁・南北トレンチおよび西C地区トレンチ2から採取された計10点である。試料の採取層位を分析結果の柱状図に示す。

## 3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）。
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散。
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。

## 4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである（未分類等を除く）。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ以外のイネ科栽培植物（ムギ類、ヒエ、アワなど）は検出されなかった。

## 〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ジュズダマ属型

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 東Ⅶ区西壁・南北トレンチ

As-B直下層（試料1、試料2）からAs-C混在層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、As-B直下層（試料2）では密度が3,300個/g、その下層（試料3）では4,200個/g、溝基底の下層（試料4）では4,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下層（試料1）では密度が1,600個/gと比較的低い値で、As-C混在（試料5）では500個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 西C地区トレンチ2

6a層（試料1）から10層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) 植生と環境の推定

1) 東Ⅶ区西壁・南北トレンチ

イネ以外の分類群では、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、量的には少ないものの、おおむねヨシ属が優勢となっている。この結果から、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられる。

2) 西C地区トレンチ2

上記以外の分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。この結果から、各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤なところは見られるものの、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であった可能性が考えられる。

## 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、東VII区西壁・南北トレンチのAs-B直下層とその下層、溝基底の下層ではイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-C混在層でもイネが検出され、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

## 文献

杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—, 考古学と自然科学, no.19, p.69-84.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール), 辻 誠一郎編「考古学と植物学」, 同成社, p.189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, no.9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, no.17, p.73-85.

表1 あがた駅南遺跡におけるプラント・オパール分析結果 (おもな分類群)

検出密度 (単位: ×100個/g)		西C地区トレンチ2					東地区西壁・南北セクション				
分類群	学名	地点・試料					1 2 3 4 5				
イネ科	Gramineae										
イネ	<i>Oryza sativa</i>						16	33	42	49	5
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	4	5	6	5	5	11	11	20	5
キビ状型	Panicum type						5				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	5	4	5	6	5	5	11	16	15	26
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type	5	18	5	6	10	16	27	26	20	31
ジュズダマ属型	<i>Coix</i> type						5				
タケ亜科	Bambusoideae										
メダケ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	5	5			6	5	5	5		
ネザサ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	27	45	32	65	29	21	5	37	20	26
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	4		5	6	5		5	5	5	5
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	9		5	6	5	5	16	5	5	5
未分類等	Others	22	22	16	12	15	11	16	5	5	10
植物珪酸体総数	Total	71	107	80	112	72	95	137	147	142	126

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/n<sup>2</sup>・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>						0.47	0.96	1.24	1.44	0.15
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.35	0.28	0.34	0.37	0.31	0.33	0.69	0.66	1.23	0.33
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.67	0.66	0.67	0.67	0.66	0.67	0.14	0.20	0.18	0.33
メダケ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.66	0.66				0.67	0.66			
ネザサ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.13	0.21	0.15	0.31	0.14	0.10	0.03	0.18	0.09	0.13
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.03		0.04	0.04	0.04		0.04	0.04	0.04	0.04
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.03		0.02	0.02	0.01	0.02	0.05	0.02	0.01	0.02

タケ類の比率 (%)

メダケ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	33	23	15	27	28	35				
ネザサ節型	<i>Phioloblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	67	78	57	70	66	46	15	76	65	52
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	12		15	10	18		23	17	25	16
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	10		6	4	7	7	27	7	10	7
メダケ率	Medake ratio	100	78	79	86	93	75	50	76	65	77

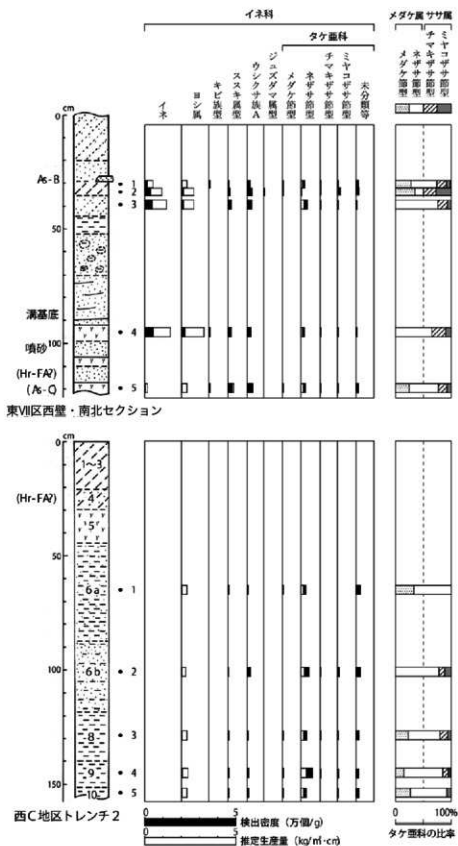


図1 あがた駅南遺跡のプラント・オパール分析結果

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



イネ



イネ



イネ (側面)



ヨシ属



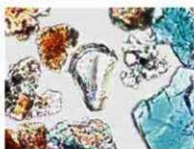
キビ族型



ススキ属型



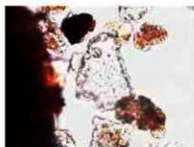
ウシクサ族A



メダケ節型



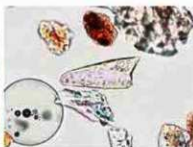
ネザサ節型



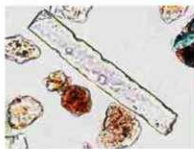
チマキザサ節型



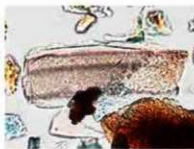
ミヤコザサ節型



表皮毛起源



棒状珪酸体



イネ科の茎部起源



海綿骨針

50 μm



### Ⅲ. あがた駅南遺跡における珪藻分析

#### 1. はじめに

珪藻は珪酸(SiO<sub>2</sub>)質の被殻を有する単細胞植物で、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている(小杉, 1988, 伊藤・堀口, 1991など)。

#### 2. 分析試料

分析の対象試料は、西C地区トレンチ2より採取された試料5点である。試料採取層位を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3. 分析方法

珪藻の抽出と同定を次の手順で実施した。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5~6回)。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥。
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製。
- 6) 検鏡、計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

#### 4. 分析結果

##### (1) 分類群

試料から検出された珪藻は、貧塩性種(淡水生種)28分類群である。破片の計数は、基本的に中心域を有するものを1個、また中心域がない種については両端部2個を1個と数えた。分析結果を表1に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図1に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)、陸生珪藻は小杉(1986)の記載による。また、環境指標種群は海水生種および汽水生種は小杉(1988)、淡水生種は安藤(1990)の記載にしたがった。主要な分類群を顕微鏡写真に示した。次に検出された分類群を記載する。

##### (貧塩性種)

*Achnanthes crenulata*, *Achnanthes inflata*, *Achnanthes minutissima*, *Amphora copulata*, *Aulacoseira* spp., *Cocconeis placentula*, *Cyclotella meneghiniana*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella sinuata*, *Diatoma mesodon*, *Diploneis interrupta*, *Diploneis finnica*, *Diploneis ovalis*, *Diploneis* spp., *Epithemia adnata*, *Eunotia minor*, *Eunotia praeurupta*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula*

*mutica*, *Orthoseira dendroteres*, *Pinnularia schroederii*, *Rhoicosphenia abbreviata*, *Synedra ulna*

## (2) 珪藻群集の特徴

試料5では密度が極めて低く、珪藻は破片を含め検出されなかった(図1)。試料4では、陸生珪藻が31%、真・好流水性種が27%、真・好止水性種が25%、流水不定性種が17%を占める。陸生珪藻では、*Navicula mutica*を主に *Hantzschia amphioxys*, *Achnanthes minutissima*が出現する。真・好流水性種では、沼沢湿地付着性種の *Cocconeis placentula*が比較的多く、好流水性種の *Gomphonema clevei*が伴われる。真・好止水性種では、*Achnanthes crenulata*が優占し、沼沢湿地付着性種の *Eunotia minor*が出現する。流水不定性種では、沼沢湿地付着性種の *Epithemia adnata*がやや多く、他に *Gomphonema* spp.が出現する。試料3では密度が極めて低く、珪藻はほとんど検出されないものの、好流水性種で沼沢湿地付着性種の *Cocconeis placentula*、陸生珪藻の *Navicula mutica*、好止水性種の *Achnanthes crenulata*がわずかに出現する。試料2では、ますます密度が低くなり、好止水性種の *Achnanthes crenulata*などがわずかに出現する。

試料1では珪藻は検出されない。参考のため花粉分析を実施したところ(表2)、いずれの試料でも密度が極めて低く、花粉は検出されないうきわめてわずかであった。また、未分解遺体片や炭化遺体片(微粒炭)は認められず、分解質遺体片がわずかに検出される。

## 5. 珪藻分析から推定される堆積環境

いずれの試料も密度が極めて低く、環境が不安定で珪藻が生育しにくく、流水による淘汰を受けて堆積しなかったものと考えられる。やや密度の高かった9層(試料4)では、比較的出现率の高い陸生珪藻の *Navicula mutica*、好止水性種の *Achnanthes crenulata*、好流水性種で沼沢湿地付着性種の *Cocconeis placentula*、流水不定性種で沼沢湿地付着性種の *Epithemia adnata*は好アルカリ性のため、河川に付随するアルカリ性水域であったと推定される。密度は低いが、陸生珪藻、真・好流水性種、真・好止水性種、流水不定性種が出現し、沼沢湿地付着性種も比較的多いことから、流水の影響を受ける水生植物が生育する沼沢地など湿った環境が推定される。花粉の検出密度も低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境が示唆される。以上のことから、河川に付随する水草の生育する沼沢地からその縁辺の湿地の環境が示唆される。

## 6. まとめ

あがた駅南遺跡西C地区トレンチ2で珪藻分析を実施した結果、9層(試料4)から珪藻が検出され、河川に付随する水草の生育する沼沢地からその縁辺の湿地の環境が示唆された。8層(試料3)、6b層(試料2)、6a層(試料1)では珪藻がきわめて少ないか低密度で、環境が不安定で流水の淘汰により珪藻がほとんど堆積しなかったとみられ、河川など流水の影響を受ける不安定な環境が推定された。

## 文献

- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental Research Center, 333p.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良水・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, no.6, p.23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, no.1, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.

表1 あがた駅南遺跡における土壌分析結果

分類群	西心地区トレンチ2				
	1	2	3	4	5
質量性種 (淡水性種)					
<i>Achnanthes crenulata</i>	7	7		17	1
<i>Achnanthes inflata</i>					2
<i>Achnanthes minutissima</i>					1
<i>Amphora copulata</i>					1
<i>Atlacueta</i> spp.	1				
<i>Cocconeis placenticola</i>	2	13		13	
<i>Cyclotella meneghiniana</i>					1
<i>Cymbella naviculiformis</i>					1
<i>Cymbella nitens</i>			1		
<i>Cymbella sinuata</i>					1
<i>Diatoma mesodon</i>					1
<i>Diploneis interrupta</i>		2			1
<i>Diploneis fusica</i>					1
<i>Diploneis ovalis</i>		1			1
<i>Diploneis</i> spp.		1			1
<i>Epithemia obtusa</i>		1			6
<i>Emotia minor</i>					3
<i>Emotia praeuruga</i>					5
<i>Gomphonema clevei</i>					7
<i>Gomphonema minusum</i>					1
<i>Gomphonema parvulum</i>					1
<i>Gomphonema</i> spp.	1				2
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1	1			7
<i>Nereisula murica</i>	2	12			18
<i>Orbassaria dendrostrax</i>					1
<i>Pinnularia schroederii</i>					1
<i>Rhizocaulopsis abbreviata</i>					1
<i>Synedra alba</i>					1
合計	0	18	43	89	0
未同定	0	4	1	6	0
検片	0	25	15	54	0
試料1 cm <sup>2</sup> 中の個体密度		4.4	8.8	1.9	
完形個体保存率 (%)		$\times 10^3 \times 10^3 \times 10^4$			63.8

表2 あがた駅南遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	西心地区トレンチ2				
		1	2	3	4	5
Arboreal pollen	和名					
	樹木花粉					
Alnus	ハンノキ属			1		
Betula	カバノ木属				1	
Nonarboreal pollen	草本花粉					
	ヨモギ属					1
Arboreal pollen	樹木花粉			1	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉					1
Total pollen	花粉総数	0	1	1	1	1
Utricularia pollen	米周葉花粉		1			
Pen spore	シダ菌類胞子	0	0	0	0	0
Retinanth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion residues	消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal - wood fragments	炭化植物遺体・炭化木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
	( $\times 10$ )					
炭化植物遺体(Charcoal・wood fragments)		4.2	7.7	12.1	33.3	3.3
水分解遺体片						
分解炭遺体片						
炭化遺体片(炭粒形)						

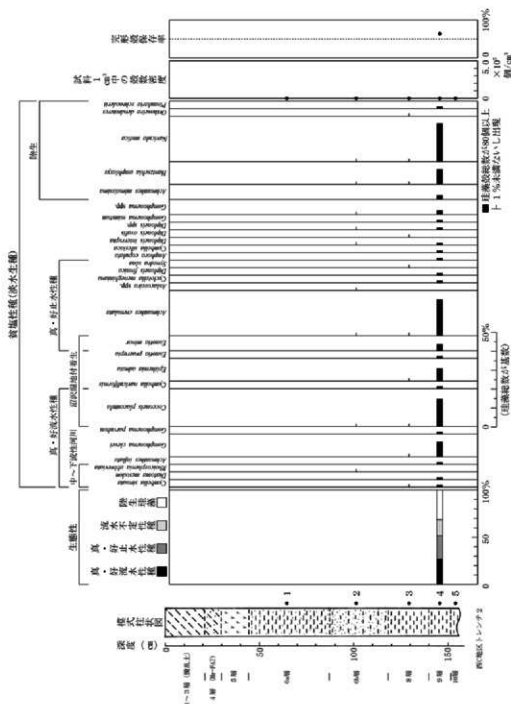
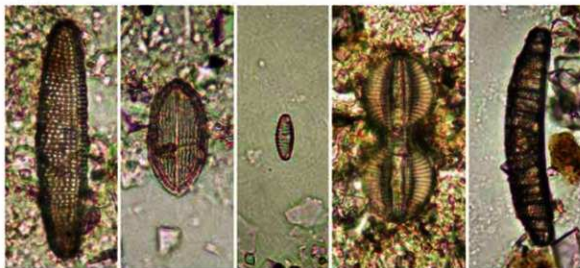


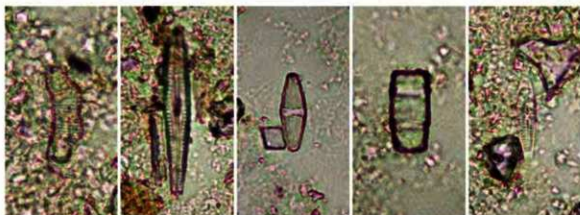
図1 あがた駅前遺跡における主要硅藻ダイアグラム

あがた駅南遺跡

・珪藻



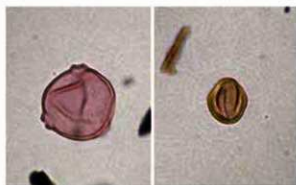
1 *Achnanthes crenulata* 2 *Cocconeis placentula* 3 *Cymbella simota* 4 *Diploneis interrupta* 5 *Epithemia adnata*



6 *Eunotia praerupta* 7 *Gomphonema clevei* 8 *Navicula mutica* 9 *Orthoseira dendroteres* 10 *Rhoticosphenia abbreviata*

— 10 μ m

・花粉



1 カバノキ属 2 ヨモギ属

— 10 μ m

## IV. あがた駅南遺跡西C地区の土壌（粒度）分析

## 1. 分析の目的

あがた駅南遺跡西C地区で採取した土壌試料の粒度組成上の特徴を明らかにするために、JIS A 1204（土木学会，2003，地盤工学会，2009）に準じて粒度分析を実施する。

## 2. 分析試料

分析対象試料は、西C地区トレンチ2で採取した5試料である。試料の層位を、テフラ分析報告の図2に示す。

## 3. 粒度分析の分析方法

## (1) 分析に使用する試験用具

分析に用いる器具は、試験用網ふるい（呼ぶ寸法：75  $\mu$  m, 106  $\mu$  m, 250  $\mu$  m, 425  $\mu$  m, 850  $\mu$  m, 2mm, 4.75 mm, 9.5 mm, 19mm, 26.5 mm, 37.5 mm, 53 mm, 75 mm）、分散装置、分散剤（ヘキサメタリン酸ナトリウムの飽和溶液）、はかり、メスシリンダー（容量1リットル）、ピーカ、時計、蒸留水、温度計である。

## (2) 試料の準備

最初に試料の最大寸法に応じて、分析に必要な量を準備する。次に試料をよく混合して質量を測定する。その後、2mm 篩で篩別を行って通過分と残留分に分ける。

## 1) 2mm 篩残留分に対する分析

2mm 篩上で水洗いを行った後に、篩残留分を110℃で乾燥して質量を測定する。その後、試験用網篩(4.75 mm, 9.5 mm, 19 mm, 26.5 mm, 37.5 mm, 53 mm, 75 mm)で篩別して、それぞれの残留試料の質量を測定する。

## 2) 2mm 篩通過分に対する沈降分析

- ・ 浮ひよりの検定値を確認する。
- ・ 2mm 篩でふるい、通過試料から少なくとも 65 g 以上を取りよく混合し、含水比を測定する。
- ・ ピーカーに試料を入れ、蒸留水を加え一様にかき混ぜて蒸留水に浸す。
- ・ 15 時間以上放置する。
- ・ ピーカー内の試料をすべて分散容器に移し、蒸留水を加えて、全量を約 700ml にする。

表1 粒度分析試料の基礎データ

土質	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5
含水比(%)	40.83	30.81	42.52	44.04	39.60
原位置潤滑密度(g/cm <sup>3</sup> )	1.63	1.61	1.71	1.67	1.76
原位置乾燥密度(g/cm <sup>3</sup> )	1.16	1.15	1.20	1.15	1.26
土粒子の密度(g/cm <sup>3</sup> )	2.72	2.73	2.75	2.75	2.66
塑性指数	24.1	16.0	23.3	19.1	15.9

- ・分散剤（ヘキサメタリム酸ナトリウムの飽和溶液）を 10ml 加える。
- ・内容物を分散装置で約 1 分間掻き、分散後内容物をメスシリンダーに移し蒸留水を加える後に、全体の容量を 1000ml にする。
- ・メスシリンダーを 1 分間十分に振とうした後静置する（この時点が測定開始時間）。
- ・静置後、1、2、5、15、30、60 分ごとに浮きよりの読みと温度測定する（少なくとも 1440 分以上の測定を実施）。

### 3) 75 $\mu$ m 篩残留分に対する篩分析

- ・沈降分析後、メスシリンダー内の内容物のすべてを 75  $\mu$  m 篩の上で水洗する。
- ・細粒分を十分に洗い流し、残留分を 100℃で乾燥する。
- ・乾燥した試料を試験用網篩（75  $\mu$  m、106  $\mu$  m、250  $\mu$  m、425  $\mu$  m、850  $\mu$  m）で篩う。
- ・各篩の残留分試料の質量を測定する。

### 4) 試験結果の整理

- ・2mm 篩以上の篩に残留した試料の通過質量百分率を求める。
  - ・2mm 篩を通過し、75  $\mu$  m 篩に残留した試料の通過質量百分率を求める。
  - ・沈降分析結果に対して、有効深さ L の計算、粒径の計算、通過質量百分率の計算を行う。
- 以上の結果から粒度組成を求めて、粒径加積曲線を描く。

### 5) 試験結果

5 試料に関する基礎的データを表 1 に示す。なお、試料の含水比は、39.60%（試料 5）～ 44.644%（試料 4）である。また、測定できた試料の原位置湿潤密度は、1.61g/cm<sup>3</sup>（試料 2）～ 1.76g/cm<sup>3</sup>（試料 5）である。さらに、測定できた試料の原位置乾燥密度は、1.15g/cm<sup>3</sup>（試料 2、試料 4）～ 1.26g/cm<sup>3</sup>（試料 5）である。土粒子の密度は 2.66 g/cm<sup>3</sup>（試料 5）～ 2.75g/cm<sup>3</sup>（試料 3、試料 4）で、塑性指数は 15.9（試料 5）～ 24.1（試料 1）である。

5 試料の粒度組成分析結果を表 2 に、また結果を円グラフにして図 1 に、さらに粒径加積曲線を図 2 に示す。礫分はいずれの試料でも認められなかった。砂分は 6.14（試料 4）～ 13.6%（試料 1）、細粒分は 86.40%（試料 1）～ 93.86%（試料 4）で、分析対象試料中では、試料 4 が細粒分に富み、試料 1 が砂分に富む傾向にある。いずれの堆積物も粘性土に分類される。

### 3. まとめ

あがた駅南跡地西 C 地区トレンチ 2 で採取した 5 試料の粒径加積曲線から粒度組成を求めた。5 試料はそれぞれ異なる粒径加積曲線および粒度組成を示している。分析の対象試料では礫分は認められなかったものの、とくに試料 4 が細粒分、また試料 1 が砂分に富む傾向にある。

### 文献

- 土木学会（編）（2003）「土質試験のてびき」。
- 地盤工学会（編）（2009）「地盤材料試験の方法と解説（第 1 刷）二分冊の 1」。

表 2 粒徑分析結果

試料 1		試料 2		試料 3		試料 4		試料 5	
粒徑(mm)	通過質量百分率(%)	粒徑(mm)	通過質量百分率(%)	粒徑(mm)	通過質量百分率(%)	粒徑(mm)	通過質量百分率(%)	粒徑(mm)	通過質量百分率(%)
53.0	100.00	53.0	100.00	53.0	100.00	53.0	100.00	53.0	100.00
27.5	100.00	27.5	100.00	27.5	100.00	27.5	100.00	27.5	100.00
28.5	100.00	28.5	100.00	28.5	100.00	28.5	100.00	28.5	100.00
18.0	100.00	18.0	100.00	18.0	100.00	18.0	100.00	18.0	100.00
8.5	100.00	8.5	100.00	8.5	100.00	8.5	100.00	8.5	100.00
4.8	100.00	4.8	100.00	4.8	100.00	4.8	100.00	4.8	100.00
2.0	100.00	2.0	100.00	2.0	100.00	2.0	100.00	2.0	100.00
0.900	99.99	0.900	99.99	0.900	99.99	0.900	99.99	0.900	99.99
0.425	95.94	0.425	98.84	0.425	99.82	0.425	96.98	0.425	98.88
0.250	89.95	0.250	99.64	0.250	99.84	0.250	99.98	0.250	98.90
0.106	82.02	0.106	82.25	0.106	95.80	0.106	96.67	0.106	91.80
0.075	66.40	0.075	66.32	0.075	92.42	0.075	93.86	0.075	88.56
0.047	61.84	0.058	55.15	0.058	58.43	0.048	52.89	0.044	55.62
0.025	53.05	0.042	46.34	0.042	47.84	0.035	43.98	0.032	44.70
0.020	44.52	0.027	37.98	0.027	38.96	0.023	33.63	0.021	33.53
0.014	32.39	0.016	27.69	0.016	26.84	0.014	24.15	0.013	22.25
0.010	21.51	0.012	21.88	0.012	21.89	0.009	16.97	0.009	17.19
0.007	26.25	0.008	18.35	0.008	18.19	0.007	15.52	0.007	14.61
0.004	15.44	0.004	13.45	0.004	12.87	0.004	10.35	0.004	10.32
0.002	13.72	0.002	9.19	0.002	6.82	0.002	6.90	0.002	6.89
0.00 mm	0.00	0.00 mm	0.048	0.00 mm	0.048	0.00 mm	0.045	0.00 mm	0.052
細粒分 %	86.40	細粒分 %	89.32	細粒分 %	82.42	細粒分 %	83.85	細粒分 %	83.96
砂分 %	12.00	砂分 %	10.68	砂分 %	7.58	砂分 %	6.14	砂分 %	11.94
總分 %	0.00	總分 %	0.00	總分 %	0.00	總分 %	0.00	總分 %	0.00
分類	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土	黏性土



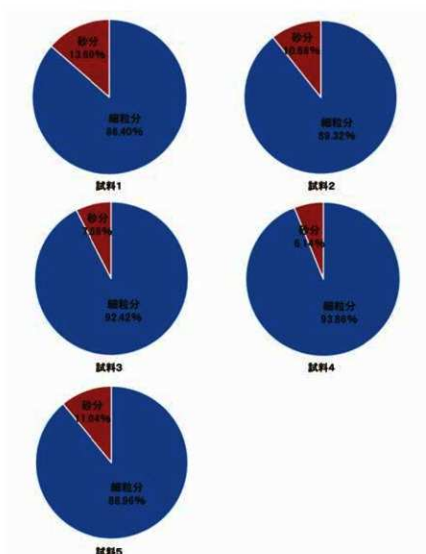


図1 粒度組成円グラフ

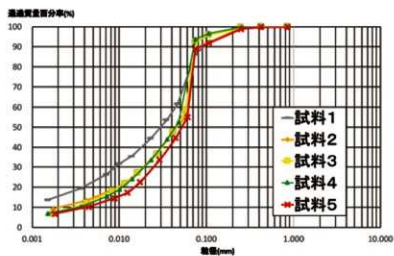


図2 粒径加積曲線

あがた駅南遺跡粒度分析写真図版



写真1 粒度分析試料（試料名は仮番号、  
0～⑧：試料1～5）



写真2 土粒子密度測定



写真3 篩別用分析篩

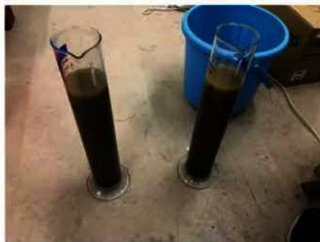


写真4 沈降分析（メスシリンダー使用）

## 第2節 岩石肉眼鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

栃木県足利市県町地区内に所在するあがた駅南遺跡は、縄文時代晩期、古墳時代および古代の集落址を中心とする遺跡である。

本分析調査では、遺跡から出土した縄文時代の剥片、磨石、打製石斧、磨製石斧などの石器および、古墳時代の石製模造品など計1027点を対象とし、石材の肉眼鑑定を行なった。本報告では岩石肉眼鑑定結果に基づき、周辺地質との比較から産地について検討を行なった。以下にその結果を報告する。

### 2. 試料

試料の詳細は結果とともに観察計測表中に記す。実測対象とされている試料が大半である。縄文時代の石器類についてはDVD所収の第29～35、42～45表に記し、古墳時代の石製品類については、観察表中に鑑定結果を示した。

### 3. 分析方法

2020年2月12日～2020年2月17日に当社研究所において、当社技師二名が野外用のルーペを用いて試料を観察し、構成鉱物や組織の特徴から肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。個々の石材のより正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、本分析調査では肉眼鑑定のみに留めるため、鑑定された岩石名は概査的なものであることに留意されたい。鑑定結果は公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターより提供された台帳に記入した。

### 4. 結果

鑑定結果は公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターより提供された台帳をもとに作成した第1分冊第29～35、42～45表及び第2分冊の観察表中に記す。合わせて地区別石質組成を本節表1に記入した。

深成岩類として、黒雲母花崗岩1点、半深成岩類として、黒雲母花崗斑岩2点、閃緑斑岩3点、火山岩類として、黒曜石7点、流紋岩6点、デイサイト11点、角閃石デイサイト9点、輝石デイサイト16点、安山岩8点、輝石安山岩207点、多孔質安山岩11点、多孔質輝石安山岩25点、石英含有輝石安山岩2点、無斑晶質安山岩1点、火山砕屑岩類として、軽石3点、デイサイト質凝灰岩16点、溶結凝灰岩4点、堆積岩類として、礫質砂岩1点、砂岩80点、泥質砂岩2点、砂質頁岩6点、頁岩167点、珪質頁岩4点、砂質泥岩1点、泥質チャート19点、チャート125点、変成岩類として塩基性マイロナイト1点、粘板岩26点、緑色粘板岩3点、ホルンフェルス127点、ホルンフェルス?1点、董青石ホルンフェルス9点、雲母片岩6点、黒雲母片岩9点、滑石片岩1点、緑色片岩52点、緑色片岩?1点、変質岩類として、変質流紋岩5点、変質凝灰岩6点、変トセライト1点、蛇紋岩7点、緑色岩19点、鉱物として、脈石英3点、石英2点、玉髄1点、滑石6点、碧玉2点、ヒスイ2点にそれぞれ鑑定された。

上記の鑑定結果によると、火山岩類の輝石安山岩、堆積岩類の砂岩、頁岩およびチャート、変成岩類のホルンフェルスが多く、各調査区に認められる傾向が確認される。

## 5. 考察

本遺跡から出土した石器・石製品となる主要な礫の供給源としては、渡良瀬川の上流域および鬼怒川流域の地質が想定される。

渡良瀬川は、上流域には足尾帯に属するジュラ紀堆積岩コンプレックスが分布している。それらを買入して白亜紀の沢入花崗岩が生じ、周囲の地質に接触変成作用を与えて、ホルンフェルスが生じている。また、渡良瀬川の太田堰敷から桐生市付近にかけて、新第三紀の凝灰岩類、砂岩、泥岩類が分布している。また、第四紀火山の赤城火山の火山噴出物も渡良瀬川においては分布が認められる。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境にある帝釈山地を源流として広大な流域面積を示すため、各種の地質が分布する。鬼怒川上流域の基盤は足尾帯に属するジュラ紀堆積岩コンプレックスであり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。ジュラ紀堆積岩コンプレックスを構成する砂岩、頁岩、チャートなどは後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれて、接触変成作用を被っている。

鬼怒川支流の大谷川上流においては花崗岩類と同時代の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩・デイサイト質火砕岩に覆われている。鬼怒川本流域においては、足尾帯および花崗岩類はさらに前期中新世～鮮新世のデイサイト・流紋岩質火砕岩によって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト・流紋岩質火砕岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト・流紋岩岩脈が各所に貫入している。第四紀火山も流域に数多く存在し、男体火山、女峰赤碓火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩・デイサイト溶岩・火砕岩などを構成岩石とする火山が点在している。

このような地質背景に基づき、以下では出土石材の産地について検討し、在地性石材、搬入石材の順に述べる。なお、地質に関する記述は、日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)、須藤ほか(1991)および山元ほか(2000)を参考としている。

黒雲母花崗岩、黒雲母花崗斑岩、閃緑斑岩といった深成岩・半深成岩類に属する花崗岩質岩は、渡良瀬川源流部から上流部にかけて分布する後期白亜紀～古第三紀の花崗岩体に由来する石材である。

火山岩類の流紋岩類、デイサイト類、安山岩類は、大部分が未変質で新鮮なものが多く、第四紀火山に由来するものが主体を占めていると考えられる。このように火山ガラスが確認され、未変質の岩相を示す火山岩類については石質備考欄に「第四紀」と記入した。渡良瀬川流域には第四紀火山の赤城火山の噴出物が分布しており、遺跡周辺の段丘礫や河床礫として含まれていると考えられる。なお、渡良瀬川上流域には新第三紀の安山岩類の分布があり、これに由来する石材も含まれていると考えられる。搬入品と解される黒曜石の栃木県下における産地としては、高原山がよく知られているが、肉眼による産地の判定は困難であるため、成分分析等を併用した産地の検討が必要である。

火山砕屑岩類の軽石は、第四紀火山の火山活動に伴い噴出したもので、赤城火山が給源と考えられる。デイサイト質凝灰岩は細粒でシルト質の岩相を示し、後期中新世以降の地質に由来すると考えられるものである。溶結凝灰岩は堅硬緻密質で古い時代の地質である奥日光流紋岩類に由来するもので、鬼怒川下流域において採取されやすい。

堆積岩類は、足尾帯に由来する砂岩、頁岩、チャートといった硬質岩が主体となっている。ただし、砂岩および頁岩の一部には、新第三紀以降の地質に起源すると考えられる軟質岩も認められている。珪質頁岩は、頁岩と同様に新第三系および足尾帯に由来するものが大部分を占めていると考えられるが、珪質頁岩の薄片

の一部には、珪酸分が高く良質で褐色を呈するものも認められている。これらは山形県米沢市に産する珪質頁岩と相似した岩相を示しており、このような地域からの搬入品の可能性が疑われる。

変質岩の変質流紋岩、変質凝灰岩の岩相は、火山岩～火山砕屑岩類の珪化岩の様相を呈し、中新統の地質に伴う石材と推定される。変ドレライトは、半深成岩類のドレライトを原岩とする変質岩であるが、ドレライトは各地の地質に岩脈として分布するため産地の推定は難しい。蛇紋岩および緑色岩は、三波川変成帯に沿って分布するもので、埼玉県長瀨地域などの産地から搬入されたと考えられる。

変成岩類の粘板岩、ホルンフェルス類は、足尾山地に分布する古期堆積岩類および花崗岩類の周縁部に分布する石材で、在地性石材と考えられる。雲母片岩、緑色片岩、滑石片岩は、遺跡周辺および渡良瀬川流域、鬼怒川流域には分布が認められない石材で、大半は荒川上流域の長瀨地域に分布する三波川変成帯を構成する片岩類に由来すると考えられる。なお、緑色片岩は白色の点紋が発達する三波川変成帯に由来するものと、点紋が目立たない岩相のタイプに分けられるが、後者は茨城県日立地域に分布する日立変成岩類を構成する岩石の可能性が疑われる。塩基性マイロナイトおよび緑色粘板岩は、1点のみ鑑定されている。上述した日立変成岩類の構成岩のひとつと考えられる。

鉱物の石英、脈石英は、各種の地質に細脈として産出する石英である。鬼怒川由来の礫からも容易に採取できるため、在地性の礫が利用されたものと考えられる。玉髓は、微小な石英の網目状集合体である。玉髓の近隣の産地としては、茨城県久慈郡大子町～常陸大宮市の北富田地域などが知られており、このような地域からの持ち込まれた可能性も考えられるが、玉髓は一般に流紋岩などの酸性火山岩に細脈や孔隙充填物として産出することが多いため、流紋岩類が少なからず分布する鬼怒川流域に由来する可能性も考慮しておく必要がある。碧玉は、隠微晶質な石英の集合で、塊状不透明のもので、暗緑色～緑暗色のものが一般的である。玉髓と同様の産地が推定され、鬼怒川流域において採取されたものとみられる。滑石は、蛇紋岩に伴って産出するもので、上述した蛇紋岩と同様、長瀨地域より移入されたものとみられる。ヒスイは、新潟県糸魚川～青海地域に産出する鉱物である。国内における産地は限定されており、搬入品とみなされる。

#### 文献

- 日本の地質「関東地方」編集委員会（1986）日本の地質3「関東地方」、共立出版、p.355。  
 須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒澤正夫・広島俊男（1991）20万分の1地質図幅「宇都宮」、地質調査所。  
 山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久（2000）20万分の1地質図幅「日光」、地質調査所。



図版1 石材(1)



1. A ア1.Va~V層 第101図2 閃緑斑岩



2. B S-12.No.49 第162図10 輝石安山岩(第四紀)



3. A ア1.No.256 第103図5 溶結凝灰岩



4. 34 C Eイ24-14 第443図1 岩版 デイサイト質凝灰岩



5. 3B Eウ12-6.VIII層 第169図13 砂岩



6. 121 C Eイ25-1, No.103 第427図8 石錐 珪質頁岩

図版2 石材(2)



7. 第2分冊第71図081-7 石製品 管玉 頁岩



8. B区 Eウ7-17, No.192 第436図2 石剣類 頁岩



9. A2 ウ2, SX1 第89図3 石製品 綠色粘板岩



10. B区 Eウ7-18, No.70 第436図7 石錘 綠色片岩



11. B Eウ11-20, No.3 第175図4 磨製石斧 綠色片岩?



12. 55 B区 Eウ11-20, No.101 第432図6 勾玉 碧玉



## 第3節 住居跡の白色物質の分析

米田恭子・竹原弘展・野口真利江（パレオ・ラボ）

## 1. はじめに

あがた駅南遺跡の縄文時代晩期中葉の住居跡の炉から、灰とみられる白色物が採取された。ここでは白色物の成因を調べる目的で、蛍光X線分析、植物珪酸体分析、珪藻分析を行った。以下に、分析結果を記す。

## 2. 試料と方法

試料は、西区の住居跡（S106）の炉内から採取された白色物（分析No.1）である。

表1 分析試料の詳細

分析No.	種類	調査区	遺構		ラベル情報	遺構の時期
			住居跡(S106)	炉内		
1	白色物	西	住居跡(S106)	炉内	西 C S106 中央 灰サンプル	縄文時代晩期中葉

## 〔蛍光X線分析〕

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器（VorteX）である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム（Na）〜ウラン（U）であるが、ナトリウムやマグネシウム（Mg）といった軽元素は、分析装置の性質上、検出感度が悪い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV（一次フィルタ無し・Cl測定用）・50kV（一次フィルタPb測定用・Cd測定用）の4条件で、測定時間は各条件500〜1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。測定位置を図版1に示す。

## 〔植物珪酸体分析〕

試料を実体顕微鏡で観察したところ、植物と認められる形状の破片は観察されなかった。そこで、白色物をスパーテルで少量採取して、グリセリンで封入したプレパラートを作製した後、生物顕微鏡（300〜600倍）で観察し、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体の観察を行った。

## 〔珪藻分析〕

試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 処理重量約0.05gを取り出し、秤量した後、マイクロチューブに移して水を加え、爪楊枝で軽く攪拌し、数時間〜一昼夜程度放置する。(2) 十分に泥化したら、容器から懸濁液を適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下400〜1000倍で観察し、プレパラートの面積の2/3以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を図版3に載せた。

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種（?）として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種（?）として、汽水種は汽水不定・不明種（?）として、淡水種は広布種（W）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔外洋指標種群（A）〕：塩分濃度が  $35 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

〔内湾指標種群（B）〕：塩分濃度が  $26 \sim 35 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の内湾水中を浮遊生活する種群である。

〔海水藻場指標種群（C1）〕：塩分濃度が  $12 \sim 35 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

〔海水砂質干潟指標種群（D1）〕：塩分濃度が  $26 \sim 35 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナシ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

〔海水泥質干潟指標種群（E1）〕：塩分濃度が  $12 \sim 30 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナシ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

〔汽水藻場指標種群（C2）〕：塩分濃度が  $4 \sim 12 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

〔汽水砂質干潟指標種群（D2）〕：塩分濃度が  $5 \sim 26 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

〔汽水泥質干潟指標種群（E2）〕：塩分濃度が  $2 \sim 12 \text{ g} \cdot \text{L}^{-1}$  の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

〔上流性河川指標種群（J）〕：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

〔中～下流性河川指標種群（K）〕：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

〔最下流性河川指標種群（L）〕：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

〔湖沼浮遊生指標種群（M）〕：水深が約  $1.5 \text{ m}$  以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

〔湖沼沼沢湿地指標種群（N）〕：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優質な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼沢湿地付着生指標種群（O）〕：水深  $1 \text{ m}$  内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優質な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群（P）〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原のように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群（Q）〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

〔陸生珪藻 A 群（Qa）〕：耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群 (Qb)] : A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

### 3. 観察の結果

[蛍光X線分析]

表2に蛍光X線半定量分析結果を示す。

表2 半定量分析結果 (mass%)

Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	Cl	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	CuO	ZnO	SrO	ZrO2
1.71	0.87	4.28	82.14	3.94	0.02	0.34	4.18	0.21	0.08	2.10	0.01	0.02	0.07	0.01

ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) が80%以上と、非常に多く検出された。ほかには、ナトリウム (Na<sub>2</sub>O)、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、塩素 (Cl)、カリウム (K<sub>2</sub>O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO<sub>2</sub>)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、銅 (CuO)、亜鉛 (ZnO)、ストロンチウム (SrO)、ジルコニウム (ZrO<sub>2</sub>) が検出された。

[植物珪酸体分析]

観察された植物珪酸体を図版2に示した。

棒状型植物珪酸体がわずかに観察された。棒状型珪酸体については、すべてのイネ科の植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため (近藤, 2010)、形状からの同定は困難である。

[珪藻分析]

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が2分類群2属2種であった (表3)。これらの珪藻化石は、淡水域における2環境指標種群 (K, O) に分類された (表3)。珪藻化石の産出数が少ないため、珪藻分布図は作成していない。

表3 堆積物中の珪藻化石産出表  
(種群は、千葉・澤井 (2014) による)

No.	分類群	種群	1
1	<i>Cymbella turgidula</i>	K	2
2	<i>Navicula elginensis</i>	O	2
3	Unknown	?	
	中～下流性河川	K	2
	沼沢湿地付着生	O	2
	その他不明種	?	
	海水種		
	海～汽水種		
	汽水種		
	淡水種		4
	合計		4
	完形殻の出現率 (%)		25.0
	堆積物 1g 中の殻数 (個)		6.4E+03

以下では、試料における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

堆積物 1g 中の珪藻殻数は  $6.4 \times 10^3$  個、完形殻の出現率は 25.0% である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群 (K) と、沼沢湿地付着生指標種群 (O) が2個体ずつ検出された。

珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明である。

### 4. 考察

縄文時代晩期中葉の住居跡の市内から採取された白色物について蛍光X線分析を行った結果、白色物は、ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) を主としており、ほかにカルシウム (CaO) やリン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が約 4～5% とやや多く検出された。このような化学組成を示す物質としては、例えば、植物灰の可能性が考えられる。

一方、植物珪酸体分析では、イネ科の植物に認められる棒状型植物珪酸体が、わずかに検出されたのみであったため、白色物は、主にイネ科の植物の葉や茎に由来した灰ではないとみられた。

また、珪藻分析では、産出数が少ないため、珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明であるが、中～下流性河川や沼沢湿地由来の成分（土壌や植物など）が含まれていた可能性がある。

以上の分析結果から、炉内から採取された白色物は、何らかの植物の灰に由来する可能性があるが、母植物は、主にイネ科の植物ではないと考えられる。

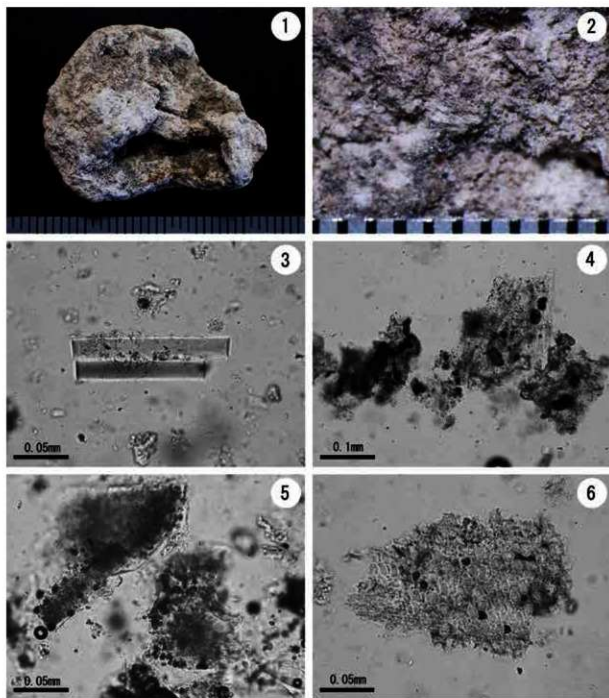
引用・参考文献

- 日本の地質「関東地方」編集委員会（1986）日本の地質3「関東地方」，共立出版，p.335。  
 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，42，73-88。  
 千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新，Diatom，30，7-30。  
 近藤謙三（2010）プラント・オパール図譜，167p，北海道大学出版会。  
 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，27，1-20。  
 中井 泉編（2005）蛍光X線分析の実験，242p，朝倉書店。



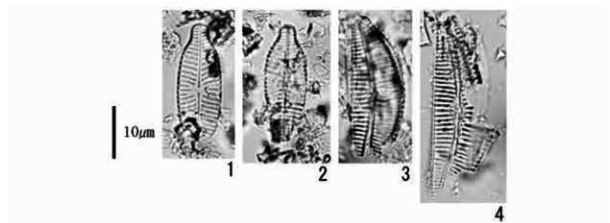
図版1 あがた駅南遺跡の白色物の蛍光X線分析

1. 分析試料と採取位置



図版2 あがた駅南遺跡の白色物の植物珪酸体

1. 分析試料、2. 分析試料の拡大写真、3. 棒状型植物珪酸体、4～6. プレパラートの状況



図版3 あがた駅南遺跡の白色物の珪藻化石

1. *Navicula elginensis* 2. *Navicula elginensis* 3. *Cymbella turgidula* 4. *Cymbella turgidula*

## 第4節 出土遺物に付着する赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展・中村賢太郎（ハレオ・ラボ）

## 1. はじめに

足利市泉町地内に所在するあがた駅南遺跡より出土した縄文時代の遺物に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

## 2. 試料と方法

分析対象は、遺物12点に付着する赤色顔料である（表1、図版1-1a～1-4a、2-5a～2-8a、3-9a～

表1 赤色顔料分析試料一覧

分析No.	器種	番号	時代	備考
1	磨石	第384図4	縄文時代後期～晩期	
2	石皿類	第183図9	縄文時代後期～晩期	
3	石皿類	第184図4	縄文時代後期～晩期	
4	磨石	第271図3	縄文時代後期～晩期	
5	土製品	第417図14	縄文時代後期～晩期	小形壺口縁
6	ミニチュア土器	第419図8	縄文時代後期～晩期	内部に顔料
7	土偶	第393図6	縄文時代晩期	中空、耳飾部分に赤彩
8	耳飾り	第404図13	縄文時代後期～晩期	
9	耳飾り	第406図5	縄文時代後期～晩期	
10	耳飾り	第407図2	縄文時代後期～晩期	
11	耳飾り	第406図7	縄文時代後期～晩期	
12	耳飾り	第407図6	縄文時代後期～晩期	

3-12a)。分析No.1、No.4が

磨石、分析No.2、No.3が石

皿類、分析No.5が土製品、

分析No.6がミニチュア土器、

分析No.7が土偶、分析No.8

～No.12が耳飾りで、土偶

が縄文時代晩期、それ以外

は縄文時代後期から晩期の

遺物とみられている。赤色

部周辺にセロハンテープを

貼り付けて剥がし、接着し

た試料から赤色箇所を探し、

分析した。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 $\mu$ mまたは10 $\mu$ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、0.36～1.00mA（自動設定による）、ビーム径100 $\mu$ m、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

## 3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1、2に示す。アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、水銀（Hg）といった元素が検出された。

分析No.2、No.3、No.5、No.10～No.12からは、水銀（Hg）と硫黄（S）が検出された。

分析No.1、No.4、No.6～No.9からは、水銀（Hg）は検出されず、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）等が主に検出された。

また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版 1-1b ~ 1-4b、2-5b ~ 2-8b、3-9b ~ 3-12b に示す。分析 No.1、No.7、No.9、No.12 の試料で、赤色パイプ状の粒子が観察された。

#### 4. 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 1 μm のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田，1997）、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料のうち、分析 No.2、No.3、No.5、No.10 ~ No.12 の6点からは水銀と硫黄が明瞭に検出され、水銀朱の利用が判明した。

残りの6点（分析 No.1、No.4、No.6 ~ No.9）は、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されており、赤い発色は鉄によるものと推定される。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。さらに、うち3点（分析 No.1、No.7、No.9）では赤色パイプ状粒子が観察され、いわゆるパイプ状ベンガラの利用が確認された。一方、分析 No.8 は、鉄の含有量がそれほど多くなく、鉄化合物以外の不純物を多く含んでいるといえる。色調が褐色がかっており、赤みはそれほど強くない。

なお、分析 No.12 は水銀（Hg）と硫黄（S）が検出された一方で、鉄（Fe）の含有量もやや多く、生物顕微鏡観察では赤色パイプ状粒子が観察された。水銀朱とパイプ状ベンガラの併用が確認された。

表2に分析結果一覧を示す。

表2 赤色顔料分析結果

分析 No.	採取対象遺物	顔料種類
1	磨石	ベンガラ（パイプ状）
2	石皿類	水銀朱
3	石皿類	水銀朱
4	磨石	ベンガラ（非パイプ状）
5	土製品	水銀朱
6	ミニチュア土器	ベンガラ（非パイプ状）
7	土偶	ベンガラ（パイプ状）
8	耳飾り	ベンガラ（非パイプ状、鉄少なく赤み弱い）
9	耳飾り	ベンガラ（パイプ状）
10	耳飾り	水銀朱
11	耳飾り	水銀朱
12	耳飾り	水銀朱およびベンガラ（パイプ状）

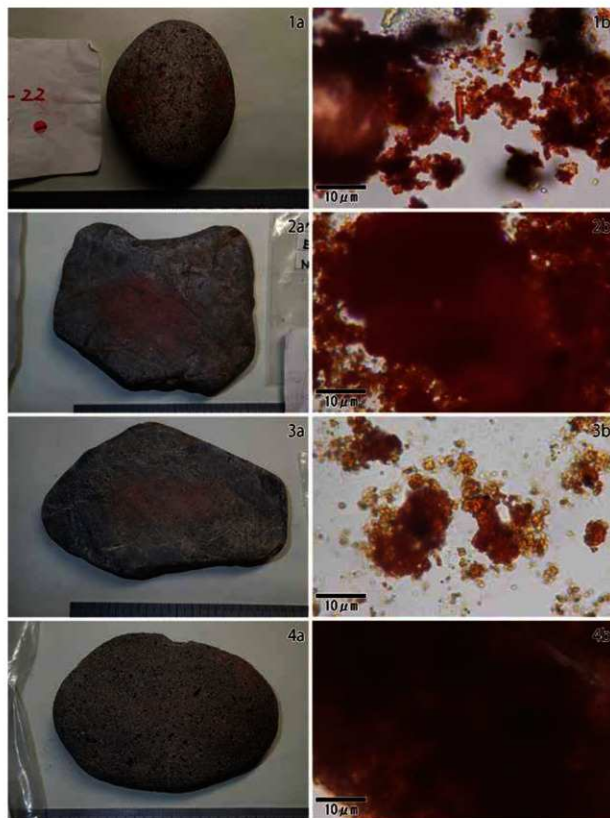
#### 引用文献

- 成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ—赤彩土器—。考古学ジャーナル、438、10-14。ニューサイエンス社。  
 成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料。正倉院紀要、26、13-61。宮内庁正倉院事務所。  
 岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、38-39。





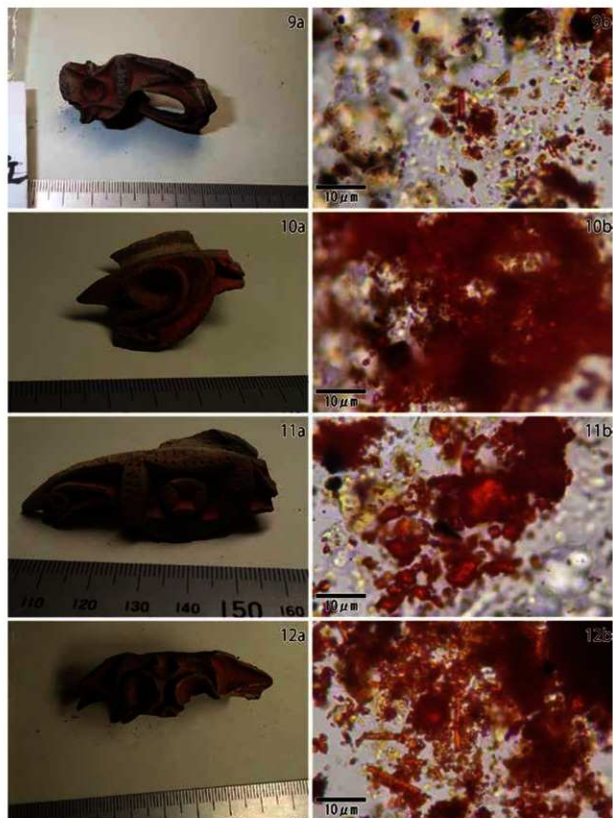




図版1 分析対象遺物写真 (a) と赤色顔料の生物顕微鏡写真 (b) (1) (右上数字は分析No.)



図版2 分析対象遺物写真 (a) と赤色顔料の生物顕微鏡写真 (b) (2) (右上数字は分析No.)



図版3 分析対象遺物写真 (a) と赤色顔料の生物顕微鏡写真 (b) (3) (右上数字は分析No.)

## 第5節 出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

## 1. はじめに

栃木県足利市のあがた駅南遺跡から出土した木材の樹種同定を行なった。

## 2. 試料と方法

試料は、縄文時代後晩期の遺構や包含層から出土した炭化材7点、古墳時代の竪穴住居跡から出土した炭化材10点、古墳時代前期の掘立柱建物跡から出土した生材3点、近世の遺構から出土した生材1点の、計21点である。

生材の樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柘目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柘目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

## 3. 結果

同定の結果、広葉樹のサクラ属、ムクノキ、クワ属、クリ、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節）の5分類群がみられた。クリが最も多く5点で、サクラ属とシオジ節が4点、クワ属が2点、ムクノキが1点であった。また、劣化が激しかった、などの理由で、針葉樹までの同定となった試料が1点、広葉樹までの同定となった試料が4点あった。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

表1 あがた駅南遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種	時期 器種	縄文時代 後晩期	古墳時代 前期～中期	古墳時代前期	近世	合計
		炭化材	炭化材	木柱痕	杭	
針葉樹					1	1
サクラ属			4			4
ムクノキ	1					1
クワ属				2		2
クリ		5				5
トネリコ属シオジ節			4			4
広葉樹	1	2		1		4
	合計	7	10	3	1	21

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真を示す。

## (1) 針葉樹 Coniferous wood

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～8列である。分野壁孔は溶解して確認ができなかった。

## (2) サクラ属（広義） Prunus s.l.バラ科 図版1 1a-1c(分析No.14)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅と

なる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、ここで記すサクラ属（広義）とはモモ属とバクチノキ属を除く広義のサクラ属を指す。

(3) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. アサ科 図版1 2a-2c(分析 No.7)

中型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、4列以上の帯状となる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～4列となる。

ムクノキは温帯の日当たりのよい適潤地を好み、海に近い所に比較的多い落葉高木の広葉樹である。材の強さは中庸であるが、韌性があり割製しにくい。

(4) クワ属 *Morus* クワ科 図版1 3a-3c(分析 No.10)

年輪のはじめに大型の道管が並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜め方向に断続的に複合する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～6列となる。

クワ属にはヤマグワやマダマクワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し、日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(5) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1 4a-4c(分析 No.1)、5a(分析 No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(6) トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinuster* モクセイ科 図版1 6a-6c(分析 No.20)

年輪の始めに大型で丸い道管が3～4列並び、晩材部では小型の道管が単独ないし2個複合する環孔材である。軸方向柔組織は周囲型である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列である。

トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがあり、現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する、落葉高木の広葉樹である。材の性質はどちらも中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等も容易である。

(7) 広葉樹 Broadleaf wood

道管は確認できたが、材組織の劣化や試料が微細であったため、横断面の形状が確認できなかった試料を広葉樹とした。

#### 4. 考察

縄文時代後晩期の炭化材は、ムクノキ、クリ、広葉樹で、クリが最も多くみられた。材の用途については不明である。クリは堅硬な材であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。なお、クリは、青森平野周辺の縄文時代前期から後期の遺跡では、人間によるクリ林の管理が行われていたと想定されている（Noshiro and Suzuki, 2006）。あがた駅南遺跡周辺では、クリ林の管理が行われていたかは不明であるが、遺跡周辺にクリが多く生育していた可能性も考えられる。

古墳時代中期の竪穴住居跡 SI321 ではサクラ属、シオジ節、広葉樹が、前期の SI045 ではシオジ節がみられた。試料は焼けた建築材や、燃料材の残渣などの可能性が考えられる。サクラ属とシオジ節は堅硬な部類

の樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。栃木県内の古墳時代頃の竪穴住居跡出土炭化材では、クワ属やクリ、クマギ節などがみられるが、サクラ属およびシオジ節は確認されておらず（伊東・山田編，2012）、異なる傾向を示した。

古墳時代前期の掘立柱建物跡の木柱痕はクワ属と広葉樹であった。クワ属は堅硬な樹種で、現在でも建築材として利用される樹種である（伊東ほか，2011）。なお栃木県内では、古墳時代～近世の各時期を通して柱でクワ属が検出された例は、確認されていない（伊東・山田編，2012）。

近世の杭は針葉樹であった。針葉樹は一般的に真っすぐで加工性が良い（伊東ほか，2011）。

## 引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

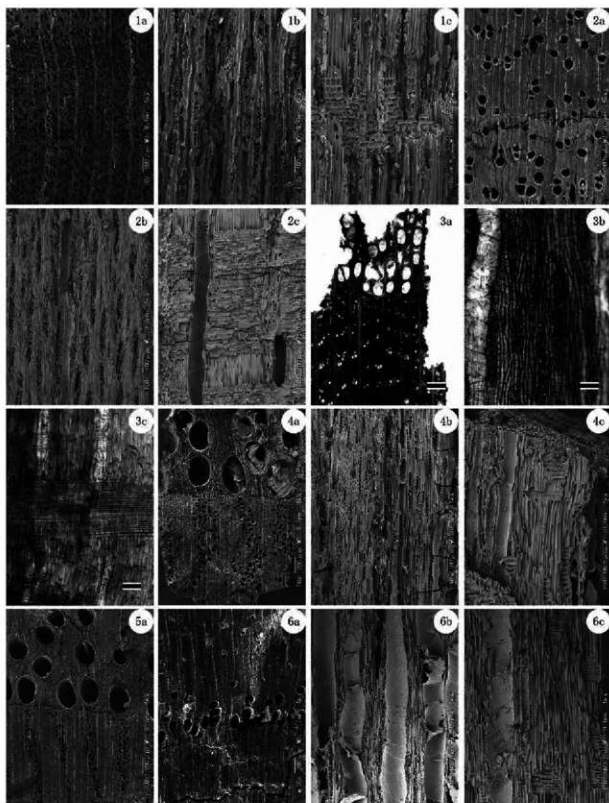
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。

Noshiro, S., Suzuki, M. (2006) Utilization of forest resources in the early Jomon period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture, northern Japan. 辻 誠一郎・能城修一編「植生史研究 特別第2号」：83-100，日本植生史学会。

付表1 あがた駅南遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

分析No.	調査区	グリッド	層位	遺構	番号	種類	器種	時期	樹種	木取り	備考
1	西区 B区	Eウ-7-21	X03 層	-	試料 No.91	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	クリ	-	
2	西区 B区	Eウ-11-14	Ⅷ層	-	試料 No.99	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	クリ	-	
3	西区 B区	Eウ-11-15	8層	-	試料 No.100	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	クリ	-	
4	西区 C区	-	-	S143b	試料 No.128	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	クリ	-	
5	西区 C区	-	-	S143b	試料 No.129	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	クリ	-	
6	西区 C区	Eイ-24-15	-	-	試料 No.131	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	広葉樹	-	129
7	西区 I区	Eイ-18-17	-	-	試料 No.140	炭化材	炭化材	縄文時代後晩期	ムクノキ	-	81
8	東区 Ⅲ区	-	-	SX133	No.9	生材	杭	近世	針葉樹	芯持丸木	
9	東区 Ⅶ区	-	-	SK367	-	生材	木柱痕	古墳時代前期	クワ属	-	
10	東区 Ⅶ区	-	-	SK373	-	生材	木柱痕	古墳時代前期	クワ属	芯持丸木	
11	東区 Ⅶ区	-	-	SK380	-	生材	木柱痕	古墳時代前期	広葉樹	-	
12	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.1	炭化材	炭化材	古墳時代中期	広葉樹	-	
13	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.2	炭化材	炭化材	古墳時代中期	広葉樹	-	
14	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.3	炭化材	炭化材	古墳時代中期	サクラ属	-	
15	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.4	炭化材	炭化材	古墳時代中期	トネリコ属 シオジ節	-	
16	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.5	炭化材	炭化材	古墳時代中期	サクラ属	-	
17	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.6	炭化材	炭化材	古墳時代中期	サクラ属	-	
18	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.7	炭化材	炭化材	古墳時代中期	トネリコ属 シオジ節	-	
19	東区 Ⅶ区	-	-	SI321	No.8	炭化材	炭化材	古墳時代中期	サクラ属	-	
20	東区 Ⅱ区	-	-	SI045	No.1	炭化材	炭化材	古墳時代前期	トネリコ属 シオジ節	-	
21	東区 Ⅱ区	-	-	SI045	No.2	炭化材	炭化材	古墳時代前期	トネリコ属 シオジ節	-	





図版1 あがた駅南遺跡出土木材の光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. サクラ属(分析No. 14)、2a-2c. ムクノキ(分析No. 7)、3a-3c. クワ属(分析No. 10)、4a-4c. クリ(分析No. 1)、  
5a. クリ(分析No. 2)、6a-6c. トネリコ属シオジ節(分析No. 20)

a: 横断面(スケール=250  $\mu\text{m}$ )、b: 接線断面(スケール=100  $\mu\text{m}$ )、c: 放射断面(スケール=100  $\mu\text{m}$ )

## 第6節 種実遺体

バンドリ・スダルジャン、中村賢太郎（バレオ・ラボ）

## 1. はじめに

あがた駅南遺跡で出土した種実遺体について同定結果を報告する。

## 2. 試料と方法

試料は、A地区の1点、A3地区の1点、B地区の3点、L地区の2点、計7点の炭化種実である。実体顕微鏡で観察し、現生標本との比較により同定した。

## 3. 結果

表1に結果を示す。数量の()は破片数を意味する。

表1 種実同定結果一覧

番号	地区	遺物番号	分類群	部位	数量	重量(g)
70	A	イ3.6層	コナラ属コナラ節	炭化子葉	(3)	1.06
71	A3	ワ0.5層中	コナラ属コナラ節	炭化子葉	(4)	0.35
72	B	Eウ6-25.6-7層	コナラ属クヌギ節	炭化子葉	1	1.50
73	B	Eウ11-5	コナラ属コナラ節	炭化子葉	(2)	0.24
74	B	Eウ12-11.7層	クリ	炭化子葉	(1)	0.39
75	L	Fア10-14	オニグルミ	炭化核	(7)	0.32
76	L	Fア10-14	モモ	炭化核	(18)	1.06

## 第7節 あがた駅南遺跡で出土した動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

あがた駅南遺跡で出土した動物遺体について同定結果を報告する。

### 2. 試料と方法

試料は、西区の遺構や包含層から出土した動物遺体（主に獣骨）である。動物遺体の時期は、主に縄文時代後期～晩期と考えられている。とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターで選別されたテン箱4箱分、約6,400gの動物遺体を対象とした。パレオ・ラボで同定に有効な破片263点を選別し、現生標本との比較により部位と分類群を同定した。また、観察所見を表に記した。

### 3. 結果と考察

表1に結果を示す。哺乳類では、イノシシ (*Sus scrofa*) とシカ (*Cervus nippon*) が多く見られ、食肉目 (Carnivora) とウシ (*Bos taurus*) が1点ずつ同定された。魚類では、エイ・サメ類 (板鰐亜綱: *Elasmobranchii*) が同定された。また、鳥綱 (*Aves*) の四肢骨が複数点同定された。

ほぼ全ての哺乳類破片は白くなるまで強く焼けており、取縮による変形や亀裂が見られるものも多く、多くの骨は軟質部が付着した状態で強い熱を被ったと考えられる。

イノシシは、頭部 (上顎骨、下顎骨、歯)、胸部 (環椎、肩甲骨)、前肢 (上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨)、後肢 (脛骨、踵骨、距骨) や前後肢の先端にあたる指骨 (基節骨、中節骨、末節骨) など、ほぼ全身の部位が見られた。一部の骨は骨端が癒合しておらず、幼獣が含まれている点分かる。

シカは、頭部 (角、角座骨、歯)、胸部 (軸椎)、前肢 (上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨、中手骨)、後肢 (大腿骨、脛骨、足根骨、中足骨) や前後肢の先端にあたる指骨 (基節骨、中節骨、末節骨) など、ほぼ全身の部位が見られた。一部の骨は骨端が癒合しておらず、幼獣が含まれている点分かる。シカ角のうち、1点は落角 (春に抜け落ちた角) であり、狩猟以外に、落ちている角を拾う行動もうかがわれる。

ウシは、白歯が1点 (破片多数) 見られたが、おそらくは古墳時代以降であろう。

食肉目は、イヌ、タヌキ、キツネなどの可能性がある。

鳥類も食料として利用されたと考えられる。

魚類では、エイ・サメ類の椎骨が1点見られ、海岸部から持ち込まれたと考えられる。

表1

番号	分類	部位	左右	部号・契割	数値	備考	地区	遺物番号	重量 (g)
4	イノシシ	鼻骨	右	前位部	1	前後肢不明, 焼	A	5X3	10.22
5	イノシシ/シカ	中手骨/中足骨	不明	遠位端部	1	焼	A	5X4	1.22
11	シカ	角	不明	端片	1	焼	A	7'0No.04	6.97
13	シカ	中骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	A	7'1No.12	1.71
16	シカ	角	不明	端片	1	焼	A	7'1No.23	0.48
19	シカ	角	不明	端片	1	焼	A	7'1No.361	7.41
21	シカ	脛骨	右	遠位端	1	焼	A	7'1No.363	8.86
24	哺乳類	歯骨	—	端片	1	焼	A	7'1No.520	4.04
27	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	A	7'2No.5	1.40
32	シカ	角	不明	端片	1	焼	A	7'2No.10	12.25
39	イノシシ	上腕骨/下腕骨	不明	端片	1	焼	A	7'2.15 併	279.88
39	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	遠位端未端片, 焼	A	7'2.15 併	279.88
39	シカ	中手骨	不明	骨節部	1	焼	A	7'2.15 併	279.88
39	シカ	中足骨	不明	骨節部	1	遠位端未端片, 焼	A	7'2.15 併	279.88
68	シカ	角	不明	加工	1	骨角部(焼肉), 焼	A	A16	3.92
71	シカ	中手骨/中足骨	不明	骨節部	1	焼	A	7'2.15 併	25.78
72	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	A	7'2.16 併	66.51
72	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	A	7'2.16 併	66.51
72	シカ	角	不明	端片	1	焼	A	7'2.16 併	66.51
77	イノシシ	中骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	A	7'2.18 併	7.76
83	シカ	中骨	不明	前位部	1	前後肢不明, 焼	A	7'3.1 併	2.80
90	シカ	下腕	不明	端片	1	焼	A	7'3.6.4 併	0.47
96	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	A2	7'3.11	14.09
102	イノシシ	下骨	不明	端部	1	焼	A2	7'3.2.2	3.09
110	シカ	角	不明	端片	1	焼	A2	7'3.5.10 併	82.10
111	シカ	角	不明	端片	1	焼	A2	7'3.5.6 併	38.96
114	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	A2	7'3.5.10 併	40.36
114	シカ	中手骨/中足骨	不明	遠位端部	1	焼	A2	7'3.5.10 併	40.36
115	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端部	1	焼	A2	7'3.5.10 併	10.70
124	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	A2	7'3.6.5.6 併	19.78
124	シカ	中骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	A2	7'3.6.5.6 併	19.78
124	シカ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	A2	7'3.6.5.6 併	19.78
129	イノシシ	下腕	不明	端片	2	A3	7'3.9.54	164.33	
129	イノシシ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	A3	7'3.13.4 併	73.33
129	シカ	角	不明	端片	1	焼	A3	7'3.9.54	164.33
130	シカ	角	不明	端片	1	焼	A3	7'3.9.54 併	46.22
140	イノシシ	下骨	左	関節	1	焼	A3	7'2.52	9.39
144	シカ	下骨	右	関節	1	焼	A3	7'2.16.4	5.91
145	シカ	角	不明	端片	1	焼	A3	7'3.16.5	2.69
149	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	A3	7'3.5.10 併	157.26
149	シカ	下腕	不明	端片	1	焼	A3	7'3.5.10 併	157.26
152	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	A3	7'3.15.10 併	136.37
159	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	A3	7'3.2.5 併	56.96
170	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	B	7'9.1No.5	9.18
170	シカ	下腕	不明	端片	1	焼	B	515.No.6	9.18
175	シカ	太腿骨	左	遠位端	1	焼	B	7'9.24.16.No.3	14.31
176	イノシシ	上腕骨	左	遠位端部	1	焼	B	7'9.24.16.No.5	8.88
179	イノシシ	下腕	不明	端片	1	焼	B	7'9.25.6 併	4.63
192	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	B	7'9.17.10.10 併	49.93
195	イノシシ	中骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	B	7'9.2.18.10 併	11.11
202	イノシシ	上腕骨/下腕骨	左	遠位端	1	焼	B	7'9.23.10 併	14.72
202	イノシシ	手骨/足骨	不明	完存	1	焼	B	7'9.23.10 併	14.72
204	イノシシ	鼻	不明	端片	1	焼	B	7'9.11.4.8 併	8.81
205	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	B	7'9.11.4.8 併	4.81
216	イノシシ	下腕	不明	端片	1	焼	B	7'9.11.13.8 併	7.67
217	シカ	下腕	不明	端片	1	焼	B	7'9.11.13.9 併	1.18
220	イノシシ	手骨/足骨	不明	完存	1	焼	B	7'9.11.14.9 併	23.14
220	シカ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	B	7'9.11.14.9 併	23.14
220	哺乳類	骨	不明	端片	1	焼	B	7'9.11.14.9 併	23.14
224	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	遠位端未端片, 焼	B	7'9.11.15.9 併	10.53
227	シカ	脛骨	右	遠位端	1	焼	B	7'9.11.19.8 併	9.61
238	シカ	中手骨	右	前位部	1	焼	C	5D102.併.7.24.18	10.41
243	シカ	角	不明	端片	1	焼	C	5D108	166.39
246	イノシシ	下骨	不明	端片	1	焼	C	5D109	114.33
248	シカ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	C	5118	7.43
254	イノシシ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	C	5142	3.54
257	イノシシ	下骨	左	遠位端	1	遠位端未端片, 焼	C	5143.併.7.24.17.5 併	37.07
258	イノシシ	骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	C	5143.併.7.24.17.18.8 併	85.40
258	イノシシ	中骨	不明	前位部	1	前後肢不明, 焼	C	5143.併.7.24.17.18.8 併	85.40
258	シカ	角	不明	端片	1	焼	C	5143.併.7.24.17.18.8 併	85.40
259	鳥類	四肢骨	不明	骨節部	1	焼	C	5143.併.7.24.23.6 併	39.50
259	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	C	5143.併.7.24.23.6 併	39.50
259	イノシシ	手骨/足骨	不明	完存	1	焼	C	5143.併.7.24.23.6 併	39.50
260	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	C	5143	65.95
260	イノシシ	鼻骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	C	5143	65.95
260	ヒツ・サメ類	骨	—	完存	1	焼	C	5143	65.95
266	イノシシ	脛骨	不明	1/2 残	1	併.27.1.上肢合	C	5147.a+b+c	15.61
267	イノシシ	鼻骨	不明	遠位端	1	前後肢不明, 焼	C	5147	24.24
267	シカ	中骨	不明	完存	1	前後肢不明, 焼	C	5147.b	24.54
271	イノシシ	脛骨	不明	1/2 残	1	併.266と統合	C	5147	136.59
271	イノシシ	第2中手骨	右	完存	1	焼	C	5147	136.59
271	イノシシ	第3中手骨	右	完存	1	焼	C	5147	136.59
271	イノシシ	第4中手骨	右	完存	1	焼	C	5147	136.59
271	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	遠位端未端片, 焼	C	5147	136.59
271	イノシシ	鼻骨	不明	前位部	1	前後肢不明, 焼	C	5147	136.59
281	シカ	角	不明	端片	1	焼	C	7'24.11.No.8	8.32
282	シカ	中手骨	右	遠位端	1	焼	C	7'24.11.No.41	9.02

## 第5章 自然科学分新

284	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	C	Eイ24.1826.103	4.78
307	シカ	鹿	不明	鏡片	1	鏡	C	Fイ24.11.5	26.37
307	シカ	鹿	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.11.5	26.37
310	シカ	羆	右	宍倉	1	鏡	C	Fイ24.11	34.12
310	シカ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.11	34.12
310	シカ	羆	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.11	34.12
310	シカ	羆	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.11	34.12
314	イノシシ	中皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.13.5	38.03
319	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.14.5	8.35
320	イノシシ	下顎首	左	隈部	1	鏡	C	Eイ24.15.5	198.03
322	イノシシ	下顎首	左右	溝合部	2	鏡	C	Eイ24.15.5	189.84
323	シカ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.16.5	79.85
323	シカ	羆	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.16.5	79.85
325	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	C	Eイ24.17.6	152.02
327	イノシシ	手取首/羆	不明	宍倉	1	鏡	C	Fイ24.17・22.6	19.11
328	イノシシ	大首	左	隈部	1	鏡	C	Eイ24.18.5	127.18
328	哺乳類	手取首/羆	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.18.5	127.18
330	イノシシ	手取首	右	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.18.6	143.02
330	イノシシ	本皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	C	Eイ24.18.6	143.02
331	シカ	大首	左	隈部	1	鏡	C	Eイ24.19.5	19.80
333	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.21.9	1.41
335	シカ	羆	右	宍倉	1	遠位鏡と鏡片、鏡	C	Eイ24.23.6	31.86
338	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.22.6	45.02
340	哺乳類	手取首/羆	不明	宍倉	1	鏡	C	Eイ24.23.6	82.06
341	白熊	大首	右	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.23.6・8	24.86
341	白熊	肩取首	右	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.23.6・8	24.86
341	哺乳類	肩取首	不明	遠位鏡	1	鏡	C	Eイ24.23.6	24.86
350	哺乳類	羆	不明	宍倉	1	鏡	C	Eイ25.11.5	26.05
358	イノシシ	下顎首	左右	溝合部	1	イ・マ、鏡	D	Fイ3.3	52.11
400	イノシシ	中皮首	不明	ほば宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ3.9	59.66
400	イノシシ	手取首/中皮首	不明	宍倉	2	鏡	KL	Fイ3.9	59.66
401	哺乳類	手取首	不明	宍倉	2	鏡	KL	SI 衣袋コーナー	46.16
402	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	SI	59.75
408	イノシシ	大首	右	隈部	1	鏡	KL	512	25.17
408	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	KL	512	25.17
422	イノシシ	下顎首	右	隈部	1	鏡	KL	Fイ2.24.5	132.75
422	イノシシ	頭蓋	不明	ほば宍倉	1	鏡、3日鏡片	KL	Fイ2.24.5	132.75
422	イノシシ	本皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ2.24.5	132.75
424	イノシシ	大首	右	遠位鏡	1	遠位鏡と鏡片、鏡	KL	Fイ2.25	54.77
424	イノシシ	中皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ2.25	54.77
425	イノシシ	大首	宍倉	宍倉	1	鏡	KL	Fイ7.10.3	131.10
425	イノシシ	第4中子首	右	宍倉	1	鏡	KL	Fイ7.10.3	131.10
425	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.3	131.10
425	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.3	131.10
426	鹿	大首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.3	142.91
426	イノシシ	大首	右	隈部	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
426	イノシシ	本皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
426	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
426	シカ	下顎首	右	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
426	シカ	羆	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
426	哺乳類	羆	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	142.91
427	イノシシ	下顎首	左右	溝合部	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	30.16
427	イノシシ	下顎首	右	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	30.16
427	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.4	30.16
428	イノシシ	下顎首	右	隈部	1	鏡	KL	Fイ7.10.5	73.05
428	イノシシ	羆	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.5	73.05
429	イノシシ	第3中子首	左	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.8	94.05
429	イノシシ	羆	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.8	94.05
429	イノシシ	中皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.8	94.05
429	シカ	頭蓋	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.8	94.05
429	シカ	中子首	不明	背骨鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.8	94.05
430	イノシシ	下顎首	左	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	イノシシ	下顎首	右	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	イノシシ	下顎首	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	2	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	イノシシ	中皮首	不明	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	角	不明	加工	1	背骨鏡、鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	角	不明	遠位鏡	1	遠位鏡と鏡片、鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	頭蓋	左	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	中皮首	不明	背骨鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
430	シカ	羆	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ7.10.9	207.99
431	イノシシ	頭蓋	右	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	146.52
431	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.9	146.52
432	シカ	頭蓋	右	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.10	13.05
434	イノシシ	下顎首	右	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.13.5	11.38
436	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.14	20.00
436	哺乳類	大首	不明	遠位鏡	1	鏡	KL	Fイ7.10.14	20.00
439	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ7.10.14	17.90
443	シカ	中子首	左	宍倉	1	前後視不明、鏡	KL	Fイ1.12・13・14・18.5	61.67
444	イノシシ	肩中首	左	鏡片	1	鏡	KL	Fイ1.17.5	82.00
445	哺乳類	頭首	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ1.17	44.75
445	シカ	角	不明	鏡片	2	鏡	KL	Fイ1.17	44.75
448	シカ	角	不明	鏡片	1	鏡	KL	Fイ1.22.1	22.21
448	シカ	中子首	不明	背骨鏡片	1	鏡	KL	Fイ1.22.5	22.21
455	シカ	羆	不明	遠位鏡	1	前後視不明、鏡	KL	中皮、5.6	17.12
472	イノシシ	下顎首	右	鏡片	1	鏡	KL/F	T形、内蔵、2001	92.05
472	イノシシ	中子首/中皮首	不明	遠位鏡	1	鏡	KL/F	T形、内蔵、2001	92.05
472	シカ	中皮首	不明	背骨鏡片	1	鏡	KL/F	T形、内蔵、2001	92.05

## 第7節 あがた駅南跡跡で出土した動物遺体

500	イノシシ	下顎骨	左	破片	2	焼	15F	T 36、西館 6期	10.89	
500	イノシシ	下顎骨	右	破片	1	焼	15F	T 36、西館 6期	10.89	
518	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	ウ 52	ウ 52	72.52	
523	シカ	中顎骨	不明	歯位部	1	前後肢不明、焼	A3	ウ 05a	12.76	
526	イノシシ	脛骨	左	遠位端破片	1	焼	A3	ウ 0	18.52	
533	シカ?	脛骨	右	遠位端	1	焼	B	516	4.04	
534	イノシシ	基節骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	B	516、南庫マラナ	7.00	
537	イノシシ	下顎骨	左	破片	1	焼	B	Fウ7.23No.55.7期	0.96	
538	イノシシ	下顎骨1歯付歯	左	ほぼ完存	1	前後肢不明、焼	B	Fウ7.12No.336	7.00	
539	シカ	角	左	角座	1	焼	B	Fウ7.17No.217.7期	80.05	
539	シカ	角	右	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.17No.217.7期	80.05
543	シカ	中手骨	不明	骨付破片	1	焼	B	Fウ7.23No.52.7期	36.45	
544	イノシシ	下顎骨	左	破片	1	焼	B	Fウ7.23No.55.7期	43.18	
554	イノシシ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.12.10期	10.33	
564	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.18.10期	25.46	
568	イノシシ	基節骨	不明	ほぼ完存	1	前後肢不明、焼	B	Fウ7.23.7期	6.20	
569	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.23.10期	18.03	
571	イノシシ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.5.7期	17.54	
574	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.8.7期	1.92	
580	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.9.10.3期	6.78	
581	鳥類	跗跖骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.9	26.42	
581	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.9	26.42	
583	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.10.9期	13.59	
583	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.10.9期	13.59	
584	イノシシ?	下顎骨	左	遠位端破片	1	焼	B	Fウ7.11.10.10期	7.38	
588	シカ	基節骨	不明	遠位端	1	前後肢不明、焼	B	Fウ7.11.13.7期	3.55	
594	イノシシ	脛骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.14.8期	18.26	
597	イノシシ	中顎骨	不明	遠位部+骨髄	1	近位端未確定、前後肢不明、焼	B	Fウ7.11.14.10.2期	8.37	
601	イノシシ	中顎骨	不明	遠位部+骨髄	1	近位端未確定、前後肢不明、焼	B	Fウ7.11.15.9期	25.30	
601	イノシシ	末節骨	不明	完存	1	焼	B	Fウ7.11.15.9期	25.30	
604	哺乳類	胎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.15.10.3期	5.85	
605	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.16.9.9期	3.58	
606	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	B	Fウ7.11.16.10.3期	2.42	
608	イノシシ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.18	10.27	
608	イノシシ	基節骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	B	Fウ7.11.18	10.27	
613	イノシシ	基節骨	不明	遠位部+骨髄	1	前後肢不明、焼	B	Fウ7.11.20.8期	14.63	
614	イノシシ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.11.22	8.87	
616	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	ウ7.11.22	8.87	
625	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.12.7.9期	7.88	
629	鳥類	跗跖骨	左	遠位端	1	焼	B	Fウ7.12.11.10.3期	1.31	
630	シカ	下顎骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.12.12.10.1期	8.94	
630	哺乳類	脛骨	不明	破片	1	焼	B	Fウ7.12.12.10.1期	8.94	
637	シカ/イノシシ	脛骨	不明	ほぼ完存	1	焼	C	5147.No.69	61.95	
647	イノシシ	下顎骨	左	頤部	1	焼	C	E 24.11.No.104	8.42	
648	シカ	脛骨	右	遠位端	1	焼	C	E 24.11.No.105	25.27	
650	シカ	角	不明	破片	1	焼	C	E 24.12.No.246	14.34	
651	イノシシ	下顎骨	左右	歯付部	1	焼	C	E 24.15.No.94	84.07	
652	イノシシ	下顎骨	左右	歯付部	1	焼	C	E 24.15.No.140	163.65	
653	イノシシ	下顎骨	右	頤部	1	焼	C	E 24.16.No.50	17.02	
654	シカ	角	不明	破片	1	焼	C	E 24.17.No.171	6.53	
655	イノシシ	上顎骨	右	破片	1	焼	C	E 24.18.No.204	37.57	
658	シカ	角	不明	破片	1	焼	C	E 24.18	8.94	
660	イノシシ	脛骨	不明	破片	1	焼	C	W水	54.87	
660	シカ	角	不明	破片	1	焼	C	W水	54.87	
660	シカ	中手骨	左右	遠位端	1	焼	C	W水	54.87	
661	イノシシ	基節骨	不明	ほぼ完存	1	焼	C	W水、黒土10中	154.13	
661	シカ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	C	W水、黒土10中	154.13	
661	シカ	中顎骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	C	W水、黒土10中	154.13	
662	イノシシ	下顎骨	右	破片	1	焼	C	S水W	43.29	
662	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	C	S水W	43.29	
663	シカ	脛骨	不明	破片	1	焼	C	S水W-C	214.93	
663	シカ	脛骨	左	遠位端	1	焼	C	S水W-C	214.93	
663	シカ	中顎骨	不明	完存	2	前後肢不明、焼	C	S水W-C	214.93	
664	シカ	中足骨	不明	骨髄	1	焼	C	N水C	14.91	
730	シカ	中手骨	不明	骨付破片	1	焼	L	S1.No.37	31.01	
731	シカ	角	不明	破片	1	焼	L	S1.No.37	24.18	
732	イノシシ	下顎骨	左右	歯付部	1	王?、焼	L	Fウ8.10.No.4	47.34	
733	イノシシ	歯4中手骨	左	完存	1	焼	L	Fウ9.No.3	11.65	
735	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	イノシシ	基節骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	イノシシ	中顎骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	シカ	脛骨	不明	破片	1	焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	シカ	角	不明	加工	1	骨角部(叩はずす?)、焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	イノシシ?	脛骨	不明	破片	1	焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
735	哺乳類	胎骨	不明	破片	1	焼	L	Fウ 10.4.5期	332.11	
794	シカ	基節骨	不明	完存	1	前後肢不明、焼	L/F	Fウ 10.4.5期	144.65	
797	ウシ	下顎骨	不明	破片	1	焼	焼区	S101	23.85	



図版1 あがた駅南遺跡の動物遺体

1. エイ・サメ類椎骨(260)
- 2~3. 鳥綱: 2. 右尺骨(341) 3. 右脛足根骨(341)
4. 食肉目指骨(426)
5. ウシ臼歯(797)
- 6~22. イノシシ: 6. 左上顎第3後臼歯(538) 7. 左右下顎骨(358) 8. 右下顎骨(653) 9. 環椎(422)
10. 左肩甲骨(444) 11. 左腕骨(257) 12. 左機骨(594) 13. 左尺骨(102) 14. 右第2~4中手骨(271)
15. 左脛骨(526) 16. 右踵骨(425) 17. 左距骨(258) 18. 基節骨(72) 19. 基節骨(192) 20. 中節骨(314)
21. 末節骨(72) 22. 末節骨(170)
- 23~41. シカ: 23. 角製品(68) 24. 角製品(735) 25. 左角(539) 26. 頭蓋骨(429) 27. 臼歯(170) 28. 軸椎(663)
29. 右上腕骨(426) 30. 右機骨(227) 31. 左尺骨(331) 32. 左手根骨(443) 33. 右中手骨(238) 34. 右中手骨(282)
35. 左大腿骨(175) 36. 左脛骨(663) 37. 左足根骨(310) 38. 中足骨(664) 39. 基節骨(267) 40. 中節骨(267)
41. 末節骨(220)

## 第6章 総括

### 第1節 西地区の遺構と遺物

#### 1. 西地区出土土器の内容と分類について

##### 土器整理の概要

本遺跡出土土器の分類状況について確認しつつ、分類上の問題や型式との関係について整理し、併せて整理時の所見を羅列的ではあるが示しておく。なお、本節の挿図番号は、第1分冊の番号である。

水洗注記後の整理において、大形の破片、接合可能な個体について復元を進めつつ、破片類について「有文」と「無文」「底部」「製塩」「有文小片」に大きく分け、有文について第108表に示したような分類を行った。本来時期・型式を踏まえての分類が望ましいが、小片でも対応可能な大まかな要素分類に留めた。基本的に遺構またはグリッド及び層単位で分類及びカウントを行い、その過程で接合可能なものは接合復元を平行して進めた。但し接合については十分な時間をかけることができず、その後の過程で接合が判明したものも多い。特にグリッド間の接合についてはこの時点で殆ど行い得なかった。カウントについては原則破片数で行ったが、確実に1個体となる土器が割れた状態となっているものについては「1」と扱った。同一個体の判断が難しいものは別カウントしている。当初分類では層毎に集計し基礎データとしたが、層間であまり顕著な差異が認められなかったこともあり、最終的には層別とせず同一グリッドは統合して集計した。図示にあっても一部層毎に示したが、煩雑になることもあり原則として層位毎とはしない提示とした。

「無文」については多くをその後の整理対象外としたが、復元可能な個体については接合を試みている。無文でも付帯口縁の破片や特徴的な口縁部破片などは一定数整理過程に含めている。また有文でも型式判断困難な小片については「有文小片」として整理対象外とした。「付帯口」は、口縁部に隆帯状の肥厚部分があるもので、当初呼称の「折返し口縁」とこの部分に刺突などの装飾が加えられる「折B」とを併せた数量である。基礎データとしてはそれぞれ分けて示したが（第57表）、第108・109表では統合した。同様に「網目状燃糸紋」と「燃糸紋」、「その他」と「底部」もこの表では統合している。また分類過程で確認された石器・土製品・石製品については、別途の整理とした。土師器や中世～近代の遺物なども別の整理工程で行った。

##### 後期土器の分類と様相

おおまかな時期・型式判断可能な有文土器については、第108表に示したような分類を行った。このうち、「～加B」としたものは堀之内式や加曾利E式も含み、それらの殆どは摩滅の著しい状況が確認されている。加曾利B3式はB区で少数確認され、わずかではあるが図示している（第136図2～5、第137図5など）。曾谷式・高井東式については、この分類中では「安1・2」の中でカウントしている。曾谷式は少数確認されている（第138図4など）。高井東式は良好な資料も多い（第140図1、第142図4、第147図1、2など）。安行1式に並行する例も一定数あることが推定されるが、群馬県や中部地方で観られる安行2式並行の例、或いはこの系統をひく隆帯文系の資料は殆ど認められない。第142図3は高井東式の形態・文様構成であるが、薄手で丁寧な作りであり、一般的な高井東式とはかなり異なる点注目される。なお高井東式系は体部が無文とするものが多いことから、集計した数より実数がかなり多くなる可能性を考えておく必要もあろう。

安行1式、同2式については、B区で主体的と言える程多く、またH区など他の調査区でも少数出土して



第108表 出土土器地区毎集計表

遺跡・イ分名	～原田	安1・2	船付	大浜風	B.3a,3b	A.注.別	網走跡	縄紋のみ	高文	数文B	条線	彫刻	行軍口付	有文小片	遺跡その他	計
西A区遺構	0	4	25	150	322	177	28	138	6,323	40	12	44	294	122	134	7,817
西A区イ分	12	12	118	1,453	1,414	1,827	1,100	733	59,997	247	113	108	2,019	1,721	1,056	71,930
西B区遺構	3	169	23	7	54	85	0	34	1,076	2	28	7	8	16	33	1,545
西B区イ分	92	3,969	804	150	2,026	3,847	16	636	42,509	115	1,756	140	483	783	1,081	58,407
西C区遺構	0	0	6	46	199	80	12	53	2,760	11	2	14	111	49	47	3,390
西C区イ分	4	15	38	850	2,141	1,451	297	602	38,275	175	35	72	1,299	603	1,090	46,669
西D区遺構	0	0	8	32	54	21	6	10	821	8	1	5	45	5	23	1,039
西D区イ分	2	1	51	417	305	475	197	119	11,204	105	11	23	417	213	278	13,864
西E区遺構	0	0	23	59	67	101	25	39	2,112	10	2	4	110	40	54	2,644
西E区イ分	2	14	65	321	518	530	146	187	11,849	136	13	19	684	143	392	14,968
西F区イ分	0	19	3	0	11	31	0	1	212	2	15	0	4	2	11	311
西I区遺構	0	0	0	18	32	33	5	8	343	4	3	0	23	2	6	477
西I区イ分	2	0	4	29	67	53	8	8	492	10	0	0	38	0	39	751
西K・L区遺構	2	3	4	37	218	79	1	30	2,353	11	9	7	138	18	64	2,994
西K・L区イ分	0	3	2	17	73	32	0	11	492	11	2	2	52	1	63	761
西M区イ分	0	0	0	1	4	3	0	0	18	0	0	0	0	0	2	28
AKAG・その他	0	17	7	7	9	23	8	6	457	2	8	0	9	7	12	572
イ分・加算値	7	54	146	586	618	871	212	266	17,805	138	74	26	733	336	487	22,339
遺跡全体 計	126	4,280	1,347	4,180	8,132	9,719	2,061	2,897	190,998	1,035	2,084	471	6,467	4,061	4,864	250,830

いる。安行1式でも、南関東でも観られるような作り・文様手法のもと、隆起帯間が凹線状となるものなど北関東の変容例も少数認められた点も付記しておく。この両型式に伴う粗製土器は分類Aに含めている。後期後半の粗製土器については一部を図示したに過ぎず、様相把握には不十分な報告となっている。栃木県南部では寺野東遺跡等で附点組線文系が主体であることを確認している。本遺跡でも概ね近い様相だが、一定量貼付組線文系も出土しており（第143図12など）、検討を要する。またこの時期に伴う無文土器が相当数あることも推定するが、抽出特定は難しい。但し、晚期資料数が極めて限られるB区S15出土土器（第123図）やS16住居跡出土土器（第124～126図）で一定数の出土があり、多少の時期幅があるとは言え、粗製土器や無文土器の様相把握の面でも参考となろう。

瘤付系の深鉢では第139図1、第141図1、第150図8、第151図8、第353図1,2等がある。第353図1などはやや粗い調整で黏土粒を多く含む胎土等、当地域での製作を窺わせる。一方同図2の小形深鉢は薄手で丁寧な施文及びミガキが観察され、異なる地域からの搬入の様相を認めることができる。壺・注口土器では第126図13、第134図3、第160図5、鉢では第154図6、第352図1等を代表例として示すことができる。第160図5は円形貼付文、同形態に突出させた底部など、東北地方瘤付系土器群本来の形態に近似した特徴を観察できる。第156図5の注口土器は厚手で外傾する口縁などやや異質な部分が多く、単純に瘤付系とするのは躊躇するものの、異系統の注口土器としておく。他に異形台付土器（第118図12,13、第159図1,3、第160図1）、瓢形（注口）土器（第123図9）がある。また第160図10の異形台付土器は3単位と推定される珍しい例である。

なお後期後半の異系統では、第454図1の「宮滝式」系が目される。小巻具による扇状圧痕、同一工具による沈線施文などの特徴が観察されるが、東海・近畿方面からの直接的な搬入として良いかは検討を要する。

#### 晩期前半の分類と様相

晩期初頭・前葉については、調査区のほぼ全域から出土している（第92図B）。ある程度一括的な様相を示す例としてC区S143 b出土資料（第199～201図）、K L区の土坑S25（第378図）がある。分類B「磨

清縄文」の多くが対比されるが、1:1の対応ではない。

安行式系では波状線深鉢(第199図1、240図1、第362図2、第363図6)、屈曲鉢(第128図2、第129図6、第363図5)、平縁で入組文が展開する深鉢・鉢(第13図1、第132図2、133図1、第199図2、第229図1、第235図3、第241図1、第260図5、第261図1.2)、大洞式系の深鉢として第58図12、第130図12、第149図1、第240図2、第255図1、鉢では第154図3、第369図6等が観られる。第241図3や第134図5(=第137図7)は薄手丁寧な作りで徹人的特徴を示す。姥山系も一定量認められ(第132図1、第134図6、第380図1)、細密沈線文系もわずかだが認められる(第264図1)。

この時期の注口土器は比較的多いが(第156図3、第157図7、第233図1.4、第354図3、第449図1、第450図1)、大洞系が目立ち安行系瓢形の注口土器は稀である。

安行式台付鉢では、第203図3.5、第244図5=第267図5、第369図4、第449図2のような高さ・大きさがあり、脚部に透かし孔による表現が観られるものと、高さが低い鉢基調で頸部に入組文を描く第239図11、第267図4、第449図11とがある。この台付鉢及び深鉢で「板倉沼系」等と呼称される入組文系の表現例が多く安定して存在している点は、本遺跡安行3b式期の特徴と言って良さそうである。また波状線深鉢も比較的安定的であり、晩期中葉「天神原式」への展開を考える上で注目される。

#### 晩期中葉の様相

晩期中葉の安行式系も多く、良好な資料がある。調査区ではA区やC区で晩期中葉がかなり多く主体的と言っても良い状況だが、B区では晩期中葉の資料が少ない。当初分類では小片が多いことを念頭に、概ね単純に細紋のある「B」と沈線・刺突の「A」を分類した。この分類での分布図からはさほど排他的な分布傾向は観られないが、典型的な安行3d式や大洞C2式がB区出土資料、とりわけ大きめの破片や径復元個体がB区で殆ど観られない点は注目して良いであろう。一括資料として1区S210の資料が挙げられる。

「天神原式」や「須永式」の評価とも関わるが、安行3b式・3c式の区別が難しいものも多い。少なくとも大宮台地で多い副文様帯系の安行3c式は殆ど見られず、安行3b式文様構成の伝統を継承し、帯状部内部に刺突を充填する「天神原式」(第216図1など)や多重沈線でX状や波状構成を描くもの(第240図7等)が目立っている。大洞系は増加してゆく傾向があるようで、とりわけ大洞C2式は組成内の安定した位置を占める。但し大洞C2式の古い段階では安行系・前浦系もかなりの割合を占めており(第359図S210)、この点宇都宮市刈沼遺跡や小山市寺野東遺跡とは様相を異にしている。以下注目される例を羅列的に示す。

安行3c式として第236図1、第258図3などを例として挙げるが、南関東例とはかなり異なる。安行3d式では文様を比較的細い線で描くもの(第236図3、第309図1.2)と比較的幅のある線で描くもの(第248図2、第313図24、第359図1)とがあり、前者の方が多い傾向にある。

「天神原式」に関わる土器群として、縦隆線と弧線(波状線)または菱形区画を組合わせる構成の土器(第230図1、第248図1)、帯状部に刺突を充填し楕円文+X状構成のもの(第216図1、第232図1)、対向弧線文の例(第267図1)、幅狭い頸部施文域に文様が展開するもの(第369図1、第449図4)、内湾する口縁で上位に対向弧線+瘤状突起があるもの(第134図7、第233図6)等があり、安行式系との対比・型式細別も含め検討が必要な土器群である。径復元個体は無いものの、前浦式も少数確認できる(第240図6、第244図8、第265図8.9、第335図21)。

大洞式系では大洞C1式(第66図1、第216図4、第245図1、第267図2、第314図1、第450図2)、大洞C2式(第46図7.8、第72図1、第240図8、第245図2、第359図7)があり、器種としては鉢が

第109表 主要遺構出土土器分類比率

地区	遺構・グリッド名	安1・2	堀付	大洞	B:3a,3b	A:注,刺	縄紋 器身	無文 器身	条線	製帯	付帯口 付帯	布文小片	漆器	計
B	S12	39	10	1	35	48	24	534	20	4	6	12	8	742
百分率		5.3%	1.3%	0.1%	4.7%	6.5%	3.2%	72.0%	2.7%	0.5%	0.8%	1.6%	1.1%	100%
B	S15	19	4	0	0	8	1	50	4	0	0	1	4	91
百分率		20.9%	4.4%	0.0%	0.0%	8.8%	1.1%	54.9%	4.4%	0.0%	0.0%	1.1%	4.4%	100%
B	S16	107	9	0	2	20	9	341	3	0	0	2	15	510
百分率		21.0%	1.8%	0.0%	0.4%	3.9%	1.8%	66.9%	0.6%	0.0%	0.0%	0.4%	2.9%	100%
C	S143 b	0	5	9	64	17	14	431	0	3	18	5	12	578
百分率		0.0%	0.9%	1.6%	11.3%	2.9%	2.4%	74.6%	0.0%	0.5%	3.1%	0.9%	2.1%	100%
C	S147	0	0	5	64	14	11	563	1	7	24	12	12	713
百分率		0.0%	0.0%	0.7%	9.0%	2.0%	1.5%	79.0%	0.1%	1.0%	3.4%	1.7%	1.7%	100%
I	S210	0	0	16	9	23	1	93	0	0	4	0	4	150
百分率		0.0%	0.0%	10.7%	6.0%	15.3%	0.7%	62.0%	0.0%	0.0%	2.7%	0.0%	2.7%	100%
K.L	S1	2	0	18	19	4	6	340	0	1	29	4	21	444
百分率		0.5%	0.0%	4.1%	4.3%	0.9%	1.4%	76.6%	0.0%	0.2%	6.5%	0.9%	4.7%	100%
K.L	S25	0	0	4	22	18	6	240	1	0	20	2	14	327
百分率		0.0%	0.0%	1.2%	6.7%	5.5%	1.8%	73.4%	0.3%	0.0%	6.1%	0.6%	4.3%	100%
A	16T 西151 SX1=1 OSX1	0	1	3	13	1	7	185	0	0	13	1	13	237
百分率		0.0%	0.4%	1.3%	5.5%	0.4%	3.0%	78.1%	0.0%	0.0%	5.5%	0.4%	5.5%	100%

やや目立つ。上記例でも東北大洞式とは異なる表現例が認められるが、より大洞C2式文様の在地的変容が顕著な例として第60図2、第236図4、第324図39が挙げられる。寺野東遺跡や刈沼遺跡出土資料との共通項も見出せる点は興味深い。また大洞A1式として第60図1、第157図4、第230図7、第306図15があり、これらが本遺跡西地区縄紋土器の中で最も新しい資料群となる。明らかに浮線文と言える資料は東地区で出土例があるものの、西地区内で確実な例は殆ど見当たらない点は注意しておく。

晩期前葉～中葉の粗製土器・無文土器は極めて多く、検討すべきだが為し得ていない。総じて粗い削りまたはナデ調整の例が多く、胎土中の鉱物粒が多い傾向がある。比較的丁寧な調整の無文土器で口縁端部に刺突押捺を付すもの（第50図6、第65図1、第68図17、第230図3）、付帯口縁の無文土器（第30図9、第40図9、第81図6、第228図5、第229図13）、口縁の付帯上に刺突を加える例（第236図9）、燃糸紋の例（第87図25）等が確認できる。燃糸紋・縄紋施紋例がかなり限定される点は刈沼遺跡とは大きく異なる事象で、寺野東遺跡例とも多少の違いがあるように思われる。無文に円形貼付文や隆帯を付すものもあるが（第228図2等）、全形を把握できる例に乏しく、どの程度意図的な文様表現と考えるか判断が難しい。

晩期の異系統土器として、榎原文様を擁する例（第454図2～4）、口縁部に突帯を有し頸部に段を有するもの（第363図8.9、第380図16）がある。第363図8はやや異質な作りのようにも観察できるが、それ以外の資料は他と大きな差が無い胎土・調整と観察され、直接的搬入とは認め難いものの注目される。

## 2. 各分類の比率と集落の形成過程

以上、幾つかの問題を含む分類ではあるが、各分類の出土状況図を示し遺跡内の傾向を見てみたい（本章第92～94図）。一見して理解されるように、安行1・2式はB区への集中が明瞭である。「窟付系」も近い状況であるが、若干C区やD区でも目立っている。窟付系の分類に間隔縄紋施紋（縄紋帯状部のみで階段状入組部を描くもの）を含めていることが関係している可能性もある。安行3 a・3 b式が主体となる「B」は調査区内で比較的まんべんなく分布しているようにも見える。後期主体との所見・印象が強いB区においても比較的濃密な分布である点は、前時期からの継承性を示している。C区ではこの時期から場の利活用が活発になることが確認できる。「A」についても広い分布が認められる。B区で濃い分布となっているのは、縄線文系の粗製土器の量が表れている可能性が高い。「大洞式系」についてもA群やB群の分布と概ね重なるようだが、晩期中葉が目立つA・D・E区でより多く、B区で薄い分布となっているようにも捉えられる。

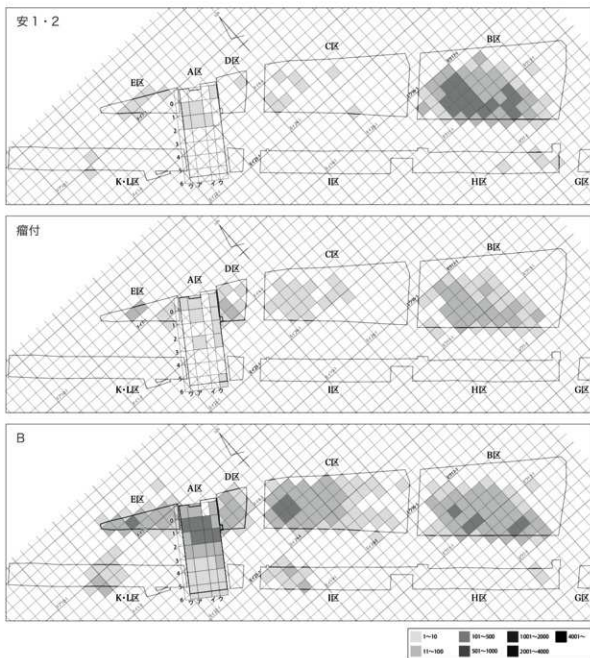
なお全体的な分布を俯瞰すると、調査区の限定性や包含層の厚さ・調査深度などの問題もあるが、C区東側～B区西端にかけて遺物量が少ない＝分布密度の低いところがあることが示される。このことは調査時の所見として得られていたが、分類集計によってあらためて確認されたと言える。I区や確認時のトレンチでの状況等も含め考えれば、西地区内で大きく2つの分布＝K L区中央～C区中央にかけてのゾーン＝西集中域と、B区中央～H・G区にかけてのゾーン＝東集中域、に分けて整理することもできる。少ないながらもこのゾーン内で住居跡が確認されていることも注意しておく。

次に住居跡や遺物が多く確認された部分の土器分類集計を確認してみよう(本章第109表)。これを見ると、B区のS 12,15,16いずれも安行1・2式の割合の高さが明瞭である。本文中にも触れたように、S12が安行2～3 a式、S 15が安行2式、S 16が安行1式期の住居跡と捉えており、この部分を後期後半集落が展開する主な部分、と捉えることができる。S 15で楯付系がやや高い割合を示している点は注目して良いかもしれない。C区の住居跡S 143b、S 147ではB群が多く、安行3 b式期住居跡との推定と整合している。I区のS 210は安行3 d式期の複数土器埋設遺構で、大洞系やA群の割合の高さが確認される。K L区のS 1住居跡は安行3 c式期、S 25は安行3 b式期と推定しており、それぞれ分類比率も概ね整合するようである。分布図では不明瞭であったが、付帯口縁の資料数はC・I・K L区の遺構出土資料がB区出土資料より多く、やはり安行3 b式以降に伴う土器群であることを示しているようにも見える。また、この時期の遺構出土資料については、時期幅の広い資料が混在することが一般的ですらあるが、本遺跡での状況は、遺構覆土が薄いこともあろうが、ある程度限定・絞り込みが可能な例もある点は注目される。少なくとも宇都宮市刈沼遺跡や小山市寺野東遺跡ほどの遺構内覆土混在状況ではないことを指摘できよう。

一方包含層各グリッド及び各層の出土状況では、ある程度時間的なまとまりを認めることができるグリッドもあるものの、特に小片まで観た場合には、型式混在状況は明らかである。従来より指摘しているように、焼土・炭化物や骨片の出土が目立つという後晩期特有の包含層の特徴は、若干の違いを認めつつも本遺跡でも同様であり、関東地方後晩期集落の共通項として注意しておきたい。なお、上位のV層は上面がほぼ水平な不整合面を為しており、詳細な比較を経っていないが、この事象は細別地区を越えて連続的なようにも見える。特に先に示した2つの集中域内では、層の厚さや含まれる土器型式、層の特徴なども概ね共通しており、この点にかかる整合的な説明は、均一的な層形成が為される環境が継続していた、或いは流れが殆ど無い滞水的な環境の中で土壌も平準化されたことなども推測される。更には地盤の降下や地震の影響なども考慮する必要があると思われ、詳細な検討が必要である。一方東集中域におけるV～X層各層の境界は若干起伏のある不整合状態となっており(第112,113図)、西集中域上位との違いとして注意される。

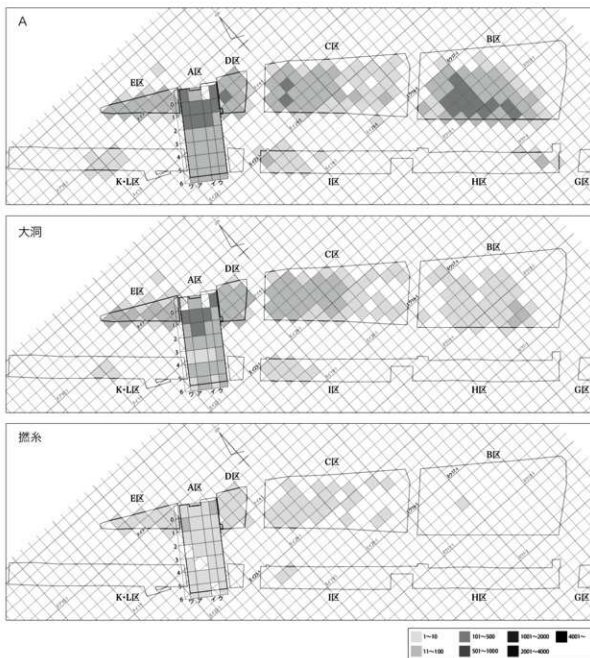
ちなみに、沖積地内にある旧地形が不明瞭なこと、包含層が地表下深い部分まであることなどの点は調査時より気にかけていたところであるが、未だ明瞭な整合性ある解釈を提示できない。テフラ・土壌分析・珪藻分析・植物珪酸体分析等から得られる情報を整理しきれていないところもあり、或いはまた遺跡外も含めたより広い地域を見渡して地質・地理学的検討や古環境の検討を行うべきであろう。考古学的にも、本遺跡出土遺物の地区・グリッド内における出土状況について、記録の整理が不十分なまま残っており、この検討も課題として残されている。包含層の形成要因を考える上では、やや距離や層位を越えて接合関係の認められる土器破片や土製品が幾つかあること、一方で比較的個体や個体群のまま、つまり廃棄された時点に近い状態が推測できる出土状態もあること、更に土器等の遺物自体の摩滅状態の観察などについても注意すべき視点となろう。いずれにしても今後の課題として明記しておく。

ここで、遺跡の形成過程をあらためて大まかに整理する。縄紋後期後半曾谷・高井東期より東集中域にお



第92図 包含層出土土器分布図(1)

いて集落形成が開始され、住居等の施設が作られると共に包含層の形成が進む。晩期前半にはC区で住居跡の確認や包含層の状況から、西集中域における集落形成の開始・展開が捉えられる。晩期中葉ではA区やC区において多量の遺物出土があり、この部分での集落・包含層形成が進むと判断される。K L区の住居跡S1やS70ピット群は安行3b～3c式の遺物があることからこのゾーンにおける居住域を示している。さほど離れない位置にあるI区西側において安行3d式期の土器埋設遺構S210がある。そして、この区域における場の利用は大洞A1式まで続くものの、この段階の遺物量はかなり限定され、更に大洞A2式以降の遺物は観られないことから、この大洞A1式期をもってほぼ集落が終焉するものと捉えられよう。

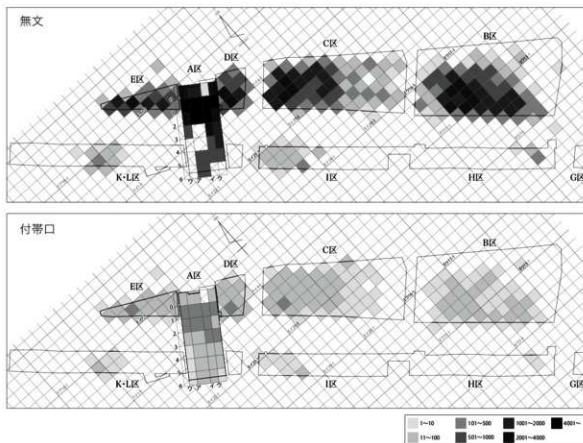


第93図 包含層出土土器分布図(2)

### 3. 土製品・石製品の内容

次に本遺跡西地区の土製品・石製品の内容について整理しておく。本来各種別毎、個別に検討していく必要があるが、注目すべき点、整理時に気付いた点のみ概略的に触れる。

まず土偶については、典型例標準例に近いみずく土偶や中空遮光器系土偶がある一方で、それらの範囲に含み得ない例も多く検討が必要であろう(第387図1、第391図2、第392図1.2など)。腕部や脚部資料では1字文を施しているものも多く認められる(第387図4、第390図2、第393図8)。更に、みみずく土偶の特徴を有しながら板状の形態で晩期中葉の文様を背面に施す第392図11、中空土偶でありながら偏



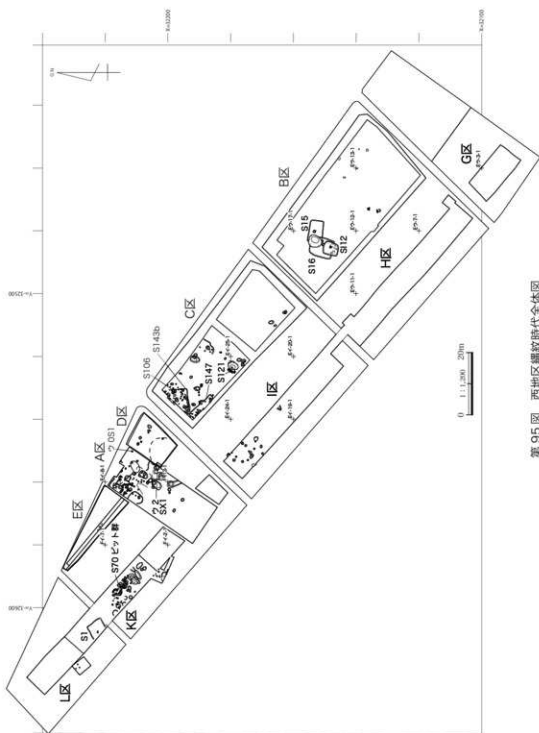
第94図 包含層出土土層分布図(3)

平で文様も関東的な表現の第391図7なども注目すべき資料となろう。

土版・岩板の資料は、本遺跡を特徴付けるものと言って良い。第394図1は体部に1字文に先行する文様とされる対向三角文が描かれ、顔面表現も良く保持している。山字文+眼・口表現の明瞭なもの(第395図5、第397図1、岩板第442図1)から、次第に眼や口が省略的痕跡的表現となり(第397図4)、或いは眼部分が渦巻文へ変形融合的となる(土版第395図1、岩板第445図2)ような変化が推測される。但しこれが一系的で時間的な変化と言えるのかは検討が必要であろう。土版・岩板にほぼ共通し対応する部分を見出し得る山字文+眼・口という顔面表現の要素、更に体部文様で描かれる入組文・渦巻文・工字状文の変化を併せて検討しなければならない。寺野東遺跡など北関東の遺跡で多く認められる楕円形の外縁に弧線を連続表現する典型例は本遺跡で良好なものもは観られないもの、近い表現例として第394図5、第395図4、第397図1があり、比較的安定した存在状態のようにも見える。また第444図1のような1字文が連続密集して描かれる例は太田市石之塔遺跡や藤岡市谷地遺跡で類例がある。つまり渡良瀬川流域～東毛地域特有の形態・文様である可能性が高く、土版・岩板の多出傾向の問題と併せて型式論的な分析が求められよう。

耳飾りについても多くの資料が提示できたことで、明らかにし得る部分が多い。整理の中では大きく同種類の形態や文様を確認しその整理から「幾つかの組別」を抽出し、文様や形態上の変化を把握できるように努めた。現時点でもその整理は不十分ではあるが、大きく3形態に整理しておく。

1群は白形～断面「逆凹型」のもので、表面に渦巻文や4単位系の文様を多く表現しているものである(第399図)。小形のものが多い。2群は原則環状で断面逆ト～逆L字状を呈し、内傾する表面に文様を描くもの



第95図 西地区縄文時代全体図



である（第400～402図）。文様は3～4つの単位文+単位間連繋文様で表現される。文様施文域が内側へ広がる傾向もあるようで、1群に近く表面の円形部分に広く文様が展開する例もある。2群については系統的にも時間的にも細別して考えるべき部分が多い。3群は表面上端部が狭い外傾面となり、この部分に4単位基本の文様が描かれるものである（405～406図）。次第にサイズが大きくなると共に上端が外側へ開く傾向が捉えられる。併せて内側ブリッジが発達し、文様がより装飾的・立体的かつ彫刻的となり、所謂漏斗状透かし彫りの形態に展開することが推定された。この3群は他の地域ではあまり発達しないようで、著名な千綱谷戸遺跡をはじめとする波良瀬川流域で発達が顕著な一群である。

これら各種別はそれぞれ異なった作り・文様の同一性を観察することができ、言い換えれば比較的安定した存在形態を示している。細別や土器型式との対応など今後検討すべき部分が多いが、少なくともこれだけの量でかつ安定した組列が確認できることは、本遺跡或いは近辺で集中的に製作する場があり、それが一定程度通時的に継承・伝承されていることを意味している。もちろん耳飾りについては著名な桐生市千綱谷戸遺跡や栃木市藤岡神社遺跡との関係を考えていく必要もあろう。また耳飾りの中にも精選された胎土で丁寧な作りのものとやや粗いものが認められたことも注意しておきたい。

その他の土製品の中では、共通する形態文様がある土製垂飾品（第410図1,2）、木器模倣の可能性ある匙形土製品（第416図1）等が注目される。また籠目土器とした籠製品に粘土を押しつけて製作されたと考えられているもの（第456図）もこの波良瀬川流域の後晩期集落跡で目立つものであり注意したい。

石製品では垂飾玉類の多さが興味深い。碧玉や変質流紋岩・変質凝灰岩と鑑定された分割材や剥片（第432図12,15等）、またこれらの濃い緑色の岩石を素材にした製品（第432図6）の出土が注目される。石剣類については石材と併せて技法・形態・文様の側面から検討してゆく必要がある。少なくとも刈沼遺跡や寺野東遺跡より緑泥片岩製のものが高い割合を示しており、第439図1のような殆ど加工の無い棒状のようなものも含め考えてゆくべきであろう。

#### 4. 周辺後晩期集落における土製品・石製品の内容

前項まで土製品石製品の内容を改めて確認した。次に比較的広範囲を調査し報告のある県内の後晩期集落相互の土製品・石製品の内容を確認し今後の検討に備えたい。もちろん単純な比較がどの程度有意かという問題はあり、調査の面積や精度、時期の問題等踏まえておく必要はある。まずは3遺跡の概要を示す。

栃木市（旧藤岡町）藤岡神社遺跡は旧波良瀬川をのぞむ藤岡台地の西端に位置する。あがた駅南遺跡からは波良瀬川をおおよそ15km下った位置にある。後晩期の包含層は窪地を囲んで環状に近く廻り、この下位などから後期安行式期を主とする住居跡30軒程度が確認されている。遺構内や包含層から1,056点の耳飾り、205点の土偶等が出土している。以前少し触れたように、藤岡神社遺跡では安行2式期住居跡群及び周辺から多くの耳飾りの出土があり、耳飾りの製作が行われていたことを推定している。一方藤岡神社遺跡では後期中葉が少ないこともあって、土偶の数量は少ない。安行3e式期以降は極めて少なく限定的である。

小山市寺野東遺跡は環状盛土遺構を擁する集落跡で、加曾利B式以降の住居跡は少ないものの、環状盛土遺構範囲内及び木組遺構群の作られる小谷内から多量の後晩期遺物が出土している。土偶の数が多いのは加曾利B式期遺物が多いことを考慮する必要がある。集落は概ね大洞C2式の中段階で終了している。土器型式の点では概ね連続するが、細かく観ると安行2式の時期がやや少ない。後期初頭や前半の遺構遺物も多いことが、貝輪状土製品や蓋、棒状土製品等の土製垂飾品の数量に表れている。一方石剣類や耳飾り等は後期安行式期以降のものとして本遺跡との比較もある程度有意なものとなろう。

宇都宮市刈沼遺跡は、鬼怒川中流域の台地上において、浅い窪地を囲むように住居群が展開する集落跡である。本遺跡同様、概ね安行1式期以降遺物が多くなり、大洞A1式期まで多量の遺物が確認されている。本遺跡からは55kmとかなり距離があり水系も異なるが、概ね同時期の拠点的な集落跡であり、相互比較してゆく意味があるかと考える。

以上3遺跡の土製品・石製品の種別数量を確認すると、耳飾りの量は藤岡神社遺跡が圧倒的に多いことが確認される。寺野東遺跡の耳飾り数量は評価が難しいが、安行2式がやや少ないことと共に地域差＝水系の違いが大きいものと推定する。あがた駅南遺跡が突出している種別は土版・岩版と垂飾玉類である。土版・岩版については、群馬県側の渡良瀬川流域の遺跡、例えば桐生市千綱谷戸遺跡や石之塔遺跡が目立っており、この地域の特徴と言える可能性が高い。

土偶の数量についてもその評価が難しい。後期中葉が多い寺野東遺跡では点数が多くなっている。内容を注目すると、藤岡神社遺跡の土偶は「後藤系列」やみみずく土偶またはその変化例が目立っており、遮光器系はわずかにあるものの、I字文系のものは見当たらない。土器における大洞C2式期のものが見られない事象と対応する＝大洞C1式期で終焉する集落故であろう。その点あがた駅南遺跡の土偶については、寺野東遺跡や刈沼遺跡における状況との相互比較が必要となるが、遮光器系以外では対応する例が少なく、板状化や土版への変化の問題と併せ今後の検討課題である。

## 5. 周辺の後晩期集落跡について

これまでにも少し触れているが、近隣の後晩期集落跡について少し触れておく。

藤岡神社遺跡の対岸に位置する埼玉県羽生市長竹遺跡（吉田稔・波辺清志2018等）は環状盛土遺構を擁する後晩期集落跡で、近年整理が進められている。土坑墓群や焼土を伴う「大型竪穴建物跡」など注目すべき遺構が確認されている。本遺跡西C区のS143b住居跡において焼土及び炭化材の顕著な出土が認められたが、規模や形態の違いは多少あるものの、その性格・評価について考えていく上では、長竹遺跡40号住居跡や43号住居跡の調査所見を参考とすべきであろう。既報告を見る限り、土器・土製品・石製品における類似例や共通項も容易に指摘できる。一例のみ指摘すれば、『長竹遺跡Ⅲ』第369図16掲載の完形の注口土器と、本遺跡出土第379図1顔面付き注口土器との類似を示しておく。但し顔面の類似の一方で扁平に近い形態、口縁部や体部における羊歯状文類似文様など、多少の時期差を想定できよう。

足利市高松遺跡（前澤1963、大澤1998）は本遺跡から最も近い距離にある後晩期集落跡である。本遺跡と異なりロームのある台地上に位置する。2回の調査で、住居跡・土坑などの遺構も確認されている。包含層は50cm程度の厚さを有していたようで、多量の遺物が出土した。加曾利B式、晩期初頭の注口土器、安行2式や大洞系の復元個体があり、破片では安行3a・3b・3c式、前浦式が認められる。土偶・土版・岩版・耳飾りなど本遺跡と概ね共通する種別の土製品・石製品があり、更に特徴や文様の点でも類似するものが多

第110表 土製品・石製品種別数量比較

遺跡	あがた	寺野東	藤岡神社	刈沼
耳飾り	434	381	1,056	81
土偶	152	293	205	101
有孔円盤	20	17		39
土製垂飾	35	236	93	29
匙・手環	17	10	13	9
釧目	13			
ミニチュア	81	357	170	113
土棒	35	92	129	29
焼治土器	23	2		
土版	37	28	33	6
岩版	57	3	2	5
粘土塊	91	218	22	17
貝輪状		365	205	2
簪	1	206	19	
垂飾玉類	137	46	99	39
石刺類	217	396	352	507
磁粒石	14	23	41	57
土版円盤	520	1,274	5,423	59
骨角器	32	3	20	※
製土器	471	20		335
動物形	2	1	7	

※刈沼の数量は市教委調査のみ、骨角器は下野考古学研究会調査で出土例あり。

く認められる。また自然遺物としてイノシシ・ニホンジカその他、「ニホンイヌ」、コガモ、ヨシキリザメ等の獣骨類及びケルミ・クリなどの植物遺体等が直良信夫により鑑定されている。

石之塔遺跡（越塚本町教育委員会 1987）は太田市（旧越塚本町）の水田地帯中の微高地に立地している。1986年に発掘調査が行われ、後期後半～晩期の集落跡が確認されている。多量の土器石器と共に耳飾り・玉類・土版・岩版など本遺跡とも共通する土製品・石製品が出土している。岩版では本遺跡第444図1に近い1字文が密集して描かれる岩版がある他、耳飾りも近似例があり、相互比較の検討が要請される。

渡良瀬川を更に遡った位置にある桐生市千綱谷戸遺跡（伊藤・増田 1980、岩宿博物館 2007 等）は晩期「千綱式」の標式遺跡として、また園田芳雄氏による継続的な調査研究が進められた遺跡として重要である。1970年代以降は桐生市教育委員会による調査も進められ、住居跡や配石墓などの遺構と共に、多くの後晩期遺物が出土している。特に漏斗状浅き彫りの耳飾りは優品が多く、1号住居跡出土資料などが国の重要文化財に指定されている。また耳飾り製作時の「削りカス」や「粘土紐」「粘土塊」や「ベンガラ塊」もまとまっており、耳飾り製作跡として評価されている。土器についても当初安行式と並行する北関東の型式として「須永式」が提唱された経緯があり、この評価・検討も本来進める必要があろう。

これらの検討に際しては、個別の製品の形態・文様についての類似・近似に注目すると共に、通時的な変化にも注意する必要がある。更には土器における各細別時期における系統別の「組成」「比率」—例えば後期後半における瘤付系の割合や、晩期中葉における天神原式系や大洞式系の比率なども必要な検討事項であり、関係性・構造をみながらの地域性の抽出・分析を行ってゆくべきであろう。

### 西地区取東

ここまであがた駅南遺跡の土器及び出土状況を整理・検討すると共に、周辺をやや広く見渡し、集落相互の比較を行う一つの視点として、土製品・石製品の数量・内容の問題を考えてみた。これまで触れ得なかった遺跡でも本遺跡との比較の上で重要な例は多い。例えば現渡良瀬遊水池の東側思川に面する段丘上にある小山市乙女不動原北浦遺跡も晩期の土坑墓群の検出等で著名な縄紋後晩期集落跡である。これら渡良瀬川と思川の分岐点付近、現小山市～古河市にかけての思川左岸段丘上には後晩期集落跡が比較的多く密集しており、かつて「渡良瀬川基部遺跡群」と呼称した経緯がある（江原 2007 等）。この遺跡群内の西側藤岡地域にある中根八幡遺跡・藤岡神社遺跡・後藤遺跡の更に西側、渡良瀬川流域の佐野・足利・大田方面における縄紋後晩期集落についてはこれまで不明な部分が多く、明和町矢島遺跡や高松遺跡等の成果以外空白に近い状態であったが、今回のあがた駅南遺跡の調査によりこの地域の様相が一定程度判明したことの意義は大きいであろう。縄紋後晩期における桐生市域等群馬方面への集落群の連鎖の糸を手繰り寄せることが可能となる遺跡、と言うこともできよう。そして沖積地内の微高地にあって、地表下1m近い下位に良好な状態の集落跡が確認されたことは、当該地域における遺跡の立地を考えていく上でも今後注意すべき点となる。

本章においても羅列的な記述に留まり、調査成果の整理・総括には程遠い文章となったが、今後集落の相互比較等の検討を進めてゆくための手がかりを思いつづまま記した。本遺跡出土遺物の特徴とも言える土版・岩版や耳飾りの多量出土は、渡良瀬川流域における後晩期集落の特徴であることが改めて確認され、集落の性格・個性を示す事象として、詳細な検討を進めてゆく必要がある。

以上、この遺跡の内容を示すには極めて粗く不十分な調査と報告ではあるが、当該地域における縄紋後晩期集落の検討を行う上で重要な成果をもたらしたことは疑い得ず、今後基本的な遺構・遺物の丁寧な観察と分析を進めてゆくことが、多くの課題を解いていくための必要不可欠なステップになるであろう（江原英）。

## 第2節 東地区の遺構と遺物

東地区においては、古墳時代前期～中期を中心に縄紋時代～中近世まで多数の遺構・遺物が確認されている。当然そこから提起される問題も多岐にわたるが、ここでは遺構全体の様相を概観し、解明された事実や問題点等について若干の指摘をしておく。なお、本文中には各遺構の想定時期を記しているが、並行関係等十分な検討を経たものではないため一応の目安として一定の時期幅を持つものとしてとらえていただきたい。

### 遺構群と地形

東地区で確認された遺構は第1表に示したとおりで、各遺構は調査区内にいくつかのまとまりを持って位置している。具体的にはV区中央部と、Ⅲ区からⅡ区西部に繋がりⅦ区へと続く部分である。調査区内の微地形を見てみると、遺構集中部分は周囲より緩やかに高くなっており、平坦な低地の中で僅かでも標高の高い地点を選んで占地していることがわかる。一方、V区とⅡ・Ⅲ区に挟まれた南北に細長い無遺構部分は緩やかに窪んでおり、北西から南東方向へと低くなる低地部分とみられる。低地の先端はV区東側あたりであろう。よって、調査区内には西にV区中央の縦長な部分、東にⅢ区からⅡ区、Ⅶ区へと続く部分という2つの微高地があり、その上に遺構群が位置するということになる。微高地は調査区北西部のⅢ区中央部、SD132やSE131等がある部分で繋がっているが、標高を見ると北西部のⅢ区と西部のV区の遺構集中部は調査区内で最も高く、東部のⅡ区と南東部のⅦ区遺構集中部はそれよりやや低くなっている。これは、遺跡南西側に標高が高く広い自然堤防があり、そこから北東の低地へと緩やかに低くなるという大きな地形に沿った特徴である。このように、各時代の遺構は地形の制約の中で構築されてきたものと言えよう。

### 縄紋～弥生時代

遺構は確認されておらず、縄紋晩期及び弥生中期の遺物が僅かに出土するのみである。古墳～近世の各遺構より下位の堆積層に当該期の遺構が存在したことも考えられるが、遺物量からしてその可能性は小さいと推定する。

### 古墳時代

遺構は前期後半から中期中葉を主体としており、これ以外の時期はほとんど確認できない。遺構数は前期で竪穴住居跡65軒、掘立柱建物跡1棟、溝8条、土抗11基、性格不明遺構82基、中期は竪穴住居跡13軒、井戸1基、溝6条、土抗1基、性格不明遺構35基、前期～中期は溝1条、土抗1基、性格不明遺構9基である。

前期の遺構は東地区で最も多く、調査区内に広範に分布する。時期は新潟シンボ編年9～10期であり、一部8期に遡る。竪穴住居跡は微高地上にあり、中軸線は地形の傾斜に沿い北西を向くものが多い。住居跡同士は重複しないものが主体だが重複する例もある。規模は大小様々で、規模毎にまとまることなく混在する。大型の長方形住居跡で6本の主柱穴を持つSI188は遺構群の中心的な役割を担うと考えられる。SI166付近で確認された柱穴列はSI188を囲む欄列かもしれない。SI045等では床面直上で薄く広範囲に広がる炭化物が確認されており、籠状の敷物が敷かれていた可能性が考えられた。SI107・108は地震によって床面に亀裂が入っており、これ以外にも地震による変形等の影響が現れた遺構があると推定される。地震の時期は弘仁九年七月(818年)に発生したいわゆる弘仁地震の可能性が高く、調査区内ではこれ以外にも噴砂の痕跡等が確認されている。

掘立柱建物跡はⅦ区にあるSB395のみである。Ⅶ区遺構群の西縁にある桁行2間、梁間1間の側柱建物で、中軸線は竪穴住居跡と異なりほぼ東西方向を向く。柱穴は北列が等間隔に直線的に並んでおり、北辺がこの建物の基準になっているとみられる。時期は重複する竪穴住居跡（SI361、SI366）に切られることなどから8～9期かそれ以前で、前期遺構群の中で最も古い遺構の一つとなる。同時期の竪穴住居跡はほぼすべてⅢ区とⅤ区にあるため、竪穴住居跡群から南に離れて構築されたものと言える。本遺構北西にはSD378・379、南西にはSK365、北東にやや離れてSD362・386等があり、これらの遺構は掘立柱建物跡を囲む溝の痕跡の可能性が高い。溝の平面形は東西方向に長い不整形長方形に復元でき、東西18m、南北12m程度と推定される。SD362・386の状況から、溝は複数時期ある可能性が指摘できる。

出土遺物は土師器を主体とし、砥石、鉄製品などがある。土師器は石田川式土器との共通点が多く、栃木県南～中央平野部とは様相が異なる。

中期は前期より遺構数は少ない。遺物から前期から断絶なく継続しているとみられ、中期後葉まで続く。これ以後の遺構・遺物は奈良時代まで存在しない。

竪穴住居跡は微高地上にあり、Ⅴ区とⅦ区に多い。前期と同様に中軸線は地形の傾斜に沿い北西を向き、大小様々の規模のものがある。住居跡同士は重複しない。石製模造品の工房と考えられる竪穴住居跡は2軒（SI315・354A）あり、遺構内から製品のほか未製品、削片、台石、砥石などが出土する。このうち中期中葉のSI315は炉を持たず、住居跡中央に隅丸長方形の掘り込みを持つ。SI354Aではカマドと張出部を持つなど他の住居跡とは異なる特徴がある。

井戸は調査区内北部にあたるⅢ区からⅤ区北端に多く、他時期及び時期不明のものも含めすべての井戸がここに集中する。このうち古墳時代とされるものは中期のSE131のみで、石製模造品が多数出土する。時期不明のSE137は古墳時代の可能性が高いほか、SE114・115なども古墳時代の可能性が高い。また、付近にある円筒状土坑のSK115やSK206も井戸かもしれない。

溝も井戸と同様Ⅲ区及びⅤ区に特徴的で、前期から中期にかけて存在する。前期ではⅢ区にSD119・125とSD132があり、SD119・125はともに2時期に分けられるかもしれない。これらは中期の溝としたSD128a・128b・130Aと同一線上に並んでおり、関連が伺える。底面はほぼ水平だが、SD119・125のみは底面が南東から北西へと低くなる。Ⅴ区では前期から中期のSD160、中期のSD190A・190B・187がある。溝の多くは北西～南東方向を向き、井戸周辺を通過するか指向しており、溝と井戸が関連する可能性を指摘できる。

前期～中期では性格不明遺構も数多く存在するが、これらはほぼすべて掘り込み等を確認できない遺物集中である。東部のⅡ区やⅦ区に集中しており、Ⅴ区東縁にもある。乱雑な遺物のあり方から多くは人為的なものではないとみられ、標高がやや低い範囲にのみ分布している点も考慮すると洪水等で流出した遺物が堆積したものの可能性が高い。前期SI053の覆土層で中期のSX057が確認された例もある。洪水は榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）に起因するものか。一方、意図的に土器等を配置したとみられる遺構や竪穴住居跡の可能性が高いものも数は少ないが存在する。遺物のあり方や器種構成等から祭祀遺構と考えられるものはSX136・219・266、祭祀的な遺構の可能性が高いものはSX094・059・040・067、祭祀的な遺構か竪穴住居跡とみられるものはSX030、低い位置から遺物が出土することと合わせて竪穴住居跡の可能性が高いものはSX064・065・094等である。祭祀遺構は住居跡群中ではなくその周縁に相当する場所に位置する。

以上のように、東地区の古墳時代遺構は前期後半から中期後葉まで断絶なく続く集落である。各遺構は地形の制約を受けて大きく2群に分けられ、より高い位置にある遺構群内には前期、中期とも規模の大きな住

居跡が位置し、集落開始時期には住居跡群の南に距離を置いて方形の区画を持つ掘立柱建物跡が建てられる。北部には井戸があり、井戸と住居跡群を繋ぐように溝が延びており、住居跡群の周縁には祭祀遺構が作られる。中期末には榎名ニッ岳沢川テフラ（Hr-FA）に起因する洪水により低位の遺構は流され、調査区内に遺物集中が形成されるとともに集落は終焉を迎える、とまとめることができよう。

古墳等の埋葬に関わる施設は確認されていない。埴輪片は数点出土しており、近隣に古墳が存在した可能性はある。調査区の西 500 m 及び南 1.2 km にある微高地には多数の古墳が存在し、今回調査した遺構群はこうした古墳に関連する集落や祭祀の場になるものと推定される。とりわけ南東 1.3 km の小曾根古墳群中にあり藤本観音山古墳に後続する首長墓とされる墳丘全長 58 m の前方後円墳、小曾根浅間山古墳は集落の最盛期である前期末の築造とされており、深い繋がりが想定できる。なお、西 1.3 km にあって埋没した前方後円墳で銅鏡や銅鐸が出土したとされる県天王塚古墳も関連が伺われる古墳として指摘できよう。

本遺跡の古墳時代遺構群のあり方を考える上では、ほぼ同時期の太田市中溝・深町遺跡が重要である。遺跡は本遺跡の西 13.5 km で大間々扇状地の湧水点付近にあり、水の祭祀拠点として方形の区画溝内に建てられた 2 棟の掘立柱建物跡、四面に庇を持つ掘立柱建物跡と石敷井戸などがあり、近くに住居跡を主体とした一般集落としての一木杉Ⅱ遺跡のほか、唐桶田遺跡においては首長居住域も想定されている。また、遺跡の南東 1.2 km には関連があるとされる前方後円墳の円福寺茶白山古墳がある。本遺跡調査例と比較すると各遺構の規模や配置は異なるが、類似点が多い。本遺跡例も古墳時代前期から中期段階の水に関わる祭祀施設を持つ集落の一類型と言えるのではないだろうか。

## 古代

奈良時代は竪穴住居跡 1 軒、平安時代は竪穴住居跡 17 軒、井戸 1 基、溝 4 条、土抗 6 基、性格不明遺構 3 基、奈良 - 平安時代は溝 3 条である。遺構は古墳時代と同様Ⅲ - V 区、Ⅲ - VII 区の微高地に立地する。年代は 8 世紀中葉から 11 世紀までであるが、竪穴住居跡や溝等主要な遺構は 9 世紀代を中心として 8 - 10 世紀にまとまる。奈良時代の遺構は V 区でしか確認されず、規模は小さい。平安時代にはⅢ区、Ⅱ区に多くの住居跡が分布し、V 区は火葬墓が作られ墓域となる。溝は調査区南部のⅦ区に東西方向の直線的な溝、Ⅲ - V 区に細い溝が掘られる。

奈良時代の SI146C は小規模な長方形住居跡で、南辺にカマドを持つ。同時代の遺物は同じ V 区の SI175・176 周辺でも出土するため、SI146C 以外にも遺構があったかもしれない。

平安時代の竪穴住居跡はⅢ区南東部からⅡ区北西部周辺に集中する。Ⅲ区中央の SI116・117 は類似する形態で、集中部からは距離を置いて位置する。カマドのみが確認されたものも多く各住居跡の全容は不明確だが、中軸線は北を向くもののほかに古墳時代と同様地形の傾斜に沿い北西を向くものがあり、Ⅱ区では住居跡同士が重複すると推定される。カマドは多くが北に設置され、東 (SI070) や南東 (SI154) にあるものが僅かにあるが時期による違いではない。管状土鍾がまとまって出土する例 (SI079) があり、当時の生業の一端が知られる。

火葬墓 6 基 (SK149B・SK175C・SK196・SK198・SK201・SX177B) はすべて V 区にあり、古墳時代の竪穴住居跡等と同様微高地の中でも最も高いところに占地する。時期は 9 世紀前半から後葉で、9 世紀代を通じて作られ続けた墓域と考えられる。周辺の古墳時代住居跡などからは奈良時代の遺物も出土するため、墓域の開始が 8 世紀まで遡る可能性はある。範囲は南北 36 m、東西約 10 m である。各遺構はほぼ南北方向の中軸線で、規模は長さ 1.5 × 幅 0.6 × 深さ 0.2 m ほどの一群 (SK149B・SK196・SK198・SK201) と、長さ 2.5 × 幅

1.1-1.9×深さ0.2 mほどの(SK175C・SX177B)があり、掘り込みは両者とも20 cm前後と浅い。数が多い前者は平面形が細長い楕円形で南北に並ぶようにあり、北部では6 mくらいの一一定の間隔を置いて位置するようにも見える。後者2基は墓域内中央に近接しており、時間的には新しい段階のものであるとも言えるかもしれない。6基とも覆土は人為堆積で、覆土中に焼土や炭化物とともに骨が含まれる。骨は人骨とみられ、径1 cm以下の細かい骨片となっており、SK196では特に多く遺構中央に集中する。炭化物は覆土全体にあるものが多いが、SK175Cのように土抗底面に薄い層状に堆積するものやSK198のように遺構両端に炭化物がまとまる例もある。遺物は、須恵器かロクロ成形土師器の坏と武蔵型甕が必ず含まれ、このほかSK175Cでは須恵器皿と原始灰釉高台付長頸瓶、SX177Bでは須恵器瓶類と土製紡錘車3点が出土する。遺物の出土位置に規則性はないが、遺構の一端に偏る傾向は看取される。9世紀中葉ないし後葉に比定される同様の器種は古墳時代住居跡SI176・188で出土しており、ここにも類似する遺構が存在した可能性が高い。SI176では覆土上層に焼土と炭化物が集中する範囲が2ヶ所あることから、2基存在したと考えられる。なお墓域とした範囲内には竪穴住居跡2軒があるが、これらは墓と関連する遺構とも考えられよう。

溝は南部Ⅶ区に東西方向に直線的に延びるSD255とそれに関連するとみられるSD383・384・340があり、北部Ⅲ-V区には緩やかに屈曲するSD130B・145がある。Ⅲ区北端のSD130Cも同時代の可能性がある。覆土は遺構内の全部ないし一部が水性堆積とみられるが、底面は一方に傾くことなくほぼ平坦であることから水路とは考えにくく、区画等を目的とした遺構と考えられる。南部Ⅶ区の溝はすべてSD255と同方向を向いており、本来1つの遺構で掘り返し等を繰り返した結果溝が重複するような状況になったとも言えよう。断面形は幅の広い皿状がほとんどで、最も古いSD-340のみ断面逆台形状を呈する。SD255の覆土については、その一部が弘仁九年七月(818年)の地震に伴う地下土壌の噴出物と想定される泥流およびそのブロックに相当するとの推定があり、これは出土遺物の時期とも大きな齟齬はない。南部Ⅶ区の溝は弘仁地震発生前後に存在した遺構と言えるだろう。

古代の可能性があるとした調査区北端のSD130Cはごく一部のみの調査だが4時期に分けられ、断面は皿状で1時期のみ逆台形状となり、覆土は全体として水性堆積とみられる。SD255との類似点は多く、両者は近い時期に構築された可能性がある。SD130C、SD255とも溝の用途は明らかではないが、調査範囲の中だけで見れば北のSD130Cと南のSD255等の2本の溝の間みに遺構が存在しており、集落と墓域を囲む溝と見ることできるだろう。ちなみに両溝間の距離は170 mである。北部Ⅲ-V区のSD130B・145は前述の溝とは異なり、幅は狭く大きく湾曲する。断面形は逆台形状でSD130Bは少なくとも2時期に分けられ、他の溝と同様に底面の傾斜はなく覆土は水性堆積とみられる。SD255などとは目的と構造が異なる区画溝となろうか。

このほか、調査区北部Ⅲ区中央にはともに11世紀代のSE101とSK118があり、同時期の遺構が小規模なまとまりを作る。両遺構から土師質土器小皿が出土するほか、SE101では馬歯が確認される。

## 中世

中世は溝2条、土抗1基のみと少ない。V区SD140は東西方向の溝で周囲に関連する遺構はなく、西に隣接するSI156で当該期の遺物が出土するのみである。Ⅶ区SD350は北西-南東方向に直線的に延びる溝で、部分的に複数条に分かれる。断面形は下半逆台形状で上半は角度を変えて緩やかに立ち上がっており、箱葉研に近い。底面は北から南へと傾くが、これは地形に沿って掘られたためとみられる。SD350周辺には同一方向に延びる溝が数条存在しており(SD342・343・351)、これらも中世の可能性もある。土抗はⅡ区の

SK012のみだが、SD350の東側には平面方形や長方形、楕円形の人為堆積の土抗が多数存在する。他時期の遺構も多い部分のため確実ではないが、溝の東側のみに存在するというあり方から、調査区南部東寄りで時期不明とした土抗の多くは中世の可能性があると考える。土抗群とそれを区画する溝ということになるろうか。

### 東地区収束

以上、各時代の状況を概観した。もとより地形的な制約が大きい場所ではあるが、人為的に土地を大きく改変することなく僅かな微高地を活用して集落や墓域を形成してきたことがわかる。ただ、前代の土地利用のあり方が次代に受け継がれることがなかったであろうことは、時代ごとに溝の方向が大きく変化している点等に示されているようにみえる。この断絶は時代によるものとも考えられるが、洪水等の自然災害が大きく影響しているものと推測する（谷中隆）。

なお、東地区・西地区各地点における地割れや噴砂等の災害痕跡及び古環壕の復元にかかる理化学分析の成果についても総合的に整理して示すべきところであるが適わなかった。別途検討の機会を得たい。また、調査から整理報告にあたっては、多くの方々から貴重なご指導・ご教示を頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

### 文献

- 新屋雅明 2007『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査報告第339集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤晋祐・増田修 1980『千瀬谷戸遺跡調査報告』槻生市教育委員会
- 江原英 2017『刈沼遺跡・刈沼向原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第388集 栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 江原英ほか 1997『寺野東遺跡Ⅴ』栃木県埋蔵文化財調査報告第200集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 大澤伸啓 1998『高松遺跡第2次発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告第37集 足利市教育委員会
- 太田市教育委員会 2010『石之塔遺跡—縄文時代のまじない』
- 川島正一 1991『矢島遺跡発掘調査報告書』明和村教育委員会
- 小宮 豪・静野勝信・福嶋正史 2000『新田東部遺跡群Ⅱ』新田町教育委員会・群馬県企業局
- 手塚達弥 1999『藤岡神社遺跡（遺物編）』栃木県埋蔵文化財調査報告第197集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 手塚達弥 2001『藤岡神社遺跡（本文編）』栃木県埋蔵文化財調査報告第197集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 寺内敏郎ほか 1988『C7神明北遺跡 C8谷地遺跡』群馬県藤岡市教育委員会
- 半田勝巳 1987『石之塔遺跡』蔵塚本町教育委員会
- 前澤輝政 1963『御厨高松遺跡の研究』早稲田大学考古学研究室報告第9冊 足利市教育委員会・早稲田大学考古学研究室
- 増田修・小曾将夫 2007『第44回企画展 千瀬谷戸遺跡発掘60年』岩宿博物館
- 茂木努・古部正志 2002『中栗須滝川Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会
- 吉田稔・渡辺清志 2018『長竹遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査報告第441集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



# 写 真 图 版



あがた駅南遺跡全景（南から）



あがた駅南遺跡垂直モザイク写真



西地区全景（南から）



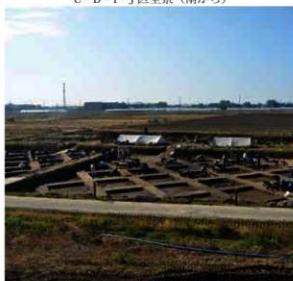
D・E・K・L区全景（南から）



C・D・I・J区全景（南から）



A区全景（北西から）



B区全景（北から）



C区全景（北西から）



A区全景(北西から)



A区全景(北から)



ウ2土層断面(北西から)



ア1確認面(南西から)



A区調査状況(北から)



ワ OSD1・2 (南から)



ウ OSD3 (西から)



ウ 5SD (西から)



ア 0 遺構確認状況 (南から)



ア OP13 土層断面 (東から)



ア OP14 (東から)



ア OP12 (南から)



イ OP1 土層断面 (南から)



ワ0ピット群 (南西から)



ワ0ピット群 (西から)



ア1P4～P6 (南から)



ワ0P12 土層断面 (北から)



ワ0P13・14 土層断面 (東から)



ワ0P17～19土層断面(南から)



ワ1P12土層断面(南西から)



イ0SX1



イ0SX1



イ0SX1(南から)



ワ2SX1(北東から)



ワ0S4C土層断面(北から)



ワ2SK2(北西から)





ウ 2SX1 (北から)



ウ 2SX1 上層 (北西から)



ウ 2SX1 (北西から)



ウ 2SX1 (北から)



ウ 2SX1 掘方 (南から)





ウ OS5 (南から)



ウ OS5 (南東から)



ウ 3S1 (北東から)



イ 4S1



イ 1 遺物出土状況 (北西から)



ウ 1 遺物出土状況 (南から)



イ 2 土版出土状況



ウ 2S1 土器出土状況



ウ3 耳飾り出土状況



ワ0 土器出土状況



ワ1 遺物出土状況 (南東から)



ワ1 遺物出土状況 (南から)



ワ1 土偶出土状況



ワ1 骨角器出土状況



A区調査状況 (北東から)



A区調査状況 (北から)



B区全景(西から)



SD6~8(南から)



SD6~8 Eウ12.4(南から)



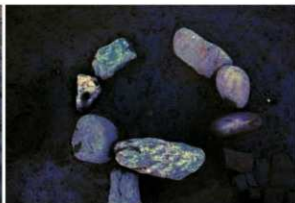
X層調査状況(南から)



B区調査状況(北西から)



S11 土層断面 (東から)



S11 (南から)



Eウ 11-15 VII層 (南西から)



S14 遺物出土状況 (北東から)



S14 環被熱状況 (南から)



S10 土層断面 (南から)



Eウ 7-12・17-22 土層断面 (東から)



調査状況 (北西から)



S12 (西から)



S12 土層断面 (東から)



S12 調査状況 (西から)



S12 遺物出土状況 (北から)



S12 坑 (南から)





S15・16 (南から)



S15 (南から)



S16 (南から)



S15 埴 (東から)



B区中央調査状況 (北西から)



Eウ 7-13 遺物出土状況(東から)



Eウ 7-17・18・22・23 遺物出土状況(南東から)



Eウ 7-17 遺物出土状況(南から)



Eウ 7-17 遺物出土状況(南から)



Eウ 6-25 土器出土状況(南西から)



Eウ 7-10 異形台付土器出土状況(北から)



Eウ 7-13 土器出土状況(北から)



Eウ 7-17 岩版出土状況(北から)



Eウ7-23 耳飾り出土状況(西から)



Eウ7-22 遺物出土状況(南東から)



Eウ7-23 VI層遺物出土状況



Eウ7-23 骨片出土状況(北から)



Eウ7-23 遺物出土状況(東から)





Eウ 12-11 遺物出土状況(北から)



Eウ 11-14 炭化材出土状況(北東から)



Eウ 11-5 土製品出土状況(東から)



Eウ 11-15 耳飾り出土状況(北東から)



Eウ 11-24 玉出土状況(南から)



Eウ 11-25 卍層耳飾り出土状況(南東から)



Eウ 11-19 注口土器出土状況(東から)



Eウ 12-1 土偶出土状況(南から)



C区全景(西から)



SD101(西から)



SD102(西から)



SD102土層断面(東から)



SD103(南から)



S106 (南から)



S106 遺物出土状況 (南東から)



S106 土層断面 (南から)



S106 (南東から)



S106 断割り土層断面 (南から)



S106 周辺遺物出土状況 (南東から)



S106P4・5 土層断面 (北東から)



S143b 完掘 (南から)



S143b 南北土層断面 (北西から)



S143b 焼土・炭化材検出状況 (西から)



S143b 遺物出土状況 (北西から)



S143b 上層遺物出土状況



Eイ 24-22 (S143b 上層) 耳飾り出土状況



S143b 完掘（東から）



S143b 南半部（東から）



S143b 焼土・炭化材検出状況（西から）



S143b 炭化材（東から）



S143b 焼土・炭化材（西から）





S143b 焼土・炭化材(東から)



S143b 周溝・炭化材(東から)



S143b 遺物出土状況(南から)



S143b・147(東から)



S147 遺物出土状況(南西から)



S147 遺物出土状況(北西から)



S147 遺物出土状況(北から)



S147 遺物出土状況(北東から)



S147 (北東から)



S147 (東から)



S147P1・2・10 (北東から)



S147 骨片・遺物出土状況 (東から)



S147 土版出土状況 (東から)



S105・107 土層断面 (東から)



SK108・113 (西から)



SK108 (南東から)



SK113 (東から)



S135 (南から)



S136 (南から)



SK117 土層断面 (南から)



S132 土層断面 (東から)





EI 19-25 遺物出土状況 (西から)



S129 土層断面 (東から)



S120 (東から)



S120 土層断面 (東から)



S121 確認状況 (北から)



S121 (東から)



SK118 東西土層断面 (南から)



S121 (南東から)



S126 土層断面 (北西から)



S128 土層断面 (東から)



S142 土層断面 (東から)



S151b 土層断面 (南から)



S159 土層断面 (東から)



C区トレンチ1 (南東から)



C区トレンチ2 (南西から)



C区トレンチ3 (西から)



E-I 25-11 遺物出土状況(南東から)



E-I 24-5 遺物出土状況(北から)



E-I 24-7 土器出土状況



E-I 24-7 垂飾玉類出土状況



E-I 24-8 土器出土状況(東から)



C区遺物出土状況(南西から)



E-I 24-9 遺物出土状況(北から)



E-I 24-11 遺物出土状況(東から)



Eイ 24-12 遺物出土状況



Eイ 24-12 遺物出土状況



Eイ 24-13 土器出土状況 (北西から)



Eイ 24-14・15 土器出土状況



Eイ 24-14 岩版出土状況 (北から)



Eイ 24-15 黒曜石出土状況



Eイ 24-14・15 垂飾玉類出土状況



Eイ 24-15 骨片出土状況



C区調査状況(北西から)



Eイ 24-17 石剣類出土状況(北西から)



Eイ 24-17 土器出土状況(北西から)



Eイ 25-6 遺物出土状況(北東から)



Eイ 20-21 土器出土状況(西から)





A・D・E区航空写真(南から)



D区SD2～4(東から)



D区SK2土層断面(南から)



D区S3土層断面(南から)



D区S7土層断面(東から)



D区遺物出土状況



D区Fイ3-7遺物出土状況



H区全景（南東から）



H区Eウ6-3・4・8、1-24（西から）



H区Eウ2-11 IX層遺物出土状況（東から）



H区Eウ2-7 IX層土器出土状況（北東から）



H区Eウ1-23土器出土状況（北から）



H区Eウ1-23遺物出土状況（東から）



H区Eウ2-11 VII層垂飾玉類出土状況（東から）



G区重機掘削状況（南から）



Eイ 18-13-18 遺物出土状況(北西から)



1区調査状況(西から)



S202 土層断面(東から)



S207 土層断面(東から)



S215 土層断面(南から)



S215(南から)



Eイ 18-22 遺物出土状況(北西から)



Eイ 18-22 遺物出土状況(西から)





S210 (北から)



S210 土層断面 (北から)



S210 東 (北から)



S210 南西 (北から)



Eイ 18-17 遺物出土状況 (北から)



S1 完掘 (北から)



S1 土層断面 (北東から)



S1 調査状況 (北西から)



S1 牙跡 (南から)



S1 旧牙跡 (南東から)



S70 ピット群 (南西から)



S70 ピット群 (北東から)



S70 ピット群 S58 土層断面 (西から)



S3・S5・S26 (南西から)



S12 遺物出土状況 (南東から)



K・L区遺物出土状況



K・L区遺物出土状況



Fイ1-17 岩版出土状況



石剣・耳飾出土状況



S1 匙形土製品出土状況(東から)



石皿出土状況



Fア5-24 土偶出土状況



岩版出土状況(南から)



T1 北掘張区 (北から)



T1 北掘張区 (南東から)



T1 北掘張区 SX1 (南から)



T1 掘張区 SX2 (南から)



T1 北掘張区 SX3 (南から)



T1 北掘張区調査状況 (東から)



T3 掘張区調査状況 (東から)



T6 東掘張区遺物出土状況 (北から)





T4 北拡張区遺物出土状況(北から)



T4 北拡張区 SK1(北から)



T4 北拡張区 P7 土層断面(南から)



旧M区トレンチ(西から)



M区水道管理設部立会い(北西から)



M区遺構確認状況(東から)



A4区立会い状況(南から)



A4区土層断面(北東から)

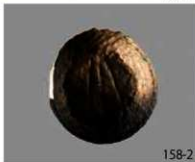






























387-7



392-11



392-2





394-1



445-1



444-1



442-1





397-4



443-1



397-1



445-2



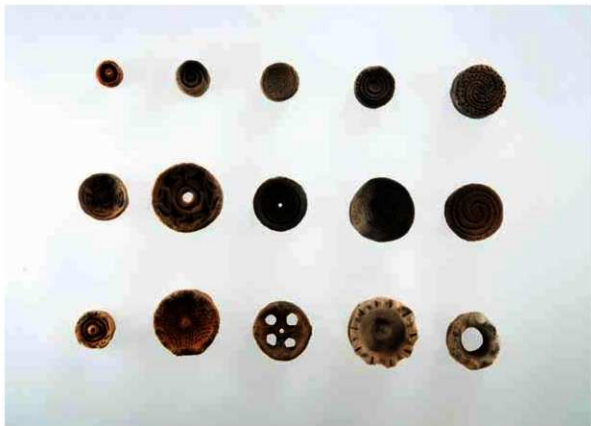
395-1

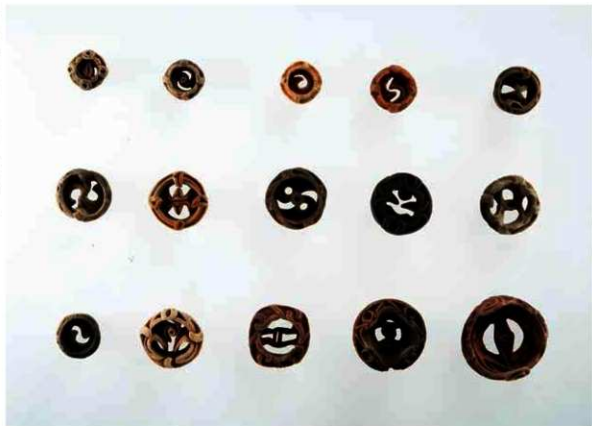


442-4



440-4





408-10



408-11



408-7



408-8



405-25



405-26



406-3



406-2



406-4

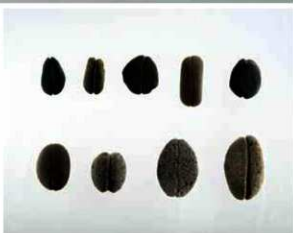


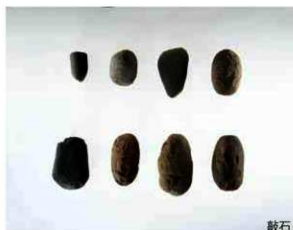




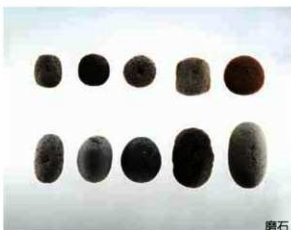


写真図版五八 遺物（石錐・打製石斧・石錘・磨製石斧）





敲石



磨石



砥石



擦切具



185-1



187-1

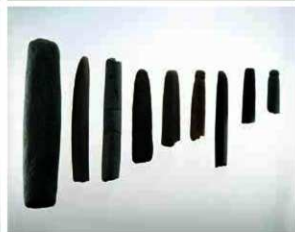


429-4



278-6

写真図版六〇 遺物（石製玉類・石剣類・独鈷石）







V区全景（北東から）



VI区全景（北西から）



Ⅱ区土層断面



Ⅱ区土層断面



Ⅱ区 SI036 土層断面及び遺物出土状況（北東から）



Ⅱ区 SI036 南東隅遺物出土状況（西から）



Ⅱ区 SI036 遺物及び炭化材出土状況（北東から）



Ⅱ区 SI039 完挿（北東から）





Ⅱ区 SI039 貯蔵穴白色粘土出土状況（北東から）



Ⅱ区 SI045 完掘（南から）



Ⅱ区 SI045 遺物出土状況（南から）



Ⅱ区 SI045 土層断面中央付近炭化材確認状況（東から）



Ⅱ区 SI045 土層断面北端炭化材確認状況（南東から）



Ⅱ区 SI045 壺出土状況（南から）



Ⅱ区 SI045 南壁際炭化材出土状況（南西から）



Ⅱ区 SI045 炭化材出土状況





Ⅱ区 SI050 完掘（南から）



Ⅱ区 SI050 土層断面及び遺物出土状況（北東から）



Ⅱ区 SI050 台付甕出土状況（南から）



Ⅱ区 SI053+SI057 遺物出土状況（南東から）



Ⅱ区 SI053+SI057 土層断面及び遺物出土状況（南東から）



Ⅱ区 SI057 遺物出土状況（南東から）



Ⅱ区 SI054 完掘（南から）



Ⅱ区 SI054 土層断面及び遺物出土状況（東から）



Ⅱ区 SI054 北西隅炭化材及び遺物出土状況（東から）



Ⅱ区 SI054 壺出土状況（南西から）



Ⅱ区 SI074 カマド煙道確認状況（南から）



Ⅱ区 SI080 完掘（南から）



Ⅱ区 SI080 土層断面及び遺物出土状況（南東から）



Ⅱ区 SI080 調査状況（西から）



Ⅱ区 SI080 南部遺物出土状況（南東から）



Ⅱ区 SI080 北東部遺物出土状況（南から）



Ⅱ区 SI083 遺物出土状況（東から）



Ⅱ区 SI090 完掘（南東から）



Ⅱ区 SK007 土層断面（南から）



Ⅱ区 SK007 完掘（西から）



Ⅱ区 SK010 完掘（南東から）



Ⅱ区 SK012 完掘（南から）



Ⅱ区 SK013 完掘（東から）



Ⅱ区 SK018 完掘（南西から）



III区調査状況（東から）



III区完掘（南東から）



III区 SI079 土層断面（東から）



III区 SI079 紡錘車出土状況（西から）



III区 SI079 土鍾出土状況（東から）



III区 SI079 土鍾出土状況（南西から）



III区 SI102B 土層断面（南西から）



III区 SI102B 土層断面（南東から）



Ⅲ区 SI102B 土層断面西端（南西から）



Ⅲ区 SI107・108、SE129 完掘（南東から）



Ⅲ区 SI108 覆上下半及び掘方土層断面（南から）



Ⅲ区 SI108 中央覆上下半及び掘方土層断面（南から）



Ⅲ区 SI110 土層断面（南から）



Ⅲ区 SI113A・113B 土層断面（南西から）



Ⅲ区 SI113A・113B 土層断面（南東から）



Ⅲ区 SI113A カマド完掘（西から）





III区 SI116 土層断面及び遺物出土状況（南西から）



III区 SI116 カマド周辺遺物出土状況（東から）



III区 SI116 カマド前面土師器坏出土状況（東から）



III区 SI116 カマド遺物出土状況（南から）



III区 SI116 南部遺物出土状況（東から）



III区 SI116 南西部須恵器坏出土状況（南東から）



III区 SI117 土層断面（南西から）



III区 SI117 カマド遺物出土状況（南から）



Ⅲ区 SI117 カマド右側遺物出土状況（南から）



Ⅲ区 SE100 土層断面（南西から）



Ⅲ区 SE101 土層断面（南から）



Ⅲ区 SE101 馬歯出土状況（南西から）



Ⅲ区 SE129 完掘（北東から）



Ⅲ区 SE131 完掘（南東から）



Ⅲ区 SE131 土層断面（南から）



Ⅲ区 SD128・130B 北端土層断面（南から）



Ⅲ区 SD128・130B 北端土層断面 (南西から)



Ⅲ区 SD128 土層断面 SI116 部分 (南から)



Ⅲ区 SD128 土層断面 (南から)



Ⅲ区 SD130B 土層断面 (南から)



Ⅲ区 SD130B 北端土層断面 (南西から)



Ⅲ区 SD130B 土層断面 (南から)



Ⅲ区 SD130B・132 調査状況 (南から)



Ⅲ・V区 SD130B 確認状況 (南から)





Ⅲ区 SD130C 確認状況 (南西から)



Ⅲ区 SD130C 東端土層断面 (南から)



Ⅲ区 SD130C 中央部土層断面 (西から)



Ⅲ区 SD130C 西部土層断面 (西から)



Ⅲ区 SD132 確認状況 (南から)



Ⅲ区 SD132 土層断面 (南から)



Ⅲ区 SE114 土層断面 (南西から)



Ⅲ区 SK115 土層断面 (南西から)



Ⅲ区 SK118 土層断面 (南東から)



Ⅲ区 SK121 土層断面 (南東から)



Ⅲ区 SK124 確認状況 (西から)



Ⅲ区 SK124 土層断面 (西から)



Ⅲ区 SK134 土層断面 (南から)



Ⅲ区 SX133 遺物出土及び SK134・135 確認状況 (南から)



Ⅲ区 SK135 土層断面 (南から)



Ⅳ区西半東壁土層断面 (北西から)



Ⅳ区西半 SD130C 確認状況 (西から)



Ⅳ区西半 SD130C 西壁土層断面 (北東から)



Ⅳ区西半 SD130C 西壁南部土層断面 (南東から)



Ⅳ区西半 SD130C 西壁中央部土層断面 (南東から)



Ⅳ区西半 SD130C 西壁北部土層断面 (南東から)



Ⅳ区西半 SD130C 東壁土層断面 (北から)



Ⅳ区西半 SD130C 東壁南部土層断面 (北西から)



Ⅳ区西半 SD130C 東壁北部土層断面 (北西から)



V区調査状況(東から)



V区完掘(西から)



V区完掘(南から)



V区SI139完掘(北から)



V区SI139遺物出土状況(北から)



V区SI139カマド遺物出土状況(西から)



V区SI141遺物出土状況(南から)



V区SI141南東部遺物出土状況(南東から)



V区 SI141 中央部遺物出土状況（東から）



V区 SI144A 遺物出土状況（南西から）



V区 SI144A 遺物出土状況（南から）



V区 SI144B 完掘（南から）



V区 SI146A・146B・146C・146D・150 遺物出土状況（南から）



V区 SI146A 遺物出土状況（南から）



V区 SI146A 北西部遺物出土状況（南から）



V区 SI146B 遺物出土状況（西から）



V区 SI146B 北西部遺物出土状況（南から）



V区 SI146C 遺物出土状況（南から）



V区 SI146C カマド調査状況（北から）



V区 SI146C 貯蔵穴土層断面（西から）



V区 SI146D 遺物出土状況（西から）



V区 SI146D 南壁際遺物出土状況（南西から）



V区 SI147 遺物出土状況（南から）



V区 SI147 中央部遺物出土状況（西から）





V区 SI148 遺物出土状況（北東から）



V区 SI149A 土層断面（南西から）



V区 SI150 遺物出土状況（南から）



V区 SI150 炉土層断面（南東から）



V区 SI154 カマド土層断面（北西から）



V区 SI155・156 遺物出土状況（東から）



V区 SI155 遺物出土状況（東から）



V区 SI155 遺物出土状況（南西から）



V区 SI156 遺物出土状況（東から）



V区 SI156 南西部遺物出土状況（西から）



V区 SI156 貯蔵穴周辺白色粘土確認状況（南から）



V区 SI157 土層断面及び遺物出土状況（南から）



V区 SI157 北西部遺物出土状況（南西から）



V区 SI158 遺物出土状況（北西から）



V区 SI158 東隅遺物出土状況（北西から）



V区 SI161 遺物出土状況（北西から）





V区 SI161 北東部遺物出土状況（西から）



V区 SI162 遺物出土状況（南西から）



V区 SI166 完掘（南から）



V区 SI167 土層断面（南から）



V区 SI170 土層断面（南から）



V区 SI171 土層断面（南から）



V区 SI171 南西部遺物出土状況（南から）



V区 SI175A・175B 土層断面（南から）



V区 SI175A 遺物出土状況（西から）



V区 SI175B 遺物出土状況（北東から）



V区 SI176 完掘（南から）



V区 SI176 南西部遺物出土状況（東から）



V区 SI176 東部遺物出土状況（東から）



V区 SI176 南東部遺物・炭化物・焼土確認状況（東から）



V区 SI177A 完掘（南から）



V区 SI177A 遺物出土状況（南東から）



V区 SI178 遺物出土状況（西から）



V区 SI179 遺物出土状況（南西から）



V区 SI179 西隅遺物出土状況（北西から）



V区 SI180 完掘（西から）



V区 SI181 土層断面（南から）



V区 SI182 土層断面（北から）



V区 SI182 貯蔵穴遺物出土状況（西から）



V区 SI182 貯蔵穴完掘（東から）



V区 SI182 北隅北東壁際遺物出土状況（南から）



V区 SI182 貯蔵穴南側赤色顔料出土状況（西から）



V区 SI183 遺物出土状況（西から）



V区 SI188 完掘（南から）



V区 SI188P5 完掘（西から）



V区 SI188P9・10 完掘（西から）



V区 SD187 土層断面（西から）



V区 SD190A 完掘（南西から）



V区 SK149B 遺物出土状況（東から）



V区 SK175C 遺物及び炭化物出土状況（南から）



V区 SK175C 土層断面（南から）



V区 SK185B 遺物出土状況（北西から）



V区 SK191 完掘（南東から）



V区 SK191 土層断面（南東から）



V区 SK192 完掘（北から）



V区 SK195 完掘（北東から）



V区 SK196 遺物出土状況 (西から)



V区 SK196 北部土層断面 (西から)



V区 SK196 遺物出土状況 (西から)



V区 SK196 骨片確認状況 (北西から)



V区 SK197 完掘 (南から)



V区 SK197 土層断面 (南東から)



V区 SK198 遺物出土状況 (西から)



V区 SK199 完掘 (南東から)





V区 SK200 遺物出土状況 (南東から)



V区 SK200 上層遺物出土状況 (南から)



V区 SK201 遺物出土状況 (南東から)



V区 SK201 遺物出土状況 (南西から)



V区 SK202 土層断面 (南西から)



V区 SK203 土層断面及び遺物出土状況 (南から)



V区 SK204 土層断面 (南から)



V区 SK217 土層断面 (西から)



V区 SK218 土層断面 (西から)



V区 SK206 土層断面 (南から)



V区 SK207・208 土層断面 (南から)



V区 SK209 土層断面 (南から)



V区 SK210 土層断面 (南から)



V区 SK211 土層断面 (南から)



V区 SK212 土層断面 (南から)



V区 SK213・214 土層断面 (西から)





V区 SK215 土層断面 (南から)



V区 SK216 土層断面 (南から)



V区 SX136 遺物出土状況 (南から)



V区 SX136 中央部遺物出土状況 (西から)



V区 SX136 中央部遺物出土状況 (南から)



V区 SX136 中央部遺物出土状況 (北から)



V区 SX142 遺物出土状況 (南から)



V区 SX143 遺物出土状況 (南から)



V区 SX152 遺物出土状況（南東から）



V区 SX164 遺物出土状況（南から）



V区 SX164 南東部遺物出土状況（北東から）



V区 SX164 北西部遺物出土状況（南から）



V区 SX172 遺物出土状況（東から）



V区 SX172 中央部遺物出土状況（北東から）



V区 SX172 東部遺物出土状況（東から）



V区 SX174 遺物出土状況（北東から）



V区 SX174 東部遺物出土状況（北西から）



V区 SX174 中央部遺物出土状況（東から）



V区 SX185A 遺物出土状況（南から）



V区 SX186A 遺物出土状況（南西から）



V区 SX186A 西部遺物出土状況（西から）



V区 SX186B 遺物出土状況（西から）



V区 SX186B 南部遺物出土状況（北西から）



V区 SX228 遺物出土状況（南東から）



VI区 SX228 溝土層断面 (南西から)



VI区調査状況 (南西から)



VI区 SD255 完掘 (西から)



VI区 SD255 土層断面 (北西から)



VI区 SD255 土層断面 (南西から)



VI区 SD340 土層断面 (西から)



VI区 SX219 遺物出土状況 (西から)



VI区 SX219 遺物出土状況 (西から)



VII区 SI256 完掘（北西から）



VII区 SI256 土層断面（北西から）



VII区 SI263 完掘（北から）



VII区 SI263 遺物出土状況（北西から）



VII区 SI263 遺物出土状況（南東から）



VII区 SI264 完掘（北から）



VII区 SI264 北西部焼土確認状況（西から）



VII区 SI265 完掘（北から）





VII区 SI265 遺物出土状況（西から）



VII区 SI265 南西部遺物出土状況（東から）



VII区 SI265 南西部炭化物・焼土確認状況（南から）



VII区 SI265 東部炭化材出土状況（北から）



VII区 SI295 完掘（西から）



VII区 SI295 貯蔵穴遺物出土状況（西から）



VII区 SI295 遺物出土状況（北から）



VII区 SI295 遺物出土状況（北から）



VII区 SI295 遺物出土状況（南東から）



VII区 SI315 完掘（北西から）



VII区 SI315 遺物出土状況（北東から）



VII区 SI315 西部遺物出土状況（西から）



VII区 SI315 北東部遺物出土状況（東から）



VII区 SI321 完掘（北東から）



VII区 SI321 遺物出土状況（北西から）



VII区 SI321 遺物出土状況（西から）



VII区 SI321 南西部遺物出土状況（北西から）



VII区 SI326 土層断面（南から）



VII区 SI326 北東部遺物出土状況（南西から）



VII区 SI330 遺物出土状況（西から）



VII区 SI334・387 完掘（東から）



VII区 SI334P2 土層断面（西から）



VII区 SI334・387 遺物出土状況（西から）



VII区 SI334 東壁際遺物出土状況（北西から）





VII区 SI352 完掘（南東から）



VII区 SI352 が確認状況（南東から）



VII区 SI353 完掘（北西から）



VII区 SI353P1 土層断面（南西から）



VII区 SI354A・354B 完掘（北から）



VII区 SI354A・354B 遺物出土状況（北から）



VII区 SI354A カマド土層断面（北西から）



VII区 SI354A カマド完掘（北から）



VII区 SI354A 貯蔵穴遺物出土状況（北西から）



VII区 SI354A 東半遺物出土状況（北から）



VII区 SI354B 遺物出土状況（南東から）



VII区 SI355 完掘（南西から）



VII区 SI355 遺物出土状況（南西から）



VII区 SI355 東部遺物出土状況（北東から）



VII区 SI355 西隅遺物出土状況（北東から）



VII区 SI358 完掘（北東から）



VII区 SI358 遺物出土状況（南西から）



VII区 SI358 西部遺物出土状況（南西から）



VII区 SI359 完掘（南西から）



VII区 SI359 遺物出土状況（北西から）



VII区 SI360 完掘（東から）



VII区 SI360 土層断面及び遺物出土状況（南東から）



VII区 SI361 遺物出土状況（南東から）



VII区 SI361 南西部遺物出土状況（南から）



VII区 SI364 完掘（北東から）



VII区 SI366・SD372 遺物出土状況（北西から）



VII区 SI369 完掘（南東から）



VII区 SI369 遺物出土状況（南東から）



VII区 SI369 中央部遺物出土状況（東から）



VII区 SK367 完掘（南から）



VII区 SK367 土層断面（南東から）



VII区 SK368 完掘（南から）



VII区 SK368 土層断面 (南東から)



VII区 SK373 完掘 (北東から)



VII区 SK374 完掘 (南から)



VII区 SK374 土層断面 (南から)



VII区 SK375 土層断面 (南東から)



VII区 SK380 完掘 (南から)



VII区 SK380 土層断面 (南から)



VII区 SD255A-A' 土層断面 (西から)





VII区 SD255A-A' 中央部土層断面 (西から)



VII区 SD255B-B' 土層断面 (西から)



VII区 SD255B-B' 中央部土層断面 (西から)



VII区 SD255-SI295 土層断面 (西から)



VII区 SD255C-C' 土層断面 (西から)



VII区 SD255C-C' 中央部土層断面 (西から)



VII区 SD255C-C' 南部土層断面 (西から)



VII区 SD255 遺物出土状況 (西から)



VII区 SD255D-D' 土層断面 (西から)



VII区 SD255 西壁土層断面 (南から)



VII区 SD255 西壁土層断面 (東から)



VII区 SD255 西壁土層断面 (南東から)



VII区 SD340A-A' 土層断面 (北東から)



VII区 SD340B-B' 土層断面 (西から)



VII区 SD340D-D' 土層断面 (西から)



VII区 SD341A-A' 土層断面 (南西から)



VII区 SD341B-B' 土層断面 (南西から)



VII区 SD350 完掘 (北西から)



VII区 SD350A-A' 土層断面 (南東から)



VII区 SD350B-B' 土層断面 (南東から)



VII区 SD350D-D' 土層断面 (南東から)



VII区 SD351 完掘 (北西から)



VII区 SD351A-A' 土層断面 (南東から)



VII区 SD351B-B' 土層断面 (南東から)





VII区 SD362 完掘 (南から)



VII区 SD362 完掘 (東から)



VII区 SD362 土層断面 (南から)



VII区 SD372・SI366 遺物出土状況 (北西から)



VII区 SD378 完掘 (北から)



VII区 SD378 土層断面 (南から)



VII区 SD379 完掘 (南から)



VII区 SD379 土層断面 (西から)



VII区 SD386 完掘 (東から)



VII区 SD386 土層断面 (西から)



VII区 SK253 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SK259 完掘 (南から)



VII区 SK267 完掘 (南東から)



VII区 SK268 完掘 (北東から)



VII区 SK273 完掘 (南西から)



VII区 SK273 土層断面 (南西から)



VII区 SK274 完掘 (西から)



VII区 SK274 土層断面 (南から)



VII区 SK278 完掘 (西から)



VII区 SK278 土層断面 (南から)



VII区 SK328・329 完掘 (南西から)



VII区 SK328 土層断面 (南東から)



VII区 SK329 土層断面 (南東から)



VII区 SK356 遺物出土状況 (北西から)



VII区 SK357 遺物出土状況（西から）



VII区 SK363 完掘（南西から）



VII区 SK363 土層断面（南西から）



VII区 SK365 完掘（西から）



VII区 SK370 完掘（南東から）



VII区 SK370 土層断面（南東から）



VII区 SK376 完掘（南西から）



VII区 SK376 土層断面（南西から）



VII区 SK377 完掘（北東から）



VII区 SK377 土層断面（南東から）



VII区 SK394 完掘（北から）



VII区 SX251 遺物出土状況（南から）



VII区 SX251 西部遺物出土状況（南東から）



VII区 SX254 遺物出土状況（南から）



VII区 SX261 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX266 遺物出土状況（南東から）





VII区 SX266 遺物出土状況（北東から）



VII区 SX266 中央部遺物出土状況（北西から）



VII区 SX266 中央部遺物出土状況（南東から）



VII区 SX266 中央部遺物出土状況（南東から）



VII区 SX266 中央部遺物出土状況（北から）



VII区 SX271 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX272 遺物出土状況（南から）



VII区 SX279 遺物出土状況（南から）



VII区 SX280 遺物出土状況（南から）



VII区 SX281 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX282 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX283 遺物出土状況（南から）



VII区 SX284 遺物出土状況（南から）



VII区 SX285 遺物出土状況（東から）



VII区 SX286 遺物出土状況（南から）



VII区 SX287 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX287 西部遺物出土状況（西から）



VII区 SX288 遺物出土状況（南から）



VII区 SX289 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX290 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX291 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX292 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX293 遺物出土状況（南から）



VII区 SX294 遺物出土状況（南から）





VII区 SX296 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX297 遺物出土状況 (西から)



VII区 SX298 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX299 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX300 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX301 遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX301 南東部遺物出土状況 (南西から)



VII区 SX301 南西部遺物出土状況 (西から)



VII区 SX302 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX303 遺物出土状況（南から）



VII区 SX304 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX305 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX306 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX307 遺物出土状況（南から）



VII区 SX308 遺物出土状況（西から）



VII区 SX308 遺物出土状況（東から）



VII区 SX309 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX310 遺物出土状況（南から）



VII区 SX311 遺物出土状況（南東から）



VII区 SX312 遺物出土状況（東から）



VII区 SX313 遺物出土状況（南東から）



VII区 SX314 遺物出土状況（南東から）



VII区 SX316 遺物出土状況（北から）



VII区 SX316 西部遺物出土状況（南西から）



VII区 SX317 遺物出土状況（西から）



VII区 SX318 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX319 遺物出土状況（南から）



VII区 SX320 遺物出土状況（西から）



VII区 SX322 遺物出土状況（北東から）



VII区 SX323 遺物出土状況（東から）



VII区 SX324 遺物出土状況（南西から）



VII区 SI327 遺物出土状況（西から）



VII区 SX332 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX333 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX335 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX336 遺物出土状況（北西から）



VII区 SX337 遺物出土状況（南西から）



VII区 SX337 北部遺物出土状況（南東から）



VII区 SX339 遺物出土状況（北西から）



VII区 SX385 遺物出土状況（北西から）





VII区 SP388-SP391 完掘 (南東から)



VII区 SP388 土層断面 (南東から)



VII区 SP389 土層断面 (南東から)



VII区 SP390 土層断面 (南東から)



VII区 SP391 土層断面 (南東から)



VII区 SP392-393 完掘 (北西から)



VII区 SP392 土層断面 (南西から)



VII区 SP393 土層断面 (南西から)



036-1



036-2



036-4



036-7



036-5



036-6



036-9

036-10



045-2



045-4



046-1



046-2



046-13



046-15



046-17



046-20



046-21



046-8



046-14



054-1



054-2



046-24



080-19



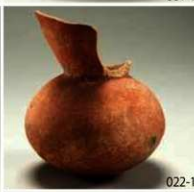
081-1



074-1



085-3



022-1



081-4



030-4



030-6



030-3



030-3





040-2



040-7



040-15



042-1



040-7



059-4



064-2



067-1



091-1



091-5



091-6



091-3



091-5



092-1



094-3



094-4



094-5



II -5



141-1



141-2



146C-1



146C-3



141-6



146D-1



146D-2



158-1



158-3



175A-3



176-5



177B-1



036-12



177B-5

177B-6

039-6

139-7



046-26

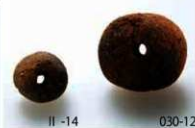
022-3



354A-18



1分冊16図-1



II -14

030-12



354A-19



081-7

162-5



III -1



II -16

041-5

157-4

092-6



SX266

30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47

# 報告書抄録

ふりがな	あがたえきみなみいせき
書名	あがた駅南遺跡
副書名	足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第396集
編著者名	江原 英・谷中 隆
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫 474 番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2020年3月30日 (令和2年3月30日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市 町 村	遺跡番号					
あがた駅南遺跡	栃木県足利市 泉町地内	09220		36°17'17"	139°28'20"	201609～ 201803	41,800㎡	栃木県が実施する足利市あがた駅南地区用地造成事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特記事項
あがた駅南遺跡	集落地・ 墓地	縄 紋  古 墳  奈良～平安  中 近 世 時 期 不 明	住居跡 15軒、埋設土器遺構 9基、配石遺構 4基、土坑 64基、性格不明遺構 11基、ビット 138基  竪穴住居跡 78軒、掘立柱建物跡 1軒、井戸 1基、溝 15条、土坑 13基、性格不明遺構 126基  竪穴住居跡 18軒、井戸 1基、溝 7条、土坑 6基、性格不明遺構 3基  溝 2条、土坑 1基、性格不明遺構 1基 井戸 5基、溝 5条、土坑 53基、性格不明遺構 2基、ビット 6基	縄紋土器 土製品 石器 石製品 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	縄紋時代後晩期の集落として住居跡は少ないものの、多量の遺物が出土した。

要 約	<p>縄紋時代後晩期の集落跡を中心とする西地区と、古墳時代～古代の集落跡を中心とする東地区に分かれる。いずれも沖積低地内の微高地に占地している。縄紋時代後晩期の集落跡では、遺構数は少ないものの、調査区はほぼ全域に遺物包含層が形成されており、ここから収納箱 1,200 箱と多量の遺物が出土している。とりわけ、耳飾りや土版・岩版などの出土数及び形態や文様の種類は、この地域・遺跡の特徴を示している。</p> <p>東地区では古墳時代前期～中期と古代を主体に中世、近世の遺構・遺物を確認した。古墳時代では前期～中期の住居跡群とともに井戸、溝、掘立柱建物跡があり、水に関わる祭祀施設を持つ集落と考えられる。奈良時代にはわずかな住居跡のみで、平安時代には住居跡群とともに墓域が形成され、遺構群の南北に幅広い溝が掘られる。中世には土坑群とそれを区画する溝があった可能性がある。</p>
-----	---

---

---

栃木県埋蔵文化財調査報告第 396 集

あがた駅南遺跡

—足利市あがた駅南地区用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃木県教育委員会  
宇都宮市埴田 1-1-20  
TEL 028 (623) 3425  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
宇都宮市本町 1-8  
TEL 028 (643) 1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター  
下野市紫 474 番地  
TEL 0285 (44) 8441

発行日 令和 2 年 3 月 30 日発行  
印刷 下野印刷株式会社

---

---